古屋の人、若年より狩野常信の門に入て畫法を修む常信之を褒賞して畫名を朴黄狐と呼ぶ常に畫名に用ふと云ふ其畫毎に雅味ありて俗意なし亦た厚く茶道に志し京都に往て千宗左原叟に學びて終に其蘊奥を極む世の茶家褒賞して各〻畫を希望す寶曆十三年十二月六日歿す年八十一法名唯然と云ふ（扶桑畫人傳）

タカツ　イチザヱモン　高津市左衛門「マミヤゴラウベヱ」

タカツカサ　サダイジン　鷹司左大臣「ミナモトマサノブ」

タカツカサ　スケノブ　鷹司輔信　茶人なり姓は鷹司名は輔信關白房輔の四男にして寛保元年逝去す年六十二

タカツカサ　ダイジャウダイジン　鷹司太政大臣「フヂハラタダミツ」

タカツカサドノ　鷹司殿「フヂハラモトタダ」

タカツカサノ　オホトノ　鷹司大殿「フヂハラカネヒラ」

タカツカサ　フユイヘ　鷹司冬家　關白太政大臣藤原兼平の後裔也兼平始め鷹司氏を稱し基忠を生み基忠冬平を生み冬平冬教を生み冬教師平を生み師平冬通を生む世〻台輔に登る冬家は冬通の子也仕へて右大臣に至る稱光天皇位に登るや南人の望に充たず湯彊簪あり冬家槐位に在り心を竭くして大政を輔く而して事や、定る則ち官を辭し尋て髮を削る正長元年薨ず後一心院と稱す長子房平嗣ぐ房平文辭を好み一條兼良と親しみ善し屢〻相唱和す時人稱して双玉と爲す關白左大臣に累遷し氏の長者と爲る牛車兵仗故事の如し幾くなくして職を辭す文明中亂を避けて南都に入り薨ず後照光院と稱す（續日本史）

タカツカサヰン　鷹司院「フヂハラナガコ」

タカツキ　ジラウザヱモン　高築次郎左衛門　勇士なり白皙長身にして眼光爛々たり足利義教太田道灌をして關東武士の武者ぶりを演ぜしむ次郎左衛門其の撰に當りかち色の具足花やかによろひ（勝色とは紺糸などしたいふ）長刀を佩き肥馬に乗りて刄のわたり四尺許りの長刀を水車に廻して走せ廻る事飛鳥の如し義教之を賞し笹目與野の二ヶ所を賜ふと云ふ（本朝武功正傳）

タカツグ　高次　市川長左衛門と稱す甲斐府中の刀匠にして義輝の子なり享保年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タカツグ　高次　越前の刀匠にして貞享年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タカツジノ　サイグウ　高辻齋宮「シクシナイシンワウ」

タカツナ　高綱　備前の刀匠にして元永年間の人或は云成高の子にして建仁元久年間の人或は云木國豐後なりと又云後筑前秋月に移る是金剛兵衛の祖なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タカツナ　高綱　筑前の刀匠にして本國備前なり元曆文治年間の人或は云良西と同人なりと（本朝鍛治考）

タカツナ　高綱　筑前の刀匠にして入西の妹夫金剛兵衛盛高の祖父文永比の人なり（本朝鍛冶考）

タカツナ　高綱　筑前博多の刀匠にして初代盛高の子なり建武年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タカツナ　高綱　藤原姓にして元祿年間の刀匠なり何れの許の人なるを詳にせず（古今鍛冶銘早見出）

タカツ　ナイシンワウ　高津內親王　嵯峨帝の妃なり桓武帝の女、業良親王、業子內親王を生む嵯峨帝踐祚の初め三品に敍し立て妃となす未だ幾ばくならずして廢せらる承和八年薨ず使を遣して喪事を監護せしむ（大日本史）

タカツネ　隆經　大隅の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タガ　ツネナガ　多賀常長　茶人なり千利休に學びて茶禮を能くせり左近と稱す初佐々木家の家人にして大阪の役に從ひ寛永四年御使番となる明曆三年七月歿す年六十八江戸澁谷祥雲寺に葬る（茶人系傳全集、古今茶人系譜）

タカツマ　ハウシウ　高妻芳洲　佐伯藩の儒者にして名は友字は士直世々佐伯藩に仕ふ芳洲中島米華の後を襲ぎて藩校の教授となり大に學政を振張す文久元年十二月廿二日歿す年五十一（日本教育史資料）

タガ　テウコ　多賀潮湖「ハナブサイツテフ」

タカテル　高輝　彦三郎と稱す甲府の刀匠にして相模の刀匠彦三郎廣正の裔元祿年間の人なり二世は高次と稱す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）三世高輝は市川長左衛門と稱す寛保年間の人亦甲府に住す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タカテル　尊輝　阿波の刀匠にして寛永年間の人或は云寛政享和年間の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タカトシ　寶壽　陸奥の刀匠にして文壽の子長久比の人なり（本朝鍛冶考）二世寶壽は初代寶壽の子延久比の人なり（本朝鍛冶考）

タカトシ　寶壽　備前の刀匠にして陸奥寶壽の末流なり嘉元比の人（本朝鍛冶考）

タカトシ　寶壽　備後の刀匠にして陸奥寶壽の末流なり年代詳ならず（本朝鍛冶考）

タカトシ　寶壽　筑前の刀匠にして陸奥出羽の末流本州に來り住す嘉元比の人なり（本朝鍛冶考）

タカトモ　高友　備前の刀匠にして元曆比の人（古今鍛冶銘早見出）

タカトリ　ソンアン　鷹取遜庵　植物家にして挿花の技に精し文化二年四季賞花集二卷を撰み挿花に用ゐる草木二百餘種の形狀性質花候等を記述せり（日本博物家年表）

タカトリ　ヤウハ　鷹取養巴　筑前の藩醫なり名は惟寅夙に王室の陵夷を患ひ確然方向を定めて志を王室に通ず姦臣國政を妨害するを以て論じ家祿を沒收し配所に幽因す居ること三年會〻赦免す然して宿志撓まず仍ほ前說を確守せしが不幸にして有司の寃枉に罹り慶應元年十月廿三日獄に下して死刑に處す後姓忠祠に祭らる明治廿一年七月四日從四位を贈らる（筑前殉難志士傳）

タカナガ　高長　備前長船の刀匠にして明德應永年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タカナガ　シンワウ　尊良親王　後醍醐帝の長子にして母は宮人藤原爲子嘉曆元年冠を加へて中務卿となる幼にして聰慧容姿觀るべし人皆其の太子たるを望む北條高時後二條帝の子邦良を立てゝ太子と爲すに及び尊良快々樂まず元弘元年帝に從て笠置に幸し尋て楠正成の赤坂城に入る笠置陷り帝幽せらるゝを聞き自ら京師に赴く賊執へて佐々木時信の家に拘す二年土佐の畑に遷る三年亂平いで京師に歸る建武二年足利尊氏反す敕して尊良を以て東國管領とし之を討たしむ新田義貞之に副たり尊良の軍三條河原を過ぐ適〻暴風ありて旗上の貼金日月を吹て地に墜す衆皆な色を失ひ以て不祥となす義貞尊氏の先鋒と矢矧鷺坂に戰ひて連りに之を破る尊良脇屋義助と竹下に向ひ尊氏に當る麾下素より訓練せず先を爭ひて進み賊機に乘じて奮擊す官軍狼狽據を失す會〻大友貞載鹽谷高貞賊に降り兵を倒にして以て戰ふ尊良敗績す延元々年尊氏京師に逼る尊良帝に從ひて延曆寺に幸す冬皇太子恒良を輔けて越前金崎城を守る賊攻ること甚だ急なり糧援繼かず明年春城將に陷らんとす新田義顯尊良に啓して曰く臣は將家の子なり義苟も生く可らず大王は帝室の冑なり縱ひ賊中に陷るも必ず敢て害を加へず願くは自ら輕んずる勿れと尊良莞爾として曰く主上は孤を以て首領とし卿たち股肱とす夫れ股肱を亡ひて而して首領安きを得るは未だ之あらず當さに命を白刄に殞し讐を黃泉に報ゆべし而して孤宮闈に生長して武事に習はず故を以て自裁の法を知らず當さに如何すべきと義顯泣て曰く當さに此の如くすべしと乃ち腹を割き刀を尊良の前に置て伏す尊良其の刀を執るに流血欄を潰し滑かにして握る可らず乃ち衣袖を欄に纏ひ胸を洞して薨ず左近衛中將藤原行房及び將士自殺するもの三百餘人賊尊良の首を京師に傳ふ尊氏僧疎石をして之を禪林寺に葬らしむ（大日本史）

タカナシ　ゲンゴラウ　高梨源五郎　上杉謙信の臣なり川中島合戰に甲州先方眞田彈正の足輕十四人を鏖殺す眞田大に怒り槍を執り源五郎を刺さんとす源五郎亦た之に迫る鎗を用ふる能はず相搏ちて上より落つ高梨上にあり將に首を馘せんとす保科彈正來りて眞田を助く眞田の家臣亦た來り終に爲めに殺さる（本朝武功正傳）

タカナシ　チュウガク　高梨忠學　北總葛飾郡上花輪田の里正なり通名は信芳家とも富む常に子孫を戒むるに穀を儲はへ窮瑳を救ふを以てす天明六年丙午大に饑す果して能く倉を發して千餘人を活す父名は順信遺訓に遵つて荒歉の備を爲し窮民貧氓の賙ふ勝て數ふべからず忠學父祖の志を繼ぎ益〻儲蓄を務む天保四年癸巳關左饑え殍殣道に横たはる乃ち廩を傾けて三千人を活す七年丙申天下大に饑う廠を設け粥を煮て饑民に給し病む者には藥を與へ蚤夜躬親から撫循し少しも懈らず五千人を活す又餘貲を散じて南海八島壁ひ那須三村に賑はす前後金穀を捐つる凡二千兩官賞して銀錠を賜ひ二世双力を帶び永世姓を稱するを許すの命有り時に羽倉士乾縣令たり心を盡して周旋以て其美を成し救荒記を作ると云ふ忠學安政三年七月十一日病むで歿す年五十九（事實文編）

タカナシ　リヱモン　高梨利右衛門　羽前置賜郡屋代郷二井宿村の人なり家世々農利右衛門に至り節儉を旨とし其の業を務めしかば家計次第に富裕になりて暫時の間に郷中屈指の豪家となり終に撰まれて名主となれり抑〻屋代郷三万七千餘石の地（現今の東置賜郡中東方に位する三十五ヶ村なり）德川氏幕府を江戸に開きしより以來御料所と稱して直轄の地なり然るに寬文四年八月中米澤の領主上杉彈正大弼へ一時御預となる武鑑を按ずるに彈正大弼綱憲、實は吉良上野介義央長男母は定勝の女、寛文四年閏五月、綱勝末期の養子と爲る時に二歲因りて封地の半を收めらる而して十五萬石を賜ふ同年出羽の國置賜郡の內に於て三萬八千八百八十石を預けらる其の後ち同國村山郡及び越後國岩船郡の內に於て一萬六千五百五十石を增預けらる云々と有り想ふに上杉家元三十萬石たり減じて十五萬石となる用度足らず故に止を得ず聚斂を事とするに至りしもの勢然るに上杉家に於ては頻りに聚斂を事とし種々の名稱を以て非常の重稅を人民より徵收し且つ其の延納未進の者を處するに苛酷を極めたりし故農民大に苦しめり寬文四年より同六年に至るまで僅に三ヶ年の間に一百餘條の布令を發するに至りしと云ふ是に於て利右衛門村々の重立ちたる人々と謀り右布令の內最も苛酷なるもの六十餘條を記し農民の困苦する事情を陳じて以て上杉氏の所管を免れんことを嘆願すべしと決して三十五ヶ村の連判を以て之を信夫郡の代官所に訴出たり代官所久しく之を裁決せず更に江戸に出て時の老中某公を途に要して哀訴せり然るに某公之を納れず因りて又之を町奉行所に訴出てたるに又た受理せず之に於て計の出づべきなし乃ち一計を案じ金蒔繪の一箱を製し之に三葵の紋を付し內に願書と自己の止宿所を記し緘を固くし持して之を上野廣小路の一茶店に置き私に逃げて其止宿所に歸れり茶店此箱を發見し將軍の定紋あるを以て町役人と相謀り之を町奉行所へ屆出てたり（一說に云ふこの嘆願書を入れたる箱は五重にして上の箱に三葵をつけ中の箱には桐又菊などの紋を付けおきて下役人等が擅に拔き見ることを爲す能はず終に將軍の手元に迄達する樣に爲しおきたるなりと）町奉行所は其箱を改めたるに則ち利右衛門の訴狀なり是に於て上杉氏の暴政は將軍家の默視すべからざる事となる屋代郷は舊の如く御料所となりたり然れども利右衛門は領主を相手取り公儀を驚かしたる罪科に因り上杉氏に引渡されたり町奉行所の白洲に於て之を宣告せしとき利右衛門叩頭して曰く卑賤の身を以て國主大名を相手取り敢て將軍家を驚すこと罪極て重し如何なる重き御仕置を蒙るも毛頭恨む所なし唯〻屋代郷三萬石の人民御料所となり其生を息するに至るを得ば死して猶ほ餘慶ありと上杉家利右衛門を受取り其の國に於て之を磔殺すと云ふ然り而して屋代郷は幕府の代官柘植傳兵衛の支配所となり農民大に其生を息するを得たり皆利右衛門一死の餘澤なり其後二十餘年を經享保元年に至り置賜郡長手村の豪農白石道白村民と議し碑を建て其靈を慰むと云ふ（東洋義人傳）

タカナホ　高植　大和の刀匠にして永祿年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タカナホ　高植　出羽守と稱す大和の刀匠にして慶長年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タカナリ　鷹成　多田氏龍蟠軒と稱す讃岐の刀匠にして享和文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タカヌ　テンワウ　高野天皇「カウケンテンワウ」

タカノ　イウジラウ　高野猶次郎　陸軍步兵少尉なり東京府出身にして明治卅七八年日露戰役

に際し躍備役より召集せられ第一師團歩兵第一聯隊附として從軍中廿七年九月二日旅順要塞寺兒溝四北方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

タカノ オムロ（シンワウ）　高野御室「カクハフホウ」

タカノ ゴラウ　高野五郎　陸軍歩兵大尉なり茨城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團歩兵三十二聯隊附として從軍中廿八年三月七日清國盛京省營官屯附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タカノ シンハチ　高野新八　陸軍歩兵少尉なり茨城縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て躍備役より召集せられ歩兵第三聯隊附として從軍中廿八年一月五日旅順要塞水師營より老虎尾半島に行軍途中病に罹り同七月十七日廣島躍備病院に於て病死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカノ ソウザエモン　高野惣左衛門　名は鎌宇は君素通稱初め市之丞後惣左衛門と改む福井藩の士なり文武に通じ佐藤一齋山本清溪の門に出入す後福井藩の儒職を奉ず天保十年死す年七十九織田神社備考、朱子詩抄、春華詩稿等の著あり（日本教育史資料）

タカノ チャウエイ　高野長英　蘭醫なり瑞草と號す父を後藤實仁と曰ふ長英は其の第三子なり文化元年五月端午を以て陸奥の國磐澤郡水澤に生る幼名を悅三郎と曰ふ年十四叔父高野玄齋に養はれ名を郷齋と改む玄齋は水澤の邑主伊達將監の典醫にして杉田玄白に學ぶ者なり長英就て家訓を受け畧〻蘭學に通ず又漢學を兄直之進の義父坂野長安に學ぶ會〻兄直之進江戸に遊學せんとす長英父に請ひて共に俱にせんと欲す聽されず告げずして出でんとすれば旅費の乏しきに困しむ時に郷黨親母子を憐くる者あり月月に金圓を醵し藝醵して中る者は逐次に其の醵金月額に倍徒するものを得る の法なり長英父に代て其の會に臨み中ることを得たり大に悅びて曰く天之れを我に與へて志をなさしむるなりと遂に拾五兩を懷にして坂野氏に投ず父之を聞知す而れども其の篤志を憐み遂に遊學を許し更に學費を給ふす文政三年秋長英年十七江戸に上り堀留街の藥舗神崎源造の家に寓す源造は玄齋の舊友なり故を以て長英を視ること猶ほ子の如し源造勸めて當時有名の蘭醫吉田長淑の門に入らしむ勤學三年其の業大に進む長叔其の才を愛し名を與へて長英と名づく長英の水澤に歸るや玄齋其の學を成さずして歸るを怒り相見ることを許さず長英慨然坂野氏に留まる三日にして再び江戸に出で長叔の門に在ること二年又駒留正見の門に遊ぶ長英常て長崎の醫師伊藤圭介竹内玄同等皆其の校舎に入り同等皆其門に在り長英其の校舎に入りと二年學業大に進む又通詞者吉田權之丞の翻譯教授を掌る九年三月和蘭賈使赴くシーボルト亦從ふ長英初め之に從ふ長英初め之に從ふ長英乃ち兵書を譯して其の譯書多し皆な有益の書なり是より先きシーボルトの江戸より歸るや天文司高橋作左衛門贈る所の日本實測の地圖を携ふ事國禁に觸るゝを以て幕府の爲に長崎を逐はれ復た我が國に來ることなし其の罪に連座する者數十名長英其の禍の遂に己に及ばんことを恐れ竊かに長崎を去りて薩摩に入る十二年正月を以て齋等果して捕ふる長英之を聞て長崎に歸る長英の不在に際し會〻父玄齋病篤きを以て門人小野良眞をして長英を迎へしむ良眞長英の居所を知る能はず玄齋終に歿す已にして長英の歸るに及び之を告げて共に歸らんとを勸む長英曰く家君見をして遠遊せしものは將來に期する所あればなり今業將に成らんとして家君既に遊魂窮りなし事此に及ぶ郷に歸るも亦益すとなし我が學ぶ所の書大抵譯して藏中に收む將に江戸に出でゝ之を公けにせんとす若かず家眷を江戸に迎へて共に生を送らんにはと良眞告げて曰く君を後にし家を棄つるか恐らくは忠孝を缺く勿らんかと長英曰く我が志を立つる正に此時に在り身を立て家を興すは江戸に非ずんば能はず郷に歸らざる何の妨かあらんと良眞終に去る是の歳長英居る江戸麹町に移し醫療と飜譯に從事す門客四方より集る時に天保元年長英年二十七なり三宅侯の臣渡邊崋山長英の才を愛し延て藩の老侯友信の蘭學の師とす長英亦崋山の人と爲りを崇み交情頗る厚し共に四學を擴張し實利を興さんと欲し紀藩の儒官遠藤勝助等と謀り一社を設け名けて尙齒會と曰ふ而れども是通常の尙齒會と異なり老人の會して以て餘齡を樂むものに非ず專ら政治經濟の道を講究し人の譏問を受けて其利害得失等を議するの目的なり天保九年十月英船モリソン來航の說あり而して其の意互市を開くに在りと時に幕府の諸官擬め之を待する方法を議し或は曰く文政年間の故事に依りて之を攘ふべしと衆議未だ決せず是に於て長英私かに崋山に謂て曰く彼れ我が漂民を護送し來る我に於て厚く之に謝すべきなり然るに反て之を攘はんとす是れ仁愛の心に悖るのみならず其怨を結び患を貽す之より大なるはなし惡くは幕府外國の事情を審かにせざるに出るのみと崋山之れを然りと爲り乃ち鼎侯小記憤機論を述べ長英久夢物語の一書を著し以て外國の形勢事情を述べ且つ盛にモリソンの豪傑なるを稱し（長英譯らくモリソンは人の名にして勇將の名なり船名と

なすものは誤れるなりと人亦此說に反するものなし）以て非攻寃を論ず而して國政に關するを以て敢て人に示さず密かに之れを幕府に上らしむ十年譯者ありて曰く近來蘭學の徒衆人を煽動し上下之が爲めに誑惑せらる今に於て之れを法に處せざれば測るべからざるに至らんと監察鳥居耀藏之を聞老水野越前守に告げ府下の蘭學者を捕ふるの流言あり既にして崋山捕へられて獄に下り長英下曾根氏に隱る而して捕吏己れの家に入り文書を收めて去ると聞き自ら免れざるを知り乃ち後事を鈴木春山に託し遂に自首して獄に入る獄吏長英に問ひて曰く夢物語は夢中の記事なり而して英國の人情風俗を記する詳なり汝嘗て彼國に渡航したるとありやと長英曰く未だし吏曰く然らば則ち書中の記事皆な荒唐無稽にして唯〻世人を蠱惑するが爲に作りしものなるべしと長英色を正して曰く世上未だ天に昇り地に潛みし者あらず而して能く天地の理を說く者あり況んや英國の如き舟楫の通ずる所何ぞ其國情を知る能はざるの理あらんやと論辯屈せず吏到底言を以て伏する能はざるを度り唯〻獄に幽して其の苦慮の爲に降るの時を待つ長英亦吏の威に勝つ能はざるを知り憂國の衷情に發して他意有るに非ずと述べ以て宥恕を請へり十二月二十八日吏突然長英と崋山を召して宣告を爲す長英遂に終身禁錮の刑に處せらる獄に在ること二年餘獄窓を爲る居少しく安し十二年四月三日獄に火あり官悉く罪囚を解散す長英亦其の中にあり或は曰ふ長英獄に在るの日未決の囚徒榮藏なる者に授くるに罪を免るゝの法を以てす榮藏長英に約して放火し長英をして脫獄せしめたるなり長英獄を出で〻蕎友大槻俊齋を訪ひ衣履を乞ひ剃刀を借て髮を剃り伊東玄朴竹内玄同等の譜友に至りて金錢衣服を乞ひ儼然醫師の裝を爲して去る官其の歸らざるを以て骨相書を發して四方を搜索す郷里水澤の地特に嚴なり長英都下に潛むと一年明年冬探偵の稍〻緩なるを覗ひ硝石精を以て前額を燒き容貌を變じて水澤に往き蘆に母を托する所の家を訪ひ母に面して其不孝を謝し復江戸に赴く然れども永く留まらず去て名古屋に至る久其の露れんとするを聞き又逃れて伊豫に走る宇和島藩主擢て譯官となす長英是に於て少しく活計の安きを得乃ち其の餘裕を妻孥に贈る居ること三年江戸の友人竊に書を寄せて探偵の兆みたるを報ず長英大に喜び宇和島を出で〻江戸に歸り姓名を變じて高柳之助と云ひ鈴木春山に寄る春山の知人松下壽醉は闇老水野忠精の臣なり大硝鑛造を以て名あり春山爲めに介して交らしむ壽醉長英の卓識に服し其の子健作をして火藥の製造火器運用の法を學ばしむ長英亦志を盡して其の蘊奧を傾けて之に授ぐ壽醉大ふ喜ぶ而して後ち高柳なる者は長英なりと知る然れども殊に隱蔽して之を敎はんと欲し横井宗也と謀る宗也乃ち長英を伴ひて幕府の軍務士官勝麟太郎（時に年二十）を訪ひ之を謀る勝氏云く我は幕府の祿を食むものなり高野氏を匿すは義に於て能はざる所なり然れども高野氏の我に於ける素より仇志なし我必ず人なり我にして高野氏を匿すは義に於て能はざる所なり然れども高野氏の我に於ける素より仇志なし我必ず之を人に語らず請よ去て復た來ることなかれと長英其の言に服し其の手づから點竄批評する所の鈴錄外書を贈りて云く我嘗て君の家に來るを紀念となせよと此の書傳へて勝氏の家に珍藏すと云ふ長英後又た姓名を變じて澤三伯と云ふ是より專ら醫譯に從事し梓に上ぼすもの多し大槻人の儒に應じて遂ぶる所なり就中砲術書の醫譯は殊に其の生計を資けたりと云ふ初め長英其の妻を欺て曰ふ敎に遂ひて獄を出でたりと然れども故あり下父子は流に處せらる長英人となり卓犖不羈性酒を嗜み醉へば則ち高談雄辯人の瑕瑾を指摘す醫術より蘭學に入り終に蘭學者を以て家を立つ勉めて政治經濟の學を擴張し醫術の如きは幾ん ど餘事となすに至れり然れども世人長英の譯書を賞すること亦其の醫術を賞せざるはなし蓋し我邦四學を導きしものは長英の功實に崇敬すべきなり獄中に在て記す所鳥の鳴く音文辭巧妙是れ長英が漢文に巧なると共に亦和文に通ずるの一斑を見るべきなり明治三十一年七月四日正四位を贈らる（懷慨家列傳、文明東漸史）

タカノ ニヒガサ　高野新笠　光仁帝の后なり本姓は和氏、乙繼の女、其先は百濟武寧王の子純陀太子より出づ容德淑茂、光仁帝龍潛の日聘して納る桓武帝、崇道天皇早良、能登内親王、酒人内親王を生む實龜中姓を改め高野朝臣と爲し從三位を授く尋で夫人と爲す桓武帝位に即き尊びて皇太夫人と曰ふ中宮職を置く延曆八年十二月病革まり畿内七道諸寺に敕して大般若經を讀誦する一七日以て其の疾を禱る數日にし

て崩ず桓武帝錫紵を服し正殿を避け西廂に御し皇太子及び群臣を率ゐて哀を擧ぐ百官及び畿内は三十日を以て服期と爲す諸國は三日並に所部の百姓を率ゐて哀を擧ぐ但し神郷は此の限にあらず又た七々御齋には天王國分二寺に令して經を誦せしめ毎七日に使を諸寺に遣し經を誦せしむ明年正月追尊して皇太后と曰ひ謚して天高知日之子姫尊と曰ふ百濟の遠祖都慕王は河伯の女日精を感じて生む所、皇太后は即ち其の後なり故に謚を上つる此の如し大枝山の陵に葬むる十二月又詔して外祖父高野朝臣、外祖母土師宿禰に並に正一位を贈り土師氏を改めて大枝氏と爲す大同元年追尊して太皇太后と曰ふ后の姪和家麻呂桓武の朝に仕へ内外を歷職し從三位中納言に至る又た百濟玄鏡、仁貞、鏡仁等外戚の故を以て延曆中詔して爵位を加授す（大日本史）

タカノ　ヒヤクリ　高野百里　芭蕉門の俳人なり江戸の人、名は勝峯字は文館雷堂と號す初め浮風と曰ふ魚を鬻ぎて業とす曾て蕉翁に師事し後ち服部嵐雪に從て俳諧を學ぶ海内好事の士來りて教を受けんと欲するもの多し而れども世に其の術み唱るもの浮薄にして古學に乏きを疾みて之と交らず享保十二年五月十二日歿す年六十二、子闌亭詩を善くす（俳家畸人談、俳家殁故年表、燕石十種、俳林小傳、江戸名家墓所一覽）

タカノブ　高信　古刀の鍛工にして備後に住す（古今鍛冶銘早見出）

タカノブ　高信「ミヤケタカノブ」三原の一派なり

タカノブ　高信「ミヤケタカノブ」鷹匙　黒田氏源之進と稱す後左兵衛と改む攝津大阪の刀匠にして備後國三原正近の嫡流黒田助六正家六世の孫播磨姫路の刀匠源三郎兼重の子なり天明年間の人寛政の初年に歿す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タカノブ　卓信　**タカノシュンガ**　貴宮「コウベンホウシンワ」二世鷹匙は源之進と稱す武藏江戸に移住し正繁の門人と爲り下總佐倉藩の刀匠と爲る文化年間の人なり（古今鍛冶備考）

タカノミヤ　ランテイ　高野蘭亭　詩人なり名は惟馨字は子式、又東里と號す自ら爺して高と稱す江戸の人なり百里居士の子幼にして遇才あり物徂徠に學ぶ徂徠甚だ之を奇とす年十七にして明を喪び終に百事を廢す是より一に心を詩歌に專にす徂徠之に教へて然らしむるなり三百篇以下漢魏六朝唐明大家の作に至るまで大抵之を諳誦して最も意を李倉溟に用ふ特に近體に長ず物徂徠の門に詩を以て名ある者十數人、服南郭を以て盟主となす闌亭最も晩出、常に南郭に兄事す何實及び魚蘋等に就き實驗したるに皆好成績を奏したりくもなくして詩名南郭と相比す當時詩を言ふもの二家の門牆に倚らざるなし諸侯及び貴介公子爭ひ延て詩を講ぜしむ書も亦一家の風流あり闌亭家素と富厳後ち産落つと雖も好みて古器書畫を蓄へ齋室を飾め園庭頗る整ふ善く酒を飲む然れども未だ嘗て其の儀を失はず雅に勝覽を好む鎌倉山水の奇麗を喜び歳に一再名人韻士と遊ぶ嘗て茅堂を圓覺寺の傍瑞鹿山の下に結び松濤館と名つけ以て遊息の所とす曰く吾れ死なば此に葬べしと乃ち壽碣を建つ後三年江戸に歿す時に寶暦七年七月六日なり年五十四、門人襪を奥して往て之に葬る闌亭幼より著はす所の詩萬有餘篇、病篤きに及びて悉く之を火く是に於て私録する所のものを輯めて闌亭詩集と名け世に刊行す闌亭家庭に學びて兼れて俳家を善くす（近世叢語、先哲叢談、事實文録）

タカノリ　高則　攝津の刀匠にして天和年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タカノリ　高則　出雲の刀匠にして建武比の人或は云仁治比の人久は元應比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タカノリ　高則　播磨明石の刀匠にして永祿年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タカノリ　リャウイチ　高野椋一　本邦蠟製模型が歐米の學術界に重要視せられたるを見之が研究を以て我國學術界の缺を補はんことを期せり然れども製法堅く秘密に附せられ容易にその方法を窺ふ能はず鎖朝後醫學博士士肥慶厳の指導を得て蠟を以て模型を製するを得たりしも最も緊要なる著色法を得ず椋一爲めに寢食を忘れ私財を擲げて專心研究に從ひしが明治三十一年の頃東京帝國大學醫科大學皮膚病科の患者に就き其製作の實驗を試みたるを始めとし翌三十二年更に一種の著色法を發明し爾來内外科及耳鼻咽喉科等の患者に就き疾患部模型を製作せしに孰れも良好なる結果を得續て之を病理解剖的及び生理的官能乃至義鼻義耳等に應用し更に進みて果第五回内國勸業博覽會（大阪）には病理的十數種の模型を製作出品し大に好評を博し爾來益々人の知る所となれり三十六年八月七日急性下顎骨骨炎に罹り遂に東京醫科大學病院に死去す年四十二〇

タカノリ　リョクタ　高野綠太　俳歌を能くせり越後妻有の人綠太は其の號一に椿齋の號あり又左衛門と稱す（俳諧海内人名錄）

タガハ　イチク　田川移竹　俳人なり初め來川と號し又畑舟亭と號す京都の人俳諧を淡々の門松木竿狀に學ぶ寶暦十年九月十三日歿す年五十一

タカハシ　アウシュウ　高橋櫻州　江戸節の名手なり江戸の人維新後江戸ッ子新聞を創設し常に風流文字を弄せり明治三十七年一月八日病歿す　油屋家

タカハシ　イウイチ　高橋由一　藍川と號す佐倉侯堀田氏の臣なり文久二年九月二日蕃書取調所所屬圖書局に入り川上冬崖の教を受く又英國公使館所屬武官ワクマンに就て問ふ所あり慶應二年諸生徒と畫を作りて佛國博覽會に出品す明治三年八月民部省の吏となり四年官を罷む是歳大學南校の畫學教授となり翌年之れを辭す是本邦畫學校の始なり後隈町に天給學會を創立し子弟を教授す廿七年七月六日年六十七にして歿す

タカハシ　イウセキ　高橋友碩　碁手なり戸田栄女正の家臣にして碁位六段に陞れり寶永七年琉球人來朝の時島津家に招かれ闘碁を見る（因云碁話）

タカハシ　イツショウ　高橋一勝　埼玉縣の人なり明治十二年法學士の學位を得直ちに代言の業に從事し大學卒業生中代言士となりしは實に一勝を以て嚆矢となす後代言組合の推す所となりて會長たること三年其の間府會議員に撰まれて公衆の爲に謀る所あり又た増島六一郎、高橋健三等と共に英吉利法律學校を起し蕭陶懇切の稱あり明治十九年八月病を以て卒せり（毎日新聞）

タカハシ　イヘサダ　高橋家貞　陸軍少尉なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第卅六聯隊附として從軍中卅八年一月廿日清國盛京省千金嶺に於て戰死す戰功に依り勳六等功七級に叙せらる

タカハシ　エイイチ　高橋榮一　陸軍少尉なり岐阜縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て輦備役より召集せられ後備歩兵第五十七聯隊附として從軍中卅八年三月八日清國盛京省大小方士屯附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカハシ　エイキチ　高橋榮橘　陸軍少兵少佐なり山形縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第五聯隊附として從軍中卅八年一月廿五日清國盛京省姚々街戰鬪の際負傷し尚在門露國繃帶所に收容中同二十六日死去す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

タカハシ　エイゼン　高橋英全　醫者なり業を八阪崇譽の孫に受け頗る聲譽あり文明中法眼に叙せらる英全冠氏本草衍義凡例の中より要論を取り常に以て自ら箴めて曰く凡そ醫たるものは須らく著々古今に通じ仁義を守り馳騁能所の心を絕ち博施救援の意を專にすべし此の如くならば心識自ら明かにして神物來り相く又た何ぞ戚々として名を治め誕々として和を求めんや如し或は然らざれば則ち以て美撫が譽を活るの慚を致す曷んぞ華佗が能に矜るの戮を遁んやと世傳へて以て醫家座右の銘とす（皇國名醫傳）

タカハシ　カザマ　高橋笠間　阿部朝臣と祖を同うす文武帝の十二年姓を高橋と改め直廣肆に叙せられ左大弁に補せらる大寶二年遣唐大使となり慶雲二年事を竣へて歸り從四位下に進み和銅二年卒す（日本儒林傳）

タカハシ　カネタネ　高橋鑑種　初め一萬田親敦といひ大友氏の支屬なり高橋氏の後を襲ぎて三河守と稱す高橋氏は姓は大蔵氏なり中世光種建武中足利尊氏に仕へ筑紫三檢斷の一なり子孫相繼ぎ高橋城を築きて居る光種の七世長種家襲（蚤死して嗣なし家人議して大友義鑑に請て親敦を嗣となし名を鑑種と改む勇武にして材藝多し大友宗麟之を愛し待遇甚だ厚く栄邑寶滿巖屋の田二千餘石を增す弘治三年巖屋城を守り筑前の國事を統ぶ時に毛利元就人を西海に遣はして說く所あり是より先宗麟鑑種の兄一萬田某の妻に耽溺し罪に托して某を殺し妻を奪ふ鑑種大に怒りて款を納き入れ郡邑を掠暴す宗麟大に驚き戸次道雪臼杵鑑速吉に命じて鑑種を伐たしむ七月鑑種寶滿山下に迎へ戰ひて敗れ退いて寶滿城を保つ城險にして六旬を經て陷らず道雪等の軍退ひて山下に屯す十二年五月道雪等亦來り攻む鑑種援を毛利氏に求む毛利氏の軍大友氏と多々良濱に戰ひ敗れ去る十月に至り鑑種勢屈し吉弘鑑理に因りて降を乞ふ宗麟之を許し豐前の小倉城を與ふ大友氏吉弘鑑種の二男鎮理を以て其後さなす鑑種剃髮して宗專と號す（野史、高橋紹運記）

タカハシ　カフタラウ　高橋甲太郎　勤王の志士なり諱は重健確堂と號す但馬出石の藩士なり天保十一年江戸に至り林大學頭の門に入て學ぶ嘉永の初め藩の執政堀笑山其子新九郎と共に權を弄し變立を企つるに當り甲太郎大に之を憤慨し同藩多田立德と謀り笑山父子の罪を數へて之を藩主に訴ふために寃を蒙り獄に在ること九年文久二年に至り藩主漸く其曲直を悟り甲太郎等を宥して國政に參せしめんとす甲太郎固た之に驍ぜ加ほりしが戰敗れ遁れて長州に隱る慶應二年征長の事起り幕府の大軍攻來るに及び甲太郎長軍の爲めに斥候となり各處に奔走したりしが翌三年三月二日營中に歿す年四十四明治四十年五月朝廷其忠志を追賞して特に正五位を贈らる（殉難錄稿）

タカハシ　カフノジャウ　高橋甲之允　萩城の人なり市勇隊の部將となり元治元年七月十九日中立黨と戰ひ重傷を負ふ仍て自刃して死す年二十八（甲子殉難士傳）

タカハシ　ギウショ　高橋牛嶼　江戸の儒人なり名は砥國庄左衛門と稱す寛政十一年七月二十三日歿す八軒町玉宗寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

タカハシ　キンイチラウ　高橋金一郎　陸軍歩兵少尉なり新潟縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團歩兵第十六聯隊附として從軍中卅八年三月十四日清國盛京省張家樓子附近戰鬪の際負傷し同四月一日下興家勾第二師團第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

タカハシ　キャウソン　高橋杏村　畵人なり名は九鴻字は景羽、杏村は其號、又爪雪、塵遠草堂の號あり惣右衛門と稱す澁州の人、畵を中林竹洞に學びて山水を能くせり明治元年五月四日歿す年六十四名を良堂と云ふ（扶桑畵人傳）

タカハシ　キエモン　高橋喜右衛門　武州川越の人なり人と爲り放逸にして氣を負び健歩人に過ぐ而して尤も書法を嗜み江戸に來りて客寓數年備に艱難を嘗む嘗て幕府の士横田新五兵衛の家に仕ふ時に囊中半錢を蓄へずと雖も更に恤へず暇あれば則ち學書に從事す其の書一に僧空海を以て法となし常に其の墨本を懷にし時に出だして臨摹す又遠行を好む而して行きて必ずしも佳山名水を尋れず亦た必ずしも奇技異能の士を訪ぬ只漫然杖履足に任せて歩するのみ時あり山阪を昇降し原野を跋渉し一日にして數百里を行き乃ち呼びて曰く快なりと旬餘遠行せざれば意殊に曠々たり其の路上に在りて小憩するや亦必ちず空海の墨本を展玩し好みて大字を作る其の字方二丈餘楮墨の費自ち辨ずること能はず倣て其の之を書せんと欲するや輒ち一巨枠を擕へ馳せて大師河原に行く大師河原は都の南郊に在りて白砂平舗畫して以て字を作るべし喜右衛門乃ち空海の墨本を出だし人に呼び身を躍らして枠を揮ひ數十の大文字を沙上に作る其の字活潑飛動して蛟龍の勢を作す乃ち環視して曰く快なりと初め喜右衛門一老人を夢む素衣烏帽にして手に巨壺一枝書法一卷を持ち來りて之を與ふ既にして寤めて以爲く空海身を現はして秘訣を授くるなりと是より書一境を進む喜右衛門既に

大字を能くすと雖も細字は則ち作ること能はず最も書札に齎む然れども主家之を命ずれば則ち强ひて書く字尙ほ寸許の大なり而して其の之を作るや呻吟苦惱身を屈め手を縮めて僅かに十數字を作りて既に大に憊む其の字甚だ拙くして殆ど辨ずべからず喜右衞門晩に學を好み林鵝梁の門に遊ぶ時に鵝梁古今天下興亡の際英雄豪傑の事を舉げて以て之れを語るや喜右衞門亦た掌を撫で丶大に呼びて曰く快なりと後ち往く所を知らずと云ふ（日本文章軌範）

タカハシ　クニタリ　高橋國足　和歌を善くし萬葉作者中の一に列す天平十五年外從五位下を授けられ十八年從五位上に進み越後守となり寶字五年若狹守に轉ず（萬葉集作者歷歷）

タカハシ　クワウビ　高橋廣備　字は子大又一郎と稱し坦室と號す世々水府に仕ふ廣備天明六年史館に入り後總裁と爲り百五十石を食む幼にして穎敏備一正に長ずる三歲亦文才を以て江邸に聞ゆ人稱して兩才子と爲す會ゝ文公學を好む廣備を館生に補し侍讀を兼れ總裁の事を攝せしむる數年頗る眷遇せられ後東里と事を議するに及び論頗る合はず遂に外補を請ひ出て丶右筆と爲す文公國史を改正するに及び渡邊膳を以て提舉と爲す是に於て廣備再び官職となり專ら紀傳訂正の事を掌る廣備初め藤闇の學を好む故に其文章多く明人の矩度を守る晩年稍ゝ穉緻を改め一に宋學を主と見識大に變ず然れども其文辭の如きは先人主となり寬に明人の範圍を脫する能はずと云ふ武公の時中書更となり政事に參與す時に渡邊膳參政たり二人心を同うして政を輔け頗る舊弊を革め權僥迹を屏け苞苴行はれず武公の初政粲然觀るべき者あるは膳等與りて力あり然れども俗吏目を仄だて其の爲す所を不便とし問を伺ひ之を沮まんと欲す會ゝ國喪あり（後醍院夫人薨ず）葬に從ふ者に給するに路資を以てす有司議して是を減削す小人皆を二人に歸す是より謗言紛起し二人竟に外に補せらる廣備再び總裁と爲り水館に赴く後出て行人と爲るその人と爲り嗜直、嚴然主角を露はし好んで人の短を面折す故に尤も小人の忌む所と爲り遂に擠陷せらる（文苑選談總集）

タカハシ　クワンジ　高橋官次　陸軍一等歌醫なり新潟縣出身にして明治二十七八年日清戰役に於て第二師團第一糧食縱列附として出征中廿八年六月六日遂東半島龍王廟にて病に罹り九月五日大阪陸軍豫備病院に於て死去す

タカハシ　ケンザウ　高橋健三　江戸の人なり石齋の子大學に入り業を卒へずして去り文部省太政官の書記官となり曾て歐洲に遊び官報局長となり後大阪朝日新聞の主筆となる肺を病み明治廿二年七月廿一日沒す年四十四

タカハシ　ケンジュ　高橋賢壽　陸軍三等軍醫なり群馬縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ出征し遼陽兵站病院附として勤務中廿八年一月五日病に罹り歸國後同三月廿日東京豫備病院遞谷分院に於て病死す

タカハシ　ゲンタン　高橋玄旦　茶人なり（茶人系傳全集）

タカハシ　ゲンモンサイ　高橋玄門齋　織田有樂に學びて茶道を能くす

タカハシ　ゲンバ　高橋玄馬　醫統を繼ぐ江戸小石川に揚を開く門人多し天保七年五月八十八歲にして歿す（武術流祖錄）

タカハシ　サウザエモン　高橋莊左衞門　慷慨家なり名は諸德幼名は廉之介水戸藩士贈正四位高橋藩一郎の長子なり萬延元年二月父に從ひ國を去り四天王寺に會し共に島男也の家に留る捕手の向ひし時父と共に自殺せんとす家主小川欣次兵衞曰く父君ほ止むを得ざるべし君は年猶少なり生を全うして時を待つに若かず君の門從は遂なり生を全うして時を待つに若かず君の門從は遂に屠腹して死す時に年十九明治三十五年從五位を贈賜せらる（維新史料、櫻田始末、官報）

タカハシ　サウヘイ　高橋草坪　畫家なり名は元吉豐後杵築の人幼にして田能村竹田に意を海外の事情に用ふ文政三年滿洲文を譯し同九年魯西亞文を解して上る併びに賞賜あり同年三月和蘭の甲比丹ステュルレル長崎より江府に參朝す記室外科醫シイボルト年二十四之に從ひ共に石町なる長崎屋源左衞門方に館す景保及び奥醫師土生玄碩公務應接の外夜竊に往きてシイボルトと想親を結び玄碩奏の記章ある衣服數領を贈りて眼科の藥法を受け景保は通詞吉雄忠次郎の言に由り彼が所藏の圖書を窺ひ見思へらく是を得ば必ず國家の益たるべしと之を乞ふシイボルト願はくは貴邦の內地及び蝦夷の圖を得て之を交換せんといふ是に於て景保密に其の屬僚下河邊林右衞門以下數人に命じて伊能勘解由實測の小圖を寫さしめ其の地名を創略して贈り且東韃紀行北夷紀行小倉下の關測量圖を貸與し以て其の圖書を得たり而して世之を知るものなかりき十一年三月二十八日長崎より一筒の包み高橋氏に到着す在長崎の魯西亞の醫師より景保に托して問宮林藏に贈る所なり事外人に係るを以て林藏之を官に上申す中に更紗一段寄輸一通あり其の書大に林藏北征の事を稱贊したるのみにして他の異事あらずと然れども此の事ありしより目附方等稍景保の屬ゝ外人と信通するを疑ひ其の形迹を探りしに前二年犯し所の密事遂に發覺したり十月十日官吏を造りて之を捕へて訊問し初めて其の實を知り急に飛報を長崎に發してシイボルト所有の國禁に係る物品を收めしむ十一月朔報長崎に遣し大小吏員嚴懲す遂にシイボルトの所有品を閱し景保贈る所の圖を收むす二年二月景保囹圄中に在りて病篤く十六日終に歿す年四十六獄事未だ決せざるを以て其屍を藏す四月に至り獄初めて終局す景保志し國家に在りと雖も既に大禁を犯し且つ僚屬下河邊の女を娶とし其の幼弟を局員とし官私の費途不正なしと雖も其の出納を分たず罪死に當てとす長子小太郎二男作次郎父の罪を以て遠島林右衞門中追放長崎屋五十日手鎖其の餘各等差あり長崎大小通詞も監罰を蒙りたるもの十數人あり土生玄碩が草服を贈りたることも同時發覺し玄碩は改易に處せられ其の子玄昌は俸祿を褫はる（香亭手稿）

タカハシ　サクヤ　高橋作彌「タカハシマサコト」　大阪の歌人なり泗花に住す名は正澄桂門にして蜻蛉を善くし徒を延て教示す嘉永四年二月廿七日歿す年八十七（溫故實錄）

タカハシ　ザンム　高橋殘夢　大阪の歌人なり石齋の子大學に入り業を卒へずして去り文部省太政官の書記官となり曾て歐洲に遊び官報局長となり後大阪朝日新聞の主筆となる肺を病み明治廿二年七月廿一日歿す年四十四

タカハシ　シゲタネ　高橋鎭種　本名は錦理小字は彌六郎、主膳兵衞と改む後三河守主膳正と稱す吉弘鑑理の二男にして高橋鑑種の義子となり高橋學を好み晩年京都街衢の沿革を調査し博引旁搜頗る精密を極む

タカハシ　セイジラウ　高橋誠二郎　陸軍步兵中尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團步兵第四聯隊附として從軍中卅七年十月十二日清國盛京省土門子嶺附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカハシ　セイスケ　高橋清助　奇男子なり越中山形氏の子家世々富山侯に仕ふ食祿四百石母は高橋氏、清助年十三出て津田氏に養はれ侯の內豎たり同僚十六歲の者あり慢ゝ之を輕侮す清助忿に堪えず刀を揮て之を擊つ殆んど死す其父大に驚き津田氏に請ふて曰く見尙ほ乳臭にして贈大此の如し恐る君家を危うせん請ふ之を反賜せよと遂に家に歸る罪を父に獲るを以て改めて母の氏を冒す既に長じて魁岸膽力あり江戸に來りて商と爲り西京阪に遊び遂に山陽を經て鎭西に至り以て商法を講究す既にして江戸に還り清貧を鬻ぎ近江屋と號す肆を開かず僅を蓄へず棉衣を服し草履を著け自から重荷を負ひ諸邸及び寺院に行賣し老に至るまで改めず貨物を貸庫に置く居る所只だ八疊のみ雜貨又之に滿つ嘗て曰く我豈に逸樂を知らさらむや苟も之を爲せば費傷以て其費を償ほざるを得ず是れ天を欺くなり我死すと雖も敢て爲さずと凡そ貨物皆な二十分一の利を收む廉賣の名一時に噪く王公貴人亦た往々之を召見す一年清舶來らず紙價貴し清助常價を以て之を鬻ぐ曰く此れ上年居く所今價と相關せずと一儲生あり多く之を購ひ時價を以て交人及び門生に分鬻す清助聞て大に怒る復た文具を其人に賣らず清助曾て安井息軒と交る息軒嘗て塙邑の令たり屬更唐蹤布ありやと問ふ答て曰く無し息軒問ふ唐蹤布有り何を以て無と曾ふ清助曰く民結に餘す明治十一年下京第二十三組戶長に擧げられ十四年上下京聯合區議員に舉げられ遷都恩賜金の處分に就て侃諤の議を唱へ遂に之を疏水工事の資金に充つるに至らしめたり爾來市會議員府會議員井に學務委員として京都の市政に貢獻する所少からず功勞に依り木杯銀杯を受くること數回に及べり四十一年一月六日病を以て逝く年六十九爲人溫雅にして理財の才に長じ學を好み晩年京都街衢の沿革を調査し博引旁搜頗る精密を極む

タカハシ　セイジラウ　高橋誠二郎　陸軍步兵中尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團步兵第四聯隊附として從軍中卅七年十月十二日清國盛京省土門子嶺附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカハシ　シツカ　高橋靜　海軍大尉なり名は諸德幼名は廉之介水戸藩士贈正四位高橋藩一郎の長子なり萬延元年二月父に從ひ國を去り四天王寺に會し共に島男也の家に留る捕手の向ひし時父と共に自殺せんとす家主小川欣次兵衞曰く父君ほ止むを得ざるべし君は年猶少なり生を全うして時を待つに若かず君の門從は遂なり生を全うして時を待つに若かず君の門從は遂に屠腹して死す時に年十九明治三十五年從五位を贈賜せらる（維新史料、櫻田始末、官報）

タカハシ　ザウヘイ　高橋草坪　畫家なり名は元吉豐後杵築の人幼にして田能村竹田に意を海外の事情に用ふ文政三年滿洲文を譯し同九年魯西亞文を解して上る併びに賞賜あり同年三月和蘭の甲比丹ステュルレル長崎より江府に參朝す記室外科醫シイボルト年二十四之に從ひ共に石町なる長崎屋源左衞門方に館す景保及び奥醫師土生玄碩公務應接の外夜竊に往きてシイボルトと想親を結び玄碩奏の記章ある衣服數領を贈りて眼科の藥法を受け景保は通詞吉雄忠次郎の言に由り彼が所藏の圖書を窺ひ見思へらく是を得ば必ず國家の益たるべしと之を乞ふシイボルト願はくは貴邦の內地及び蝦夷の圖を得て之を交換せんといふ是に於て景保密に其の屬僚下河邊林右衞門以下數人に命じて伊能勘解由實測の小圖を寫さしめ其の地名を創略して贈り且東韃紀行北夷紀行小倉下の關測量圖を貸與し以て其の圖書を得たり而して世之を知るものなかりき十一年三月二十八日長崎より一筒の包み高橋氏に到着す在長崎の魯西亞の醫師より景保に托して問宮林藏に贈る所なり事外人に係るを以て林藏之を官に上申す中に更紗一段寄輸一通あり其の書大に林藏北征の事を稱贊したるのみにして他の異事あらずと然れども此の事ありしより目附方等稍景保の屬ゝ外人と信通するを疑ひ其の形迹を探りしに前二年犯し所の密事遂に發覺したり十月十日官吏を造りて之を捕へて訊問し初めて其の實を知り急に飛報を長崎に發してシイボルト所有の國禁に係る物品を收めしむ十一月朔報長崎に遣し大小吏員嚴懲す遂にシイボルトの所有品を閱し景保贈る所の圖を收むす二年二月景保囹圄中に在りて病篤く十六日終に歿す年四十六獄事未だ決せざるを以て其屍を藏す四月に至り獄初めて終局す景保志し國家に在りと雖も既に大禁を犯し且つ僚屬下河邊の女を娶とし其の幼弟を局員とし官私の費途不正なしと雖も其の出納を分たず罪死に當てとす長子小太郎二男作次郎父の罪を以て遠島林右衞門中追放長崎屋五十日手鎖其の餘各等差あり長崎大小通詞も監罰を蒙りたるもの十數人あり土生玄碩が草服を贈りたることも同時發覺し玄碩は改易に處せられ其の子玄昌は俸祿を褫はる（香亭手稿）

タカハシ　シツカ　高橋靜　海軍大尉なり家世々米商を營む元治元年七月兵火の爲めに家屋倉庫を蕩燼し頗る困厄に陷りしが維新の際思ふ所ありて米商を止め茉莉族の家扶となりしが幾もなくして民籍に歸す明治十一年下京第二十三組戶長に擧げられ十四年上下京聯合區議員に選げられ遷都恩賜金の處分に就て侃諤の議を唱へ遂に之を疏水工事の資金に充つるに至らしめたり爾來市會議員府會議員井に學務委員として京都の市政に貢獻する所少からず功勞に依り

タカハシ　セイイ　高橋正意　京都の人なり元治元年七月兵火の爲めに家屋倉庫を蕩燼し頗る困厄に陷りしが維新の際思ふ所ありて米商を止め茉莉族の家扶となりしが幾もなくして民籍に歸す明治十一年下京第二十三組戶長に擧げられ十四年上下京聯合區議員に選げられ遷都恩賜金の處分に就て侃諤の議を唱へ遂に之を疏水工事の資金に充つるに至らしめたり爾來市會議員府會議員井に學務委員として京都の市政に貢獻する所少からず功勞に依り勳五等功五級に叙せらる

タカハシ　ズヰエツ　高橋隨悅　名は諸氏桐原流の門人にして桐原流の柔術家なり（武術流祖錄）

タカハシ　シラウ　高橋四郎　陸軍步兵大尉なり山形縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團步兵第五聯隊附として從軍中卅八年一月廿七日清國盛京省黑溝臺戰鬪の際負傷し遂に死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タカハシ　ズヰエツ　高橋隨悅　名は諸氏桐原流の門人にして桐原流の柔術家なり（武術流祖錄）

タカハシ　セイイ　高橋正意　京都の人なり家世々米商を營む元治元年七月兵火の爲めに家屋倉庫を蕩燼し頗る困厄に陷りしが維新の際思ふ所ありて米商を止め茉莉族の家扶となりしが幾もなくして民籍に歸す明治十一年下京第二十三組戶長に擧げられ十四年上下京聯合區議員に選げられ遷都恩賜金の處分に就て侃諤の議を唱へ遂に之を疏水工事の資金に充つるに至らしめたり爾來市會議員府會議員井に學務委員として京都の市政に貢獻する所少からず功勞に依り

を齎らして水戸に往き要路に散じて其命を乞ひ躬自ら之に代らんと請ふに至る有司憫みて之を赦す又之を房州相識の者に托し其跡を滅せしむ而して未だ嘗て其父に告げず清助義俠を喜ぶと雖も然るに資性怨篤其の冒ふ所其行ふ所の如し闔里貧民善く父兄に事ふる者あれば資を捐し之を援ふ故を以て人益々之を重んず横濱百市を開くより海内漸く多事なり暴客横行し洋行商賈多く其隅に擺り蹟り清助敢て之を搾斥する者なし或は竊に來りて其貨を購ふ者あり曰く此翁鑑ふる所必ず清船の齎す所横濱の穢物にあらざるなりと清助至廉と雖も館儉自ら持す常に言ふ、人食糧あれば乃ち足る餘は皆な贅物なりと世路の益々艱なるに及びて闔里及び無縛の候清助の生産を恃みて火を擊ぐるもの多し慶應元年農兵の九段に屯する者亂を爲し行々市閭を劫す清助時に金杉里に居る亂兵將に金杉に至らんとし相戒めて曰く此れ清翁の居る所謹て驚擾すること勿れと肅然として過ぐ其の人の爲めに推服せらるゝもの此の如し明治六年十月病みて歿す淺草住滿寺に葬り其の墳を拜する者朝夕絶えずと云ふ（傳記）

タカハシ　セウウン　高橋紹運「タカハシシゲタネ」

タカハシ　セキサイ　高橋石齋　名は豐珪守は子玉石齋は其の號、又煙岳と號す父曾平擊劍を以て著る尾張藩に仕ふ石齋敎を家庭に受け亦た二刀流の劍法に精し儒を飴ぶ藩主擢て擊劍敎授となす石齋年弱冠を過ぎ一日嘆じて曰く區々の武技以て功とし傳ふるに足らずと遂に職を辭して江戸に遊ぶ發するに臨み親戚朋友に告げて曰く余名を海内に馳せずんば復た並の士を踐まず既に江戸に至り志を文學に專にす最も書法を究め力を顏柳に得る其の妙處多く劍法より悟入す然れども未だ世の知る所とならず家貧甚し每夜燈下に就て傭書深更に至り乃ち輟む更に大紙數枚を展し揮灑淋漓自ら快を取る曰く放心一手一日の束縛を解くと既にして書名都下に噪し都下の名流大沼沈山其の詩集を刻せんとす曰く吾が集石齋の書に非ずんば不可なりと其重んぜらるゝ此の如し戊辰の歳戸田和州京都にあり聘して祿を給す又之を朝に薦め史官に拜す幾くもなくして疾に擺り職を辭して江戸に歸り路次尾張を過ぎ親戚朋友に見ゆ昔其の柴を欽羨すと云ふ明治五年七月二十四日遂に疾を以て歿す年五十六從て大臨み自ら誄號を撰て大書す書法雄奇活動平生に異なず又絶命の詞を賦し則吟數四乃ち瞑す石齋狀貌矮小にして皙性、剛直、淨潔の徒と交らず尤も氣節を重ず嘗て某氏の子を養て其の女に配す既にして養子耶蘇敎を信奉し多一郎憤慨已む能はず孫二郎と議し姦魁を屠戮し禍根を絶ち義氣を鼓舞すると若かずとなし密に薩藩の士岩下爛等と謀らひ東西相應じて事を擧げんとす堅安政六年八月幕府齊昭を水戸に移し剿へ勅書返納の事を命ずるや多一郎乃ち同志を糾合し甚延元年二月家人に老親を托して決死家を出で姓名を變じて磯部三郎兵衛といひ木曾路を經て京に上る三月三日太田の驛に着く俄に大風雪に遇ふ我同志江戸に事を擧ぐるは今日なり天道の我節義を憐み給ふなりと雀躍して行程を進む鑿し此日金子孫二郎の率ゐる同志は櫻田門外にて井伊大老を要擊したるなり斯くて大阪に着するや櫻田の變報既に上方に達し幕吏の其黨與を索むること甚だ嚴なり同じき二十三日多一郎は捕吏の追躡する所となり其子莊左衛門と共に天王寺に遁れたるも免る可からざるを知り茶店に入りて自ら腹を切り布を以て之を包み血刀を提げて捕手に向ひ仔細を陳べんとす捕手等憚れて近かず終に四天王寺の坊官小川俊直の家に趨き事情を語りて自刄の爲めに一室を請ひ父子共に腹せり多一郎時に年四十七莊左衛門は十九なり俊直假りに之を四天王寺の域内に埋む文久三年幕府朝旨を以てその後を收錄し遺骸を郷里に歸葬するとゝ許し中川宮朝彦親王圖門殉難の四字を書して之に賜へり明治廿四年十二月朝廷其忠志を追賞し特に正四位を贈らる（殉難錄稿、櫻田烈士傳）

タカハシ　ダウハチ　高橋道八　陶工なり伊勢桑山の藩士高橋八郎太夫の二男なり寶暦年間京都に來り陶窯を粟田に開き陶器を製出せり兼て彫刻を善くす花卉最妙なり自ら號して松風亭空中といふ文化元年四月廿六日歿す（高橋道八書上、工藝遺芳）

タカハシ　タケジラウ　高橋竹次郎　陸軍步兵第少尉なり廣島縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て後備步兵第九聯隊附として從軍中廿七年八月奉行せんとす幕府之を聞き急に水戸藩に令して勅旨を藩に傳ふるとなからしむ是に於て藩論二派に分れ物議囂々たり多一郎等大に畫策する所あり住谷信義大胡資敬等を四國に矢野長道關遠等を中國に遣はし諸藩の士に說き共に心を合さしむ事幕府の覺る所となり捕吏を諸國に遣して探索甚だ力めために獄に繫がるゝ者多し多一郎憤慨已む能はず孫二郎と議し姦魁を屠戮し禍根を絶ち義氣を鼓舞すると若かずとなし密に薩藩の士岩下爛等と謀らひ東西相應じて事を擧げんとす堅安政六年八月幕府齊昭を水戸に移し剿へ勅書返納の事を命ずるや多一郎乃ち同志を糾合し甚延元年二月家人に老親を托して決死家を出で姓名を變じて磯部三郎兵衛といひ木曾路を經て京に上る三月三日太田の驛に着く俄に大風雪に遇ふ我同志江戸に事を擧ぐるは今日なり天道の我節義を憐み給ふなりと雀躍して行程を進む鑿し此日金子孫二郎の率ゐる同志は櫻田門外にて井伊大老を要擊したるなり斯くて大阪に着するや櫻田の變報既に上方に達し幕吏の其黨與を索むること甚だ嚴なり同じき二十三日多一郎は捕吏の追躡する所となり其子莊左衛門と共に天王寺に遁れたるも免る可からざるを知り茶店に入りて自ら腹を切り布を以て之を包み血刀を提げて捕手に向ひ仔細を陳べんとす捕手等憚れて近かず終に四天王寺の坊官小川俊直の家に趨き事情を語りて自刄の爲めに一室を請ひ父子共に腹せり多一郎時に年四十七莊左衛門は十九なり俊直假りに之を四天王寺の域内に埋む文久三年幕府朝旨を以てその後を收錄し遺骸を郷里に歸葬するとゝ許し中川宮朝彦親王圖門殉難の四字を書して之に賜へり明治廿四年十二月朝廷其忠志を追賞し特に正四位を贈らる（殉難錄稿、櫻田烈士傳）

タカハシ　ゼンザウ　高橋善藏　筑前國氏の子を養て其の女に配すと聞き大に怒りて曰く咄頑冥兒吾が家を蔑ること甚だ女既に渠と親し寧ぶべからずと乃ち俱に與に之を逐ひて復た通ぜずと云ふ（近世偉人傳）

タカハシ　ザンヤ　高橋帶山　陶工なり俗稱藤九郎近江の人延寶年間京都に來り粟田東町に住し陶窯を設け帶山と號す其の居粟田山をおゝるの意なるべし後磁器に白色綠色柿色黑色等の描畫を施して大に世に賞せらる之を本燒窯と稱す六世の孫與兵衛の時に至り陶器の彩色を一變し優美なる畫繪と なし姓あり諸藩と協議して幕府の失政を匡救す可しとの命なるを以て大に悅び同志と謀り藩主慶篤を助けて勅旨を奉行せんとす幕府之を聞き急に水戸藩に令して勅旨を藩に傳ふるとなからしむ是に於て藩論二派に分れ物議囂々たり多一郎等大に畫策する所あり住谷信義大胡資敬等を四國に矢野長道關遠等を中國に遣はし諸藩の士に說き共に心を合さしむ事幕府の覺る所となり捕吏を諸國に遣して探索甚だ力めために獄に繫がるゝ者多し多一郎憤慨已む能はず孫二郎と議し姦魁を屠戮し禍根を絶ち義氣を鼓舞すると若かずとなし密に薩藩の士岩下爛等と謀らひ東西相應じて事を擧げんとす堅安政六年八月幕府齊昭を水戸に移し剿へ勅書返納の事を命ずるや多一郎乃ち同志を糾合し甚延元年二月家人に老親を托して決死家を出で姓名を變じて磯部三郎兵衛といひ木曾路を經て京に上る三月三日太田の驛に着く俄に大風雪に遇ふ我同志江戸に事を擧ぐるは今日なり天道の我節義を憐み給ふなりと雀躍して行程を進む鑿し此日金子孫二郎の率ゐる同志は櫻田門外にて井伊大老を要擊したるなり斯くて大阪に着するや櫻田の變報既に上方に達し幕吏の其黨與を索むること甚だ嚴なり同じき二十三日多一郎は捕吏の追躡する所となり其子莊左衛門と共に天王寺に遁れたるも免る可からざるを知り茶店に入りて自ら腹を切り布を以て之を包み血刀を提げて捕手に向ひ仔細を陳べんとす捕手等憚れて近かず終に四天王寺の坊官小川俊直の家に趨き事情を語りて自刄の爲めに一室を請ひ父子共に腹せり多一郎時に年四十七莊左衛門は十九なり俊直假りに之を四天王寺の域内に埋む文久三年幕府朝旨を以てその後を收錄し遺骸を郷里に歸葬するとゝ許し中川宮朝彦親王圖門殉難の四字を書して之に賜へり明治廿四年十二月朝廷其忠志を追賞し特に正四位を贈らる（殉難錄稿、櫻田烈士傳）

二十四日旅順要塞盤龍山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカハシ　ダンジャウザエモン　高橋彈正左衛門　直心流の劍法家なり名は重治直翁と號す寛永中の人（武藝流祖錄）

タカハシ　ジフダイフ　高橋重太夫　上野新町の人なり、性温厚慈惠にして文武の器を抱き時に臨みて明斷良策を出すの才あり家大農にして耳田若干町を有し世々儉を勤め富を致して鄕の豪族たり重太に及びて身宿老たるを以て常に其の里の利病を視ること家に之あるが如くす凡そ東北侯國の衆き貢獻の多き道路絡繹として日々に以て相尋ぐ皆な此の里を經ざるなく其の用に供給する即ち時々急速にして人夫を發し耕馬を走らす民の生產を爲す所以必ず是に由りて窮乏す所在皆な此くの如し而して本宿最とも其だし唯だ重太仁惠あり宿老親民の職を以て世々豪富の資に藉り小民の困窮を見るに忍びず一朝決然として良策を建て宿中の經費を計りて家財六百金并びに墾田二町を發し官に請ひて以て其の用に充つ事は安永年中に在り今に至て宿其の金息を以て能く人馬を出入することを得又た役夫をして其の田を力作せしめて粟も亦た儲あり上野鳥川鎗川は新町を歷て東刀根川に入る爲に津あり日々に舟筏の會宿を致して民其の利を受く重太の時に在りて適々其の津已に廢せらる重太之が爲めに奮然として資を費し其の勞を擇ばず官に請ひて再び其の利を興す事は天明二年にあり里是に由りて烟を擧ぐる者多し天明八年死す年五十五（碑文）

タカハシ　チカムネ　高橋親宗　有職家なり宗恒の男、初め宗惇又久中と稱す天和三年御厨子所預となり若狹守に任じ從四位下に叙す享保十四年三月四日卒す年五十七、男中正、宗直あり、中正早く卒す宗直繼ぐ親宗著す所儀羞類考、諸陵雜事、酥酪制法等あり（高橋系譜）

タカハシ　ヂタラウ　高橋治太郎　海軍大軍醫なり岐阜縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て軍艦秋津洲乘組戰役に從事中同年十一月廿四日疾病に罹り同十二月四日死去す

タカハシ　チュウイチ　高橋忠一　陸軍步兵中尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て步兵第四一隊附として從軍中廿八年三月三日清國盛京省鄭密荒戰鬪の際負傷し同十一日沙河子戰地定立病院に於て死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タカハシ　デイシウ　高橋泥舟　舊幕臣なり勝海舟山岡鐵舟と共に三舟と稱せらる通稱精一槍法を以て世に知らる二十五歲にして講武所師範役となり從五位下朝散太夫伊勢守に任ぜらる幕府諸浪士を徵集して新徵組を組織す信任を得たり維新の際は專ら榛順に力め遊擊精銳兩隊を率ゐて慶喜を護衛したり三十六年二月十三日年六十九にして死を以て逝く

タカハシ　トウカウ　高橋東岡「タカハシシサクヂエモン」

タカハシ　トシヒサ　高橋俊璿　慷慨家なり京都の人初め清陰と號す父は伊勢守俊彦といひ世々鷹司家の諸太夫なり俊璿正四位下に叙し兵部權大輔に任ず夙に憂國の志深く飯泉友輔頼醇等と交り常に幕府の擧措を伺察し力を盡す飯泉と書類の往復は多く俊璿が所爲なりき安政五年十二月八日幕吏に召捕られ江戸に送り阿部氏の邸に幽せられ明年十月七日禁錮の刑に處す俊璿憂憤病を發し慶應二年正月三日歿す（殉難錄稿）

タカハシ　トモチカ　高橋知周　者五郎と稱す世々津藩に仕へ百二十石を食みて知新流の薙刀の敎師たり父は知格寛政六年を以て知周を伊賀に生む知周幼にして穎悟學を好みて律令格式に通じ和歌を善くし更に尤も刀法を修練して其の蘊奥を究め家聲益々振ふ文化十年津城に從ひ伊勢の門人に敎授す文政二年鄕代官に轉任し尋で郡奉行に陞り鞠射力を竭すこと數年民の爲めに利を開き害を除くこと少からず其の最も著はるゝ者を小倦鄕總谷の池と爲す水を貯ふると十萬坪にして五村の田に灌ぐ又た篠尾嶽は路甚だ險惡にして人馬疲痛す知周新に澗道を開き以て往來に便ぜり並びに民の爲めに甄歇せらるゝ後ち武具奉行武場目付銀札奉行作事奉行等の官に轉じ並びに其の職に稱ふ前後祿を益すこと七十石合して百九十石を食む弘化四年秋命を奉じて山陽四海諸國を巡覽し歸り自して旨に稱ひ掌服及び白金百兩を賜ふ未だ幾ばくならず再び郡奉行に任ぜらる白金百兩を賜ふに臨み饑饉頻りに臻り民窮食に艱やむ知周心を慟順に盡し勞勤疾を致し嘉永五年遂ひに歿す年五十九、著はす所令義解校本伊勢地誌等若干卷あり並びに未だ稿を脫せず（墓誌）知周學は本居氏に淵源して甚だ世儒の說を喜ばず（墓誌）

タカハシ　トラサブラウ　高橋虎三郎　陸軍步兵中尉なり島根縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第五師團步兵第廿一聯隊附として從軍中廿八年三月四日旅順要塞松樹咀子西北方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功七級に叙せらる

タカハシ　ニンアミ　高橋仁阿彌　一世道八の子にして名を光時といふ文化八年粟田より五條に移り和漢の陶器を模し又摹像を製す文政九年仁和寺宮より法橋及び仁阿の號を賜ふこれより仁阿彌と號す天保十三年桃山に隱居し別窯を開く之を桃山燒といふ性文雅にして常に文人墨客に交はる（大澤氏筆記、高橋道八書上）

タカハシ　ハクザン　高橋白山　漢學者なり舊信州高遠藩士なり家を内藤家の儒官たり諱は利貞敬十郎と稱す幼にして家學を受け弱冠既に藩黌進德館助教たり文久中江戸藩邸に在りて四方の詩客と交す後新潟長野兩縣下の中學校及師範學校に敎鞭を執り三十二年辭して退隱す敎育に從事すること前後五十年門弟中名を成すもの多し明治三十七年三月十日逝く年六十九著す所白山樓詩文抄、征清詩史、詠註千絕、白山文集等あり

タカハシ　ハツジラウ　高橋初次郎　陸軍步兵中尉なり三重縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ步兵第三十三聯隊附として從軍中廿八年三月七日清國盛京省李官堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカハシ　ブサヱモン　高橋武左衛門　秋田平鹿郡下境村の人なり諱は信虎人となり恭倫淳朴白ら四郊を周遊し地を相して開墾するもの數處歲中秋

田河邊郡四ツ小屋村の功最も偉なるものにして新田二百餘町歩を得たり其間刻苦勵精心力を勞すること三十餘星霜藩主佐竹義和駕を枉げ親しく之を視大に効績を嘉みし賜ふに賞盲及秩祿を以てし命じて納戸米となさしむ爾來收穫著く村民背家に十年の糧を貯ふるに至る民皆其德を慕ひ碑に刻し祠に祭るに至れり文政巳卯六月卒す年七十八

タカハシ　ホクラ　高橋秀倉（又保具真とも書す）　歌人なり　鰊居の門有名の人尤も長歌古體を能くせり（鑒定便覽）

タカハシ　マサコト　高橋正功　勤王家也字は有命作綱と稱す坦堂と號す膳所藩士にして祿七十石を領し郡奉行となり嚴正の聞えあり嘉永中篠崎弱の門に在ると三年博識强記文藻に富み尤も經濟に精し學成て藩に歸り遵義堂の教授となる又國勢の變遷を察し專ら心を尊攘に傾け藩士森祐信田河武整等と謀り藩論の方向を定め王事に棘掌するを以て已が任となす藩士の義を唱へ事に死するもの多くは其門下に出づ正功川瀨定と傾蓋の交あり其正議を唱道するや毎に相往來して論議を上下す然れども遠謀深慮敢て急激の擧をなさず慶應元年閏五月十四日其徒と同じく獄に下り其年十月廿一日を以て死刑に處せらる時に年四十一著す處の論策あり題して蓋測篇といふ（膳城烈士傳）

タカハシ　マサヨシ　高橋正賀　津輕の人なり吉次郎と稱す弘前侯津輕寧親の命を受け刀工と爲り寛政五年二口欅を受く文政三年鍛する所の刀鋭利精眞なるを以て侯の旨に稱ひ金及び欅を賜ふ正賀初め盛宗佐太郎に就き鍛冶を學び享和元年水心子正秀の門人と爲り技益々進み其鍛刀を侯に上り屢々褒賞を受く人と爲り敦厚樸實にして一たび志したる事は千辛萬苦欲し封内諸郡を搜捡し遂に真土を得んと の折るゝともなきは卸鐵を以て鍛錬せる故なり新刀の折れ易きは生鐵を以て鍛錬すればなり大原眞守の刀は卸金にて作れるものと聞けりと故に工夫を積み鍛錬の妙を得て其師正秀は反て卸金の傳を正賀より得て大に其發明を賞嘆せしと云へり

タカハシ　マタシラウ　高橋又四郎　勇力の士なり一に九郎と云ふ西國の人、歳十三にして強賊六人と戰ひ其の三人を斬り其の三人を生獲す後隈田次郎左衛門と共に天王寺に向ひ渡邊橋を斷ち補氏と戰ふ自ら其の勇を負み遂に其の計に陷りて敗北す又赤松氏京師を攻る時又隈田と西七條に於て小寺衣笠と戰ひ敗北す而れども毎に敵首を獲たり或は云ふ其の屢々北ぜし所以は其の臂の指揮宜しきを得さるに由ると（本朝武功正傳）

タカハシ　ムシマロ　高橋虫麻呂　天平寶亀間の人萬葉作者の一人なり（萬葉集作者履歴）

タカハシ　ムネツネ　高橋宗恒　有職家なり初の名は幸治、孝元天皇の皇子大彦命の裔磐鹿六雁命の後なり初膳臣を姓とす天武帝の時高橋姓に改む其の裔宗成康平中御厨子所預となる子宗政、子宗兼、子重宗、子宗季、子宗尚、子宗隆、宗信、子宗長、子宗俊、子宗基（子宗藤、子宗顯、子宗定、子季弘（子宗興、子宗國、子宗賴、子宗衡、子宗教、宗治、子宗好、子宗元年御厨子所預となる子宗恒は宗定の子なり慶安元年御厨子所預に補す時に年九歳、同四年雅樂頭に任宗定世々朝廷の食膳に奉仕す宗恒は宗定の子なり慶安所預に補す時に年九歳、同四年雅樂頭に任備前守に任じ延寶四年今の名に改む宮中の祭及び綸神諸家の儀式多くこれに與からざる儀式冠婚葬祭及び綸神諸家の儀式多くこれに與からざるはなし元祿四年三月從四位下に叙す寶永三年十二月廿四日宮崎の隱居に卒す年六十七眞如堂に葬る著す所厨事類記、釋奠圖、世俗立要鈔、代々口宣古文書、御厨子所中敵の機械水雷に觸れ艦と共に難に殉せり年四十五戰物等あり（高橋氏系譜、鑒定便覽）

タカハシ　ムネナホ　高橋宗直　天明中の和學者なり宗恒の孫にして親宗の子なり家職を受て御厨子所從四位上若狭守たり初漢學を伊藤東涯に受け又父及び祖父の門人野々宮定基滋野井公澄に就き大に其他雜抄數部を著はす元文中朝廷大嘗の記錄に通達し抄物數百卷皇朝の古典を修し殊に諸家の記錄に通達し抄物數百卷を大禮因て再興せらる同好の士其門に入て學ぶ者甚だ多し後洛東岡崎村に別居し圖南老人と號す又た和歌を好みて蔗庵澄月の號と交り諸子老先生と稱譽す天明五年正月二十五日卒す年八十三東山眞如堂に葬むる私謚して文敬先生と曰ふ（鑒定便覽、高橋氏系譜）

タカハシ　ヤスマロ　高橋安麻呂　万葉作者中の一人にして和歌を善くす養老二年從五位上に叙せられ四年宮内少輔となる神龜元年從五位上に進み宮内大輔に任ぜらる是の年海道蝦夷反す朝廷藤原宇合を大將となし安麻呂を副將となして之を征せしむ二年事平らぎ功を以て正五位下勳五等を授けらる天平四年右中辨となり九年正五位上に叙せられ十年從四位下に進み太宰大貳となり入りて右大辨に任ぜらる（万葉集作者履歴）

タカハシ　ユウイチ　高橋雄一　海軍少佐也青森縣出身にして明治廿七八年日露戰役起るや第三艦隊副官として軍艦日進に乘組み從軍中廿七年八月

タカバ　シメキチ　高塲占吉　陸軍砲兵少尉なり佐賀縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第九師團砲兵第九聯隊附として從軍中廿八年三月六日清國盛京省遼化屯戰鬪の際負傷し同廿五日遼陽兵站病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカハシ　モトタネ　高橋元種　秋月文種の長子なり弘治三年文種自殺す生母元種を携へ遁れ高橋鑑種の爲に擒へらる鑑種之を宥し陽りて家臣高橋越前の子となし之を寶滿に置く初字は八郎兄種長と島津義久に屬す天正十五年豐臣秀吉薩を征するに及び始めて欵を納れ日向宮崎五萬石を賜ふ征明の役黑田長政に屬し歸りて從五位下に叙し右近衛將監に任ず慶長十八年十月富田知信罪あり邑除せらる元種逃坐し食邑を沒收し棚倉に流さる高橋氏是に至て祭祀絶ゆ

タカハシ　モリミチ　高橋守道　海軍大佐なり薩高知藩士なり明治七年海軍兵學寮に入り十三年九月海軍少尉補に任ぜられ爾來金剛、大和、天龍、筑波、高千穗其他の航海士、航海長に歷補し或は海軍大學校教官と爲る二十七八年日清戰役に於ては遊擊隊吉野の航海長として戰功あり勳五等に叙せらる三十二年四月水路部測量科に入り三十三年從軍中廿七年七八年日露戰役起るに及び同艦長として從軍中廿七年七月五日特別任務を帶び鴨綠を冒して大連灣外に出動中敵の機械水雷に觸れ艦と共に難に殉せり年四十五戰功に依り勳三等功四級に叙せらる

タカハシ　ヤスマロ　高橋安麻呂　万葉作者中の一人にして和歌を善くす養老二年從五位上に叙せられ四年宮内少輔となる神龜元年從五位上に進み宮内大輔に任ぜらる是の年海道蝦夷反す朝廷藤原宇合を大將となし安麻呂を副將となして之を征せしむ二年事平らぎ功を以て正五位下勳五等を授けらる天平四年右中辨となり九年正五位上に叙せられ十年從四位下に進み太宰大貳となり入りて右大辨に任ぜらる（万葉集作者履歴）

タカハシ　ユウイチ　高橋雄一　海軍少佐也青森縣出身にして明治廿七八年日露戰役起るや第三艦隊副官として軍艦日進に乘組み從軍中廿七年八月

十日黃海に於て敵艦隊と交戰の際戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

タカハシ　ユウタラウ　高橋雄太郎　勤王の志士なり諱は幸佑椿屋と號す近江國膳所に生る雄太郎幼にして常童と異り長ずるに及び進智達才文學詩歌を好む元治元年武田耕雲齋の徒筑波山に敗れ其殘黨死を決して上京せんとの聲聞あり膳所藩即ち勢田橋口を守らんとし急に藩兵を召集す雄太郎乃ち之に應す是より先き藩藩田中軍太郎姓を變じて中村左馬之助と稱し秘密を探らんが爲め來つて雄太郎を訪ひ膳所藩論の勤王佐幕孰れに在るやを問ふ雄太郎其一藩の重事に屬するを以て保田信六郎等の同志に議り答ふるに本藩は幕府の命を受けて禁闕を護衛す即ち勤王は獨り藩論のみ然るに非ず故藩主の職責なる旨を以て答辯す其後藩論一變し上坂大五郎京に上り會藩主松平容保の家臣に面して雄太郎等が窃に長州と謀を通ずりと讒す會藩主之を膳所藩主に詰る是に於て藩主旨を下し慶應元年五月十四日勤王の同志を羅致して獄に投じ十月二十一日終に死を賜ふ時に年三十三明治三十一年七月特旨を以て正五位を贈ちる（膳所藩勤王家列傳、殉難錄稿）

タカハシ　ヨシアツ　高橋義篤　海軍大尉なり舊富山藩士高橋篤の三男なり年甫めて十四藩主前田侯の選拔する處となりて上京し箕作氏の門に遊ぶ藩費勤學生の廢するに逢ひ故郷に歸れり爾來海軍に從事せんとを期せり明治七年海軍兵學寮に入り業を卒へ十二年九月筑波艦に乘組み日本島海近航を命ぜられ十三年十二月海軍少尉補に任ぜらる十四年三月乾行艦乘組を命ぜられ十六年十一月軍海中尉と爲る十九年十二月海軍兵學校魂術教授となり海軍大尉に任じ尋て比叡艦分隊長に補せらる爾來水路部圖誌科察海軍語彙編纂委員海軍參謀部長傳令使高千穗分隊長等に歷補し二十六年一月清國在留民保護として福州芝罘の間に廻航し二十七年五月勳六等に叙せらる六月橋立分隊長に補せられ拜び清國に出張を命ぜらる愈々交戰となり九月十七日黃海の大海戰に於て遂に戰死す年三十七

タカハシ　ヨシタ　高橋與資太　陸軍少尉なり新潟縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て臨備役より召集せられ第二師團歩兵第十三聯隊附として從軍中廿八年三月十四日清國盛京省張家樓子附近戰鬪の際負傷同十五日第二師團衛生隊假繃帶所に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカハシ　リサク　高橋利作　陸軍騎兵中尉なり埼玉縣出身にして明治二十八年征蕃役に於て近衛師團衛生隊附として出征中風土病に罹り同年十月五日臺灣鳥彰第二野戰病院に於て死去す

タカハシ　リヘイ　高橋利兵衛　諱は正都周防國熊毛郡上島田村の農夫なり元治元年正月永井尺子十男士の一なり太郎の子、主義久の九郎左衛門の進を別府浦に殺し其船を火きて遁れ去る後精一誠一郎の二人仲之進の首を泛華に梟し自殺せしと聞き深く其生を偷みたるを慚ち且つ重罪を犯せるを悔え其年三月十日一書を遺し屠腹して死す時に年二十五（殉難錄稿）

タカハシ　ワタリノスケ　高橋渡之助　爲めに亡さるゝや渡之助上月城に在り報を得て秋宅庵之助と之に據る是より先き寺本生死之助伴りて降を九郎左に降らしむ後山中鹿之助等と義久の子勝久を擁立して九郎左を亡す（尼子十勇士傳）

タカハシ　エチゼン　高橋越前　身貧賤に出でゝ終に長崎奉行に至り能く以て稱せらる其の德なる時友あり富待を賞はんとか勸む百金を對ずと云ふ明聞くに及び即ち其契を燒きて敢て復た金の報を聞く知らざる者は以て狂痴となす知者は曰く後ち必ず貴とならんと果して然り（事實文編）

タカハシ　セイイチ　田川誠一　陸軍歩兵中尉なり三重縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團歩兵第三十三聯隊附として從軍中廿七年九月三日清國盛京省遼陽附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカハシ　キンザエモン　高畑金左衛門　加州の物産家なり元文二年片山傳右衛門と共に加賀國産物志一卷を著はす（日本博物學年表）

タカバタケ　シキブ　高畠志貴麿　女歌人なり初名は登美子種有功卿嘗て名を武部と賜ふ維新後志貴麿と改む幼より和歌を香川景樹に學び名あり清音の妻となりし後は夫緒脇和し益々其巧を見はす蓋清音は芝山持豐卿の門人にして又和歌を善せり志貴麿明治十四年五月二十八日殺す年九十八洛東山長樂寺に葬る夢之舍集等世に行はる

タカハタケ　ソウジラウ　高畠總次郎　水戸の志士なり家世々農を業とす文久元年五月品川東禪寺の英國假公使館を襲ひ遁れて後又平山兵介等が安藤對馬守暗殺の企ありと聞き共に之に與し姓名を變じて相田千之允と稱し文久二年正月十五日同志六人と共に坂下門に闖ふて死す朝廷其志を憫み明治三十五年十一月從五位を贈ちる

タカハタ　タケノブ　田河武整　勤王家なり初め藤五郎と稱し後に藤馬之丞と改む膳所藩士なり父を武比と曰ふ幼にして孤なり母の兄阿閉權左衛門の家に寓す十六歳に及び馬廻役に班し後用人に進み祿百廿石を賜ふ人となり和淳方正義に逃むの風あり文久の初め高橋正功等と尊攘の說を唱へ一藩の汚隆を以て一身の榮辱となす者の如し是より先き天皇大和行幸の詔あり勤王佐幕の論鬱々たり小藩の微力なる唯た勢感の在る處に之れ從ひ動もすれば大義を誤らんとする者あり武整大に此に慨し執政に忠告して曰く方今天下紀綱日に弛み内憂外患交々至る實に多難の秋なり若し事の迷惑決し難きものあらば高橋正功森祐信其人あり毋事これに顧問して決を取らば其れ或は後の悔なからんと川瀨定の因備に遊說するや榊原專藏澤忠嘗村田宗武亦其行を壯として曰く獨等國の爲に家を忘れ身を勞して厭はず其壯烈なる僕も又從ふを欲せざるに非ず唯其一たび脫藩すれば君臣の義絶ゆ故に行を俱にせずと雖も其志は敢て一歩も讓らざる也と慶應元年五月十四日保田正經等と同じく獄に下り其年十月廿一日を以て自裁に處せらる時に年四十八雄新の後男八三郎其後を嗣ぎ祿百石を賜ふ（膳城烈士傳）

タカバタケ　ミカハ　高畑三河　豐後大友の家老佐伯惟教の部下なり惟教大友陣代として合志常陸介を攻む是の時三河一日に十三度の武功あり或人云ふ僅かに刀槍一二會の刺擊すら體羸れ息竭き其の極小兒にも敵する能はざる者なり然るに一日十三度の功

あり驚くべしと三河笑て曰く別に故あるに非ず我が戰場に赴くや死生存亡の間に少しも思慮を耗さず然るを以て人は騒擾しても我は心を動さず常人は慄れ槍を合せ刀を交ふる前に力を強び氣を張るを以て事に臨みて精神頓に脱するなり我は敵に遇ふ時は我が首を授くるか我に首を取るか二者は天命に在りと思定す故に戰合すれば一決に勝負を分ち幾度戰闘に逢ふも胸中晏如たりと(豪勇言行錄)

タカバタケ　ヨシ　高畠佳　陸軍歩兵大尉なり福井縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し歩兵第七聯隊附として從軍中卅七年八月二十一日旅順要塞磐龍山東砲臺に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タカハ　ヒロシ　田川博　陸軍三等軍醫正なり熊本縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て第六師團歩兵第二十三聯隊附として從軍中卅七年十二月二十一日清國盛京省林盛堡に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

タカハタ　フサジラウ　高畑房次郎　水戸の勤王家なり名は胤正常陸國久慈郡小島村の人也其先は千葉常胤より出づ少ふして氣節あり夙に出てゝ交を四方に結び身を以て國事に奔走すること多年文久元年六月廿八日夜水藩有賀半彌等と相圖りて高輪東禪寺英人旅館を襲ふて志を得ず竊に遁れて相馬千之助と變名し翌二年壬戌正月十五日平山繁義等同志の徒の老中安藤對馬守を坂下に襲ふや胤正も倶に其議に與り挺身奮闘して遂に之に殪る年三十二翌三年亥十二月郷里に歸葬す明治三十五年十一月從五位を追贈せらる(維新史料、官報)

タガハ　ホウラウ　田川鳳朗　江戸の俳人なり名は義長嚴島源彌と稱す初め鶯笠庵、對竹と號す熊本の人なり後ち自然堂と號す弘化二年十一月二十八日歿す年八十四(俳家歿故年表)

タカハマ　キブン　高濱季文　江戸の儒者なり字は周輔、龍山と號す姫路侯の文學なり享和四年三月十日歿す麻布曹溪寺に葬る(江戸名家墓所一覽)

タカハマ　テツノスケ　高濱鐵之助　勤王の志士なり諱は正誼字は公道因幡鳥取藩醫の子なり幼より文學を嗜み堀庄次郎の門に入りて經史を修め藩黌の教官に擢てられ後藩命を受けて江戸に遊學し博覽强記を以て稱せらる元治元年京都騒擾するに及び警衛の爲め藩兵を上せ別に有志の一隊を加へしが鐵之助も其中に列せられて禁闕を警衛す慶應二年幕府再び長州を征するや藩論二派に別れ紛擾を極む鐵之助は同志大谷準藏と共に執政に面し長州罪無し是を討つは甚だ義に違へりと論ず更に用ゐられず却て漫に國事を論ぜるの罪を以て問はれんとす親族の輩其禍の一類に及ばんことを懼れ逼つて速に死に就かしむ鐵之助も亦徒に是非を論ずるを屑とせず其年八月三日自刄して死す時に年二十四明治三十一年特旨を以て從五位を贈らる(殉難錄稿)

タガ　ハンイチ　多賀半一　石山流の茶人なり松浦肥前守の門人にして茶道を能くす其歿年詳かならず(茶人系傳全集)

タカバヤシ　ジホウ　高林二峯　書家なり名は信好明治三十年歿す

タカバヤシ　ハウコク　高林芳谷　女書家なり名は轍東京の人椎名文雄に從ひ其法を學ぶ後藤堂高潔の邸に出入す明治維新神田佐久間町に住し技を賣て生活す縉紳の令孃從學する者頗る多し又獨乙人ヘデー孃英國公使某氏の令孃の爲に書法を教授す女史最も花鳥に長ず晩年扇三百本を購ひ表裏共に花鳥を畫く凡て百二十僊に三月にして成る二十七年五月六日歿す年五十五東京谷中瑞林寺中情延寺に葬る(文莊漫錄)

タカハラ　ゲン　高原源　本姓は韓國連、物部と同祖なり其先某武烈帝の時韓國に使するを以て姓を韓國と賜ふ寶龜中遣唐錄事となり歸路海上三狩等と耽羅島に漂著す三狩等島人の爲めに拘へらる源餘衆四十餘人を率ゐて逃れ歸る延曆中外從五位下に至る上表して曰く臣等は物部大連の苗裔なり夫れ物部連等各ゝ地に居て事を行ふに因り別て百八十氏となる是を以て源等の先祖鹽兒父祖の使を韓國に奉ずるの故を以て改て韓國連となす即ち大連の苗裔は是れ日本の舊民なり今韓國と號す反て三韓の新來に似て人聽を驚すのみ地に因て姓を賜ふは古今の通典伏して望らくは改めて高原と賜はらんことをと之を許す(大日本史)

タカハラ　シャウザヱモン　高原庄左衞門　吉種は算術家なり毛利重純の門人一元と號す

タカハラ　トウベヱ　高原藤兵衞　陶工なり肥後國山本郡高原鄕の人慶長年間攝津國能勢郡の山間に來りて陶窯を開き專ら茶器を製出せり徳川家綱藤兵衞を江戸に召し茶碗師となし淺草本願寺の前に一町四方の地を賜ひ窯を開き茶碗を作らしむ之を高原燒又淺草燒ともいふ子孫業を繼ぎ世々平十郎と稱す今高原町と稱する所は即ち其の宅地なりと(陶器考、前田氏筆記)

タカハル　鷹春　鷹成の長子にして讃岐の刀匠文化年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

タカヒサ　リウコ　高久隆古「カウリウコ」

タカヒト　シンワウ　孝仁親王　美仁親王の子なり寛政四年四月生れ文化四年十二月光格天皇の猶子となり五年三月親王となる五年冠を加へて常陸太守に任ぜられ明日二品に叙せられ文政三年六月式部卿に遷り五年三月二品に叙せられ隨身兵仗を賜はる七年二月一品に進められ是の日薨ず時に年三十二、諡して如是相院と號す(一本系圖に大光明院に作る)親王關白政煕の女藤原吉子を納れて妃となし愛仁親王、弘保親王、光子女王を生む(野史)

タカヒト　シンワウ　幟仁親王　韶仁親王の子なり文化九年正月生る親王宣子女王の爲めに養はれ文政五年十一月光格天皇の猶子となり六年九月親王となる十一月冠を加へて上總太守に任ぜられ尋て三品に叙せられ弘化四年八月二品に叙せられ中務卿に遷り隨身兵仗を賜はる親王左大臣齊信の女藤原廣子を納れて妃となす側室佐々氏織仁親王及び信王を生み山西氏幟子女王及び長王を生む一品に進み明治四年隱居同八年十二月勳一等に叙す同十四年二月神道教導職總裁と爲る十五年三月辭免して御親祭御用掛と爲る十九年一月二十四日大勳位に叙す是日薨ず世に有栖川家と曰ふ世々書法を傳ふ親王に至て尤も其の妙を極む

タカヒラ　高平　初名兼若藤原姓辻村氏通稱甚六後越中守と稱す加賀金澤の刀匠にして二世兼若の子寛永二年受領す(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タカヒラ　高平　傳右衞門と稱す加賀の刀匠にして四世兼若の第二子なり延寶年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タカヒラ　高平　備前の刀匠にして應和年間の人或は云信房の子にして永延比の人三平の一なり或は信房の弟なり或は永保比の人にして畠山重忠の太刀の作者なりと(今古鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

タカヒラ　香平　備前福岡の刀匠にして建仁年間の人なり或は云ふ高平と同人なりと(古今鍛冶銘早見出)

タカヒラ　シンワウ　貴平親王　後西院帝の第三子なり母は典侍源氏萬治二年九月生る三宮と稱す寛文九年九月親王となる十一月圓滿院に入りて剃髮し名を永悟と改め敎を大僧正常尊に受く三井長吏となり平等院を兼れ領す延寶四年十一月薨ず年十八法性院と號す三井寺に葬むる(野史)

タカヒラ　シンワウ　高平親王　貞常親王の子なり母は權大納言源重有の女盈子なり後土御門帝の猶子となる文明四年八月親王となり仁和寺に入て剃髮し名を道什と改め後ち道永と改む學を大僧正禪信に受け居を上乘院に移す(野史)

タカヒロ　高廣　出羽米澤の刀匠行廣を看よ

タカヒロ　隆廣　藤原姓左衞門尉と稱す相摸の刀匠にして長祿年間の人或は云助廣の門人にして永正比の人亦陸奥にても造ると又云初代助廣の孫にして助隆の子文安四年生れ永正十四年歿す年七十一或は廣正の子なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

タカヒロ　隆廣　陸奥の刀匠にして助廣の末流寶德比の人なり(本朝鍛冶考)

タカヒロ　高弘　遠江の刀匠にして菅次の子弘安年間の人(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

タカヒロ　高弘　近江高木の刀匠にして貞宗の門人なり延文年間の人或は云建武比の人にして守山に住すと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タカヒロ　高弘　近江守山の刀匠にして天正年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タカヒロ　高弘　亦高廣に作る日向守と稱す近江守山の刀匠にして亦伊勢に住す寛永年間の人或は云建武の高弘が末葉なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タカフヂ　セイギ　高藤正誼　陸軍歩兵少佐なり熊本縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第十三聯隊附として從軍中卅八年二月廿八日清國盛京省孤家子附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タカマガキ　高天神　遠江高天神の刀匠兼明を看よ

タカマサ　高政　京都の俳人なり氏は菅野谷宗因の門人總本寺牛傳連社を起す此れ東府の檀林に對するの意なり友靜、仙菴、如泉等高政に與して宗因の風を弘む之れに因て古風の俳士と爭論交ゝ起る家書中庸姿、俳諧繪合、是天道、三百韵、江戸蹕等あり歿年不詳(俳家大系圖)

タカマサ　ワウ　尊雅王　尊義王の子なり二兄尊秀王、忠義王の害に遇ふ後ち楠正理等尊雅を擁立し神璽を奉じて十津川に潛居す長祿二年六月遷りて吉野に居る小寺性說大和に在り國人越智某小河中務少輔と議し間島衣笠等を率ゐて來襲す尊雅復た十津川に走る八月二十七日夜性說中務等追蹤して掩擊す尊雅傷を被むり吉野北山の高野山高福寺に遁き遂に薨ず謚して高福院と云ふ間島等神璽を奉じて京都に入る南朝の皇胤是に於て絕す(野史)

タカマツ　キンシゲ　高松公重　陸軍歩兵少佐なり東京市出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第一師團歩兵第三聯隊附として從軍中卅七年七月二十六日清國盛京省牧城驛南溝西方高地に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

タカマツドノ　高松殿(高松宮第一世)「ヨシヒトシンワウ」

タカマツ　ノブユキ　高松信行　勤王家なり通稱は平十郎信濃國更科郡若宮村の農父佐五兵衞が次男にして同姓郡大夫が養子なり嘉永年中江戸の塚田孔平が弟子となりて劍術を學び師に代りて諸國を經廻り其門人を督し領主よりも禮遇せられしと云ふ文久二年國に歸り後京都に入り翌年二月廿三日足利尊氏以下の木像梟首の黨に入り事露れ捕へられんとす衣棚二條の寓居に仙石隆明と共に之を拒ぎ戰ひ遂に死す同盟の士三輪田元綱は捕はれて久しく獄中に在り王政維新の初罪を赦されしかば後六年自ら費を抛ちて信行が遺骨を改葬して碑を靈山に建つ朝廷祭粢料金貳拾圓を賜ふ(殉難錄稿)

タカマツノミヤ　高松宮(第三世)「ユキヒトシンワウ」

タカマツヰン　高松院「イモコシンワウ」

タカマノハラ　ヒロヌヒメノ　スメラミコト　高天原廣野姫天皇「ヂトウテンワウ」

タカマ　ロクカフ　高間六甲　畫人なり中江藍江に學びて山水人物を能くす(扶桑畫人傳)

タガミ　カズヲ　田上一雄　陸軍歩兵中尉なり三重縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て第三師團歩兵第三十三聯隊附として從軍中卅七年八月三十一日遼陽戰に臨み首山堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカミ　サウキウ　鷹見爽鳩　田原侯の老職なり名は正長字は子方、爽鳩は其の號、三郎兵衞と稱す三河の人、世々田原侯に仕ふ本姓石川氏、同藩の大夫鷹見定重男なし因て爽鳩を養て嗣子とし妻はすに女を以てす因て鷹見氏を冒す年十六始めて仕へて近侍となり二十一江戸に來て物徂徠の門に入り好みて詩賦を作る詩才逸宕群に超ゆ尤も志を經濟の學に留め和漢の法律、刑名、政書、儀制の類宏通せざるなし初め田原侯國用乏くして士に給する能はず爽鳩之れに當りて遂に富藩の名を致す享保廿年四月十二日歿す年四十六、著はす所詩筌、惑問鈔、爽鳩遺稿等あり一貴紳嘗て徂徠に問ひて曰く弟子經濟に長ずる者を誰れとなすと徂徠答て曰く爽鳩と三浦竹溪なりと其推尊せらるゝ此の如し(先哲叢談、續諸家人物志、鑒定便覽)

タガミ　サトル　田上覺　岡山縣岡山市花畑町の人なり舊岡山藩の士にして藩中の名家なり天資英邁にして果斷深沈にして大度あり夙に敢爲の將校を以て目せらる明治二十七年八月日清事を構へ雞林の野に相見んとするや覺は大尉を以て混成第九旅團に從ひ其の第十一聯隊第二大隊に長として發す轉戰數回各處

の清軍を擊破し平壤城を圍む時に明治廿七年九月十五日の激戰に覺は正面に敵を壓し讃令百出して士卒意の如く進み敵壘數所を蹴破り第二壘に迫る壘高く溝深し敵又た死守して奮戰す我が兵死する者甚だ多し時に覺は劍を揮ひ乘り込めの令を下さんとする一刺那銃丸閃電其の胸を貫く而して平壤城は遂に陷落せり竪十六日遺骸は其の城に入れり而して棺上に置かれたる一札は是陸軍歩兵少佐に任ずるの辭令書なりき

タカミ　セイカウ　鷹見星皐　名は定允字は子允江戸の人なり世々田原侯の家老たり祖父子方より藝學を以て著はる而して星皐能く序を繼て墜さず既に壯にして志し經世に在り訓詁章句を屑とせず胸次恢々小廉曲謹を以て世に媚ぶるを爲さず中歳坐廢し跡を詩酒に寓せ暫に身を終へんとするが如し寛政中に至り侯再び起し職に復す是に於て慨然又報效を圖る夙夜勤勉十有餘年嚮用未だ艾まらず而して文化八年十月三日歿す年六十一城の東北淺草松源寺の塋次に葬る（墓誌）

タカミ　タケトシ　高見武敏　陸軍少兵中尉なり熊本縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し第五師團歩兵第四十一聯隊附として從軍中廿七年十月十六日清國沙河附近戰鬪の際負傷し同二十日大匂病院に於て死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タカミチ　貴道（古今銀冶銘早見出）

タカミチ　貴道（古今銀冶銘早見出）

タカミチ　貴道　源姓大和守と稱す尾張名古屋の刀匠にして美濃の關兼道の流なり明暦年間の人（古今銀冶銘早見出、古今銀冶備考）

タカミチ　貴道　源姓信濃守と稱す尾張の刀匠にして寛文年間の人（古今銀冶銘早見出）

タカミチ　貴道　橋姓陸奥守と稱す尾張の刀匠にして正德年間の人（古今銀冶銘早見出）

タカミツ　高光　大和の刀匠にして元龜年間の人（古今銀冶銘早見出）

タカミツ　高光　美濃生村の刀匠にして天正年間の人（古今銀冶銘早見出）

タカミツ　高光　備前の刀匠にして永保年間の人或は云高重の子にして承暦或は久安仁平年間の人なりと（古今銀冶銘早見出、本朝銀冶考）

タカミツ　高光　備前長船の刀匠にして明德應永年間の人（古今銀冶銘早見出、古今銀冶備考）

タカミツ　高光　備後の刀匠にして貞治年間の人（古今銀冶銘早見出）

タカミツ　高光　備後三原の刀匠にして永正年間の人（古今銀冶銘早見出）

タカミツ　貴光　備前長船の刀匠にして應永年間の人（古今銀冶銘早見出）

タカミツ　貴光　長船平右衛門尉と稱す備前の刀匠にして永正、天文年間の人（古今銀冶銘早見出、古今銀冶備考）

タカミツ　香光　備前長船の刀匠にして至德年間の人（古今銀冶銘早見出）

タカミツ　孝滿　大江氏山城愛宕郡東山の人に して勅名美平後孝滿と改め文慶隆と更む年代詳ならず或は云美平の族なりと（古今銀冶銘早見出、古今銀冶備考）

タカミツ　孝滿　三河藥王寺久原の人にして古刀の鍛工なり或は云ふ文明比の人吉光の別名なりと（古今銀冶銘早見出、古今銀冶備考）

タカミツ　隆光「アハタダチタカミツ」

タカミムスビノカミ　高御產靈神　一に高木神又神漏岐神とも稱せり天之御中主神生るゝの後生るゝ所の獨化の神なり天地間の物を生ずるの靈德あり故に名づく一說に曰ふ此の神一に神漏岐命の名あるを以て其の男子なるを知るべし天照大御神を輔けて高天原の政を司る（古事記）

タカムクラ　サダヒサ　高宮貞久　陸軍歩兵少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第一師團後備歩兵第二聯隊附として從軍中三十八年七月二十六日清國盛京省三台子にて病に罹り同八月十八日奉天兵站病院に於て病死す

タカムクラ　クロマサ　高向玄理　武田宿禰の後裔なり其の先猪子は武田に於て六世の孫なり始て姓高向を賜ふ玄理初め高向漢人と稱し又黑麻呂と名す嘉吉の亂結城城滿廣の子滿藏を擁して此に逃ぶ風間孫右衛門等をして卒三百に檄し之を皮らしめ以て下要に備ふ重經策を廻らし飯沼の土豪を餌とし形勢を搜問す而して後將三百を率ゐて岡田原に次し衆を攻むるの勢に擬す敵二百出でゝ花島に屯し衆を欺ふ重經兵を分ち鬼奴川の下を經て乾の方より敵の中路を截つ又た古間木人渡邊周防守飯沼の土豪を率ゐ七連邑を踰え渦田の衆を蹙く成兵皆な蟻く花島の敵向背兵に遇ひて潰え走る重經北るを逐て追擊す得る所の者多し遂みて城門に乘じて入る成兵僅かに百人計り艇に乘じて關宿に逃走す是を以て猿島の地悉く歸服す初め重經軍を發し勝を天神洞に祈る他日神洞を修造し鏡銀を納て其の恩に報ゆ天正四年夏政經卒す重經人を小田原に遣し氏政の父子と成ぎを行ふ重經蛇沼の敗を懲侮し再び豐田城を攻め辱を雪がんと欲す經家諫て止む乃ち盟書を送て和を乞ふ治親之を諾す後治親の家人飯見大膳每に雷洞を崇信し重經の家人白井全洞亦た之れを信ず屢々詣て二人終に相謀となり姻好を全洞に鎖ず是に於て全洞驀に重經を勸め陽はに和して虛隙を狙ひ豐田氏を滅さんと欲し之を大膳應諾す天正五年七月大膳治親を私第に迎へ饗するに鷄肉を以てし酒闌なるに迨び て馬を繞ら慇懃せしめ虛に乘じて治親を刺し之を誠す而して來り降る重經其の不義を惡み首を縛して而して徇ふ治親の弟右七郎氏親舊故と興に其城に據て拒禦す全洞之を攻めて拔けず會々霖雨し鬼奴川鬱銅川水漲り堤を截ち水を城に注ぐ城中衝蹙き氏親自殺す重經子荒千代を以て豐田の城主となす是の秋下要の士渡邊正根等黑子原に獵し水谷氏と爭鬪し彼れ是れ捷を發し不動坂に相ひ擊ち後ち和平す天正七年四月重經使を遣し劍及び星騮馬を右府信長に獻ず馬の長四寸八分日に行くと五十里信長酬ゆるに黃金衣服を以てし銀を使者に賜ふ梶原景國城に據り近境を侵略す是の月重經家等八百を率ゐ景國と山木に戰ひ而して決せず十一月に迨びて兵を收む天正八年四月復た小田城を攻む景國の弟平馬允篠碕に迎へ戰て利を得其夜景國水を踰て來り襲ふ重經克たずして歸る牛久の城主尾上治

す二年新羅に使し其實を徵し任那の調を罷めしむ年を踰て還る新羅上臣大阿湌金春秋をして之を護送せしむ因て春秋を以て賓となす五年曾晏同と詔を受けて八省百官を讓す尋て大錦上となる白雉五年遣唐押使となりて大使河邊麻呂と唐に赴く漂流數日道を新羅に取り薬州に泊し遂に長安に入りて高宗に見え琥珀璃瑙を獻ず東宮監門郭文學蟲朝の奧地國初神名を歷問す之に答ひて潤飾雄辯我が國華を墜さずと云ふ留連數月唐に卒す時に高宗の永徽九年なり（大日本史、日本儒林傳）

タカムラ　シャウザウ　高村省三　陸軍歩兵少尉なり東京府出身にして明治廿七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ第一師團歩兵第三聯隊附として出征し旅順攻圍軍に加り廿七年八月廿一日水師營南端高地に戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカムラ　セイヂ　高村誠治　陸軍歩兵中尉なり福井縣出身にして明三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第三十六聯隊附として從軍中廿八年二月廿八日清國盛京省地塔附近戰鬪の際負傷し同三月三日後備第一師團第四野戰病院に於て死亡す戰功に依り勳九等功五級に叙せらる

タカムラ　ワキウ　高村和及　京都の俳人なり名は常長雛屋立圃に從ひて露吸庵直唱の號あり元祿五年正月十八日歿す年四十四（俳家畸人譚、俳家歿故年表）

タカモチ　ワウ　高望王　葛原親王の孫高見王の長男從五位下上總介に叙爵の後初めて平朝臣を賜ふ是伊勢平氏の元祖にして六波羅織田北條以下數氏の出る處たり

タカモト　高基　陸奥の刀匠にして正應年間の人或は云亦出羽に居ると又云正壽の子にして延久比の人或は法華經太郎の弟にして我里と同人なり或は文保建長に同名ありと（古今銀冶銘早見出、本朝銀冶考、古今銀冶備考）

タカモト　高本　越前の刀匠にして元祿年間の人（古今銀冶銘早見出）

タカモト　上基　因幡の刀匠にして曆應年間の人或は云延慶年間の人にして吉正の門人なりと（古今

銀冶銘早見出、本朝銀冶考）

タカモト　上基　因幡の刀匠にして康正文明年間の人或は云嘉吉年間の人と（今古銀冶銘早見出、古今銀冶備考、本朝銀冶考）

タカモト　ジュン　高本順　熊本の儒者なり字は子友本氏は原田、鷹員高本氏に養はる因て其姓を冒す高本氏の先は朝鮮王族李宗閑文祿の役に獲られて來ると云ふ因て以て李とし紫溟と號す數年國學の助教たり終に孤山に代て教授に陞る又好みて和歌を詠ず文化十年歿す年七十八（鑑定便覽）

タカモリ　タカモリ　隆盛「トサタカモリ」

タカモリ　セイイン　高森正因　醫者なり紀伊の人寂庵と號す出でゝ伏見に居る北山道長と時を同うす道長特に其の能を推す高取侯疾あり正因を招くに至れば則ち紹ず正因嘆じて曰く遠方急に赴く及ぶなきを如何せん然りと雖も願くは一診以て吾志を慰めんと之を勸す正因出でゝ曰く吾尚見る所ありと乃ち藥を取り口中に納る衆與にして侯蘇す從ひて調理を加へ疾卒に愈ゆ衆驚き讃して以て神となす寛永中比歲因數道饉相望む正因勝平散を製し普く鄰民を濟ふ性淡泊少より佛を奉じ終身娶らず素齋讀經蕭然自ら怡む獨り國歌を好み暇には則ち吟咏す嘗て賦する處の歌廿首寶元上皇に上る上皇之れを嘉みし號を東關亭と賜ふ時人歌溪す（皇國名醫傳）

タガヤ　アンテイ　多賀谷安貞　德川幕府の隱下なり通稱源藏、樂山と號す、上野の人父安命醫を善くす安貞其術を傳ふ尤も腹診に精し然れども醫を樂とするを喜ばず親戚の疾あると貧因醫を請ふ能ばざるとに逢へは則ち爲めに之を療す他の治を求むる者あれば皆辭す幕府に仕へ銃隊興力となる能く砲術に長ず文化元年歿す年七十一著はす所腹診祕訣あり（皇國名醫傳）

タガヤ　イヘシゲ　多賀谷家重　尊經の子なり父に繼て下總守と稱し下要城に治す國上杉に屬し赤松祐光を して若江島を攻めしめ城主十郎氏忠を獲天文七年北條氏康爾上杉氏と河越に戰ひ之に克ち家重を誘ひ降す聽かず氏康晉谷隱岐守をして家重の采邑を侵掠せしむ家重天文二十三年秋卒す子重政（野史）

タガヤ　ウヂイヘ　多賀谷氏家　常陸の人姓は平氏金子家忠の二男其先家政武州埼玉郡木四の莊多賀谷の地頭となり左衛門尉と稱し族を多賀谷と稱す家政の七世政朝女ありて男なし結城滿廣の子滿藏を養ひ女に配し嗣となし氏家を生む氏家初め彦四郎と稱す嘉吉の亂結城氏朝に從ひ常陸に奔る享德三年十一月足利成氏來り上杉憲忠を鎌倉西御門に伐ち憲忠の首を獲成氏命じて憲忠の首を函にし管領たるを以て故に鎌を藉き氏家兄弟を鎌上に引きて之を檢せしめ氏家を賞するに常陸の田を以て改めて左近大夫と稱す康正元年正月成氏上杉顯房と戰て利あらず鎌倉を去り古河城に入る氏家請て常陸に歸り養子高經をして成氏に屬せしむ尋て氏家梁田正氏に潛り北毛邑に入り城戶入道々光を說く正氏氏家を勸めて兵を起し道光の不忠を之を殺し其資財を取り城郭を修營す寛正元年落成し治す實に下要城なり寛正六年九月卒す年五十八法名は天籟禪永、子尊經嗣く（野史）

タガヤ　カウリャウ　多賀谷向陵　江戶の書家なり名は爽之字は伯華通稱は貞吉江戶の人書を以て知らる（鑑定便覽、經墓所一覽）

タガヤ　シゲツネ　多賀谷重經　初め大二郎と稱し後修理大夫と改む父政經繼で下要城を保つ重經武を布き强借也頻年結城氏に叛き專橫を恣にし鄙邑を掠奪し六千貫の地を獲たり（一說に一萬八千貫）永祿三年山東流尊す上杉謙信關宿城を攻む結城壬生等の國人北條氏康に通じ鬼鹿備守禦す重經欺なく壬生等の國人を誘ひ降す聽かず氏康晉谷隱岐守をして家重の采邑を侵掠せしむ家重天文二十三年秋卒す子重政（野史）

タガヤ　ウヂイヘ　多賀谷氏家　常陸の人姓は平氏金子家忠の二男其先家政武州埼玉郡木四の莊多賀谷の地頭となり左衛門尉と稱し族を多賀谷と稱す家政の七世政朝女ありて男なし結城滿廣の子滿藏を養ひ女に配し嗣となし氏家を生む氏家初め彦四郎と稱す嘉吉の亂結城氏朝に從ひ常陸に奔る享德三年十一月足利成氏來り上杉憲忠を鎌倉西御門に伐ち憲忠の首を獲成氏命じて憲忠の首を函にし管領たるを以て故に鎌を藉き氏家兄弟を鎌上に引きて之を檢せしめ氏家を賞するに常陸の田を以て改めて左近大夫と稱す康正元年正月成氏上杉顯房と戰て利あらず鎌倉を去り古河城に入る氏家請て常陸に歸り養子高經をして成氏に屬せしむ尋て氏家梁田正氏に潛り北毛邑に入り城戶入道々光を說く正氏氏家を勸めて兵を起し道光の不忠を之を殺し其資財を取り城郭を修營す寛正元年落成し治す實に下要城なり寛正六年九月卒す年五十八法名は天籟禪永、子尊經嗣く（野史）

タガヤ　カウリャウ　多賀谷向陵　江戶の書家なり名は爽之字は伯華通稱は貞吉江戶の人書を以て知らる（鑑定便覽、經墓所一覽）

タガヤ　シゲツネ　多賀谷重經　初め大二郎と稱し後修理大夫と改む父政經繼で下要城を保つ重經武を布き强借也頻年結城氏に叛き專橫を恣にし鄙邑を掠奪し六千貫の地を獲たり（一說に一萬八千貫）永祿三年山東流尊す上杉謙信關宿城を攻む結城壬生等の國人北條氏康に通じ鬼鹿備守禦す重經欺なく壬生等の國人を誘ひ降す聽かず氏康晉谷隱岐守をして家重の采邑を侵掠せしむ家重天文二十三年秋卒す子重政（野史）

へ戰ふ重經の軍敗れて還る初め關宿城陷るの後猿島郡北條氏に屬す是の年北條氏政伊勢貞運をして湯田榮を修め租稅を收め火を縱ち抄暑し榮を飯沼の莊に築き糧を此に運ぶ風間孫右衛門等をして卒三百に檄し之を皮らしめ以て下要に備ふ重經策を廻らし飯沼の土豪を餌とし形勢を搜問す而して後將三百を率ゐて岡田原に次し衆を攻むるの勢に擬す敵二百出でゝ花島に屯し衆を欺ふ重經兵を分ち鬼奴川の下を經て乾の方より敵の中路を截つ又た古間木人渡邊周防守飯沼の土豪を率ゐ七連邑を踰え渦田の衆を蹙く成兵皆な蟻く花島の敵向背兵に遇ひて潰え走る重經北るを逐て追擊す得る所の者多し遂みて城門に乘じて入る成兵僅かに百人計り艇に乘じて關宿に逃走す是を以て猿島の地悉く歸服す初め重經軍を發し勝を天神洞に祈る他日神洞を修造し鏡銀を納て其の恩に報ゆ天正四年夏政經卒す重經人を小田原に遣し氏政の父子と成ぎを行ふ重經蛇沼の敗を懲侮し再び豐田城を攻め辱を雪がんと欲す經家諫て止む乃ち盟書を送て和を乞ふ治親之を諾す後治親の家人飯見大膳每に雷洞を崇信し重經の家人白井全洞亦た之れを信ず屢々詣て二人終に相謀となり姻好を全洞に鎖ず是に於て全洞驀に重經を勸め陽はに和して虛隙を狙ひ豐田氏を滅さんと欲し之を大膳應諾す天正五年七月大膳治親を私第に迎へ饗するに鷄肉を以てし酒闌なるに迨びて馬を繞ら慇懃せしめ虛に乘じて治親を刺し之を誠す而して來り降る重經其の不義を惡み首を縛して而して徇ふ治親の弟右七郎氏親舊故と興に其城に據て拒禦す全洞之を攻めて拔けず會々霖雨し鬼奴川鬱銅川水漲り堤を截ち水を城に注ぐ城中衝蹙き氏親自殺す重經子荒千代を以て豐田の城主となす是の秋下要の士渡邊正根等黑子原に獵し水谷氏と爭鬪し彼れ是れ捷を發し不動坂に相ひ擊ち後ち和平す天正七年四月重經使を遣し劍及び星騮馬を右府信長に獻ず馬の長四寸八分日に行くと五十里信長酬ゆるに黃金衣服を以てし銀を使者に賜ふ梶原景國城に據り近境を侵略す是の月重經家等八百を率ゐ景國と山木に戰ひ而して決せず十一月に迨びて兵を收む天正八年四月復た小田城を攻む景國の弟平馬允篠碕に迎へ戰て利を得其夜景國水を踰て來り襲ふ重經克たずして歸る牛久の城主尾上治

部大輔岩崎の城主唯越入道尾張守板橋の城主月岡玄蕃小張の城主唯越入道全久等北條氏に通じ急に谷田部城を攻む多賀谷政伯急を告げ重經兵を募り將さに發せんとす政伯の子經明年廿一單騎馳せて敵軍に入り血戰すふ重經乃ち驅せて奮戰し進戰して之を卻け遂に城壘を復し弟重康をして之を守らしめ爲めに富塚を築き而して兵を旋へす後重經佐竹義重の五男を取り養ひて子となし妹を以て之に妻す是を家宣となす初め祖重政の女義重に配す重經の妹義重の子義宣に嫁し重綱を結び親交益〻厚し天正十年重經兵を率ゐ唯越入道全久を小張城に伐つ城固く拔けず援を義重に乞ふ義重梶原景國をして騎三百を率ゐ之を援けしむ重經前門より景國後門より攻擊し全久終に戰死す城陷る景國の弟太田資武時に年十五初陣に功を樹つ重經河田平井田等をして小張城を守らしめて歸る又兵を發し尾上中務大輔を足高城に攻め已に羅城に乘ず高城胤則小金より豐島時安市川より尾上治部大輔ほ牛久より若柴民部少輔は若柴より城後の援をなす重經退兵を擇み城西南河流の間道より猿布高山を歴て瘴疾郭に入り將に牙城に乘ぜんとす城兵矢石を投じて防禦す重經剛勇にして奮鬪し自ら殿して繰引して還る十二年六月重經子忠經及び經家政頼政季治久宇久野盛重等を率ゐ牛久城を攻む岳見保莫由良光茂と議し謀を設けて迎へ戰ふ重經利あらずして還る再び牛久足高を攻め戰ふ毎に利あらず十三年重經使を遣し初雁を關白秀吉に獻ず是の年北條氏政氏直皆川に次し將に佐竹義宣を攻めんとす義宣上乃川に陣す重經鬼奴川の下流に軍し交戰して去る重經兵を遣し府中を攻め高須奮奮に陣す接戰すること數日城主行方修理樂備す白井全洞夜火箭を縱ちて城舍を延燒す修理及び尾上治部藥師奮に逃れ避て全洞進て火を縱ち悉く堂塔門櫓を焚く修理又遁走す重經板橋城を圍み之を下す營を大田郷に構へ岩崎及び足高城を攻め終に之を下す針碕の築を築き牛久城に迫り管襲ひて之を下し又布引小金夢の邊境を掠暑し兵威自ら張る又相馬胤仲を筒戸城に攻む白井全洞先鋒となり守谷の城主相馬胤信後援となる全洞兵を轉じて之と戰ひ傷み敗り兵敗れて歸る十六年の春氏政氏直師三萬を發し火を縱ち鄙邑を侵掠す小金、千葉、印旛、小見川、江戸崎、小原等の諸城を攻め之を拔く進み土浦城を攻む城主菅谷重政力竭て走る足高の城主由良々光拒ぎ戰ひ克たずして去る岳見保寛も亦牛久城を棄て走る忠經豐田城を守る相軍の至るを聞き政伯望み見て城を出て敵ひ戰ふ父子俱に斃る敵城を奪ふ重經乃ち驅せて奮戰し進戰して之を卻け遂に城壘を復し弟重康をして之を守らしめ爲めに富塚を築き而して兵を旋へす後重經佐竹義重の五男を取り養ひて子となし妹を以て之に妻す是を家宣となす初め祖重政の女義重に配す重經の妹義重の子義宣に嫁し重綱を結び親交益〻厚し天正十年重經兵を率ゐ唯越入道全久を小張城に伐つ城固く拔けず援を義重に乞ふ義重梶原景國をして騎三百を率ゐ之を援けしむ重經前門より景國後門より攻擊し全久終に戰死す城陷る景國の弟太田資武時に年十五初陣に功を樹つ重經河田平井田等をして小張城を守らしめて歸る又兵を發し尾上中務大輔を足高城に攻め已に羅城に乘ず高城胤則小金より豐島時安市川より尾上治部大輔ほ牛久より若柴民部少輔は若柴より城後の援をなす重經退兵を擇み城西南河流の間道より猿布高山を歴て瘴疾郭に入り將に牙城に乘ぜんとす城兵矢石を投じて防禦す重經剛勇にして奮鬪し自ら殿して繰引して還る十二年六月重經子忠經及び經家政頼政季治久宇久野盛重等を率ゐ牛久城を攻む岳見保莫由良光茂と議し謀を設けて迎へ戰ふ重經利あらずして還る再び牛久足高を攻め戰ふ毎に利あらず十三年重經使を遣し初雁を關白秀吉に獻ず是の年北條氏政氏直皆川に次し將に佐竹義宣を攻めんとす義宣上乃川に陣す重經鬼奴川の下流に軍し交戰して去る重經兵を遣し府中を攻め高須奮奮に陣す接戰すること數日城主行方修理樂備す白井全洞夜火箭を縱ちて城舍を延燒す修理及び尾上治部藥師奮に逃れ避て全洞進て火を縱ち悉く堂塔門櫓を焚く修理又遁走す重經板橋城を圍み之を下す營を大田郷に構へ岩崎及び足高城を攻め終に之を下す針碕の築を築き牛久城に迫り管襲ひて之を下し又布引小金夢の邊境を掠暑し兵威自ら張る又相馬胤仲を筒戸城に攻む白井全洞先鋒となり守谷の城主相馬胤信後援となる全洞兵を轉じて之と戰ひ傷み敗り兵敗れて歸る十六年の春氏政氏直師三萬を發し火を縱ち鄙邑を侵掠す小金、千葉、印旛、小見川、江戸崎、小原等の諸城を攻め之を拔く進み土浦城を攻む城主菅谷重政力竭て走る足高の城主由良々光拒ぎ戰ひ克たずして去る岳見保寛も亦牛久城を棄て走る忠經豐田城を守る相軍の至るを聞き者を合し之を小野子鑑に埋む是を美女塚と云ふ元和四年十一月彦根に卒す法名は覺心祥圓、安養院と號す子三經宣家、三經本名は忠經小字は虎千代改て大二郎と稱し左近大夫と更む天正五年豐田城に居て父と協はず結城氏に遷る天正十七年父の采邑を割食し太田城に居る後ち三成の諱字を受け今名に更め越前に轉す慶長十二年秋越前に死す子孫繼て越前に仕ふ宣家實は佐竹義宣の三男初字彦太郎重經の妹に配し養子と爲る下妻城に居り修理大夫と稱す庚子の亂罪を獲て籍殺せられ佐竹氏に在り

タカヤス　高安　備前の刀匠にして元暦比の人或は云承暦比の人或は吉氏の門人にして延久比の人或は天承比の人にして助包の子なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タカヤス　高安　備前の刀匠にして後鳥羽中に移住す建仁年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タカヤス　高安　薩摩波平の刀匠にして明德年間の人（古今鍛冶銘見早出）

タカヤス　オホシマ　高安大島　和銅寶龜間の人なり和歌を善くするを以て知らる（萬葉集作者覆歴）

タカヤス　キソウ　高安龜叟　本名を金春泰三と云ふ能樂大鼓の名手なり家世々高安流太鼓の家元たり少壯の頃早く既に妙手の聞えあり金春流太鼓の家元金春惣右衛門恕翌して養子と爲し金春泰三と改名せしめ尚も深く斯道を研鑽せしめたり明治維新の後能役者にして職を失ひ祿を離れて父子兄弟離散するものあるに際し獨り泰三は實家の如主を助け自ら高安龜叟と名乘りて各流の能舞臺に出勤せり明治三十六年十一月十九日腦溢血症にて死去す年六十四青山墓地に葬る法號を金春院泰順日三居士と云ふ

タカヤス　タネマロ　高安種麻呂　和銅

寶龜間の人なり和歌を善くするを以て世に其の名を知らる（萬葉集作者覆歴）

タカヤス　ユウタラウ　高安雄太郎　能樂狂言師なり舊幕府お抱狂言師大藏八右衛門流家元高安其左衛門の長男なり十六歳の時甫めて父と共に芝公園能樂堂へ出づ後教育界に身を委れ淺草馬道四丁目淺草學校の教員となり十六箇年間教鞭を執れりその技藝山本東次郎と相對峙して婉轉滑脫の藝風を以て斯界を賑はせり明治三十九年十二月八日病を以て逝く

タカヤ　スキセツ　多賀谷醉雪　畵師なり名は驥字は仲德一窓と號す谷稱丈七書畫向陵の子にして四谷左門町に住せり文化頃の人（諸家人名錄）

タカヤ　タカツネ　多賀谷尊經　本名は高經氏家の第氏經の子なり氏經養ひて嗣と爲し下總守と稱し下妻城に治し足利成氏に屬す應仁元年上杉顧房を伐つ而て克たず文明三年兩上杉雄を爭ひ成氏隙に乘じ兵を古河に起す太田道灌先驅して之を攻む二日にして而して之を拔く成氏下妻城に逃れ去り尊字を授けて名を尊經と更む謚て成氏千葉に徙り千葉康胤之を迎ふ尊經の子家植左近大夫と稱し成氏に屬し行田宮內下栗常樂寺等の寨を攻めて之を拔き豐田及び奮城を取り威武稍〻震ふ大永七年秋卒す家重嗣ぐ（野史）

タカヤ　チカブミ　高屋近文　和學者なり敏驗窩と號す大に神典を研究して徒を延き教示す又た博く國史を涉獵す（鑑定便覽）

タカヤ　トモスケ　高屋友助　京都の歌人なり詠歌を以て專門とし徒に授く（鑑定便覽）

タカヤナギ　タダヨ　高柳直夫　海軍少佐なり佐賀縣の出身にして夙に海軍人養成所なる知新會に入り明治廿九年海軍兵學校を卒へ後果進して海軍大尉に至り秋津洲砲術長に補せらる明治廿七八年日露戰役起るや前職を以て從軍し第三師旅順閉塞の擧あるに際し自ら請ふて決死隊に入り、閉塞船江戸丸指揮官として卅七年五月三日の決死作業に從事中敵の巨彈に中り壯烈なる戰死を遂げたり時に年二十七戰功に依り少佐に昇任し勳四等功五級に叙せらる

タカヤナギ　ホリ　高楊浦里　佐賀藩の儒者にして名は棗字は子廸古賀精里に從うて學び藩校の教授となり學政を振張す文政三年六月十六日歿す年五十五（日本教育史資料）

タカヤナギ　ヨシエ　高柳義衛　陸軍少兵中尉なり富山縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て歩兵第三十六聯隊附として出征年中卅七八月二十日旅順要塞龍眼北方角面堡壘に於て戰死す戰功に依り六等功五級に叙せらる

タカヤマ　カンエモン　高山勘右衛門　茶道を能くするを以て世に名あり利休と同時の人（茶道名物集）

タカヤ　マサツネ　多賀谷政經　家重の孫重政の子なり重政本名は光經父の後を繼で彦太郎修理大夫と稱す疾あり家事を政經に委ぬ政經下總守と稱す下妻城に居り永祿元年宍戸の城主平太夫友仲來り服す七年北條氏久佐野に次し政經を招く疑かず元龜元年克たず六月政經上野の八崎を以て嚮導となし兵三百を率ゐ將さに眞壁城を攻んとす途に眞壁道夢に遇ひ興に戰て政經の士安西幸盛之に死す利あらずして還る元龜二年谷田部城を攻て之を下し多賀谷政伯をして之を守ふ長房才畧あり前田利家重く之を用ひ一萬五千石を給す金澤其他の城垣を修す其の築城學に長ずるを以てなり後ち長房猶ほ耶蘇教を信じて悛めず因て慶長十九年三月邪宗を改めざるの罪に坐して遂に マニラに追放せらる其冬疾にかゝりて卒す或は曰く天正十三年三月長房根來の賊寇を濱城に攻め十五年五月秀吉に從て薩を伐つ其の他小牧、羽黑、小田原及び征明の役亦皆な軍に從ふ而して庚子の役起るや殊に德川家康に屬す千利休に從て茶事を學び南坊と號す七高足の一なり（加賀藩史稿、野史、茶人系傳全集）

タカヤマ　ホクメイ　高山北溟　書家なり名は尙賢平助と稱す安永六年八月二十五日歿す淺草新寺町瞥願寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

タカヤマ　マサユキ　高山正之　字は仲繩彦九郎と稱す上野新田郡細谷村の人なり其先遠江守某建武の亂新田氏に屬す新田氏滅ふるに及びて其裔遂に微にして民間に在り然れども其鄕里の舊姓たるを以て猶ほ常に雙刀を佩ぶ官亦た之を禁ずるもなし父を良

七十二

タカヤマ　ナガフサ　高山長房　一に友祥と曰ふ右近大夫と稱す攝津の人、高槻城に居り資性剛勇にして耶蘇教を崇信す初め大阪一向の徒に與みし荒木村重と謀を通じて織田信長を拒ぐ天正六年十一月信長攝津を畧して鄰山に次し長房の平生信ずる處の僧伴天連を以て長房を諭さしめて曰く聞くが如くんば汝は耶蘇の徒となりて賊兵を援くと是れ其の宗教の許す所なるか宜しく逆を去りて順に歸すべしと是に於て長房罪を謝し實を獻じ往て信長に謁す信長乃ち芥河城を以て長房に與ふ十年五月長房高槻に歸り將に往て羽柴秀吉と山陽に援けんと欲して軍旅を整ふ六月信長弑に遇ひ秀吉軍を旋へして尼崎に到り諸將を會して秀吉の決に依りて長房之に任じ進みて山崎に到り先登して賊の先隊と奮戰して之に克ち賊將明智光秀終に敗績す一年四月長房柳瀨の寨を守る中川清秀の寨佐久間盛政の爲めに襲はれ清秀之に死す長房焰火の擧を望見し大に恐怖して所を失ひ逃げて羽柴秀長の木本寨に入る秀吉其の怯懦なるを怒りて城邑を奪ひ之れを加賀に逐ふ長房才畧あり前田利家重く之を用ひ一萬五千石を給す金澤其他の城垣を修す其の築城學に長ずるを以てなり後ち長房猶ほ耶蘇教を信じて悛めず因て慶長十九年三月邪宗を改めざるの罪に坐して遂に マニラに追放せらる其冬疾にかゝりて卒す或は曰く天正十三年三月長房根來の賊寇を濱城に攻め十五年五月秀吉に從て薩を伐つ其の他小牧、羽黑、小田原及び征明の役亦皆な軍に從ふ而して庚子の役起るや殊に德川家康に屬す千利休に從て茶事を學び南坊と號す七高足の一なり（加賀藩史稿、野史、茶人系傳全集）

タカヤマ　ナガフサ　高山長房　一に友祥と曰ふ右近大夫と稱す攝津の人、高槻城に居り資性剛勇にして耶蘇教を崇信す初め大阪一向の徒に與みし荒木村重と謀を通じて織田信長を拒ぐ天正六年十一月信長攝津を畧して鄰山に次し長房の平生信ずる處の僧伴天連を以て長房を諭さしめて曰く聞くが如くんば汝は耶蘇の徒となりて賊兵を援くと是れ其の宗教の許す所なるか宜しく逆を去りて順に歸すべしと是に於て長房罪を謝し實を獻じ往て信長に謁す信長乃ち芥河城を以て長房に與ふ十年五月長房高槻に歸り將に往て羽柴秀吉と山陽に援けんと欲して軍旅を整ふ六月信長弑に遇ひ秀吉軍を旋へして尼崎に到り諸將を會して秀吉の決に依りて長房之に任じ進みて山崎に到り先登して賊の先隊と奮戰して之に克ち賊將明智光秀終に敗績す一年四月長房柳瀨の寨を守る中川清秀の寨佐久間盛政の爲めに襲はれ清秀之に死す長房焰火の擧を望見し大に恐怖して所を失ひ逃げて羽柴秀長の木本寨に入る秀吉其の怯懦なるを怒りて城邑を奪ひ之れを加賀に逐ふ長房才畧あり前田利家重く之を用ひ一萬五千石を給す金澤其他の城垣を修す其の築城學に長ずるを以てなり後ち長房猶ほ耶蘇教を信じて悛めず因て慶長十九年三月邪宗を改めざるの罪に坐して遂に マニラに追放せらる其冬疾にかゝりて卒す或は曰く天正十三年三月長房根來の賊寇を濱城に攻め十五年五月秀吉に從て薩を伐つ其の他小牧、羽黑、小田原及び征明の役亦皆な軍に從ふ而して庚子の役起るや殊に德川家康に屬す千利休に從て茶事を學び南坊と號す七高足の一なり（加賀藩史稿、野史、茶人系傳全集）

右衛門と曰ふ膂力人に過ぐ毎れに出づるに必らず僕をして弓矢を負はしめ數〻山野に遊獵して猛獸を絡殺す時人其の勇を稱す正之幼にして孤となり祖母の爲めに鞠はる年甫めて十三太平記を讀みて中興の忠臣志業の遂げざるを見て慨然として憤りを發し頗ぶる功名の志あり年十八にして京都に遊び書を讀むこと二歳乃ち出でて都下の書生を見、交通日々に廣く名聲籍くこと甚だし高門巨室多く布衣の交を爲す名刹中山大納言も亦た其人と爲りを奇として善く之を遇す是に於て正之餘を杖て四方に周遊し至る所必らず賢豪長者と交はる此時に當りて田沼氏政を江戸に執り風俗大に敗れて修靡日に甚はだし識者竊かに之れを憂ふ正之乃ち上野に歸る正之長け八尺餘（或は謂ふ短小と）にして鬚髯神の如く高邁にして奇節あり議論英發忠誠にして人を動かす嘗て室直清論する所の著を見て其稍公召に應じて直ちに笠置に造るを以て度量足らずと爲し諸葛亮三顧して乃ち廬を出づるの事を引き以て之を譏するに至りて憤然として罵りて曰く麈儒何ぞ事を論ずる可けんや漢の末天下分裂して豪傑竝び起る此時に當りて劉玄德は故と履を曳り席を織るの人自ら稱して漢室の冑と曰ふ豈に能く其眞妄を辨ぜんや亦た猶ほ今世の奴婢輩の號して源平と稱し以て自ら誇る者のごとし孔明の三顧して出づるは我心に於て猶ほ以て速やかなりとす百顧二百顧を累ぬると雖も猶ほ未だ毅と爲さず楠公の如きは則ち異なり夫れ我が國躰なる天朝は神の在る所六合の仰ぐ所開闢以來神聖相承け皇統一姓之を無窮に傳ふ尊天の下率土の濱孰れか皇民に非ざらんや而して楠公は則ち廷臣の裔近畿の民なり召命なしと雖も豈に國家の難を見て恬然自ら安んぞ可けんや天皇塵を蒙ると聞き奮然秣を投じて起つ安んぞ彼諸葛瑾の爲すに傚ふを得んや書を讀む是くの如くなれば百萬卷と雖も何の益かあらんと其書を取りて之を堂下に投ず天明季年京都災す正之之を聞き晝夜兼行して驅せて京に赴く夜木曾山中を過ぐ賊數人あり刀を拔て正之を脅かさんと欲す正之目を瞋らして叱して曰く汝ち上野の高山彦九郎を知らざる乎今未天闕災ありと聞き驅せて之に赴く汝輩豈に我刃を汚さんやと賊皆慴伏す後ち巨賊大阪の獄に繫がれ自から誥りて云ふ平昔未だ嘗て恐怖せることあらず嘗て木曾山中に在りて人を襲して刼を爲す一丈夫の目を瞋らして我を叱するに遇ふ之を憶へば今ま尚ほ股栗するがごとし彼れ自ら呼ぶ高山某と豈に所謂ゆる天狗なる者ならん乎と此時田沼氏既に艷め白川侯之に代りて政を執り改正する所多し之より先き正之嘗て祖母の憂に遊び鞠養の恩あるを以て再期の喪に服せんと欲す其見之を止む正之鑑かず叔父長蔵と與に冢側に廬すること三年郷邑之を稱す事江戸に聞え有司之を旌さんと欲す會〻正之を害せんと欲する者あり兄に友ならずと誣告す有司も亦た其人の異常なるを以て召して之を詰りて曰く庶民刀劍を帶ぶるは國に定制あり汝ち猥獻の中に在りて雙劍身を離さざるは抑〻何の義ぞや正之對へて曰く某高山遠江守より以來二十餘世未だ嘗て一人の帶劍せざる者あらずと有司其言を奇とし且つ其磊落他日君問ふ所は或は此人かと秀實其竟に及ぶべからざるを慮りて乃ち返る正之南部津輕を經て松前に至り竟に蝦夷の境に入る奔走暴日艱の足力を極む既にして忽ち回顧の志あり乃ち松前より海に航す風帆飛ぶが如く三日三夜にして西國に達し京に留ること數月明年辛亥京を辭して西海に遊ぶ是歲三月爽船紀伊大島浦に至り又た筑前長門の邊海に出沒す幕府令を下して備を嚴にせしむ壬子夏露人我漂民を送りて嚴平呂に到る明年幕府石川將監等を遣はして事由を按檢せしむ正之西海に在る凡そ三年是に至りて遂に京都に歸へる是歲中山大納言詔を奉じて江戸に至る其事秘して世に其實を知るもの莫し是より先き正之京に在りて嘗て鴨川の泥を過ぐ童子の龜を捉らへて之れを玩ぶあり甲上に文あり尾毛甦〻所謂ゆる緣毛龜なる者なり正之見て之れを奇とし乃ち金若干を與へて之れを得代原正二位に謁して覽に呈す二位亦た以て麟瑞と爲し即ち天覽に供す叡覽云ふ正之布衣羇旅の士を以て其志し嘗て人心を激勵し義者を鼓動する所以未だ嘗て其幸誠に出でざるはあらず其實正之遂に意を當世に得ず居ること常に怏々として樂まず再び西海に遊びて筑後久留米藩士林嘉膳の家に至り居ること數日怨ち病む所あるが若し一日齎らす所の目樂を出し寸裂して之を水中に投ず嘉膳驚て其故を問ひ且つ曰く積年の盡力一期にして之を失ふ豈に甚だ惜む當りて此神を拜す吉孰れか爲より大ひならんと盥漱して禮服を着し拜して慟泣するに至る竟に去りて水戸に至り立原萬藤田一正及び他の有名の士を訪ひ留まること數日乃ち發す下野の人蒲生秀實も亦た素より正之の人と爲りを慕ふ其北遊を聞き追ひて陸奥石卷に至る及ばず適〻後醍醐天皇の塔婆の下に出づ靈し南北の亂に官軍嘗て陸奥に鎮す故を以て今に至るまで天皇の爲に之を供養すと云ふ秀實彷徨逼迫して一樵夫に遇ひ問て曰く汝偉人を見ざるか對て曰く小人前きに一士人の爲めに儒ぜられ水を荷ひて此に至る其人即ち水に浴して禮服を着し塔婆の下に就て跪拜し懷中の文を出して之を讀み一字終はる毎とに歔欷して禁まず今去る既に十日君問ふ所は或は此人かと秀實其竟に及ぶべからざるを慮りて乃ち返る正之南部津輕を經て松前に至り竟に蝦夷の境に入る奔走暴日艱の足力を極む既にして忽ち回顧の志あり乃ち松前より海に航す風帆飛ぶが如く三日三夜にして西國に達し京に留ること數月明年辛亥京を辭して西海に遊ぶ是歲三月爽船紀伊大島浦に至り又た筑前長門の邊海に出沒す幕府令を下して備を嚴にせしむ壬子夏露人我漂民を送りて嚴平呂に到る明年幕府石川將監等を遣はして事由を按檢せしむ正之西海に在る凡そ三年是に至りて遂に京都に歸へる是歲中山大納言詔を奉じて江戸に至る其事秘して世に其實を知るもの莫し是より先き正之京に在りて嘗て鴨川の泥を過ぐ童子の龜を捉らへて之れを玩ぶあり甲上に文あり尾毛甦〻所謂ゆる緣毛龜なる者なり正之見て之れを奇とし乃ち金若干を與へて之れを得代原正二位に謁して覽に呈す二位亦た以て麟瑞と爲し即ち天覽に供す叡覽云ふ正之布衣羇旅の士を以て其志し嘗て人心を激勵し義者を鼓動する所以未だ嘗て其幸誠に出でざるはあらず其實正之遂に意を當世に得ず居ること常に怏々として樂まず再び西海に遊びて筑後久留米藩士林嘉膳の家に至り居ること數日怨ち病む所あるが若し一日齎らす所の目樂を出し寸裂して之を水中に投ず嘉膳驚て其故を問ひ且つ曰く積年の盡力一期にして之を失ふ豈に甚だ惜む

可らずやと正之曰く我亦た之を愛惜するを知らざるに非ず然れども百事已みなん況んや此鶴肋何ぞ深く惜むに足らんと嘉膳曰く足下の所爲を以て慨世或は不良の事を爲すと疑はゞ其れ何を以ての之を解かん正之即ち止む嘉膳既にして退く須臾らくありて正之刀を拔て腹を屠ふる嘉膳驚き見て問ひて曰く何爲れぞ此の如きに及ぶ正之曰く我常に國家に報いんと欲し其忠を爲し義を爲す所以の者今ま不忠不義の事と爲る已むべし我智の及ばざるなり是れ天我を殺すのみ幸に我が爲めに天下の人に謝せよと嘉膳曰く國に法あり願くは子治療を加へよと聽かず嘉膳曰く我れ子を館して子自殺し若し治を加へざれば我違法の罪も亦た逃るゝ所なし願くは子之を諒せよと正之之を許す頃之らくして東方を指して問ひて曰く帝都及び故國は此か嘉膳爲に東北を指示す正之拍手再拜して嚴然端坐し談話平生の如し既にして發狂のみと其郷貫を問ふ曰く上野新田郡細谷村と是に於て問ふと屢〻なれども復た答へず更乃ち正之瀉ちす所の物を閲みす毫も疑ふ可き者なし唯た天下名山大川勝區の圖書及び忠臣孝子の行狀諸名家送る所の詩文あるのみ曉に至りて正之竟に絕す年四十七實に寛政五年六月廿七日なり久留米侯聞て之を憐れみ乃ち命じて新田館主に告げ其貯る所の物件を封して郷里に送還し正之を府下遍照院に葬る正之既に死して數月を後れて其墓下に自死する者あり世其所以を知ること莫し其人狀貌魁偉蓋し唐崎常陸介なり其所以を知ること莫し其人初め其名を聞て未だ其面を識らず一日聖護院法親王に謁り一士人に過ふ骨相非常なり正之を見て曰く高山殿に非ざるか正之曰く君は唐崎殿かと因て手を執りて相泣て曰く天下の事何爲れぞ此極に至ると卒に相與に結て膠漆の交を爲す適〻正之の死を聞て豈亦相感ずるに非るなからんや明治十一年正四位を贈り上野太田町に高山神社を建て正之の靈を祀る（事實文編）

タカヤマ　ミツコ　高山盈子、薩藤堂嵩留守居役吉岡堅兵衛の長女なり十九歳薩區山藩物頭高山宣直に嫁す仙臺女學校の舍監を經學習院及び華族女學校に奉職して令名あり明治二十七年赤十字社看護婦取締となり二十七八年日清役にて勳七等に叙せられ佛國よりも記章を贈られ赤十字社には特別社員に列し有功賞を授けたり三十六年一月二十一日丹毒症を以て赤十字社病院にて死去す痾革まるに臨み特旨を以て從六位に叙せらる

タカヤマ　ミネマル　高山峰丸　俳歌を能くせり羽州米澤の人峰丸は其の號一に麁來舍又午睡庵の號あり其左衛門と稱す弘化年中の人其の俳歌に曰く「隣りあるよりはうれしき春田哉」（俳諧海内人名錄）

タカヤ　モリユキ　高屋盛之　陸軍歩兵大尉なり秋田縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し第二師團歩兵第二十九聯隊附として從軍中卅七年八月二十六日清國盛京看往子溝南方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカヤマ　ヨシトホ　高山義遠　薩摩守藤原親貞の一人なり膂力衆に超え又軍機に工みなり鶴貞竹下に敗れ殘兵を收て見附に至るや前山の上に武田小笠原氏の兵二千餘守備を嚴にす我兵既に戰ひ勢少なきを以て義貞衆を會して之を議するも計の出づべきなし獨り義遠奮然進て曰く蒙爾たる彼の小敵奚ぞ患るに足らん請ふ我兵を三隊に分ち三面より登りて之を攻めば彼必ず走らん乃四尺餘の大刀を電閃し獨り馳せ登りて敵六騎を斬る衆勢を得繼て齊く登る果して敗走す（本朝武功正傳）

タカヤマ　リンジラウ　高山林二郎　文學者なり樗牛と號す羽前鶴岡の人東京文科大學に入り卒業の後敦睦と爲り帝國文學の記者たり文學博士を授けらる三十五年十二月廿四日歿す

タカユキ　高行　古刀の鍛工にして備前吉岡住す或は云延文年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

タカユキ　高行　備後三原の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タカユキ　高行　石見高津の刀匠にして次弘の門人長藤年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タカヨシ　高吉　播磨大明石の刀匠にして天文弘治年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タカヨシ　高吉　筑前の刀匠にして貞治年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タカヨシ　隆吉　土佐洲崎の刀匠にして文祿年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タカヨシ　貴命　尾張の刀匠にして元祿年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タカヨシ　ワウ　尊義王　小倉皇子の子なり初め僧となりて萬壽寺派海の弟子となり金藏主と號す嘉吉中吉野の兵王を奉じて南方の主となし遁俗して潛かに帝と稱す三年七月吉野十津川の餘黨及び河内、紀伊の國人、尊義を擁して密かに南朝を恢復せんことを謀る從一位入道藤原有光之が內應をなす大和、河內、紀伊の國人三百餘人九月二十三日の夜、間行して京に入り分れて二部となり土御門內裏を襲ひ四門より入る楠二郎一部を率ゐ清涼殿に侵入し越智宰相一部を率ゐ局町に入りて火を縱つ事倉卒に起りて衆驚騷し拒き禁ずる能はず一卒、眉尖刀を執りて上に逼る目眩して殪る衆之を見て相進まず藤原親長、季春劍を揮ひて拒戰す上冠袍を解き女裝して唐門より出でゝ參議藤原持季の第に避け轉じて左大臣藤原房嗣の第に幸す南兵、三神器を奪ふ幕府變を聞き兵を遣はして之を擊つ南兵敗逃す東門守衛黑田高藩之を逐ひて神鏡を復し更に追蹤す南兵神璽を捧持して叡山に登り尊義を奉じて南帝と稱し兵を招き根本中堂に據る廿五日畠山持國兵を率ゐて來り圍む山徒約を變じ支を倒にして攻擊太だ急なり楠、越智等皆な戰死し尊義遂に自殺す有光及其の子參議實親擒に就きて誅せらる（野史）

タカラ　實　播磨の刀匠にして安賴の門人重高と同人寛弘比の人なり或は云寶治比の人にして國吉の子なり又云寛元比の人にして藤四郎と稱すと（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タカラ　カセイ　寶夏靜　俳人なり日蓮宗の僧にして日瑤といふ羽後酒田妙法寺に住職たり長聖の流をくみて酒田春秋庵を起す別に北々園と號す明治廿五年八月廿六日歿す（三森松江氏寄）

タカラダ　ジュスケ（ロウキンダウ）　寶田壽助「カウエイ」なり通稱は金之助戲神仙又閑雅と號す寛政六年八月歿す年五十七

タカラダ センチャウ 寶田千町 江戸の院本作者なり名は恭里(一に泰重に作る)通稱は中川金兵衛下谷長者町に住す小倉侯の臣なり賜堂と稱す天保中の人

タカラヰ キカク 寶井其角「エノモトキカク」

タカ リャウサイ 高良齋「カウリャウサイ」

タカヰ キサブラウ 高井喜三郎 陸軍歩兵少尉なり京都府出身にして明治三十七年日露戰役起るや豫備役より召集せられ第四師團後備歩兵第三十八聯隊附として從軍中同年十二月十八日旅順要塞東鷄冠山北砲臺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タカヰ キトウ 高井几董 京師の俳人なり几圭の子、晋明また春夜樓と號し又三世夜半亭と號す谷口蕪村の門人なり寛政元年十月二十三日歿す年四十九

タカヰ ケイノスケ 高井啓之助 陸軍歩兵大尉なり島根縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て第七師團歩兵第二十八聯隊附として從軍中卅七年十二月一日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タカヰ クニヨシ 高井國義 豐後守と稱す京都の鍛工にして初世信濃守信吉の二男なり後近江彥根又た若狹小濱に住せしことあり寛文中の人

タカヰ カウザン 高井鴻山 一に鴻臺俗稱三九郎信州高井郡の豪家の子なり夙に文學を修め繪畫を嗜て嘗て京師に遊び佐伯岸駒に就きて畫法を學びしが後に江戸に來り葛飾北齋の門に入りて學ぶ最山水に長ぜり其の山水畫中往々幽靄を畫く何の意なるを知らず北齋嘗て信濃に遊び此の家に居りしこと殆一年なりき文人墨客の善光寺邊に遊ぶ者は大抵高井氏を訪はざることなし是三九郎の待遇頗厚き故なり明治の初年東京に來り赤坂邊に住して學校を設けしが後長野に歸り家塾を建てゝ學生を教育せり同十年の頃歿せり年八十有餘(河鍋曉齋傳、虛心筆記)

タカヰ シゲモチ 高井重茂 和田義茂の子にして三郎と稱す武力人に過ぐ和田義盛兵を擧ぐるに及びて獨り幕府に歸す義秀と戰ひ相搏ちて馬より墜ち克たずして死す時に府兵能く義秀と相抗して倶に馬より墜つる者唯た重茂のみ人之を嗟惜す(大日本史)

タカヰ タンガイ 高井丹厓 畫家なり名は麟字は秋潤、應擧月溪の風を慕ひて花鳥を畫く(鑑定便覽)

タカヰ ヤツホ 高井八穗 江戸の和學者なり通稱伊十郎千蔭春海の諸老と交りて頻りに道を唱ふ從ひ學ぶもの多し(鑑定便覽)

タカヰ ランザン 高井蘭山 江戸の小說家なり名は伴寬字は思明文左衛門と稱す芝伊皿子に住す幕府書院番頭組與力高井伴昌の長男なり或は曰く旗下某の用人也と著す所三國妖婦傳、孝子嫩物語、那智能白糸、星月夜顯晦錄、應仁記、水滸傳等あり天保九年十二月廿三日歿す年七十七

タカヰ リツシ 高井立志 江戸の俳人なり嘗て某侯に仕へ後ち辭して樽屋休甫の家に客たり松樂軒又和諧堂と號す寛永中歿す(俳林小傳)

タカヰ リツシ 高井立志(二世) 俳諧師なり松樂軒と號す寛永中業を雛屋立圃に受く本町四丁目に住す著述に樗木集あり其の句に曰く「短册は臼挽歌かこゝめはな」(俳林小傳)

タカヰ リツシ 高井立志(三世) 俳諧師なり和諧堂と號す江戸の人松樂軒の二男初め立永石町に住す寛永元年八月歿す高林院立志日乘と謚す著述する所、都の枝折、難波の枝折あり其の句に「はつ草や青みとどかぬ芝の隅」(俳林小傳)

タカヰ リツシ 高井立志(四世) 高井立志和諧堂の男心保和散齋又立詠春水と號す享保九年十一月廿一日歿す淺草常福寺に瘞あり著述に雲の果、庭のまき厭中等あり句あり曰ふ「音やむはいて付くならし夜の笹」(俳林小傳)

タカヲ 高尾 東都吉原京町一丁目三浦屋の名妓なり三浦屋に高尾と號するの妓多し寛永中に在るもの未だ名高からず萬治高尾に至て有名なり高尾屏風くだ物語に曰く萬治二年十二月五日病歿す年十九淺草橋場正光院中に葬り塚に楓樹を栽えて表章となす萬治高尾是なり

タカヲ 高尾 野州鹽原の人承應中三浦屋の妓となり萬治三年高尾となる後ち陸奥仙臺侯伊達綱宗に落籍せらる事幕府に聞え綱宗は萬治三年七月品川の別邸に幽せらる高尾之に仕へお椙の方と云ふ故に世に之を仙臺高尾と呼ぶ子なきに依て熊谷齋宮の二男を養子として禄千石を賜はる椙原新太夫是なり仙臺荒町日蓮宗佛眼寺に墓あり表に妙法淨休院法讃日晴大姉享保元年十一月廿五日又た裏に椙原常之助源範消義母逆修行年七十七歲にて之れを營む時に正德五年二月二十九日とあり(正德五年は享保元年の前年なり歿年の前一年自ら其墓を建てたる者なるべし一說に曰く高尾歿後綱宗三浦屋に遊び薄雪を寵するを聞ゆお椙方は或は是ならん)句あり曰く「君は今駒形あたり杜宇」「書初めやはづかしながら虛はじめ」此は三浦屋にての句なるべし(高尾考、俳林小傳)或は曰く綱宗の狎れしは山本屋のかほるなり高尾に非ずと(大槻博士考)

タカヲ 高尾 才色ともに絕世にして高尾數代中最も全盛を以て當時に聞ゆ後ち彥根藩士石井吉兵衛(元政の傳を見よ)に遭ひて情交密なり樓主時に他家に致さんとす乃ち自殺す石井高尾即ち是なり或は曰く承應の頃有名なる高尾あり之を石井高尾と稱すと案するに石井と西條と混して相別ちかたきなり(高尾考)

タカヲ 高尾 三九高尾、はれ字高尾又水谷高尾と云ふ御用達水谷六郎兵衛に馴れ後贖はれて本郷丸山菊坂町に圍はる六郎兵衛本郷二丁目に住し故ありて死刑せらる手代九平後に之を妻とす事元祿の末にあり又た書を能くし殊にんの字に巧なり依てはれ字高尾と稱す容貌目尾昂り慧相なれども色少く黧く卑しと(吉原呼子鳥、吉原袖鏡、洞房語園)

タカヲ 高尾 世に西條高尾と稱す江戸本郷四丁目の蠟燭問屋西條吉兵衛(世俗に所謂吉之丞)之を贖ふを以てなり後ち吉兵衛僞印の事に座して罪せらる高尾乃ち幇間武兵衛なる者に依る髮を剃て淺草山谷(道哲)の西方寺に庵を結び紅葉を植て居る八十餘歲にして歿す(此寺に一墓あり萬治三年十二月五日と彫す世に二代高尾の碑となすは初世の誤りなるべし)寶永年中の寫本吉原つれ〲草に曰く西條高尾の行方慥ならず或は髮を剃るの後行脚等に出るか或は一說に傳ふる如く吉兵衛罰せらるゝの後他に再醮するか又高尾に一奇盃あり嫖客某の贈る所にして中に高尾の咏歌を高蒔繪にて繪けり高尾嘗て中秋に月を賞しながら之に酒を盛りて傾け盡し直ちに使を馳せて之を京師島原の名妓吉野にさす吉野飲み畢りて之れを大阪の名妓高圓(たかまど)にさす高圓飲みて吉野に返し吉野また飲みて遂に高尾に還す故に之を名づけて都還の盃と曰ふ(高尾考、洞房語園)

タカヲ 高尾 世に島田高尾と稱す其情夫に島田重三郎と云へる者あるを以てなり貞享元祿の比の人(高尾考)

タカヲ 高尾 元祿寶永の間全盛を以て世に聞ゆ後ち神田於玉ヶ池の染戸某の妻と爲る故に世呼びて駄染高尾(下等品の染物を爲す家を駄染屋と云ふ)と稱す(高尾考)

タカヲ 高尾 世に子持高尾と稱す四國の士某と情交密にして子を生む房に養ひ置き客の聘ある每に之を伴ふて往く曰く客に對する情の薄からざるを證すべし敢て恥づるに足らずと然るに洞房語園に據るに此事江戸町一丁目大上總屋の妓總角が事となす或は曰く京都島原の妓河內は江戸の名妓三浦屋の高尾が兒なりと(花見車、洞房語園、高尾考)

タカヲ 高尾 享保元文の間名妓を以て知らる世に六本高尾と稱す其の足指六本あり常に襪を穿ちて之を覆ふ故に是稱ありと(高尾)

タカヲ 高尾 元文中全盛並ぶ者なし享保中(或は寬保元年か)千八百兩を以て榊原式部大輔政岑に落籍せらる故に世稱して榊原高尾と曰ふ寛政十一年病みて死す年八十四深川淨心寺門番檻買六郎兵衛の女なりと云ふ(洞房語園、高尾考)

タカヲ 高尾 事蹟に傳ふ可き者なし時に三浦屋も亦た漸く衰頽して家遂に絕ゆ後玉屋山三郎三浦屋を再興し其義子と爲るを以て遊女中高尾を稱する者ありしかど其名竟に皆な著はれず(高尾考)

タカヲ ウヂノリ 高尾氏規 高松侯の儒員なり字は子應、十右衛門と稱す其先は足利氏の世臣細川氏に屬して武功あり邑を阿波の高尾に受く因て氏とす父は氏陳高松の藩士なり小吏より起りて士となる三子あり氏規は其季なり故ありて其の後を承く少にして穎異學を嗜む學成て從游する者衆し安永四年史職に遷り史局總裁に轉ず十二年小納戸中寄合に進む文化四年鄕邑教職となる八年使番並となる十三年公子の師となり月俸を增す文政二年死す氏規性寬厚にして自ら衰發せず居ること常に怡然、人を誨へて倦むことなし其の教を鄕邑に敷くや人其の誠に服し命せずして化す嘗て大內郡の里正の家に抵り民を聚めて爲めに孝經の章を講ず時に民に田を爭ふ者あり之を聞て頓に止む又た嘗て馬宿邑に至る民に兄弟爭ふ者あり年を累ねて決せず氏規召して諭すに孝友の行を以てす二人感悟して遂に睦し其の德を以て民を化するの類此の如し(事實文編)

タカヲ オムロ 高雄御室「シャウニンホウシンワウ」

タカヲカ カフチ 高丘河內 本姓は樂浪、父は沙門詠、天智帝の時百濟より投化す河內和銅五年播磨國大目となり從八位上に叙せらる六年正倉を造るを監す既にして功成る勞を賞して位一級を進め絁一匹布百三十端を賜ふ養老五年正六位下に進み文章博士となる是の年詔して退朝の後東宮に侍せしむ六年絁十五匹絲十五約布三十反鍬二十口を賜ふ蓋し學士を奬勵する爲めなり神龜元年姓高丘連を賜ふ天平三年累進して外從五位下を授けられ右京亮となる十四年離宮司となり紫香樂離宮を營み外從五位上に叙せらる十八年從五位下に進み伯耆守となる勝寶六年從五位上に叙せられ大學頭に至る景雲中內藏頭となり大外記を兼ね從四位下に進み後ち病を以て卒す(萬葉集作者履歷、大日本史)

タカヲカ ゲンシ 高岡元司 陸軍一等軍醫なり千葉縣出身にして明治三十三年北淸拳匪の亂あるや第一師團野戰砲兵第十六聯隊附として出征し九月廿一日北京に於て病に罹り十月卅日北京第五師團第二野戰病院に於て死去す

タカヲカ シゲジラウ 高岡重次郎 陸軍步兵大尉なり香川縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し第十一師團步兵第四十三聯隊附として從軍中卅七年八月卅一日淸國盛京省首山堡附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タカヲカ シンワウ 高岳親王 平城天皇の第二子母は贈從三位伊勢の朝臣繼子なり大同三年山城久世郡の地六町を賜はり封田となす四年平城天皇位を嵯峨天皇に讓るに及て親王を立て皇太子となす年少早く儲貳に升るを以て世人號して蹲居太子といふ識者聞て不祥の兆となす此の時に當て平城太上皇尙侍藥子を寵す藥子猾智あり善く媚て幸せられ言ふ所聽かれざるなし密に兄藤原仲成と太上皇の重祚を謀り、自ら皇后の地位に立んとを望み弘仁元年九月六日遂に太上皇の命を矯て都を平城に遷さんとす洛中騷擾大方ならず主上(嵯峨)震怒し仲成を捕へ藥子の罪を鳴らし其官位を褫ふ太上皇も亦大に怒り藥子と輿を同うして平城より東國に赴く然れども路塞て東行すること能はず平城の宮に還り薙髮す藥子は藥を仰て死す此亂により高岳親王は廢せらる蹲居太子の號是に於て驗あり夫より十三年の星霜を經て弘仁十三年に至り漸く四品に叙せらる幾ばくもなく落髮して僧となり名を眞如と改め東寺に住し專ら心を佛法に凝らし三論を道詮に習ひ密教を空海に受け遂に阿闍梨の位を得たり後十四年を經て承和三年勅ありて平城に於て地所四十餘町を賜はりしも一心佛法に從事し悉く其地を擧て不退超昇の二寺に寄附し四年春池上氏の子僧宗叡を伴ひ入唐して法を求む唐に留ると廿年時にかの中宗廢佛の後にして佛法も衰微し執業もまた十分ならざりしかば遂に大に發憤し元慶五年(唐僖宗中和元年)遠く天竺歷遊の志を起せり此時親王年八十餘なり(廢太子以來此に七十二年)三代實錄元慶五年の紀在唐僧中瓘の上申に高岳親王光過二震旦一欲レ度二流沙一風聞到二羅越國一逆旅遷化と見え和漢合運に至二羅越國一遭二虎害一といへり(高岳親王求法考、元亨釋書、東國高僧傳)

タカヲカ ヒラマロ 高丘比良麻呂 河內の子なり少にして大學に遊び博く書記に涉る寶字中越前介となる內藏介兼大外記に遷る藤原仲麻呂の變に比良麻呂變を上る褒めて從四位下を授けらる神護の初

め勳四等を賜ひ尋て遠江守を兼ぬ景雲元年右衛士亮を兼ぬ内藏頭に至り連を改めて宿禰の姓を賜ふ（大日本史）

タカヲカ　マコト　高岡信　陸軍歩兵中尉なり福井縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て築備役より召集せられ第九師團歩兵第十九聯隊附として從軍中廿八年三月九日清國盛京省小心屯に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タカヲヲ　キノ　ソウシャウ　高尾紀僧正「シンサイ」

タカヲヲ　タイケイ　高尾太卿　世々讃岐高松侯の儒官たり名は篤、篤太郎と稱す太卿は其號太卿剛明磊落にして精力人に絶し書を讀み且に達して倦まず冒日を衝て發し議論愉快に非理屈を受けず年二十にして江戸に來り昌平黌に學び同輩と遊あり衣を振ひて去りて峡中に遊び後ち又た昌平に入り尊て病みて卒す年僅に二十六太卿常に史學に志し治史を以て自ら任ず自用は多く懸虛に發す宋儒義理の說は全く從ふ可らず孔子春秋を治むるに周王の法を以てして周の諸侯卿太夫を治む僭妄に非ざるなり後來史を修むる者法周公に非ず人聖に非ず抑揚予奪率ね我心に任ず僭に非ざれば即ち妄其れ惟て涑水通鑑丘明の法を存するあるのみ比して之を同うせば皇朝の六國史は其れ隱恒莊閔の春秋に庶幾らんか水府の史僖文宣成の春秋に非ざるか其足利氏より昭代に至るは襄昭定哀の際か邈史外史等の撰ありと雖も亦た昔なる不公不備若れ其れ學生の力を以て編纂輯收左氏の遺意に倣ひ以て後の聖人を俟たん如何と而して寛に果すを得ず（墓表）

タキカハ　カツマサ　瀧川勝雅　本名は雄親又雄利、木造左近衛中將具致の二男なり初め僧となりて現當院に住す智勇あり武を好みて膂力あり國司北畠氏の家裏ふるを見て兄木造具康と謀り國司に叛き織田信長に通ず永祿十二年信長の兵を國に招き尊て髮を剃へ俗となり瀧川一益の族氏を乞ひ雄親と名け三郎兵衛と稱し瀧川氏を冒す國司具教信長と成を行ひ其の子を養ふ元龜三年元服し信雄と名く諱字を其の偽雄親に授け雄利と更稱す天正四年伊勢を以て信雄を封ず雄利從五位下に叙し下總守と稱す十年信雄伊賀を以て雄利に予ふ其叛人を平ぐるを以てなり信雄秀吉と隙あるに及び雄利信雄に屬し爲に伊勢の松島城を守る後ち和泉守と稱し左近衛將監となる永祿十年春信長の命を受け其辨委名二郡を取る十二年九月一尚の徒ゐ長島に擊て之を敗り一益を封ず天正二年九月織田信雄封を矢ふ秀吉雄利を召し相伴衆に列し食邑三萬石を賜ひ名を勝雅と改む庚子の役石田三成に黨し軍敗れて降を乞ひ結沒せらる後ち幕府に近侍し族を瀧川氏に復し旗本に列す慶長十五年常州片野の田一萬石を賜ふ子正利繼ぐ

タキカハ　カズマス　瀧川一益　通稱は彦右衛門勇あり射鉄を善す尾張に住み織田信長に仕ふ信長其智勇を愛し擇みて隊長となし每戰先鋒に列す實に其雄封を矢ふ秀吉雄利を召し初め小倉尚書に學ぶ後ち出藩に來る時に徂徠殁して已に三年の教授となる後ち江都に來る時に徂徠殁して已に三年乃ち服部南郭の門に遊ぶ南郭其の才を異とし見るに弟子を以てせず既にして去りて京に到り又は長崎に赴く至る所人其の才學を重んず後ち再び江都に來る名聲大に起る從ひ學ぶもの甚だ多し太宰春臺嘗て其の才を稱して曰く海西無雙と藩侯其の名を聞き擢て、家臣とす寶曆癸未韓使來聘す舟馬關に泊す例に藩之館に饗す是に於て藩侯の命を奉じ國に歸りて之に接拌す韓使其の該博を賞す周南殁する後ち擢んでられて明倫館の祭酒となり公子の侍讀を兼ね後ち江戸に抵る每に肥後の秋山玉山尾張の紀平洲等と交を締んで相惟ふ傍ら醫事を好む故香川大冲山脇東洋吉益東洞と相交り所謂古醫方の崇ぶ其の匕劑應ゝ効あり又博く佛籍を窺ひ殆んど其の義あれば就て質すものあり兼て筆札を善くす筆法義之より出づ安永二年正月廿四日殁す年六十五鶴臺嘗て一權貴に欲す酒醴なる時主人問ひて曰く凡そ治を爲す和漢孰れか難き鶴臺曰く漢難しと權貴其の故を問ふ鶴臺曰く彼れ不學の人なして鈞衡を秉持せしめば下必ず其制を受くるを耻づ我が邦は不學の人と雖も下其の制を受るを耻ぢず是れ漢の難く和の易き所以なり一坐色を失ふ其の人以て侯に告ぐ侯曰く公等を諷刺するは唯だ此の老なりと著はす所三乃逕癸申問棲鶴臺遺稿、鶴臺漫筆あり（近世叢書、鶴臺行狀、先哲叢談、近世名家著述目錄）

タキク　クワクダイノ　ツマ　瀧鶴臺妻　醜女なり人娶らんとする者なし父母因て之を娶る者あらば卑賤を擇まざらんとす而して女獨り自ら高く居り人に語て曰く妾は鶴臺先生の如き人に非れば嫁ぜずと人其非望を嗤ふ鶴臺聞て之を奇とし以て家を治めしむべしとなし之を娶る果して內助の功あり一日其の親より赤絲毬を落す鶴臺訝て之を問ふ妻答へて曰く妾常に藩內是より文華大いに開く（日本教育史資料）

タキク　クワクダイ　瀧鶴臺　長門藩の侍醫なり名は長愷蹦八と稱す鶴臺は其の號原と引頭氏、醫師瀧養正に養はる因て其の氏を冒す幼にして學を好み初め小倉尚書に學ぶ後ち山縣周南に從ひて徂徠の說を受く居ること數年藩の公族海北公子に仕へて其の采邑の教授となる後ち江都に來る時に徂徠殁して已に三年乃ち服部南郭の門に遊ぶ南郭其の才を異とし見るに弟子を以てせず既にして去りて京に到り又は長崎に赴く至る所人其の才學を重んず後ち再び江都に來る名聲大に起る從ひ學ぶもの甚だ多し太宰春臺嘗て其の才を稱して曰く海西無雙と藩侯其の名を聞き擢て、家臣とす寶曆癸未韓使來聘す舟馬關に泊す例に藩之館に饗す是に於て藩侯の命を奉じ國に歸りて之に接拌す韓使其の該博を賞す周南殁する後ち擢んでられて明倫館の祭酒となり公子の侍讀を兼ね後ち江戸に抵る每に肥後の秋山玉山尾張の紀平洲等と交を締んで相惟ふ傍ら醫事を好む故香川大冲山脇東洋吉益東洞と相交り所謂古醫方の崇ぶ其の匕劑應ゝ効あり又博く佛籍を窺ひ殆んど其の義あれば就て質すものあり兼て筆札を善くす筆法義之より出づ安永二年正月廿四日殁す年六十五鶴臺嘗て一權貴に欲す酒醴なる時主人問ひて曰く凡そ治を爲す和漢孰れか難き鶴臺曰く漢難しと權貴其の故を問ふ鶴臺曰く彼れ不學の人なして鈞衡を秉持せしめば下必ず其制を受くるを耻づ我が邦は不學の人と雖も下其の制を受るを耻ぢず是れ漢の難く和の易き所以なり一坐色を失ふ其の人以て侯に告ぐ侯曰く公等を諷刺するは唯だ此の老なりと著はす所三乃逕癸申問棲鶴臺遺稿、鶴臺漫筆あり（近世叢書、鶴臺行狀、先哲叢談、近世名家著述目錄）

タキク　ケイザン　多紀桂山　德川幕府の醫官なり名は元簡字は廉夫、安長と稱す桂山は其の號、又機窓と號す姓は丹波父藍溪の業を受く記應絕倫一覽すれば終身忘れず寛政二年執政白川侯召して醫事の疑難を設けて其の能を試む桂山三十餘條を剖拆す侯大に其の精博を稱し俄かに侍醫に擢んでられ法眼に進む尋て醫學教諭を兼ぬ十二年父致仕す乃ち祿を襲ひて館教を統ぶ侍醫たること舊の如し享和年中醫官を詮選す是の時議論旨に忤ふを以て侍醫を罷めらる是に於て退て力を遷述に用ひ先緒を畫修し後學を啓迪するを以て任とす素興以下を取り次第に之れが箋釋を施し以て學館の諸生に授る門徒爭ひ進む當世の皆宿能く皆な弟子の礎を執る又治術大に行はれ來りて治診を乞ふもの門前市を爲す水戸侯疾む已に癒たるが如し元簡之を診し出て曰く大期迫れり治す可からず死三日を出でざるべしと諸臣驚き且疑ふ既にして果たして然り性高雅、利勢に澹なり醋だ讀書を好む凡そ古今の文字苟くも言の醫事に渉るものは悉く其の根底を推して之を究む時々之を疾に試み往々奇功を奏む人其の原く所あるを知らず以て新意の出す所とす而して茶は何の方を資り茶は何の書に見ゆと言ふを聞くに及びて又た喟然嘆息して及ぶ可らずとなす著はす所の諸法は衆說を條疏し精義を闡酌す其の錯辭隱義叅伍校照して通ずべきは之を通じ疑ふ可きは之を闕き深く箋釋の旨を得是より先き諸家五行經絡の說を厭ひ各〻論著する所あり故を以て指歸一ならず互に相ひ詆毀す而して大抵臆測の說勝て訂訣の義微なり桂山の書出で、海內翕然として前世粗莽杜遷の風始て一變す桂山客を愛し士を善くし其の名海の內外に鳴る山水人物皆其の精巧を極め殊に花鳥に妙なり天機の至る所神采飛動具さに六法三品を備ふ三家と其範を異にして而して鶴を並べて馳驅すべし是を以て皇家の壁、貴神の幅、その書く所多し四方來つて書を請ふもの紺素常に案頭に堆し法を問ふもの亦常に座に盈つ翁一室に兀坐し揮灑已まず每夜鷄鳴を聞て初めて寢に就く花朝月夕といへども未だ一たびも門を出でゝ遊はず人と爲り寛和安祥、謙遜にして誇らず溫乎たる其言多く內に積んで而して少しく外に發する所有道者に似たり蓋し亦書に獲る所有つて然る乎と以て其の一疵を窺ふに足らん

タキク　ゲンケン　多紀元堅　醫者なり字は柔、菖庭と號す又三松と號す元簡の二男にして別家し本石町に住す幕府の奧醫となり法眼に叙し法印に進み樂眞院と號す醫學館の教授を兼ね學識該博治洽また起死回生の術あり安政四年二月十四日殁す北豐島郡平塚村城官寺に葬る著書素問紹識、診病奇候、時還讀我書、傷寒論述義、傷寒廣要、金匱述義、蘇病廣要、女科廣要、藥法通義等あり

タキサハ　イチラウ　瀧澤一郎　陸軍三等獸醫正なり大阪府出身にして明治三十七八年日露戰役に際し躍備役より召集せられ第一師團兵站彈藥縱列附として從軍中廿七年九月十日青泥窪兵站病院に於て急病に因り死去す

タキサハ　キンレイ　瀧澤琴嶺　宗伯と稱す馬琴の男なり松前侯の醫員なり天保六年五月殁す年三十八（百家說林）

タキザハ　チハル　瀧澤千春　宗偏流の茶人なり後久編と改む佐太郎と稱し陸安齋と號す幕府の勘定方なり神谷松見の門人（古今茶人系譜）

タキザハ　バキン　瀧澤馬琴「バキン」

タキザハ　ヘイシチ　瀧澤兵七　陸軍歩兵少佐なり舊幕臣の家に生る明治二十七八年日清戰役に際し歩兵少尉を以て從軍し戰功に依て中尉に進み勳五等功五級に叙せらる三十三年北清事件起るや其地守備中隊長として功あり三十七年日露戰役起るに及び第一師團歩兵第一聯隊附として從軍し旅順攻圍軍に參加せしが同年九月二十日海鼠山突擊に當り撰拔決死隊の指揮官たりしが寺見溝西北方高地に於て遂に敵彈に中つて壯絕なる最後を遂ぐ戰功に依り少佐に昇任し勳四等功四級に叙せらる

タキシニノ　ミコト　手研耳命　神武天皇の皇子にして綏靖天皇の兄、母は皇妃吾平津媛なり神武帝崩じ太子（綏靖帝）諒闇の間皇子久しく朝政を攝して萬機を掌り遂に非望を圖り太子及び其の弟神八井耳命を害せんと欲す太子之を知り神八井耳命と共に皇子を片丘の地室に殺す（大日本史）

タキシニニノ　ミコト　手研耳命　神武天皇の皇子にして綏靖天皇の兄、母は皇妃吾平津媛なり神武帝崩じ太子（綏靖帝）諒闇の間皇子久しく朝政を攝して萬機を掌り遂に非望を圖り太子及び其の弟神八井耳命を害せんと欲す太子之を知り神八井耳命と共に皇子を片丘の地室に殺す（大日本史）

タキヂ　ゲンエモン　瀧新石衛門　茶人なり紹鷗の外孫にして茶術に達し尾州侯に仕へて一時茶名あり眞の嫡子の法を能くす（茶人系傳全集）

タキタ　タイリフ　瀧田大立　大阪の俳人なり椎本才麿の門人水足軒と號す家書もとの水等あり延享元年四月廿六日殁す年六十九辭世「花は廿日我は六十九夜の明」（俳諧年表、俳家大系圖）

タキヂダ　ヘイサク　瀧田平作　陸軍歩兵少尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於

て醫學教諭を兼ぬ十二年父致仕す乃ち祿を襲ひて館教を統ぶ侍醫たること舊の如し享和年中醫官を詮選す是の時議論旨に忤ふを以て侍醫を罷めらる是に於て退て力を遷述に用ひ先緒を畫修し後學を啓迪するを以て任とす素興以下を取り次第に之れが箋釋を施し以て學館の諸生に授る門徒爭ひ進む當世の皆宿能く皆な弟子の礎を執る又治術大に行はれ來りて治診を乞ふもの門前市を爲す水戸侯疾む已に癒たるが如し元簡之を診し出て曰く大期迫れり治す可からず死三日を出でざるべしと諸臣驚き且疑ふ既にして果たして然り性高雅、利勢に澹なり醋だ讀書を好む凡そ古今の文字苟くも言の醫事に渉るものは悉く其の根底を推して之を究む時々之を疾に試み往々奇功を奏む人其の原く所あるを知らず以て新意の出す所とす而して茶は何の方を資り茶は何の書に見ゆと言ふを聞くに及びて又た喟然嘆息して及ぶ可らずとなす著はす所の諸法は衆說を條疏し精義を闡酌す其の錯辭隱義叅伍校照して通ずべきは之を通じ疑ふ可きは之を闕き深く箋釋の旨を得是より先き諸家五行經絡の說を厭ひ各〻論著する所あり故を以て指歸一ならず互に相ひ詆毀す而して大抵臆測の說勝て訂訣の義微なり桂山の書出で、海內翕然として前世粗莽杜遷の風始て一變す桂山客を愛し士を善くし其の名海の內外に鳴る山水人物皆其の精巧を極め殊に花鳥に妙なり天機の至る所神采飛動具さに六法三品を備ふ三家と其範を異にして而して鶴を並べて馳驅すべし是を以て皇家の壁、貴神の幅、その書く所多し四方來つて書を請ふもの紺素常に案頭に堆し法を問ふもの亦常に座に盈つ翁一室に兀坐し揮灑已まず每夜鷄鳴を聞て初めて寢に就く花朝月夕といへども未だ一たびも門を出でゝ遊はず人と爲り寛和安祥、謙遜にして誇らず溫乎たる其言多く內に積んで而して少しく外に發する所有道者に似たり蓋し亦書に獲る所有つて然る乎と以て其の一疵を窺ふに足らん

タキヂ　ケイザン　多紀桂山　德川幕府の醫官なり名は元簡字は廉夫、安長と稱す桂山は其の號、又機窓と號す姓は丹波父藍溪の業を受く記應絕倫一覽すれば終身忘れず寛政二年執政白川侯召して醫事の疑難を設けて其の能を試む桂山三十餘條を剖拆す侯大に其の精博を稱し俄かに侍醫に擢んでられ法眼に進む尋て醫學教諭を兼ぬ十二年父致仕す乃ち祿を襲ひて館教を統ぶ侍醫たること舊の如し享和年中醫官を詮選す是の時議論旨に忤ふを以て侍醫を罷めらる是に於て退て力を遷述に用ひ先緒を畫修し後學を啓迪するを以て任とす素興以下を取り次第に之れが箋釋を施し以て學館の諸生に授る門徒爭ひ進む當世の皆宿能く皆な弟子の礎を執る又治術大に行はれ來りて治診を乞ふもの門前市を爲す水戸侯疾む已に癒たるが如し元簡之を診し出て曰く大期迫れり治す可からず死三日を出でざるべしと諸臣驚き且疑ふ既にして果たして然り性高雅、利勢に澹なり醋だ讀書を好む凡そ古今の文字苟くも言の醫事に渉るものは悉く其の根底を推して之を究む時々之を疾に試み往々奇功を奏む人其の原く所あるを知らず以て新意の出す所とす而して茶は何の方を資り茶は何の書に見ゆと言ふを聞くに及びて又た喟然嘆息して及ぶ可らずとなす著はす所の諸法は衆說を條疏し精義を闡酌す其の錯辭隱義叅伍校照して通ずべきは之を通じ疑ふ可きは之を闕き深く箋釋の旨を得是より先き諸家五行經絡の說を厭ひ各〻論著する所あり故を以て指歸一ならず互に相ひ詆毀す而して大抵臆測の說勝て訂訣の義微なり桂山の書出で、海內翕然として前世粗莽杜遷の風始て一變す桂山客を愛し士を善くし其の名海の內外に鳴る山水人物皆其の精巧を極め殊に花鳥に妙なり天機の至る所神采飛動具さに六法三品を備ふ三家と其範を異にして而して鶴を並べて馳驅すべし是を以て皇家の壁、貴神の幅、その書く所多し四方來つて書を請ふもの紺素常に案頭に堆し法を問ふもの亦常に座に盈つ翁一室に兀坐し揮灑已まず每夜鷄鳴を聞て初めて寢に就く花朝月夕といへども未だ一たびも門を出でゝ遊はず人と爲り寛和安祥、謙遜にして誇らず溫乎たる其言多く內に積んで而して少しく外に發する所有道者に似たり蓋し亦書に獲る所有つて然る乎と以て其の一疵を窺ふに足らん

て第一師團步兵第一聯隊附として從軍中卅七年十一月二十八日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タキテイ　リチヤウ　瀧亭理丈「リウテイリチヤウ」

タキノ　イウケン　瀧野遊軒　柔術家なり名は貞高後ち舉峴と改む俗稱は專右衞門平安の人主水の子起倒流の拳法を堀田自諾に受け其精妙を究む而して此技を大都通邑に傳へんと欲し職を男貞恒に讓り享保乙卯東都に來り淺草三筋街に僑居し拳法を敎授す門に及ぶ者三千餘人湯淺矢部二氏最も其奧を極む遊軒寶曆壬午六月十八日に卒す年六十八下谷坂本金峰山全得寺に葬る（台北地誌稿）

タキノモト　センヂヨウ　瀧の本千丈　狂歌師なり名は忠能通稱江里川助右衞門と云ひ後に勘解由と改む麻布芋洗坂に住し幕府の臣なり橘千蔭に就て國學を學び又瀧本流の能書たるを以て勘定所の書記に任ず又眞顏の門に入りて俳諧歌を學び後年京師二條家より宗匠の號を免許せられ台賜宗匠と稱す天保十四年八月十五日病て歿す享年詳かならず麻布六本木淨土宗深廣寺に葬る（古今狂歌人物誌）

タキノヤ　キヨマル　瀧の屋清丸　狂歌師なり姓長岡氏にして通稱を清兵衞といへり神田小柳町に住し町代をつとむ早く狂歌を好み天明老人に就て小稿側に遊び後に人の勸めに任せ梅の屋の門下となり瀧の屋と號し神田連に入りて本町側の判者に列す性頗る讀書を好み十返舍一九の膝栗毛の如き粗閣記したりといふ明治三十年五月廿三日京橋南鍛冶町の家に歿す年七十四下谷龍泉寺に葬る（古今狂歌人物誌）

タキハラ　ソウカン　瀧原宗閑　天保中の歌人なり鹽竈寺宮の御内人なり通稱將監蘆庵の門に入て詠歌を修し徒を延て敎示す天保十一年歿す（鑒定便覽）

タギマ　ケハヤ　當麻蹶速　相撲者なり當麻邑の人（野見宿禰を見よ）

タギマ　ヒロマロ　當摩廣麻呂　小錦上たり天武帝十三年に直大參に進み卒す壬申の功を以て直大壹を贈らる（大日本史）

タギマ　マロタフノ　ツマ　當摩摩呂太夫妻　萬葉作者の一に列し和歌を善くするを以て其の名を知らる詠歌は戰せて其の書に在り（萬葉集作者履歷）

タキ　ムリヤウ　瀧無量　雲州の儒者なり、文化十三年秋の大學章圖を著せり古本大學を讀み沈潜の餘之れが圖解を作りしものなり龜田鵬齋之れに叙を加へて訓詁を煩はさずして三綱領八條目の義を法象する所以のもの灼然として舉げて目前に在りと賞讃し太田錦城は又同じく叙して一經の大義一目了然其後學を惠む其功亦偉なり好學の士之を座右に置き朝夕披玩すれば修身治人の義に於て其要領を得るに尙しと稱美せり亦以て同書の價値と無量の學殖とを窺ふべし無量名は清、其歿年詳ならず（古本大學圖解）

タキモト　ヨシテル　瀧本美輝　陸軍步兵大佐なり和歌山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備步兵第卅八聯隊附として從軍中三十八年二月某日清國盛京省海城にて病に罹り同年五月一日自宅に於て病死す戰功に依り勳三等功三級に叙せらる

タキモトバウ　ケンジヨウ　瀧本坊憲乘　乘淳の嗣にして昭乘三世なり俗姓は藤堂氏始め鐘樓の坊に住す其書篙井に祖翁を法とす元祿五年正月六日寂す（神立氏記、續本朝書史）

タキモトバウ　ジツジヨウ　瀧本坊實乘「ジツジヨウ」

タキモトバウ　ジヨウジユン　瀧本坊乘淳　書家なり松花堂の嗣たり書法頗ぶる妙所を得たり（鑒定便覽）

タキモトバウ　ジヨウチン　瀧本坊乘鎭　書家なり松花堂の三世不生軒と號す能く其法を得て殊に名あり（鑒定便覽）

タキモトバウ　セウジヨウ　瀧本坊昭乘「ヤハタシヨウクワダウ」

タキヤマ　ツヨシ　瀧山剛　陸軍步兵中尉なり鹿兒島縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ第五師團步兵第四十一聯隊附として從軍中三十七年十月十六日清國沙河附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タキヤマ　ヤジベヱ　瀧山彌次兵衞　江戸本町二丁目に住し家作に巧なるを以て名あり嘗て家の表面は覆ふに瓦を以てし裏の半面は葺くに板を以てす是に於て人皆謂らく彌次兵衞は家を半分瓦にて葺たりと賞譽巳まず遂に綽號を半瓦彌次兵衞と云ふ是れ江戸瓦葺の始なりと云へり（嬉遊笑覽）

ダギヨク　蛇玉「ジヤギヨク」

タキ　ランケイ　多紀藍溪　德川幕府の醫員なり名は元德（德一に悳に作る）字は仲明安元と稱す藍溪は其の號、名醫丹波康頼の裔、高祖元泰自ら族を別ち金保氏となす始め口科を以て家康に仕ふ父元孝に及びて請て今姓に改め内科に復す藍溪少にして氣を負ふ先世名家なるを以て其の業を振興せんと欲す窮閻漏屋求めて應ぜざるなし張介賓の方を好み後長沙に溯る其の術益〻精し初め元孝學舍を設け以て講習の道を廣めんと欲し上請して城北天文臺の故地を得新に濟壽館を刱む生徒日に聚る藍溪遺志を繼ぎ更に之を開拓す規模大に具る後ち災に遇て再造す土木經營身其の責に任じ家產之が爲めに一空す然れども以て悳と爲さず安永中侍醫に擢てられ法眼に叙し天明の末法印に進み號を永壽院と賜ふ白河侯政を執り百度維れ革まる藍溪獻替する所あり官醫の宿弊頓に改る又請て製藥所を設け以て進用の藥劑に備ふ尋て旨あり其學舍に即き更に修飾を加へ醫官の子弟に命じて悉く就學せしむ仍りて藍溪を以て敎諭となす是に於て家塾を轉じて國學となす大府の爲めに一盛典を立つ皆な藍溪の功なり勞を以て別に俸三十口歲支百兩を賜ひ子孫をして世〻學務を總べしむ藍溪は家治家齊の二將軍に歷事し進見する每に便ち攝養の方を面陳し或は其の說を錄し以て進む嘗て言ふ我の職たる豈に止だ病を候し劑を處するのみならんや平時調護豫め病源を防ぐ此を要務となすと其無事家に在る必ず晨起正服す人其故を問ふ曰く身職を執匕に奉ず召を承けて稽滯せば何を以て職に供せんと後疾を以て致仕す享和元年五月十四日歿す年七十藍溪兼て箏を善くす初め小野田東川に就て越師の箏法を受け出藍の稱あり幸田親盈設樂純如杉浦梅盛等と名を齊うす東川歿するに臨みて藍溪に箏を贈くる越師の遺物なり後ち災

に罹る藍溪歎じて曰く我道已みなん吾れ豈に無靈を聊して樂しむ者ならんやと復た箏を操らず著はす所廣惠濟急方、醫家初訓、醫學平言、養生大意あり（皇國名醫傳、香亭雅談、續諸家人物誌）

タキリビメノ　カミ　多紀理毘賣神　一に田心姬命と書す又湍津島比賣神と號す宗像奧津宮に鎭座す又妹市杵島姬神と共に嚴島に祀らる（タケハヤスサノヲノミコトの所を見よ）後大國主神と婚して味鉏高日子根神、下照姬神を生む（古事記）

タキ　レキソウ　多紀櫟窓「タキケイザン」

タキワウ　瀧王　大和千手院の刀匠にして重弘の子なり或は瀧に作る一名兼持或は伊豫房と號し奈良に住すと又云嘉祿比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タクアン　澤庵　禪僧なり名は宗彭澤庵は其號天正元年を以て但州出石邑に生る姓は平氏三浦介義明の後ち秋庭の族なり澤庵甫めて十歲州の唱念寺に投じ髮を剃りて淨土宗の僧と爲る年十四勝福寺に入り禪を希先西堂に學ぶ先便ち歸戒を授け且つ法諱を與へて秀喜と曰ふ澤庵常に先の道話を聞きて心に遊徧方參の志を抱く先順世の後ち董甫仲僊〻宗鏡丈室に居す澤庵則ち仲に學び參禪して倦むことなし仲、洛に歸へるに及びて澤庵隨ひて大德寺に抵り錫を掛けて留り名を改めて宗彭と曰ふ玆に眞如文西公仁公泉南の大安寺に寓す仁は文字に長ずる者なり澤庵之を聞き一朝錫を飛ばして泉南に到り仁に依り書經に硏覃す一稔冬を凌ぎ一葛夏を度たる一日海會寺に祭あり澤庵亦之に預る時に一葛甚だ垢汚せるを以て澤庵躬ら之を井水に濯ぎ朝日に晒して其乾くを待つ同行の僧戸を扣きて曰く共に齋に赴くべしと澤庵其葛衣の更披す可き者なし乃ち裸體なるを以ての故に戸を閉ぢて面せず彼をして先づ赴むかしむ鏡江州に移り又た南京に移る澤庵輙ち隨侍す既にして鏡寂す澤庵乃ち陽春祖塔を守る慶長丁未澤庵年三十五一衆澤庵を推して大德第一座に置き黃德禪席を繼がしむ是時又た龍典山南宗禪寺を領し山に住むこと三月退鼓を鳴らし一褐を唱へて衆に辭し出てゝ江南に歸へる道俗歡迎して前後に引隨す亥の年に豐臣秀頼澤庵の道譽を聞き使を使はして之を大阪に召す澤庵固辭して起たず細川忠興一寺を豐の前州に創し澤庵に住持たらんとを請ふ澤庵辭するを再三終に就かず八月朔洛の大僊院に住す是より南宗に大僊に一往一來處に隨ひて衆を匡す澤庵天資世事を厭ふ乃ち紛冗を泉の天下邑に避く元和丁巳筑前守黑田長政宰府の崇福寺を以て澤庵を招く澤庵赴かず又た南京の漢國に赴き芳林庵に寓し幾はくもなく城州薪の妙勝寺に到り一庵に僑居す後ち但の粉里に歸り第宇を宗鏡の山後に結びて屏居す丁卯偶〻但を出てゝ洛に入る帝澤庵の風采を聞き之を召す澤庵固辭して朝せず又た但に歸へる泉南の谷氏祥雲寺を創し澤庵を延て開山の祖となす澤庵禮命に應じて開堂慶讃す是より先き將軍家康法禁を大德、妙心二寺に下して曰く其道機僧臘兼備せざる者猥りに住山を許す可らずと然れども家康薨じて後ち台聽に達せず勅を奉じて大德に出世する者凡そ十四五輩寬永丙寅幕府重ねて嚴制を兩寺に加ふ明年澤庵玉室翁の法嗣正隱知を舉げて本寺席を董さしむ是に於て幕府澤庵及び玉室江月を江戸に召して是非を詰問す時に衆議蜂起す然れども澤庵玉室と固く執りて前心を改めず幕府乃ち有司に命して玉室を奧の棚倉に謫し澤庵を羽の上城に貶す居ること四年幕府其老を憐みて之を召還し尋て洛寺に歸らしむ上皇澤庵を召す澤庵仙宮に入りて玄談し洛を辭して但山に淵潛す明年又台命を承けて山陰を出づ一日將軍澤庵及び玉室を江戸城に召して宗門の旨意を問ふ澤庵應對して皆な旨に稱ふ是より屢〻城内に侍して佛祖の言敎を敷演し恩遇甚だ渥し戊寅中澤庵洛に赴く上皇國師號を賜ふ澤庵固辭して受けず因て奏して大祖正眼禪師に國師號を賜はらんことを請ふ上皇其言を嘉して乃ち大現國師を賜ふ寬永十五年幕府地を武州品川に相して新に巨刹を創し山を萬松と曰ひ寺を東海と曰ふ明年幕府澤庵を請して第一世と爲す澤庵亦た偈を作りて之を慶す一日台駕寺に入りて和歌高製あり澤庵亦た和歌を題して新寺の遠大を祝す酒井忠勝長松院を創し堀田正盛臨川院を創し細川光高妙解院を創し小出吉觀雲龍院を創し皆な東海の境致と爲す將軍又た邸館を江戸に賜ひて栖止休息の處となす棟營甚はだ壯嚴なり晩に東海寺中に春雨菴を建てゝ之に隱す春翁又暮翁と號す正保二年十二月十一日病みて死す年七十三道俗弔賻し衆歎惜す澤庵兼て能書俳諧に名あり又小堀政一に茶道を學ぶ又た今日用ふる所の香物は澤庵の創始する所なりと云ふ（事實文編細流部）

タクガク　拓岳「アマリゲンチヤウ」

タクガク　拓岳「アヲキトウアン」

タクガン　琢眼「カツヤマタクガン」

タク　ガンラクサイ　多久顏樂齋　佐賀藩老多久氏の族にして其儒者なり名は安成通稱造酒、學校創立に與つて力あり敬物要語一編を著して邑主多久氏に獻ず元文二年九月十八日死す年九十（日本敎育史資料）

タク　キンシヨ　澤琴所「サハムラキンシヨ」

タク　キヨクザン　澤旭山「シラザハキヨクザン」

タククワダウ　澤華堂「ツバキチンザン」

タクサイ　卓齋「ナカムラタクサイ」

タクサイ　鐸齋「カイトウセンリ」

タクサンジン　澤山人　狂歌師なり本姓石川氏にして稻穗庵と號す武藏國南多摩郡栗ノ須村の產なり通稱を喜平次といふ早く江戸に出て本銀町に住せる某の養子となる蜀山人の手跡を學びその書酷似せり老後故有て故鄉の實家に歸り慶應三年十月十六日歿す年六十七辭世の歌に「よみ盡し世をふる筆の命毛もきのふけふかの別れなるらん」石川家所有地の内に葬る（古今狂歌人物誌）

タクシウ　琢舟「カツヤマタクシウ」

タクシウ　卓洲　禪僧なり諱胡僊卓洲は其字尾州海西郡津島鄉の人鈴木氏天資聰敏年十五總見寺の祥鳳和尙を拜し剃髮す十九歲にして始めて四方に遊び遂に永田寶林寺の峨山和尙に參し其の侍たる間前後十四年潛行密修人測り得る莫し寬政八年入て總見寺に居す後諸方に於て法莚を開き提唱をなす文化十年詔により花園に出世し紫衣を賜ふ天保四年癸巳八月廿八日七十四にして化す師法を嗣ぐ者精洲は總見に住す其法弟胡雄は遠の貞永に住し雪洲と號す玄都は濃の西明に住し慧廰と號す慧讓は東都松源に住し昌山と號す同年十月廿二日諡號を大道圓鑑禪師と賜ふ（禪林僧寶傳）

タクシン　卓信「カノシユンガ」

タクスキ 澤水「クシダニタクスキ」
タクタイ 卓袋 俳諧師なり舘屋與兵衛と稱す伊賀の人其歿年詳ならず（俳林小傳）
タククダウ 琢堂「ハマナカタクダウ」
タククダウ 卓堂「ガンタイ」
タクチ 卓池「ツルダタクチ」
タクチ イヘモリ 田口家守 和歌を善くして萬葉作者の一に列す（萬葉集作者覆歴）

タグチ ウキチ 田口卯吉 經濟學者なり名は鉉字は子玉鼎軒と號す田口氏通稱は卯吉後ち專ら通稱み用ゆ其祖及び父皆幕府に仕へて徒士に班す祖愼左衛門は儒官佐藤一齋の子にして入つて田口氏を嗣ぎしか男子なかりしかば旗下の士四山氏の子經郎を養つて長女町子に配し家を襲かしむ卯吉は則ち其子にして安政二年四月二十九日を以て江戸に生れ五歳にして父を喪ひ家道艱難にして教養劬育一に母氏の手に賴る慶應二年父祖の後を襲ぎて亦徒士となる德川氏大政を奉還し幕臣多く士籍を解くに及び母を奉じて橫濱に移り一貝商戸に寓し艱苦を嘗む明治元年德川氏靜岡に封ぜられ舊士の復歸を許すに及び卯吉亦明年を以て歸藩し沼津小學校に入り尋て兵學校に入る蓋し其志軍醫となるに在りき既にして封建廢せられ藩の兵學校陸軍省の管轄に歸するに及び宿志を醵し東京に出て丶大藏省內醵譯局の生員に擧げられ英語及び經濟學を學ぶ居ること三年業を卒へて大藏省紙幣寮に出仕す然れども其志仕官にあらず遂に十一年官を辭し日本經濟論を著して自由貿易の說を唱ふ其後來學說政論の基礎此に樹立せり十二年同志と共に經濟雜誌を刊行し其社長となり或は當時勃興の一種の保護特權專賣の風潮に抗し斷然自由貿易論の中堅となり傍ら經濟學協會を起して學理と實地とを研窮するの機關と爲せり又嘲鳴社に入りて自由立憲主義を鼓吹し自由新聞に助筆し專ら經濟政治の論文を擔任せり爾來或は樣式取引所の肝煎となり或は開墾鐵道會社を創立して獨立私設鐵道會社の模範を示さんとし推されて其社長となり或は南島商會を起して遠く南島貿易の先驅を爲せり公務の方面には東京府市區會の各議員となり又本郷教育會長に擧げられ東京府會常置委員東京市參事會員農工商高等會議々員東京商業會議所特別會員博覽會事務員貨幣制度調査委員となり爾後每回當選し三十三年團匪の亂後北淸を視察し二年人體組織攬要を起稿し十七年三卷を完結す十四年七月東京大學教授に任じ十九年一月奏任官二等に叙せられ二十年歐洲留學を命ぜらる二十一年六月文淸占領地を視察せり是より先三十二年法學博士の學位を授與せられ日露戰役後の國家經營に跡き大に期する所ありしが三十八年四月病を以て遊去す年五十一卯吉人と爲り自信に富み自ら奉すること澹泊にして社會の爲めに計ること深切なり外溫和にして內に勁節を懷き自ら守ること堅固にして人に對するに同情饒く其誘掖に依りて世に名を爲せるもの少からず著書としては日本經濟論を初めとして日本開化小史、支那開化小史、經濟策、續經濟策、洋銀排除論、內地雜居居留地制度、條約改正論、商業史歌、樂天錄、古代研究、破黃禍論等あり而して其監督の下に經濟雜誌社より出版したるものには大日本人名辭書、日本社會事業、醵譯には政事類典あり尙其他國史大系、續國史大系、群書類從、續群書類從、德川實記、續德川實記等あり

タグチ ウマナガ 田口馬長 和歌を善くして萬葉作者の一に列す（萬葉集作者覆歴）

タグチ オクジ 田口億次 陸軍少兵大尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第七師團歩兵第廿六聯隊附として從軍中廿七年十一月廿日旅順要塞赤坂山戰鬪の際負傷同十二月八日第一師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タグチ オホト 田口大戸 和歌を善くす寶字四年六位を歷て從五位下に叙せられ六年日向守となり兵馬正に遷り八年上野介となり寶龜八年從五位上に叙せらる（萬葉集作者覆歴）

タグチ カウソン 田口江村「イシアヒブンザウ」

タグチ カズヨシ 田口和美 解剖學者なふ急に舟に御し將士をして陸に拒がしむべしと議乃ち決す義經果して覇ひ來る是より攻戰已まず源氏の軍日に益々盛にして平軍支へず喪奥を奉じて志度に遯け又屬申付けらる六年文部省八等出仕に補せられ十年人體解剖攬要を起稿し十五年に至り全部十五册を完結す十四年人體組織攬要を起稿し十七年三卷を完結す十四年七月東京大學教授に任じ十九年一月奏任官二等に叙せられ二十年歐洲留學を命ぜらる二十一年六月醫學博士の學位を授與せられ二十五年二月從五位に叙せらる二十八年勳五等に叙し瑞寶章を授けられ二十九年更に勳四等に叙せらる三十一年本俸一級俸を賜ひ三十二年高等官一等に陞叙せられ又從四位勳三等に叙せらる晩年肺を患へ三十七年二月四日六十六歳を以て逝く病危篤に臨み特旨を以て勳位一等を進め正四位勳二等に叙し瑞寶章を授けらる染井の墓地に葬る後東京帝國大學醫科大學構內に紀念の銅像を建設して其高風を傳ふ

タグチ カメジラウ 田口龜次郎 陸軍歩兵少尉なり岐阜縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第三十六聯隊附として從軍中廿七年九月十九日旅順要塞龍眼北方角面堡壘に於て戰死す戰功に依り勳七等功六級に叙せらる

タグチ キヨヒロ 田口清熙 陸軍歩兵少尉なり秋田縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ後備歩兵第十七聯隊附として從軍中廿八年一月廿八日清國盛京省老橋に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タグチ シゲヨシ 田口成能 阿波の豪族なり壽永年間平氏源氏の爲に破られ宗盛一族を率ゐ安德帝を奉じて難を西海に避け將に再擧を謀らんとす時に成能手騎を以て之に應じ爲に四國を徇へ驗すに順逆を以てす是に於て來り屈するもの甚だ多く因りて行宮を屋島に建て遂に山陽道を徇ふ是より平氏の兵勢再び張り帝を奉じて福原を復し兵を集めて自ら守る既にして源頼朝の二弟、範頼義經大擧して來り攻め平氏大敗城陷り宗族將士相率ゐて四奔す三年春平氏長門の引島に城き門司關を扼し兄鳥を復す時に義經阿波より來り攻むるの報あり而して來だ之を必ずず明日高松の里火起るを望見し成能謂て曰く是れ敵の來り襲ふなり請

退きて引島を保つ而して範頼大衆を以て豐後に在りと聞き則ち旋りて壇浦に泊し死力を盡して防戰す時に源氏の軍海陸に充塞し兵艦三千四面より來り攻む勝敗の決すや日あり是より先き成能其の子成直を遣はし兵士三千を以て伊豫を徇へしむ時に義經其の將伊勢義盛に命じ往きて成直に戰き降を勸む成直之を諾し且義經の命を以て書を作り父成能を召す是に於て成能欺を源氏に送り而して平氏の密策を探らんと欲し尙ほ留りて軍に在り後ち決戰相迫るに及び俄に去りて知る所の策を告げ相ひ援けて平氏を滅すと云ふ（日本外史）

タクチダウジン 澤雄道人「ホリキキウウ」

タグチ ブンザウ 田口文藏「イシアヒブンザウ」

タグチ ベイサク 田口米作 畫家なり野州下都賀郡野田村の人東京芝西久保櫻川町に居る仍て櫻川と號す又米作と欺す明治六年上京し父治三郎に從ひ米穀業を助け旁ら中村晩山に就き後小林清親に學んで殊に狂畫に長ず又古書古器を愛し鑑識に長ず三十六年一月十八日歿す年四十

タグチ マスヒト 田口益人 其の先は武內宿禰に出づ數世の孫蝦蟇臣大和國高市郡田口村に家す因て氏とす益人和歌を善くし萬葉作者の一に列す慶雲元年六位を歷て從五位下に叙せらる和銅元年從五位上に叙し上野守に任ぜらる二年右兵衛と爲り尋で卒す後ち正五位下を贈らる（萬葉集作者覆歴）

タグチ リウショ 田口柳所 詩人なり名は興治字は子則柳所は其號なり又闌鶴、適齋等の別號有り初め淺草七軒街に住し後ち下谷南稻荷街に移り晩年谷中芋阪に隱る是より先き詩を大沼枕山に畫を福島柳圃に學び諸名流と翰墨の交を爲す性酷だ酒を嗜み醉へば則ち盤礴筆を紙りて墨に和し或は畫或は詩を銀箋に題す其家素より富む清風の室攬翠の窓圖書堆を成す琴瑟彷彿に在り悠然として其間に起臥し老の將に至らんとするを知らざる者の如し常に杉浦梅潭、中根半嶺、小島董園の諸老と吟社を小四湖上に結び不如學と曰ふ明治廿五年六月二十七日歿す年五十四谷中天王寺に葬る（台北先賢傳）

タクチヒメノミコト 栲幡千々姫命 高皇產靈命の女なり日本紀一書に天万栲幡千幡姫に作る忍穗耳命の妃となり瓊々杵命を生む（古語拾遺）

タクブ 卓燕「アヲキタクブ」
タクブン 琢文「カツヤマタクブン」
タクマ エイガ 宅磨榮賀 畫家宅磨氏の一族なるか父子傳統詳ならず宅磨の家名を嗣ぎ畫を以て法眼に叙せらる每に釋迦文珠普賢の三尊を畫て自ら宅磨と書す其の佛像を見るに元の顏輝の筆意に似たり是より先此の體を見ず蓋倭畫の古風を變じて新に漢土の筆法を學ぶこと恐くは此に始まるか正和年中の人、遺蹟著名の品は墨畫觀音の像、瀧見布袋之圖、十六羅漢、摩古仙人、菅神之影、眞畫布袋之圖とす（本朝畫史、扶桑畫人傳）

タクマ ゲンザエモン 宅間源左衛門 大阪の數學者なり宅間流を創す（大日本數學史）

タクマ シキブダイフ 宅間式部大夫 蓋し宅磨派の畫工か元德二年五月十七日歿す黑川道祐の日次紀事に云く畫工宅間は了尊の裔なりと然れども式部大夫の死は了尊の死より僅に四年の後に在れば當に其子弟たるべきか（皇朝名畫拾遺）

タクマ ジャウクワウ 宅磨淨宏 宅磨派の畫人なり法眼に叙せらる鎌倉法華堂の地藏尊は其畫く所なり嘉慶中の人（皇朝名畫拾遺、扶桑畫人傳）

タクマ ショウガ 宅磨勝賀 畫家宅磨の宗家なり畫を以て法眼に叙せらる爲久の子、澄賀の弟なりと云ふ澄賀の家を嗣ぐ建久二年東寺新に屏風を造り勝賀をして十二天を爲さしむ其種字は仁和寺宮二品守覺法親王の筆蹟なり勝賀一時武藏に住す住所今殘りて風十六羅漢、毘沙門天の像を畫く其筆法眼坂と曰ふ元久年中の人遺蹟著名の品は十二天扉

タクマ ジラウ 託摩二郎 陸軍歩兵少尉なり宮城縣仙臺の人明治三十五年歩兵少尉に任ぜられ歩兵第二十九聯隊附となる三十七年日露戰を交ふるに當り第一軍に屬して出征し五月一日九連城攻擊に際し鬱河の戰鬪に力戰して功あり感狀を賜はるこの戰役に遂に負傷し義州戰地定立病院に後送され同月六日遂に死す年二十五戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タクマ タメトキ 宅磨爲辰 繪師なり文治年間の人宅磨先生爲辰と稱す高雄山神護寺の納涼房大師の影像を畫く（名勝志、承平實錄、槐圖書考）

タクマ タメトホ 宅磨爲遠 畫家宅磨の宗家なり姓は藤原豐前守一說には豐後守に作る）に任ぜられ近衛帝に仕ふ晩に剃髮して勝知と云ひ法印に叙せらる佛像を畫くに名あり時に近衛帝勅願あり高野山覺王院を造り爲遠をして其の堂中の壁に畫かしむ遺蹟著名の品は十二天扉繪、佛畫、地藏尊、阿彌陀の像とす（本朝畫史、扶桑畫人傳）

タクマ タメナリ 宅磨爲成 畫家宅磨の宗家なり爲氏の子、畫を善くするの聞えありて繪所の長者となる宇治平等院に於て扉の上に畫く巨勢弘高と同じく世に鳴る長曆年中の人、遺蹟著名の品は平等院鳳凰堂壁井に扉繪地藏尊周童子とす（扶桑畫人傳）

タクマ タメヒサ 宅磨爲久 畫家宅磨の宗家なり姓は藤原、爲遠の三子畫を以て家を繼ぎ下總守に任ぜらる畫圖に長じて當時無雙の名を得たり壽永中源頼朝爲久を鎌倉に召して觀世音の像を畫かしむ爲久衣冠を裝ひて是を畫き成て都に歸る時に頼朝餞くるに馬を以てす遺蹟著名の品は十六羅漢殘缺、八大荒神とす（扶桑畫人傳）

タクマ タメユキ 宅磨爲行 畫家宅磨の宗家なり姓は藤原爲久の子畫を能するを以て左近將監に任ぜらる又將軍頼經に仕て寵を受く爲行畫に生氣活動あり兼て雜畫を善くす人皆なを之を愛すと云ふ寛喜年中の人（扶桑畫人傳）

タクマ チョウガ 宅磨澄賀 畫家宅磨の宗家なり爲久の子、畫を善くする者なり又家を繼ぎ法印に任ぜらる佛像人物は生氣活動ありて神妙に臻る兼て雜畫を工にす嘗て九條關白兼實の依託を受て法然上人の眞像を寫し頗る其意に適ふ其の圖今尙ほ嵯峨二尊院にありと云ふ世に所謂足引の影是なり爾後凡そ上人の像を畫かんと欲する者は皆法を此に取る故に世間に散

在せる上人の像は千萬ありと雖も悉く同體一趣なりと云ふ栂尾高山寺に春日住吉二神の古像あり世に傳へ云ふ二神毎に來りて法を明惠上人に受く澄賀往て之を見んことを請ふ上人曰く凡眼の人之を拜する時は恐らくは害あらんと澄賀固く請ひて已まず遂に姑て之を許す澄賀竊かに摸寫して歸京す途中馬より墜て死す上人の言果して驗ありとあり其の言信ず可らずと雖も今宅磨の墓は嚕濕に在り然らば此の地に終りしものか澄賀寫す所の二神の像は栂尾の神像即ち此れなり建仁年中の人、遺蹟の品は阿彌陀、不動降三世、十二天屏風、法然上人の像、弘岡三尊、春日影響の圖とす（鑒定便覽、本朝畫史、扶桑畫人傳）

タクマ　ハンロク　託間樊六　勤王家なり諱は敬敷神風と號す因州藩士益臧の長子なり幼より槍術を好み又同藩士淺田主計に學び後江戸に行き齋藤彌九郎に就きて更に其技を練習し遂に一派を開て神風流と稱せり文久三年藩主に扈從して京都に在りしが男山行幸の日德大寺右大將の隨身を命ぜられ朝廷より當日著用したる冠袍を下賜せられしが痛く感激し常に之を座右に置き益々勤王の志を勵みしと云ふ同藩の士吉田直人中野治平等と事を與にし藩主側役黒部權之助等四人を切害し爲に久しく幽囚せられしが慶應二年七月幕府長州再征の師を出すと聞き脱獄して長州に赴かんとし途中出雲手結浦にて松江藩兵に抑止せられ遂に黒部等の子弟と藩兵とに襲撃せられて同志と共に之に死す時に年三十二明治二十四年十二月特旨を以て正五位を贈らる（殉難錄稿）

タクマ　ミチヤス　宅間道保　舊鹿兒島藩士にして明治十年西南役に於て警部補を以て別働隊第三旅團附となりて從軍中二月二十七日肥後國飽田郡坪井に於て戰死す

タクイシ　ユウザウ　武石祐三　陸軍少尉なり秋田縣出身にして明治卅七年日露戰役に於て第二師團歩兵第四聯隊附として從軍中卅七年十月十三日清國盛京省朝鮮嶺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タクマ　リャウガ　宅磨良賀　畫人なり書を以て法眼に叙せらる承元二年和州當麻寺の僧鏡忍坊、其喜坊、惠阿彌坊等心を合せて新曼多羅を圖せんと欲し按察使藤原光親に由りて之を上御門院に奏す則繪師良賀及び源慶に詔して之を圖せしむ今の當麻新曼多羅是なり嘉祿年中の人遺蹟著名の品を十二天當麻寺新曼荼羅とす（扶桑畫人傳）

タクマ　レウソン　宅磨了尊　宅磨派の畫人なり嘉暦二年九月二日死す時に年六十三（皇朝名畫拾遺、扶桑畫人傳）

タクミ　トラノスケ　内匠「カノヒデノブ」

タクミ　セウジョウ　内匠虎之助「トサ卓郎「ゴザンダウタクラウ」

タクラウ　タクワウ　多光「ミツノタクワウ」

タクワウ　タクアキ　澤翁「クチキノリツナ」武昭　薩摩の刀匠にして元平の門人なり染川作左衛門と稱す文化年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タクイハタツノ　ミコト　武磐龍命　神武天皇の孫にして神八井耳命の第五子なり肥後に住し日下部の吉見神の女阿蘇姫を娶りて速甕玉命を生む三神合祀して阿蘇宮と云ふ

タクガキ　ナホアツ　竹垣直溫　姓は藤原宇は叔黍、祖父は喜道、父は直昭共に德川幕府の司稅たり直溫亦た其職に任じて世に名あり始め北越司稅となり中こゝ撰河播三州に在み晩に關東に遷る部する所の地六州十一萬石並し其在む所毎に治功最と稱す故を以て其功に報ゆると云ふ直溫始め任に在むや行部の次て常毛二州に至る土壤磽确にして田園荒蕪郷に空宅あり里に居民なし直溫父老を召し其故を叩問して貧民子を生て育てず生めば則ち墓上に壓殺するを以て風となし恬として其忍を知らず且つ賦課歲に重り負債日に積みて督責迫促、報償するに由なく是に於てか貧民柔惰なる者逃散して末利を逐ひ強梁豪横なる者涛俠に交て賦課闘爭此が爲に屢〻與り鼠竊狗盜所在に發し生齒耗して田園荒るゝに至りしを知る直溫深く之を憂ひ先づ法制を建てゝ嚴に子を殺すを禁じ隣保に講じて子を生むの家は月に資財を給し以て育兒の費となす若し其の母死せば則に乳母の資を賜ふ是に於て部内の兒皆な全治を得又た建議して北越の窮民數口を募り田と居室を授け農具を給し以て草萊を墾闢せしむ越俄能く農桑を勉め能く家を興し或は倉廩を建て以て其の儲蓄を移すに至る是に於て封内の田能く昔なる舊に復することを得たり凡そ封内の民老て窮する者は皆な其の資糧を給し以て其の餘年を終らしむ又た官府に申して公廨を常の上郷、毛の貞岡に建て庸其匡州等をして其部事を督察せしむ直溫の關東に遷在するは實に寛政五年なり文化十年に至りて凡そ二十年間流民の原籍に復する者百六十餘人兒子の能く育する三千二百餘人越民の是土に歸する者凡そ三百餘戸千七百餘口文化六年從六位に叙し以て其の績を賞す十一年直溫老病を以て骸骨を乞ふ優勞して許さず乃ち時服一襲を賜ひ以て其の勞を旌はす是の歳十一月病みて歿す年七十七直溫夙とに勞を好み經綸の才を抱きて能く民隱を恤み能く公調を緩め教導撫育は皆な其の丹心に出づ是故に在職三十餘年花む所の地皆な能く庶を富ませ善に勵む民之を愛慕して父母の如くす（事實文纂）

タクカハ　オウサイ　竹川應齋　挿花家なり理左衛門と稱す花は石崎松庵に就き學び初めて陰陽及三才の議を定む猶能阿彌に就きて款識の術を習ひ一体に就きて禮を學ぶなど頗風流の士なり永正十六年九月歿す年七十五（千羽喜三氏贈）

タクカハ　カウジュン　武川幸順　醫者なり字は建德南山と號す京師の人小見科の一名家と稱せらる法眼に叙す國學家本居宣長此翁の塾にありて學べり安永九年歿す年五十六（鑒定便覽）

タクカハ　チクサイ　竹川竹齋　伊勢國飯野郡射和村の人にして初め彦三郎後彦左衛門と稱す家世々兩替を業として富む幼にして江戸に出て家業を練習す傍常に閑を偷んで書を讀み又礫又右衛門に從て柔術を學ぶ後た大阪に遊學し專ら經濟の田地漸く荒廢して一村貧窮に陷るを歎き之を救濟するの志ありしが會〻天保の飢饉に際し奮つて私財を抛ち貯米を散じて工錢に換へ水利を通じ新田を開き廢田を興すこと三拾七町餘實に天保八年五月に至りて功竣る一村漸く富むに至る竹齋更に射和文庫を興し圖書壹萬

卷を備へて人智の開發を力め自ら村民を集めて書を講じ殖産の事を勸め茶園を拓かしめ桑楮松杉檜肉桂梅等の苗を興へて不毛の地に播植せしむ寛永六年米艦通好を求め海内騷然たり竹齋病を奮つて海防護國論、護國後論を著し又島羽藩鑄砲の擧を聞き悉く銅樋を撤して獻じ別に彈藥賞五十兩を納る安政二年陶窯を園中に開き萬古燒の法を傳へて之を製し内山宗五郎をして其業を督せしむ射和萬古の名世に傳る（種德園又雲錦園の印を用ふ）慶應二年三月幕府召して國事を諮ふ竹齋病を力めて至り民力の休養、國産增殖の策を獻ず後再び召されて蝦夷開拓物産輸出規則の意見を諮はる明治維新に至り上書して殖産興利の事を論じ各地に學校の興るを喜びて前後圖書を獻ずること五千五百卷又書を著して農商を勸誘す明治十五年十一月死す年七十四明治十九年三重縣鑑其偉功を追賞して金五十圓を下賜せり（大日本產業事蹟、陶工傳統志）

タクキヨ　武清　後藤氏播磨の刀匠にして後下總佐倉に從る正繁の門人にして文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タククニ　武國　藤原姓下坂氏太兵衛と稱す筑後久留米の刀匠にして茂勝の子なり延寶寶永年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）二世武國は後清修と更む下坂總市と稱す正德年間の人亦久留米に住す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タククラヤ　セウテキ　竹倉屋紹滴　茶人なり珠光に學び茶道を能くす或は云ふ中殿屋又は籠屋と泉州堺に住し引摺宗理と名を齊うす或は紹鷗門と云ふ（茶人系傳全集）

タクコシ　レイ　竹越玲　陸軍三等醫なり神奈川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第九師團衛生豫備員として從軍中卅八年八月廿三日清國盛京省通江口にて病に罹り同九月一日鐵嶺兵站病院に於て病死す

タクサザガ　武貞　攝津の刀匠にして慶應年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タクサ　サダクニ　多氣貞國　清幹の玄孫なり常陸府中に居し府中大掾と稱す永祿天正の際北條氏康氏政の兵威誇張し武山東に羅き師を下野に出す諸豪氏政に下野に催服す既にして氏政武田信玄と兵を結び連年解け常野の二州北條氏に背き佐竹氏に附く氏政怒て師を下野の國境に出し佐竹義重と佐野に戰ふ良國兵を率ゐて佐竹氏を援け進みて小山の城外に至る相入石原主膳兵を率ゐて貞國の後路を斷つ貞國遂に戰甚だ苦む義重援みなす能はず貞國軍潰え敗れ歸る士卒之が爲めに殺さるゝ者二百餘人勢ひ頗る衰頹す貞國卒す子浮鈴嗣き府中の大掾と稱す天正十八年關白秀吉佐竹義重をして常陸の守護となす次年二月淨幹義重のために亡さる（野史）

タクサト　ヒロ　武里　陸奥の刀匠にして建武比の人或は云ふ宮城郡に住す秀衡の刀匠なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タクザハ　ゴンエモン　竹澤權右衛門　井上播磨掾の門人にして淨瑠璃節を善くし三絃に巧みなり初め井上な冒し後竹澤に改む義太夫節三絃の開祖たり今ま三絃家に野澤勘澤の稱あるは多く是に因すと云ふ（淨瑠璃大系譜）

タクザハ　ゼンシラウ　竹澤善四郎　三絃家なり大阪の人竹澤彌七野澤喜八郎等と名を齊うす（聲曲類纂）

タクザハ　ヤウケイ　竹澤養溪　畫家なり名は惟房文化五年正月二十一日歿す淺草寺町北本然寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

タクザハ　ヤシチ　竹澤彌七　三絃家なり撫右衛門の子父と共に世に名あり（聲曲類纂）

タクシウチ　スクネ　武内宿禰　孝元帝の皇子彦太忍信命より出づ彦太忍信、屋主忍男武雄心命を生む屋主忍男武雄心皇子帝の三年に命を奉じて祀伊の群神を祭る阿備柏原に至り居るも九年菟道彦の女影媛を娶て武内を生む廿五年武内命を奉じて東北諸國の情態を巡察す廿七年歸りて奏す東夷に日高見國あり男女交身椎結裏性勇悍是を殺夷と曰ふ土地沃饒破衍擊ちて之を取る可しと四十年に至りて東夷叛亂す帝遂に日本武尊に詔して之を討たしむ五十一年正月帝群臣を延に召して宴を賜ふも數日唯椎足彦皇子及び武内宴會に赴かず共に門下に在りて戒嚴す帝之を喜ぶ是歳八月遂に皇子を立て皇太子と爲す初め武内威務帝と同日に生る甚相歡洽す帝位に即くに及て大臣に拜し以て之を寵奠す大臣は此より始る仲哀帝熊襲を征して筑紫に崩ずるに及びて武内皇后と謀り秘して喪を發せず后潛に粹宮を以て武内に附し穴門に遷さしむ時に軍國事務多端葬るとを得ず豐浦宮に殯し歸る后親ら三韓を征し還りて筑紫に至り應神帝を生む辛巳の歳二月帝を奉じて京に還る會〻磐阪忍熊二皇子兵を擧げて播磨に要り后之を聞きて舟師を帥ゐて難波に赴き武内をして帝を奉じ南海に出しむ武内紀伊水門に至り后と日高に會す三月后武内及び武振熊をして忍熊を擊しむ武内精兵を率ゐて山背を出て菟道に至り河北に屯し忍熊と相持す謀て三軍に令して弦を彎に藏め其の佩刀を匿して別に木刀を佩しめ后の令なりと稱して忍熊を誘ひて曰く我天下を貪るとは無し幼兒を稱して君王に從ふのみ願くば共に弦を斷ち兵を解き媾和せん然らば則ち君王天位に登り以て枕を高し席を安じて專ら萬機を制せんと乃ち軍士に令して弦を斷ち兵を解きて悉く之を河に投ぜしむ忍熊之を信じて亦弦を斷ち兵を解く武内乃ち命を下して厳むる所の刀弦を出し河を渡りて掩擊す忍熊敗走す武内累りに之を逆撃し、狹々浪、栗林に破る斬獲甚だ衆し忍熊窮蹙して水に赴きて死す癸巳の歳武内太后の詔を承け帝を奉じて角鹿笥飯太神に詣る歸るに及て皇后歌を作て帝の詔を爲す武内亦帝の爲に答歌す帝位に即て七年武内韓人を睿して池を大倭に穿ち韓人池と號す九年敕を奉じて筑紫を監察す其弟甘美内宿禰帝に譖して曰く武内筑紫に據りて三韓を招き以て不軌を圖らんとすと帝之を信じて使を遣して武内を殺さしむ武内聞きて歎じて曰く吾に武心なし忠を以て君に事ふ今其れ罪なくして死す何ぞ不幸なると時に眞根子と云ふ者あり武内に讒きて曰く大臣の赤心武なさは天下の共に知る所なり願はくば潛行闕に詣り自ら無罪を辨じて而して後死すとも未だ晚からじ人言ふ僕が貌大臣に肖たりと請ふ身を以て代らんと即ち鈹に伏して死す武内大に悲歎して之を取る可しと四十年に至りて東夷叛亂す帝遂に日本武尊に詔して之を討たしむ五十一年正月帝群臣を延に召して宴を賜ふも數日唯椎足彦皇子及び武内宴會に赴かず共に門下に在りて戒嚴す帝之を喜ぶ是歳八月遂に皇子を立て皇太子と爲す成務帝是なり是日武内を以

と欲す帝特に詔して之を釋す武内政を乘る故の如し仁德帝五十年河内茨田堤に雁の雛を產むあり帝歎を作て之を問ふ武内亦歌を作て之に答ふ五十五年武内薨ず、景行、成務、仲哀、應神、仁德の五朝に歷仕し在官二百四十四年其年壽を詳にせず政は曰く上古の歷史年數固より詳かならず干支に照し逆に推して之を定むるのみ故に古史を外國の歷史に對すれば六十年毎に一周を誤れる箇所多きを發見す武内が長命と雖も三百年に及ぶは怪むべし蓋し百餘年なるを誤て歷史に三百餘年と傳へたるならんと筑後の一宮なる三井の高良玉垂の明神及び因幡の一宮なる法美郡の宇倍宮は共に宿禰を祀れるなり（大日本史）

タケシヂ　ヤスフヂ　武茂泰藤「ウツノミヤヤスフヂ」

タケシタ　ケン　竹下「タケノシタ」　竹下健　陸軍歩兵中尉なり福井縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第九師團歩兵第七聯隊附として從軍中廿七年八月廿四日清國盛京省旅順口塞望臺攻擊の際戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タケシタ　ジャウヘイ　竹下讓平　名は襲字は石林樂翠と號す長藩の國老福原越後の家人なり少より武技を嗜み中年學に志し刻苦勉勵經史百家の書より稗史野乘に至るまで究極せざるはなし元治元年七月十九日伏見の戰に於て敵後に屬し使役より宿割役を兼ね進戰利ならず士卒散亡するに及び敗卒を率ゐ大阪に下らんとし櫻宮に於て敵兵の拘留する所と爲り遂に幽死す年四十五（甲子殉難士傳）

タケシダ（孫）クマヨ　竹志田熊雄　勤王の志士なり諱は重楯肥後の人幼より氣節あり林藤次に就て學び尊王攘夷の大義を聞くに及び心益々奮興し藤本鐵石飯居簡平等と刎頸の交を爲す文久二年島津久光上京して大義を擧ると傳へ聞き躍起して伏見の薩摩屋敷に抵りしが病に臥りて機を逸す然るに形勢俄に一變し知己の同志は或は殺され或は脫奔し宿志遂し難きを見一旦歸國せしが偶ゝ國主鍋川侯禁衛の命を受け弟長岡護美を名代として兵を具し上洛せしめければ熊雄再び京都に馳せ行き護美の爲めに種々周旋する所

タケシダ　ヤヤサブラウ　竹田斐三郎　兵庫藩士敬忠の二男なり關學を學び後英佛學を修め力を航海築城造兵等の科に專にす安政元年幕府に擢られ函館奉行に屬し五稜郭及び辨天崎の砲臺を築造す其據る所唯和蘭築城書一冊あるのみ苦心五年に亡て功を竣ふ功を以て旗下の士となり文久中龜田丸に船長として黑龍江に航す船員凡て洋人を借らず艱難を排して行を全うす之を邦人船長として海外に航するの嚆矢と云ふ後開成所の教授となり又砲銃を鑄造し反射爐を築く幕府滅するの後松代藩に聘せられ竹中庄藏と假稱し士官學校を建て藩の兵制を改革す明治四年兵部省出仕となり累進して砲兵大佐となり左衛門少丞に至る太田原藩の學科提理に補す米將グランド校を觀や書を贈て其の功を賞すと云ふ十三年一月二十八日五十四を以て卒す著書譯書頗る多し碑は芝公園東照洞前にあり

タケダ　アリヨシ　武田有義　信義の子なり左兵衛尉となる賴朝嘗て鶴岡社に詣る有義を以て劍を執らしむ有義難んずる色あり賴朝怒りて曰く汝は往時小松内府の執劍たり豈に源家の辱に非ずや我汝に於て同族門閥たりと之を辭する者は何ぞやと乃ち小山朝政に專にして之に代らしむ有義惶恐晦匿す正治元年槐原景時朝廷に奏請して有義を立て、將軍となさんと謀り竊かに書を有義に通じて俱に京都に至り鎭西の衆を誘ひて以て兵を擧げんと約す有義之を許す弟信光之を聞て懼れて有義の家を襲ふ有義覺りて逃れ去る信光其の家に入り搜索して景時の書を得て之れを賴家に上る有義後ち終る所を知らず（大日本史）

タケダ　イヅモノジョウ　竹田出雲掾（初代）大阪劇場竹本座主なり元阿波の人次郎兵衛と稱す名は清一或は曰く清直初め江戸に住す嘗て淺草觀音に詣り世人を救養するの家職を授けられんことを願り將に歸らんとして途に群兒の砂礫を翫ぶを見始めて砂時計を作ることを發明し尋で操人形を製するのことを知る是に至りて其の靈驗の空しからざるを喜び遂に傀儡師となりて京都に上り人形を朝に獻ず萬治元年出雲掾を授けられ寛文二年始めて大阪に操芝居を興行す是を出雲の初代となす或は曰く後竹本座を讓受けて之れが座主たりと享保十一年五月近江掾を授けらる十二年九月歿す年八十一（聲曲類纂、攝津名所圖繪、鶴旅漫錄、戲曲小說通誌）

タケダ　イヅモノジョウ　竹田出雲掾（二世）竹本座主にして淨瑠璃作者なり初代出雲掾の子名は清定幼字三四郎と改む千前軒と號す世に小出雲と云ふ父に襲て竹本座を興行し享保中兼ねて院本を作り所作頗ふる多し嘗て三好松洛並木千柳と假名手本忠臣藏を著す是より其の名益々著はる父歿するや竹本座主を嗣ぐ實暦六年十月二十一日歿す年六十四（聲曲類纂、戲曲小說通誌）

タケダ　ウエモン　武田右衛門　江戸四ツ谷の先なる柏木村に住める浪人なり年代詳ならず平生花卉を賞翫しよく培養すまた接ぎ木に妙を得たりといふ柏木村延正寺の藥師堂の前に色香ことなる櫻の大樹あり花のころは遠近の人來りて賞愛す右衛門朝夕にこの花を愛し見る然れども老木なれば一歲幹木の枝枯れたり右衛門をしみて若枝をつぐ枝葉茂り榮えて花も昔日の色香に優れり世人名けて右衛門櫻といふ柏木村なれば源氏の柏木右衛門に緣みて名高き櫻となり右衛門の名も隱て人の知る所となれり（江戸砂子）

タケダ　エイキウ　武田水休　狩野派の畫家にして狩野安信の門人なり（扶桑畫人傳）

タケダ　カウウンサイ　武田耕雲齋　名は正生一に加雲と號し伊賀守と稱す初の名は彦九郎水

戶藩士なり初め跡部氏を稱す其武田萬千代丸の後なるを以て武田氏に復す少くして驍勇武略あり善く經濟を知り久輔翠に遇ず藩侯景山公に仕へて老臣となり祿千五百石を賜ふ謹正を以て眷遇を蒙る英米の來て互市を請ふや藩侯屢ゝ耕雲齋等と共に謀り書を幕府に上る安政中侯詔を奉じて將に攘夷を斷行せんとす幕府大に驚て之を止め其詔書を奉還せしむ侯止むを得ず其臣尾崎豐後守をして之を還して江戸に赴かしむ途に義徒蜂起し之れ齋はんとす纔に脫れて江戸に詣り幕府に致して還る時に國内義徒起り攘夷の說を唱へ長岡驛に屯集す景山公其の無謀兵端を開くを慮り鳥居瀨兵衛をして之を和解せしむ義徒雄辯瀨兵衛を說破す瀨兵衛還る已にして義徒自ら解散す義徒は皆耕雲齋が養ふ所の士なり藩内黨を分ち尊王攘夷を唱ふる者之を正黨と云ひ佐幕開港を唱ふる者之を奸黨と云ふ景山公薨ずるに及びて正論は皆斥けられ姦黨横恣なり已にして一橋慶喜將軍家茂に從て京都に朝す慶喜は景山公の子なり耕雲齋等を召して事を謀る是に至て正黨復た用ゐられ以て鹵簿に充つ耕雲齋京師に上り慶喜の後見として天子に謁し從五位下に叙せらる天子其勤王に篤志なるを賞し其意見を陳ぜしむ耕雲齋大に面目を得て志益々堅固を加ふ元治元年拳義黨市川三左衛門朝比奈彌太郎等共に謀り耕雲齋の亡きを時として幕府と謀る通じ正黨の職を廢して之を幽す正黨奮激江戸に至り藩主に訴へんと遂に先き藤田信山田一郎等亦姦黨の擅横にして正黨の麥拳を捕へ且幕府に訴へて之を誅せんと謀ると聞き大に怒りて兵を筑波山に擧ぐ號して監察府と云ふ是に至り共に軍を合して遊軍監察府總隊と曰ふ田丸直諒を擧げて軍師となし藤田信竹内延秀岩谷信成を三總戰となす烈公の木偶を作り之を奉じて筑波を出て日光に詣る幕吏日光奉行小倉但馬守に見へんとを請ふ但馬守恐怖し急に山中の獵戶を召して以て自ら衛り乃ち見ゆ直諒曰く我が烈公攘夷の詔を奉じて力を盡す而して未だ成らざるに薨ず而して今夷狄跋扈し蒼生塗炭に苦む螢々たる神州遂に外人の侮辱を受く神君將に之を如何となす吾輩傍より之を視るに忍びず將に之を神廟に祈り而して後靡を横流に攘はんとす請ふ日光寺院を借りて舖舍となさんと但馬曰く幕府に請ひて而して後許さんと直諒遂に軍を大平山に退く來り屬する者頗る多し好黨之を聞き市川三左衛門等幕府の援兵を乞ひ其將永見貞之丞等と共に攘夷を斷行せんとす是に至て幕府水府の支藩松平大炊頭頼徳に命じ水藩主に代り常野を鎭撫せしむ大炊頭乃ち江戸を發し先づ小金原に至り耕雲齋に諭す耕雲齋辯論其の美辭を說く大炊頭遂に服す乃ち俱に水戶に赴かんとす途に來り從ふ者衆く全員四千餘吉田村に次す時に元治元年八月十日なり大炊頭使を城中に遣はして曰く吾今幕府の命を奉じ藩主に代り常野を鎭す將に城中に入らんとすと好黨大に驚き使を遣はして拒み曰く大炊頭は則ち藩主の代なり入る亦た可なり其の他の諸士は入るを許さずと大炊頭大に怒り曰く水府の全權今我に在り諸士の進退唯ゝ我が命のまゝなり何ぞ汝等の指揮を受けんと使者天野伊豆大井元次郎則ち退く鈴木茂左衛門獨り爭辯屈せず乃ち之を斬る是に於て城中軍備をなす耕雲齋等兵を遣めて姦黨の家を襲ひ其の軍を擊破す進みて那珂港に至る連戰皆勝つ乃ち使を姦黨の陣に送り和して而して城に入らんと說く好黨可かず使を殺す耕雲齋大に怒り砲を發して奮戰し敵將川上捨次郎を殺す而して筑波の軍田丸直諒藤田信等亦來り屬し兵勢大に振ふ已にして好黨幕府の援兵を乞ひ玄蕃頭田沼意尊等と來り擊ち接戰互に勝敗あり而して好黨大炊頭を招く大炊頭往かんとす耕雲齋之を止めて曰く彼臣等を容れずして獨り公を招く其意測られず臣等竊に之を危ぶむと大炊頭聽かず數人を率ひて水戶に入る至れば則ち其從者を殺す是に於て耕雲齋大に怒り藤田等と相援けて好黨を滅さんとす十月幕府の兵耕雲齋等の四面圍み伐つ月を經て克つ能はず乃ち榜示し書を贈て戰を辭し書を慶喜に上らんことを請ふ是に於て之を聽す耕雲齋乃ち書五通を裁して之を呈す一は慶喜に上り一は事の始終を述べ一は肆を謝し一は加賀藩に因て降を乞ふ一は則ち其七郎に與ふるの書なり其七郎其書を見て忠節を懲れみ之が爲に疏して裁を寬にし且軍の凍餒を憐まんことを以てす耕雲齋は烈公の志を繼て王事に勤むる者なるから人橋側は烈公の愛子なり其の初めて京師に上るや我之に屬す其の後ち朝廷我に命ずるに攘夷の事を扶助して之を貫徹するを以てす今我又一橋側に依て義兵を起すの由を白さば必ず遂ぐる所あらんと乃ち驚兵千二三百人を以て旌旗を擁し輜重を具し館山を出て大宮村に至る道兵と戰て之を破り佐貫に進む市川の兵と共に驛に戰ふ三日互に勝敗あり遂に之を敗る奧州路より下毛に至る過ぐる所豫じめ情を陳じ道を假んと請ふ沿道の小藩之を拒まんと欲すれば敗を取らんを恐る內れんと欲すれば幕府の譴を恐る窮蹙なる所を知らず鷄掛驛に至る太田原藩主其城要衝に當るを以て藩臣金枝彌五左衛門をして耕雲齋に嘗はしむ耕雲齋人をして以て接せしむ金枝曰く敵色力弱く兵寡し萬諸君の敵に非ず唯國君社稷に盡すを知る公等若し城下に出で戰ば唯ゝ一死あるのみと耕雲齋其言の誠實に感じ答へて曰く僕等此に至る實に止むを得ざるに出づ甘んじて亂賊となる者に非ずと乃ち道を世良田に取り會津侯の食穀を借り上野に入る高崎の城主松平輝照の兵を破り信濃に至る高島の城主諏訪忠誠松本の城主戶田光則兵を起し之を防ぐ耕雲齋之と和し嶽に戰て大に之に勝つ遂に美濃路を歷て大田り涉り加納驛に至り西京師に入らんとす大垣侯戶田氏彬島津氏の兵と大軍之を防ぐ耕雲齋乃ち路を轉じて北行し越前大野に至る城主土井利恒沿道の數村を燒き敵をして次宿すること能はざらしめ柵を築て守る時會ゝ大雪ふり兵士凍ゆる者多し之より先一橋慶喜耕雲齋の西上を聞き詔を請ひて自ら大將となり桑名會津松江福岡阿濃津小田原等の兵を率ひ加賀の兵を以て先鋒となし十二月十日加賀の兵あり十餘人に陣せしむ其夜戰ふこと能はず乃ち書を贈て京師に上るの路を開かんことを請ふ聽かず曰く明日を待て戰ば人路を開くと開かざるとは此の時の戰に在るのみと耕雲齋再たび書を贈て戰を辭し書を慶喜に上らんことを請ふ是に於て之を聽す耕雲齋乃ち書五通を裁して之を呈す一は慶喜に上り一は事の始終を述べ一は肆を謝し一は加賀藩に因て降を乞ふ一は則ち其七郎に與ふるの書なり其七郎其書を見て忠節を懲れみ之が爲に疏して裁を寬にし且軍の凍餒を憐まんことを以てす耕雲齋は烈公の志を繼て王事に勤むる者なるから人橋側は烈公の愛子なり其の初めて京師に上るや我之に屬す其の後

挑に戰矣、誠不レ得レ已之勢耳、閣下所レ知遠臣結城寅藏餘黨市川孟左佐藤圖書朝比奈彌太郎等、謀下毀臣等奉二織烈公遺志一掃二除侮一我洋船一盡二微忠於國家一之行上、而百方妨レ之、一二錄金銀、故臣與レ之數戰二千本國一、雖下則與二固僅一戰爭者、非中臣本意上然臣等終因循、則戊年以來天朝所レ降攘夷詔皆爲二水泡一而編言如レ汗之大義亦才地且不レ行、洋船益跋扈、國脉殆拂レ地、如レ此則烈公纔二逃祖宗遺志一、欣二蒐求照宮風教一之事、咸混滅至レ無レ跡矣、臣子之情也、遺憾無二過一於此一矣、臣正生固甘二粉骨碎レ身志下報二除洋船一盡微忠於天朝幕下上也、別冊謀二其勢情之始末一、仰願閣下睽二察之一、伏レ地待レ命」と以て路を開き西上を許さんことを請ふ九さず加賀侯に上るの書に曰く「正生等、向歷哀訴、而承下今竟不レ被二允之命一、恐懼不レ知レ所レ措、然、正生等業已抗二幕府之兵一、動二諸藩之兵一、死且有二餘罪一、因余軍八百十三人、盡降二伏于尊藩軍門一、俟レ罪、雖レ然、正生等、心中固皆天白日、如レ所二向陳一、苟蒙二亂賊之名一、則千載之下、死有二遺憾一、當尊藩垂二武門之情一、爲二正生等一善辨解焉、所二決死言一者止于此耳、他亦無レ所レ冒」と、悉く兵仗を東れて榛原の陣に送る時に元治元年十二月廿四日なり、甚七郎等耕雲齋以下を敦賀に悉く之を刑す、耕雲齋時に年六十二、田丸直諒藤田信竹内延秀等二十四人殺され三百廿八人尋で殺さるる餘は流或は放に處す、帝耕雲齋等が死を聞き大に之を悼み、急に其餘を赦さしむ、耕雲齋刑せらるゝ日天陰り風烈く吹く、尋で諸囚を斬る四次毎に必ず陰風至る人之を異とす、耕雲齋辭世の歌に曰く「咲く梅の風に空しく散るとても馨りは君が袖にうつらん」、後三年征東宮純仁親王高倉永祐四條隆平敦賀を過ぎ各〻香料を賜ふ、前田齊泰亦五百金を下し大に墳を築き、耕雲齋以下十五士の石を立つ、明治聖代天子北巡の時、耕雲齋の後を召して之れを貸し其の墳墓を修め祀りて而して還る明治廿四年十二月正四位を贈る（懷慨家列傳、常野紀聞）

タケダ　カツミツ　武田勝三　姓は源氏、勝頼の第二子なり（或は勝作に作る）天正十年三月武田氏亡びて勝頼信勝を始め宗族親臣皆自殺するや勝三獨り樂原某の爲に扶戰せられて鎌倉に走り後ち尼崎に居りて一向僧と爲り子孫尚ほ藤田邑に存すと云ふ（野史）

タケダ　カツヨリ　武田勝頼　源氏、大膳大夫晴信入道信玄の第三子なり母は諏訪頼茂の女、勝頼小字を四郎と稱す庶子を以て家を繼ぎ初め永祿五年六月父の命を以て諏訪氏を繼ぎ伊奈郡の郡代となりて士を招き士を養はば恐くは天下に敵なからんと釣閑之を不可として曰く豈に京畿に入るの勢を廢して力を邊陲に勞するを事とすべけんやと勝頼之を決して曰く我は釣閑に從はんと是より老將宿臣益〻和せず勝頼專ら釣閑賈に委任す九月勝頼師を率ひ出で、い濱松を窺ひ兵を交へずして退き伊奈に往く是の時に方り勝頼之を挙じて興に國に歸信虎猶ほ存して信濃に在り勝頼之を挙じて興に國に歸らんと欲す而して信虎老たりと雖も狂戾猶ほ故の如き境に發して已まず民其命に堪へずと雖も宿臣事を決して食を得るを以て每に戰勝攻取の功あり未だ甚だ屈撓せず勝頼乃ち傲然として謂ふ霸業期すべきのみと釣閑、勝賈の二人姦佞を以て寵せられ威權内外を專く晉退て嬉原に次し信豐、信春等をして出師を議するや宿將衆な曰く比年勝頼部下を會して出師を議するや宿將衆な曰く比年見、馬籠、大井、中津川、瀨戸崎、串原の六柴を拔きて明智城を圍み赤之を陷れ勢に乘じて事に從ふに若くはなしと時に二驛進取を勸めて已まず天正三年四定を擒にして還る四月（或は五月に作る）勝頼師二萬八月終に兵を起して參河に入り德川氏と對抗し決せずして千を率ゐて參河を侵掠し遂に北河を陷ゐる一千餘人を殺すに至れり勝頼之れを聞き三月十日終夜狙狩次日土き進みて高天神城に薄る守將小笠原長忠兵寡くして支へ難きを以て使を濱松に馳せ急を家康に告ぐ家康乃ち師を信長に求む信長之を聞き謂て曰く勝頼境を踰えて遠く他郷を侵す是れ自ら鬻を招くなり我れ往て剿と力を併て之を擊たば勝敗亦た曰く織田、德川の兩師を待ちて快戰せんと欲するは是れ我が素願なりと乃ち精兵を選みて城に薄り利を以て長忠を誘降し戎兵を置きて師を修め富士郡重須の田一萬貫を以て長忠に與へ七月甲府に凱旋す是に於て勝頼諸將を召して宴を設け其軍に克つを以て頗る誇色あり宴酣にして高坂昌信鵬を舉げて長坂釣閑に屬し大言して曰く此鶴は即ち亡家の飲なりと釣閑之を叱責すれど昌信徐に對て曰く先君終に臨み殊に命じて保守主となさしむ然るに今や男氣を恃みて數〻敵境を侵し利を貪りて威武を負ひ老臣の言を納れず又時機を察せず明りに強敵と雄を爭ふ是れ實に敗を取るの端なり故に或は此役の勝利は亡國の兆たるを識るなりと內藤昌豐の言亦た同じ勝頼悅びず昌信及び昌豐間に乘じて諫て曰く願は東濃を以て信長に送り又た城東郡を家康に還附して二姓を伊奈と稱し高遠城に居り八年十一月尾將織田信長の姪女を容れて妻と爲す其女實は苗木友勝の產む處にして信長の取りて子となすものなり天正五年勝頼國事を執る時に駿遠二州の國人信玄の久く病んで起たざるを疑ひ兩端を持するもの多し七月勝頼兵を出だして東美濃を侵掠せんと欲す馬場信春、山縣昌景、高坂昌信等之を諫止するを以て果さず更に長坂釣閑、跡部勝賈の二人家康の將士と相抗衡して互に勝敗あり既にして信玄の喪頗る泄れ內外の士貳を懷き兩端を持するもの益〻多し勝頼之を憂ひ互に驕倚を選みて自ら之を督し以て相ひ抗衡す然れども衆心一ならず士卒多く亡び遂に退て蟄原に次し信豐、信春等をして城を諏訪原に築かしめて歸る天正二年二月勝頼師を率ゐて美濃を侵し今年冬若を以て鎮せんと欲す是に於て勝頼諸將を召して曰く今竟不レ被二允之命一、恐懼不レ知レ所レ措、然、正生等業已抗二幕府之兵一、動二諸藩之兵一、死且有二餘罪一、因余軍八百十三人、盡降二伏于尊藩軍門一、俟レ罪、雖レ然、正生等、心中固皆天白日、如レ所二向陳一、苟蒙二亂賊之名一、則千載之下、死有二遺憾一、當尊藩垂二武門之情一、爲二正生等一善辨解焉、所二決死言一者止于此耳、他亦無レ所レ冒」と、悉く兵仗を東れて榛原の陣に送る時に元治元年十二月廿四日なり甚七郎等耕雲齋以下を敦賀に悉く之を刑す、耕雲齋時に年六十二、田丸直諒藤田信竹內延秀等二十四人殺され三百廿八人尋で殺さるる餘は流或は放に處す、帝耕雲齋等が死を聞き大に之を悼み、急に其餘を赦さしむ、耕雲齋刑せらるゝ日天陰り風烈く吹く、尋で諸囚を斬る四次毎に必ず陰風至る人之を異とす、耕雲齋辭世の歌に曰く「咲く梅の風に空しく散るとても馨りは君が袖にうつらん」、後三年征東宮純仁親王高倉永祐四條隆平敦賀を過ぎ各〻香料を賜ふ、前田齊泰亦五百金を下し大に墳を築き、耕雲齋以下十五士の石を立つ、明治聖代天子北巡の時、耕雲齋の後を召して之れを貸し其の墳墓を修め祀りて而して還る明治廿四年十二月正四位を贈る（懷慨家列傳、常野紀聞）

タケダ　カツヨリノ　ツマ　武田勝頼妻　北條氏は北條氏康の女なり天正午の春勝頼軍敗れて將に天目山に走らんとす更に身夫なし乃ち北條氏を以て荷駄馬に騎らしむ侍婢皆な草履を著けて從ふ會府城に火起り敵已に迫る天目山も亦た寇あり拒みて納れず稍〻田野に入る時に三月十日終夜狙狩次日土寇起り敵を導て來り襲ふ勝頼秋山紀伊守を以て來り謂はしめて曰く命運既に盡く卿は婦女なり宜しく小田原に奔りて曰く汝小田原に在て我計を傳ふべしと乃ち髮を截り絕命の歌を作りて曰く「黑髮の亂れたる世ぞ果てしなき思ひに消る露の玉の緒」と會て飛銃雨注す左右或は勸めて銃を巖畦に避けしむ北條氏頭を掉ひて曰く今將に死なんとす何爲ぞ矢丸を嫌はんやと而して左右皆な斃るゝを聞き佛名を唱へ勝頼の傍に自殺す（野史、本朝武功正傳）

タケ　タカモト　多氣高幹　一名は國繁、常陸の人なり姓は平氏、高望の子國香初めて常陸の掾に任ず國香の二子繁盛兄貞盛の後を受け常陸の掾任ず繁盛の四子維幹父に繼ぎ大掾となり邑多氣を食む初めて族を多氣と稱す字は平太夫、維幹より六世義幹八田知家と隙あり建久四年知家の賣る所となりて邑を沒收せらる枝葉馬場資幹に多氣の地を賜ひ大掾となす資幹は義幹の再從兄弟なり而して累世封を繼ぎ高幹に至り多氣大掾と稱す高幹晚年南廷に屬す興國元年鎭守府大將軍源顯信の船鹿島崎に漂著す高幹嘗て佐竹氏と隙あり兵三千を率ひて之を鹿島に迎ふ顯信騎兵二百を率て高幹の國府の城に入る高幹使を陸奥石崎の郡司石原權太夫に遣し之を報ず石原乃ち兵二千餘を遣し顯信を國に迎ふ高幹兵を悉して之を護送す足利尊氏東州を掠伐して多く之を敗る高幹亦た出でゝ降る正平六年新田義宗碓氷嶺に次す高幹及佐竹小田俱に尊氏の先鋒となり興に戰ふ義宗の軍潰ゆ高幹遂に足利氏に服し鎌倉の首を視て其末路の無狀を憐むと云ふ家康天下を併するの後に至り爲めに景德院を建立し田園を附す二子あり信勝、勝之と曰ふ（野史）

ば請ふ所に從ふべし而れども今に至りて我れ從ふと能はずと是の冬勝頼復た遠江の北郡を伐ち家康の軍と鋒を接せずして還る六年十月勝頼遠江を伐つ亦た戰はずして還る十二月北條氏政上杉景虎の爲に師を勝頼に乞ふ勝頼之を諾して兵二萬を率ゐ景虎を援く既にして上杉景勝襲人に依りて勝頼に賂ひ東上野の田を以て成さず乞ひ婚を求むるや勝頼乃ち賄を受て師を收む是に於て氏政大に怒り勝頼と相ひ絕つ時人勝頼を誹謗すと云ふ七年正月兵を出だして景勝を助け遂に北河を陷ゐる是歲復た遠江を伐ち決せずして引き去る七月兵を四上野に親して遂に沼田城を拔き進みて森下、那胡桃、猿原、小川、岩櫃、中城、新城、尻高等の諸寨を拔き軍を厩橋に徙す是に於て徼然として曰く天下長を以て爲ずと運年兵を事として民勞れ國衰ふるも之を憂へず是の歲又師を率ゐて駿河を侵し德川、北條の二氏と戰ひて多く士卒を失ふ八年三月復た兵を出だして駿豆を侵掠す後に至りて沼津城を築き高坂昌貞をして之を守らしむ是より後勝頼德川、北條二氏と駿州に爭ひて久しく決せず九年正月家康高天神城を攻めて之を拔く武田氏の勢日に微なり是に於て穴山梅雪と云へるもの勝頼に勸めて曰く方今氏政信長と好を修め德川氏亦日に强し而して君子立して四境援軍なく景勝の如き我と信を通ずと雖も智勇其交に及ばざるや遠し若し諸寇兵期を刻して東西夾み擊たば治城陷惡にして恐くは防禦に難からんか聊〻先君は智勇絕倫にして國中一の城郭なきも寇兵を上て來りて境界を犯さしめず隨て堅城を要せずと雖も今日の勢に於て躁め之が備なくんばあらざるなりと勝頼乃ち其言に從ひ大に城寨を起して之を新府と名け徙りて治を爲す十一月信長の季子御坊丸を安土に送る蓋し丸は久しく質子となりて武田氏に執へらるゝ所のものなり頃歲武田氏兵勢振はざるを以て釣閑勝賈等大龍寺の僧醪獄に議して之を送致し以て和を求め信長を書を往復するや書辭甚だ慢みしと欲するなり初め信長の信玄に驕奢を爲すと云ふ是冬勝頼景勝と誼言あり終に兵を擧げて相伐つ十年正月木曾義昌貳心を懷きて款を信長に送りて武田氏を討つを約し遂に師期を戒む勝頼之を聞きて大に怒り族弟信豐弟信盛等を遣はし之を擊たしむ而して利あらず二月勝頼自ら步騎二萬を率ゐて諏訪に次す義昌即ち急を告げて援を信長に乞ふ是に於て信長の子信忠をして師五萬を率ゐて之に繼ぎ家康三萬五千を率ゐて駿河より進み相ひ約して夾擊す而して北條氏政三萬餘を率ゐ境上に次して之れが聲援を爲す勝頼之を聞き大に驚き諸將を部署して守備を戒め而して諸將或は降り或は走り親族宿將亦た多く叛て戈を倒にするの計を爲し兵士忽ち減じて僅かに七月甲府に凱旋す是に於て勝頼境を踰えて遠く他郷を侵す是れ自ら鬻を招くなり我れ往て剿と力を併て之を擊たば勝敗亦た曰く織田、德川の兩師を待ちて快戰せんと欲するは是れ我が素願なりと乃ち精兵を選みて城に薄り利を以て長忠を誘降し戎兵を置きて師を修め富士郡重須の田一萬貫を以て長忠に與へ七月甲府に凱旋す是に於て勝頼諸將を召して宴を設け其軍に克つを以て頗る誇色あり宴酣にして高坂昌信鵬を舉げて長坂釣閑に屬し大言して曰く此鶴は即ち亡家の飲なりと釣閑之を叱責すれど昌信徐に對て曰く先君終に臨み殊に命じて保守主となさしむ然るに今や男氣を恃みて數〻敵境を侵し利を貪りて威武を負ひ老臣の言を納れず又時機を察せず明りに强敵と雄を爭ふ是れ實に敗を取るの端なり故に或は此役の勝利は亡國の兆たるを識るなりと內藤昌豐の言亦た同じ勝頼悅びず昌信及び昌豐間に乘じて諫て曰く願は東濃を以て信長に送り又た城東郡を家康に還附して二姓を伊奈と稱し高遠城に居り八年十一月尾將織田信長の姪女を容れて妻と爲す其女實は苗木友勝の產む處にして信長の取りて子となすものなり天正五年勝頼國事を執る時に駿遠二州の國人信玄の久く病んで起たざるを疑ひ兩端を持するもの多し七月勝頼兵を出だして東美濃を侵掠せんと欲す馬場信春、山縣昌景、高坂昌信等之を諫止するを以て果さず更に長坂釣閑、跡部勝賈の二人家康の將士と相抗衡して互に勝敗あり既にして信玄の喪頗る泄れ內外の士貳を懷き兩端を持するもの益〻多し勝頼之を憂ひ互に驕倚を選みて自ら之を督し以て相ひ抗衡す然れども衆心一ならず士卒多く亡び遂に退て蟄原に次し信豐、信春等をして城を諏訪原に築かしめて歸る天正二年二月勝頼師を率ゐて美濃を侵し今年冬若を以て鎭せんと欲す是に於て勝頼諸將を召して曰く今竟不レ被二允之命一、恐懼不レ知レ所レ措、然、正生等業已抗二幕府之兵一、動二諸藩之兵一、死且有二餘罪一、因余軍八百十三人、盡降二伏于尊藩軍門一、俟レ罪、雖レ然、正生等、心中固皆天白日、如レ所二向陳一、苟蒙二亂賊之名一、則千載之下、死有二遺憾一、當尊藩垂二武門之情一、爲二正生等一善辨解焉、所二決死言一者止于此耳、他亦無レ所レ冒」と、悉く兵仗を東れて榛原の陣に送る時に元治元年十二月廿四日なり甚七郎等耕雲齋以下を敦賀に悉く之を刑す、耕雲齋時に年六十二、田丸直諒藤田信竹內延秀等二十四人殺され三百廿八人尋で殺さるる餘は流或は放に處す、帝耕雲齋等が死を聞き大に之を悼み、急に其餘を赦さしむ、耕雲齋刑せらるゝ日天陰り風烈く吹く、尋で諸囚を斬る四次毎に必ず陰風至る人之を異とす、耕雲齋辭世の歌に曰く「咲く梅の風に空しく散るとても馨りは君が袖にうつらん」、後三年征東宮純仁親王高倉永祐四條隆平敦賀を過ぎ各〻香料を賜ふ、前田齊泰亦五百金を下し大に墳を築き、耕雲齋以下十五士の石を立つ、明治聖代天子北巡の時、耕雲齋の後を召して之れを貸し其の墳墓を修め祀りて而して還る明治廿四年十二月正四位を贈る（懷慨家列傳、常野紀聞）

タケダ　カツヨリノ　ツマ　武田勝頼妻　北條氏は北條氏康の女なり天正午の春勝頼軍敗れて將に天目山に走らんとす更に身夫なし乃ち北條氏を以て荷駄馬に騎らしむ侍婢皆な草履を著けて從ふ會府城に火起り敵已に迫る天目山も亦た寇あり拒みて納れず稍〻田野に入る時に三月十日終夜狙狩次日土寇起り敵を導て來り襲ふ勝頼秋山紀伊守を以て來り謂はしめて曰く命運既に盡く卿は婦女なり宜しく小田原に奔りて曰く汝小田原に在て我計を傳ふべしと乃ち髮を截り絕命の歌を作りて曰く「黑髮の亂れたる世ぞ果てしなき思ひに消る露の玉の緒」と會て飛銃雨注す左右或は勸めて銃を巖畦に避けしむ北條氏頭を掉ひて曰く今將に死なんとす何爲ぞ矢丸を嫌はんやと而して左右皆な斃るゝを聞き佛名を唱へ勝頼の傍に自殺す（野史、本朝武功正傳）

タケ　タカモト　多氣高幹　一名は國繁、常陸の人なり姓は平氏、高望の子國香初めて常陸の掾に任ず國香の二子繁盛兄貞盛の後を受け常陸の掾任ず繁盛の四子維幹父に繼ぎ大掾となり邑多氣を食む初めて族を多氣と稱す字は平太夫、維幹より六世義幹八田知家と隙あり建久四年知家の賣る所となりて邑を沒收せらる枝葉馬場資幹に多氣の地を賜ひ大掾となす資幹は義幹の再從兄弟なり而して累世封を繼ぎ高幹に至り多氣大掾と稱す高幹晚年南廷に屬す興國元年鎭守府大將軍源顯信の船鹿島崎に漂著す高幹嘗て佐竹氏と隙あり兵三千を率ひて之を鹿島に迎ふ顯信騎兵二百を率て高幹の國府の城に入る高幹使を陸奥石崎の郡司石原權太夫に遣し之を報ず石原乃ち兵二千餘を遣し顯信を國に迎ふ高幹兵を悉して之を護送す足利尊氏東州を掠伐して多く之を敗る高幹亦た出でゝ降る正平六年新田義宗碓氷嶺に次す高幹及佐竹小田俱に尊氏の先鋒となり興に戰ふ義宗の軍潰ゆ高幹遂に足利氏に服し鎌倉

に隷す多氣詮幹は高幹の子なり詮幹父に繼て常陸の大掾となり水戸城に居り剃髮入道して淨水と號す初めて府中城を築く（野史）

タケダ　キャウセン　武田杏仙　江戸の醫師なり名は靜字は信成號に長春院と稱す寶永二年七月十六日歿す品川東海寺中少林院に葬る（江戸名家墓所一覽）

タケダ　クニノブ　武田國信　勿字は彦太郎治部少輔、大膳大夫と稱す康正二年三月足利幕府安藝佐伯郡を信國に予ふ信國兵を率ゐて佐西櫻尾を侵伐す毛利照元等來り援て應ず神眞あり授軍皆靡め去る大内敎弘兵を率ゐて之を拒ず國信退て金山城に入る敎弘來り攻む應仁元年五月國信、藝者の兵を率ゐて細川勝元に驚して數ゝ京師に戰へり文明三年兄信賢の讓を受けて若狹及び安藝牛國を領し小濱城に居り又た瀬山能に城き安藝牛國を以て第元綱に讓れり延德二年六月卒す（野史）

タケダ　ゲンザエモン　武田源左衛門　陸軍歩兵大尉なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第二十五聯隊附として從軍中三十八年九月三日韓國咸鏡北道慈儀山に於て戰死す

タケダ　ゴテイ　竹田琴亭　福岡藩の儒者にして名は定夫字は子毅通稱助大夫又莫兵衛梅廬の二子なり兄復齋の嗣となり文化五年學問所總受持（後敎授）に補し家譜編輯を兼ね後藩主黑田齊溝の伴讀となる天保十一年六月七日歿す年五十四（日本敎育史資料）

タケダ　サキチ　武田左吉　茶人なり利休と同時の人茶道を以て世に名あり其の師門及び歿年等詳かならず（茶人系傳全集）

タケダ　サダキヨ　武田定清　源左衛門と稱す津輕藩士櫛引孫次郎建貞の子なり藩主信政の時大目付兼元締役を命ぜられ古制を補ひ土地の高低郷村の品等を區別し田法を設け山川海陸の行程を測りて貨物運搬の利を計れる等甚た功績あり又命を承けて岩木川の堰堤に堤防を築き處ゝに溝渠を掘りて農耕の便に供し數千町歩の新田を得たり正德元年二月十三日年六十餘にして刑に遭ふ或はいふ讒にあひしなりと

タケダ　サブラウ　竹田三郎　太皷の名手なり秦始皇帝の後裔正二位右大臣秦連河勝三十九代大和國住人今春毘沙王二郎秦勝清の二男にして從五位下左衛門大夫元清（觀世世阿彌）の弟に當り今春禪竹入道の伯父に當る大和國竹田に住し竹田を姓とす太鼓を製し手法を定む觀世今春の能の太皷を打始む非凡の妙手にして世に名人の稱を得是申樂拍子の始祖なりとす年號不詳七月五日逝す法名觀阿と稱し後ち松壽院と諡す（觀世系譜）

タケダ　サマノスケ　武田左馬介「タケダノブシゲ」

タケダ　サンエキ　武田三益　秋田十二所の人にして幼名藤太郎立齋と號す伊藤介亭の門に入り近松顧忠（近江の人）奥田士亭（伊勢の人）高屋德彰（播磨の人）と共に古義堂の四傑と稱せらる經史の外刀圭の術に秀て頗る令名あり論語私說、孟子私說等の著あり文化九年十二月歿す年七十八

タケダ　シャウアン　武田象庵　醫家なり名は信勝象庵は其の號、又た學山と稱し別に岌淵と號す大醫狐德院法印道安の弟なり父は修理大夫信治織田信雅に遊寄し草を刻して竹庵と號す信勝屑冠の比より儒業を藤原惺窩に受けて論孟老莊等の說を聞く其の醫に於けるや勵精して治を求む藝、素雖に通じ術、飫鵝に踰ゆ奇効頗る多し之に憑りて朝廷を雲じ都下之を稱す其の人となり倜儻にして不羈、詩酒を酣嗜して陶然郷に醉ふ萬治二年死す年六十四（墓誌）

タケダ　シャウクラウ　竹田庄九郎　染工なり尾張國愛知郡有松村の人慶長年間木綿に額纈を施すことを工夫し大に行はる之を有松絞といふ（尾張名所圖繪、尾張志）

タケダ　シャウケイ　竹田昌慶　名醫なり名堂と號す又た實樂僧都と號す姓は藤原、太政大臣公經の子なり兄公定後光嚴帝の時緒仁親王の事に坐し罪を得て來邑竹田に屏居す昌慶之に從ふ因て武田を氏とす後ち敎に遇ひて京師に歸り山城守に叙せらる性勇なすあり元和九年後水尾帝不豫なり微し入れて診武にして眼重瞳あり數ゝ出て軍に從ふ既にして節を屈し書を讀み遂に醫方を修む慶安二年明に航して衛ふ又た塞根を以て酒に浸し之を飲む沐浴亦た必ず其の年藥を秀忠に進む愛に於て命じて隔年東下せしむ諸醫例の如くす尋て法印に叙す鼻子疾篤し道安之を治す號を獨德院と賜ふ年七十九精力衰へず召れて江戸に赴き執政小濱侯の病を療す道安跡を方伎に寄すと雖も尤も儒學を好む始め書を東山に讀み藤原惺窩に從ふ惺窩晋て道安を目して純粹子といふ又林信勝と親み善し惺窩卒して信勝に師事す其の東都に在る毎に就て經籍を講究す卒するに先ち躾め棺歛具を製す一に朱子家禮に據るといふ寛永五年病みて歿す年八十二著す所記殊方、苦口利方、經驗影響等あり（皇國名醫傳、墓表）

タケダ　タダヨリ　武田忠頼　信義の子なり一條次郎と稱す初め父に從ひて數ゝ戰功を立つ源頼朝の義仲を擊つや弟兼信等と俱に進みて粟津に至る時に義仲勢屈して將に逃れ去らんとす忠頼兼信先登して義仲なり頼朝之を惡む一日之を府内に召して大に酒饌を具へ工藤祐經に命じて佯りて銚子を捧ぐる爲れして之を斬らしむ祐經其の勇壯を憚りて顏色少く變ず小山田有重席を起つて曰く是れ老者の宜くなすべき所なりと乃ち其の銚子を執る有重の二子稻毛重成榛谷重朝杀殺を持して進みて忠頼の前に至る有重顧みて二子に謂ひて曰く凡そ配膳みなす者は上括を以て禮となす上括は袴を襲げて之を結ぶを謂ふと二子其の言の如くす天野遠景別に頼朝の命を受けて徑に進みて之を斬る忠頼の從士新平太武藤與一山村小太郎等刀を揮ひて直に上座に趨り幕府の諸士と殊死して奮鬪す重成重朝等擊ちて之を殺す（大日本史）

タケダ　タメヒサ　武田爲久　晴信の曾孫なり晴信の子義久駿州富士大宮司葛山某の義子となる義久敬を生む即ち爲久の父なり爲久小字は鍋太郎又た長二郎と稱し長爾又錢齋と號す京師泉涌寺前に閒居し茶事を嗜み又た能く古畫を鑑定す人呼びて給見長二と曰ふ又た書を能くす（野史）

タケダ　チツギ　竹田千繼　醫者なり山城愛宕の人少にして典藥寮の醫生となる嘗て本草書を讀み栁杞老を邵くの處に至り其の効を試んと欲し乃ち多くの之を植う春夏には其の葉を服し秋冬には其の根を食し寛永八年將軍秀忠病あり辟して江戸に至らしむ是の年藥を秀忠に進む愛に於て命じて隔年東下せしむ諸醫例の如くす尋て法印に叙す鼻子疾篤し道安之を治す號を獨德院と賜ふ年七十九精力衰へず召れて江戸に赴き執政小濱侯の病を療す道安跡を方伎に寄すと雖も尤も儒學を好む始め書を東山に讀み藤原惺窩に從ふ惺窩卒して信勝に師事す其の東都に在る毎に就て經籍を講究す卒するに先ち躾め棺歛具を製す一に朱子家禮に據るといふ寛永五年病みて歿す年八十二著す所記殊方、苦口利方、經驗影響等あり（皇國名醫傳、墓表）

タケダ　デンサイ　武田傳齋　狩野派の畫人なり畫法を狩野常信に學ぶ（扶桑畫人傳）

タケダノ　タラウ　ヨシノブカツノブ　武田太郎「タケダノブサダ」

タケダ　ノブアキ　武田信顯　上野介と稱す武田信虎の子といふ今川義元に養はる弘治二年阿波奥郡脇城に居り元龜二年三好長治に歸す（阿波志）

タケダ　ノブカタ　武田信賢　姓は源氏陸奥守信武より出づ信武の長子を信成と曰ふ是を甲斐武田の祖となす次を信頼と曰ふこれを大井の祖となす次を氏信と曰ふ伊豆守と稱せり信武、安藝の守護たるに因て兄の後を繼ぎて治部少輔と稱す次は乃ち信賢なり兄に讓る氏信、信在を生み信在、信守信繁を生む信繁は次を繼ぎて治部少輔と稱す次は乃ち信賢なり兄に讓ひて守護となり治部少輔、大膳大夫、陸奥守と稱す永享十二年五月一色義範を大和龍門山に伐つ將軍足利義教功を賞するに若狹及び安藝佐伯郡の地は故と嚴島の神領にして幕府之を奪ひて以て信賢に與へしものなり嘉吉元年三月嚴島神宮社僧等兵を起す信賢之を伐て克たず歴ゝ神異あり信賢懼て之を嚴島に還へす八月若、藝の兵を率ゐ赤松滿祐を播磨に伐つ九月信賢赤松の族と人丸塚に戰へり寛正元年九月畠山義就京部を去りて若江城に據り又た嶽山金胎寺城を築て相ひ拒ぐ三年四月信賢兵を率ゐ山名是豐等と之を攻め遂に二城を拔く義就高野に奔る應仁元年五月山名宗全、細川勝元黨の醫者なり山城勝元を扶く二年流言あり勝元將に義視を立て、將軍義政を廢せんとすと義政疑懼し潛に親ら宗全の陣に投ぜんとす勝元大に驚き義視を樹て、相爭ひ大に京師に戰ふ信賢、しむ宗全聞て大に喜びて之を迎へ斯波義廉の邸に置き幕府に擬す其の黨與臣と稱す是の時信賢義視と共に斯波の邸に入る然れども敎授し文明二年四月將軍義政丹後（一說に若狹とあり）を以て信賢を封ず五月勝元信賢をして北白河城を築かしめ叡山の便路を通ず是に於て阪本の商旅京師に通ずるを得たり文明三年六月卒す法名は大入宗武、天通院と稱す（野史）

タケダ　ノブカツ　武田信勝　姓は源氏、勝頼の長子なり小字は竹王丸、後ち太郎と改む父勝頼躬自ら諏訪氏の嗣たるを以て信勝を立て嫡宗を繼がしむ然れども年尚ほ幼きを以て代りて國事を執る天正十年三月是より先き勝頼勇を負ひて兵を好み自ら師を督して湊を侵し駿を掠め其他豆州に東濃に速年兵を構へて織田、德川、北條の三氏と相ひ抗衡し攻城野戰多く敵兵を殺すと雖も亦た屢ゝ破れて遂に將士を喪ひ内は士民多事を怨言し外は益ゝ恨を深くし仇敵日に增して忠臣月に亡ぶ是に於て三氏相連衡し織田信長は兵七五万を率ゐて木曾より來り家康三萬五千を率ひて駿河より進み以て南北夾み擊ち氏政亦た大兵を率ひて境上に次し以て聲援を爲す是に於て武田氏の臣屬或は降り或は奔りて防禦すること能はず乃ち退きて新府に入り諸將を相會して敵鋭を避けんことを議す時に信勝年甫めて十六歳自ら奮ひて曰く我が祖先國を建てしより世を歴る二十八、年を經る四百餘年而して今や衆畔き親離る是れ我が天祿の盡る所なり避けて將に何くに往かんとするや當に城を枕にして自刎し以て宗祖に殉すべきのみと勝頼頭を垂れて默然たり而して議遂に容られず遂に父に從ひて柏尾に次す敵兵薄り來るに及びて天目山に入る勝頼事の急なるを見て信勝に謂て曰く汝重器を携へ山路を經て武州より奥州に入り宜し再擧を謀るべしと信勝從はずして曰く小子乃祖の遺命を受け立ちて家嫡たり唯ゝ願ふ所は家聲を辱めざらんと欲するのみ何ぞ他あらんや願くは君回行して相州に往き北條氏政に依賴せよ氏政亦た姻好を遺れじと而して勝頼肯ぜず終に奥に自殺す信勝時に年十六（野史）

タケダ　ノブサダ　武田信定　太郎と稱す信顯の子なり阿波の脇城に居る天正十年長曾我部親吉の襲ふや城を出て、戰死す（阿波志）

講ず名醫金翁と云ふものに就き力學十年金翁深く其の才を愛し妻すに己が女を以てし二子を生む明主太祖の后雖產にして殆んど危し乃ち昌慶を延て之を治す藥未だ劑を終らざるに太子既に分娩す明主大いに喜び安國公に封す永和四年醫家秘書及び銅人形等を得て歸る後圓融帝不豫なり昌慶診を奉じて功あり定衛門督に任ぜらる康暦二年削髮して法印に叙せらる子直慶、善慶、昭慶の三人あり（皇朝名醫傳）

タケダ　シュクアン　武田叔安　德川幕府の醫官なり名は信卿、子龍と號す叔安は其通稱、父黑川道裕京師の巨醫なり叔安少にして俊才あり享保五年江戸に來り外舅武田杏仙の家を繼ぎ幕府の醫員となる二十年官醫籍を刻す醫員の才學あるものなりとして之を校せしむ叔安校する所の痘科證は大に行はる後侍醫となり法眼より法印に進み號を常春院と賜ふ寶暦六年居宅僻遠なるを以て邸を受宕山下に賜ひ召命に便にす愚龍益ゝ遲し叔安博學多識嘗て謂ふ多く人を診せざれば其の術に通ずる能はずと故に貴賤を問はず請ふものあれば必ず往く是を以て痢著其の門に廳至す術亦益ゝ精巧を致す安永二年十二月歿す年七十四（續近世叢語、皇國名醫傳）

タケダ　シュンアン　竹田春庵　福岡藩の儒官なり名は定氣、助太夫と稱す福岡の人なり業を貝原益軒に受く學成り嘉げられて文學となる所著に孝經便蒙釋義、孝子冥民傳等あり子孫相ひ繼で學職となると云ふ（續近世叢語、大家人物志）

タケダ　シンリョウ　竹田子龍　醫者なり名は三益字は泰明子龍は其號響東の門に入りて業術を修め世に行はる尾張侯の醫官なり（鑒定便覽）

タケダ　セウエウケン　武田逍遙軒「タケダノブツナ」

タケダ　ゼンジ　竹田禪師「ミナモトマサ」

タケダ　ダウアン　武田道安　京師の醫なり名は信重、道安は其の通稱、初め三清と稱す其先は安藝の人伊藤に徙る父の時再び京師に徙る道安醫を業とし在て名あり元和九年後水尾帝不豫なり微し入れて診に侍せしむ又屢ゝ東福后の不豫を治し功を以て法眼に

タケダ　ノブザネ　武田信實　姓は源氏、光和の叔父にして刑部少輔と稱す尼子經久の爲めに迎へられて武田家の家督となり毛利元就と雖も攝へて相ひ戰ひ力竭きて自殺し家亡ぶ（野史）

タケダ　ノブシゲ　武田信重　信滿の長子にして姓は源氏、初字を三郎と稱す應永二十四年父信滿、上杉憲宗の爲めに破られ都留郡木賊山に自殺するや信重髮を剃りて僧となり光增と號し潛かに遁れて高野山に入り更めて道成と號す後ち叔父甲斐の守護信元の卒するに及びて輪寶竄跡部明海及び其の子維照と與に亂を作し甲斐の中東二郡を侵掠し邊見蹶亦た起りて西郡を略奪す而して明海等幕府の憚かり信重を武藏の府中に迎へ假りに立て主となし稱して主人と曰ふと雖も怡も木偶を弄ぶが如く專横奢侈抵らざるなし永享十二年結城の亂起る道成追討の命を奉じ舊名に復して刑部大輔と稱し往て之を攻め自ら奮て城に乘じ結城光り及び甲首五級を獲たり功を以て甲斐の守護職を賜はり尋で跡部父子を誅戮し以て其邦境を平定す信重守護職に居ること前後廿五年なりと云ふ後ち寶德二年十一月卒す法名は功嶽道成、成就院と號す信重多子あり信守、信介、永信、基經、賢信（或は賢範と稱す）と曰ひ餘子皆僧となる（或は云く信重の子光重左衛門尉と稱し金丸氏の子となり一色藤直の子藤次を養ひて嗣となし伊賀守と稱す）（野史）

タケダ　ノブシゲ　武田信繁　信虎の第二子にして姓は源氏、初字を二郎と曰ひ左馬介又左典厩に擬ひ上杉謙信と戰ひて之に死す（武邊咄聞書に云く天文二十三年八月川中島の役信繁村上義清と相擊ち終に獲ちらると）信繁二子あり長子信豐次子某望月氏の贅子となり源五郎と稱す（野史）

タケダ　ノブタダ　武田信忠　信光の二子なり世に惡三郎と稱す和田義盛の亂に父と與に幕府に赴く信光朝比奈義秀に若宮大路に遇ひ將に角鬪せんとす信忠進みて之に當る義秀其孝勇に感じて捨て去る後ち父の旨に竹ふ信光怒りて幕府に告げて父子の恩を斷たんと欲す泰時聞驚す信光躊かず一日信光泰時の家に在り信忠便を伺ひ來り訴へて曰く信忠孝養懈たるとなし今何ぞ罪を得る建保淳久の役の如き父に代りて死地を蹈みたるは此れ明公の素とより知る所假令父不慈にして之を罪するとも明公何ぞ少しく我地をなさざるとすと明公何ぞ少しく我地をなさざるとすと光遂に背んぜず顧みて信忠に謂ひて曰く我豈に之を忘れんや然りと雖も汝が性行悖戾我今き義に因て忠を斷つ汝當さに自ら省みるべしと信忠涕泣して去る終る所を知らず（大日本史）

タケダ　ノブチカ　武田信親（一に親信に作る）武田國信の子なり初字は彦太郎、治部少輔と稱す文明十二年將軍足利義尚に仕へて供衆に列す父卒して封を襲ぐ明應三年八月將軍義植に從て佐々木氏を近江に伐つ永正五年正月信親尼ヶ崎に至り義植を迫ふ十一月佐々木定賴將軍義澄を奉じて京師に入る信親義植の命を受け兵を率ゐ擊て之を走らす八年八月船岡山の戰に信親及び弟元繁騎兵を率ゐて義植に應じ船岡山より先登し細川三好と戰て之れを破る永正十一年八月卒す（野史）

タケダ　ノブツナ　武田信綱　信虎の第四子にして信玄の弟なり姓は源氏、本名は信廉、初字を孫六と曰ひ刑部少輔と稱し髮を削りて道遙軒と號す天正十年二月信綱大島城を救ふ織田信忠の師を飯田に進むるに及び懼れて措かず城を避けて甲府に逃走す而して勝頼にも從はず其の滅するに及びて立石（或は鮎川邊に作る）に走り終に斬らる信綱資性書を好み善く信玄の畫像を寫す又十王及十二天を畫き傳へて柴州高野山に在りと云ふ一子あり信澄と曰ひ蚤死す（野史、本朝畫史）

タケダ　ノブチカ　武田信親（一に親信に作る）武田國信の子なり初字は彦太郎、治部少輔と稱す文明十二年將軍足利義尚に仕へて供衆に列す父卒して封を襲ぐ明應三年八月將軍義植に從て佐々木氏を伐つ永正五年正月信親尼ヶ崎に至り義植を迫ふ十一月佐々木定賴將軍義澄を奉じて京師に入る信親義植の命を受け兵を率ゐ擊て之を走らす八年八月船岡山の戰に信親及び弟元繁騎兵を率ゐて義植に應じ船岡山より先登し細川三好と戰て之れを破る永正十一年八月卒す（野史）

タケダ　ノブツナ　武田信綱　信虎の第四子にして信玄の弟なり姓は源氏、本名は信廉、初字を孫六と曰ひ刑部少輔と稱し髮を削りて道遙軒と號す天正十年二月信綱大島城を救ふ織田信忠の師を飯田に進むるに及び懼れて措かず城を避けて甲府に逃走す而して勝頼にも從はず其の滅するに及びて立石（或は鮎川邊に作る）に走り終に斬らる信綱資性書を好み善く信玄の畫像を寫す又十王及十二天を畫き傳へて柴州高野山に在りと云ふ一子あり信澄と曰ひ蚤死す（野史、本朝畫史）

タケダ　ノブトシ　武田信俊　信實の子なり初字は新十郎、初め參河の人篠瀬茱德川家康の旨に忤ひ逃げて甲斐に來り信俊の父信實に遜る其の歷て後ち敗されて國に歸る信實其上野秀政を殺して來りて晴信を諭さしむ晴信乃ち對て曰く子にして父を逐ふ三綱に悖り惡逆の罪たる言を待たずと雖も實に已むを得ざるに出づるなり初め父信虎栖を執りしより殺戮意のまゝにして是非を問はず之に加ふるに賦税を重くして民を虐げ賞罰極めて正しからず士民怨苦し法令大に亂る臣屬ゝ之を諫むと雖も忠言はして信濃の賊を擊ち進みて相木茱と闘ひ之に克つ蘆田小屋の戰亦た從て敵首を獲明年長沢の役亦た功あり十八年平岩親吉に屬して岩槻城を攻め功を以て武藏の田二千石を賜はり後ち寛永三年を以て老を請ひ十六年正月卒す時に年七十六、法名を道二と號す子あり信雄と曰ふ（野史）

タケダ　ノブトヨ　武田信豐　信繁の第一子なり姓は源氏、本名信元（四戰記聞に信盛に作る）左馬助と稱す天正十年正月木曾義昌の武田氏に背くや信豐諸將と兵士を率ゐ往きて之を攻む克たず信豐尋で疾と稱して軍議を避く會ゝ穴山梅雪亦叛きて德川家康に應じ我が諸將皆狼狽して各ゝ退きて栄邑を保つ信豐亦た小諸城に據ゐ而して後年武田勝頼の亡ぶるに及び自殺すと云ふ（野史）

タケダ　ノブトラ　武田信虎　信繩の長子なり姓は源氏、初名信直、小字を松壽丸と曰ひ五郎と改む左衛門尉、左京大夫、陸奥守と稱す永正十六年三月信虎兵を遣はし加賀見益時を伐たしむ兵士敵と小熊谷に戰て敗る信虎怒り自ら兵を將ゐ赴むき擊ちて之に克つ六月信虎始めて甲府館を修築す十八年四月從五位下に叙せらる大永二年久島の戰、信虎奮戰して又た之に克つ後八年信虎自ら伐畧して甲斐全州を平定し勁兵七十五人を擢でゝ麾下の守衛となす天文五年十一月信虎兵八千を率ゐて平賀成瀬を海野口に攻め利あらずして退く嫡子晴信殿戰し敵兵の陷欲に乘じ反戰して終に成瀬を獲信虎の二子長は晴信勇にして暴、次は信繁婉にして文而して信虎資性暴悍仁慈ならず信繁を鍾愛し私かに晴信を廢して信繁を立てんとす信虎遂に士民に怨望を招き晴信の爲めに駿府に逐はる信虎尋で髮を剃り我下野と號す時に年四十八、信虎既に駿府に客となり國を思ひて措かず竊かに人を京師に遣はし時の將軍足利義輝に歎訴すること再三、是に於て義輝之を憐み上野秀政をして來りて晴信を諭さしむ晴信乃ち對て曰く子にして父を逐ふ三綱に悖り惡逆の罪たる言を待たずと雖も實に已むを得ざるに出づるなり初め父信虎栖を執りしより殺戮意のまゝにして是非を問はず之に加ふるに賦税を重くして民を虐げ賞罰極めて正しからず士民怨苦し法令大に亂る臣屬ゝ之を諫むと雖も忠言は

耳に逆ひ郤て將に臣を誅戮せんとす臣是を以て敢て國家の爲めに計るなり抑ゝ身躰髮膚之を父母に受く敢て骨肉の親を懐はざるとゝんや顧くは之を憫察せよと因りて信虎終に歸るを果さず永祿三年駿將今川義元死して其の子氏眞嗣き闇弱にして荒淫度なく嬖臣三浦義鎮寵を恃て跋扈し終に信虎を疎忌す信虎因て義鎮を遮け五年夏徒りて掛川圓福寺に居る而して信虎猶は安んぜず律僧を甲斐に遣はし氏眞の昏愚を報ず晴信之を悅び日向宗立をして掛川に迎へて之を謝せしむ信虎乃ち宗立に謂て曰く氏眞闇蒙にして國を治むること能はず依俸權を專らにし屢ゝ我を輕侮す故に我れ今去りて京師に之かんとす抑ゝ方今の勢たる參河の英雄翼を海道に張り尾張の豪傑之れを扶け將さに今川氏を謀らんとす此の時に乘じて晴信速かに策畧を圖らし氏眞を逐はば則ち駿遠二州坐して定むべきなりと六年正月信虎復た京師に赴かんとす氏眞之れを引間玄默寺に抑留す是の月信虎又た律僧を甲斐に遣はし托するに二子上野介及び勝千代の眷顧を以てし終に京師に奔る將軍義輝命じて信虎を相伴衆に列し桐の記號を賜ふ後義輝弑せらるに及び信虎漂泊して終に國に歸るを諸ふ而して晴信可かずと之を信濃の伊那に寓く天正二年信虎孫勝頼と相見て問ひて曰く母氏は誰ぞやと長坂釣閑側に在り對て曰く是れ諏訪氏の出なりと信虎乃ち色を作す亦た馬場、內藤、山形等の來由を問ひ益ゝ悅ばずして曰く皆な是れ卑賤なり晴信何の見る所ありて之を登庸するやと自ら刀を揮ひて將に勝頼を斫らんとす而して小笠原應庵其の刀を奪ひ勝頼をして避け去らしむと云ふ是歲三月卒す時に年八十一、法名は泰雲存康、大泉寺と號す信虎男女十七人あり晴信、信繁、信基、信廉、信是、宗智、重、浦野某、大井忠成、下條某、根津某、右大臣藤原晴季に嫁すと云ふ（野史）

タケダ　ノブナガ　武田信長　信滿の第二子なり姓は源氏、字を八郎と稱し後ち右馬助と改む應永二十四年父信滿の木賊山に自殺するや兄信重出奔す邊見有直足利持氏に請ひて甲斐の守護と爲る而して未だ幕府の許を得ざるなり盛し有直に素と武田氏の枝屬にして世々甲斐の四郡を領せり時に信長獨り國に留まり加藤入道梵玄に遷りて兵を起し以て四郡を襲ひ有直と相抗戰する茲に年あり而して有直終に支へずして鎌倉に走りて之を愬ふ持氏大に怒り三十三年一色持家をして來り伐たしむ信長遂に遷りて黎戰して風ぜず已にして利あらず遂に成ぎを乞ふ是に於て叔父信元甲斐の守護となり信長の子伊豆千代を養て嗣と爲す信長之を及び跡部明海父子伊豆千代に叛櫓に拒ぐ而して利あらず遂に成ぎを乞ふ是に於て叔父信元甲斐の守護となり信長の子伊豆千代を養て嗣と爲す信長之を及び跡部明海父子伊豆千代に叛挑み加良阿の戰に信長軍敗れて京師に奔り之を大將軍義教に愬へ尊て信長遠州蒲莊御厨一千貫の地を賜はり幕府に仕ふ永享十二年信長結城の戰に從ひて功あり相州曾比千津島を賜はり足利成氏に仕ふ享德三年十二月成氏に從ひて上杉憲忠を伐ち康正元年十二月又た上杉黨の扇西城に攻む後ち病て上總に卒す一子あり（野史）

タケダ　ノブミツ　武田信滿　姓は源氏、初字を二郎と稱す其先、新羅三郎義光より出づ義光の曾孫を信義と曰ひ、信義信光を生み信光の第三子信政、信時を生み信時、信綱を生み時綱、信宗を生み信宗、信武を生み信武、信成を生み信成、信春を生む信春は即ち信滿の父なり世々相繼て甲斐の守護たり信滿父に繼て甲斐、安藝二州の守護となり尋で安藝守に任ぜられ髮を薙りて安藝入道と號す應永二十三年上杉禪秀の亂を作すや信滿其の舅たるを以て兵を率ゐて之を佐く軍敗るゝに及び遁れて國に歸り尋で上杉憲宗の來討するに會し之と都留郡に戰ふ而れども敵寡敵ず木賊山に入りて自殺す時に應永二十四年二月なり法名は明庵道光、禪雲寺と號す二子あり信重、信光と曰ふ（野史）

タケダ　ノブミツ　武田信光　幼名は光壽丸信滿の子なり甲斐の石和に生る因て石和四郎と稱す源頼朝の兵を起すや父に從ひて駿河に赴き途鉢田に至り橘遠茂等の兵を率ゐて將に甲斐を襲はんとするに遇ふ山路狹隘にして事不意に出づ遂退去だ難やむ信光加藤景廉等を率ゐ衆に先ちて奮戰し遂に之を破り遠茂を虜にし長田父子を殺す壽永三年源範頼に屬して平氏を擊ち義仲を討ず信光頼朝の爲めに寵異せられて常に左右に近侍す三見皆な罪を以て邑を失ふ惟ゝ信光武田氏の宗を承けて駿河方上の塩頭となる頼家立つ曾全成叛して駿河に走る信光捕へて鎌倉に送る、建保中、和田義盛亂を作す信光與に戰ひて功あり因て栄邑を加へらる承久の役に諸將と兵五萬を帥て東山道を出でゝ京師を

犯す發するに臨みて家人皆な諫めて曰く今日は適さに十死一生の日に値ふ請ふ期を延ばせと信光聽かずして曰く軍に臨みて家を忘るゝは武夫の常なり何の忌諱するとか之有らんと乃ち衆を勵まして行く市原に至る比ひに上臺の使三たび至りて信光及び小笠原長清に勅諭して以て歸順せしむ信光長清と議して使者二人を斬り一人を放還して曰く汝還りて之を報ぜよと既にして官軍尾張を守る信光子信政を召して曰く軍に在りては父子尚ほ相顧みず況んや親族をや汝宜しく潛かに大井戸を濟り先登して功を立つべし族人なして知らしむる勿れと信政先づ善く泅ぐ者をして其の深淺を測らしめ乃ち兵を率て進む信光望みて之を壯とし大に呼びて奬勵みて大井戸既にして潰ゆ官軍逃れて京師に還る信光等進みて安藝景盛と俱に供御瀬を攻めて遂に京師を陷る功を以て安藝の守護に補せらる信光祝髮して名を光蓮と更む世に伊豆入道と稱す弓馬に練習し笠懸犬追物流鏑馬の儀に通習す世に信光及小笠原長清海野幸氏望月重隆を稱して弓馬四天王と曰ふ後ち幸氏と地界を爭ひて決せず信光竊かに北條泰時を圖ると信光怒懼し乃ち誓書して射を北條時頼に授く情好款密是に至りて時頼爲めに寺を甲斐市川の莊に建つ（大日本史）

タケダ　ノブモト　武田信元　姓は源氏、信春の第二子にして信滿の弟なり信濃守に任ぜられ應永二十四年兄信滿の上杉憲宗と都留郡に戰ひて終に木賊山に自殺するや信元遂れて高野山に走り僧となりて空山と號す三十三年足利持氏の守護職を賜ひ更らに義持信元を高野より召して甲斐の守護職を伐つに及び將軍陸奥守と稱せしむ後ち信元の嗣子彦二郎蚤死す信元姪信長の武勇を愛し立てゝ嗣となさんと欲す而して其の曾て上杉憲秀に黨するの罪あるを以て聽かれず因りて其の子伊豆千代丸を養ひて嗣となす是の時に當りて部下に跡部明海と云ふものあり其の子雄照と與に甲斐守護代となり勢を恃みて屢〻信元に背き信元卒して後ち終に亂を爲すと云ふ（野史）

タケダ　ノブヨシ　武田信吉　德川家康の第五子なり母は妙眞院秋山氏、武田氏の亡るや穴山梅雪二女を家康に獻ず重に幸を得たり一は市河氏一は秋山氏なり天正十一年九月信吉を濱松に生む小字萬千代歷武田氏を冒す十八年二月小金の田三萬石に封じ武田氏の遺士に命じて之に附屬せしむ明年冬秋山氏卒す賢性院尼は武田信玄の女穴山梅雪の室たり之を憐み收て之を養ふ信吉嘉性多病常に幽居す文祿元年三月封を佐倉に徙す慶長庚子の亂に東府の四城に在り七年十一月封を水戸城に徙し二十萬石を貪る八年九月十一日卒す年二十一法名英夢善香崇巖、淨鑑院と號す（土屋覺書には法名は長譽泳法に作る）（野史）

タケダ　ノブヨシ　武田信義　刑部少輔源義光の曾孫なり義光の子義清清光を生む而極めて黎黑人呼びて黑源太と曰ふ信義は其第一子なり幼名龍光丸年甫めて十三族祖爲義親ら元服を加へ信義と名づけ太郎と稱す治承四年源行家以仁王の令旨を齎らし關東の諸源に諭して甲斐に至り信義に說く信義源頼朝石橋山に敗ると聞き往きて之を援はんと欲す時に平氏の驕興多く信濃に在り信義先づ信濃に往きて菅冠者某を大田切城に襲ふ菅冠者風を望て恐怖し火を縱ちて自盡す信義還りて甲斐逸見山に屯す頼朝北條時政なして來り告げて力を戮し謀を協して共に平氏を擊たしむ信義兵を率て石樂に至る土屋宗遠亦た命を傳へて諸源と黃瀨川を渡ひて平氏の驕興に會せしむ信義乃ち安田義定等と進みて駿河に至り目代橘遠茂を虜にし長田某父子を斬りて遂に兵二萬を以て頼朝に黃瀨川に會す時に平維盛兵に將として高橋に次す信義書を遺りて之を激怒せしむ既に間道より出でゝ敵の營後を襲はんとす敵兵水島の驚噪するを聞て以爲らく敵兵大に至ると迷惑狼狽して京師に奔還す頼朝命じて駿河を守らしむ久うして京師流言す法皇信義に詔して頼朝を討たしむと時に信義駿河に在り頼朝召して之を問ふ信義解謝して曰く臣未だ曾て詔を蒙むらず假令ひ詔あるも臣豈に之を奉ぜんや去歲軍に臨みて難を冒して安に至るを知らず將さに駿府に赴むきて女之が覘に出でゝ四人返り報じて曰く北軍銳甚だし君宜く厚く其陣を集め戰はずして之を屈すべしと曰ふ爾軍水を夾て陣す謙信戰を挑む信玄出でず相持すること二十七日謙信使者を遣はし謂て曰く吾れ聞く公の兵を用ふる擅ふ所皆敵なしと而して何んぞ竊り我と決せざるや我の公に於る怨仇あるに非ず唯〻義清輩の爲めに力を致て問ふ公何を以て彼の地を書へる公吾と戰ふことを欲せざれば則ち地を彼に還へせ地を還へすを欲せざれば則ち吾と戰へと信玄答て曰く公義清を庇ふは眞に高義と雖ども然りと雖も時信に於て未だ死せざれば公志に高義と雖ども然りと雖も時信に於て未だ死せざれば公志を成す能はず公戰を欲せざれば則ち公より始めん謙信曰く誓書を作る晴信大に驚く是に於て諫て曰く夫れ詩は將帥の宜しく耽る可きものに非ず國を保つ者は仁政を民に施し道を守りて士を養ひ敵國を撫順し家聲を墜さゞる是れ將帥の任となす父君暴戾無道にして賞罰度なし因りて之を逐ふ然るに未だ三年ならざるに其の放蕩逸樂已に父君に過ぐ若し臣の言を以て不順となさば速かに死を賜へと晴信大に其の言に感じ乃ち信方を慶室に召して之に誓ひ筆硯を遣りて專ら軍務を議す是より晴信、村上義清と隙を構へて相戰ひ連年兵を結びて解けず攻城野戰敝れ虛日なし十三年二月晴信兵を信州諏訪に誅めし信方信繁を殺して城主諏訪頼茂を諭して之を降し既にして人を生むの女を殺さしめ其の女を入れて妾となし子勝頼を生む十六年八月晴信士二萬を率ゐて信濃に入り村上義清と大に大井原（或は上田原に作る）に戰ひ之を破る十月上杉輝虎義清の爲めに兵を起して來り侵す輝虎年尚ほ少く驍名一時に著はる因りて晴信大に將士を戒め以て之に備ふ十七年四月兵を起して伊奈を侵し高遠城を攻む輝虎小諸に出ると聞きて兵を轉じ輝虎を迎へ八月河中島に出て火を葛尾の屬邑に縱ち軍を班へ廿年二月晴信薙髮して德榮軒信玄と號す別に宮三（一に機山）と號ふ二十一年三月輝虎入道謙信地藏嶽を臨み兵を以て横に擊て之を破り河に擠す信玄數十騎と走て來り侵す信玄出でゝ之を常田に拒ぐ是より攻戰久しく決せず二十二年謙信兵を小田濱に治し八千騎に將として信濃に入り火を武田氏の屬城に放つ十一月朔進みて河中島に陣す信玄之を聞て援を今川氏に請ひ步騎二万に將として雨宮渡に出で山本晴行等の四人をして之を覘しむ四人返り報じて曰く北軍銳甚だし君宜く厚く其陣を集め戰はずして之を屈すべしと曰ふ爾軍水を夾て陣す謙信戰を挑む信玄出でず相持すること二十七日謙信使者を遣はし謂て曰く吾れ聞く公の兵を用ふる擅ふ所皆敵なしと而して何んぞ竊り我と決せざるや我の公に於る怨仇あるに非ず唯〻義清輩の爲めに力を致て問ふ公何を以て彼の地を書へる公吾と戰ふことを欲せざれば則ち地を彼に還へせ地を還へすを欲せざれば則ち吾と戰へと信玄答て曰く公義清を庇ふは眞に高義と雖ども然りと雖も時信に於て未だ死せざれば公志を成す能はず公戰を欲せざれば則ち公より始めん謙信曰く誓書を作る晴信大に驚く是に於て諫て曰く夫れ詩は將帥の宜しく耽る可きものに非ず國を保つ者は仁政を民に施し道を守りて士を養ひ敵國を撫順し家聲を墜さゞる是れ將帥の任となす父君暴戾無道にして賞罰度なし因りて之を逐ふ然るに未だ三年ならざるに其の放蕩逸樂已に父君に過ぐ若し臣の言を以て不順となさば速かに死を賜へと晴信大に其の言に感じ乃ち信方を慶室に召して之に誓ひ筆硯を遣りて專ら軍務を議す是より晴信、村上義清と隙を構へて相戰ひ連年兵を結びて解けず攻城野戰敝れ虛日なし十三年二月晴信兵を信州諏訪に誅めし信方信繁を殺して城主諏訪頼茂を諭して之を降し既にして人を生むの女を殺さしめ其の女を入れて妾となし子勝頼を生む十六年八月晴信士二萬を率ゐて信濃に入り村上義清と大に大井原（或は上田原に作る）に戰ひ之を破る十月上杉輝虎義清の爲めに兵を起して來り侵す輝虎年尚ほ二萬人を出して之と對し壘を固うして出でず日を閒て謙信村上義清等をして夜兵を伏せしめ而して曉に樵を採る者を出だして甲斐の壘に近づかしむ甲斐の兵出でゝ之を追ふ伏に陷りて皆な死す諸隊隨て出づ乃ち大に戰ふ終日十七合逸に勝敗あり信玄潛に令を下し組を犀川に張りて渡り旗幟を伏せ蘆葦中を經直ちに謙信の麾下を襲ふ潰走す信玄勝に乘じて進む字佐美定行等手兵を以て横に擊て之を破りて河に擠す信玄數十騎と走る一騎あり黃瑛驅馬白布を以て面を裹み刀を拔て來る呼びて曰く信玄何くに在ると信玄馬を躍らして河を亂りて將に逃れんとす騎亦た亂る駕て曰く竪子此に在るかと刀を舉て之を擊つ信玄刀を拔くに暇あらず持つ所の麾扇を以て之を扞ぐ扇折る又擊て其の肩を斫る甲斐の從士之を救はんと欲す水駿くして近く可らず隊將原大隅槍を以て其騎を刺す中らず乃槍を擧げ之を打て馬首に中つ馬驚き跳りて淵中に入る信玄幾に免る武田信繁信玄の危を聞て返り戰て之に死す是日爾軍死傷甚だ多し而して信玄創を被り夜兵を收て退く後越後の捕虜を獲て之を問へば嚮の騎は乃謙信なり是より先き天文丁未の年六月信玄法條五十五章を定めて之を所部に示す是の年五月更に三章を加ふ後ち永祿元年四月更に法令九十九章を約定して以て士民に布くと云ふ後ち弘治元年四月信玄攻めて木曾義高を降し女を以て之に妻す二年信玄伊奈郡を取る是に於て盡く信濃を定め高坂昌宣をして貝津城を守らしめ以て謙信に備ふ三月信玄謙信復河中島に對壘す信玄山本晴行等と謀て曰く我れ兵を分ち逸りて越後の軍後に出で鼓噪して之に逼る本軍を以て突み擊たば必ず大に志を得んと乃信濃の客將保科彈正等をして兵六千を以て夜戶神山を度らしむ時に月暗く遂て道を失ひ廻遶する能はず謙信甲斐の軍夜襲き人馬聲あるを聞き潛に起き甲斐を摂き令を傳へ入千騎を擧て出づ五更信玄の牙營に詣る會〻霧霧四方に塞り甲軍未だ之を知らず已にして旭光初て輝き烟霧散ずれば越軍既に咫尺に在り衆皆驚駭す信玄海野幸次を問ふ曰く敵攻第に各隊を遇匝し犀川を望みて去ると信玄大に愕て曰く汝過てり是れ軍陣なり我一世の大過此に在りと乃遽に命じて列を更めしむ然れども敵既に來り逼て營潰え兵敗れ山本晴行等の六將之に死す而して

者なり初め名は維鈐、字は綾州、中頃名を亮字を士明と改め後又名を欽謙字を聖誤となす梅龍は其の號、本姓武田氏其の先は三河篠田に處る因て篠田を以て氏とす梅龍に至りて舊姓武田に復す又田を省て單に武氏と稱す祖某三河より奚濃に移る因て奚濃の人となる父雅好京師に官事す故に梅龍京師に成長す年十六七始めて學に志し伊藤東涯に師事す東涯殁して後堀南湖宇明霞の門に遊ぶ並に器重せらる學既に成る妙法院親王に仕へて侍讀たり公退の餘暇には生徒に教授す遠邇益を讀ふもの甚だ衆し其の學經史に本き經濟を以て其の志とす嘗て曰く學に向ひ道に入るべき心術を逃ぶる者は唯〻管子の心術内業の諸篇のみと故に管子を校して世に梓行す又心術の諸篇のみと雖ども故に管子を校して心學古源と曰ふ又少き時武技を習ひ孫吳の兵法に明かなり常に曰く緣灌文なし隨陸武なし未だ余士と稱す可らずと是を以て士を誨導するや必ず文武を稱ふ明和三年十月十六日殁す年五十一私謚して文靖と曰ふ著はす所感嘯唐詩合解、澹溟尺牘解、梅龍遺稿及び時文選あり（續近世叢譜、事實文編、先哲叢談、近代名家著述目錄、鑑定便覽、諸家人物志）

タケダ　バイロ　竹田梅廬　福岡藩の儒者にして名は定良字は子俊通稱茂平衛又茂平助大夫本姓高畠氏竹田定直の外孫なり福岡の人にして藩の納戶組儒者となり藩主に侍講す又家譜編輯を命ぜらる天明三年建學の日總受持に任ず寬政十年六月廿三日殁す年六十一命を奉じて筑前孝子良民傳を著はす（日本教育史資料）

タケダ　ハルノブ　武田晴信　信玄と號す信虎の第一子にして姓は源氏、小字を勝千代と稱す父信虎次子信繁を鍾愛し將さに晴信を廢せんとす晴信之を知り深く自ら晦匿して驕動進退常に人に及ばざるが如くす而して信虎實性狂暴にして晴信を罵辱し益〻之を疎斥す因て臣士の罪亦た之を輕侮す天文五年三月晴信元服す時に姉の夫今川義元爲に將軍足利義晴に請ひて其の名の一字を賜はり晴信と稱して從五位下に叙し大膳大夫兼信濃守に任ぜらる而して信虎悅ばずして曰く汝は今川義元に頼るべし我曾ぜずと晴信乃ち諸して退き厚く義元に結ぶ七月晴信左大臣藤原公賴の女を娶

天明の比客將の兵上杉氏の營に達す營に達す營に隻騎なし顧て河中島の戰壁冒の如きを聞き還て筑摩河を渡て北軍の後に出づ甲斐の軍望み見て乃ち返り夾み て北軍を擊つ北軍敗走す道て之を單川に逼る北軍輪轉返戰し道兵を包みて其將さに之を壘にせんとす甲斐の軍横に擊て之を敕ふ北軍乃隊を倒にして退く宇佐美定行轍を渡口に植て之を護りて盡く濟るを待甲斐の兵疲れて復た追擊せず八月謙信復河中島に出で村上義清等を して舊戰處に營せしめ自ら進みて河を過ぎ水を背にして陣す信玄其志必死に在るを知り敢て出でゝ戰はず其の餘騎報じて曰く北軍薪を積むも山の如しと信玄諸將に命じて曰く敵中夜火の擧るあるも慎で進擊する勿れ進擊する者は族誅せんと暮に及び候騎報じて曰く北軍營を掃ひ荷擔して將に去らんとすと諸將爭て道擊を請ふ信玄曰く謙信豈に暮に迫りて營を掃ふ者ならんや之を擊たば必ず敗れんと其の夜北軍火起る而れども甲軍動かず天明北軍を望見するに果して堅く陣を備て待つ諸將乃ち信玄に服す信玄伏を兩山の間に設け戰を挑みて佯り敗れ敵を誘ひて山に入り鏃射之を殲さんとを謀る乃夜伏を設け明日馬を綏て北軍の中に入れ輕卒を出だして之を追ふ謙信出でず信玄兵老いて疲あるを虞り夜に乘じて上野原に入る謙信軍を擊て追擊す信玄返戰交々兵を收て歸る永祿元年二月信玄延徳寺の僧實了をして和を議せしむ時に謙信亦人をして來り謂はしめて曰く我れ卿と世讐あるに非ず唯々村上義清をして國を復せしめんと欲するを以てなり而して其の請ふ所已に盡きたり願くは卿と面會して異なきを議し筑摩川を以て境となし以て永く相交通せんと信玄之れを諾す乃ち五月某日を以て期となし筑摩川を隔てゝ兩陣相望み從者五人を從へ各々胡床を置き騎して相出づ謙信先づ騎を下りて床に倚るや信玄曰く何ぞ恭なるや、我汝に馬上相語るを許すと謙信之を怒り直ちに騎して去り人をして來り謂はしめて曰く我は梶原景時より累世綿々たり且つ上杉憲政に代りて管領職を襲ふ汝武田氏幕下に在り曾て富士に狩するに當り實に我が梶原の次官たり汝癸ぞ無禮なるやと信玄之れに對て曰く武田は幕府の親族にして梶原は其の家隸なり襲等を以て幕下に咫尺するを得るが如きを何ぞ榮となすに足らんや彼れ憲政の昏惛にして宗を滅するや汝之に代りて自から管領と稱するのみ而して今我を無禮なりと謂ふ汝實に禮を知らざるなりと謙信滋々怒り相持すること七旬に至る後ち又た兵を結んで解けず四上野を侵し松枝安中の兵二萬を併せ（或は一萬五千に作る）箕輪城を攻めて之を拔き和田友綱、白倉宗任、高山無重、倉加野能村、上戸友光、和田成住等皆な降る是に於て四上野悉く平ぐ七年信玄兵を遣はして飛騨を伐つ江間常陸介降を乞ひ弟曾圓城寺を以て質と爲す是の年九月信玄德川家康の英邁にして疆土日々に大なるを聞き人を遣はして好を通ず九月織田信長人を遣はして信玄の子勝頼に嫁すを求め養女を以て信玄の子勝頼に嫁すも亦た歸降す九年正月信玄其の餘黨を殺し亡命す

越中の人椎名泰種も亦た歸降す九年正月信玄其の餘黨を殺し亡命す

天台宗に歸依するを以て婚女を禁じ葷肉を絶ち毘沙門堂を建立し護摩灌頂を修め法性院大僧正と稱し陽はに父を逐ふの罪を謝し陰に好を京に入るを議するに在りと云ふ十月信玄德川家康の疆土日々に蹙小するを見て今川氏眞の兵勢日に鋭を加め遠江を中分す十二月師二萬五千を率ゐて下山より出て、沖津を侵す家康亦た兵を督して清見寺に次し而して東部を略す氏眞自から兵士三萬五千を督して三河に入り野田城を攻め師を勵まして遂に其の二三郭を拔き鹿垣を結び擊師をして井水を澮らさしむ城中日に蹙し陷沒旦夕に在り會々芳休と云ふもの尺八を善くす城中に在り毎宵樓に上りて之を吹く衆皆な其の妙

氏亡ぶ信玄進みて遠賀山に陣し悉く國人の質子を收て之を甲府に送致し沖津、横山、久能の城寨を築き將士をして之を守らしめ又た兵を遣はして花淵城を拔き遠目、田中の寨を修築す而して信玄使を北條氏政に遣はし謂て曰く富士川を境して封を分たんと十二年正月降る是に於て四上野悉く平ぐ七年信玄兵を納れんと欲し信玄の使者を殺し出でゝ薩埵に次す信玄之れを聞き兵を率ゐて對抗し夜に乘じ襲ひて之れを拔く後ち九月遂に小田原を拔かんと欲し師三萬を率ゐて甲府を發し兩軍相戰ひて互に勝敗あり遂に決せずして退く後ち元龜元年信玄家康と隙を生じて相絕つ是の冬氏政和を乞ひ弟三郎を送りて質となす二年三月信玄師を率ゐて遠江を侵かし高天神城を攻む是の時に當りて信玄の兵感益々熾なり密かに浸井長政、朝倉義景と信を通じ且つ延暦寺の僧と相ひ約して疆遠を取り尾勢濃江に抵り長政、義景を以て羽翼となし營を比叡に列れて京師を圖らんと欲す九月將軍足利義昭竊かに松原道友、尼子新左衛門を遣はして來り謂て曰く予先きに信長の力に依りて復職を得彼れ亦た敬禮を盡すと雖も頃日三好黨を滅し擅に官を任免し幾内及び丹播を鑒食し幕府を蔑如し禮義に悖が爲めに族を舉げて之れを誅せば孝之れに過ぎず且つ謙信嘗て亦た之れを領諾せり因りて卿又た彼を驗して援となし遠かに信長を討ぜよと信玄乃之を畏沙門堂に導き已に佛に師依し久しく軍旅の務を廢すと稱して之を辭し使者を饗して贈るに餌馬を以てす十一月信長使を遣はし謂て曰く驚くは德川氏と連和せよと乃ち品物を贈るを而れども信玄贈遺を謝し講和を辭す三年十月信玄大舉して遠江に寇し建長飯田を拔く是より德川氏と對抗し爭亂亦た止むことなし天正元年信玄信長の違を敕ふを責め終に和好を絕ち之れに書を送りて曰く汝蠹に して謀を貪り餌繩檄を包むも我れ已に之を識れり天網立て待つべきなりと信長亦た信玄の惡逆を數ふ七月信玄刑部を發し本坂を鎗え自ら兵士三萬五千を督して三河に入り野田城を攻め師を勵まして遂に其の二三郭を拔き鹿垣を結び擊師をして井水を澮らさしむ城中日に蹙し陷沒旦夕に在り會々芳休と云ふもの尺八を善くす城中に在り毎宵樓に上りて之を吹く衆皆な其の妙

を稱す信玄一夜竊かに往て之を聞き銃丸に中りて馬より墜ち絕して後ち蘇す遂に疾を獲而して益々甚きを以て守を置き引き去り四月十二日終に平谷に卒す時に年五十三信玄遺囑して曰く余隙め天壽を知れり故に葬押數百紙を具ふ余の死後以て四方應答の書翰に充てよ方今諸州猶れく我が武を知れり病を開て未だ死を知らざれば則ち邊境を侵す者あらず因りて必ず佛事を修むるを勿れ喪を秘する三年の後石棺を造り甲を摂きて以て殮し密かに諏訪の湖心に沈め而して後ち喪を發せよ勝頼嘗て諏訪氏の後を承ぐを以て宜しく信勝を立てゝ我が嗣和となすべし而して信勝年尚を幼弱宜しく上杉謙信と講和すべし謙信之を領せば信長は畏るゝに足らず北條氏政は擊ちて之を破るべしと言畢て瞑す乃ち其の弟信綱の狀貌酷だ信玄に似たるを以て疾を問ふ者あれば暮を待ちて接見せしむ因りて列國久しく其の實を審にせずと云ふ而して之を殯する三年の後ち甲斐の慧林寺に葬むる法名は機山慧林寺と號す信玄豪武にして善く戰ひ權謀なく書を讀み詩歌を善くし又た佛說を信じて禪味を愛す兼て圖畫を善くす鍾密精細にして武を用ふるものに似ず而して復た能く治國の法に達し他邦を侵畧する毎に之れを諸士に割與せず甲信二州肥沃の地を擇て諸士の食邑を增し青沼忠吉、小堀伊勢を以て郡代となし新附の者ある毎に賦稅を寛にして民を撫養す是を以て終世一邑と雖も叛する者なし信玄年を歴て父を逐ふを恥ぢ書を好むと雖も終世論語を誦せず嘗て目して頭痛の書と曰ふ五子あり義信、龍芳、勝頼、盛信、義久と云ふ（野史、日本外史）

タケダ　フクサイ　竹田復齋　福岡の儒者にして名は定矩字は子恕通稱平之丞、梅庵の子なり長崎京都に遊び四侯或賓若槻幾齋等の門に學ぶ寛政八年四月藩より學問所總受持に補し家譜編輯を兼ぬ同十一年七月廿二日歿す年三十一（日本教育史資料）

タケダ　ブツマ　武田佛磨　三輪圓通寺の住職なり信濃國の人幼にして父を失ひ母氏に賴る七歳にして過て人を傷けて死に致し遂に僧と爲り佛磨と稱す戊辰五月十五日官軍彰義隊を東台に討す隊兵終に敗れ一山皆燬く死屍累積するも官軍を憚りて人敢て之を歛むる者なし佛磨慨然として曰く衆生を平等視するは吾道なりと乃ち官に請ふて屍を聚めて山王靈に火し骨を圓通寺に移し厚く之を葬り而して其灰を靈隅に埋む即ち今の戰死者の墓是なり後又函館及び諸道戰死の者の爲めに墓石を圓通寺に立つ詣者絕えず香火常に盛んなり明治二十五年一月二十四日寂す年六十六（墓碑、台北地誌稿）

タケダ　ブンアン　武田文安　江戸の醫師杏仙の子名は敬字は廣陵享保庚子正月丁亥早世す品川正慶）と云ふ其嗣絕えたり（耆舊得聞）

タケダ　ホウメイ　武田鳳鳴「リウサウロ」

タケダ　マサタカ　武田正隆　儒を以て水戸威公に仕ふ三百を賜ふ明暦三年江戸大火に其所在を失す或は曾く火の爲に死す

タケダ　マサトモ　武田政友（東遷基業に前車後詔集を引て政友を長則に作る）○雖波戰記に正倫に作る）友綱の子なり姓は源氏初字を源左衛門と稱す父友綱（諸系圖に信貞に作る）の子にして義久は晴信の第五子なり政友相模の竹下に住し北條氏に屬し又た謁島正則に仕へ改て勘兵衛と稱す後ち去りて越前に仕ふ嘗て忠直の旨に忤て大阪に入り右府豐臣秀頼の馭術の師と爲る忠直之を詰り政友の首を購ふに五千石を以てす大阪夏の役政友終に越士野本右近の爲めに擊たれて死す時に年五十二（野史）

タケダ　マンチヨ　武田萬千代「タケダノヨシ」

タケダ　ミキ　武田三喜　陸軍騎兵大尉なり秋田縣出身にして明治廿七年九月二日清國盛京省幡重兵大隊附として從軍中廿七年九月二日同所兵站病院に於て病大安平にて病に罹り同十月五日同月死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タケダ　ミツカズ　武田光和（一に光真に作る）武田元繁の子なり字は太郎、刑部少輔と稱す金山城に居て尼子經久に隙し大内氏と爭ふ大永四年五月大内義興及び子義隆陶道輝を以て先鋒となし安藝に入り二城を拔き櫻尾城に迫る事急なり毛利元就急に出て救むる者なし佛磨慨然として曰く衆生を平等視するは周兵攻圍益々漸れり熊谷信直香川光景等來りて應援し周兵を擊　周人杉重視等の軍敗れて去る七月光和兵を率ゐて周の先鋒陶隆滿と戰ふ光和善く射る多く敵兵を斃す而して後ち絞す繩久師を率ゐて來り援け周師と戰て克たず元就夜義隆の營を斫りて之に克つ十六日義興義隆營を撤して去る享祿元年九月義隆師を帥ゐて光和を金山攻めすること二十一回光和固守して屈せず天文三年金山城に卒す（野史）

タケダ　ミツヒロ　武田光廣（耆舊記に光廣を信重に作る）姓は源氏、武田光和の弟伴城主下野守の子なり光和の卒するや女あり其男なし依りて部下の士光廣を迎へて元服を加へ光和の女に配して武田氏の家督と爲す是に於て光廣兵部大輔と稱し（耆舊記に刑部大輔に作る）金山城に居る香川光景（品川、齋藤、内藤、戸坂、溫品等に作る）正原等家事を執る光廣大内氏と相ひ抗衡し連年解けず而れども光廣部下を御するの才幹に乏きを以て香川、品川、内藤等相爭て采邑に退き城中驕擾す天文十年三月陶晴賢、毛利元就等の爲に攻められ支ふること能はずして自殺し城陷ると云ふ（野史）

タケダ　モトシゲ　武田元繁　武田元綱の子なり太郎左衛門と稱す金山城に居る明應三年將軍足利義稙佐々木高頼を征す元繁族弟信親と共に兵を率ゐて師に鈎里に從ふ永正五年義稙を奉じて京師に入る永正八年八月元繁兵を率ゐ信繁と共に義稙に屬して龜山より發し船岡山に先登し細川三好の兵と戰ひ擊て之を破る永正十三年群國擾亂す管領大内義興元繁を以て探題となし歸りて安藝を鎮せしむ元繁曾て意を足利義澄に屬す故に貳心を懷て義興と絕つ（事は足利義澄大内義興の傳に詳なり）明年を竢ちて兵を擧げんと欲し竊かに軍事を議せり永正十四年二月兵を金山城に起し今田に次し山縣の族を攻て之を下す熊谷元直、香川信景等相從ふ十月小田信忠を有田城に圍む毛利元就兵を率ゐて信忠を後援す元繁、元就と中井手に戰ひ軍敗れて死す（野史）

タケダ　モトツグ　武田元次　武田義統の子なり字は孫八郎、義統に繼で若州小濱に住す是の時國人内藤筑前守天筒に據り遡見昌清高濱に據り翠屋勝久佐柿に據り熊谷直澄井崎城に據り各〻割據して元次に背く永祿十年八月足利義昭本濱より今津を歴て小濱城に入る細川藤孝上野清信從ひ來り元次に依賴して三好等の逆賊を征せんとす諸すれども若狹國小にして主弱く且つ兵寡うして能はず即ち去りて越前に遷り朝倉義景に遷る十一年八月朝倉景恍牛田又八郎兵を率ゐて來り侵す若狹の兵防ぎ戰て克たず元次退きて城に入る越兵從て之を攻む守禦力竭き元次將さに自殺せんとす適〻景恍使を遣はして和を講じ元次を誘ひ兵を收めて越前に歸る而して後ち國人各〻城寨に據りて恣に侵伐せり元龜元年織田信長、丹羽長秀を以て若狹の守護となし牢國を領せしめ其の餘を以て國人に分與す則ち遡見昌清、内藤越前、香川右衛門大夫、熊谷直澄、山縣下野、白井光胤、翠屋勝久、松宮玄蕃、寺井源左衛門、武藤景久是なり天正元年八月信長朝倉を伐ち義景亡ぶ九月元次免れて國に還るとを得たり此の時長秀既に小濱に在り乃ち避けて遠敷郡神宮寺に入り歴〻敕を信長に乞ふ信長聽さず天正九年三月遡見昌清死して子なし、信長昌清の遺邑を分ちて三千石を元次に予ふ天正十年六月信長弑せらる諸將州郡を分取す長秀悉く一州を領して國人を追去し其の食邑を沒收せり七月長秀員津に往き元次を法道院に招きて之を殺す年三十一、長秀、元次の室氏を檜にす室氏は京極高吉の女なり柔儀美なり秀吉取りて以て妾となす松丸殿と號する者是なり（野史）

タケダ　モトツナ　武田元綱（一に基綱に作る）伊豆守信繁の季子なり安藝守と稱す、應仁元年大内持世西陣（山名宗全の陣を云ふ）に入り兵威大に震ひ兵を分ちて相國寺の御靈口を塞ぎて以て東陣（細川勝元の陣）の通路を斷たんとす元綱東軍に屬し三寶院に軍して宮闕を警衛す畠山義就及び持世土岐六角一色の兵五萬來り襲ふ元綱膂力あり屬下の兵二千を率ゐて三寶院前門の片扉を排して禦き戰ふ卯より申に迨び接戰十餘回士卒多く斃る獨り元綱揖闘して屈せず熊野士野老源三進み來り刀を奪て將に元綱を捕へんとす元綱怒り七尺三寸の長刀を揮ひ源三の胄を斫る胄堅うして刀、把より折る元綱空手叱咤聲牛の如し源三眼口一縮、血を吐て絶す部下の士熊谷信光香川定景等奮擊遂に敵を卻く文明三年兄信實死す仲兄國信立てて安藝牢國を頒ちて元綱に讓與す元綱金山城に居る（野史）

タケダ　モトノブ　武田元信　武田信親の子なり字は彦二郎、伊豆守大膳大夫と稱す明應十年正月從四位下に叙す父卒して家を嗣ぐ將軍義澄命じて丹後の守護に補す從三位に陞る大永元年十二月薨ず（野史）

タケダ　モトミツ　武田元光　武田元信の子なり初字は彦二郎、伊豆守、大膳大夫と稱せり大永六年兵を率ゐて京師に入り細川高國を援け七年二月高國に應じて三好の兵を摂津に拒ぎ大に戰ふ天文七年七月老し剃髪して宗勝と號す天文二十年八月卒す法名は天源、發心寺と號す從三位を贈らる（野史）

タケダ　モリノブ　武田盛信（或は信盛に作る）晴信の第四子なり姓は源氏、初字を五郎と稱す永祿四年父晴信信行盛政を誅し盛信を以て其後たらしむ永祿四年父晴信信行盛政を誅し盛信を以て其後たらしむ（仁科氏は其の先木曾義仲より出て孫を以て仁科氏を嗣ぎ名を盛忠と改め十傳して盛政に至る）天正六年二月薩摩守と稱し高遠の城守となる天正壬午の歳三月織田信長甲斐を伐ち其の子信忠師を帥ゐて來り攻め僧を使して盛信を諭し城を避け去らしむ盛信乃ち小山田出昌行と謀し使僧の耳鼻を刎れて之を逐ふ信忠大に怒り兵を進めて合圍す而して盛信其の爲すに能はざるを察し讓を設けて昌行と相飲み終に自殺す時に年二十五（野史）

タケダ　ヨシノブ　武田義信　晴信の第一子なり姓は源氏、字を太郎と稱す永祿四年川中島の戰に義信始めて軍に從ふ義信勇にして士心を得立ちて世子となる晴信嘗て父を逐ふを以て義信の亦た之に傲はんとを恐る時に嬖妾の子勝頼寵あり會〻讒間之に乘ず晴信遂〻義信を疎んじ勝頼を以て諏訪軍代となす是より義信滋〻父と相和せず終に相絶つ七年七月義信其の傅曾根周防近習長坂源五郎と共に燈を觀るに託し竊かに飯富虎昌の宅に往きて晴信を殺さんと謀る虎昌之を堅うして刀、把より折る元綱空手叱咤聲牛の如し源三諸す翌日監吏之を虎昌の弟昌景に告ぐ昌景乃ち晴信の側に待し言を進めて曰く世子義信歳甫めて十六にして軍に從ひ日夜閤下の鍾愛を享す而して川中島以來公然閤下を誣り且つ既に異圖あり殊に飯富虎昌は讒言極諫して尚ほ改めざれば之に縊ぐに死を以てすべきの地に居り而も今既に諫爭せず又反りて其の事を蹤成す實に其の罪や虎昌に在り臣久しく蹤跡して其の實を知れりと乃ち僭を探りて義信の手書を進む晴信之を秘して未だ色に形はさず竊に之れが備をなす八年正月晴信、虎昌を責めて曰く汝罪あり我れ嘗て諸士を召すに汝會せず其の罪一なり毎に我を蔑如す其の罪二なり我れを上杉謙信に若かずと謂ふ其の罪三なり義信に左袒す其の罪四なりと虎昌乃ち自殺す而して晴信、義信を捕へて獄に下し亦た長坂源五郎等八十人を執へて擬するに謀逆を以てし皆之を殺す十年十月義信亦竟に殺さる時に年三十（野史）

タケダ　ヨシムネ　武田義統　武田信豐の子なり武田元光の孫、本名は信統、字は彦二郎、大膳大夫と稱す天文十七年三月將軍足利義輝の妹を娶る父卒して封若州を襲ぎ永祿十年四月卒す法名は聖叙宗清、桂林寺と號す（野史）

タケダ　レイザク　武田禮作　陸軍工兵中尉なり長野縣小縣郡四福田村の人明治二十九年士官學校を卒へ三十年一月陸軍工兵少尉に任じ翌年一月砲工學校に入り三十二年二月中尉に進む三十三年六月北清に團匪の亂あるや臨時鐵道隊に屬して出征す九月二十一日中尉に鐵道材料蒐集と線路の實測を爲すに當り俄かに匪徒の襲擊に會ひ遂に慘殺せらる年二十八後特旨を以て從五位を贈らる

タケダ　アイザン　武知愛山　伊豫松山藩士なり名は方獲字は伯慮通稱は作八後幾右衛門と改む愛山、五友、清風、海外、黑犬、佯聾、臥南等皆其號なり世〻松山藩に仕ふ初め日下陶溪に學び長じて藩學に入り次て昌平黌に入る學洛閩を宗とし博く經史に涉る又詩文和歌書畫篆刻を善くし傍ら劍砲の武技に通す弘化中藩學助教に補し侍讀、世子教諭、教授等に累遷し紙方、

普請奉行、產物、山林用係等を兼れ戊辰の戰藩論紛紜特り愛山黎順を首唱す用ひられず世局一變藩主居を東京邸に移す是より復城市に居らん欲せず母を奉じて城西高岡村に避け孝養備さに至る母沒するの後高柳、三津、郡中に轉寓し到處に惟を下し徒に授け詩文を以て自から遣る愛山常に泰西の學を嘗み終身洋醫の藥を服せずと云ふ著はす所、華夷分別考、非狂論、黑犬先生傳、如鏡稿等あり明治廿六年一月三日歿す年七十八（伊藤鼎氏寄）

タケチカ　武近　三原林藏と稱す薩摩の刀匠にして元平の門人なり文化年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タケチカ　武親「ヨシダタケチカ」

タケチカ　クロヒト　高市黑人　和歌を善くするを以て其の名天平寶龜の間に著はる秀歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歴）

タケチ　ハンペイダ　武市半平太　勤王家にして土佐藩の士なり瑞山一に吹山と號し又た茗渓と號す父は半右衛門其先は武知麿に出づ祖某は伊豫の人仕へて山内氏の臣となる子孫世〻職を襲ぐ瑞山人となり顔色蒼白狀貌雄偉性沈毅言笑少く喜怒色に露はれず頗る擊劍に長じ傍ら書史に涉り又畵を善くす文久元年瑞山江戸に在り此の時に方りて幕府政を失し外患内憂並び至る瑞山慷慨激昂大に尊攘の義を唱へ水戸薩摩長門三藩有志の士と相往來す而して偶〻和宮降嫁の事あり有志の輩或は之を路に奪はんとを謀る瑞山禦を正うして曰く今日吾儕決して匹夫の勇を逞ふするの時に非ざるなり如かず速に各〻其藩に歸り直論以て藩主に勸め大義を天下に唱へんには之に於て諸藩有志の士と相期し國に歸り屢〻建議して義を天下に唱へんとを藩廳に勸む言未だ行はれず而して薩長は已に日を駕して將さに京都に入らんとす瑞山乃ち先づ同志吉村重郷宮地正覺を京攝の間に遣り薩長有志の士に周旋せしむ然り而して藩廳の議も亦た稍〻變じ少しく瑞山の言を採る所あり同六月廿八日藩主山内豐範勅命を奉じて京都に入る瑞山も亦從て上京す蓋し山内氏入京の事は實に瑞山等與りて力ありと云ふ同十月朝廷特に三條姉小路の兩卿を勅使と爲し幕府に遣はす時に姉小路卿、豐範に請ひ瑞山を以て其諸大夫と爲す瑞山卿に隨て東下し常に左右に侍し頗る翼贊する所あり同十二月勅使に從て京都に歸る同三年癸亥二月京都に在り藩邸の留守居役となる是時に方りて薩長隙あり而して藩邸亦た瑞山等を忌む故を以て土も亦た長と和せず是より瑞山等を忌む故を以て土も亦た長と和せず是より瑞山常に及ばんとす是に於て同志の士在京の者凡二百人瑞山を推戴し率て以て長州に投ぜんとを勸む長人久坂通武等も亦た側より之を諷す瑞山慨然として曰く我れ寧ろ藩主を直諫し以て死を賜ふに至るも何の顏ありて他國の食客と爲らん之より國に還る而して益〻力を竭して國藩の士氣を鼓動す同三月藩邸の命に從ひ道を京師に歸る者皆感動す同六月平井聞崎弘瀬等遂に櫻島の事あり長に馬關の擧あるに會ふ此に於て士氣紛亂或は異議を發して退かんとする者あり或は激列し以て衆心を集收し又た屢〻言を藩邸に陳じ以て時勢を矯正せんと欲すと雖も一も納れられず却て嫌疑を蒙むると愈〻甚しく然りと雖も瑞山勉力懈らず同八月京師の變あり九月廿一日藩邸遂に瑞山を捕へて獄に下す明年元治元年四月始めて鞫訊せらる爾後屢〻鞫訊せらるゝと雖も獄寛に處らず慶應元年五月廿一日死を賜ふ時に三十七子なし同族武知忠助の次子半平其後を繼ぐ年四月正四位を贈る（海南義烈傳）

タケチ　フルヒト　高市古人　天平寶龜の間和歌を善くするを以て知らる詠歌は載せて萬葉集作者履歴）

タケチ　マクニ　高市眞國　同姓眞麿と共に天平十七年八月南都東大寺の廬舍那佛の大像を鑄す其の功を賞するに方り兩人ともに從五位下に叙す蓋し鑄師位階を賜ふ嚆矢たり（東大寺要錄）

タケチ　モトヒロ　武知基弘　陸軍歩兵少尉なり德島縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て隊備役より召集せられ後備歩兵第四十三聯隊附として三年八月五日清國盛京省腰寨子に於て病に罹り同九月十七日開原兵站病院に於て病死す

タケチヨ　竹千代　德川將軍嗣子の幼名にして家康（初代）秀忠（二代）家光（三代）家綱（四代）家治（十代）家基（家治嗣子）等皆之を稱せり

タケヂヨ　武女　世に自拍子武女といふ文章を善くす淺草馬道の醫鈴木某の女にして江戸の產なり新吉原の遊女となり小式部と呼ぶ尾張侯德川宗春之を寵し春の一字を賜ひ春日野と改めしめ更に妾として阿春と呼びしめ名古屋に攜へて歸る父亦仕へて士となり鈴木金左衛門と云ふ享保中名古屋より江戸に歸り上紀行に庚子道の記あり名文を以て世に著はる清水濱臣其の紀行を刊行して更科十六夜の文章に耻ぢずと稱す武女天明二年五月十八日歿す年八十餘名古屋建中寺に葬む（櫛草紙、女鑑）

タケチ　ワウジ　高市皇子　天武帝の皇子なり母は宮人尼子娘なり帝の兵を舉ぐるに當り皇子近江に在り帝大分惠尺をして之を召さしむ皇子即ち鹿深を踰え來りて積殖山口に會し命を奉じて不破關に至り和璽に屯す以て軍事を監す會〻近江の驛使韋那磐鍬師の變あり九月廿一日藩邸遂に瑞山を捕へて獄に下す及大麻呂を捕獲す帝の桑名に入るを聞き使を馳せて斬く今遠く軍を離るゝは不便なりと帝乃ち不破に赴く皇子野上に迎ふ帝皇子に謂て曰く近江の朝左右の大臣以下智謀の臣多し今族興に事を計るもなし唯〻幼孺子あるのみ之をなすと如何と皇子曰く撫ひ劍を按じて曰く近江の群臣多しと雖も何ぞ敢て天皇の靈に抗せん天皇獨なりと雖も臣神祇の靈に賴りて天皇の命を奉じ諸將を率て征討せは豈に拒ぐものあらんやと帝之を褒め手を執り背を撫して曰く己之を憐みて意る勿れと因て鞍馬を賜ひ悉く軍事を委れ皇子和璽に還る事平ぐに及びて命を奉じて近江群臣の罪を斷じ斬流差あり十三年淨廣貳を授く朱鳥元年封四百戶を加ふ持統帝四年七月太政大臣となる十月皇子公卿百僚を率て藤原の地を相す五年封二千戶を增す六年再び封二千戶を增し前と通じて五千戶とす七年淨廣壹を授け十年七月薨ず二子長屋王、鈴鹿王、二女河内女王、山形女王と曰ふ（大日本史）

タケヅヌノ　スガル　竹杖爲輕（シムラマンザウ）

タケテル　武照　深川作右衛門と稱す薩摩の刀匠にして享和文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タケナガ　武永　藤原姓筑後大石の刀匠にして家永の子なり文明年間の人或は云ふ河崎に住すと（古今鍛冶銘早見出）

タケナガ　武永　筑後大石の刀匠にして寛永年間の人或は云寛文比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タケナガ　著永　筑後大石の刀匠にして明應年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タケナカ　シゲカド　竹中重門　字は以敬、濃州の人なり父を重治と曰ふ所謂竹中半兵衛尉是なり本州磐手城に治す重門七歳にして父を喪び家を繼ぎ父の蔭を以て秀吉に仕ふ十六歳にして從五位下に叙し諸大夫に列せらる秀吉薨ずる後石田三成亂を構へ關原の軍あり重門此の時德川氏に屬す其の邑相川の農民小四行長を擒にす慶長十八年重門家屬を率ゐて江戸に寓す元和元年大阪の役に重門命を奉じて旗纛待從の列に從ひて發す寛永八年十月九日病て歿す年五十九子孫磐手に居る重門性仁靖寡默喜怒外に見はれず動止物に滯らず平生讀書を好み作文を好みて終日倦むを知らず又た本朝の書記を聚め暇日には倭語を綴り倭歌を連らぬ兼ねて善く倭字漢字を寫して頗る楷法あり其勢以て觀る可し人或は語りて古今の兵亂に及べば則ち詳に之に告ぐ父の風ありて家聲を墜さず幼にして母に事へて終身幸に怠らず人と奕りて未だ曾て食言せず善く聞けば即ち喜び見れば即ち懼る殆んど恒あるか（事實文編考證部）

タケナカ　シゲツグ　竹中重次　父を重信と曰ふ越中守と稱す豐後府内城に治し邑二萬石を食む重次從五位下に叙す采女正と稱す寛永九年冬長崎奉行に補せらる時に堺浦の商賈平野屋三郎右衛門嘗て長崎に移住し一妾を蓄ふ美姿なり重次之を乞ふ從はずり乃欺て曰く唯醫會に具するのみ畢れば乃さ遣歸すと三郎實と遣る日を歷て歸さず妾脱し歸る三郎罰を懼れ妾を拽へて堺浦に歸る重次憤怒して其兄市郎兵衛を獄に下す親族悲歎して其妾を逐捕し市郎兵衛を赦さんと乞ふ重次許可す三郎之が爲に資財を失ひて困躓し江戸に赴きて重次を訟ふ曰く重次色を好み人の妻妾を奪ひ財を貪り賄賂に因りて獄を決す異域嘗て善殺を輸す諸賈井長欧朝倉義景を攻む重治及牧村某丸毛某之に副とな之を珍なりとして江戸に獻ぜんと請ふ重次之を抑へて曰く若し斯佳品を獻ぜば即ち諸有司必ず謂はん往時より運輸せざるに非ず商賈竊に隱匿するなりと此の疑問一たび下らば汝等之を如何せんとすと商賈懼れて宥さんことを請ふ重次諾して之れを秘藏すと是に於て重次を召して物問す罪に伏し正作の刀數柄を得たり罪益々重黑し遂に死を賜ふ子源三郎父の事に坐して亦死す（野史）

タケナカ　シゲハル　竹中重治　美濃の人なり姓は源氏、父重元遠江守と稱す本州磐手城に居り齋藤龍興に屬す重治字は半兵衛沉勇溫毅にして智慮多し世人補正成に比す幼にして骨鯁人每に慢侮す父に繼て龍興に仕ふ其老安藤、氏江、不破等皆之を輕弄す嘗て稻葉山城の門に出入す人あり樓上より重治に尿す重治徐に之を拭ひ歸て鳥安藤範俊に謂て曰く某歷々戮辱に遇ふ忍ぶべからず戲に城を襲はんと欲す請ふ援兵を賜へと範俊曰く我嘗て之を謀る未だ其機を得ず況や子の疑鈍にして能はざる必せり固く誡め遵歸す重治弟重矩任子と爲りて城に在り會々疾あり日の晩るゝに及び櫃に收め鋭士に舁がしめ城門に到り謂て曰く鑿を病者に贈るなりと牙城に入る遂に甲を帶び擐て掩擊し龍興の老齋藤飛驒守を獲たり專倉卒に發し敵誰たるを識らず周章脱走し死傷多し龍興亦狼狽し僅に水門に潛居す重治鐘を撞く範俊之を聞き驚躍して城門に至れば固く鎖す實を門外に開くことを得たり而して重治龍興に謁して曰く臣謀逆を爲せしに非ず室老の驕慢を憎み君に代て戮するのみと城を致して而して去る實に三月十八日なり（織田軍記粹玉話に云龍興遁走し重治城に據る節眼する者多し信長人を遣り謂て曰く請ふ龍興を戮せよ半州を頒ち卿に封ぜんと重治懼ばずして曰く我素と叛に非ず惟家臣の罪を正すのみ我邦を以て人に授け藝邑を貪る我が爲さゞる所なりと然ども信長に聽ず遂に龍興に還附すと云）後近江に往き織田信長に謁となる和田泰純の門に寓し勞ら治療を學ぶ又揖斗を池田獨美に受け京都に家す時に泰純の業盛に行はる文輔之に踵て起り聲譽殆と相均し天保七年七月八日歿す年七十一（墓國名醫傳）

れ偃蹇する者重治羽翼の功多きに居る元龜元年堀二郎兵衛武名あり重治赴き就て信長に屬せしむ是夏秀吉淺井長政朝倉義景を攻む重治及牧村某丸毛某之に副とな

タケナカ　ナイダイジン　竹中内大臣　「ミナモトサネヒラ」

タケナカ　ハンベエ　竹中半兵衛　「タケナカシゲハル」

タケナカ　ブンポ　竹中文輔　京都の醫なり姓は溫字は子良南峰と號す初め文刪と稱す後文輔と改む紀伊田邊の人、家世々醫たり文輔に至りて始めて醫となる和田泰純の門に寓し勞ら治療を學ぶ又揖斗を池田獨美に受け京都に家す時に泰純の業盛に行はる文輔之に踵て起り聲譽殆と相均し天保七年七月

タケナカ　ヤスノスケ　竹中安之助　陸軍輜重兵少尉なり大阪府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ輜重兵第四大隊補充隊附と爲り卅七年十月十四日大阪城東練兵場にて馱馬教練の際負傷し三十八年四月五日大阪豫備病院に於て病死す

タケナカ　ヤスタラウ　竹中安太郎　陸軍少將なり長門國下ノ關の人性剛直武を好み十餘歳にして藩兵となり維新の際伏見、淀、鳥羽の役等に從ひて功あり賞典二十石を賜はる明治五年陸軍少尉となり十年大尉を以て鹿兒島征討に從ひ別働第二旅團に屬し肥薩の野に奮戰して驍名あり十一年功を以て勳五等に叙し年金を下賜せらる二十二年陸軍少佐に任ぜられ二十七八年の役旅順攻擊に參與し和尚島鐵頭山砲臺を攻略し又蓋平太平山附近の戰鬪に於て偉勳あり戰功を以て功四級金鵄勳章及年金を下賜せられ累進大佐に任ぜらる三十三年北清事件起るや救援軍に屬して七月太沽に上陸し屢々匪賊を掃蕩し八月北京攻擊に於て殊勳あり功によりて功三級に叙し勳三等旭日中綬章を授けらる三十四年豫備役仰付けられ三十七年日露開戰に至りて留守第二旅團長となり轡て第二軍兵站監として出征中重患に罹り廣島病院に後送せられ三十八年八月十二日遂に逝く年六十病危篤に瀕するや陸軍少將に昇任し特旨を以て位一級を進め從四位に叙せらる其他佛國よりはアンナ第三等勳章露國よりはアンナ第二等勳章清國よりは二等寶星伊國よりはサン、モーリ、エラザル勳章を受けたり

タケナヌカハ　ワケ　武淳川別　（オホヒコノミコの傳にあり）

タケノウチ　イウザン　竹内幽山　俳諧師なり高野丁々軒江戸本町河岸に住す元祿中藤堂侯に仕へて竹内爲入と稱す伊勢久居に卒す長壽、維舟の門人なり其の句に曰く「花をふんでたどうらめしや鐘の聲」（俳林小傳）

タケノウチ　カガノスケ　竹内加賀之助　飲客なり身の丈五尺九寸寛永九年叙衛士覺の時年五十一井伊直戸と爭ひて敗る

タケノウチ　カネザウ　竹内兼藏　海軍大尉なり兵庫縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し吉野艦航海長として從軍中卅七年五月十五日山東岬角の北方に於て軍艦春日との衝突により吉野沈沒の際生藩の儒者にして通稱四郎左衛門、闇の子なり家世々儒を業とし程朱を奉ず初め父に學び後東遊して安積艮齋に學ぶこと五年、歸藩して立教館の教授となりしが文政九年十二月廿五日年五十七にして死す（日本教育史資料、浪華名家墓所集）

タケノウチ　クワンイチラウ　竹内貫一郎　陸軍歩兵少佐なり東京府出身にして明治卅七八年日露戰役に於て歩兵第十二聯隊附として從軍中卅七年八月廿四日旅順要塞東鶴冠山北砲臺に於て戰死す戰功に依り勳四等功三級に叙せらる

タケノウチ　ゲンゲンイツ　竹内玄々一　俳人なり掃磨の高野に生れ成童にして明を失ふ俳人白馬之に俳諧を勸む嘗へて曰ふ眼に雪月花を視る能はず何ぞ之を能くせんと白馬「心にて見るが見るなり月の色」の句を以て諭す終に從ふ後諸名家と往來して名著はる明和中句大に進み江戸銀冶橋に移り居る有無軒夕竹窓と號す文化元年八月廿五日歿す年六十三著す所俳家奇人談あり

タケノウチ　ゲンドウ　竹内玄同　名は幹風又香西坎と號す越前丸岡侯の醫員なり幕府に徵されて侍醫を兼ね四洋醫學所長となり法印に叙せられ渭所院と稱す明治十三年一月十二日歿す年七十六（續墓所一覽）

タケノウチ　コレタダ　竹内惟忠　京都の人なり年十三歳にして京都皇學所の教官淺邊重石丸に就きて專ら皇漢の學を修め後師と共に東京に移り麹町富士見町の道生館に在ること前後十五年師の慷慨激越なる感化を受くること最も深かりき性溫厚篤實虛名を避け貴族院にありても國家の大事にあらざれば口を開かず曾て泥衛公の信賴を受け東洋問題に對し大に力を効したりと云ふ貴族院議員に當選すること數回明治四十年十二月二十五日卒す年四十八

タケノウチ　サネカヒ　竹内實穎　舊鹿兒島藩士にして明治十年西南役に於て三等少警部を以て別働隊第三旅團附と爲りて從軍中三月二十三日肥後國八代郡宮の原に於て戰死す

タケノウチ　サネナホ　竹内實直　舊鹿兒島藩士にして明治十年西南役に於て警部補を以て別働隊第三旅團附と爲りて從軍し四月八日肥後國鮗田郡安政橋に於て戰死す

タケノウチ　シキブ　竹内式部　勤王家なり名は敬持羞庵後に正庵と號す越後國新潟に生る父を宗詮と云ふ醫を業とす享保十三四年の頃京都に上りて德大寺家に從僕となり實憲公城の二刪に仕ふ松蜀仲良に從ひ後其の師玉木葉齋に從ひ垂加流の儒學神學を學ぶ神典有職に精く又武術に熟し扇子を以て砲玉を打ち射箭を掘るの技あり縉紳に出入し正親町三條公積、烏丸光胤、今出川公言、坊城俊邇、東久世通積、岩倉恒具、四洞院時名、高野隆古、勘解由小路資望、町尻說久、伏原宣條、植松雅久以下其の門に入り講說を聞くもの多し神道家吉田兼雄時に神祇權大副たり式部の學派の蔓延を患ひ其の說の正しからざるを一條關白兼香に訴ふ寶曆八年八月紀彈せらる所司代訊ふて曰く汝堂上を集め武術を教ふと是れ公武の分を紊るものなりと式部其の實なきを白して解くを得たり翌九年再たび彈せらる蓋し德大寺侍從の桃園帝に侍講するや先づ式部の講を聞て之を帝に進講す恰も式部が侍從の口を藉て其の說を進講するに異ならざるなり一條前關白之を患ひ國母青綺門院に奏し主上の竹内流神書を讀み給ふを止む帝年十五聰敏にして至孝其意なきも一たびは止みぬ而して式部は所司代に召され學說の邪正を糺さる併せて堂上に軍書を進講し武器を獻ぜし事の實否を糺さる白して解けたるも門弟の體神は皆絕門すべきを命ぜらる式部も終に吉田白川兩家を措きて神典を講じたる事及び三本木の町家に於て堂上と宴會したる事を罪とし追放に處せらる時に九年五月六日なり是より伊勢國宇治に赴き正庵と號し權禰宜蓬萊雅樂に寄食す明和四年三月八日山縣大武等に連累ありとして宇治に捕せられ江戸に押送せらる八月廿一日八丈島に流さる蓋し惡も同謀形跡なきも式部嘗て主上を奉ふて吉野に義旗を擧ぐべし等の妄言一時

に京都に喧傳せし事あり大貳等の計策恰も之に類するを以て同謀と目せられたるなり而して式部無罪の事明かなりと雖も京都の地を以て放せられ乍ら桃園帝の崩を聞て追悼の爲京都に上りたる罪を以て罰せらるゝに至れり船中病に罹り十二月五日三宅島に歿す年五十六明治廿四年十二月正四位を贈らる世に信濃の天龍道人を以て式部と同人とせるは誤なり（星野恒撰竹内式部君事蹟考）

タケノウチ　シンロク　竹内新六　勤王の志士なり諱は延淑常陸國新治郡安食村の郷士なり安政の末羽部英康等と共に國事に力を竭せり後安房館山に禁錮せられ慶應元年六月二日病死す年五十四（殉難錄稿）

タケノウチ　シャウベエ　竹内正兵衛　勤王家にして長門藩士なり諱は勝愛幼名清記後に正兵衛と稱し竹叢と號す文久二年所帶方頭人たり當時藩主尊攘の事に盡力し有志の士等多く他に赴きて王事に奔走し爲めに財用多端なりしも正兵衛宍戸左馬之助中村九郎等と共に米金の調發に拮据經營して缺ぐことなからしむ同三年幸藏元役となり五月の初め外冠打拂の事起るや命を受けて赤間關に赴く翌元治元年六月禍原越後に從ひて上京したりしが七月十九日の變に藤森竹田鳥羽の諸道に戰ひ軍利あらず諸士奔竄したれば正兵衛亦大阪に退き遂に歸國す八月外國軍艦の赤間關を襲ふや正兵衛亦兵隊に交りて快く一戰せしが其後謹獄の事起り十一月十二日遂に斬られる年四十一明治二十四年十二月朝廷其志を憫み特に正四位を贈らる（甲子殉難士傳、殉難錄稿）

タケノウチ　シャクメイ　竹内錫命　松代藩士にして初め岡野石城に後幕府の儒官古賀小太郎に從遊す天保十五年より數年間松代月次講釋に從事す天文易道に精しく且つ關流の數學に長ぜり佐久間象山小林良堂宮下有常其門より出づ（日本教育史資料）

タケノウチ　スケザウ　竹内祐藏　陸軍歩兵少尉なり岐阜縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第三十五聯隊附として從軍中同年十月三十日旅順要塞一戸營塁に於て戰死す

タケノウチ　セウラン　竹内小欒　女名は千賀字は左琴長門の人平安に住す初め圓山應瑞に學び邦俗の美人を寫す又好みて秘戲の圖を作る後ち岸翁を師とし其格を更む人物山水龍虎を作るに善一其歿年詳ならず（畫乘要略）

タケノウチ　セツサイ　竹内節齋　勤王家なり諱は啓本姓は小川通稱を初め嘉助といひ後に姓名を改めて竹内節齋といふ武藏國入間郡竹内村の人にして家世々里正と爲り富裕を以て聞ゆ十七歳の時江戸に入りて國典を平田鐵胤に儒學を朝川善庵に醫術を辻元崧庵に學ぶ後郷に歸り醫を以て業となし父歿して里正の職を嗣げり人と爲り剛毅忠直慷慨にして氣節あり夙に王室の式微を憤り復古を以て志としたり竊に同志を集めて事を擧げんとす相樂總三等と共に三田薩州邸に入りて糾合隊を組織す慶應三年十一月節齋等及び會澤元輔四山謙之助以下野州出流山に據り檄を遠近に移す幕府之を探知して兵を出さんとす節齋等乃ち陣を岩船山に移してその襲撃を防がんとす然るに八州取締淺谷鷲郎密に多數の部兵を率ゐて岩船山の近傍新里村に在り節齋等之を知らず同山に向て兵を進むるに當り遂に伏に陷り節齋元輔等死力を盡して敵に當りしも衆寡敵せず元輔等十餘人すでに死せしかば節齋意を決し血路を開きて江戸に奔り再擧を謀らんとせしも敵兵に追躡せられ古河の中田村にて遂に捕へられて暫く佐野の獄に繫がれ更に武州羽生に送らるゝ途中十二月二十四日松戸驛にて斬られる時に年四十（殉難錄稿）

タケノウチ　タイチュウ　竹内太冲　和歌山藩の儒者にして名は盈之、長水と號す美濃の人なり江戸に出でゝ服部南郭の門に入りて學ぶ安永元年和歌山藩に召されて儒員となり仍ほ江戸に住せり天明七年歿す年五十九（南紀風雅集）

タケノウチ　タンケン　竹内淡軒　府内藩の儒者にして名は量字は子平、安眞の子なり天性靜正愨實故に學文章を以て居る學を帆足萬里廣瀬淡窓に受け藩の侍讀たり會ゝ叔父某罪を得て去る淡軒亦之が爲に遊學館を興すや舉げられて教授となる元治元年四月四日歿す年四十九（墓誌）

タケノウチ　テツ　竹内哲　勤王の志士なり下総國葛飾郡小金驛の人性豪宕にして勇氣あり兄鹿之助と俱に深く王室の式微外夷の跋扈を慨し廣く海内の俊傑と交り其志を遂せんとす元治元年水戸の藩士田丸稲之衛門藤田小四郎等常野の間に兵を擧ぐると聞き兄弟共に馳せ加はりて幕軍と戰ひ勇名顯はせり松平頼德鎮定の命を受け水戸に來るに及び哲等亦其部下に屬す頼德敵の詭計に陷り自殺するに至り哲等兄弟は少數の部下を率ゐ潮來より鹿島に向はんとする途中大船津に於て棚倉藩麻生藩の兵に邂逅し衆寡敵し難く終に敵の爲めに亂射せられ水中に溺れて死す時に年二十四（殉難錄稿）

タケノウチ　テツジラウ　竹内哲次郎　下総國葛飾郡小金驛の人竹内棟の弟なり哲次郎幼にして孤となり兄と與に江戸に來りて芳野金陵に從學し又飯本千葉某に受く而して兄弟共に生産ゐ以て事となさず俱に王室の式微を悲みて扼腕相語て曰く聖主屢ゝ詔を幕府に下し以て外國の互市を絶つと雖も奸吏一日の安きを偷み而して諸侯亦敢て力を致さず士氣沮喪し邦國將に疲弊せんとす是の時に方りて苟も義を天下に唱ふるもの有らば吾必ず讐尾に附して國家の爲に盡力し身命の如きは敢て顧惜する所に非ざるなりと是より志士を求め眞田範之助、莊司弊吉、蛇口安太郎等を得て與に往來謀議す後哲次郎、範之助、安太郎等と宍戸侯に從ひて水戸に赴き侯自刄するに及び更に鹿島に至り新莊の兵と船戸に赴き戰ひ軍敗れて哲次郎之に死す（或は曰く侯已に自刄して殘兵の鹿島に赴く者六百人將に横濱に航せんとして船なく乃ち上總に入り小見川を襲ひて之を抜き船戸に濟りて延方に抵り川俣茂七郎等八十人戰に殿たり會ゝ二本松棚倉の兵士來り擊ち哲次郎等之に死すと）（愛國叢談）

タケノウチ　トウモン　竹内東門　府内藩の儒醫にして名は安明字は文會幼にして學に志す人となり卓華不羈學を好て日夕研究し側ら後藤良山の醫風を慕て之を學び出でゝ三河村に居る寛政中藩侯に召され藩の子弟を教授す門に入る者甚だ多し更に醫務總管となり藩内の醫事を監察す文化十二年四月十五日歿す年六十五（日本教育史資料）

タケノウチ　トウモン　竹内東門（二世）　初世東門の長子、名は某字は安眞家業を繼ぎ一藩（府

内藩）中に統帥たり人となり恭遜にして儒を以て自ら處らず毎に弟子に謂つて曰く道は斯心にありて文詞にあらず吾踏君と切磋せんのみと、其の人を誘掖するに專ら實學を以てす嘉永六年十月二十三日歿す年六十五（墓誌）

タケノウチ　ハルタカ　竹内治孝　陸軍騎兵大尉なり大阪市の出身なり明治二十九年六月士官候補生を命ぜられ騎兵第四聯隊に入營し士官學校卒業後戸山學校騎兵實施學校を經果進して騎兵中尉に至る卅七八年日露戰役に於て第十師團騎兵第十聯隊附として從軍中卅七年七月十日清國石門嶺に於て戰死す年二十八戰功に依り大尉に進み勳六等功五級に叙せらる

タケノウチ　ヒサモリ　竹内久盛　中務大丞と稱す竹内流捕術の祖なり津山の人逮捕の術に精し天文中の人、子常陸助久勝、孫加賀助久吉相繼ぐ其の統を承く（武術流祖錄）

タケノウチ　ヒデマサ　武内秀正　陸軍歩兵中尉なり高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ歩兵第二十二聯隊附として從軍中卅七年九月七日旅順要塞東鶏冠山麓に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タケノウチ　ヒデヨ　竹内英男　陸軍騎兵少尉なり埼玉縣出身にして陸軍教導團に志願して登第し明治二十年九月砲兵科を卒業し二等軍曹に任ぜられ二十二年士官候補生として騎兵第一大隊に編入せられ二十五年七月士官學校を卒へて騎兵少尉に任ず二十六年第五師團附となる二十七年日清戰爭起るや騎兵第五大隊附となりて期に先つて渡韓し龍山に屯す大島旅團長英男を擢拔し騎兵八名を督して斥候たらしむ七月二十三日英男行く〳〵敵情を偵察して中和に進し先發の町口中尉に會し共に協力して任務に從事す八月十日俄かに敵兵百餘の襲撃に遇ひ町口中尉以下數騎徒歩して本道を退却し勢甚だ窮む英男乃ち挺身留つて奮戰し僅に衆を率して脱するを得ざりしも既にして三騎を失ひ又岐路に迷ふ敵兵機に乘じて急追し殆んど脱す可からず英男乃餘騎を呼んで曰く吾れ能く殿戰此敵に抗せん汝等先づ走れと軍曹川崎伊勢雄以下三騎與畑を横斷して退く英男乃ち止つて朱染亭の十字街に戰ひしに愛馬先づ頭部を貫射せられ主を地に墜す清兵即ち鎗を策して少尉を刺す時に年二十八偶ゝ川崎軍曹以下三騎も亦敵の一隊に圍まれて苦戰し譯に身を脱して遁れたり後旅團の此地を過ぐるや英男の屍傍に地圖の寸烈せる斷片あるを見て衆皆な其注意の周到なりしを感ぜりと云ふ大島旅團長偶ゝ此の地を過り道情の念禁ずる能はず乃ち山を拓きて新に墓地を營み墓表を立て招魂の典を行へり

タケノウチ　ヒャクタラウ　竹内百太郎　勤王の志士なり諱は延秀字を子實といひ百太郎と稱し樗堂また春雨と號す常陸國新治郡安食村の人なり延秀幼にして穎敏氣宇恢宏なり文學武藝を好み其才儕輩に超ゆ萬延元年藩主齊昭薨じて藩政頗る亂る延秀慨然として起ち同志に說きて先公の遺志を繼がんとし三十餘人を集め江戸藩邸に赴き算攫の事に周旋す其後故あり藩を去り春雨と共に鹿兒島藩邸に投じ延秀亦た生産を事とせず常に王室の式微を悲み掘腕相語て曰く聖主屢ゝ勅を幕府に下し以て外國の互市を斷絶せしむ而して幕府の奸吏倫安未だ決せず諸侯亦た爲に力を致さず士氣沮喪し邦國將に珍率せんとす是の時に當り苟も義を天下に唱ふるものあらば吾亦た驥尾に附して兄弟の如きは敢て顧惜する所に非ざるなりと是より志士を求め眞田範之助、莊司弊吉、蛇口安太郎等と相結納す後ち元治元年卷水戸の士武田正生等兵を率ゐて小金に次す棟之に與し同盟の士と太平筑波に往來し藤田信、田丸直諒等と事を議す既にして捕縛に就き歳餘にして獄を出で尚ほ家に禁錮せらる時に親族相集り諭して曰く人各ゝ分あり汝宜しく今後心を改めて母氏を安んじ以て前罪を償ふべしと棟謂ふ我二兄あり以て母氏を養ふに足れり抑も先きに密旨を奉じ志士の姓名を錄して上るや我之に加はり賤名既に宸覽を汚せり即ち不孝の罪は免るゝ能はざるなりと後ち鹿兒島の士人將さになす所あらんとするを聞き乃ち村上四郎、伊藤立馬と往て芝薩邸に投ず而して藩の儒者にして名は直彦字は子良通稱壽平初世東門の仲子なり少壯熊本の大城壺梁に學ぶ藩に仕へて功あり勘定奉行に至り遂に學館の祭酒となる豐州人となり忠硬會ゝ藩の買人廣瀨久事により感觸を発するを惡み建言する所ありて忌まれ仕籍を削らる後安政六年藩侯之を歸らしむ慶應元年二月十一日歿す年七十一（墓誌）

タケノウチ　ミチザウ　竹内三千三　海軍機關少監なり舊越後高田藩士なり明治三十年海軍機關學校を卒へ三十七年日露戰役起るに及び大關機士を以て軍艦吉野分隊長として從軍し五月三日の第三回旅順閉塞事業に當り閉塞船遠江丸機關長として乘組み偉功を奏し五月十五日旅順攻撃の任務より歸航中山東角の北方海面に於て濃霧に遇ひ軍艦春日の衝突に會し本艦の沉沒と共に難に殉す年三十一戰功に依り機關少監に昇任し勳五等功五級に叙せらる

タケノウチ　ムナギ　竹内棟　下総葛飾郡小金驛の人にして字は隆卿、紋五郎と稱す後ち康之助と改む幼にして父を失ひ弟哲次郎と與に江戸に來りて學ぶ芳野金陵に受け又た劔を千葉某に學ぶ而して兄弟亦た生産を事とせず常に王室の式微を悲み掘腕相語て曰く聖主屢ゝ勅を幕府に下し以て外國の互市を斷絶せしむ而して幕府の奸吏倫安未だ決せず諸侯亦た爲に力を致さず士氣沮喪し邦國將に珍率せんとす是の時に當り苟も義を天下に唱ふるものあらば吾亦た驥尾に附して兄弟の如きは敢て顧惜する所に非ざるなりと是より志士を求め眞田範之助、莊司弊吉、蛇口安太郎等と相結納す後ち元治元年卷水戸の士武田正生等兵を率ゐて小金に次す棟之に與し同盟の士と太平筑波に往來し藤田信、田丸直諒等と事を議す既にして捕縛に就き歳餘にして獄を出で尚ほ家に禁錮せらる時に親族相集り諭して曰く人各ゝ分あり汝宜しく今後心を改めて母氏を安んじ以て前罪を償ふべしと棟謂ふ我二兄あり以て母氏を養ふに足れり抑も先きに密旨を奉じ志士の姓名を錄して上るや我之に加はり賤名既に宸覽を汚せり即ち不孝の罪は免るゝ能はざるなりと後ち鹿兒島の士人將さになす所あらんとするを聞き乃ち村上四郎、伊藤立馬と往て芝薩邸に投ず而して藩の儒者にして名は直彦字は子良通稱壽平初世東門の仲子なり少壯熊本の大城壺梁に學ぶ藩に仕へて功あり勘定奉行に至り遂に學館の祭酒となる豐州人となり忠硬會ゝ藩の買人廣瀨久事により感觸を発するを惡み建言する所ありて忌まれ仕籍を削らる後安政六年藩侯之を歸らしむ慶應元年二月十一日歿す年七十一（墓誌）

タケノウチ　ミチザウ　竹内三千三　海軍機關少監なり舊越後高田藩士なり明治三十年海軍機關學校を卒へ三十七年日露戰役起るに及び大關機士を以て軍艦吉野分隊長として從軍し五月三日の第三回旅順閉塞事業に當り閉塞船遠江丸機關長として乘組み偉功を奏し五月十五日旅順攻撃の任務より歸航中山東角の北方海面に於て濃霧に遇ひ軍艦春日の衝突に會し本艦の沉沒と共に難に殉す年三十一戰功に依り機關少監に昇任し勳五等功五級に叙せらる

節度に違ふを以て死して賞を蒙らざるを憾み上疏して官に請び允可を得て後ち墓碑を嶽下に建て并せて同死の者を祭ると云ふ(愛國叢談)

タケノウチ モリマサ 竹内盛雅 陸軍騎兵大尉なり長門國の人藩政の頃江戸に在りて騎兵隊はらず元文四年覇府使を外舎に幽し宗勝を高須邸に迎立す時に正武に命じて其の事を奉行せしむ日ならずして事定まる宗勝既に立て七月中尉に進む九月賊徒平定して本隊に復し東京鎮臺騎兵第一大隊第一中隊第四小隊附となる十六年六月勳六等に叙せられ年金七十圓を賜はる十七年埼玉縣下暴徒鎮壓の爲め出張し翌年八月勳五等に叙せらる十九年三月大阪鎮臺調馬士官となり後大尉となる二十七年七月韓國に變あるや第五師團騎兵第五大隊附となりて出征し九月二十四日兵站部員三名を引率し東學黨偵察の任を帶び て臺封附近に進むに當り兇徒數百急に群を爲して襲擊するに遇ふ盛雅獨り縱横奮戰遂に自刎して死す年四十九

タケノウチ ヤスヘイ 竹内彌須平 大阪の人彩色根付師を以て世に現はると云ふ(裝餝奇賞)

タケノコシ マサタケ 竹腰正武 父は石川章長尾藩の元老たり夙とに賢を以て著はる敎ふるに義方あり諸子咸な令器、正武最も儁秀にして父の風あり信濃守竹腰正長養ひて己の子となす寶永中正長致仕す正武竹腰氏を冒し承けて其の後を襲ひ祿五千石を食む未だ其の命服を賜はらざるに其本宗竹腰正映卒して後なし正武遂に更て其の後を承く七年始めて幕府に謁し物を賜はる其の年從五位下山城守に拜せられ爵今尾の封邑三萬石を襲ふ爾後幕府四世を歷藩侯五世を改む正武斯に從事する凡そ六十年其間數〻艱險に遇へども之に處して爽然たり大故あるに非ざれば未だ嘗て一日も朝せざることなし冬の祁寒夏の暑雨終日端座して其の位を解かず暴君姦吏〻難も深く其の勁節に服す享元の間侯驕奢度なく漫遊是れ好む正武諸老と屢〻諫めて聽かず士民解體幾んど危亡諸老多く引き去る正武深く以て己の憂となす一日奮然として曰く君無道にして槍すべからず國顚覆して持つ能はずとて徒らに官を去り害を遠くれば即ち將た焉んぞ命脚を用ひん我が計策は決したりと遂に他事に託して江戸に居ること四年遂に霸府に謁するを得將軍吉宗數〻正武を召し左右を辟けて其事を諮議す正武陳說誠忠吉宗深く嘉納す語秘して傳外舎に幽し宗勝を高須邸に迎立す時に正武に命じて其の事を奉行せしむ日ならずして事定まる宗勝既に立て自ら用ひず正武に委任して疑ふ所あることなし正武其の奇遇に感じ力を竭して國に報ふ每ち讒裝靜默敢へて自ら言はず其の裏を取り啓して之れを行ふ凡そ畫議する所は夜必らず再び思ふて亦た自ら改めて武野と稱す乃ち歌あり曰く「種まきて同じ武田の末なれど荒れてぞ今は野となりにける」と京都に出て珠光の門人宗陳宗悟に就て茶道を究め終世京極黃門の歌なる「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」を以て心となし之を數寄屋の邊壁に帖付し以て閑寂を樂み又た普通國師に就て禪を參じ和歌を好みて右大臣藤原公賴に從學すること十四年なり公賴爲に奏請し從五位下に叙し因幡守に任ぜらる後ち仕を辭して堺浦に屏居し茶を嗜みて業となし遂に數寄の名を得たり茶家の宗匠と稱せらる後ち其衛を千宗易に傳し復た龍峯に登りて機を僧古嶽に投じ一閒居士と名付し自ら大黑庵と號す(或は云ふ其の京都に居るや四條蒲比須堂と隣なるを以て大黑庵と號すと)弘治元年閏十月二十九日卒す(書高麗覽に永祿元年十月晦日を以て歿す年五十三と爲す)子宗瓦繼ぎ方寸齋と號す孫安齋初朝蔵主と號し澤庵に仕ふ(野史)

タケノコシタ クサマル 竹下草丸 甲斐の俳人なり長十郎と稱し苫屋と號す文化中の人(諸家人名錄)

タケノシタ トウジュン 竹下東順 醫師なり兼れて俳諧を能くす(一に竹内に作る)江州堅田の人醫を業とす本多某侯に仕へ後辭して由良正春の門に入り俳諧を學び弥子と號す元祿六年八月二十八日江戸に歿す年七十二(俳林小傳)

タケノ ソウヴワ 武野宗瓦 泉州堺の茶人なり紹鷗の男にして方寸齋と號し紅綿の服を着又紅帛紗を用ふ茶法を父に學びて能くせり慶長十九年早世加賜し老職に超遷す政信三萬石を食む子政晴後を承く(近世人錄錄)

タケノ ゴショ 竹御所 源頼家の女なり政子に養はれ將軍頼經の室となる嘆じあり文暦元年七月二十七日產に因て母子共に死す

タケノ ゼウアウ 武野紹鷗 和泉堺浦の人なり姓は源氏本の名を伸村と曰ひ初字新四郎其の先は武田信光に出づ祖父伸清應仁の亂に死し父信久(或は信清に作る)幼にして恬淡を失ひ奥の依るべきもなし乃ち出て〻四方に周流し遂に堺浦に居住すと云ふ紹鷗其の先武田氏の甲斐に武名を振ひしを以て亦た自ら改めて武野と稱す乃ち歌あり曰く「種まきて同じ武田の末なれど荒れてぞ今は野となりにける」と京都に出て珠光の門人宗陳宗悟に就て茶道を究め終世京極黃門の歌なる「見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」を以て心となし之を數寄屋の邊壁に帖付し以て閑寂を樂み又た普通國師に就て禪を參じ和歌を好みて右大臣藤原公賴に從學すること十四年なり公賴爲に奏請し從五位下に叙し因幡守に任ぜらる後ち仕を辭して堺浦に屏居し茶を嗜みて業となし遂に數寄の名を得たり茶家の宗匠と稱せらる後ち其衛を千宗易に傳し復た龍峯に登りて機を僧古嶽に投じ一閒居士と名付し自ら大黑庵と號す(或は云ふ其の京都に居るや四條蒲比須堂と隣なるを以て大黑庵と號すと)弘治元年閏十月二十九日卒す(書高麗覽に永祿元年十月晦日を以て歿す年五十三と爲す)子宗瓦繼ぎ方寸齋と號す孫安齋初朝蔵主と號し澤庵に仕ふ(野史)

す(茶人系傳全集)

タケノツカ トウシ 竹塚東子 戲作者にして武州足立郡竹塚の農夫別號を喬雲齋又は風水坊と號す氏は谷古宇通稱は四郎左衛門俳家越谷吾山の門に入り俳諧を善くし又狂歌も善くせり文化十二年十一月十三日歿す(戲作者畧傳、小說家著述目錄)

タケノブ ゴテン 武信「カノハクジュ」 忠の嫡女にして母は崇源院夫人なり幼名は千姫慶長二年生る同八年七月豐臣秀頼に嫁し元和三年再び本多氏に嫁す寛文六年二月逝く謚して天壽院と云ふ

タケバシ ナホフミ 竹橋尙文 陸軍中將なり金澤の人明治三年四月大阪陸軍兵學寮青年舍に入り四年陸軍少尉に任じ五年敎導團砲兵第一大隊副官となり六年陸軍大尉に任ず十二年陸軍少佐に進み熊本鎭臺砲兵第三大隊長に補せらる二十年砲兵大佐に任ず其間陸軍省砲兵局人員課長砲兵會議々員砲兵に關する各種調査委員となり又砲兵第五聯隊長等に補せらる廿四年東京砲兵工廠提理に補せられ爾來六年其職に在りて鋭意兵器の改良進歩に努め廿八年兵器製造等に關する功績に依り功四級金鵄勳章を授けらる廿九年陸軍少將に進み由良要塞司令官に補せられ卅三年兵器監に轉じ卅五年陸軍中將に任じ豫備役仰付けらる卅九年五月十日病を以て東京に逝く年五十六青山墓地に葬る病危篤に臨み旭日重光章を賜はる

タケハナ ランコク 竹花藍谷 小松藩の參政なり名は正修字は見遠小字は富次、後ち左膳又厚次と改め最後に堅藏と稱す藍谷は其の號又渙齋と號す伊藤小松の人祖嘉、今治に仕へ故ありて去り始て小松侯に仕ふ父は就純莊右衛門と稱す小松藩の臣たり藍谷幼にして穎敏七八歲にして能く書を讀み武を講ず十八歲にして京都に入り小田靜齋の門に遊ぶと前後凡そ五年學成りて歸へる明和三年擢てれて中小姓となり歲に十石二口を給せられ世子伴讀を兼れ爾後稔祿累進して天明四年藩の參政と爲り祿百石を食み俸二十口を加へらる文化二年病みて歿す年六十二藍谷仕に在ること四十年國に勤め家に倹にして敢て自ら暇逸せず社稷に益するを務とせし休暇の日猶ほ能く記錄し國事平生の如し人となり嚴正にして物に接する和惠故を以て衆長れて之を愛す要劇の職餘力少し而して公退すれば必ず几案に就て子弟の爲めに經義を講じ因て以て自ら研究し夙夜及ばざるが如し常に其の學の未だ優ならずしてぼすに足ることなきを憂へ凡そ好書の政を見れば必ず金を捐て〻購求し或は縛寫して以て人に及ぼすに足ることなきを憂へ凡そ好書の政敎に益ある者を見れば必ず金を捐て〻購求し或は縛寫して以て藏む晩年に和歌を好み時に吟詠して以て娛と爲す亦享和二年養正館を建て學政を短畫して以て書生を敎導し寢々として倦まずと云ふ(事實文編儒林部)

タケハ ヒデスケ 竹葉秀資 陸軍歩兵少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第十一師團歩兵第二十二聯隊附として從軍中三十八年三月一日清國盛京省五百牛嶺西北方高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タケバヤシ タカシゲ 武林隆重 赤穗四十七士の一人なり唯七と稱す本姓孟氏、其の先は明の杭州武林の人自ら言ふ、孟子の後と祖を二寬と曰ふ豐太閤の朝鮮を伐つや明主兵を遣して朝鮮を援く二寬軍に從ひ我が軍に破にせられ遂に本邦の人となり姓名を改めて武林次庵と曰ふ醫を業とす父半右衛門渡邊氏を稱して赤穗に仕ふ其の妻某氏隆重を生み城主の息長矩の乳母に召さる長矩封を襲ぐの後隆重事へて中小姓となる長矩死を賜ふや隆重の母其屍を視て悲歎止まず隆重を召び謂て曰く吉良氏は共に天を戴かざるの仇なり我不幸にして女子たり怨を報ずる能はず汝之を忘るなかれと隆重感奮大石良雄等と同盟し姓名を變じて渡邊七郎右衛門と曰ふ仇家吉良氏を襲ふに及びて義央の勇士和久半太夫を殺し遂に進て間光興と俱に義央を殺すはは是夜一少年あり眉尖刀を提げて出て鬪ふ隆重擊て其額を傷る其の人刀を擲て走る隆重急に之を追ふ人旁より出て〻厳捍少年逃れ去る衆眉尖刀を取りて之を驗すに裝飾鮮麗吉良氏の記錄を鐫り乃ち其の義央の槍子たるを知る仇既に報ず毛利氏の邸に在りて詩を賦して曰く三千年一夢中、捨生取義幾人同、家鄉臥病雙親在、膝下泰歡恨不長終と死を賜ふに及びて榊莊左衛門と云ふ者介錯す一擊殊せず隆重僵れて復た起き顧みて曰く君之を徐にせよと莊左衛門曰く諾と聲未だ盡きざるに首墮つ見る者隆重の死に臨みて亂れざるを感じ又莊左衛門が前に失して後に工みなるを稱し一時傳へて義談とす時に年三十三餘は大石良雄の傳に詳らかなり(赤穗四十七士傳)

タケハヤシ ハチラウ 武林八郎 勤王の志士なり河内國錦部郡長野村の人本姓八木名は八兵衛又諱を章廣と云ふ家代々農を業とす八郎夙に武を好み勤王の志を抱き時機の到るを俟つ偶〻文久三年八月中山侍從大和に義兵を擧ぐるや八郎馳せて其軍に從ふ姓名を武林八郎と改む軍敗れて後幕府の追捕を受け京都の獄に下る元治元年赦されて家に歸りしが猶ほ勤王の志熄まず竊に時邂を窺ふ偶〻同年七月長軍大擧して京都に入るに會ひ勇躍して之に投じ同月十九日遂に釐司邸に於て戰死す時に年二十六明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞して特に從五位を贈らる(甲子殉難士傳)

タケハヤ スサノヲノミコト 建速須佐之男尊 月夜見尊とも稱す 伊弉諾尊の鼻を洗ひたまふ時に生る〻神なり父の尊海を司るを命ず尊從は雲に首踞つ見る者隆重の死に臨みて亂れざるを感じ又莊左衛門が前に失して後に工みなるを稱し一時傳へて義談とす時に年三十三餘は大石良雄の傳に詳らかなり

タケハヤシ ハチラウ 武林八郎 勤王の志士なり河内國錦部郡長野村の人本姓八木名は八兵衛又諱を章廣と云ふ家代々農を業とす八郎夙に武を好み勤王の志を抱き時機の到るを俟つ偶〻文久三年八月中山侍從大和に義兵を擧ぐるや八郎馳せて其軍に從ふ姓名を武林八郎と改む軍敗れて後幕府の追捕を受け京都の獄に下る元治元年赦されて家に歸りしが猶ほ勤王の志熄まず竊に時邂を窺ふ偶〻同年七月長軍大擧して京都に入るに會ひ勇躍して之に投じ同月十九日遂に釐司邸に於て戰死す時に年二十六明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞して特に從五位を贈らる(甲子殉難士傳)

タケハヤ スサノヲノミコト 建速須佐之男尊 月夜見尊とも稱す 伊弉諾尊の鼻を洗ひたまふ時に生る〻神なり父の尊海を司るを命ず尊從は雲に首踞つ見る者隆重の死に臨みて亂れざるを感じ又莊左衛門が前に失して後に工みなるを稱し一時傳へて義談とす時に年三十三餘は大石良雄の傳に詳らかなり

て其織殿に投ず織女驚て死す姉尊大に怖れて天の窟に隱る國に君主なし諸神會議して尊を捕へ髯を剃らしめ爪を剪りて之を逐ふ出雲の國に至る手摩乳脚摩乳と云ふ爺嫗あり少女を懷て泣く尊之を問ひて其の情を得たり乃ち酒槽を設け自から少女に擬裝して待つ八俣大蛇(賊の名)來り先づ酒を飲みて眠る尊終に之を殺す賊の有する所の劔之を天叢雲劔と曰ふ其の名品なるを以て姉尊に獻ず後ち草薙と號するもの是なり爺嫗少女の賊の爲めに奪はれざるを喜び之を尊に妻はす即奇稻田姫なり尊宮を出雲の須賀に造り共に居る歌を作て曰く八雲起つ出雲八重垣妻籠に八重垣造る其の八重垣をと三十一字の歌此に始まる(古事記)

タケハラ　ゲンロ　竹原玄路　熊本藩の士なり勘十郎と稱す靈感公擢んで丶用人となす其吏の名あり(續近世叢語)

タケハラ　シュンセンサイ　竹原春泉齋　畫工なり春朝齋の男にして畫法を父に學び二十四輩順拜圖會、東海道名所圖會、胡蝶の夢等を畫く(虛心筆記、扶桑畫人傳)

タケハラ　シュンテウサイ　竹原春朝齋　繪師なり松本氏名は信繁大阪の人春汐齋の門人にして善く畫く一派の畫工なり屢々名所圖會を畫く都名所圖會、大和名所圖會、和泉名所圖會、攝津名所圖會の類なり又欠留といへる鳥羽畫の狂畫あり安永年間の人(虛心筆記、燕石十種)

タケハラ　ヤスタラウ　竹原保太郎　陸軍步兵少尉なり德島縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ步兵第四十三聯隊附として軍務に從事中卅八年七月廿二日同補充大隊にて急病に罹り同八月廿三日善通寺豫備病院に於て病死す

タケヒサ　カクラウ　武久覈郎　陸軍步兵中尉なり北海道出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第九師團步兵第三十六聯隊附として從軍中卅七年十月廿八日旅順要塞二龍山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タケヒサ　ミホサブラウ　武久三保三郎　陸軍步兵大尉なり舊若州小濱藩士武久昌孚の次男なり明治十八年陸軍幼年學校に入り尋いて士官學校を卒へ翌二十四年三月陸軍步兵少尉に任じ步兵第十二聯隊附となる二十七年十月步兵中尉に進む此年日清戰役に從ひ平壤より山東に轉戰し二十八年十一月其功を以て勳六等に叙せられ旭日章を賜はる三十年十一月大尉に進み步兵第四十三聯隊中隊長に補せられ三十二年十一月に至り參謀本部出仕仰付けらる三十三年北清に義和團の變起るや第五師團步兵第十一聯隊第二大隊第六中隊長として出征し六月二十四日太沽に上陸し尋て天津に進む七月九日日英米の三軍聯合して天津留居地の南方に在る敵を驅逐して西城器局を占領するに當り清兵拳匪の猛烈頑强なる抵抗を受け敵彈の爲に右眼下を貫通せられ遂に戰死す年三十一、特旨を以て正五位を贈らる

タケヒナトリノ　ミコト　武夷鳥命　一に武平鳥命、天夷鳥命、武日照命、武三熊命、出雲伊波比神等の別稱あり天菩比命の子、出雲大神の祭主なり(古事記、出雲國造傳統)

タケヒロ　武廣　陸奧一關の士にして江戶に住す冶工の業を水心子に學ぶ文化年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

タケヒロ　武啓　藤原姓內田馬之介と稱す江戶の刀匠にして元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

タケブ　クニヒト　武生國人　王仁の孫河浪古首の後ちにして文宿禰と同祖なり寶字中六位を歷て外從五位下に叙せらる神護元年同族益人等四十四人と姓武生連を賜ふ寶龜元年又た連を改めて姓史を賜ふ國人和歌を善くするを以て知らる詠歌は載せて萬葉集に在り(萬葉集作者履歷)

タケフサ　猛房　陸奧の刀匠にして舞草の子天德比の人なり或は云貞房の子にして長和比の人佐藤忠信の太刀の作者なりと(本朝鍛冶考)

タケベ　カタヒロ　武部賢弘　曆家なり彥次郎と稱し不休と號す將軍吉宗に仕へて用ゐらる二兄賢之賢明と共に關孝和の門人となり研成幾算法、發微算法、算學啓蒙諺等を著す元文四年七月歿す年七十六

タケベ　カメマツ　武部龜松　陸軍步兵少佐なり舊加州金澤藩士武部生の長子にして石川縣中學校に學び更に士官候補生と爲りて第三師團に入營し士官學校卒業後明治廿七八年日清戰役には步兵中尉を以て出て各地に轉戰し遂に田庄台の要塞を陷れ偉功を樹つ凱旋の後功五級に叙せられ大尉に進む三十三年陸軍大學校に入學を命ぜられ卒業後臺灣守備に任ず卅七八年日露戰役起るに及び步兵第六聯隊附中隊長として第二軍に從ひ出征し金州南山得利寺遼陽の諸戰を經て同年十月沙河の大會戰に臨みしが勇戰克く衆敵を斥け敵砲十四門を奪ひ更に之を追擊中敵彈に中りて戰死す年三十六戰功に依り少佐に昇任し勳四等功四級に叙せらる

タケベ　ヂラウ　武部治郎　陸軍步兵大尉なり京都府出身にして明治三十七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ後備步兵第三十九聯隊附として從軍中卅七年十月十日清國盛京省本溪湖附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タケベ　ハヤノスケ　武部隼之助　算術家なり關孝和の門人古今算法を著す三郎右衞門と稱し後後藤覺兵衞と改む關備前守に仕ふ

タケマサ　武雅　肥前の刀匠四世正廣を看よ

タケマタ　キチマツ　竹俣吉松　陸軍步兵大尉なり石川縣金澤市出身にして明治三十七八年日露戰役起るや步兵大尉を以て第二師團步兵第三十聯隊中隊長として出征第一軍に屬し鴨綠江以來四十餘回の戰鬪に參加し每戰勇敢なる行動を以て部下を督勵し偉功を樹てしが終に三十八年三月奉天大會戰を經て追擊に移り鐵嶺附近の激戰に臨み同月十四日蘇牙屯東方高地に於て敵の十字火を蒙り我軍苦境に陷りたるに大尉は毫も屈せず終始斷崖上の火線に起ち東奔西走士氣の鼓舞に努む爲めに部下大に感激し軍氣益々旺盛を極め奮激突戰辛うじて敵を擊退し將に追擊戰に移らんとする一刹那敵彈飛來して大尉の胸部を貫通せり大尉は倒れたるまゝ猶ほ進め〳〵と激勵叱咤し增援隊の來りて該高地占領を認めたる後瞑目せり殊勳に依り勳五等功四級に叙せらる

タケマタ　マサツナ　竹俣當綱　字は君端美作と稱す世々米澤の上大夫なり祖は充綱父は本綱當綱延享三年祖充綱の後を承けて祿邑千石を食む寶曆十一年同計總統に補せられ尋て江戶の尹となる十三年

侯命じて亂臣森利直を誅せしむ明和二年進みて國老に拜せらる四年侯老て南山館に居る是を大老侯となす世子封を襲ひ當綱をして統南館奉行を兼ねしむ天明元年事に坐して職を奪はれ家に幽居す四年子厚綱國老となるに因て其の罪を赦さる尋て歿す年六十五、初め當綱姦邪の國を蠹するを見て身を挺て丶諫を進む已にして之れを攘ふことを得たり因て請ひて政を舊章に復す上下大に悅ぶ時に侯世子たり賢にして學を好む當綱因て多く儒を聘し推して以て師となす世子の德日に益々崇し其の家を嗣ぐに及びて當綱學館を建て師長を立て生員を置かんことを議す是に於て大夫元子より衆子弟に至るまで皆な業に就く士風一新す上下の衣器奢美なるを見て請ひて節儉の制を定め都鄙をして一に質素に從はしむ又稼穡を勸めず賦粟歲に減ずるを見て貪濁を退け清廉を進て稅官となさんことを請ひ西鄙に教導師を置て日々に厚性の道を曉喩せしむ是に於て孝弟にして田を力め賞を受くる者相踵ぐ時に侯を奉じて以て野に行き老羸を省恤し少壯を勉勵す衆士も亦た感奮し相率ゐて耒耟を荷ひ以て耕耘を助くるに至る是に於て荒田成な墾す東都災ありて國邸の延燒せるや當綱簑笠芒鞋僕と與に出で丶木を遠山に伐る壯士數百人踊躍して之に從ひ爭ひて斧鋸を揮ふ當綱躬ら藁蓐に露處する廿餘日伐りて材萬餘株を得以て東都に漕輸す士民又た爭ひ行きて功を助けて營築す日ならずして成る當綱銳意上下を安利せんと欲す而して性忠慨、物に處して果敢なり故に毀譽交々至る居常謂て曰く君に事へて能く其の身を致すとは吾の夙とに學ぶ所なり臣の奉ずる所は大なり豈に自ら謀るに暇あらんや功罪は唯々人の議する所に任ずと幽居すること十年鬱悒の色なく日々に筆硯を手にし時務の要數十卷を稿著し終に臨みて子厚綱に授けて曰く吾生ては即ち國に報ゆるを得ず死して而して餘恨あり汝職に居るを辱うす繼て以て報いば吾れ地下に欣抃せんと卒する比ひに言私事に及ばず(事實文編)

タケマツ　竹松　義民なり伯耆國會見郡熊黨村に生る世々農家たり竹松幼にして學を好み頗る任俠の風あり享保十七年因幡伯耆の二國非常の凶荒にして人民年貢を上納する能はず鳥取藩廳其事情を察せずして督責を嚴にし曾て人民の延期歎願を聽さず竹松藩廳の苛政を惡み枯稻に放火して凶荒の標を知らしむ當局の役人其罪を責め竹松を捕へて米子の町の野外勝田ヶ濱に之を斬る人民其歷政を憤り固く結んで會見汗入兩郡の境界坪上山に集會し以て藩廳に抗せんとす此に於てか藩廳其擧に驚き急に人を遣はして年貢延期を聞屆け漸くにして鎭撫す是竹松一人の死ありて此に及びしと云ふ其義氣傳へて今に至る

タケマツ　シゲタ　竹松繁太　陸軍步兵少佐なり高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て步兵第四十三聯隊附として從軍中卅七年七月五日旅順要塞劍山に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

タケミカヅチノ　カミ　建御雷神　一の名を建布都神又豐布都神と曰ふ(カクツチノカミの傳參看)天尾羽張神の子なり天稚彥葦原中國を征して還らず高御產靈神及び天照大御神議して八意思兼神の薦を納れ天尾羽張神を召して天稚彥に代らしむ天尾羽張神更に命を薦む乃ち天鳥船神と共に中國に到りて之を平ぐ古語拾遺命を以て甕速日命の子となし釋日本紀は甕速日の孫熯速日の子とす今常陸國鹿島に祀る又石上布都大神も命を祀ると云ふ(古事記、釋日本紀)

タケミツ　武光「ゴトウツウジヤウ」

タケミナカタノ　カミ　建御名方神　大國主神の子母は沼名河媛なり天鳥船命及建御雷命大國主を征するに御名方神之に服せず大石を擊げ來て曰く妾に吾國に來る者は誰ぞ力を競はんと而して終に敵せず走て信濃の洲羽に至り降を乞ふ誓て曰く我此地に隱れて出でじと今諏訪明神の上社に祀る神是なり大國主亦た國土を獻じて中國平ぐ(古事記、延喜式神名帳)

タケミヤ　ツネザウ　竹宮常藏　陸軍步兵少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ後備步兵第二十二聯隊附として從軍中卅七年十月十二日清國盛京省三塊石山附近に於て戰死す

タケミヤ　ムサシノカミ　武宮武藏守　大友宗麟の家臣なり長け八尺餘勇力衆に超ゆ常に三人持の錏を擐し腰に五尺の長刀を帶ぶ家老田原親賢宗麟の先鋒となりて毛利家の門司城を攻む城將三尾成定邀へ擊て之を敗る退蹝頗る急なり時に武藏守單騎返して敵と戰ひ之を走らし獨り殿して退く軍卒に全きを得たり(本朝武功正傳)

タケムネ　武宗「ヱンアミ」

タケムラ　クワイサイ　竹村悔齋　名は賁字は伯實海藏と稱す悔齋は其の號江戶の人某侯に仕ふ幼にして業を塾師に受け後ち林櫻宇の門に入る詩を善くし畫を工みにす幼にして機智敏慧人に越ゆ性剛にして肯て儕輩に屈せず常に塾師の家に往來し群兒と戲むる會々柹熟す悔齋乃ち樹に就て之を啗ふ低枝の實皆な齒痕あり塾師悔齋の爲す所たるを知り謂へらく彼幼にして異質あり然れども猶ほ此くの如きは殊に笑ふ可しと明日其の園に戲むるゝを見て陽り怒りて曰く誰か我が柹を竊む者ぞ多きを食りて其の覺らるゝを知らず況んや齒しと昭はざる眞に鈍賊なりと悔齋從容として曰く兒之を爲す其の未だ熟せざるを以て之を捨つ願ふに先生は其の食ふ可らざるを知らず太だ鈍ならずやと長ずるに及びて磊落不羈酒を飲みて坐を罵る人畏れて之を避く藩宰某權を專にし政を亂る悔齋扼腕して曰く是れ除かざる可らずと乃ち上書して其の曲事數十條を彈劾す言行はれず乃ち辭し去りて詩文自から娛しみ復た世事を以て念と爲さず一日醉ひて歸る藩宰に路に遇ふ例、禮を行はざるを得ず悔齋顧みずして旋る宰之を見呼て曰く路に遑する者は誰ぞ悔齋怒て忍ぶ可らず大聲國賊と喝し刀を拔き之を刺して斃し再び刺して氣絕す從僕辟易して敢て近づく者なし乃ち去りて友人を麴坊に訪ひて曰く僕今日大快事ありと具さに其顚末を告げ且つ曰く大事に臨み猥狽して笑を貽すは僕の耻る所なり子爲めに之を圖れと友人曰く事既に此に至る復た何をか言はん但だ三策あり官に告げて罪を待つ上なり家に自刄す中なり逃匿して苟も免る下なり上策は常に爲す中策甚た快下策は則ち鄙なり唯々子の擇ぶ所のままと悔齋曰く吾が意も亦た然り上策善しと雖も死を惜むの嫌ひあり下策は行ふ可らず吾れ且つ中策に從はんと乃ち痛飲大醉し筆を揮ひて闌竹數紙を作り大に笑ひて去り家に歸りて自殺す著はす所に悔齋詩集一卷あり(譚海、近世先哲叢談)

タケムラ　シゲヨ　竹村茂雄　國學者なり伊豆國熊坂村の人本居宣長の門に入り尤も歌文に長ずその名聲遠近に聞え受業の弟子殆ど二百人著書數部あり世に行はる弘化元年十二月歿す年七十六（豆州志稿）

タケムラ　ショウケン　武邑松軒　大阪の書家なり和樣を善くす通稱清道、其の妻三木女桂宗信の門に入り書を善くす松軒文化十四年十月十三日歿す年五十三（浪花名家墓所集）

タケムラ　リャウメイ　竹村良明　畫家なり白井廣士に學びて能くせり平安の人其歿年詳ならず（畫乘要畧）

タケムラ　ロアン　竹村鷺庵（或は呂庵に作る）遠州流の茶人なり林道渓に學びて茶道を能くし江戸淺艸に住す時に其名あり（茶人系傳全集）

タケモト　アヤセダイフ　竹本綾瀬太夫　義太夫曲の名手なり通稱を中村彦兵衛と云ふ、天保四年大阪曾根崎に生る幼より義太夫曲を好み夙に同地の素人連に加はり小圧と名乗り優に一方の眞打株なりしが進んで藝人の群に入り初め相生太夫と稱し鶴澤芳次郎、鶴澤友次郎、竹本長門太夫等に就て修業し大阪文樂座に出勤し慶應二年初めて上京し外神田薩摩座に出席し緩越狀の後藤生醉を謂りて滿都の好評を博し其後明治の初年綾瀬太夫と改名し同十年一月一たび歸阪し幾もなく再び上京して久松町の結城座に座附太夫として出勤し後同座の廢滅以來素淨瑠璃を以て播磨、岡、織の諸太夫と倶に一座を組織し其後廿七年門人綾之助を補佐して神田和泉亭に出席したり東京に於ける男女義太夫合併出席の嚆矢なり、三十三年春綾瀬と改む、翌年九月二日肺炎加答兒に罹りて濱町自宅に歿す年六十九淺草吉野町源照寺に葬る

タケモト　ギダイフ（竹本筑後少掾を見よ）

タケモト　ギダイフ（竹本播磨少掾を見よ）

タケモト　ゴラウベエ　竹本義太夫（二代）

タケモト　「タケモトチクゴノジョウ」　竹本五郎兵衛

タケモト　セキテイ　竹本石亭　名は正與幕府の德川末葉の館に仕へ御侍たり幼より書を好て文晁の門人相澤石湖に就て學び後に支那南北の畫法に依り又狩野土佐の風を折衷し獨學數十年終に一派をなし舊幕殿中の步障を畫き東海東山五畿北陸南海諸道の名所舊跡を探り明治十一年中、宮内省の命を受けて澤氏位が藏く所の七帖長門落の圖を摸して若干の賞賜あり、ひとり畫に巧みなるのみならず漢學は昌平黌にて修め和學は井上頼圀に和歌は林麓臣に學べり詩文章の外滑稽文狂歌等に巧なりと云ふ文政五年正月九日に生れ通稱又八郎對松堂と號す篤實溫厚にして談話面白く傍ら圍棋を好み又本草學に委し明治二十一年一月一日病んで歿す（讀賣新聞）

タケモト　チクゴノセウジョウ　竹本筑後少掾　又義太夫と云ふ姓は藤原、名は博敎號津四成郡四天王寺村の農にして五郎兵衛と稱す性淨瑠璃曲を嗜み中年にして井上播磨が門人清水理兵衛に就て學ぶ（一説に曰く井上播磨が門に入り學ぶ後ち又た宇治嘉太夫に從ひて樂を受くと）其の技淋く進みて清水理太夫と稱し京都四條河原に於て演戲を興行す理太夫所以らく播磨流は地節長くして音を裏とし節を裏とす宇治嘉太夫流は地節短くして音を表とし節を細かに兩流未だ全く其宜を得ず我れ其の長を縮め短を延ばし裏表相適和して其の中を取らば豈に何ぞ其の宜しきを得ざらんや是より日夜勵勉して遂に一流を案出し四條の戲場に謠ふ世擧りて之を賞贊す（延寶中京都へのぼり宇治嘉太夫の操座を勤む此時嘉太夫より音節の秘を傳受すと云ふ）是に於て竹本義太夫と改め真享二年始めて道頓堀に操芝居を興行す（此時大四近松門左衛門と云ふ者あり狂言作者なり以て其名都鄙に鳴る筑後常に其の作を謠ひ名益々世上に著はる寶永元年老を以て座元を引き二年竹田出雲掾歿て座元となる正德四年九月十日病みて歿す時に年六十四天王寺念佛堂前に葬る真享より正德に至る三十餘年間傀儡に和して百六十餘番あり今に至りて人其の譜章を稱す義太夫節是なり（聲曲類纂）

タケモト　トウエン　竹本東猿　女義太夫なり大阪市四區新町に生る十九歲の時眞打となり門第六十餘名を有して大阪義太夫界の頭領たり明治三十二年中東京に來る上流社會に蟲眉多く品行方正後進の摸範と仰がる三十七年八月十二日乳癌を以て逝く年三十八

タケモト　トヨジ　武本豐次　陸軍步兵少尉なり鳥取縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第十師團步兵第十聯隊附として從軍中三十八年三月五日清國盛京省柳匠屯に於て戰死す

タケモト　ニシキダイフ　竹本錦太夫　始め豐竹越前掾の門に入りて豐竹和佐太夫と稱し後ち錦屋武兵衛と改め又た更めて竹本錦太夫と稱す（聲曲類纂）

タケモト　ハリマダイフ　竹本播磨太夫（四代目）本名大和田傳四郎と稱す俳優市川團六の子なり九歲の頃市川蟲太郎と名乘りて子役を勤めしが素と義太夫を嗜む幼より遂に鶴澤清六を師とし三味線を修業して江戸に歸り十八歲にて其風と名乘り更に花澤伊左衛門の弟子となり紋左衛門と改名して義太夫の三味線を彈きたり其後師の名を承けて伊左衛門と稱す尋いて再び紋左衛門と稱し藝名を揚げ遂に四代目播磨太夫の名を繼げり三十六年八月二十四日腦溢血症にて死去す年六十四深川淨心寺へ葬る

タケモト　ハリマノセウジョウ　竹本播磨少掾（初代）筑後掾の門下に出づ初め中紅屋長四郎と稱す少にして淨瑠璃を嗜み常に竹本流に熱心し粗々其の蘊奥を究む然れども其の未だ操座に出ざるを憾み一日師に造りて其の庇陰を仰ぐ筑後以爲らく未だ其の技を有せずと乃ち謂ひて曰く未だしと播磨之を遺憾とし去りて京都に行き兄弟子若太夫（後ち豐竹越前掾となる）に就て芝居を興行し尋で大阪に還りて曾根崎新地に興行し藝稱を若竹政太夫と更む遂に筑後戲場に至り其謠ふを聞きて大に感歎して曰く我技を傳へん者彼なる哉きて誰ぞやと是に於て懇きに其の見る能はざりしを悔い愈に召還して戲場に出勤せしめ姓を與へて竹本と改めしむ正德四年終に臨み遺言して其の名跡を纏がしむ享保十九年遺言に據りて二代目義太夫と改め二十年受領を拜して上總掾と爲る元文二年又た更め

て播磨少掾喜敎と曰ふ後人稱して淨瑠璃中興の祖と爲す其の謠ふ所の戲曲九十三番あり延享元年七月廿五日病みて歿す年五十四天王寺領國恩寺に葬り別に碑を天王寺の西門側に建つ其の側に腹帶を埋め名づけて曲帶塚と曰ふ伏見中書島建長寺に屏塚あり蓋し播磨用ふる所の拍子扇なり（聲曲類纂）

タケモト　ハリマノセウジョウ　播磨少掾（二代目）其傳記を詳らかにせず曾て淨瑠璃秘曲一册を著はす今尙ほ世に存す（聲曲類纂）

タケモト　マサタイフ　竹本政太夫　初め十兵衛と稱す家世〻魚買たり少にして戲曲を喜び長ずるに及びて竹本播磨掾の門に入り後遂に其の養子と爲る寛保三年始めて大友眞鳥二段目を操に擬して唱謠し大に世の喝采を博す四口政太夫は即ち是の人なり二世は寶暦明和中の人、三世は利兵衛と稱して江戸に來り文化八年七月歿す年五十九（聲曲類纂）

タケモト　マンスケ　竹本万助　愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て二等運轉士として陸軍借上船金城丸に乘組み三十八年八月二十二日周防灘航行中外國船バロング號と衝突の際溺死す

タケモト　ロタイフ　竹本呂太夫　大阪の淨瑠璃語なり本名は上西吉兵衛幼名を波吉と云ふ幼少より淨瑠璃を好み十八歲の時鶴澤重造に入門して三味線を習ひ三十二歲の時淨瑠璃の稽古を始め俳名を呂篤と改む明治五年道頓堀竹田の芝居にて呂太夫と稱し名聲漸く揚り攝津大掾及び津太夫の二人に並で大阪文樂座の重鎭と呼ばれたり氣管病に罹り四十年三月三十一日歿す年六十五

タケモト　ワカサノジョウ　竹本若狹掾　淨瑠璃芝居を興行して世に名あり慶長中口宣を受けて若狹掾となると云ふ（役者五雜組、聲曲類纂）

タケヤス　武保　伯耆の刀匠にして大同年間の人或は云天平寶字比の人と又云安守の子にして横濱三郎太夫と稱す貞觀比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タケヤス　雄安　陸奥の刀匠にして安房の子なり應和年間の人或は云正暦比の人或は行重の子にして長久比の人或は小安と同人或は八幡公鬼切の作者なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タケヤ　ヒコベエ　竹谷彦兵衛　長谷川流の砲術家なり長谷川一家の門人寛永三年技を以て水府の士なり性溫順簡默にして人と爭はず平生他に嗜好なし獨り嗜みて蟲を餌す凡そ蛞蝓、蚯蚓、蜥蜴、蝦蟇取りて之を生きながら喰ふ蠑螈、蛙鰒は即ち羽と鬚とを去り皮を剝きて之を炙食す蘭に草木多く群蟲爲に生ず又三蟲を食べて復た一隻を見ず而して尤も嗜むは蛇なり骨と皮とを去り截ること三寸にして串炙して之を食る寛保三年始めて大友眞鳥二段目を操に擬して唱謠し大に世の喝采を博す四口政太夫は即ち是の人なり二世は寶暦明和中の人、三世は利兵衛と稱して江戸に來り文化八年七月歿す年五十九（聲曲類纂）

タケヤ　マダサブラウ　武谷又三郎　幕府の士なり性溫順默にして人と爭はず平生他に嗜好なし獨り嗜みて蟲を餌す凡そ蛞蝓、蚯蚓、蜥蜴、蝦蟇取りて之を生きながら喰ふ蠑螈、蛙鰒は即ち羽と鬚とを去り皮を剝きて之を炙食す蘭に草木多く群蟲爲に生ず又三蟲を食べて復た一隻を見ず而して尤も嗜むは蛇なり骨と皮とを去り截ること三寸にして串炙して之を食る寛保三年始めて大友眞鳥二段目を操に擬して唱謠し大に世の喝采を博す四口政太夫は即ち是の人なり二世は寶暦明和中の人、三世は利兵衛と稱して江戸に來り文化八年七月歿す年五十九（聲曲類纂）

タケヤ　ミツアキ　竹屋光昭　有職に綺通なり寶暦年間の人或は云正暦比の人或は八幡公鬼切の作者なり

タケヤ　ロクザウ　武谷祿三　東京府出身にして明治廿七年日露戰役に於て三等機關士を以て陸軍借上船常陸丸に乘組み廿七年六月十五日玄海灘航行中敵艦の襲擊を受け戰死す

タケヤヨシ　武吉　下野の刀匠にして應永比の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タケヤヨシ　武吉　千子武吉と稱す下野得二郎刀匠にして寶永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タケヤヨシ　武吉（姓欠）　堀河帝御宇の筌師なり時の相公武吉を召して筌を吹かしむ其音清麗優美なり相公其師を問ふと雖も答へず乃ち命じて豐原時光の弟子と爲さしむ武吉意相下らず止むとを得ず名譜を具して其家に至る時光正に廊に坐して笛を繕ふ喜び坐に延き其來意を問ふに武吉曰く相公我に命じて君が敎を受けしむ曰く何をか願へんと欲する曰く大食調の入調は未だ得ざる所のみ願くは授けられんことを時光勃然として乃ち其兒の幼にして前に在るを指して武吉に應へて曰く此兒の長ずるを俟て此を傳へ而して後始めて復た他に及ばんのみと武吉曰く竪子の成長何の年を知らずと乃ち名譜を反受して去る時光益々之を秘して傳へず藤原宗俊は時光の弟子なり授くるに諸曲を以てすと雖も未だ秘調を傳へず然れども時光其篤志に感じ已に之を約するも猶亦た吝惜して果さず一夕風雨晦の如し忽ち時光宗俊の許に來り曰く今夕皆に密に傳へんと乃ち二人雨衣を著て大極殿に到る影跡曖昧にして暗雨大に鳴る絕て人の竊に聽くべきの理なし時光なほ暗雨に乘じて耳を傳ふるものあらんことを恐れ燭を發して孤陬を搜過す果して物あり檀に隱る簑笠の動くが如きを見る之を求むれば即ち武吉なり時光驚て曰く余故あり此を慮るのみと遂に罷めて還る曾て一婦女あり笙を携へて武吉が家に來り之を覗がんとす武吉其貨を問ふ對て曰く妾之を知らず貝だ賜ふ所に依らんと是に於て紺二疋を與ふ女悅びて之を受て去る武吉更に之を熟視するに稀代の名管なり因て其價を增加せんと欲し忽ち女を追呼す女以爲らく器を戾さんとすと乃ち力を極めて疾足す然れども遂に人を回らすを得たり女即ち嗚咽して曰く聞說上薦に違約なしと願に之を恨む武吉曰く汝を追呼せしは笙を返さんとには非ず價を增さんが爲めなりと更に紺二疋を與ふ女事の意外なるに驚き感謝して去る此笙後に御物に備はりしと云ふ（音樂利害）

タケヤ　ワウジ　建皇子　天智帝の皇子なり母は宮人遠智娘、皇子生れて啞なり齊明帝其性の柔順なるを以て之を鍾愛せしが八歲にして薨ぜり齊明帝悲傷し群臣に詔して曰て朕百歲の後山陵に合葬せよと乃ち三首を作り時々之を唱ふ是の歲冬紀の溫泉に在りて又皇子を追憶し口づから三首を詠じ泰大藏萬里に詔して曰く斯の歌を傳へて世々忘るなかれと（大日本史）

タケワカ　イエモン　竹若伊右衛門　織工なり初名藤兵衛筑前博多の人にして滿田三右衛門の遠孫彦三郎の弟子となり廣東織雲下織竹下織を善くす後に一種の織物を製出す其の地質は琥珀織に似て甚厚く其の撲樸浮線文にして柳條あり時人之を博多織といふ慶長十七年十月十七日歿す

タケヤキ　アサジ　武井淺二　俠盜忠二の義子なり齫捷豪勇にして善く長槍を用ひ又日々に四十里を走る後捕へられて誅に伏す行狀は戯せて忠二の傳に在り就て見るべし（譚海）

タケヤキ　ケイサイ　武居敬齋　福島藩の學頭にして名は嶸字は正甫、平井藤蔵の子なり外家に養はれて武居氏を冒す初め渡邊方菴に學び後江戸に遊び古賀精里樺島石梁に從學す藩に擢げられて監察となり學頭を兼ぬ安政二年九月四日歿す年七十一詩文稿あり（墓碑銘）

タケヤキ　シウサク　武井周作　物産家なり天保二年魚譜二卷を著はす（日本博物家年表）

タケヤヲカノ　アマ　竹岡尼　初め室の遊女なり容貌甚だ美、源顯基之を寵幸して京都に居らしむ一年にして棄てられて室に歸る又た遊女の行をなさず一日顯基其僕と船に乘じて西州より京都に歸る途に之に會ふ即ち祓髪して髪を陸奥紙に裹み獸を詠じて曰く「蠱きもせぬ憂きみゐるめの悲きにあまとなりても釉ぞ干かぬ」と船中に投げ入る後廬を播州竹岡に結び專ら浮屠の道を脩め遂に性命を盡して死す（本朝列女傳）

タケヲ　セウエウ　武雄逍遙　名は麟字は君瑞實名頼之通稱左門一に南川史氏と號す肥前武雄の人なり清水龍門飯盛鳳山に學び經濟の才あり少年より武雄の邑政を執り大に文學武技を振興す是時邑中財用大に窮乏す逍遙奮うて整正する所多し然れども遂に忌む者ありて禍に罹り歿す年四十三人となり齊肅にして果敢學を好む退食の暇手に卷を捨てず草場佩川等と結び詩歌を善くす所著邦製等あり（日本教育史資料）

タケヲヒロクニ　オシタテノ　スメラミコト　武小廣國押盾天皇「センクワテンワウ」　発候　浮世繪師なり坂本氏繪本難菜ち

ご遊びの著はす實暦年間の人（浮世繪師便覽）

タコ　ギヤウ　多湖岐陽　濃州の人なり名は直字は温卿岐陽と號し涼三郎と稱す元祿九年大井貞廣大串元善と之を薦めて水府に仕ふ二百石を食む岐陽年三十七正德三年二月六日を以て歿す（名簿）

タコ　クワンサイ　多湖貫齋　松本藩の儒者にして名は安元字は公信通稱大藏崇教館助教儒書預たり（日本教育史資料）

タコ　ショウカウ　多湖松江　松本侯の儒醫なり名は宣字は玄室、一に文鳳陳人と號す稻山の長子、儒醫を以て松本侯に仕ふ松江早に家庭に學び壯年に及びて江戸に遊び林祭酒の門に入りて經史を講習す業成り國に歸りて寡君官となる藩國學崇教館を創め師長を立て物藝園修齡の説盛んに海内に行はる松江深く之を惡みて以て儒となす稻山肚にして江戸に遊び林鳳岡の門に入り理學を研究す又柱山彩巖と風騷を商搉し意を同藻に寄せ山玉山と情交最も厚く詩文互に往來す安永三年十一月二十日歿す年六十六、著はす所雜劇字解、夏問隨筆、視聽筆、全和歌集あり（先哲叢談）

タコ　トツサイ　多湖訥齋　松本藩の儒者にして名は復、字は大來、藩の崇教館助教儒書預を勤む（日本教育史資料）

タコ　ハクザン　多湖栢山　松本藩の儒醫なり名は安字は玄春（一に玄岱に作る）稻山は其の號又は直字は温卿岐陽と號し、新五郎と稱す後字あり方技を以て終る者屠大串元善と之を薦めて水府に仕ふ二百石を食む岐陽年三十七正德三年二月六日を以て歿す（名簿）

タコ　クワンサイ　多湖貫齋　松本藩の儒者にして名は安元字は公信通稱大藏崇教館助教儒書預たり（日本教育史資料）

タコ　ショウカウ　多湖松江　松本侯の儒醫なり名は宣字は玄室、一に文鳳陳人と號す稻山の長子、儒醫を以て松本侯に仕ふ松江早に家庭に學び壯年に及びて江戸に遊び林祭酒の門に入りて經史を講習す業成り國に歸りて寡君官となる藩國學崇教館を創め師長を立て物藝園修齡の説盛んに海内に行はる松江深く之を惡みて以て儒となす稻山肚にして江戸に遊び林鳳岡の門に入り理學を研究す又柱山彩巖と風騷を商搉し意を同藻に寄せ山玉山と情交最も厚く詩文互に往來す安永三年十一月二十日歿す年六十六、著はす所雜劇字解、夏問隨筆、視聽筆、全和歌集あり（先哲叢談）

タコ　トツサイ　多湖訥齋　松本藩の儒者にして名は復、字は大來、藩の崇教館助教儒書預を勤む（日本教育史資料）

タコ　ハクザン　多湖栢山　松本藩の儒醫なり名は安字は玄春（一に玄岱に作る）稻山は其の號又は直字は温卿岐陽と號し、新五郎と稱す後字あり方技を以て終る者屠大串元善と之を薦めて水府に仕ふ二百石を食む岐陽年三十七正德三年二月六日を以て歿す（名簿）

タコ　ギヤウ　多湖岐陽　濃州の人なり名

タコ　クワンサイ　多湖貫齋　松本藩の儒

タコ　ショウカウ　多湖松江　松本侯の儒

タコ　トツサイ　多湖訥齋　松本藩の儒者

タコ　ハクザン　多湖栢山　松本藩の儒醫

タコ　モンド　多湖主水　津和野侯に事へて國宰たり元祿中淺野侯幕命を受けて天使を饗し吉良義央の無禮を憤みて之を朝に傷け死を賜ひ國除かる此より前き津和野侯も亦た天使を饗し義央を怒りて之を斬らんと欲す主水義央の貪ぼるを知り之に私貨して侯に接して終に無事を得たり世主水を稱して智となす主水人となり勇邁強毅にして欲する所は必ず成す國人因て夜叉主水と稱す山を闢き野を經して多く物産の利を殖す國困て強富今に至りて之に賴る國事は一人に決す人其の命を奉ずる侯の命を奉ずるが如し嘗て侯の駕に從ひて國に歸らんと欲し急に大更に命じて侯の則館を與さしめて曰く駕の至る比ひに必ず之を成せと而して侯の歸期已に迫まる成る可らず然れども主水の命ずる所たるを以て敢て違はず晝夜力を展べて遂に期の如く成す其の威令の行はるゝ斯くの如し、侯城門の防火使となる一夕火あり侯出づ一大更稍〻期に後る主水怒りて曰く子職を奉じて無狀明日國に歸れと更日く其期に後るゝは某の罪なり然れども公の駕に從ひて城門に赴く職とする所は未だ嘗て失せず歸國の事は謹みて命を聽くと謝せずして出づ明日遂に國に歸る未だ幾ばくならず侯の駕國に之く主水從ふ更出でゝ迎へんと欲す家人諫めて曰く君夜叉に背る今又出でゝ迎へば謀測る可らず某曰く我未だ罪を公に得ず之を如何ぞ奉迎せざらんと主水迎へて笑ひて曰く留來恙なきかと從容として談話す前日の事を記せざる者の如し又た一藩士あり路に主水に遇ふ輿に坐して其の齡を受く士怒りて一日主水の過ぐるを伺ひ肩輿を門外に出す士人惟だ一奴輿擧ぐ可らず乃ち奴なして其前を擔かしめ其の後を門柱に縛して輿中より呼びて之を拜し以て之に報ふ主水大に怒りて曰く子屬覆せ我今ま瞋視して去らんと士人能く射る即ち家に入り勁弓長箭滿を持して主

ら之を謄寫し以て考授を貰く性青黴を好み多く元明以降名人の眞蹟を蓄ふ晩に老を告げて一舍を卜筮し陽開亭と名り優游自ら娛し實暦三年四月十六日歿す年七十四、著はす所に本藩系譜、韓使贈答集、戊午紀行、戚南塘兵戰小解、武經教令小解、多湖氏遺訓、秋乃山道、稻山集、全和歌集あり（先哲叢談、近世叢譜）

タコ　モンド　多湖主水　津和野侯に事へて國宰たり元祿中淺野侯幕命を受けて天使を饗し吉良義央の無禮を憤みて之を朝に傷け死を賜ひ國除かる此より前き津和野侯も亦た天使を饗し義央を怒りて之を斬らんと欲す主水義央の貪ぼるを知り之に私貨して侯に接して終に無事を得たり世主水を稱して智となす主水人となり勇邁強毅にして欲する所は必ず成す國人因て夜叉主水と稱す山を闢き野を經して多く物産の利を殖す國困て強富今に至りて之に賴る國事は一人に決す人其の命を奉ずる侯の命を奉ずるが如し嘗て侯の駕に從ひて國に歸らんと欲し急に大更に命じて侯の則館を與さしめて曰く駕の至る比ひに必ず之を成せと而して侯の歸期已に迫まる成る可らず然れども主水の命ずる所たるを以て敢て違はず晝夜力を展べて遂に期の如く成す其の威令の行はるゝ斯くの如し、侯城門の防火使となる一夕火あり侯出づ一大更稍〻期に後る主水怒りて曰く子職を奉じて無狀明日國に歸れと更日く其期に後るゝは某の罪なり然れども公の駕に從ひて城門に赴く職とする所は未だ嘗て失せず歸國の事は謹みて命を聽くと謝せずして出づ明日遂に國に歸る未だ幾ばくならず侯の駕國に之く主水從ふ更出でゝ迎へんと欲す家人諫めて曰く君夜叉に背る今又出でゝ迎へば謀測る可らず某曰く我未だ罪を公に得ず之を如何ぞ奉迎せざらんと主水迎へて笑ひて曰く留來恙なきかと從容として談話す前日の事を記せざる者の如し又た一藩士あり路に主水に遇ふ輿に坐して其の齡を受く士怒りて一日主水の過ぐるを伺ひ肩輿を門外に出す士人惟だ一奴輿擧ぐ可らず乃ち奴なして其前を擔かしめ其の後を門柱に縛して輿中より呼びて之を拜し以て之に報ふ主水大に怒りて曰く子屬覆せ我今ま瞋視して去らんと士人能く射る即ち家に入り勁弓長箭滿を持して主

水に擬して曰く子に一矢を貽て而して後ち死せんと主水笑ひて曰く子屠覆す我に既に莊視し了ると乃ち去る後ち復た來も此を以て意に介せず人主水の大度に服し又た二子の不風を稱す（事實文編）

ダザイ　シュンダイ　太宰春臺　儒儒なり名は純字は德夫、春臺は其の號、又紫芝園と號す通稱彌左衛門、信州飯田の人、本氏は平手、祖言親加賀侯の大夫横山氏に仕ふ父言辰出て、姻族太宰謙齋の嗣となる因て太宰氏を冒す謙齋は飯田侯の臣なり春臺初め父に從て江戸に來る稍〻長じて出石侯に仕ふ數年疾みて籐骨を乞ふと三次許されず乃ち自ら藩を去る藩乃ち之を錮す是に於て春臺京都に適き五歲の間に流浮すること十年、是の時物徂徠復古の學を江戸に唱ふ安藤東野山縣周南相ひ助けて業を修め從游日に衆し既にして周南四に歸る東野皇々一骨を喪ふが如し東野少き時春臺と程朱の學を中野撝謙に受け常に其敏學に服す因て數〻書を寄て春臺を招く會〻其錮亦解く春臺遂に江戸に來り徂徠を見て大に悅び遂に蒔學を弃てゝ東野等と古學を講習す徂徠亦大に其の篤志を賞す春臺平居子路を以て自ら許す曰く寧ろ鄙を其黨に獲るも惡言耳に入るに忍びずと乃ち直言避くるなし徂徠意遂に平かならず春臺亦稍〻徂徠に禍だざるを以て嘗て謂て曰く徂徠の志進取に在り故に其人を取るや才を以てして德を以てせず二三の門生も亦た其說を習聞して德行を屑しとせず嗤て文學是れ講ずず是を以て徂徠の門に鑒跎の士多し其のオみなすに及びてや文人たるに過ぎずと徂徠殁するに及びて其の門分れて二となる詩文は服部南郭を推し經術は春臺を推す春臺亦た斯文を以て己れが任とし徂徠の學を繼述す而して晩年稍〻從違あり詩文に至りては則ち痛く李王を斥く諸侯大夫より草野の士に至る迄日に益〻進む春臺剛毅狷介、直方以て自ら居り從游の徒謹畏すること大府の如し前後見る所の諸侯甚だ多し未だ嘗て己を枉げて仕進を求めず遊退必ず禮を以てす岩村侯の世子廼て師とす其の初めて至る世子迎迎せず春臺艴然として曰く至賤の處士何ぞ敢て貴人に傲らんや然りと雖ども余の說く所は聖人の道なり苟くも道を奉ずるもの王侯と雖ども禮せざるを得ず而して其の待つ所甚だ薄し是れ余を禮せざるに非ず即ち道を奉ぜざる

なり道を奉ぜざるものは余復た見るを欲せずと是の時に當りて侯老中となり用捨窮遂皆な其の手に出づ而して其の言一も忌憚する所なし是に於て其の臣相議して曰く無禮は躬自ら道ふなり世固より師儒多し更に他人を招かんと世子之を聞て曰く寡人過てり教を師に受る古人に讓らず其の世に生れて一たび蒼生の患を救はざるを慊むと是の時田沼侯政府に在り學を好み士に下る春臺相ひ得て甚だ親し從容侯に語りて曰く方今不諱の朝に遭ふ然れども時制の關する所臣之を陳べんと欲して未だ路あらず苟くも臺下に因りて一二の得失を述ぶる得ば縱ひ忌諱に觸れ嚴刑を犯すも敢て恨みず識らず可なるや否や侯曰く試みて可なりと春臺因て封事を上る世皆其の特立を異とす延享四年五月晦日歿す年六十八、春臺博學洪識にして天文、律曆、算數、字學音韻、書法、浮屠、巫說、醫方、雜駁の說に至る迄該通せざるなし尤も心を經濟の學に留む文を屬するに千言立ち所に成る筆翰流るゝ如し但〻其の心偏窄問〻痛快に傷ひ名教を害するもの往々之あり其の書を讀む精詳縝密一字一句苟くも過さず點書訛あれば必ず改めて止む夫の史漢の如きは句讀圈點及び標書は五色を以て之を施し爛然繡の如し且刊行著述皆な自ら繕寫す又た遠近の書疏手答せざるなし漢孔氏傳古文孝經久しく彼の邦に亡び我國に存ず春臺因りて諸博士の傳ふる所を校訂して獨り我國に於て刊行す清の鮑廷博覽て大に悅び之を知音註を作りて不足齋叢書第一集に收む春臺善く笛を吹く東叡法主音律を好む人なして來り召さしむ春臺辭して曰く余は儒生なり若し儒を以て召さるれば駕を俟たず私嗜末技を以て王門の伶人となるは余欲せずと是より復た笛を吹かず春臺經濟錄を著はす幕府の侍中某之を觀て以て府に獻ぜんと欲し私に書林小林延年をして正本を春臺に求めしむ春臺辭するに稿本文字潦草なるを以てす而して私に小林氏に告て曰く中官に托して以て冒を進するは君子の爲さざる所なり若し令開者より出て是進むさるを得ず管蠡嶋年十三揣てられて大府の儒官に列す一時稱して奇童とす然れ共卒に苗にして秀でず春臺書を贈りて規砭痛切毫も貸さず又或人世事を厭ふ者ありて曰く交雅に害あり之を春臺曰く子過て曰く曾子其身を省みて云く人の爲に謀て忠ならざるか夫れ俗事を厭ふ甚しければ不忠之より大なるなしと著はす所古文孝經、經濟錄の外に論語古訓、同外傳、孔子家語增註、詩書古傳、朱子詩傳青言、易道撥亂、周易反正、產語、易占要略、獨語、春秋三家異同、春秋擬釋例、老子特解、修刪阿彌陀經、和讀要領、聖學問答、六經略說、律呂通考、親族正名、春秋曆倭語、正訛斥非、辨道書、亂辭傳、國字書、經濟錄拾遺、三王外紀、二王外紀、和漢帝王年表、文論、詩論、群書雜抄、新選唐詩六體集、紫芝園文集等あり（近世叢譜、先哲叢談、事實文編、近代名家著述目錄、鑒定便覽、名家墓所一覽）

ダザイ　シュンダイノ　ハハ　太宰春臺母　清水氏、春臺の幼なるを其父柏樹齋頗る讀書を好むめども人各〻其性に從ふべしと云て強て春臺を教訓せず清水氏勉めて源平盛衰記保元平治物語等の書を讀み聞かしめ每夜課するに十枚を以てす春臺眷々教を拳ぐり清水氏裁縫をなしと之を聞き其讀み學ぶや日く汝卷中載する所の大將勇士の如く名を竹帛に垂れんと欲せば宜しく文武兩道に志を專にすべしと後ち春臺碩儒を以て現はる

ダザイ　セイエモン　太宰清右衛門　勤王の志士なり素と陸奥の人諱は天達、常陸國新治郡安食村に住み水戸藩に仕へ士分に列す常に尊攘の說を唱へ其名頗る高くために幕吏に疑はる遂に姓名を變じ竹林虎太郎と稱し林以德等と共に鹿兒島藩邸に入りしが水戸藩に送られ暫く禁錮せられしが幾もなく赦さる元治元年水戸甲子の亂に於て松平頼德の軍に屬し一方の

隊長として那珂湊に戰ふ事敗れて後宍倉村に匿れ居たりしが遂に捕吏の爲めに偵知せられ遂に自刄す時に十月二十日年三十七（殉難錄稿）

タサイ　テイホ　太宰定保　儒者なり字は微卿定保は其名（鑒定便覽）

タサカ　シキヨウ　田阪子恭　儒者也名は長盟號山と號す子恭は其字自ら脩して田とす山縣周南の門人にして萩侯の臣なり湯山詩集を著はす（諸家人物志、鑒定便覽）

タサカ　クハチ　田坂九八　陸軍工兵大尉なり廣島縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し第五師團工兵第五大隊附として從軍中卅七年八月三十日清國遼陽戰鬪の際負傷し同十月八日病院船幸運丸にて後送途中死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タサカ　サダトミ　田坂定富　陸軍歩兵大尉なり新潟縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ第二師團兵站司令部附として從軍中病に罹り卅七年十一月二十七日遼陽兵站病院西八里庄第二分院に於て病死す

タサキ　サウウン　田崎草雲　畫人なり名は芸初め瑞白と號す又白石生と號す又硯田農夫、七里香草堂、蓮岱山人等の數號あり下野足利藩士なり其の父恒藏戶田侯に仕ふ故あり藩を出て江戶に市居す草雲幼より畫を嗜み初め川崎梅翁に從ひ梅溪と號す後谷文晁春木南溟に叩き又沈周徐熙を宗とし山水花鳥善くせざるなし人となり俠氣ありて頗る擊劍を嗜み常に劔客と交はる淺草山谷に住す安政中足利町に退き畫學を教授す維新の際は大に志士に交り勤王の効を勸む後足利蓮岱山に艸堂を建て硯田農舍と云ふ皇居御造營の時御杉戶を畫き又第一回繪畫共進會には武藏野の圖を出品し大に賞せらる以後出品毎に銀銅牌を受くること多し帝室技藝委員となり明治三十一年九月一日歿す年八十四（栗田氏筆記）

タサキ　トヨヒコ　田崎豐彥　陸軍歩兵中佐なり長崎縣東彼杵郡大村の人風に師範學校を卒業し後陸軍教導團に入り尋て士官學校に進む明治二十七八年日清戰役には歩兵中尉なり以て大寺少將の副官として出征し功あり凱旋後功五級に叙せらる其後第六第七等の諸師團に勤務し少佐に進み名古屋陸軍幼年學校長に補せられしが三十七年九月日露戰役の爲めに出征し歩兵第三十三聯隊大隊長として各處に奮戰し偉功あり三十八年三月奉天附近の大會戰に參加せしが同月七日等功四級に叙せらる實性淵邃業行堅實にして學術亦優秀常に僚輩の欽仰する所となれりといふ

タザイ　テイホ　它山「ヨカタイゲン」

タザカ　シキヨウ　它山「ツツミタザン」

タザカ　クハチ　蛇山「ヤマムラダザン」

タサシン　カウザウ　田島幸三　兵庫縣出身なり廣島縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て三等機關士を以て陸軍借上船常陸丸に乘組み卅七年六月十五日玄海灘航行中敵艦の襲擊を受け戰死す

タシマ　クスノシン　田島楠之進　陸軍輜重兵大尉なり高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て輜重兵第五大隊附として從軍中三十八年四月十九日清國盛京省小榆樹堡にて病に罹り同二十八日同所に於て病死す

タジマ　コレタカ　但馬惟孝　海軍大佐なり舊鹿兒島藩士にして明治七年初て海軍兵學寮に入り卒業後十四年十月練習艦筑波に乘組み遠洋航海を爲し歸朝後海軍少尉に任ぜらる砲術長に擧げられて砲術教官となれり二十七八年日清戰役には威海衛砲擊に偉功を奏し凱旋後功五級に叙せらる尋て富士艦回航委員となり少佐に進み同艦の砲術長に補せらる卅七八年日露戰役起るや中佐を以て清遠艦長として出征し大同江攻陸掩護の任に當り後特別任務を帶びて旅順口外に出動中卅七年十一月三十日濱遠沈沒に際し戰死す年四十六戰功に依り大佐に昇任し勳三等功三級に叙せらる

タジマ　タケマ　田島武馬　豐後國玉來村の人なり曾て訴訟代書人となり宮崎に僑寓す慶應後鹿兒島に遊び秋九節に寄る西郷隆盛の東上すると部等從軍す因て之れを乞ふ許さず後知人中村某なる者肥後より至るに會し從て矢部に赴く幾ばくもなく薩軍蜂後に突出し是に於て豐岡太郎と改稱し兵卒となり亦屬して竹田に至る曰く是れ我故郷なり知人尤多し請ふ爲めに兵を募らんと即ち新保甚太郎田政一等に會し具に謀て自ら第一番隊を率ゐ江良原に進み大に戰ふ數日已にして官軍竹田の本營に薄る遂に退て白梓に轉戰し岩戶山の砲臺を守る亦新奇隊に屬して延岡城に據り官軍の爲に圍まれて擒にせらると云ふ（西南勇士傳）

タジマ　マサタカ　田島正孝　陸軍二等軍醫なり愛知縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し後備役より召集せられ近衛後備歩兵第一聯隊附と爲り卅七年六月十五日出征の爲め陸軍運送船常陸丸にて玄海灘航行中敵艦より襲擊を受け戰死す

タシンシ　クシラカヒメ　陀心子「タカセパイセイ」　手白香媛　繼體帝の后なり仁賢帝の女、母は春日大娘皇后、繼體帝元年二月大連大伴金村奏して曰はく臣聞く先王の世を治むる維城の固に非れば以て乾坤を鎮するなく披廊の化に非れば以て陛導を繼ぐなし曩者に白髮天皇闕なく祖父窟屋を遺はし州毎とに三種の白髮部を置き以て名を後世に留む請ふ陛下手白香皇女を納れ皇后となし神祇伯等を遣し皇胤を繼祀し以て民望に答へよと帝其を言を納れ三月皇后となし欽明帝を生む欽明帝位に即き尊びて皇太后と曰ふ崩ずるに及び大和山邊郡倉田に葬る（大日本史）

タジリ　アキタネ　田尻鑑種　本姓は大藏氏秋月原田と同種なり世〻筑後に居り食邑廣く武威強し鑑種の父親種大友氏の政正しからざるを察し叛て龍造寺に屬す島津氏肥後を侵すに及び鑑種欵を薩に通ず因て龍造寺政家之を攻る三年時に大友氏弟親家を遣して筑後を伐つ島津氏來て鑑種を援ク戶次道雪高橋紹運島津氏を拒ぐ是に於て大友氏和を乞ひて去る尋て薩人大友氏を拒ぐ是に於て大友氏和を乞ひて去る尋て薩人亦歸る鍋島信生虛に乘じて急に攻む鑑種支ふる能はず和を乞ひ舊邑を保つ豐臣秀吉の西征に及びて放逐せられ肥前に臣屬す（野史）

タジリ　シゲヂ　田尻繁治　陸軍歩兵少佐なり熊本縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第十三聯隊附として從軍中卅八年二月二十八日清國盛京省馬群丹附近戰鬪の際負傷し同四月十日城廠兵站病院に於て死去す戰功に依り勳四等勳五級に叙せらる

タジリ　シンスケ　田尻新介　勤王の志士なり常陸國那珂郡田谷村の農寡左衛門の長子なり諱は知好、安政の初め郷士に列し後擢でられて郡方勤となり歩士組に列す後勅書奉還の事起るに當り之を憤り好惡を除かんとの說を首唱す櫻田の一舉にも切に與る所ありき文久三年攘夷の勅下るに及び朝旨を奉じ國威を伸張せんことを論ず元治元年甲子の雅に於て那珂湊に戰ひしが明年四月四日遂に武藏國岩槻にて斬らる年四十七（殉難錄稿）

タシロ　キヨアキ　田代清秋　薩の歌人也通稱は太郎太歌を香川景恒に學ぶ明治初年京都に歿す

タシロ　シャウテイ　田代尚亭　秋田佐竹家の藩士なり諱は綱紀字は伯擧通稱新右衛門又但見、尚亭、非佛と號す才學を以て聞ゆ詩書共に堪能にして傍ら茶事を嗜み亦俳諧を能くし「掛庵一馬の號あり文政六年十月卒す年六十九

タシロ　ショウイ　田代松意　俳諧師なり川草子と號し又た淡林軒と云ふ宗因の門人にして大阪の人延寶の頃江戶北鞘町に住す其の句に曰く「雪折やむかしにかへる笠の骨」（俳林小傳）

タシロ　セイヂエモン　田代清治右衛門　相馬燒陶器の創製者なり藩密草野牛右衛門清治右衛門に告て曰く相馬の藩力疲弊し財政給らず子若し京都に謂りて製陶の法を習ひ國產を興すに意なき乎と清治感憤し其の遂行を誓ふ而して其の實を公にする時は沮止せんと行はれ難きを慮り痴情の出奔するもの〻如くし隣保の女と共に國境を出て而して二本松に至て女を棄て〻奔る三年の後業成りて相馬に歸り牛右衛門に謀て窯を開き相馬神社の神井を汲みて土を煉り以て相馬燒を作る質硬く形朴なり牛右衛門に獻して幕府の茶道坊主に賂ひ其の奇品なるを評傳せしむ諸侯爭ひて之を相馬藩に求む牛右答へしめて曰く相馬燒の製額毎年僅かに十個故に藩邸の人亦之を得るに難しと加賀侯に贈るに唯茶碗三個を以て加侯以て人に誇る是より相馬燒の名世に重ぜらる製陶の業世々藩の官業たり維新の後初めて民業となる而も田代の家尤も其の製に精し

タシロ　ノブツナ　田代信綱　父な爲綱と曰ふ伊豆守に任ぜられ工藤茂光の女を娶りて信綱を生む秩滿ちて京都に歸り信綱を以て茂光に屬し之を鞠はしむ田代冠者と號す年甫めて一會を源頼朝配せられ伊豆に在り信綱伴て之に侍す石橋山の敗に道兵急に至る信綱高樹に登りて注射す頼朝間を得て遁れ去る後從て鎌倉に入り深く任遁せらる壽永中源義經に從ひて源義仲を討ち又た從ひて一谷屋島に戰ひて皆な功あり（大日本史）

タシロ　マタザエモン　田代又左衛門　名は重榮筑後國生葉郡吉井村の大庄屋なり同郡の地たる田野礎确にして水利甚不便なり又左衛門深く之れを憂ひ其の子重仍と謀り筑後川の水を引き其田となさんとし官費を乞ひ又私費を投じて水路開鑿に着手し隧道を穿つ其難しき是に於て大に礦夫を募り上げ鑿洞を通す寬文地藏巖に至る長凡七千尺の石中を穿ち匯流を通す寬文十二年閏七月に工を起し延寶元年三月に終る工成りて河水を引き之に注ぐに及び水量猶乏し此に於て更に瀨に堰を築き水を地藏巖に遣り灌漑始めて便なるを得て同郡數十村其の惠を受く（袋野匯流記、日本農功傳）

タセウ　多少　江戶の俳人なり氏は花隈初世存義の門人初め國人と號し後ち新樹庵と改む（俳諧人物便覽）

タソガレノツダヒラサダノブ　蛇足軒「ソガセウハク」

タソクケンセウ　蛇足軒「カノサンセツ」

タソヒチンスケ　田副鎭助　陸軍歩兵少尉なり兵庫縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し後備役より召集せられ第十師團後備歩兵第二十聯隊附として從軍中卅七年十月十二日旅順要塞三塊石山に於て戰死す

タソヤ　たそや　吉原四田屋甚右衛門の妻妓なり京都より來て全盛其名高し或夜深官家に歸らんとして途に人の爲めに殺害せらる依て用慎の爲め町中行燈を出す是をたそや灯燈の始とす（早引人物故事）

タダアツ　シンワウ　忠篤親王　中御門帝の第三子なり母は典侍藤原氏、享保七年十一月生る三宮と稱す八年三月聖護院の附弟となり十七年三月親王となる十八年九月寺に入り剃髮して名を忠篤と改め戒を權僧正晃珍に受け道承入道親王の弟子となる十九年四月改衣す元文五年三月二品に叙し圓城寺長吏となり三山檢校、新熊野檢校を兼ね寶暦二年十二月居を昭高院に徙す明和七年九月再び聖護院に住す八年六月一品に進む天明八年四月三宮に進ず復た昭高院に居り尊て薨ず年六十七紫金光聚寺と號す白川に葬む（野史）

タダイヘ　忠家　山城油小路の刀匠にして忠吉の子なり延文年間の人或は云粟田口の一派にして藤五郎と稱す又云建武比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タダイヘ　忠家　相摸の刀匠にして永仁年間の人或は云ふ藤源次の一派にして山内に住す本國備前なり正應比の人と又云則家の子にして正應永仁比の人或は貞和比の人或は助眞の門人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タダイヘ　忠家　備後三原の刀匠にして山城油小路忠家と同人なりと云ふ或は本國山城にして油小路忠家の子應安比の人とも云ふ（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダイヘ　忠家　應永年間の刀匠にして河森田住と銘す國名詳ならず所作長谷部に類すと云ふ（古今鍛冶銘早見出）

タタイ　イマタラウ　多田今太郎　陸軍歩兵中尉なり香川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ後備歩兵第四十三聯隊附として從軍中卅八年三月九日清國盛京省楊官屯附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タタカ　ただか　忠香　大和奈良興福寺の僧承仕法師と號す建武比の人或は云天福嘉祿年間の人或は千手院派にして寶治比の人或は恒利と同人後美濃に住すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タダカズ　忠一　源姓室山氏上野中津の刀匠にして嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タダカズ　忠香　大和の刀匠千手院の一派にして天福と云ふ或は云ふ恒利と同人なりと又た云ふ大寶比の人にして天國の門人なり或は天平比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タダ　カスケ　多田加助　義民なり信州安曇郡中萱村の里正たり貞享の頃安曇筑摩七萬石の領主水野忠直驕奢に耽り臣僚聚斂を事とし年貢籾一俵米貳斗五升摺を改めて三斗摺となし尋で三斗四升摺に納むべきを命ず時恰も凶歳人民の疾苦言ふべからず加助乃ち同僚小穴善兵衛等十二人と謀り之れを藩主に哀訴す二郡の村民傳聞して皆其の罪を分たんと欲し松本の城門に聚る者凡一萬人實に貞享三年十月十四日なり會々藩主東觀宰臣等爲す所を知らず陽に聽許を約して衆を歸らしめ急騎を飛ばして江戸に報ず廿日の夜に至り加助等首謀十三人及兄弟子姪縛に就く藩主重く閣老に賂ひ彌縫誣罔し十一月廿二日加助を磔し他の十二人及子弟十四人を斬り六人を流す其の妻は皆豫め離婚状を與へたるを以て免るゝを得たり加助磔柱に上るや監吏嘲りて曰く泣く子と地頭に勝たんとする者は應に皆此の如くなるべしと加助決眦して曰く生きて此の志を遂ぐるを得ず死して厲鬼となつて之を報ひんのみと此日柵外聚り見る者千餘人加助大聲告げて曰く吾村民の塗炭に苦むを見るに忍びず自ら此酷刑に就く自今公租は五分摺二斗五升なりと連呼して絶命せり聞く者歔欷飲泣す享保十年に至り藩主忠恒喪心し大城に於て同列毛利師就を傷け罪を以て城邑を沒せらる世以て加助の祟となす（安曇之偉人）

タダカネ　忠金　薩摩の刀匠奥國平を見よ

タダ　キウザウ　多田久藏　美濃國の人なり甲の武田家に仕ふ勝頼長篠敗北の時久藏獨り留りて敵中に馳せ縱横奮戰多く人を傷く敵圍みて之を擒にす初め敵以て雜兵とす而して緋純子の下帶を纒ふを見るに及び怪みて之を信長に白す信長急に姓名を問はしめ以て其の多田久藏なるを知る信長掌を拍て曰く彼は勇士なり願くば其命を宥めんと召して之を面前に出して曰く汝我に仕ふるの意あらんか重祿以て之を用ひんと久藏佯りて喜ひ從ふ乃長谷川藤五郎に命じて其の縛を解かしむ藤五郎曳て退く頃刻にして幕中騷擾す怨ち藤五郎久藏の首を提て來り白して曰く此の豎子縛の解くるや直に人の鎗を奪ひ瞬息の間に五六人を殪して亡ぐ故を以て衆之を追殺すと一座皆な其の勇に感ずと云ふ（本朝武功正傳）

タダキ　トサ　但木土佐　仙臺藩の家老なり名は成行、直行の子姓は橘、世々伊達氏に仕へ宿老格たり代々奉行職（即家老）に任ずるの家なり天保十一年家を嗣ぎ黒川郡吉岡の地千五百石を領し文久三年藩主慶邦に從うて上洛したる時の功を以て千八百石に加增せらる慶應三年藩命を以て京都に上る時に王政復古の詔あり十二月十二日土佐二條城に幕府の閣老板倉伊賀守に謁す幕臣等云ふ朝議攝政關白將軍職を廢し一二の奸臣幼帝を挾みて私曲を行ふ前將軍慶喜を奉じて大阪城に入り後圖を成すべしと土佐云く政權奉還は前將軍の建言に由る今公等の擧恐らくは異心あるの疑を受けんと說くに大義名分を以てす閣老等答ふる能はず然れども議終に用ひられず此の日會津其の他の兵慶喜を奉じて大阪に退く翌明治元年正月遂に伏見の戰あり同月朝廷より會津追討の命を受け二月歸國す四月征討の官軍東下す仙臺藩亦た之に促され兵を刈田郡白石城に營す仙藩米澤藩と使を遣はして會津侯容保に降伏を勸む會津侯降を請ひ城外に謹愼し反逆首謀の臣の首級を獻じ削封を以て伏見に於ける暴擧の罪を謝するの議に決したるに官軍總督一たび許さんとして故ありて事破れ五月白河に開戰す奧羽諸藩大に官軍の背德を憤り連衡して官軍に抗す土佐仙臺に還りて財政の事に任ず七月故ありて屛居を命ぜられ十月十六日伊州藩に引渡され十二月藝州兵を以て江戸に押送せられ同僚坂英力（名は時秀）と共に傳馬町の獄に幽せらる糺問中二年病故を以て淀藩稻葉侯に責付せられ五月病癒え復たび糺問せらる同十九日仙藩に引渡され反逆首謀の罪に坐して同日坂英力と麻布の藩邸に斬らる年五十二、英力年三十七、土佐の辭世に云く「雲水の行衞はいづこ武藏野を唯吹く風に任せたらなん」土佐職を罷て屛居せる時榎本釜次郎仙臺に來り共に函館に脫走せんことを勸む土佐拒んで曰く予去らば藩侯を奈何せん予罪を負ふて國に殉せんのみと從はざりしと云ふ（大槻博士談）

タダキヨ　忠清　藤原姓新兵衞と稱す肥前の刀匠にして初代忠吉の門人なり寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）
二世忠清は初名治國下總大椽と稱し肥前に住す寛文五年受領す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダキヨ　忠清　奥次郎兵衞と稱す薩摩の刀匠にして正保年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダクニ　忠國　藤原姓山本氏通稱八郎太夫後信濃大椽と稱す本京都の刀匠にして初代國路の門人なり初名國勝中年刻國と改め寛永の初め因幡鳥取に移り又忠國に改む寛永十一年受領し寛文六年歿す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）
二世忠國は通稱八郎太夫後信濃大椽と稱す享保五年十一月歿す年七十（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）
三世忠國は通稱忠次郎後八郎太夫享保年間の人亦信濃大椽と稱す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）
四世忠國は通稱八郎太夫亦信濃大椽と稱す安永年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダクニ　忠國　刀匠忠吉十世の孫にして大阪に住す天保嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タダクニ　忠國　備前の刀匠にして承元年間の人或は云長船有國の子にして元曆比の人或は眞貞の子にして康元比の人と又云福岡一文字の流にして長船に往す元應比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タダクニ　忠國　刈谷氏土佐の刀匠にして壽秀の弟弘化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タダクニ　忠國　藤原姓橋本氏播磨大椽と稱す肥前小城の刀匠にして相右衞門廣貞の二子なり晩年播磨入道休鐵と號す寛文年間の人所作の刀銘に菊花を鐫すと云ふ（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）
二世忠國は貞享年間の人播磨守と稱す所作の刀銘に蟹及牡丹を刻すと云ふ（古今鍛冶銘早見出）
三世忠國は播磨大椽と稱す享保年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダクニ　忠國　薩摩の刀匠にして寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダクモ　忠雲　大和十市の刀匠にして文保年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダ　ゴンダイフ　唯權太夫　初め吉大夫と稱し鳥取藩の學館教授たり後學館奉行、同目附役等の職を歷て物頭に轉ず安政六年七月歿す（日本教育史

資料）

タダサダ　忠貞　出雲仁田郡の刀匠にして文明年間の人或は云眞貞の子にして應仁比の人又は大永比の人と又云ふ安部氏にして備前の派なり正長比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タダサダ　忠貞　出雲の刀匠にして永正天文間の人或は云明應以後の人出雲に住し亦石見に住す是を二世と爲すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダサダ　忠貞　出雲安部郡の刀匠にして文祿年間の人或は云天正比まで造る是を三世と爲すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダサダ　忠貞　美作の刀匠にして實經の子永仁年間の人或は云建武比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダサダ　忠貞　備前長船の刀匠にして寶治年間の人或は云忠近の二子にして仁治寛元年間の人又云延應比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タダサダ　忠定　出雲の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダシゲ　忠重　藤原姓井上氏攝津生玉の刀匠にして初代忠行の門人なり亦武藏江戸に住す寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダシゲ　忠重　備前長船の刀匠にして貞和年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダシゲ　忠重　後秀興と改む奧氏主右衞門と稱す後和泉守に拜す薩摩谷山波平の刀匠にして奧忠清の三子なり藩侯の命に因り大阪に赴き津田助廣の門に入り業を修む享保五年六十餘歲なり槍鋒を造るの上手なりと云ふ（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダ　シンアイ　多田親愛　もと芝神明神宮に禰宜たり明治三年徵されて職を神祇官に奉じ同年大學出仕仰付けられ七年博物館屬に轉し二十七年まで在職せり深く尊圓親王の書風を慕ひ後世尊寺大納言行成卿の筆意を追ひ我邦書道の衰頽を慨き一意上代樣を振興せんとて頗る力むる所あり事天聽に達し二十年皇后宮の思召により詩歌色紙二十四枚を謹寫して錄上し三十七年九月には堀江物語二卷を淨寫して上りたり三十八年四月十八日病死す年六十六

タダスヱ　忠末　出雲仁田郡の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダ　セイサブラウ　多田誠三郎　陸軍步兵少尉なり巖手縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團步兵第十六聯隊附として從軍中卅八年一月廿八日清國盛京省渾河附近戰鬪の際負傷同二月廿二日遼陽兵站病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タダ　ソウキク　多田宗掬（初代）　茶人なり恕齋の弟子にして茶道を能くす播州姬路の人大阪に住す物々齋又た餘月庵と號す風流一世に冠たり寶曆八年五月九日歿す年六十九（茶人系傳全集）

タダ　ソウキク　多田宗掬（二代）　茶人なり父宗掬に學びて茶道を能くし家を嗣て十友齋と號す寬政七年十一月二十三日歿す（茶人系傳全集）

タダチカ　忠近　備前の刀匠にして元曆前の人或は云ふ長船に住すと又云建曆承久年間の人にして近忠の弟なり或は治承又は弘安比の人或は安忠と同人なり或は寛喜比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タダチカ　忠親　越前下坂の刀匠にして寛文年間の人後筑後柳川に移り住す（古今鍛冶銘早見出）

タダツグ　忠次　山城粟田口の刀匠にして油小路に住す正應年間の人或は云久國の門人にして天福比の人或は文應比の人錦小路に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タダツグ　忠次　藤原姓下坂氏大和大掾と稱し後に守に改む山城の刀匠にして本國は越前寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダツグ　忠次　大和の刀匠但次を看よ

タダツグ　忠次　信濃の刀匠にして姓は藤原延寶年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダツグ　忠次　出雲の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダツグ　忠次　備前の刀匠にして正安年間の人或は云大井川酒太夫と稱すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダツグ　忠次　備前長船の刀匠にして近眞の子嘉元德治年間の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タダツグ　忠次　備中青江の刀匠にして建武年間の人或は云信次の子にして仁治比の人又は元久比の人但次と同人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タダツグ　忠次　備中の刀匠にして貞治年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダツグ　忠次　備後三原の刀匠にして永祿年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダツグ　忠次　肥前佐賀の刀匠にして姓は源氏延寶年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダツグ　但次　亦忠次に作る又守繼日光等の名あり大和千手院派の刀匠にして文永年間の人本國は陸奧舞草なり或は和州行正の子と云ひ亦俊正の子と云ふ（古今鍛冶銘早見出）

タダツグ　但次　或は亘次に作る備中青江の刀匠にして建久年間の人或は云正治承久年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タダツグ　亘次　備中の刀匠但次と同人或は云恒次と同人なりと（本朝鍛冶考）

タダツグ　忠繼　攝津大阪の刀匠貞右衞門忠行を看よ

タダツグ　忠繼　石見長濱の刀匠にして永祿年間の人或は云ふ亦出雲に住すと（古今鍛冶銘早見出）

タダツナ　忠綱　一に忠繩に作る藤原姓淺井氏近江大掾に拜し後守と更む山城粟田口の刀匠本國は播磨姬路にして粟田口國綱の末洛陽に移り後攝津大阪に轉住す寛永年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）
二世忠綱は淺井万太夫と稱し粟田口一竿子又は合勝軒と號す近江守を襲稱す彫鏤の術に巧妙なり寛文寶永年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）
三世忠綱は初名宗綱政之進と稱し近江守を襲稱す享保年間の人なり亦武藏江戸に住す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダツナ　忠繩　肥前の刀匠にして忠吉の門人元和年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダツネ　忠經　攝津の刀匠にして忠綱の門人

なり天和年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダツネ　忠恒　備前の刀匠にして元暦比の人(古今鍛冶銘早見出)

タダ　トウケイ　多田東溪　館林家の儒者なり名は儀字は維則、東溪は其の號、儀八郎と稱す平安の人、父商を業とす東溪初め舅桑原空洞に養はれて其の嗣子となり桑原篤軒と稱す空洞書を以て時に名あり故に東溪亦心を臨池に專にし之を以て徒に授く能書の名洛中に聞ゆ又三宅尚齋の門に入りて山崎氏の說を修む講習年あり遂に濃洛關閩諸家の書に通ず後他姓を冒すの非を知り空洞に請ひて本姓に復す後江戸に來り講說して徒に授く秋田侯延て門客となす禮待頗る渥し侯是れより先き大に學舍を起して造士館と曰ふ學政一に山崎氏に從ふ侯東溪の尚齋の門より出るを以て經を館に講じ子弟を訓導せしむ後室鳩巢と交りを之に事して其の藩陶を受け持論立說初の如く固執偏隘ならず侯因て悅ぶす東溪又其の舊見に拘泥するを厭ひ遂に病に託して其の禮待を辭す元文中稻葉迂齋の薦を以て館林侯に仕へて侍讀となり又鄰宰を攝行す明和元年八月廿六日歿す年六十三、著はす所世本正誤、心遠堂雜錄、東溪筆記、詩文集あり(先哲叢談)

タダトシ　忠利　攝津の刀匠にして寛文年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダ　トシカネ　多田敏包　通稱千次郎著裝堂と號す裝築翁是なり夙に恬惰を失ひ一商人の爲めに鞠養せらるゝ好みて書を讀む然れども賞にして購ふこと能はず則ち日々に菜蔬を鬻ぎて業となし得る所の錢は一日の飯に供し其餘は盡く購書の資となす衣敝れ屋壞るゝも以て意となさず家人も亦た之に安んず既にして名稱ゝ著はれ貿を委れて弟子となる者あり朝夕來りて書を受く皆な先生々々と曰ふ而して翁襤褸百結菜を擔て出でて售り毫も耻る色なし年六十餘人其尋常の賣菜翁に非ざるを知り爭ひて之を買ふ以て稱ゝ自ら給す門人爲めに衣食を繼ぎ賤業を事とする勿らんことを請ふ翁頭を掉て肯んぜずして曰く予此に藉りて以て活く猶ほ貸を乞ひて富をなすに勝ざらんや一日菜を擔ひて麻布の里を過ぎ遂に其門人小濱某の隷役十餘人を從へて來るを見其禮を行はんとを憚り避けて路傍の人家に入る主人以て盜となし杖を執りて之を逐ふ翁跟蹌として走り出でゝ小濱笠を脫して謝を行ふこと甚だ恭やし且つ曰く先生何故に此に在ると時に翁從左右に跪列す翁曰く汝等已むを得ず擔を捨てゝ笞撻す主人慰問前の如し主人驚くと甚だしく問ひて其著張先生たるを知り杖を舍てゝ謝して曰く某眼あり高士を識らず死罪々々と翁笑ひて之を扶け起す主人遂に門に拜し弟子となると云ふ(譚海)

タダナガ　忠長　一に忠永に作る肥前佐賀の刀匠にして吉長の門人なり兼て彫琢に巧なりと云ふ寛文元祿年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タダナガ　シンウウ　尹良親王　後醍醐帝の孫征夷大將軍宗良親王の子なり延元元年井伊道政、宗良を遠江に迎へて東國を經略し數ゝ敵兵と戰ふ宗良親王道政の女を納れて尹良を井伊谷の館に生む尹良父に從ひ吉野行宮に詣りて元服を加へ(正二位中納言)に叙す右近衛大將を兼ね征夷大將軍に補す文中二年八月淳朝臣の姓を賜ひ尋で親王となり兵部卿に任ず是時に方りて東國の將士猶ほ意を南朝に屬する者新田、小田、世良田、桃井氏等及び遠江、參河の國人皆ひ議し桃井良職を遣はし尹良を迎へて上野に徙らしむ大橋定元國本高家、山川重祐、恒川信炬之を四家と稱し堀田正重、平野樂忠、服部宗純、鈴木重政、眞野遠資、光賀爲長、河村秀清を七名家と稱し與に心を戮せて尹良を翼戴す伊介高顯、天野遠幹及遠江の土豪某等尹良を擁して田貫二郎宇津野家に徙る(宇津野家は富士谷政、宗良を遠江に迎へて東國を經略し數ゝ敵兵と戰ふ宗良親王道政の女を納れて尹良を井伊谷の館に生む尹良父に從ひ吉野行宮に詣りて元服を加へ(正二位中納言)に叙す右近衛大將を兼ね征夷大將軍に補す文中二年八月淳朝臣の姓を賜ひ尋で親王となり兵部卿に任ず是時に方りて東國の將士猶ほ意を南朝に屬する者新田、小田、世良田、桃井氏等及び遠江、參河の國人皆ひ議し桃井良職を遣はし尹良を迎へて上野に徙らしむ大橋定元國本高家、山川重祐、恒川信炬之を四家と稱し堀田正重、平野樂忠、服部宗純、鈴木重政、眞野遠資、光賀爲長、河村秀清を七名家と稱し與に心を戮せて尹良を翼戴す伊介高顯、天野遠幹及遠江の土豪某等尹良を擁して田貫二郎宇津野家に徙る(宇津野家は富士谷宇津峰に在り)富士十二郷の豪族鈴木正茂、同正武、井伊正房、下方三郎、宇津道次等皆て新田義助の恩顧を受くるを以て乃ち相與に心を傾けて之が用をなす文中五年卷尹良宇津野を出で復た上野に赴く鎌倉の兵之を聞て來襲す十二郷の士族之を擁衛す敵圍み攻むること數日會ゝ官軍來援し鈴木の兵と與に俱に丸山を出でゝ敵陣を衝く鎌倉部將上杉重方及島碕大炊助等步騎五千を以て進み攻む眞職兵僅に二百五十騎大炊と接戰し長野安房等を獲たり此の役や重方部下死するもの二百餘人退きて上一色に陣す眞職旅を整て回る正茂曰く是れ戎事のみ今君に羈旅に從ふ苦戰可からずと眞職曰く諸但彼我が名を聞くや久し其の固るに及び奮戰せざるも亦遺憾なり是れ長驅せし所以なり遂に商議し正武、道次、二郎、高橋太郎の四人及兵二百騎をして尹良を奉ぜしめ丸山より甲斐を過ぎ武田信長の第に留まること數日八月遂に上野に到り寺尾城に入る新田世良田の一族皆な屬す、應永十年四月新田義隆底倉に死す鎌倉兵、上野を侵伐す尹良世良田有親等と鋭を下野落合城に避く十九年四月上杉憲定兵を發して寺尾城を攻む世良田政親樂き戰ひて傷を被むり長樂寺に入り自殺す其の族親氏奮擊脫歸す三十一年四月新田義一、世良田政義等以下尹良を奉じて高崎、安中、碓氷を過ぐ敵出で沮撓を擊て之を卻く信濃に到り千野軒窩の島崎城に入る小笠原政秀、木曾信士千久祐嬌及び高政、遙谷等の一族隷屬す八月尹良、島崎を發し參河に如きて吉良氏に遷らんとす途上歌を詠じて云ふ「さすらへの身にしありなは住みも果てむ泊りさだめぬ憂き旅の空」と自から著して之れを千野伊豆守に予ふ是時四郷正庸、桃井義繁、新田の一族と共に落合城に要りて兵を募る適ゝ久世土原某等參州より來り途に尹良を迎ふ是月十三夜杖突嶺を過ぐ土賊前路を邏ぎ山に據りて放射す政秀、祐嬌拒ぎ擊て之れを卻く十五日飯田より參河に入り小山麓の大河原を經て雨屋に至り道路泥濘烈風起り暴雨彌ゝ下る晝暗々として咫尺を辨ぜず土寇復た來り擊つ飯田太郎、駒場小二郎、伊奈四郎左衛門等、土寇二百餘人を率ゐ自ら其の名を呼びて侵擊す宗徹、義秋、景庸及び一宮助長、酒井直忠、熊谷直近、大庭景郷、本多忠弘等拒ぎ戰ふ賊素と地理を諳んじ懸崖を走り嶮壁を涉りて縱射雨注す士卒皆傷る宗徹、政滿等免かる可からざるを知り興を奉じて民舍に入りて自裁を勸む尹良從者を召して功勞を犒ひ謝す政滿遺旨を受けて上野に脫走す尹良自殺す宗徹等二十五人、舍を焚きて殉死す今ま其の地を呼びて宮原と稱し殉死者を祭る墳を築きて千人塚と云ふ尹良に追謚して大鵬寺宮と曰ふ碑は信州豊合聖光寺に在り(野史)

タダナホ　忠直　筑後の刀匠にして大永年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダナリ　ワウ　忠成王　順德天皇の第二子なり承久の變父帝流され王は幼冲なるを以て京師に止る廣御所宮又岩倉宮と稱す弘安二年十月廿一日薨ず年五十九

タダノ　サブン　忠野左文　佐竹義宣の家臣なり軍に向ふ毎に先登後拒陷陣斬捕の功一として之なきことなし白布を以て其弄幟を製し濃鑿に一足不去の忠野左文と記す生涯敵に背後を見せざる大剛の士なり或時味方敗軍し各隊崩潰して皆散ず左文一人踏留まるとも纏ゝ兵なきを以て徐ろに戰場を退き溪流に掬飲せしに背幟の文字水に映せるを見て慮らく我逃れたるにあらずと雖も功なくして退かば一足不去の誓に背かん後日人之を詰らば辭の逃るゝなけんと再び敵中に入る日已に暗くして敵誰何する者なし既にして左文一甲首を取り歸りて僚友に其故を語る人皆な其の膽勇に服す常に形儀を土木にして容儀作法を修めず頭髮は蓬或は捻紙を以て結するのみ性酷はだ酒を嗜み日夜醉て泥の如く酒肆負債の手形を兩刀に結び下げ貴顯の前をも憚らずして進揖す諸家歷仕の間祿二百石に至ると云ふ(豪雄言行錄)

タダノブ　忠信　備前長船の刀匠にして天文年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダ　マツヂ　多田松治　陸軍步兵少尉なり香川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備步兵第十二聯隊附として從軍中卅八年三月二日清國盛京省前三道崗子に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タダヒサ　忠久　備前長船の刀匠にして周光の門人文明年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タダヒデ　忠秀　大和の刀匠興福寺承仕法師と稱す建武比の人或は云元暦比の法師なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タダヒラ　忠平　藤原姓伊賀の刀匠にして高平の門人寛文年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダヒロ　忠廣　藤原姓遠江守と稱す駿河島田の刀匠にして寛文貞享年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タダヒロ　忠廣　五郎入道と稱す相模の刀匠にして天文年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダヒロ　忠廣　藤原姓初の名は忠吉武藏大掾を拜し忠廣に改む忠吉の項に詳なり(古今鍛冶銘早見出)

二世忠廣は橋本平作郎と稱し後新左衛門尉と改む寛永十八年七月近江大掾に拜す元祿六年五月歿す八十一歳なり肥前に住す(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タダヒロ　忠廣　肥前の刀匠姓は藤原四世新三郎忠吉の子なり延享年間の人父殺して後名を忠吉に改むと云ふ(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タダヒロ　忠廣　肥前の刀匠にして五世忠吉の子安永中父の後を承け名を忠吉と改む(古今鍛冶銘早見出)

タダヒロ　忠廣　薩摩の人姓は藤原新刀の鍛工なり平助と稱す享和年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タダヒロ　忠廣　肥前の刀匠にして六世忠吉の子なり(古今鍛冶銘早見出)

タダヒロ　忠弘　攝津桂木の刀匠にして文明年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダフサ　忠房　和泉の刀匠にして天正年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダフサ　忠英　肥前の刀匠吉房の者江戸の刀匠にして元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

タダマサ　忠正　伊賀の刀匠にして寛文年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダマサ　忠正　下總佐倉の刀匠近造忠義の子にして日向延岡藩の治工と爲る安政元治年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

タダマサ　督正　貝氏備後三原の刀匠にして天文年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダマサ　忠政　藤原姓織部丞と稱す肥前佐賀の刀匠にして初代忠吉の門人なり寛永年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タダ　マンヂュウ　多田滿仲「ミナモトミツナカ」　二世忠政は一に忠正に作る源右衛門と稱す元祿年間の人佐賀に住す(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

タダミツ　忠光　備前長船の刀匠にして倫光の子永和明德年間の人なり同名數人あり或は云ふ倫光の門人にして貞治比の人と(本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

タダマル　只丸　高田宗の僧なり鴨水子とも號す俳諧を善くす椎本才麿の門人なり京師本願寺中福昌庵の住職なり法名覺印弄松閣と號す後溟花谷町欣淨寺に住す家書三あじろ、小松原、足摺、明石集、わのが光り等あり正德二年十一月二日歿す年七十有餘謚して樹心房と曰ふ辭世「陸を思ふ鴨やなにはの水はなれ」(俳家大系圖、俳諧家譜)

タダミチ　忠道　藤原姓祐後守と稱す越前の刀匠にして赤攝津大阪に住す延寶年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダミチ　シンワウ　忠道親王　貞敬親王の子なり文化三年八月生る五年八月一乘院に居り六年八月光格帝の養子となる十三年十二月親王となり十四年五月朝髮し名を尊誠と改む文政五年八月薨ず年十七、平等院と號す(野史)

タダミツ　忠光　大和の刀匠千手院の一派にして天福年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

タダミツ　忠光　攝津の刀匠にして粟田口と稱す一竿子の門人なり元祿年間の人(古今鍛冶銘早見出)

タダミツ　忠光　備前長船の刀匠にして正應年間の人(古今鍛冶銘早見出)

二世忠光は元亨年間の人備前に住す(古今鍛冶銘早見出)

三世忠光は應永年間の人備前長船に住す(古今鍛冶銘早見出)

四世忠光は五郎左衛門尉と稱す永和應永年間の人備前長船に住す(古今鍛冶銘早見出)

五世忠光は永享年間の人備前長船に住す(古今鍛冶銘早見出)

六世忠光は修理亮と稱す文明年間の人備前長船に住す(古今鍛冶銘早見出)

七世忠光は九郎左衛門尉と稱す延德明應年間の人備前長船に住す(古今鍛冶銘早見出)

八世忠光は永祿天正年間の人備前長船に住す(古今鍛冶銘早見出)

タダミツ　忠光　備前長船の刀匠にして倫光の子永和明德年間の人なり同名數人あり或は云ふ倫光の門人にして貞治比の人と(本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

タダミツ　忠光　備前長船の刀匠にして有光の子永享比の人なり或は同名二世なりと（本朝鍛冶考）

タダミツ　忠光　備前長船の刀匠にして家守の子永享文正年間の人なり（古今鍛冶備考）

タダミツ　忠光　備前長船に住す文明永正年間の人なり或は云明比の人と（古今鍛冶備考、古今鍛冶銘早見出）

タダミツ　忠光　備前長船の刀匠にして房則の子文明比の人或は則光の子なりと云（本朝鍛冶考）

タダミツ　忠光　大膳大夫と稱す肥後同田貫派の刀匠にして慶長年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダムネ　忠宗　藤原姓肥前の刀匠にして下總忠清の子なり寛文五年十二月相模大掾に拜し寶永四年六月相模守に改む（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）二世忠宗は通稱久五郎後儀右衛門と改む肥前に住す享保年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダムネ　忠宗　河盛田の刀匠にして天文年間の人國名詳ならず（古今鍛冶銘早見出）

タダムネ　忠宗　源姓矢野氏將監と稱す新刀の鍛工にして年代住地詳ならず（古今鍛冶銘早見出）

タダムラ　忠村　相模の刀匠にして文治年間の人或は云山内藤源次の派にして正應比の人或は家宗の弟にして正和比の人或は忠家の子にして元應比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タダモリ　忠守　伯耆倉吉の人にして新刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

タダモリ　忠守　平姓豐後高田の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダモリ　忠盛　平姓豐後高田の人古刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

タダヤス　忠安　古刀の鍛工にして備前長船に住す或は云ふ延德年間の人と或は行眞の子にして貞治比の人或は行安と同人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タダヤス　忠安　薩摩の刀匠にして谷山波平の派なり寶德年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダヤス　忠安　薩摩の刀匠にして忠清の子なり承應年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダヤウ　多田彌太郎　勤王家なり初名は經之後に立德といひ通稱彌太郎海庵と號す但馬出石の藩士なり天保年中藩學に入り櫻井石門の弟子となり又大阪に往き藤澤東曦に就きて學び其塾長となる弘化元年東游して江戸昌平校に入り三年留學の後歸り藩學察長に補ぜらる後思ふ所あり肥前長崎に赴き高島秋帆其他に就き西洋の砲術を研究して歸藩す藩老堀笑山の專横を論じために禁錮せらる此間國體一覽海防雜議報國十議地球小識闘蝦夷策等四十餘部の書を著はす後罪を免されて藩に重用せられしが文久三年姉小路公知三條四季知等彌太郎の名を聞て之を召すと頻りなり依りて都に上りたるに八月廟議一變し季知等七卿の西寛するに會ひ立德も亦蹤ひて長州に往く後十月澤宣嘉但州生野に於て義旗を擧ぐるに際し立德之に投ぜしが敗軍の後京都に寛入し更に伯耆因幡の志士を募らんとて竊かに之に赴く途にて幕吏に物色せられ其捕ふる所となり京都檻送の途中遂に刺殺せらる元治元年二月二十八日なり時に年三十九明治二十四年十二月特旨を以て從四位を贈らる（殉難稿錄）

タダユキ　忠行　一名忠繼源姓にして或は橘姓を用ふ攝津守と稱す山城粟田口の刀匠にして忠行の門人なり寧保年間の人或は云初代忠行の弟にして貞右衛門と稱す元文比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダユキ　忠行　攝津の刀匠にして初代忠綱の門人なり姓は藤原太郎右衛門と稱す寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダユキ　忠行　攝津の刀匠にして忠家の門人なり享保年間の人或は云初代忠行の弟にして貞右衛門と稱す元文比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダユキ　忠行　古刀の鍛工にして備前長船に住す或は云ふ文明年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出）

タダユキ　忠行　備後尾道の刀匠にして其國彌と稱す弘治年間の人一に五阿彌に作る（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダユキ　忠行　仲間伴平と稱す豐後高田の刀匠にして姓は藤原大和大掾と稱し後大和守に改む寛永年間の人亦肥後國本に住す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダユキ　忠行　肥前の刀匠にして姓は藤原延寶年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダユキ　忠行　肥前の刀匠忠吉の末裔にして弘化嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タダユキ　忠行　木場鍛之助と稱す新刀の鍛工にして薩摩の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダ　ユキツナ　多田行綱　左馬權守頼國六世の孫なり伯耆守に任ぜられ藏人と爲る世ち攝津多田莊に居る因て多田藏人と稱す後白河法皇平氏を滅せんことを謀る權大納言成親密旨を行綱に諭し唆はしむるに重利を以てし將帥の任を委ぬ行綱許諾す既にして意中ごろ變ず以爲らく衆寡敵せず勢必ず成り難からん事若し發覺せば禍の至る日なしと乃ち馳せて福原に至り狀を以聞を惡む源頼朝起るに及びて行綱欵附す源義經の京師を去りて南海に逃ぐや路攝津河尻を經て行綱兵を帥て之を邀ふ反りて義經の爲めに擊ち破らる（大日本史）

タダヨシ　忠吉　山城油小路の刀匠にして忠家の父なり建武年間の人或は云建長比の人或は久國の門人にして天福比の人或は吉光の門人にして吉正の子油小路に住す延慶比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タダヨシ　忠吉　加賀の刀匠にして寛永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダヨシ　忠吉　藤原姓加賀の刀匠にして延寶年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダヨシ　忠吉　備前長船の刀匠にして弘治年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダヨシ　忠吉　肥前の刀匠にして大永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タダヨシ　忠吉　藤原姓橘本氏新左衛門尉と稱す肥前の刀匠にして京の堀忠明壽の門人と爲り歸國の後ち佐賀に住す元和元年二月武藏大掾に拜し名を忠廣と改む寛永九年歿す年六十一なり二世も亦忠廣と云ふ（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）三世忠吉は二世忠廣の子新三郎と稱す陸奥大掾に拜し後守に改む肥前に住す万治三年受領し寛文元年轉任し貞享三年正月歿す五十歳なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）四世忠吉は源助と稱し後新三郎に改む近江大掾に拜し肥前に住す元祿十三年受領し延享四年七月歿す八十歳なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）五世忠吉は初忠廣と曰ふ新左衛門と稱す肥前に住し寛延三年近江守に拜し安永四年六月歿す八十歳なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）六世忠吉は初忠廣新左衛門と稱す寛政二年近江守に拜し肥前に住す享和六年六十七歳と銘せる品あり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダヨシ　忠吉　源姓肥前の刀匠にして初代忠吉の門人なり師の忠吉名を忠廣に改むるの後其著名を授けらる寛永の初年歿す或は土佐守に拜ずと云ふ（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）二世忠吉は肥前に住し將監と稱す後長崎に移り住し寛永の末早世すと云（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダヨシ　忠義　大和興福寺の法師にして鍛冶を能くす建武比の人或は云元暦比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダヨシ　忠義　藤原姓五條四三二と稱す駿河の刀匠にして助宗六世の孫弘化嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タダヨシ　忠義　細川近造と稱す下總佐倉の刀匠にして文政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タダヨシ　忠義　美濃の刀匠にして本國大和千手院の派なり本州に來り赤坂に住す故に赤坂千手院と稱す元暦比の人なり（本朝鍛冶考）

タダヨシ　忠義　裝劍彫工なり江戸に住す地磨にして傘に冠などの彫物あり絲頭等に至りては「コシキ」大に低くして奈良彫の風あり（裝劍奇賞）

タダヨシ　忠良親王　嵯峨天皇の皇子なり母は女御百濟貴命、承和元年四品に叙し清和帝の時二品に進み黒官太宰帥に至る貞觀十八年二月薨ず年五十八（大日本史）

タダヨシ　ヨシトシ　多田義俊　有職家なり進藏人左馬頭に改む字は政仲義俊は其の名　攝津の國人なり姓は源氏にして清和帝の後裔なり初め攝津守に任ぜらる寛文元年轉任し貞享三年正月歿す五十歳なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タダヨリ　忠依　和州千手院の刀匠後美濃赤坂に住す建治年間の人或は云美濃赤坂千手院忠義の子にして承久比の人或は承仁法師忠義の子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タダヨリ　タカトヨ　忠寄　薩摩の刀匠元良を看よ

タダ　リャウノシン　多々良之進　陸軍歩兵中尉なり德島縣出身にして明治三十七年日露戰役起るに際し鞏備役より召集せられ歩兵第十二聯隊附として從軍中同年十一月廿三日旅順要塞東鶏冠山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タヂ　ヒ　田道　仁德の朝の人なり帝の五十三年新羅貢を闕く兄竹葉瀬を遣して往きて之を責めしむ路に白鹿を得還て之を獻ず重れて田道を遣す因て精兵を授け詔して曰く新羅若し命を阻まば宜く急に之を擊つべしと新羅果して之を阻み數々戰を挑む田道蟲を固めて出てず新羅の卒を獲て軍の虛實を問ふ對て曰く百衛と云ふ者あり驍勇絶倫神に在軍の先鋒たり若し其左を擊たば之を破る得んと田道即ち精騎を選ひて其左軍を擊ちたしむ新羅大いに潰り勝に乘じて縱橫奮擊し死傷數百、四邑の人民を虜にして還る五十五年蝦夷叛す田道に命じて之を討たしむ伊寺水門に戰ひ兵敗て之に死す是の後蝦夷數々侵掠し遂に田道の塚を發くに大蛇あり塚中より出て目を瞎らして夷賊を噛む悉く其の毒を被る死亡すゝ者多し時人曰ふ田道亡ぶと雖も能く讎を報ふと初め田道百濟に使し止美邑の吳女を娶て持君を生む持君留りて百濟に居る其の三世の孫を熊次と曰ひ新羅と曰ふ欽明帝の時百濟より至る新羅の子吉雄姓を止美連と賜ふ（大日本史）

タチイリ　ムネツグ　立入宗繼　京師の人なり父祖の時より洛外に住み多く田園を占め居れり永祿年間仕へて從五位下左京亮と爲り禁裏供御の御用を勤むも之を尾張の人道家業と変り善し嘗て皇威の振はざるを歎き中納言藤原惟房に說て曰く方今天下大に亂れ宮闕頽敗し供御の邑悉く武人の占有する所なる臣熟々思ふに其の勢天下の豪傑を得るに非れば天下の亂を定むること足ちず尾張に織田信長といふ者あり聞く其人年壯なり東國の咽喉に割據しよく少なを以て衆を摧く是その人必ず絶世の才あらん君何ぞ奏して綸旨を請ひ信長に囑するに撥亂反正の事を以てせざると惟房内外を見揮し敢て決せず宗繼再び說て曰く事もし漏泄せば臣獨其責に任ぜんと是に於て天皇驚夢に感じ使を派し熱田神祠に奉幣すと乃ち宗繼および礒貝久次をして密旨を齎らし尾張に赴かしめ信長に賜ふに御用香合を以てす宗繼等尾張道家氏に館す是時信長獨して歸り道家氏に過ぎる道家告るに故を以てす信長すなはち沐浴して衣を更め出て宗繼を見る宗繼勅旨を宣達す信長曰くそれ天皇は天下の君宜く我より職を逃ぶべし然るに今を以てこれに堪へん當に天威に藉り凶徒を寃らげ不日入朝し力を竭して天恩に報ゆることを圖るべしと因て自から食膳を調し二使を饗す信長これより日夜四上の策を議す十年十月天皇また立入宗繼をして詔を瀝し

信長に勅して曰く朕四方を顧るに彌が武にしくものなし議に密勅を下し囑するに征討のことを以てす彌心を王室に存し跋渉を憚らず已に尾張を平らげ勇を奮ひ威を宣ぶと聞く朕深く之を嘉す宜く益々果毅を迪み以て朕が望に副ふべしと因て戰袍一領を賜ふ信長感激し其袍を拜して曰く臣師を督し闕に謝るの日當に服して以て賜を拜すべしと（案ずるに宗綱は勤王の志あつく且時勢に通徹せり然れども其の傳記の見るべきものなし立入宗繼記一卷ありて續群書類從になさむ然れども其の履歴に於ては考ふべきなし今其概を載するのみ）明治三十一年四月贈從四位下より進て從二位を贈らる

タチカハ　ナガハル　田近長陽　國學者なり豐後國岡藩士通稱陽一郎詔學に委く古史傳異考の著あり

タチカハ　ヤモンジ　立川彌門治　陸軍歩兵少將なり群馬縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第一師團歩兵第二聯隊附として出征中廿七年八月二十日旅順要塞水師營大四識附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タチカラヲノ　カミ　手力雄神　大神窟屋に隱るゝの時其の窟戸を開き大神を援出せし神なり信州戸隱山に祀る（古事記）

タヂノ　ツマ　田道妻　姓氏を詳かにせず仁德帝の五十五年蝦夷叛す帝田道をして之を討たしむ田道兵敗れて死す從者其の手纏を取り歸りて其の妻に授く妻大に悲慟し即ち手纏を抱て縊死す時人之を哀れむ（大日本史）

タチハキ　センジャウ　モトノヨシカタ　帶刀先生「ミナ

タチバナ　アキツラ　立花鑑連　初の名は宗親、大友義鎮偏諱を授く因て今の名に改む小字は八幡、後孫二郎と稱す筑前の人、大友兵庫頭親泰より出づ親泰の子左衛門重秀戸次氏と稱す鑑連は其の裔なり世々大友氏に隷す、田原、佐伯、日田の三氏と勢を齊うす天文四年菊池氏を擊つ弘治中秋月筑紫氏を攻て之に克つ永祿の初め毛利元就豐後を侵す鑑連諸軍を督して擊て之を攘ふ五年創髮の時に大友義鎮政を失す蒼宿將校或は異圖を懷く鑑連竊り之を好まず一浮屠に謂りて曰く予れ大友氏の爲に始終其節を改めざらんと欲す幸に予が號を撰べと浮屠曰く霽の路上に降るや道に消て他に徙らず且其の清潔君が志に似たりと因て道雪と號す八年大友義鎮筑前を荷ふ鑑連其の先鋒となりて功あり十年龍造寺氏を討つ十二年安藝を攻む功諸將に冠たり義鎮鑑連を擢んで、筑前の守護とす鑑連は其の立花城に居る因て稱して立花氏と曰ふ城は本と立花鑑載に屬す鑑載の黨衆を聚め城を復せんことを謀る鑑連擊て之を平ぐ鑑連義鎮を輔け龍造寺及び毛利氏を攻む翌年義鎮肆行甚し秋月種實之に叛て來り攻む攻む攻む一日に十五里を略し斬獲二百餘遂に凱旋す十三年盛等と猫尾及び高牟禮（一には高良山に作る）を攻む九月十一日病みて軍中に卒す年七十三（三一に二に作る）鑑連伯耆紀伊及丹後守を歷て左衛門大夫に遷る其の人となり智勇人に超ゆ其の兵衆を睿し聚民を撫する恩威並び至り人之が用を爲すを樂む其の大友義鎮に事ふるや心力竭さゞなるし義鎮暴なりと雖も其の忠謹に感じて敢て害を加へず嘗て義鎮に斎祓あり諸臣入見すら毎に輒ち圍きて之を嚙む人皆之に苦しむ鑑連鐵扇を持し入て其鋒を打殺す因て義鎮を諫む國中之に倚賴す鑑連幼にして雷に擊たれ足を傷りて行歩に艱む嘗て肥士百餘人大刀を帶びて之に從ふ兵刃既に交はれば大聲呼て曰く速く與を敵中に舁入れよと先陣若し敗られば叱咤して曰く何ぞ我を敵中に投じて而して後亡げざるを是を以て常に敗を轉じて捷を得と曰ふ（續鑑連死して後大友氏遂に振はず子あり宗茂と曰ふ（續日本史、豪雄冒行錄、本朝武功正傳）

タチバナ　イラツメ　橘娘　天智帝の嬪なり親王、新田部皇女を生む（大日本史）

タチバナ　ウヂキミ　橘氏公　父を清友と曰ふ贈太政大臣氏公檀林皇后の弟たるを以て顯要に累歷す承和十一年右大臣を拜し從二位に叙せらる既にして喪を上り食封一千戸を辭す帝書を賜ひて之を許す十四年薨ず年六十五世に井出右大臣と稱す使を遣し從一位を贈らる久參議溢野貞主治部大輔房世王等を遣し喪事を監せしむ（大日本史）

タチバナ　ウマキ　橘美樹「カトウウマキ」

タチバナ　エナホ　橘枝直「カトウエダナホ」

タチバナ　カゲノリ　橘景範「カトウカゲノリ」

タチバナ　カチコ　橘嘉智子　嵯峨帝の后なり內舍人清友の女、后未だ笄ぜざる時法華寺に尼譯雲と云ふ者あり后の臂を把り謂て曰く銀子後ち當に天子皇后の母となるべしと后資性寬和、風容絕異、手を垂るれば膝を過ぎ髮地に委す嵯峨帝親王たりし時之を納る寵あり登祚の後進めて夫人と爲す尋で封一百戶を賜ふ弘仁の初め從三位に進む五年尾張丹羽郡の田二十四町を賜ふ六年七月七日后璽筥を著け莊嚴佛の如しと夢む數日にして立て皇后と爲る正位の後專ら化導を務む宮闈邕穆朝野之を稱す帝敬重隆か加ふ仁明帝、淳和皇后（秀良親王、秀子內親王、儀子內親王、繁子內親王、芳子內親王を生む淳和帝立つ尊て皇太后と曰ふ承和三年平城京を奉ず仁明帝立つ尊て大皇太后と曰ふ東寺院に充つ明年近江の荒田六十四町を奉じて後院に充つ九年遷りて冷泉院に御す嘉祥三年仁明帝不豫后之を憂念し遂に剃髮して尼と爲り以て冥敎を求む三月仁明帝崩ず后五月を以て崩ず年六十五深谷山に葬る遺令して葬を薄くし山陵を營まず后篤く佛を信じ檀林寺を建て比丘尼の律を持する者を置く仁明帝五百戶を施捨して以て供養に充つ世に檀林皇后と稱す后嘗て多く寶幡及び繡文袈裟を造り巧妙を窮盡す左右其意を知らず後沙門慧芬を唐に遣し繡文の袈裟を以て僧伽及康僧等に施し寶幡鏡奩の具を以て五臺山寺に藏す又弟右大臣氏公と議し學舍を開き學館院と名け諸子弟に勸め經書を誦習せしむ時人以て漢の鄧皇后に比す初め勅命を受て唐土に至るや驛官鴻國安國師の上足義空長老と僧に謁る皇后檀林に迎へ聽て叢究懈らず卒に和歌を詠じ所悟を述ぶ曰く「もろこしの山の彼處にたつ雲はこゝにたく火の煙なりけり」と驛官和歌の意を聞きて曰く東城深悟の人丈夫の氣息

ありと（大日本史、龍門夜話）

タチバナ　カネコト　立花鑑載　鑑光の子なり實は日田親堅の二子にして鑑光の養子となる幼名新十郎左近將監又俱馬守と稱し立花城に居る毛利元就の威山陽に振ふに及び以爲らく九州また元就の併呑する所とならんと竊に欵を送りて曰く立花は險絕九州の要鎭たり君若し四を畧せんとせば請ふ繃導とならんと以て四下を促す立花の東城を井樓山と曰ひ鑑載の據る所、西城を白嶽と曰ひ奴留碭融泉の據る所たり永祿十一年元就長防二州の兵八千を發して立花に赴く薦野宗鎭奴留碭融泉末多比大學助等未だ鑑載の異志あるを知らず相共に軍事を議す鑑載散樂を催し宗鎭大學助を招きて之を殺し急に白嶽を攻む融泉僅に身を以て遁る鑑載遂に叛く大友義鎭戸次鑑連吉弘鑑理をして之を攻めしむ鑑載安倍民部と兵一萬を併せて禦ぐ鑑連兵を揮つて先登し城兵潰散し鑑載自殺す時に八月十四日なり（野史、立花系圖）

タチバナ　カハチ　立花河內　通稱を監物と云ふ京師の人なり慶長十八年口宣を受け河內と稱す後ち子孫相承けて正德五年之れを族人某に讓ると云ふ河內後ち更めて出雲或は和泉と稱し享保十五年復び本の名に復し立花氏を冒す河內嘗て樂を傀儡師宇治嘉太夫に受け六宇南無右衛門等と名を齊うす（聲曲類纂、役者五雜組）

タチバナ　カホル　橘香保留　江戸の狂歌師なり通稱彌平次陽寄亭又奇雨樓と號す江戸飯田町の煙草商三河屋の主人なり蜀山人の門に入り煙艸百首の詠あり文政七年四月歿す年五十七又小說の著あり（戲曲小說通志）

タチバナ　キツソウ　橘橘窓「ハシモトツネアキラ」

タチバナ　キヨトモ　橘清友　奈良廊呂の第二子なり少にして沈厚典墳に涉獵す身の長六尺二寸眉目畫くが如く舉止甚だ雅なり寶龜中高麗來聘す清友其家の子にして姿儀魁偉なるを以て選に中り使人に接對す使人史都蒙相法を善くす通事舍人山於野上に問ひて曰く彼少年は何人ぞ對へて曰く京師の一白面のみ都蒙曰く此の人風骨常に非ず子孫大に貴かん野上命の長短を問ふ曰く三十二に厄あり此を過ぎば羞なしと延曆九年內舍人となり從九位下に叙せらる八年病みて卒す三十二清友田口氏を娶りて檀林皇后を生み子孫貴く顯はる果して都蒙の言の如し弘仁中從三位を贈らる仁明帝の即位に詔して清友及田口氏に外祖父母たるを以て並びに正一位を贈られ山城相樂郡掛山の墓河內交野郡小山の墓に守冢各々一戶を置かる承和六年太政大臣日本史）

タチバナ　キヨノ　橘清野　贈太政大臣清友の弟なり性寡欲にして交野に隱居す檀林太后の叔父たるを以て天長中從四位上を授けらる卒する年八十（大日本史）

タチバナ　シュウタ　橘周太　陸軍歩兵中佐なり長野縣出身にして少時軍人たらんと欲し刻苦精勵果進して歩兵少佐に至る明治三十七年日露戰役起るに際し名古屋幼年學校長たりし由請ふ出征を許され第三師團歩兵第卅四聯隊大隊長として從軍し八月卅一日遼陽の大戰に參加し奮戰激鬪遂に壯烈なる戰死を遂ぐ第二軍司令部は少佐の戰歿を惜しみ直に左の電報を留守師團に送る曰く「少佐橘君は八月三十日より九月一日に至る遼陽附近の戰鬪に於て常に衆に擢んでたる武功を樹て殊に八月三十一日には勢圖敵の逆襲を擊退したる後遂に名譽の戰死を遂げたり吾等一同は此悲報に接し哀悼の情禁ずる能はず右橘留守宅へ電送を願む」と、戰功に依り中佐に昇任し勳四等功四級に叙せらるる實性嚴正克己最も忠君愛國の熱情に富み後進を率ゐる最も愬焉にして部下の兵士を遇するに我子弟に異ならず海軍の廣瀨中佐と伴ひ稱せらる

タチバナ　シュンキ　橘春暉「ナンケイ」

タチバナ　スケタメ　橘佐爲　三野王の子、諸兄の弟たり初め諸王となる後ち兄、諸兄と姓橘宿禰を賜ふ正四位下中宮大夫兼右衛門督に至る天平九年卒（大日本史）

タチバナ　スミキヨ　橘澄清（字は橘上と桂林遺芳抄にあれど橘三の誤にあらずや）從四位下信濃守真基の子なり延喜中從三位に叙せられ中納言に至る從五位下忠正は其の子なり（大日本史）

タチバナ　ソウイウ　立花宗有　茶人なり茶道を南坊慶首坐に學びて能くせり黑田家の臣、五郎左衛門と稱し實山と號す其の歿年詳かならず（茶人系傳全集）

タチバナ　ゾウナゴン　橘贈納言「タチバナヒロミ」

タチバナ　ダウセツ　立花道雪「タチバナアキツラ」

タチバナ　タムラコ　橘田村子　桓武帝の妃なり入居の女、池上內親王を生む（大日本史）

タチバナ　チカゲ　橘千陰　和學者にして江鯨等皆其別號也通稱加藤又左衛門又德與鷹、能因法師の裔、父は枝直町奉行大國越前守に仕へ江戸の與力となり八丁堀に住す千蔭父に學んで歌を善くし又加茂眞淵に師事し後ち父の職を承く更務嚴委すと雖ども猶ほ且歌學を研覃して懈らず天明八年疾を以て職を辭す乃ち力を所好に肆まいす老いて樂愈ゝ進む集あり荒花編と名づけ世に流布す千蔭本と本邦古冒の義に精し又和歌を善くするを以て苟も嗤侮を嗜む者は其門墻を望みて趨らざる者なし官亦其著はす所の萬葉解を上らしめ賞して銀錠若干を賜ふ是に於て名聲益ゝ著はる兼て隼札を善くす松花堂を模して一家を成す畫は建部綾足に學ぶ揮ふ所は屛風紙尾も人爭ひて之を珍とす文化五年九月二日歿す年七十五著す所萬葉集略解、萬葉新採百首、香取日記、宇氣經が菴、行加飛鳥里、大歌所御歌記、新百人一首、月並消息、古今序考等なり亦狂歌を詠じ號を橘八衢と云ふ（事實文編、江戸名家墓所一覽、諸家人物志）

タチバナ　ツネキ　橘常樹　土佐の國學者なり若年にして江戸に出で賀茂翁の門に入り古學を研究す人となり淡落不羈事に拘らず單身潔居して蕭散寡欲なり聞識多しと雖も不知の如く性酒を嗜めども飲まざるが如く親しく近づく者あれども親みなきが如く憂ありと雖も憂ひとせず樂ありと雖も樂みとせず家窮めて貧なりされども貧とせず其所著の書、古今集仰古解二十卷、歌文詞の集若干卷あり嘗て盜の爲に盜まれて一書も遺すなし然れども自若として憂る色なし一日酒

を飲みて臥して遂に死す時に寶暦十二年十一月十九日なり年五十九、賀茂翁弔詞を作て一畸人とし其の號をとすといふまた歌一首を加へて曰く「よの事は見ながら無しと見し人を有りのすさみに問ふがかなしさ」と（續近世叢語、三十六家集）

タチバナ　ツネコ　橘常子　桓武帝の妃なり兵部大輔島田麻呂の女、宮に入て寵あり大宅内親王を生む從三位を授く桓武帝崩ず出家して尼となる嵯峨帝位に即く新錢百貫を賜ふ弘仁八年八月薨ず年三十（大日本史）

タチバナ　トホヤス　橘遠保　左大臣諸兄の後從六位上に叙し美濃守と稱す天慶二年伊豫國に藤原純友を生捕り武名を顧はせり子孫河内國に住す楠正成の先祖なり（本朝名傳略記）

タチバナ　ナカツヒメ　橘仲姫　宣化帝の后なり仁賢帝の女、母は春日大娘皇后、宣化帝太子たりし時納れて妃となす元年三月立て、皇后となす石姫皇后、小石姫皇后、倉稚綾姫皇女、上殖葉皇子を生む崩ずるに及て身狹桃花鳥坂上陵に合せ葬る（大日本史）

タチバナ　ナガヤス　橘永愷　歌人なり剃髪して能因法師と號す諸兄十世の孫、遠江守忠望の子なり兄肥後守元愷の爲に子として養はる永愷文章生となり肥後進士と號す性和歌を嗜む此の時藤原長能歌を以て世に名あり永愷就て和歌を作るの要を問ふ長能擧げて「山深み落てつもれる紅葉々の乾ける上に時雨ふるなり」の篇を示しく曰く體裁は宜しく此くの如くなるべしと永愷深く領悟し遂に之れに師とし事ふ和歌の師賞は此より始る剃髪して名を能因と改め攝津古曾部に居る世に古曾部入道と稱す嘗て藤原兼房と同載して二條東洞院に至り遽かに車より下る兼房怪みて故を問ふ曰く是れ才女伊勢の舊趾庭松尚ほ存す豈に禮なくして過ぎる可けんやと行くこと數十歩樹見えざるに及びて車に就く其の和歌を重んずる此くの如し藤原節信と云ふ者あり好事の士なり一日永愷に逢ふ相得て甚だ歡ぶ永愷懷中の錦囊を探り一木片を出して曰く此は是れ長柄橋の材なり我之を寶愛すること久し今日子の爲に之を贈すと節信欣然として亦た懷を探りて一の枯蛙を出して曰く是は井手の蛙なりと相共に愛觀し歡を盡して去る藤原範國任に伊豫に赴く永愷從ふ會く歳大に旱し百蛙愁苦す範國永愷に謂ひて曰く我れ聞く和歌能く神明を感ぜしむ請ふ子我が爲に雨を三島神に祈れと永愷乃ち和歌一首を進む曰く「天の河苗代水に堰きくだせ天下ります神ならば神」と須臾にして天雲を興し大に雨ふること三日遠近霑足し枯苗盡く蘇す後ち陸奥に遊て白河關を過ぎ和歌を作りて曰く「都をば霞とともに立しかど秋風ぞふく白河の關」と自ら以爲らく絶唱と嘗て人に告て曰く和歌を善くせんと欲せば要は須らく深く嗜むべし之を嗜む久しければ自ら神に入ると所著に玄玄集、八十島記、歌枕あり（大日本史）

タチバナ　ナホモト　橘直幹　長門守長盛の子なり業を橘公統に受く對策及第して大内記に任ぜられ大學頭となる天暦二年文章博士となり數々奉じて文章得業生を策試す八年民部大輔調べ直幹上書して之を兼任せんことを請ふ書奏す書中の文詞帝の意に愜はざるものありて成らず天德の初め式部大輔となり冷泉帝に侍讀す（大日本史）

タチバナ　ナンケイ　橘南谿「ミヤガハナンケイ」　臣諸兄の子なり天平中帝詔兄の相樂の別業に幸し奈良麻呂に從五位下を授く大學頭孫津大夫民部大輔を歴て從四位上に叙せらる侍從となり參議行但馬因幡按察使、檢校伯耆出雲石見等非違事を拜し正四位下に進めらる寶宇元年左大弁を兼ぬ時に帝方さに惠美仲麻呂を寵して權幸に因て權を擅にす奈良麻呂其なす所を惡みて潛に之を除かんと欲し遂に廢太子道祖王及び鹽燒王、安宿王、黄文王、小野東人、大伴古麻呂等と謀りて廢立を行ふ初め勝寶の末太上天皇不豫なり諸兄の祇承人佐味宮守告げて云ふ大臣酒を飲みて言辭無禮稍々反狀あり太上天皇は優容問はざるも諸兄は之を知ると雖も無くして致仕す既にして帝越前守佐伯全成を召して問ふ美濃麻呂對て曰く臣未だ嘗て聞かず佐伯全成の言を知んと乃ち將に全成を鞫せんとす太后固く之を止め事遂に寢む是に至て山背王變を上りて曰く橘奈良麻呂蠱謀を構へ將に田村宮を圍まんとす大伴古麻呂具さに其情を知る宜く召して之を訊ぬべしと時に古麻呂小野東人に謂ひて曰く人あり内相を勁やかさんと欲す汝從ふか東人曰く唯々命是れ聽んと答炑忠節と云ふ者あり密かに其の語を聞きて以て右大臣藤原豐成右大弁巨勢堺麻呂に告ぐ堺麻呂密かに之を奏す中衛舍人上道斐太都仲麻呂に告げて曰く小野東人僕に謂て曰く王臣に皇太子及び内相を殺さんと謀る者あり汝能く從はんか僕問ふ王臣は誰とかなす曰く黄文王、安宿王、橘奈良麻呂、大伴古麻呂徒衆甚多僕又問ふ衆の謀は如何曰く謀る所二あり一は精兵四百を率て田村宮を圍む二は陸奥將軍大伴古麻呂將に陸奥に赴かんとして行て奏濃闕に至らば詐りて疾と稱し一二親情を見んと請ふ聽許を蒙らば即ち闕を塞がんと良久し僕詐りて之を許せり云々仲麻呂之れを聞き是の夜二更具さに狀を奏し諸門を警衛し高麗福信等を遣し兵に將として東人、忠節等を遣捕し左衛士府に繫しめ別に兵を遣して道祖王の家を圍ましむ明日公卿を遣して究問せしむれども東人等服せず是夕仲麻呂内に侍して鹽燒王、安宿王、黄文王、奈良麻呂、古麻呂を召し太后の詔を賓べて曰く人あり汝等反を謀ると告ぐ願ふに汝等は我に於て親戚たり而して位祿輕からず今何の怨ありてか逆をなさんや是れ必ず讒傳ならん是を以て今敢て問はず汝等慎みて自絶する勿れと五人退て南門を出でゝ稽首恩を謝す明日藤原永手等を遣し再び究問す東人等欺して曰く安宿王、黄文王、奈良麻呂、古麻呂、多治比禮養、多治比禮麻呂、大伴池主、多治比鷹主、大伴兄人等夜會議する者三たび始めは奈良麻呂の家に於てし次は圖書藏の側に於てし後は太政官院の庭に於て會する者甚だ衆し顔面を辨へず天地四方を拜し鹽汁を飲て誓ひて曰く七月二日初め兵を發し内相の宅を圍みて之を殺し即ち大殿を圍み太子を廢し劫して鈴鞳を奪ひ右大臣を召して號令を爲さしめ然る後帝を廢し四王を簡みて立てゝ以て君と爲んと是に於て安宿王以下を分繫して之を鞫す欵する所略々前に同じ敕使奈良麻呂を詰りて曰く何に由りて逆を謀る曰く内相政を爲す不道甚だ多し故に先づ兵を發し請ひて其人を得て而後狀を陳せんと曰く何をか不道と謂ふ曰く東大寺を造りて人民辛苦

す氏々も亦た憂ふ又刻を奈良に置く最も已憂と爲す日く氏々は何等の氏を指す寺を造るは汝が父虛職の時に起る今にして人の憂と稱するは其言不當也奈良麻呂辭屈す（註に曰く公卿補任を按ずるに奈良麻呂誅に伏すと一說には配流と本書奈良麻呂を流殺するの明文なし故に書せず）仁明帝の登極に及びて奈良麻呂に從三位を贈る後ち大納言を贈り又太政大臣正一位を贈る（大日本史）

タチバナ　ナリカヅ　橘成員　字を仲宇といひ江戸の和學者なり假字遣の一定せざるを憂へ假名字例を著したりしが元祿八年增訂して八卷と爲し倭字古今通例全書として之を公にせり當時釋契冲漸く假字遣の事に就て思を凝せし時此書ありしは大に成員の學殖を窺ふべし弟を薄保春といひ奇山と號し又文學に秀でたりしと見え同書に漢文の序を加へたり（倭字通例書）

タチバナノ　トヨヒノ　スメラミコト　橘豐日天皇「ヨウメイテンワウ」

タチバナノ　ヤチマタ　橘八衢「タチバナチカゲ」

タチバナ　ハヤナリ　橘逸勢　淸友の子奈良麻呂の孫なり人となり放誕にして細節に拘らず最も隸書に妙なり宮門の榜題は多く其手に成る延曆の末遣唐使に隨ひて唐に入る唐人呼びて橘秀才と爲す還りて從五位下に叙せらる老病を以て家に居て仕へず承和七年起て但馬權守と爲る嵯峨上皇不豫、東宮帶刀伴健岑以爲らく登遐遠きに非ず國家の危き待つ可きなりと乃ち逸勢と謀りて皇太子恒貞を奉じて東國に入り竊に阿保親王に語る既にして上皇崩ず親王誡書を嵯峨太皇大后に上る大后中納言藤原冬房を召して之を傳奏せしむ乃ち六衛府を守らしめ右兵衛少將藤原富士麻呂等を遣し勇敢の士を率て二人の宅を圍み之を捕へしむ主馬長伴水上も並せ執らる又右近衛將曹伴武守帶刀伴甲雄を召して兵仗を奪ひ各々左近衛左衛門佐兵衛府に繫す右衛門督永名右衛門少尉時枝等は逸勢の近親を以て自ら兵仗を解て命を待つ大納言藤原愛發中納言藤原吉野等は其の黨を以て院中に繫がる左大辨正躬王等勸問す逸勢服せず姓を非人と改め死を減じて伊豆に配流す（一に曰く幼女某別を惜み共に配所に從はんと請ふ官聽さず曰く竊に父の駕を追ふて遠江に至る逸勢病あり始て請て痾を看るを許さる父死する後墓を守ること十年敕に遇ふに及び喪を負ひて還て京に歸る遠江板築驛に抵て遂旅に死す月餘にして詔して曰く伊豆國に配流する罪人非人逸勢の孫珍令年幼にして未だ活計に習はず而して逸勢去月十三日を以て身死す孰か憐み孰か恤らん罪人の苗胤と雖も猶ほ一物所を失するを愍む宜く更に追還して舊閭に就かしむべしと嘉祥二年男龍劍實山等に本姓を賜ひ京師に入るを許す明年逸勢に正五位下を追贈し歸葬せしむ仁壽三年從四位下を贈る（大日本史）

タチバナ　ハヤナリノ　ムスメ　橘逸勢女「ヘウチエウ」

タチバナヒメ　橘媛（ヤマトダケノミコトの傳にあり）

タチバナ　ヒロミ　橘廣相　字は朝綏、左大臣諸兄五世の孫父は峰範若狹守たり廣相幼にして文才あり九歳にして昇殿を聽さる乃ち詩を賦して曰く荒村桃李猶應愛、何況瓊林華苑春と長じて博學の名あり貞觀中文章生に補せられ越前權少掾となり從五位下に叙し文章博士に叙せらる醫して就かず東宮學士民部少輔を歴る五條大后崩じ喪服を議して米だ決せず遂に廣相の議に從ふ勃海使來る敕を奉じて使人に宴し詩を賦す從五位上に進む帝文選を讀む又侍讀す尋で文章博士を兼ね位上に進む帝文選を讀む左大辨となり光孝帝即位に從四參議に任ぜられ左大に辨轉ず宇多帝即位に藤原有穆等と殿上に侍す關白基經職を辭す廣相詔を草す「阿衡の任となす」の語あり基經悅ばず帝爲に之を解謝す尋で近江守を兼ね正四位下に進む寛平二年卒す年五十四侍讀の勞を以て中納言從三位を贈られ贈に綿布を以てす廣相三朝に歴仕し左右に近侍す者中の衆事幹理せざるなし博く書に渉りて昔拔萃鈔纂以て遺忘に備ふ集八卷あり朝官當唐名畧鈔を著す又嘗て宇多帝の敕を奉じて蹈歌記を選す廣相始め業を菅原是善に受く是善嘗て高雄山の鐘銘を作る廣相之に序し藤原敏行之を書す三世絕と稱す廣相初の名は博覽、舊制に佛菩薩聖賢の名號を以て名とするを得ず舍利佛別に博覽比丘と號するを以て父峰範奉請して今の名に改む（大日本史）

タチバナ　フナコ　橘船子　淳和帝の宮人なり從四位上淨野の女、崇子内親王を生む（大日本史）

タチバナ　フハク　立花不白　黒田家の臣なり飭ら茶道を立花宗有に學びて能くせり實山の嫡子虛谷齋と號す通稱太左衛門其の歿年詳かならず（茶人系傳全集）

タチバナ　フミナリ　橘文成　天平寶龜間の人なり和歌を善くして萬葉集作者の一に列す（萬葉集作者歴歴）

タチバナ　ボクダウ　立花牧童「ボクドウ」

タチバナ　ホクシ　立花北枝（一に森氏に作る又趙氏に作る）蕉門の俳人なり俗名を次郎右衛門と云ふ加賀國能美郡小松町の產硎屋彦兵衛の次男なり兄三郎右衛門と共に家業を受繼ぎ硎刀を業とし籍を金澤に移し共に芭蕉の門に入り兄は俳名を牧童と稱し弟は北枝と稱す兄弟風雅に遊ぶ北枝は聰敏にして蕉風の妙境を究め島翠齋と號し蕉門十哲の一人たり實に北陸の俳祖にて北越に蕉風の俳諧隆んなるは全く北枝が力なりと云ふ享保三年五月十二日家に歿し金澤卯辰山心蓮社の境内に墳墓を築く著述の書花月傳、北枝傳、金言抄等多し門人希島因翠齋の號を受つぎ夫より世々俳人相承して今に金澤宗匠の家系をなすと云ふ

タチバナ　マサミチ　橘正通　字は能、右大臣氏公六世の孫父は實利、大舍人頭たり正通少にして學に志し源順に師とし事へ藤原在衡と同じく大學に入る情好款密而して在衡式部少輔五位蔵人に任ぜられ正通僅に六位を得乃ち詩を寄せて志を抒ぶ在衡後進み公卿に至る正通稍々老いて其の遇はざるを歎じ心常に怏々として避世の志を抱き常に文に臨みて其の意を見はす天祿中加賀掾に任ぜられ尋で宮内少丞となる嘗て詩序を作りて言へることあり曰く齡は顏鬢に惑ぎ三

代を過て猶ほ沈む恨みは伯鸞に同く五噫を歌ひて將さに去らんとす」と源爲憲之れを讀みて大に怪しみ正通み願みて曰く廼豈に他意なきを得んやと正通慨然として涙を垂る襟ち果して遺跡す具平親王其の遺書に題して曰く「文華留作二荊山玉一風骨猶爲二霜里塵一本會洛范天道理、滿朝朱紫彼何人」と其の時人の爲めに感惜せらるゝ此くの如し(大日本史)

タチバナ ミソノ 橘御園 江戸の歌人加茂翁の高弟なり長歌に長ぜり(鑒定便覽)

タチバナ ミネツグ 橘峯繼 右大臣氏公の子なり身の長六尺餘、稟性寛緩、少時愚鈍にして文書を好まず其の母は仁明帝の乳母たり故を云て藩邸に侍し稍く寵幸を蒙る帝嘗て歎じて曰く岑繼は大臣の後、國の近戚なり若し才識あれば公卿の位は期し得べし惜むらくは學識のなきを以て常に憂ち節を折りて勤精學を勤む略ゝ音儀に通ず天長中內舍人となり右近衛少將に累遷す時に父氏公本府の大將を兼ね因て左兵衛佐に改められ遂て左近衛少將に遷る承和中伊勢登志空閑郡の地一百三十町を賜はる齊衡中正二位中納言に至る貞觀二年薨ず年五十七(大日本史)

タチバナ ミンカウ 橘珉江 儒家なり寶曆明和の頃浮世絵を描き摺込の彩色を工夫し大に流行せり職人部類を著はす

タチバナ ミヰコ 橘御井子 桓武帝の妃なり左中辨入居の女、賀樂內親王、管原內親王を生む從四位下に叙す嘉祥二年從三位に進む(大日本史)

タチバナ ムネシゲ 立花宗茂 初の名は統虎、小字は千鶴、立齋と號す內膳正(或は參河守に作る)高橋鎮種の子なり小少にして穎悟、十二歲出て狩りす狂狗あり宗茂を反噬す宗茂劍着を以て之を擊つ狗乃ち長縮す鎮種之を聞て曰く奚爲れぞ狗を斬らざると宗茂對て曰く小子劍を以て人を斬るを聞く未だ狗を斬るを聞かずと厲々立花館連の軍に從ひ敢毅善く戰ふ館連之を奇とし請て嗣とす天正十四年島津氏來り侵す宗茂寡兵邀へ擊て五年秀吉西海を平げ筑後三郡十二萬石を賜て柳川の城主とし左近將監に任ず肥後賊起る國主佐々成政之を平ぐる能ず宗茂伐て之を滅す十六年宗茂京師に入朝す秀吉曰く前年肥後を擧て汝を封せんと欲す然れども子が僚屬の意に滿たずと聞て乃ち止む今西溟南海を割て封を增さん唯子の擇ぶ所のまゝなりと宗茂對て曰く殿下宗茂の不肖を以てせずして既に牧守の任を辱うす奚ぞ敢て地を求めん萬一殿下の寵異を賴て邵兵將校の列に加へば足れりと秀吉悅びて三千を賜ひ臣を將校の列に陞任す秀吉宗茂の驍勇を稱して曰く天下の四位侍從に陞任す秀吉宗茂の驍勇を稱して曰く天下の勇將は獨り宗茂と本多忠勝とのみ自餘は勃果を以て自ら許すものなりと雖も二人に比すれば皆匹敵に非ずと文錄中宗茂諸將と朝鮮を征す明將李如松を破る慶長二年再び朝鮮に入る明軍釜山を襲ふ宗茂奮て之を擊ち三年明の將麻貴加藤清正を救ふ元濟に至り虜五千人に遇ふ宗茂急を聞き兵五百を以て清正を救ふ元濟に至り虜五千人に遇ふ宗茂曰く否道はざれば我勝に乘じて道路す或人之を止て曰く彼は衆く我は寡し追ふ勿れと宗茂曰く否之を敗る既に舍す命じが寡を知られんと遂に進みて又之を敗る皆曰く彼我が寡を謂らば虜必ず反擊て囚者を縱たしむ皆曰く此れ予が欲する所なりと夜五伏を設けせんと宗茂曰く此れ予が欲する所なりと夜五伏を設け以て俟つ虜果して至る又之を敗る翌日師行て蔚山に近づく清正出て夾み擊つ虜軍を擊つ虜大に崩れて走る五年石田三成亂を作し豐臣氏の命を以て宗茂を誘ふ老臣小野鎭幸建議して曰く東國の諸侯皆既に大阪に應ず之に加ふるに我兵を以て夾みて德川氏の腹背を擊たば一舉して之を滅すべしと立花增時其の非計を陳ず宗茂聽かずして三成に驚し戰て利を失す木下家定に謂て曰く公者は城を守らば僕願くは一面を擁がんと輝元遲回答へず將士宗茂に白して曰く公の豐臣氏に酬ゆる所以既に足れり盍ぞ更に之を圖らざると宗茂之を然りとして降を德川家康に請ふ家康其晚きを怒りて封を褫ふ後奧州棚倉の地を賜ふ大阪前後の役並に家康の軍に從ひて功を顯はす元和六年舊封を復し更に飛驒守に拜せらる寛永中宗茂及び義子忠茂天草の賊を伐て功あり明年宗茂老す十九年歿す忠茂左近將監となりて侍從を兼ね子孫封を襲ふ(野史)

タチバナ ムネトラ 立花統虎「タチバナナムネシゲ」

タチバナ モリクニ 橘守國 狩野派の畫家なり檜原氏名は有秀、俗稱惣兵衛、後素軒と號す大阪の人繪書を鵜澤探山に學び類る狩野家の骨法を得て一機軸を出だせり嘗て土佐狩野の古圖を模寫し彫刻して畫學本とす狩野家これを聞き我が家の秘法を漏らせりとなし鵜澤氏を責む因て終に師家を破門せらる最も密畫に妙を得たり享保年間板唐土訓蒙圖彙は其の畫く所なり刻板畫の細密なるは蓋し此に始まる守國文學の才あり博識の名あり嘗て笠翁が畫得を平假名に翻譯して童蒙に示せり著はす所の繪本類本朝畫死、畫典通考、通寶志、故事談、寫實袋、直指寶、謠曲畫志、鑒寶樓、野山草、遲筆蕉、唐土訓蒙圖彙、玉の藻、詠物選、扶桑畫譜、南部名所圖、有馬勝景圖、萬歲武勇繪鑑の類なり寛延元年十月十七日歿す年七十(扶桑畫人傳、嬉遊笑覽、浮世繪類考別本、續本朝畫史、鑒定便覽)

タチバナ モリトシ 橘守俊 畫人なり右馬允と稱す梵漢兩字を以て能く地藏の尊像を畫く永正年中の人(畫家人名辭書)

タチバナ モリベ 橘守部 和學者なり北畠源助(一に元輔に作る)と稱す池菴と號し初め庭鷹と云ふ伊勢の人、初め狂歌をよみ幸手驛に住し後ち江戸に出て深川に居り淺草辨天山に轉じ又本所に移る歌を善くす其學素より見る所異にして古人によらず一家の學を成せり之を崇尙するの徒多し大意幽冥の說を主張し鬼神を崇ぶ天照大御神の與奪する所となし本居宣長の產靈三神は造化の主なりと云ふを取らずして造化の主は素盞男尊なりとし又外宮の祭神豐受姫神なりと云ふを倭姫世記等を援て國常立尊とするの類凡て宣長と相反せり詳かに稜威道別に見ゆ著はす所神樂御馬樂入綾は尤世に行はる嘉永二年五月廿四日歿す年六十九、牛島長命寺に葬る世に伴信友平田篤胤香川景樹及び守部を天保の四大家と稱す著す所雜語考、鉦の響、助字本義一覽、神樂御馬樂入綾、萬葉警、三代集案要、稜威道別、稜威言別、橘守部家集等あり(古學小傳、鑒定便覽)

タチバナ モロエ 橘諸兄 難波皇子の曾孫治部卿奚努王の子なり初め葛城と名く諸王たり和銅中從五位下に叙せられ馬寮監に補せらる天平の初め正四位下に累進し左大辨となる三年參議に擢んでられ明

年從三位に進む八年弟佐爲王と上表して曰く臣葛城等自す天平五年故知太政官事一品舍人親王大將軍一品新田部親王宣敕して曰く聞く諸王等臣、連の姓を賜ひて朝廷に供奉せんとを願ふと故に諸王を召して其狀を問はしむと臣葛城等本此心を懷きしも上達に由なし幸に恩敕に遇ふ昧死以て心情を吐露せざるべからず昔輕境原大宮御宇天皇の曾孫內宿彌創めて八氏の祖となり永く萬代の基を遺す爾來姓を賜ひ氏を命ずる或は眞人或は朝臣源は王家に始りて流れて臣民に終る臣葛城が親母贈を從一位縣犬養橘宿彌となす上は淨御原朝廷を歷て下藤原大宮に逮ぶまで君に事て命を致し孝を移し忠となす和銅元年大嘗に供奉す天皇忠誠の至りを賞し浮杯の橘を賜て曰く橘は果子の珍大人の好む所柯は霜雪を凌て繁茂し葉は寒暑を經て凋まず珠玉と與に光を競ひて金銀を交ふ以て愈ゝ美なり是を以て汝に姓橘宿彌を賜ふと而して今繼承するなし恐くは明昭を失せり伏して惟みるに天皇陛下は天下に光宅し四長業に安じ萬民德を謳ふ臣葛城等明聖の時に遭ひ濫に九卿に接し進むるに可否を以てす志は忠を盡すに在り夫れ姓を定め氏を賜ふは由來遠し臣葛城等願はくは橘宿彌の姓を賜ひて先帝の原命を戚き橘氏の殊名を流さんとを詔して曰く王等謙讓にして志は親を顯すに在り皇族の高名を辭して外家の橘姓を請ふ其懇請誠に時宜を得たり一に表請に依て橘宿彌を賜ふと乃ち今の名に改む太上天皇適々皇后宮に宴して和歌及び酒を賜ふ九年大納言に拜し十年正三位に叙せられ右大臣に拜し尋で從二位に進む帝其の相樂の別業に幸し其子奈良麻呂に位を授く十五年紫香樂に幸す諸兄留守す五月五日宮中に宴す皇太子五節を舞ふ帝諸兄をして太上天皇に奏せしむ太上天皇悅びて和歌を詠ず帝諸兄に從一位を授け左大臣兼太宰帥に轉ず勝寶の初正一位に進み改めて姓朝臣を賜ふ八年致仕す寶字元年薨ず年七十四朝廷從四位上紀飯麻呂從五位下石川豐人等を遣して儀葬を監護せしむ官賞用を給す諸兄は井手里に居る故に井手左大臣と稱し又四院大臣となす(大日本史)

タチバナ ヤスクニ 橘保國 狩野派の畫家なり守國の男、大阪の人、畫法を父に學び後素軒法橋と稱し專ら圖繪を畫けり寛政四年二月廿三日歿す年七十六(鑒定便覽、扶桑畫人傳、浮世畫師便覽)

タチバナ ヤスミチ 橘安道 彫工なり彌右衛門と稱す讃州高松硯屋町に住し其の術を以て高松侯の御扶持人と爲れり(藝劍奇賞)

タチバナヤ ソウヂン 橘屋宗乞 茶道を遠州流祖小堀政一に學びて能くす俗稱を長兵衛と云ふ常に政一に近昵して茶事に預ると云ふ其の歿年詳かならず(茶人系傳全集)

タチバナ(カゲ) ヤチマタ 橘千衢「タチバナナチ

タチバナ ヨシコ 橘義子 宇多帝の女御なり參議雅相の子、寛平五年女御と爲る八年從四位上を賜ふ後ち谷文晁及び應擧の畫法を追慕し又明清の遺蹟等を研究して一家の畫風を出す當時其名傳播す又書法は趙子昂又交徵明の風を學びて後ち一格を出す書く所の山水人物花卉鳥獸等皆敏密にして秀潤其妙眞に迫る世人大に之を重んず天保十一年五月二十日歿す年五十六江戸駒込海藏寺に葬る杏所一日四城下において町奉行筒井政憲に逆ふ二人鎗を扣へ共に馬上に在りて語る筒井の從士立原の馬上にあるを見て其の不敬を責めんとす筒井曰く彼は文人なり宜く方外を以て之を待て任ぜらる、政蹟あり十一年從五位下を授けられ伊豫掾介に遷る秩既に滿て新司拘留して遣らず十六年果擢して越前守と爲る元慶中正五位下に進み丹波守に任ぜらる農耕を勸め租稅を輕くす家に稟儲あり戶口繁衍す治當時に最たり然れども性進取に在りて退素を以て自ら守る能はず又性強戀、推屈すること能はず其の佐と雖も未だ嘗て含容せず仁和元年部內の筑摩郡民辛犬甘秋子、怨家坂名井子縄麻呂等の爲めに居宅を燒かる家口八人焚死す秋子太政官に訴ふ使を遣し推問せしむ子縄麻呂等承服す乃ち子縄等の京師に至るを禁めしむ其基故さらに子縄等を縛して更に秋子を捉へ子縄等をして他物を以て秋子を毆傷せしむ秋子冤を訴ふ太政官符を下して秋子を放たしめ其基を讞責して曰く既に敕使を遣して推問辨糺す出入ある如きは國に恒典あり而るに牧宰意に任じて改めて其の事を行ふ吏たるの道豈に此の如くならんやと少監物布勢敏行に詔して之を推問せしむ敏行還り奏す其基詔旨に違ふと是に於て其基を召して刑部省に下す推斷未だ畢へざるに卒す年六十三其基業より清貧家に儲蓄なし中納言在原行平贈するに絹布を以てして殯葬するを得たり其基五國守を歷る每秩罷め歸るに賀權を敢せず子孫に教ふるに身を潔くするを以てす子在公嘗て治國の術を問ふ答て曰く百術あり雖ども一の廉清に如かずと其の操守此の如し(大日本史)

タチハラ キャウシヨ 立原杏所 書畫家なり名は任字は遠卿、杏所は其號、又東軒、玉琤會、香案小史の號あり通稱甚太郎、水戶の人、性畫を好み初め月僊に學ぶ後ち谷文晁及び應擧の畫法を追慕し又明清の遺蹟等を研究して一家の畫風を出す當時其名傳播す又書法は趙子昂交徵明の風を學びて後ち一格を出す書く所の山水人物花卉鳥獸等皆敏密にして秀潤其妙眞に迫る世人大に之を重んず天保十一年五月二十日歿す年五十六江戸駒込海藏寺に葬る杏所一日四城下において町奉行筒井政憲に逆ふ二人鎗を扣へ共に馬上に在りて語る筒井の從士立原の馬上にあるを見て其の不敬を責めんとす筒井曰く彼は文人なり宜く方外を以て之を待て任ぜらる、政蹟あり十一年從五位下を授けられ伊豫掾介に遷る秩既に滿て新司拘留して遣らず十六年果擢して越前守と爲る元慶中正五位下に進み丹波守に任ぜらる農耕を勸め租稅を輕くす家に稟儲あり戶口繁衍す治當時に最たり然れども性進取に在りて退素を以て自ら守る能はず又性強戀、推屈すること能はず其の佐と雖も未だ嘗て含容せず仁和元年部內の筑摩郡民辛犬甘秋子、怨家坂名井子縄麻呂等の爲めに居宅を燒かる家口八人焚死す秋子太政官に訴ふ使を遣し推問せしむ子縄麻呂等承服す乃ち子縄等の京師に至るを禁めしむ其基故さらに子縄等を縛して更に秋子を捉へ子縄等をして他物を以て秋子を毆傷せしむ秋子冤を訴ふ太政官符を下して秋子を放たしめ其基を讞責して曰く既に敕使を遣して推問辨糺す出入ある如きは國に恒典あり而るに牧宰意に任じて改めて其の事を行ふ

タチハラ サン 立原蘋 水戶藩士通稱なり名は萬字は伯時、甚五郎と稱す翠軒又東里と號す、水戶の士、少にして學を好み家貧にして書を買ふ能はず其の父陽溪謂て曰く盛年の時勉めざれば追悔及ぶなし汝ち當さに心を專らにして書を讀むべしと翠軒是に由りて力を綴にして書を讀む得蘋溪の時史館の管庫となる恒に史館學寮へ日本史を校勘するもの

タチハラ スキケン 立原翠軒 水戶藩の儒員なり名は萬字は伯時、甚五郎と稱す翠軒又東里と號す、水戶の士、少にして學を好み家貧にして書を買ふ能はず其の父陽溪謂て曰く盛年の時勉めざれば追悔及ぶなし汝ち當さに心を專らにして書を讀むべしと翠軒是に由りて力を綴にして書を讀む得蘋溪の時史館の管庫となる恒に史館學寮へ日本史を校勘するもの

タチハラ シュンサ 立原春沙「シュンサ」

なきを憂ひ竊かに翠軒に告て曰く吾れ衰へたり能くなすなし汝ち吾が志を繼ぎ謹みて義公の業を擧へよと翠軒後江戸に來り學を餘熊耳に受け唐音を紀德民に學び傍ら飛驒守公に就きて書を修し久保盅齋、柴野栗山、大塚顧亭、伊勢安齋等と親しみ善し學成り水戸に還りて儒員となる始て漢唐の學を講ず水戸古より皆な朱學を奉ず故に總教名越南溪等之れを怒る翠軒一書を贈りて曰く學問に流派なし皆な孔子を學ぶのみ僕が家は喪祭に於て文公家禮に從ふ豈に敢て朱子を排斥せんや但〻伊藤仁齋物徂徠の書を讀むに吾が學を博くせんが爲のみ若し學政に害あらば則ち他職に轉ぜられよ是れ僕の願なりと總教等懌ばずして止む翠軒故に世と合はず淹滯年あり文公學を好むに至りて乃ち擧られて侍讀となる翠軒是に於て首に建議して日本史を校勘して義公の志を遂ぐべきを述ぶ文公之を可とす遂に翠軒史館總裁に累遷す是より勘校數年功を成すと云ふ文公又翠軒をして政事に參預せしむ翠軒慨然として報効を圖り勤規獻替夙夜懈たらず文公亦能く其の言を納る是の時に當りて松平定信幕府の執政たり翠軒上書して天下三大患あるを述ぶ其の一は北夷我蝦夷地を窺ふの漸あること其の二は一向門徒の害あること其の三は何事なるや未だ詳ならず其の後露艦果して漂民幸太夫を送り來り形跡彌〻疑ふべし翠軒乃ち木村謙等を松前に遣はし其の情實を探偵せしむるに松前家の所爲頗る怪むべし因て幕府に上言す幕府遂に蝦夷地の改正を決す其の淵原翠軒に出でたり其の他朝鮮の聘禮を對馬に於て受け國書の往復を廢し以て國家の大費を省きしは亦本と翠軒の發議に係れり其の他白川侯松平定信が大老の次諸老の上に昇進し古賀精里尾藤二州を幕府に薦る皆陰に翠軒の議に出たり人其の卓識を稱す武公始めて國に就くや翠軒既に致仕して家居す武公其の學行あるを以て特に召して論語を講ぜしめ待遇甚だ渥し翠軒平生古書古物を愛し珍寶の者あるを聞けは遠近を厭はず必ず訪問す最も新井白石の書を好み安積澹泊の家に存せし書牘を集めて新安手簡と名く其の他白石遺文の輯あり明治四十年十一月從四位を贈らる（續近世叢語、耆舊得聞、事實文編）

タチハラ　ランケイ　立原蘭溪　初めの名は朝豐、後單に豐と稱す字は子部甚藏と稱す本姓佐久間氏父名は政纘白休翁と號す蘭溪常州大戸村に生る幼にして字を識る遊戲群兒に異なり白休翁之を奇とし本村普岸寺の性天に託して書を讀み字を學ばしむ既にして老師纂を栗崎の佛性寺に視る蘭溪これに從ふ寺立原貞保の廬と接す貞保蘭溪の聰敏にして書を好むを愛し命じて嗣覺山をして弟とし簪はしむ幾何くもなくして覺山病て歿す遂に立てゝ嗣となす蘭溪彰考館の國史生に補せられ後館の藏書を掌る時に子萬稍〻長ず日に課を勸め書を讀ましめ恒に謂て曰く水戸西山公の文獻近來稍々振はず文獻徵するに足らず國史未だ緒に就かず予已に寒蹇志あれども果さず死後の託は汝に在り汝之を勉めよやと而して交道の博からざるを患ひ促がして江戸に入らしむ後鄕に歸り又國史生に補せらる諸生を集め講授するに及び或は謬解杜撰有れば蘭溪勞らに在りて曰く噫夫の人之子を賊ふなかれと義安んぜざるものは諄々啓發し唯詳らかならざるを恐る萬或は書を寫す蘭溪竊かに之を奪ひ自から代りて曰く以て兒讀書の地を爲さん乎と沾々事に就く故を以て家に最も蘭溪の手澤多し明和七年庚寅十二月二十四日歿す年五十八（墓志）

タヂヒ　アガタモリ　多治比縣守　宣化帝の皇子上殖葉の後胤なり上殖葉十市王を生み十市王多治比古王を生む古王初め生れて將に浴せんとす多治比花忽ち湯釜中に浮ぶ因て多治比と稱す子孫遂に氏となす父は島左大臣祖は即ち古王なり縣守學を好みて經史に渉り尤も經略あり文武帝の慶雲の初從五位下に叙せらる和銅中宮內卿に拜せられ尋て從四位下に至る靈龜の初め節刀を賜ひて遣唐押使となり大伴山守藤原宇合等と唐に往く吉備眞備安倍仲麻呂等從ふ其の唐に在るや玄宗帝朝服を賜ふ又た姓を丹墀と稱す蓋し方訓を用ひて其の文を改むるのみ養老二年事を竣へて歸る明年正月副使以下を率ゐ唐服を着て朝見す尋て正四位下に進む是年始て諸國に按察使を置く乃ち縣守武藏守となり相模上野下野三國を管す時に陸奧國奏す蝦夷の寇亂して按察使下毛廣人を殺すと朝廷縣守を征夷將軍に拜し往きて之を征せしむ明年賊を平げて歸へる乃ち中務卿に叙せらる天平の初め從三位に陞り幾ばくもなく民部卿に轉じ參議となる是年又畿內に總管を諸道に鎭撫使を置き縣守を山陽道鎭撫使となす明年中納言に拜せられ山陰道鎭撫使となり尋て正三位に至り九年卒す（大日本史、日本儒林傳）

タヂヒ　イケコ　丹治比池子　淳和帝の宮人なり從五位上門成の女明子內親王を生む（大日本史）

タヂヒ　イケモリ　多治比池守　左大臣島の長子なり持統の朝直廣肆を授けられ文武の朝改て從四位下を授けらる和銅元年民部卿に任ぜられ尋て阿部宿奈麻呂と同く造平城京司長官となり從三位に累進し太宰帥となる靈龜の初め上言す豐後伊豫二國の界は從來戍を置て往還を許さず但し高下尊卑別なかるべからず五位以上差使の往還は禁ずるの限りに非ずとせん又薩摩大隅二國は隼人を貢して已に八年を經る道路遙かに隔たりて去來に便ならず或は父母の老疾なるものあり或は妻子の單貧なるものあり請ふ六年を限て相替らしめん又帥以下は和銅二年六月十七日の符を以て牛を減じて綿を給し來れり驅使丁に乏く諸國官皆辛苦す請ふ綿を停め丁を給し以て存濟を得んと欲すと並に之を許す養老元年善政を褒めて綾絹、絁、綿、布、若干を賜ひ明年中納言に任じ尋て大納言に轉じ正三位に進む神龜の初め封五十戸を增し靈壽杖纏綿を賜ひ從二位に進められ天平二年薨ず使を遣して弔賻せしむ（大日本史）

タヂヒ　イヘヌシ　多治比家主　池守の子なり養老中出羽國司となる奏して曰く蝦夷總て五十二人功勳已に顯れて未だ之を賞せず頷を引て久く天恩を望む依て惟みるに芳餌は以て深淵の魚を繫ぎ重祿は以て忠節の臣を致す今狄は愚闇功勞ありて久く撫慰せずんば恐らくは復た解散せんと狀を具して敍を請ふ敕して賞爵を加へしむ天平中鑄錢長官となる勝寶中帝東院に御し召し見て從四位下を授けらる寶字四年卒す子長野は延曆中參議從三位に至る（大日本史）

タヂヒ　オトマロ　丹治比乙麻呂　家主の第二子なり和歌を善して萬葉作者の一に列す神護元年從五位下に累進す是の年十月帝紀伊國に行幸し乙麻呂を以て御前次第次司官となす（萬葉集作者履歷）

タヂヒ　カドナリ　丹墀門成　父を豐成と曰ひ內藏助たり門成弘仁の初め少判事、大和大掾を歷

て天長三年從五位下を授けられ尋て丹波介と爲る士民彝戾にして嚚と難治と稱す門成性剛直惡むに猛政を以てす鞫事の前笞杖を禁積す數年にして部內大に治る承和中彈正少弼となり刑部大輔に遷り武藏權守に任ぜられ年を逾て眞と爲る所部曠遠にして盜賊充斥す門成職に臨みて久しからず風俗淳に歸し奸猾迹を歛む大和守に遷る豪右を搏擊して廻避する所なし境內治平百姓之を戴く仁壽三年正五位下に叙せられ官に卒す門成は學術なしと雖も吏事に長ず至る所必ず名あり（大日本史）

タヂヒ　クニヒト　多治比國人　和歌を善くす萬葉集中載する所多し天平八年從五位下に叙せられ十年民部少輔に任ぜらる（萬葉集作者履歷）

タヂヒ　シマ　多治比島　上殖葉皇子の曾孫多治比古王の第四子なり多治比古王生るゝの夕浴するに臨みて多治比花釜中に浮ぶ因て瑞と爲し多治比古王と名づけ姓を賜らんことを請ふ乃ち多治比公を賜ふ名を以て姓と爲す其の蕃を存するなり天武の朝島筑紫太宰と爲る公を改めて眞人と賜ふ持統の朝直廣貳より直廣壹に進み封百戸を增し二百戸となす四年正廣參右大臣に昇進し封三百戸を增す數年にして致仕を請ふ輿杖を賜はり資人一百二十人を與へられ文武の朝左大臣と爲る其の高年を優として靈壽杖及び輿を賜ふ大寶元年正二位に叙せられ七月薨ず年七十八詔して三品刑部親王、正三位石上麻呂を遣し第に就て弔賻せしむ（大日本史）

タヂヒ　タカコ　多治比高子　嵯峨帝の妃從五位下氏守の女、嵯峨帝踐祚の初め夫人と爲し一百戸に封ず弘仁元年從三位に進む六年妃と爲す十一年從二位に進む天長三年薨ず年三十九第に就き從一位を贈る（大日本史）

タヂヒ　ツチツクリ　多治比土作　和歌を善くし萬葉作者の一に列す天平十二年從五位下を授けられ兵部少輔となる十五年新羅使來朝す朝廷土作を筑前に遣はし供宮の事を檢校せしむ是の年攝津介となり十八年民部少輔に轉じ尾張守となる寶字中西海道副使となり正五位下に叙せられ文部式部大輔を歷從四位下に叙せらる景雲二年讚岐守となり左京大夫に轉じ治部卿となる左京大夫は故の如し寶龜元年參議に署し從四位上に至り二年病みて卒す（萬葉集作者履歷）

タヂヒ　トヨツグ　多治比豐繼　桓武帝の宮人初め女孺となる長岡、岡成を生む（大日本史）

タヂヒノ　シバガキノミヤニ　アメノシタ　シロシメシシ　スメラミコト　丹比柴籬宮御宇天皇「ハンシヤウテンワウ」

タヂヒ　ヒロタリ　多治比廣足　島の子なり天平中上總守、刑部兵部卿を歷て勝寶元年中納言を拜し二年從三位を授けらる寶字の初め姪犢養、禮麻呂、鷹主、橘奈良麻呂に黨す勅して曰く廣足昏耄諸姪を敎へずして賊徒となす如此の人何ぞ宰輔の任に堪へん宜しく官を辭し第に歸るべしと四年薨ず（大日本史）

タヂヒ　ヒロナリ　多治比廣成　縣守の弟なり和銅中下野守に任ぜらる大伴旅人の隼人を征するや副將軍となりて功あり又迎新羅副將軍となる養老中越前守に遷り能登越中越後按察使を管す天平四年遣唐大使となり五年節刀を授けられ唐に赴く六年將に歸らんとして暴風に遭ひ四船相失す月を踰えて廣成多禰島に漂着し七年京師に歸り節刀を上り正四位上に叙せらる帝騎射を北松林に觀る廣成唐人を率ゐて唐樂新羅樂を奏し槍を弄せしむ又請益秦大麿の問答六卷を獻ず九年參議中納言從三位に昇る十一年薨ず廣成文學を好み詩を善くす頗る兵法に通ぜり初め唐に在る姓を丹墀と稱す子孫因て丹墀の字を用ふ（大日本史、日本儒林傳）

タヂヒベ　キタサト　多治比部北里　和歌を善くするを以て名あり詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

タヂヒベ　クニヒト　丹比部國人　和歌を善くするを以て世に名あり詠歌は載せて萬葉集にあり（萬葉集作者履歷）

タヂヒ　マムネ　多治比眞宗　桓武帝の夫人參議長野の女、葛原、佐味、賀陽、大德の四親王、因幡、安濃の二內親王を生む正三位に進み夫人となる弘仁十四年六月薨ず年五十五淳和帝詔して正二位を贈る葬るに及びて葬司四位二人五位五人六位已下十一人之に任ず（大日本史）

タヂヒ　ミモリ　多治比水守　島の子なり大寶中尾張守となる時に太上天皇將に參河に幸せんとして尾張に至り水守に封一十戸を賜はり河內守に遷さる和銅の初め守となり從四位下に至る政績あり田一十町穀三百斛衣一襲を賜はり入て右京大夫宮內卿に進めらる四年卒す（大日本史）

タヂマ　ニフダウ　但馬入道「アカヰテルカゲ」　※

タヂマノミヤ　但馬宮「アサナリシンワウ」

タヂマモリ　田道間守　父を淸彥と曰ふ實に新羅人天日槍の後にして三宅氏の祖なり垂仁帝の十九年命じて常世國に遣し非時の香菓を求めしむ田道間守海に泛び險を渡りて竟に常世國に至り非時の香菓八竿八縵を得て歸る時に景行帝元年三月なり垂仁帝の崩ずるに會し香菓を山陵に奠りて曰く臣命を天朝に奉じて萬里の波濤を航す夫常世國（今の所謂南洋或は日ふ漢土の燕の地）は神仙秘區世俗の能く到る所に非ず是を以て十年の星霜を徃來に費せり豈に能く波濤を浚いて更に本州に歸るを期せんや幸に陛下の威靈に賴りて僅に還ることを得たり然るに天皇既に崩じて復命することを得ず臣の生命此世に用なしと乃ち山陵を拜し慟哭して絕す聞く者涕泣す帝其の忠誠を哀みて之を伏見の陵側に葬る非時の香菓は今の所謂橘なり（大日本史、日本儒林傳）

タヂミ　クニナガ　多治見國長　美濃の人四郞二郞と稱し藏人たり土岐賴兼の一族なり賴兼と竝びに驍勇を以て著はる後醍醐帝北條高時を誅せんとするに及びて國長賴兼と適〻京師に番直す藤原資賴引て同謀となす賴兼の族賴春も亦た與かる既にして賴春之を妻に告ぐ妻の父は即ち六波羅奉行齋藤利行なり因て大に驚きて之を利行に告ぐ利行之を六波羅北方千葉範貞に告ぐ範貞乃ち兵を率て國長を襲ふ國長會〻酒を被りて臥す倉皇として驚き起つ側らに遊妓あり甲を取りて之を擐かしむ小笠原通弘適〻其の家に在り出て敵衆を望みて國長に告げて曰く謀已に露はる宜く死を決すべしと即ち弓矢を執り門樓に上りて射て二十四人を殪し刀を銜みて樓より投じて死す國長間に乘じて其の兵二十餘人と門を闢して敵を待つ伊藤秋澄父子四人門扉の少隙より匍匐して入る則ち擊ちて之を殺す衆懼れ

て敢て逼まらず國長門を開て大に罵りて鬪を挑む敵衆怒りて爭ひ進む國長擊ちて之を卻く敵番陣して戰ふ辰より午に至りて殺傷二百餘人佐々木時信民會を毀ちて屋後より入る國長支ふ可らざるを知りて其の兵甘二人と交刺して死す（大日本史）

タツ　龍「オホヲカタツ」

タツキ　田鶴樹　大阪の俳人なり牛時菴淡々の門人氏は淺見江雪菴、元呼寮、蔓尊者、硯魚夫、姫介曳、龍橋子、蝸鼠居士等の號あり法橋に叙す（俳諧人物便覽）

タツキ　カンザウ　龍木勘藏　根附師なり大阪天滿に住し其の業を以て世に現はると云ふ（裝劍奇賞）

タツキ　マタエモン　龍木又右衛門　根附師なり紀州に住す又右其業を以て大に世に鳴る因りて根附の巧妙なるものを見れば之を紀州の又右衛門の製の如しと云ふ（裝劍奇賞）

タツ　ギョクエン　龍玉淵　儒者也名は世華字は子春、小字は一郎平安の人草廬の子彥根侯の儒官たり文政四年二月歿す年七十一（鑒定便覽）

タツケ　エイスケ　田付榮助　京師の蒔繪師なり印籠蒔繪を善くし殊に獸類の圖の蒔繪に長ぜり嘗て島津家の囑托をもて一印籠に猿一千頭を蒔繪ぜり歿年詳ならず（京都美術協會雜誌）

タツケ　カゲズミ　田付景澄　田付流砲術の祖なり後宗鐵と號す德川家康に仕ふ子兵庫助景治、孫四郎兵衛方圓、曾孫四郎兵衛直平相襲て名あり

タツケ　シロベエ　田付四郎兵衛　砲術家なり德川幕府の臣にして世々四郎兵衛といひ鐵砲方と稱し與力同心の屬僚を支配せり（盧心筆記）

タツケ　セウ　田付せう　孝則の娘なり蒔繪を善くす（裝劍奇賞、蒔繪師傳）

タツケ　タカノリ　田付孝則　江戸の蒔繪師なり狩野家の畫法を善くす文化頃の人なり（裝劍奇賞、蒔繪師傳）

タツケ　タカマス　田付隆益　有名の蒔繪師田付氏世々の中の人なるべし伊達氏所藏人物蒔繪の印籠に此の銘あり（漆器圖錄、蒔繪師傳）

タツケ　ヒサヒデ　田付壽秀　京師の人俗稱詳ならず東溪と號し時繪の名工にして殊に印籠を善くせり性淡逸世俗なし貧窶落魄と空けれども意ままさるが如し時に金錢を得れば鬻故業を納れて曰く家業を脫したり醫道の爲めには却て幸なりと和學者加茂季鷹と交はる最深くして狂歌を善くせり歿年一見せし事を言はず常に自ら稱して終身未だ嘗て師匠なしと言ふ著はす所毛詩證、論語證、名詮、典詮、貫良志、日本詩訓、反訓疏、唐詩材、辭略、伏水志、雅樂、吳竹齋談、海人藻草、南遊草、龍氏詩乘、草廬詩集、同文集、同尺牘集、同和歌集、同和文集、生駒山人傳、大塔王傳、節儉論、大和河内道之記、毛詩微、論語闕、峰のまさかき、木ごとの花、帝京編、金閨詩集等あり二子あり學ぐ長は世華字は子春、業を繼て文學となる（近世叢話、先哲叢談、近代名家著述目錄）

タツザネ　龍實　備前長船の人古刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

タツタ　カメサブラウ　立田龜三郎　陸軍步兵少尉なり廣島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て幡重兵第十二大隊補充隊附として從軍中病に罹り三十七年十一月廿八日自宅に於て病死す

タツタ　キクマル　立田菊丸　前田利家の小姓にして男力の少年なり末森籠詰の時富田六右衛門先づ鎗を入る菊丸富田に先んぜられしを怒り敵群の中に馳入り五人と戰て三人を殺す會ゝ股を傷り步する能はず乃ち從者に扶けられて退く時に年十六なり（本朝武功正傳）

タツチモンキン　達智門院　伊勢最後の齋宮なり名は榮子後宇多帝の長女母は談天門院乾元三年内親王となり德治元年伊勢の齋宮となる同三年後二條帝の崩ずるに依て罷む文保三年三月追尊して皇后となる曾契沖の戰を信じ傍ら武學を好み深く其の奧旨を究む是の時河内に孔世傑といふものあり草廬相見て莫逆の友たり腕を扼し膊を搏て互に肺腑を示めし詩賦相唱和して日月絕えず年三十餘出でゝ彥根の文學となる晚年致仕して平安に歸り門を杜ぢ客を謝して專ら著述を事とす是より先き人の需に應じて文を作り字を書する毎に必ず謝儀の多少を定めて後に稿を起す若し速に謝儀を贈らざれば輕諾して果たさず是を以て人之を少とす是に至りて深く其の浮名を慚ぢ文を請ひ書を求むるものありと雖も辭して應ぜず寛政四年二月二日歿す年七十九草廬嘗て宇明霞に學ぶ好みて唐明詩家の集を讀み意を詩歌に留む明霞其の經義を研精ぜずして徒らに浮靡の詩文を事とするを以て其の人となりを海んじ之れを拒絕す草廬大に憤りて終身未だ嘗て明霞を一見せし事を言はず常に自ら稱して學常師なしと言ふ著はす所毛詩證、論語證、名詮、典詮、貫良志、日本詩訓、反訓疏、唐詩材、辭略、伏水志、雅樂、吳竹齋談、海人藻草、南遊草、龍氏詩乘、草廬詩集、同文集、同尺牘集、同和歌集、同和文集、生駒山人傳、大塔王傳、節儉論、大和河内道之記、毛詩微、論語闕、峰のまさかき、木ごとの花、帝京編、金閨詩集等あり二子あり學ぐ長は世華字は子春、業を繼て文學となる（近世叢話、先哲叢談、近代名家著述目錄）

タツザネ　龍實　備前長船の人古刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

タツタ　カメサブラウ　立田龜三郎　陸軍步兵少尉なり廣島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て幡重兵第十二大隊補充隊附として從軍中病に罹り三十七年十一月廿八日自宅に於て病死す

タツタ　キクマル　立田菊丸　前田利家の小姓にして男力の少年なり末森籠詰の時富田六右衛門先づ鎗を入る菊丸富田に先んぜられしを怒り敵群の中に馳入り五人と戰て三人を殺す會ゝ股を傷り步する能はず乃ち從者に扶けられて退く時に年十六なり（本朝武功正傳）

タツチモンキン　達智門院　伊勢最後の齋宮なり名は榮子後宇多帝の長女母は談天門院乾元三年内親王となり德治元年伊勢の齋宮となる同三年後二條帝の崩ずるに依て罷む文保三年三月追尊して皇后となる曾契沖の戰を信じ傍ら武學を好み深く其の奧旨を究む是の時河内に孔世傑といふものあり草廬相見て莫逆の友たり腕を扼し膊を搏て互に肺腑を示めし詩賦相唱和して日月絕えず年三十餘出でゝ彥根の文學となる晚年致仕して平安に歸り門を杜ぢ客を謝して專ら著述を事とす是より先き人の需に應じて文を作り字を

び歿年詳かならず（續本朝畸史）

タツノ　シャウシャ　龍野尙舍　和學者なり名は熙近通稱傳右衛門道且居士と號す後生白と號す伊勢山田の人神佛幽玄の理を得て頗りに唱道す神國決疑篇、神社啓蒙の著あり元祿六年八月二日歿す年七十八なり（鑒定便覽、諸家著述目錄）

タツノ　セウシャウ　龍野少將「キノシタチャウセウ」

タツノヤ　田鶴廼舍「ムラタハルカド、イシカハマサヤス」

タツ　ヒロチカ　龍熙近「タツノシャウシャ」

タツミ　ジヘエ　辰巳次兵衛　蒔繪師なり名は政明佐々木氏所藏獸獵蒔繪の印籠に此の銘あり（漆器圖錄、蒔繪師傳）

タツミ　ナホブミ　立見尙文　陸軍大將なり蒼桑名藩士町田靜臥の三男也弘化二年七月十九日江戸八丁堀松平越中守邸内に生る幼名を鑑三郎と稱す後叔父立見楊兵衛の養子となり家を嗣ぐ幼にして藩の學に入りて專ら文武の兩道を修め殊に風傳流鎗術に練達せり後幕府の聖堂に入りて研鑽する所多し藩主特に選拔して外交役人と爲し京都に於て藩の外交事務を執らしめたり是より京都に在りて諸藩の名士に交り薩の四郷吉之助大久保市藏長の桂小五郎肥後の池邊吉十郎等と往來し文久元治の間國事に盡瘁したり後四郷等と意見を異にし幕府を助けて父祖多年の恩顧に酬ひんことを志とせり尋いて幕府の陸軍に投ず佛國人に就て練兵操銃の術を學び佛式練習步兵第三聯隊の士官となり吳服橋の兵營に起臥す蕩々なく維新の事あり官軍江戸に迫り將軍慶喜恭順の意を表して上野に謹慎し江戸城は官軍の占有する所となりしかば尙文等大に之を奮怒し營内有志の步兵を集めて雷神隊を組織し宇都宮に進りて屬ゝ官軍を禦まぜり後越後に退き高田と柏崎との中間なる米山峠鯨波に陣を占め以て官軍に抗ぜり後會津に到りしが順逆の理强弱の數敵す可からざるを知り終に官軍に降伏す命により桑名藩に歸り謹慎したり後釋されて再たび東京に來り軍人たらんと欲して當時陸軍教授たる舊幕旗下岡田豐前の門に入り專心兵學を修む然れども當時薩長の人多く陸軍の要職を占め舊幕臣等立身難きを嘗り三重縣の屬官となり明治九年一級判事補となれり西南の役起るや官軍屢ゝ利あらず義勇兵を募り以て援軍と爲さんとす而してその應募の兵皆血氣の壯者にして之を統率す可き將校あらず陸軍少將尙文に勸めて其大隊長たらしめ直ちに陸軍少佐に任じ新選旅團參謀副長として戰地に赴きたり然るに戰局は既に半ばを過ぎ殆ど會戰の機なかりしといふ十七年中佐に進み步兵第一聯隊長に補せらる廿年大佐となり二十年第三師團參謀長に補せられ二十七年少將となり二十旅團長として日清の役に從ひ平壤鳴綠江鳳凰城より大孤山金州等に轉戰して殊勳あり戰後功三級に叙し金鵄勳章を賜はり男爵を授け特に華族に列せらる三十年臺灣總督府軍務局長となり三十一年中將に任じ八師團長（寄森）に補せらる三十七年日露戰役起るや同年十月第八師團を率ゐて出征し滯陣數月三十八年一月三十日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

タツイシ　スケヨ　立石資雄　陸軍砲兵中尉なり熊本縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て野戰砲兵第十二聯隊附として從軍中卅七年十月十二日清國盛京省土門子嶺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タツイシ　セウリン　立石紹林　茶人なり利休と同時の人にして師門及び歿年等詳かならず（茶人系傳全集）

タツイハ　ヨシヲ　立岩義雄　山形縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し一等機關士を以て陸軍借上船常陸丸に乘組み航海中三十七年六月十五日玄海灘に於て敵艦の襲擊を受け戰死す

タツイハツ　セイハツ　立家正發　陸軍工兵中尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ第三師團後備工兵第一中隊附として從軍中三十八年一月一日旅順要塞盤龍山東麓砲臺前面丑高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タツ　カハウ　館霞舫　畫家なり名は儁字は昆陽後藏と稱す號松顧書人柳灣の男なり嘉永六年正月二十六日歿す（續墓所一覽）

タテカハ　エンバ　立川馮馬　戲作者なり刺交したるを以て名あり

タツワウ　龍王　薩摩波平の刀匠にして文保年間の人或は云助近の門人にして嘉祿寛喜年間の人又云助近の子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タツヲウ　達翁「クワツシウタツヲウ」

タツヲカ　シヨウスケ　龍岡昇輔　陸軍步兵中尉なり鹿兒島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て隊備役より召集せられ後備步兵第五十五聯隊附として從軍中三十八年三月九日清國盛京省田義屯附近戰鬪の際負傷同十四日平羅堡戰地定立病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タツヲカ　ロクラウ　龍岡六郎　陸軍步兵少佐なり宮崎縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第七師團步兵第二十七聯隊附として從軍中卅七年十一月三十日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

タツイシ　スケヨ　立石資雄　陸軍砲兵中尉なり熊本縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て野戰砲兵第十二聯隊附として從軍中卅七年十月十二日清國盛京省土門子嶺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タツイシ　セウリン　立石紹林　茶人なり利休と同時の人にして師門及び歿年等詳かならず（茶人系傳全集）

タテイハ　ヨシヲ　立岩義雄　山形縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し一等機關士を以て陸軍借上船常陸丸に乘組み航海中三十七年六月十五日玄海灘に於て敵艦の襲擊を受け戰死す

タテイハツ　セイハツ　立家正發　陸軍工兵中尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ第三師團後備工兵第一中隊附として從軍中三十八年一月一日旅順要塞盤龍山東麓砲臺前面丑高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タテ　カハウ　館霞舫　畫家なり名は儁字は昆陽後藏と稱す號松顧書人柳灣の男なり嘉永六年正月二十六日歿す（續墓所一覽）

タテカハ　エンバ　立川馮馬　戲作者なり

江戸本所立川町に住し烏亭又た淡洲樓と號す元和泉屋和助と云ひ大工の棟梁なり本姓は中村名は英觀桃栗山人又柿發齋と號す又野見てうなこん墨金と號す淡洲樓の號あるは五世市川團十郎と兄弟の約を結びて其號を讓らるゝに因る狂歌を善くし兼れて院本を好む著す所に芝居年代記十二卷あり文化八年の著に係る文政五年六月二日歿す年七十一又曰く八十歳（聲曲類纂）

タテカハ　エンバ（イエンバ）　立川馬（二世）

タテカハ　コヘエ　立川小兵衛　木工なり雛形畵の名手にして大和絵様集を著はす文化頃の人（大和絵様集）

ダテ　クニシゲ　伊達邦成　舊仙臺藩の支族亘理の城主にして通稱藤五郎天保十二年岩手山に生る伊達邦直の弟にして義臨の後を襲ぎ亘理三萬石を領す勤王の志篤く戊辰の役宗藩の反正歸順したるは邦成の周旋與りて力あり亂平ぎて後宗藩の後見を命ぜらるに嘗て封の結果家臣を養ふ能はず依て明治二年政府に假夷地開拓の議あり之と聞き家宰田村顕允と謀り主從團結し兵農相兼ね開拓に從事し北方の警備を爲さんと欲し舊臣千三百六十二戸八千人を移さんことを請願す八月自費を以て漸次移住し開拓の實効を擧ぐべき旨指令あり膳振國有珠郡を以て其支配地と定めらる是に於て田村顕允を以て開拓執事を爲し開拓一切の事を擔當せしめ且つ自ら舊臣數人を率ゐて其地に到り山川の形勢土壤の肥瘠等を檢察す十二月晦日亘理の大雄寺に家臣を集め祖先の廟前に於て誓て曰く今度北海道移住開拓を請願せしは勤王の實効を奏し且つ各自をして安堵せしむるにあり然りと雖も兵後家産蕩盡餘貧なき身を以て大業を爲すは容易にあらず祖先以來傳ふる所の寶器一切賣却して其費に當てん各自も亦婦女の裙釵は勿論寶器なも賣却し分限に應じ多少の金穀を出し移住の上は萬難を忍びて成効を期すべし開拓の業たる歳月の久しきに渉れば一家相依るにあらざれば難散を免れ難し邦成と共に彼地に航せんとする者は一家相携へて同盟に加はるべし大業一度蹉跌せば腐を嚙むとも及ばず各自邦成の誠意を了し勉勵あらんことを望む之を衆心大に奮ひ一に命是れ聽はんことを願へり爾來舊臣の團體を移住せしむること二回に及びたるも蹉事に慣れざる開墾の時期を過れるとに依り禾穀熟せず横濱より南京米二百五十石を買入れて越年の料と爲す四年顕允邦成に告げて曰く事業容易にあらず荏苒歳月を移さば恐くは衆心離散中途にして廢せん請ふ移住して家山を顧るの念を斷つべし若し事成らざれば君臣齊しく枕を斃べて屍を究北の荒地に曝さんのみ亦可ならずやと邦成之を嘉納し亘理に歸り自己の家族を始め男女七百ゐ二月七日を以て出發移住す之を第三回年五月邦成其管轄せる土地人民を擧げて悉く爾後尚ほ移民の爲めに鞠躬盡力ことなし九年五月郡民を會し協議して一社を結び永年社と稱し開拓使より曾て賜りたる扶助米金の殿餘及び本年賜はる所の開墾料の一半を併せて其資本と爲し社中に貸借流用し利殖の途を開き且つ疾病窮乏相救ふの法を設く九月太政大臣三條實美北海道及顕允を召し褒狀及び和歌を賜ふ其歌に曰く「有珠の山中一十年二月邦成開拓使出仕を懲む四肩の役の出征あり其隊備兵を募る邦成は開拓使御用掛に任じ隊備兵取締として上京を命ぜられしに舊臣の其麾下に屬して從軍せんとするも三百餘名邦成其田園の荒敗に歸せんことを慮れ内願の憂なきもの採り其他は說諭して留らしむ千三百三十八人來航し關内郷里に在る舊臣八十六戸男女三百五十八人を採り出征の稱府等に住居すゑれ第八回の移住にして舊臣團體移住の最後と爲す十四年二月邦成陸軍少尉に任ず五月移住以來の功績を以て從六位に叙せらる六月内國勤業博覽會に於て名譽一等賞牌を受く十五年二月開拓使廢止後は全く公務に關せずと雖も家族を率ゐ製麻養蚕植樹等を勉め節儉自ら處る廿五年勳四等に叙し十月勳功に依り男爵を授けられ華族に列し從五位に叙せらる二十八年七月内閣賞牌を賜はり二十九年一月清國盛京省首山堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ダテ　シュンキチ　館淳吉　陸軍少尉なり三重縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第三師團歩兵第三聯隊附として從軍中同年八月三十三日清國盛京省首山堡附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ダテ　シュンザン　伊達春山　舊宇和島藩主なり名は宗紀春山は其號なり寛政二年九月十六日生る文化九年十二月十六日從四位下大膳大夫に叙任す以後次第に位階進み明治十六年十二月九日九十以上の高齢に付き藤紋三重御盃一組御紬一匹酒肴料金五十圓下賜せらる同廿二年十一月廿五日特旨を以て正二位に叙せらる此月腦毒症に罹り遂に逝く

ダテ　ダウサク　伊達道作　機部派の茶人なり佐久間直勝に學びて茶道を能くす京師に住し黒齋奥守に任ず見秀宗庶長なるに由て父の封を繼ぎ宗家督となる慶長十六年十二月秀忠の前に元服して諱の字を以て若し女子ならば長子忠宗に賜はんとを兼て懇請す家康之を許す然るに其女年四歳にして早世すことなりて秀忠池田左衛門輝政の女を養ひ土井大炊頭利勝酒井備後守忠利其奥に添て忠宗の第へ賜はる即ち光宗の母なり元和二年十二月侍從に任じ六年江戸城大手門の石垣を築く此の時大俱利伽羅廣光作の刀を賜ふ七年忠宗江戸の第に災ある時に銀四千六百五十枚を賜ふ九年秀忠家光の上洛に供奉し參内す禁裏より芭蕉布の御紋物を賜ふ寛永三年上洛の時も供奉し參内し少將に任ぜらる此年禁裏より寮の御馬を賜ふ十年家光に從ひて上洛して泰山の安きを得たり既にして綱村長じ精勵治を圖り仙洞より百備前守作の太刀を賜ふ十五年去年領地洪水の事上聞に達し銀子十五萬六千三百兩を拜借す十六年四邦成資性篤實にして私なく堅忍にして艱苦に堪え寛容以て人に接し精勵以て事に當り又能く人を知り之に任じて疑はず其學生の功業は北門開拓に在りて明治二年起業の初より五年開拓使引渡に至るまで費す所金三萬六百六十一圓米二千九百四十石其間艱難苦境に陷ると雖も從容として困苦の色を見はさず尚ほ纖々舊臣を移し之を撫育統轄して衆心を維ぎ以て拓殖の功を奏せり

ダテ　クニナホ　伊達邦直　舊仙臺藩主の一門にして岩出山の塞主たり明治戊辰の鎮定後北海道開拓の廟議ありと聞き舊臣と共に移住して開拓の事業に從ひ以て義功を奏せんと欲し親族伊具亘理の塞主たりし從六位伊達邦成（贈振國有珠郡に在り）と相謀り明治二年九月書を上りて其の意を陳ぜしに朝廷之れを嘉納し石狩國札幌空知二郡の支配を命ぜらる因て翌明治三年二月舊臣六七名を隨へて北海道に渡航し支配地の分割を受く同年三月十日男女六十一名を率ゐて舊領岩出山を發し四月四日を以て着し水を伐り廬を結び從來衆を勵まし相扶け相憐み拮据營若干の地を拓く同年九月復び舊領に歸り舊臣百八十名を移住せしめたり此が爲めに其の費したる金額殆ど二萬圓の多きに及び特に其辛苦艱難は誠に言ふに忍びず十一年十一月當時の開拓長官黒田清隆は邦直が札幌に營し當則村移住以來幾多の艱難を經て移民を鼓舞し始終開拓に從事せしめ擧村産業を得るに至らしめたるを賞し金十五圓を賜ふ十二年二月又五十月二百五十餘名を移す十四年二月邦直准陸軍少尉に任じ開拓使七等屬に兼任せらる同年五月其功績著名なる賞し特典を以て從六位に叙せらる同年七月擧駕北海道に幸し邦直を札幌行在所に召し謁見を賜ふ此の如く邦直は力を北海道に盡し移住以來二十餘年間地を開けるもの殆んど一千町餘、人を移す三千餘口の多きに上り其北海道に盡せる功績極めて大なりしが明治廿四年一月十二日病みて歿す

タテ　ゲンリウ　館玄龍　醫家なり名は成宰字は君慶北洋と號す越中射水郡の人、幼にして聰敏宰甫めて十四長沙氏の道を富山大野玄格に學び嶄然頭角を見はす十一月上國に遊び益々其道を弘めんと欲す叔父祝髮して高野山に居る者あり本覺と曰ふ紀の醫員

華岡氏と善し其門に遊ぶを勤む玄龍大に喜び其青を介して贄を華岡氏に執る一見内塾に進め眷顧尤も渥し日に其の内外合一活物究理の說を聞き斷割剝刮洗浣縫合の術を見退て思ひ進て質し瓊勉淬勵寢食を忘る華岡氏毎に稱して曰く予を起す者は北洋子なりと居ること八年盡く其祕奥を得辭して京師に遊び諸名家を歷訪し專ら内科を講ず東江戸に遊び三河坊に醫居す治を請ふもの蟻聚或は厚禮之を聘す辭して就かず年三十養父芸陵の病を聞て歸り意を決して復出でず治を請ふもの日に衆し乃ち倍々其道を精覈し晝は之を治術に施し夜は乃ち諸書に求め凡そ岐黄以下歷代の書及び西洋諸說醫事に關するもの涉獵遺すなし其の手術を施す亦極めて敏速なり晩年聲譽大に起る沈痾奇疾衆醫の手を束るもの皆境を踏て其門に輻湊す北人日を合せ以て稱して曰く北洋先生は今の華陀なりと安政六年十一月十日歿す年六十五玄龍性謙にして慈祥未だ嘗て才學を以て自ら衒はず人の患難に赴く己れ之あるが如し貧人病む歟も藥劑を惠み或は井て衣食を給す鄉人之を仰ぐ父母の如し著す所傷科髓、内科髓、儒醫論活義、乳岩秘訣、蒋菲醫談、北洋漫筆あり（墓碑銘）

ダテ　ジトク　伊達自得　紀州の藩士なり年十二家を承ぎ讀書敏捷を以て稱せらる親母常に誡て曰く男子當に天下の士たるべし唯一藩に名あるのみ如きは吾が汝に望む所にあらずと自得感奮勵精遂に藩主の知遇を受け果官勘定奉行となる既にして直言以て當事者に忤ひ職を褫はれ國老安藤氏の邑田邊城に禁錮せらる藩律に幽囚中佛典の外書籍の給を許さず自得乃ち一切經を借て誦讀四五年略ゝ其意に通ず藩主後冤を覺り禁を解き祿を給す既にして京師に遊び相國寺の本光師に參し造詣益深し自得少時詩を嗜む既にして歎じて曰く詩は他邦の言豈能く性情の眞を發するを得んと乃ち本居大平に從て和歌を學び遂に名を爲す三條實美嘗て倭歌宿老の四大字を書して贈る自得常に曰く凡我邦の事物其上古に防つて今日に行はるゝ者唯和歌を然りとす願くは益々之を無窮に傳へん若し夫妙理言外に存するは禪より多きは無し因て禪旨に倭歌を寓し自ら倭歌禪と號す明治十年五月廿八日病を以て歿す長子宗興天王寺岬夕陽岡に葬る遺著大勢三轉考餘自歸あり世に行はる（禪林僧寶傳）

ダテ　シンイチ　伊達新一　陸軍少尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團歩兵第三聯隊附として從軍中廿八年三月九日清國盛京省首山堡附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ダテ　キチ　館淳吉　陸軍少尉なり三重縣出身にして明治三十七年日露戰役起るや第三師團歩兵第三聯隊附として從軍中同年八月三十三日清國盛京省首山堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ダテ　シュンザン　伊達春山　舊宇和島藩主なり名は宗紀春山は其號なり寛政二年九月十六日生る文化九年十二月十六日從四位下大膳大夫に叙任す以後次第に位階進み明治十六年十二月九日九十以上の高齢に付き藤紋三重御盃一組御紬一匹酒肴料金五十圓下賜せらる同廿二年十一月廿五日特旨を以て正二位に叙せらる此月腦毒症に罹り遂に逝く

ダテ　ダウサク　伊達道作　機部派の茶人なり佐久間直勝に學びて茶道を能くす京師に住し黒齋奥守に任ず見秀宗庶長なるに由て父の封を繼ぎ宗家督となる慶長十六年十二月秀忠の前に元服して諱の字を以て若し女子ならば長子忠宗に賜はんとを兼て懇請す家康之を許す然るに其女年四歳にして早世すことなりて秀忠池田左衛門輝政の女を養ひ土井大炊頭利勝酒井備後守忠利其奥に添て忠宗の第へ賜はる即ち光宗の母なり元和二年十二月侍從に任じ六年江戸城大手門の石垣を築く此の時大俱利伽羅廣光作の刀を賜ふ七年忠宗江戸の第に災ある時に銀四千六百五十枚を賜ふ九年秀忠家光の上洛に供奉し參内す禁裏より芭蕉布の御紋物を賜ふ寛永三年上洛の時も供奉し參内し少將に任ぜらる此年禁裏より寮の御馬を賜ふ十年家光に從ひて上洛して泰山の安きを得たり既にして綱村長じ精勵治を圖り仙洞より百備前守作の太刀を賜ふ十五年去年領地洪水の事上聞に達し銀子十五萬六千三百兩を拜借す十六年四月陸奥守に改む明暦四年薨ず義山と謚す時に來國光の刀を賜はる忠宗も亦真宗の刀を獻ず二子あり長は光宗次は綱宗（諸士傳略）

ダテ　タツサブラウ　館辰三郎　海軍少尉なり群馬縣出身にして明治廿七年十月高雄乘組以來常に嚴寒を冒し公務のため健康に有害なるを知るも願みる遑なく遂に之が爲め病を起し廿八年八月廿九日東京に於て死去す

ダテ　チカタダ　楯親忠　楓井幸親の子、六郎と稱す木曾義仲四天王の一なり義仲に從ひて屢ゝ戰功を樹つ幸親と俱に六條河原に戰死す（大日本史）

ダテ　ツナムネ　伊達綱宗　仙臺の城主たり忠宗の第二子美作守と稱す明暦四年（大槻氏曰く萬治元年）家を繼ぎ陸奥守と稱す萬治三年三月將軍に謁す將軍是歳を以て仙臺藩に命じ江戸筋遠橋より牛籠土橋に至るの濠を穿ち虜めしめ遭運に便せんとす綱宗事を嘗て江戸に在り此の際芳原に遊び妓高尾に狎る政伊達宗勝權を專にせんと欲し族宗輔等好侯の徒を挑びて綱宗其衛中に在るを察ぜず微行虚夕な荒淫益々加はり社稷將に危からんとす宗勝宗輔其計の成れるを喜び書を在藩の諸老に贈り君の失德を列擧して之に告ぐ諸老親を得て大に驚き相議して曰く江戸に赴き速に之を宜しきに處すること如かずと是を以て忠鵬と相謀られたる伊達安藝宗重、伊達安房成房、片倉小十郎景家、相蓮署して綱宗の爲めに老を幕府に請ふ同年七月十八日終に蟄居せらる綱宗年二十一蟄居の間藏に刀劍を鍛ふ其作陸奥守綱宗江戸品川に於て是を作るの銘あり甕ずる年七十二（大槻博士談）

ダテ　ツナムラ　伊達綱村　綱宗の子なり小字は龜千代丸また總次郎と稱す初め綱基後綱村と改む二歳にして嗣立し伊達兵部宗勝田村右京亮幕命に由て國事を視る、兵部叔父の親を以て纂奪の志あり原田甲斐宗輔亦其奸を助け事將に測られざらんとす然るに伊達安藝以下忠義の士あり身を寨て之に當り國家始めて泰山の安きを得たり既にして綱村長じ精勵治を圖り儒術を賞び佛法を重んじ奇才奥能の士を召す曾嚴牛月

畔等設も信愛せられ大年万壽の諸巨刹を開き文武諸藝の道場を起し大島遊佐、田邊の諸儒および平瘊、松林等の諸武夫みな信親せらる又神社佛閣を修補し、舊跡名區を探討せしめ且諸儒に命じて先世の遺範典章を集錄せしめ力めて其保存をはかる鶴岡八幡を移し、鹽竈神社を修造しまた生母淨眼院曾て湯仰する所の釋迦像を城東鹿蹋が岡に安置してその冥福を祈りまた傍近に櫻樹數百株を植ゑ鬪馬場射的場を設け衆庶の遊觀を縱にしまた城後に別墅を營み梅樹を栽ゑ樂壽園を開きて遊息の所となす名取郡茂ケ崎は府下要衝の地とす綱村甚に巨刹を建つ兩足山大年寺是なり其七堂の構造莊嚴を極め儼然一堅城の勢あり是を以て佛に侈するの誹あり何ぞ知らんその佛刹たるものは異日の城堡たらんことを後退隱して江戸麻布の邸にあり世に呼て麻布老公といふ從四位下左近衛少將兼陸奥守より從四位上中將に至る退老の後上總介と稱し東門と號す享保四年六月二十日卒す年六十一背山と諡し大年寺に葬る猪苗代兼都法橋に從ひ連歌俳諧を善くす（仙臺史傳）

タテ　テンライ　舘天籟　秋田藩士にして一に海菴と號す秋田大館に生る年十九江戸に出て贄を山本北山に贄り太田錦城朝川善菴と俱に門下の三才と稱せらる詩文は其最も長ずる所なり菊地五山嘗て其詩を品して曰く清婉楊陸に出入す云々と後室を携て桐生に赴き山中に棲遲し專ら子弟を薫陶し又詩社を督せり其配も亦史傳に通じ傍ら木道を能せり要名は雲章北山の長女なり

タテ　テルムネ　伊達輝宗　左京大夫と稱す天正年間羽州に兵を興して伊達信夫の兩郡を攻め取り伊達に城を築き其勢に乘じて二本松の城を攻む城主畠山左京大夫義纖奮勇にして能く兵を用ふ輝宗拔くこと能はず和を結んで退く後ち輝宗義纖の從時に輝宗の郎等九寸五分の小刀を鵜ぐ者あり義纖の從者其何に用ふるを問ふ小者戲れて二本松殿の首を斬る爲めと答ふ從者驚きて密かに義纖に告ぐ義纖急に輝宗を脇挾んで歸城せんとす輝宗郎等主の彼が手にある刀を以て如何ともする能はず輝宗郎等に命じて曰く我と共に義纖を射よと乃ち共に死す天正十二年某月四日なり輝宗の嫡子正宗此變を聞くや即時百餘人を帥ゐて奥州に入り兵千五百人を募りて二本松を攻む義纖の庶子少にして抗する能はず城を擲げて正宗に降る是れより伊達氏の軍威日に振ふ時に正宗十八歳なり（約皮錄）

タテ　ナリザネ　伊達成實　小字は藤五郎、安房と稱す兵部大輔家元の子なり母は伊達氏、鹽の女、人と爲り英明果毅にして頗る大略あり一時號して男武無雙と稱す初め天正十三年大内定綱の始めて叛するや伊達正宗會津を伐ち以て其の恃む所を奪はんと欲し平田某をして某名部下柴野彈正を招き降さしめ自ら出で丶檜原に陣す平田某叛して會津に告ぐ彈正自ら支ふると能はず遂に出で丶走る成實方に二本松に在り來りて正宗に謁す正宗其の故をつぐ成實日く我臣羽田實景猪苗代盛國の臣石部下總と皆あり是れ以て盛國を招く可しと正宗實景を召して盛國を招き降さしむ盛國之に從ふ而して子盛胤異議あるを以て止む成實正宗に從ふ而して子盛胤異議あるを以て止む成實正宗に戰ふ伊達氏成實をして山王山下に陣せしむ會津勢尾熊因幡數百人を率ひ來りて山下の壕を填む成實銃を善くする者に命じて擊ちて之れを却く片倉景綱命を奉じて岩城に往く歸るに及びて成實景綱を見て岩城の狀を問ふ景綱曰く大越紀伊田村に叛して岩城に倚る則ち明春岩城の田村に事あるや必せりと成實曰く先んずれば人を制す何ぞ田村の城主片平重綱を招て我より岩城を制せざるやと景綱これを伊達正宗に告げ遂にその計に從ふ重綱降り來る岩城の城主岩城常隆果して怒りて田村の諸城を攻む正宗軍を出して阿子島高玉の諸地を攻めて之れを取り成實をして田村を守らしむ既にして成實兵を引て猪苗代に至り某名義廣と招上に戰ひて大に之を破る義廣自ら會津に保つこと能はざるを知り乃ち城を棄てゝ去る伊達氏即ち若松に入り成實景綱をして田村に之かしむ是より先き佐竹岩城の諸將田村を攻む成實來り援ふに及びて諸將乃ち去る十月伊達氏須賀川を攻む城突し火を縱ちて之に乘ず城乃ち陷る十八年豐臣大閤小田原に至る諸將伊達氏に往き謁せんとを勸む成實獨り奮ひて曰く大閤の東下は客冬檄を移して告げらる今にして往く亦已に晚し往きて辱しめを受けんよりは若かず坐ながら之を迎へて衛を天下に爭はんには我甲百萬を帶びて地利に據る何ぞ彼れ烏合の衆を恐れん二百餘級七月伊達氏成實の功を賞して二本松を賜ふ時に大内定綱會津に在りて頗る志を得ず成實に因て降を謀ふ伊達氏之を許す十六年定綱成實の領邑苗代田を襲ひて本内某を殺し既にして使を遣はして曰く我會津の爲めに疑はる故に苗代田を襲ひ將に其の疑ひを解かんとすと成實心に頗る怒る而れども前請の我に由る意ふの故に已むを得ず復た之を正宗に告ぐ正宗命じて曰く定綱弟重綱を誘ひ來らば則ち以て之を許さん否らざれば則ち其罪降を容れずと定綱之に從ふ三月高玉郎左衛門玉井を囮ふ成實進み擊ちて之を破る四月定綱身を挺でゝ之を拒ぎ力戰して首を斬ると若干是の時田村方に亂る伊達氏小手森築山の諸城を攻む成實從ひて皆な戰功あり田村の臣大越紀伊叛す伊達氏成實をして之を攻めしむ斬馘數あり三月佐竹義重再び伊達氏と安積郡に戰ふ伊達氏成實をして山王山下に陣せしむ會津勢將尾熊因幡數百人を率ひ來りて山下の壕を填む成實銃を善くする者に命じて擊ちて之れを却く片倉景綱命を奉じて岩城に往く歸るに及びて成實景綱を見て岩城の狀を問ふ景綱曰く大越紀伊田村に叛して岩城に倚る則ち明春岩城の田村に事あるや必せりと成實曰く先んずれば人を制す何ぞ田村の城主片平重綱を招て我より岩城を制せざるやと景綱これを伊達正宗に告げ遂にその計に從ふ重綱降り來る岩城の城主岩城常隆果して怒りて田村の諸城を攻む正宗軍を出して阿子島高玉の諸地を攻めて之れを取り成實をして田村を守らしむ既にして成實兵を引て猪苗代に至り某名義廣と招上に戰ひて大に之を破る義廣自ら會津に保つこと能はざるを知り乃ち城を棄てゝ去る伊達氏即ち若松に入り成實景綱をして田村に之かしむ是より先き佐竹岩城の諸將田村を攻む成實來り援ふに及びて諸將乃ち去る十月伊達氏須賀川を攻む城突し火を縱ちて之に乘ず城乃ち陷る十八年豐臣大閤小田原に至る諸將伊達氏に往き謁せんとを勸む成實獨り奮ひて曰く大閤の東下は客冬檄を移して告げらる今にして往く亦已に晚し往きて辱しめを受けんよりは若かず坐ながら之を迎へて衛を天下に爭はんには我甲百萬を帶びて地利に據る何ぞ彼れ烏合の衆を恐れん

やと人其の大膽に服す而れども伊達正宗從はず遂に成實を以て會津留主となし自ら兵を率ゐて往く夏井藤左衛門虛に乘じて叛を謀る成實立どころに之を誅す矢田野伊豆伊達正宗に從ひて小田原に在り亦背き歸る伊達氏成實に命じて之を誅せしむ成實石川昭光と大里城を攻む城堅くして下らず四兵至るに及びて圍を撤して去る大崎の亂成實は討平の役に從ひて郡中に在り滯生氏鄉伊達氏と隙あるに及びて伊達氏國分盛重を以て實と大崎の餘黨を馴す成實之に從ふ事既にして干戈ぐ伊達氏なす氏鄉成實を駆む乃ち成實を賞とす十九年伊達正宗正宗封を大崎葛西の地に徙す是に於て伊具郡十六鄉を以て成實に賜ひ角田城主となす永祿四年成實伊達正宗に從て伏見に在り故あり暇去て組の高野に之く盛し成實の功は諸將に冠たり而して位祿之が上たる能はず故に不平を積みて此に至るなり成實又た小田原精谷邑に居す德川家康百口俸を賜ふ伊達正宗請ひて之を却く慶長五年上杉景勝石田三成と反を謀り厚く有名の士を募る因て五萬石を以て成實を招く成實曰く生父實元既に上杉憲實の養子となり且景勝は舊主の仇たり而る川昭光、政景綱の諸將伊達氏の命を以て之を招く成實乃ち至る白石の役に從兵寧關にして一隊を作すこと能はず寓して昭光の營中に在り後ち上杉氏の部下齋藤兵部成實の威名を慕ひ信夫郡の兵士五千を率ゐて來屬せんとを請ふ七年伊達正宗亘理郡二萬石を賜ひて亘理城に住せしめ又た宇田郡の地若干を加へ賜ふ元和六年江戸城石屏を修む成實命を蒙りて其の役を董だす寛永中成實事を以て江戸に朝す時に年七十一大老の故を以て乘輿門に入るを許さる初め成實の走るや其の臣金須内記石川白根澤の諸士皆な本藩に出仕す後ち成實白根澤を薦めて隊將となす前日氏其の前日の事に介意せざるを感ず白根澤も亦た慚愧し遂に成實の門に往き之を拜す成實手に薙刀を提げ出で丶曰く何ぞ去らざる吾れ汝を薦むる者は官の爲めのみ汝ち前日我に恩なくば豈之を怨せんや公事に非ざれば則ち復た來る勿れと之を叱して去らしむ人其の虛盜の公なるに服す成實夙とに驍勇を以て著はる而して其の士を待つ寛宏にして能く歡心を得昔な樂みて之が用をなす嘗て放鷹場あり人を禁じて入る勿らしめ監者を置て之を守らしむ一人あり潛かに砲を持して禽を場中に擊つ監者之を告ぐ成實犯禁者を召し酒を與へ之を飲ましめて遣去す他日又た禽を擊つ監者之を告ぐ又た酒を與ふ斯くの如くすること三たび監者大に怒りて其の罪を正さんことを請ふ成實曰く苛くなす無れ吾響ぞ人を以て禽に代るとを欲せん汝ち復た言ふ勿れと又た其の臣に杉浦九左衛門と云ふ者あり嘗て庫の梁上に鷹羽數千枚挿むを見て心に之を取ると欲し守庫者を誅りて遂に庫に入り梁に攀ぢて手づから之を取る守庫者曰く吾れ亦た之を欲すると久し子盡く併せて吾が爲めに之を取らざると九左之に從ふ適ま成實庫に入り其の梁上に在るを視て之を詰問す九左曰む為に得ず遂に自首す曰く汝の羽を竊む何ぞ其の甚だしきや宜しく古書を校正すべし之れを持して去るべしと九左新らたに賜を受くる迎かに羽を持して退去す是に於て其の下相告げて復た其が如く再拜して退去す是に於て其の下相告げて復た其の法度を犯さず而して其の英氣豪落なる王侯貴人と雖も敢て避けず某の役に伊達正宗騎して水に入り馬に飲す成實之れを見て走りて曰く今兵方さに接して勝敗未だ決せず豈に將たる者從容として馬に浴するの秋なんやと剛暴を揚げ馬尾を打つて之れを陸に上す後ち正宗歷と之れを稱す卒する年七十九正保三年なり（事實文編）

タテヌマ　ヨシラウ　蓼沼克郎　陸軍步兵少尉なり山形縣出身にして明治三十七八年日露戰役に後備步兵第三十一聯隊附として從軍中卅八年一月廿七日清國盛京省老橋に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タテノ　ガウザウ　建野鄉三　豐前の人なり苗名を牧野鋼次郎左衛門と稱す十三歲の時建野建三の養子となり鄉三と改名す明治十年十一月初めて宮內省御用掛三等侍補心得となり翌年宮內權大書記官に任ぜらる十二年二月兼任太政官權大書記官となり法制局勤務仰付けられ尋で外賓待遇と取調委員とを命ぜらる十三年五月大阪府知事となり治績あり二十二年元老院議官に轉ず二十三年十一月米國駐劄全權公使となり翌二十四年墨西哥特命全權公使を兼任し二十七年八月辭職し唐津興業鐵道株式會社長日本移民合資會社監督內務大臣秘書官を歷任し二十八年貴族院議員に當選し二十九年二月廿日死す年四十三歲

タテノ　ケイザン　立野桂山　名は元定字は麟卿父夢鹿と號す肥前武雄の人なり幼より學を好み清水龍門飯盛鳳山草場佩川學を博覽多識にして傍ら武技に通じ詩歌にも善くす邑の教授たりしが維新後正則中學校の教員たり嘗て明經弘道に志ありて蟲井昭陽の說を悅び左傳繹考合解、尙書考合解、孝經考合說等を纂輯せり行年五十七（日本教育史資料）

タテノ　サブラウ　舘三郎「ミナモトヨシミツ」「ミナモトヨシ

タテノ　シュンセツ　立野春節　號は蓬生庵春節は其の名和學者なり京都の人兼ねて漢學に精しく古書を校正する甚だ多し又藏原に精し（鑒定便覽）

タテノ　フユキテ　館野冬吉　陸軍步兵中尉なり岐阜縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し後備步兵第五聯隊附として從軍中卅七年八月二十二日旅順要塞東鷄冠山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タテノミヤ　館宮　後西院第九の皇女にして法名清安壘華院尼宮と云ふ正德二年薨去年四十五遡玄大成と謚す

タテハ　ジュカク　立羽壽角　俳諧師なり

タテハ　フカク　立羽不角　江戸の俳人なり松月堂虛々齋南々舍の號あり又た千籟と稱す岡村不卜の門人なり元祿中法橋に叙す享保中法眼に進み寶曆三年六月六十二歲にして死す築地本願寺に葬る著述、清かんな、信順行、母恩集、木曾の麻衣、七十五版燒、其後、百人一句、有磯海、わくかせ輪等なり（俳林小傳、俳家奇人談、墓所一覽、俳家殁故年表）

タテハ　フキョク　立羽不局　不角の男にして俳諧を能くす安月堂と號し著述をふのうちなし、風姿集あり殁年詳かならず（俳林小傳）

タテバヤシ　カキウ　立林何鼎　醫者なり雅で醫を能くす名は立德初め加州侯の侍醫たり故あり江戸に入り白井宗謙と改め醫法を研究し遂に其の妙を得たり畫く所の傑きものは光琳に伯仲すと云ふ當外物產賀易株式會社取締役となれり晚年明石に退隱し風月を友とし四十一年二月十六日病殁す年六十八

時稱して光琳三世の畫家と云ふ即ち光琳方祝の印を用ふ扶桑畫人傳）

タテバヤシ（シ）コウ　館林侯「トクガハツナヨ

善くす詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歴）

タテベ　ウシマロ　建部牛麻呂　和歌を

タテベ　サウテウ　建部巢兆　畫人なり名は英親、秋香庵、小簑庵、楽翁等の號あり武州千住驛の人父は山本就雲と云ふ書家なり始め畫を谷文晁に學びて大に上進す其密畫なるものは應擧に等し一變して蕪村風の俳畫を能くす毎畫に必ず自作の發句を題す又發句に長ずるの故を以て却て畫名は掩はれたり文化十年十一月十七日歿す淺艸月輪寺に葬る（扶桑畫人傳、墓所一覽）

タテベ　セイアン　建部清庵　仙臺藩の醫師なり明和八年民間備荒錄三卷備荒草木圖一卷を作る（日本博物學年表）

タテベ　ゾクマツ　建部簇松　陸軍歩兵大尉なり新潟縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團歩兵第十六聯隊附として從軍中三十八年三月十日清國盛京省葛布街附近戰鬪の際負傷同日葛布街假繃帶所にて死去す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

タテベ　タケヒコ　建部武彦　慷慨家なり名は自強初め孫左衛門と稱す筑前藩に仕へ七百石を領す初め使番後番頭に轉任す性質寛裕にして長沼流の劍法に進す長州侯幕府の嫌疑を受くるに當り元治元年幕府尾張侯に命じ征長の總督たらしむ時に外患内憂并び迫るの秋なり筑前侯黑田齊溥深く外患の事を憂ひ先づ内を整へんとし謀り屢〻公武の間に建言し長州侯を說諭して和平を謀り特に武彦を擕んで正使とし數士を副へて山口に往復すると都て四度長州侯遂に其說に從ふ腰刀並金若干を賜ふ仍て幕府の總督に謁して防長の藩情を陳告し速に兵を解かん事を勸む總督又說を容る故を以て解兵の令を下す既にして武彦國に歸るに方り奸臣數輩君臣の間を壅閉し長忠を貶斥し國難を釀す武彦憤懣に堪へず同志と謀て國政を救正せんとす其策行れずして家に禁錮せられ尋で城下安國寺に死を賜ふ時に慶應元年十二月廿五日年四十六なり乃ち其の寺に葬るふ扶桑畫人傳）

タテベ　ツネヒサ　建部常久　幾くもなく戊辰の年奸臣數輩各藩科に處せられ武産の忠志初めて顯はれ朝廷より祭祀料を賜ひ永く忠名を筐忠祠に裝せり明治三十一年七月從四位を贈らる（筑前殉難忠士傳）

タテベ　ヂンナイ　建部傳内　江戸の書家なり名は賢文通稱傳内御家流より出でゝ一家を成す幕府の書史を勤め江戸に住す其の門に入り學ぶ者三千人に餘れり世に傳内流と稱す（鑒定便覽）

タテベ　マサナガ　建部政長　姓は源氏佐々木の支族なり遠江の建部に居る因て以て族となす祖父を高光と曰ふ幼にして僧となる尼某人に殺さる長ずるに及び爲めに讐を復す讐を復す人傳で之を稱す右府信長に辟され還俗して仕ふ守山の後關白秀吉に屬し若狹の國務を掌り小濱に住す又尼崎城に移り攝津の郡事を掌る高光練武老功にして能く糧穀を輸す剃髮入道して壽德と號す年老ひて致仕す父を光重と曰ふ内匠と稱す繼で尼崎の郡代となり邑七百石を食む慶長庚子の亂石田三成に黨し部將と俱に伊賀を歷て伊勢に入り安濃津の城を攻む利あらず光重兵を率ゐて先登し肉薄して二郭に乘り遂に壁を拔く軍敗るゝに及びて寛宥蒙て問はずして長年卒す政長初字は三十郎、父卒する時年初めて八歲秀頼人を遣はして其邑を收めんとす外叔父池田輝政爲に家康に訴ふ秀忠片桐且元に命じて城邑を完保せしむ慶長十九年十月大阪兵大阪の募を拒む而れども城邑は大阪西海道の衝に當り冦兵守難きを以て援ふ播磨備前に乞ひ近郡の利隆をして之を援けしむ池田重影城に伐つ家康池田利隆をして長崎に遊ぶ居ること六年にして歸る書を上るに狀一圍塊の如し入りて之れを陽守す夏の役内藤信政命を受けて援をなす七月名に應じて二條に抵る家康政長を賞して曰く汝弱なりと雖も質を收め城を保ち權を遮り寇を禦ぐ今河邊郡鯉田一萬石を褒加す勤勞倦むを勿れと元和三年邑地に移す五年福島正則廢除せらる松平忠綱命を受けて之が備へに赴く政長舊誼に報ひんと欲す自ら兵七百を率ゐて赴き屬す寛文元年冬從五位下に叙し丹波守と稱す七年致仕す入道して自得と號す十二年四月卒す年七十法名全書性圓、子あり政明と云ふ子孫世々侯たり（野史）

タテベ　リョウタイ　建部凌岱（後建部を脩して建と曰ふ）　有名の俳人なり陸奥弘前藩士喜多村校尉の二男幼名は金吾名は孟喬、凌岱は其の號、初護草の雷門の邊に住せる時風神の像に因みて俳號を凉袋とし後ち俳諧をやめて凌岱に改む畫號は寒葉齋と云ひ和歌の號は綫太又綫足と云ひ又吸露庵の號あり少き時故あり亡命して平安に往き東福寺に入りて僧となり唱首座となる好みて俳歌を作り又圖畫を善くす俳諧は野坡に學びて葛鼠と號し後希因及び梅盛に從ふ北國にありて都門と號し後髮を蓄へ還俗して江戸に徙り俳歌及び繪事を以て業とす弟子廣集し家產甚だ富む是の時に當りて加茂眞淵大に萬葉の古風を唱へ名聲藉甚凌岱乃ち要をして從ひ學ばしめ己れ亦因て其說を聞くを得たりは是より俳歌を廢して始めて片歌を唱ふ片歌は日本武尊を以て開祖とす京師に徙り專ら片歌を以て徒を誘ふ常に曰く俳歌を出でゝ片歌に入るは予固より世の取らざる所たるを知る然りと雖も片歌中興の祖とすべきものは我に非ずして誰ぞやと伊勢能保野は日本武尊薨去の地なり凌岱碑を樹てゝ之を誌す又右大臣崇山公に請ひて片歌道守の四字を得之を楣上に掲げ謂て曰く公無聊の時仰ぎ視て以て闘を遣ると安永三年東國に遊び武州熊谷驛に歿す時に三月十八日、年五十三、凌岱天資懸敏にして邁氣あり狷狂無行一世を玩弄す人を視ること猶ほ小兒のごとし人信を失ふとありと雖も坦然之を遇す己れ薄行あるも亦愧る色なし嘗て某侯三百金を賜ひて遊資に充て書を長崎の熊代熊斐に學ばしむ凌岱直に放館に踵り其の狎放を脫纏して家を守らしめ而して長崎に遊ぶ居ること六年にして歸る書を上るに狀一圍塊の如し侯之を問へば則ち辛魁なり遂に不敬を以て黜けらる是れ蓋し生涯羈絆を受んことを厭ひ故に斯の如くすと云ふ凌岱不在の間に故の才あるものを選んで己れが要となす所謂加茂眞淵に學べるものの即ち是れなり著す所舊本伊勢物語、同考異、歌文要語、詞艸小兎、はし書ふり、同後編、片歌道のはしめ、同二夜問答、同東風流、同百夜問答、同草のはり道、同舊宜集、俳諧明題集、

西山物語、頭陀物語、寒葉齋畫譜、建氏畫苑、孟喬雜畫、蕉畫指南、すゝみ草、とはし草、漫遊記、同後編、吉野物語（一名本朝水滸傳と云ふ）同續編、はり〳〵艸あり（近世叢語、續近世畸人傳、鑒定便覽、畫乘要略、近代名家著述目錄、俳家畸人談）

ダテ　マサムネ　伊達政宗　行朝の孫、宗遠の子なり大膳大夫と爲り薩髮して圓孝と曰ふ應永七年鎌倉に在て足利滿兼に懲あり章名滿盛と竊かに亂を作きんことを謀り逃れて陸奥に還り赤館に據りて兵を擧ぐ鎭將足利滿直陸奥の將士に命じて之を擊たしむ克つこと能はず九年足利滿兼上杉氏憲を遣し兵に將として之を攻めしむ政宗擊ちて之を卻く滿兼更らに大兵を遣して圍み攻む政宗力盡きて出て、降る（大日本史）

ダテ　マサムネ　伊達正宗　小字は梵天丸後藤次郎と云ふ左京大夫輝宗の子なり永祿十年八月生る幼にして見戲を爲す能く節義を守り毫も私なし八九歲にして小學に入り禮樂を學び詩を誦し射御を習ふ一を聞き十を知る才能人に過ぐ天正六年歲十三元服を加へ正宗と名け字は孫二郎と稱す明年十月田村清顯の女を娶る十一年九月米澤城に徙居す十三年十月輝宗二本松義纖の爲めに誘殺せらる正宗之を聞き直に仇を復し其の從者を鏖殺す是の歲正宗從五位下に叙し奥作守と稱す次年左京大夫と改む十六年十一月正宗人を濱松に遣はし始めて信を家康に通ず正宗比年四隣を征伐し十七年に至りて會津四郡仙道七郡を略し黑川城に徙る威令山東に振ふ秀吉使を遣はし交を結ぶ因て正宗信を家康及び前田利家淺野長政に通ず後ち秀吉正宗の朝會を促がす家康亦た之を勸諭す從はず天正十八年三月秀吉小田原を征伐す正宗之に會し始めて秀吉を見る秀吉則ち米澤三十萬石を予へ盡く侵地を致さしむ正宗地を削られ心快々として樂まず竊かに亂を作さんと圖る果さず入る蒲生氏郷に遣はし貳なきを謝す天正十九年正月家康正宗の雄才を愛し入京し罪を謝せしむ二月正宗貼金の磔柱を捧げて前行せしめ京に入り罪を謝す五月秀吉奏請し正宗を侍從兼越前守に任ず十月秀吉正宗を薦領に封じ柴田伊具等廿一郡を加ふ是の月正宗岩手山城に徙治す文祿元年征明の役起る正宗騎兵を率ゐて那古耶の行營に從ふ二年正月正宗淺野長政父子と行營を發し四月釜山浦に據り蔚山を攻む七月毛利秀元に屬し晋州城を攻め之を拔く秀吉之を賞し感書を賜ふ七月羽柴秀次の自刎するや流言あり正宗之に黨すと秀吉之を疑ふ正宗並に群臣連署して貳なきを誓ふ事則ち已む慶長元年從四位下に叙し右近衛權少將に任ぜらる四年二月三成を征せんとし正宗を以て家康の六子忠輝に嫁す慶長五年六月家康正宗を防がしむ九月最上義光を援ひ直江兼續を敗る尋て上杉氏と白石福島を爭ひ克たず六年家康上杉の舊封十二郡を割き正宗に與ふ七年二月磐手澤城成て徙居し仙臺と改む慶長十一年二月近江江戸野及び龍崎三萬石を賜ふ十三年十二月族を賜ひ松平と稱す十九年冬大阪兵起る正宗先驅となり大阪に至る秀頼之を招く應ぜず元和元年五月兵を率ゐ大和より國分に至り陣を布き城兵後藤氏房薄田兼相と戰ひ之を破る寛永十三年五月二十四日卒す年七十明治三十四年十一月正三位を贈る正宗曾て其臣支倉常長を羅馬に遣して陽には洋教を信ずると稱して其の國勢强弱等を察せしむ以て竊かに爲あらんとするなり（常長傳墨看）正宗詠歌を善くし木下長嘯と遊ぶ又茶事を好み時に名あり云ふ多子あり秀宗、忠宗、宗綱、宗純、宗高、宗實、宗勝、女は忠輝に適く是を天麟夫人と稱す（野史、鑒定便覽、茶人系傳）

ダテマツ　トウモウ　立松東蒙　江戸の儒者なり後狂歌師となる名は懷之字は子玉、東蒙は其號、又東毬又は嘉穗と號す通稱嘉兵衛或は曰く八右衛門幼名は八十郎右衛門と曰ひ尾州の豪士なり後江戸に出て四谷に住し中馬宿稻毛屋金右衛門の業を嗣ぎ又た甲州煙草を賣ぐ東蒙學を好み讀學を伊藤蘭洲に受け專ら篤學敦行を以て儒林に稱せらる後ち浪華、奈良、伏見、長崎、熊本等の諸方に漫遊し年廿二初て江都に來り教授を以て業とす講業の暇傍ら國學を修め好んで和歌を詠ず然れども屢〻失巢に罹り且世に用ひられざるを以て窮迫特に甚し東蒙之を憤り朝野を愚弄し富貴を傲視し平秩東作と號して狂歌を作る遂に其技を以て世に著はる朝髮して嘉穗と云ふ有名の狂歌師唐衣橘洲、元圭絅、葛唐丸、四方赤良等の若きは皆な其の弟子なり東蒙傍ら佛典を講じ法華、楞嚴、維摩等の諸經に及ぶ牛籠市谷の諸寺院の僧徒從學するもの衆し寛政元年三月八日四谷新宿の寓舍に歿す年六十四、東蒙輕佞世を終ふと雖も著書極て多し武家盛衰記、武野叢談、東遷創業記、難波戰記、華野雜談、華野雜談、雜塵、寒夜百談、嘉穗庵集、水乃行衢、四谷乃風あり或は云ふ眞書太閤記、三河後風土記も亦東蒙の編著する所と云ふ（光智叢談、古今狂歌人物誌）

タテマツ　ヨシトラ　立松義貫　四條派の畫家なり字は長寅尼張國祭田大瀨子町の富商鈴木七左衛門の八男にして笠寺村の立松太左衛門義民に養はれ義寅と改む吳春及び玉溪景文等に學び餘間清水雷首に就きて芥子園畫傳の講義を聽けり明治十年內國博覽會開會の時出品して褒狀を受く同十五年十二月十六日歿す年七十四

ダテ　ミツムネ　伊達光宗　忠宗の子なり寛永十六年四月十四日將軍家光の前に元服し諱の字を賜ひ從五位下に叙し越前守に任じ佩刀を賜ふ正保二年八月七日卒す年十九（諸士略傳）

ダテ　ムネカツ　伊達宗勝　伊達侯の族兵部少輔と稱す正宗の季子なり初正宗十子あり其長子秀宗は妾田たりしを以て二子忠宗封を襲ふ忠宗卒して其子綱宗立つ然るに正宗最も季子宗勝を愛し曾て之をして立たしめんと欲して能はず竟に地を割きて之に與へて一の關に居らしむ故に宗勝嗣となる能はざりしを恨み常に篡奪の志を懷き才勇を以て稱せられたる原田甲斐宗輔を引て以て己れが輔となせり夫れ宗勝の當代の君に於ける叔父の親あり其威君に過ぐ而して其子市正幕府の大老酒井侯忠清の女を娶るの媚あり宗勝己れ既に君に過ぐるの威を以て加ふるに外は酒井侯の威を假り內には宗輔の爲に智囊を潛すあり故に心宗勝を非とする者と雖も之に面從せざるを得ず況や利是れ貪るの輩に於てをや是を以て宗勝の威勢大に張る是に於て綱宗を勸めて遊惰に耽らしめんとを退隱せしむ世子亀千代嗣ぐ年甫て二歲宗勝為に攝政となす是れ一に酒井侯の宗勝を引くあるが爲なり然れども諸老既に宗勝を疑ふ故に亀千代の叔父田村隱岐守宗良を以て宗勝と共に假攝の職に任ぜんとを請ふ幕府遂に之を許さず然れども宗勝獨り權を專らにして宗輔と共に百事を決し常に亀千代を殺逆するの計を畫す實に亀千代の命且夕に

タテム

危ないなり之を以て忠臣伊達安藝宗重片倉小十郎景家と相議し淺岡及び肚士松前鐵之助重光を江戸に送りて龜千代に侍せしむ二人粉骨碎身忠を盡し遂に能く龜千代を以て弑逆を免れしむるを得たり淺岡は白川主殿の妻宗重の妹にして主殿は曩に綱宗を切諫して誅せられし士なり士民宗勝を怨む宗良之を諫む用ゐず故を以て往々病と稱して出でず九月幕府の監察使仙臺に至り諸老臣を召して之を戒喩し其をして親睦事なからしむ爾後毎歲例となす是より先き封内の驛標禁榜は皆な國老連署して設くる所に係る宗勝自ら感福を揑まゝにし敢て宗家の法を奉ぜず別に自ら禁榜を設く國老奥山大學心に之を非とし幕府の執政に請ひて宗勝の設くる所を改むる初め宗勝老侯に請ふに祿を加へられんことを以て老侯大學及び茂庭周防に命じて其封邑を定めしむ周防議する所の地頗る少なり宗勝怒る遂に大學の議に從ひ八千石を加へ賜ふ後ち周防の職を奪ひて大學の秩に加へ給ひ擧げて國老となす是に至りて大學功に矜りて人に驕る伊東新左衛門等疏を効して之を責む宗勝又た大學の職を奪ひ原田甲斐伊東新左を以て之に代らしむ甲斐性奸巧宗勝に媚附し以て自ら固くす新左廉直にして阿れらず乃ち宗勝の興に國事を議る可らざるを知り固辭して聽かず尋で死す里見十左衛門書を裁して宗勝の所置の不曲不公を極諫す聽かれず却て之を死刑に處せんとす宗良之を救ひて僅かに免る寛文六年侍臣食を侯に薦む先づ之を嘗めて仆る皆な以て異となす乃ち之を下卒及び狗二匹に與ふ亦仆る走りて宗勝に告ぐ宗勝即夜熊田治兵衛に命じて侍醫河野道圓を殺し併せて膳官を殺す其の何の故たるを知らず津橋本善右衛門、大松澤其右衛門、日野次右衛門、富田二左衛門皆な侯の爲に輔翼し宗勝に附くを肯んぜず宗勝謂へらく之を除かば則ち侯の左右に在る者皆な我黨なりと因て罪を誣て風夜懈たらず其の忠稱す可し而して今之を除かんと欲するは何ぞやと是に於て四士亦た僅かに免る、時に伊東采女伊東七十郎と云ふ者あり事を以て宗勝を怨む七十郎將に書を幕府に上り以て宗勝の奸狀を陳べんとす采女も亦た其の議に與かる宗勝怒りて之れを捕らへ命じて采女を幽し七十郎を斬り坐して氏家傳治を流す其の歲宗重伊達式部と桃生遠田郡境の獄起る宗勝式部を庇陰して宗重を枉ぐ宗重怒る景家を留めて藩地を守らしめ獨り身出て、宗勝宗輔の罪を幕府に訴ふ酒井侯宗勝等を庇護する至らざるなしと雖も獨り板倉侯の公明正大自ら執りて動かさるありて酒井侯と雖も亦た之れを如何ともする能はず幕府宗勝を松平伊豆守に付し之を拘置して曰く汝老成能く先世の事體を知りて士民を懷服する能はず甲斐をして狂逆の擧あらしむ皆な汝の罪なり遂に辭屈して宗重を刺すと雖も已れ亦た柴田外記等の刺す所となれり而して奸黨悉く誅せられて事治まれり云へり是れ即ち世に傳ふる說なり然るに宗勝に與へて其の宜く自ら改むべきの由を冒ふ宗勝納れず慢辭之に答ふ寛文七年宗重伊達式部と桃生遠田郡境の獄起る初め遠田郡小里野、登米郡と相接て而して宗重の邑たる歷々置あり式部乃ち以て登米郡生澤の地と爲す侯區々たる草野を以ての故に國家の事端を啓く自ら忍びて三の二を桃生に付し自ら其一を取りて其事の是非を問ふなかれと宗重枉げて之に從ふ七月慈賀右衛門濱田軍兵衛來りて二郡の境を檢し監察今村善太夫横山彌次右門之を監す而して皆な宗勝の意を承く故に枉げて界を成して甚だ公平ならず遂に券を爲りて宗重の臣をして之に印せしむ聽かず强て其の事由を書せしむ宗重懇乃ち此に至る國憲何に由りてか立たんと遂に國老に告げて按問を請ふ原田宗輔諫ゆるに非理を以てし之を卻く宗重乃ち宗勝宗良に告ぐ宗勝究詰を行はしむ汝宗城其れ能く兩國の好を成し以て朕が望に副へよとの勅諭を賜ふ同十六年修史館副總裁に任ぜられ同十九年驛香間祇候を命ぜられ同廿六年八月七十歲の高齡に付恩賜金五圓を賜ふる同廿二年十二月勳一等に叙し瑞寶章を賜ひ翌年十月旭日大綬章を賜ふ同廿五年十二月特旨を以て從一位に叙せらる同月廿日病を以て今月の邸に薨す年七十六

タテム

ダテ　ムネシゲ　伊達宗重　小字は虎松丸長じて信濃と稱す後安藝と改む伊達家に仕へて老臣たり時に執政伊達宗勝政を秉りて專横、宗重之を憂へ書を宗勝に與へて其の宜く自ら改むべきの由を冒ふ宗勝納れず慢辭之に答ふ寛文七年宗重伊達式部と桃生遠田郡境の獄起る初め遠田郡小里野、登米郡と相接て而して宗重の邑たる歷々置あり式部乃ち以て登米郡生澤の地と爲す侯區々たる草野を以ての故に國家の事端を啓く恐れ枉げて之に式部に付す是に至りて式部分ちて桃生郡深谷大窪村の若生半右衛門に分つ宗重書を郡宰に與へて曰く桃遠二郡の界濫るゝこと久し今大窪は二郡の界に居る宜く我れ式部の臣僚と相議して界を分ち築き然後分ちて他人に與へんと雖も式部怒りて曰く我れ即ち他邑を以て人に與ふる能はず且つ郡境に至りては即ち事體重し何ぞ私に議するを得ん向きに彼れ將さに赤生澤を奪はんとす而して非理を以ての故に屈す而るに今亦然るやと往復三四式部遂に上書して決を國老に取る宗重も亦た書を效す九年石川民部の意を承けて宗重に喻す曰く今日の政事は不可の甚だしきものと爲す而れども卿は老成人宜く自ら忍びて三の二を桃生に付し自ら其一を取りて其事の是非を問ふなかれと宗重枉げて之に從ふ七月慈賀右衛門濱田軍兵衛來りて二郡の境を檢し監察今村善太夫横山彌次右門衛之を監す而して皆な宗勝の意を承く故に枉げて界を成して甚だ公平ならず遂に券を爲りて宗重の臣をして之に印せしむ聽かず强て其の事由を書せしむ宗重懇乃ち此に至る國憲何に由りてか立たんと遂に國老に告げて按問を請ふ原田宗輔諫ゆるに非理を以てし之を卻く宗重乃ち宗勝宗良に告ぐ宗勝究詰重伊達式部と桃生遠田郡境の獄起る宗勝式部を庇陰して宗重を枉ぐ宗重怒る景家を留めて藩地を守らしめ獨り身出て、宗勝宗輔の罪を幕府に訴ふ酒井侯宗勝等を庇護する至らざるなしと雖も獨り板倉侯の公明正大自ら執りて動かさるありて酒井侯と雖も亦た之れを如何ともする能はず幕府宗勝を松平伊豆守に付し之を拘置して曰く汝老成能く先世の事體を知りて士民を懷服する能はず甲斐をして狂逆の擧あらしむ皆な汝の罪なり遂に辭屈して宗重を刺すと雖も已れ亦た柴田外記等の刺す所となれり而して奸黨悉く誅せられて事治まれり云へり是れ即ち世に傳ふる說なり然るに宗勝に與へて其の宜く自ら改むべきの由を冒ふ宗勝納れず慢辭之に答ふ寛文七年宗重伊達式部と桃生遠田郡境の獄起る初め遠田郡小里野、登米郡と相接て而して宗重の邑たる歷々置あり式部乃ち以て登米郡生澤の地と爲す侯區々たる草野を以ての故に國家の事端を啓く恐れ枉げて之に式部に付す是に至りて式部分ちて桃生郡深谷大窪村の若生半右衛門に分つ宗重書を郡宰に與へて曰く桃遠二郡の界濫るゝこと久し今大窪は二郡の界に居る宜く我れ式部の臣僚と相議して界を分ち築き然後分ちて他人に與へんと雖も式部怒りて曰く我れ即ち他邑を以て人に與ふる能はず且つ郡境に至りては即ち事體重し何ぞ私に議するを得ん向きに彼れ將さに赤生澤を奪はんとす而して非理を以ての故に屈す而るに今亦然るやと往復三四式部遂に上書して決を國老に取る宗重も亦た書を效す九年石川民部の意を承けて宗重に喻す曰く今日の政事は不可の甚だしきものと爲す而れども卿は老成人宜く自ら忍びて三の二を桃生に付し自ら其一を取りて其事の是非を問ふなかれと宗重枉げて之に從ふ七月慈賀右衛門濱田軍兵衛來りて二郡の境を檢し監察今村善太夫横山彌次右門衛之を監す而して皆な宗勝の意を承く故に枉げて界を成して甚だ公平ならず遂に券を爲りて宗重の臣をして之に印せしむ聽かず强て其の事由を書せしむ宗重懇乃ち此に至る國憲何に由りてか立たんと遂に國老に告げて按問を請ふ原田宗輔諫ゆるに非理を以てし之を卻く宗重乃ち宗勝宗良に告ぐ宗勝究詰

タテム

ダテ　ムネナリ　伊達宗城　宇和島藩主なり天保八年二月藩主宗城の養子となり安政五年十一月伊豫宇和島城十萬石を襲き遠江守に任ず明治二年四月上表藩籍を奉還し同六月宇和島藩知事仰付らる四年七月宇和島藩知事を免ぜられ九年十二月宮中祗候仰付られ十七年七月伯爵を授けられ十八年四月特旨を以て正四位に叙せらる廿四年四月父宗城勳功に依り特に侯爵を授けられ貴族院議員となる廿八年六月正三位に叙せられ三十二年一月七十歲の高齡に付御紋付御杯幷に酒肴料を賜はる三十七年一月清國皇帝より贈與したる第一双龍寶星を受領し及び之を佩用することを允許せらる三十八年十一月二十九日病を以て伊豫國宇和島に薨す病氣篤の旨上聞に達し特旨を以て位一級を進められ正二位に叙す宇和島に葬る年七十六

ダテ　ヤスタ　伊達彌助　京都の人にして世〻綸子を織るを業とす幼名德松、家業を繼ぎて機織を業とし古代の錦織彫刻を參考して華紋を模し伊達錦織を發明し名聲大いに揚がり遂に帝室技藝委員を命ぜられ第三回內國勸業博覽會及び京都市工業物產會の審査官となり又臨時全國寶物取調局の御用掛となる明治廿五年三月廿日歿す年五十四、西陣機業の振はざりしもの彌助これを興して大いに力ありと云へり（西陣名攷碑）

ダテ　ユキトモ　伊達行朝　陸奥の人藤原時長の後なり時長の子爲親始めて陸奥に居す行朝藏人となり左近衛將監に任ぜられ後ち宮內大輔となる結城親朝等と同じく評定衆兼引付役に列す陸奥出羽の所認を預聽す建武二年賊あり陸奥長倉に起る行朝擊ちて之を破ぶり尋で源顯家に從ひ四上上ちて賊を討たしむ乃ち田村莊司の兵を併せ俱に擊ちて之を平らゞ再び顯家に從ひて門上す時に芳賀禪可宇都宮城に據りて叛す顯家行朝等を遣して之を攻めしむ攻關三日にして遂に之を降す後ち顯家戰歿す源親房に從ひて常陸に至る親房小田城に據り行朝伊佐城に據る高師冬來り攻むるに及びて親房走りて關城を保ち數年にして陷る敵兵を盡して伊佐城を來り圍む行朝兵を勵まして拒ぎ守る既にして其族陸奥に在る者結城親朝と俱に蹶に降る行朝孤城支へ難きを度りて遂に出でゝ師冬に降る正平三年死す行

タテム

を背んじぜず矯めて幕府の通人島田出雲守に告ぐ十月通人茂庭主水を遣はし書を持して片倉小十郎に與へ以て之を宗重に致さしめて曰く國侯尙幼、諸更の不公平の事を制せんと欲して事或は傳播せば侯家の美事に非ず足下宜く自ら忍び以て侯が親政の日を俟つべしと且其小十郎に與ふる書中に事既に執政に聞ゆ卿等宜く之を熟議すべしの語あり宗重曰く此事專ら公室の爲めに計る而して不利なる者ありと謂ふは吾が解せざる所なりと乃ち書を裁して主水に付し致して通人に謂て曰く宗勝等大臣を刑して且つ願みず而して今何んぞ必ずしも其一二姦更を憚るや且つ聞く既に執政に聞ゆと是れ固とより願ふ所なり敢て請ふ公館して敝藩の爲めに意を致せと十一月監察使內藤新五郎牧野數馬至る宗重又た擧げて之に告げんと欲す宗勝知りて之を沮む宗重曰く吾既に執政に訴ふ何ぞ監察使を憚らんやと遂に之れに面陳す觀察使慰諭して去らしむ柴田外記も亦た同志と協議し書を裁して之を觀察使に上る十二月通人檄を馳せて宗重及び柴田外記檢地の諸更を召す宗重自ら謂ふ宗勝は侯伯に結婚して頗る幕府の情誼を得れ我れ遠隊の陪臣を以て之と相抗す死に非ざれば則ち之を能く遂ぐることなしと翌十一年二月涌谷を發して江戸に至り麻布邸に入る時に老侯品川の別邸に在り書を宗重に賜ひ津田玄蕃に命じて之を致さしむ玄蕃轉じて宗勝に致す其の書は蓋し以爲らく卿忠を公室に竭くす苦心想ふべし今後凡百の事卿の處分に任ぜんのみと宗勝義憤と相議し辭を矯めて書を爲りて曰く方今事なし卿何の所見ありて言を幕府に上る宜く速に國に歸るべし我れ執政に謝するも猶ほ及ぶべしと宗重之を見て憮然たり老侯其の答辭なき怪しみ人をして來り問ほしむ宗重故を以て告ぐ老侯乃ち別に書を造りて以て宗重に賜ふ始めて爲めに實らるゝを知る因て老侯に謝す十六日大井新右衛門宗重を其の第に召し島田妻木と同く之を聽く十七日宗重遂に疏を草して之を執政に上つる其言の略に曰く近ごろ國是日に非にして人心怫々其所か安んずるゝ莫し且つ其の大なる者を舉げて之か言へば里見十左衛門人となり忠誠嘗て兵部（宗勝）所爲の非を諫む兵部怒る其書を與へて其の宜く諫に從ふべきを說く兵部愈〻怒る十左死するに及びて其の後を絕ちて祿せず是れ其の一なり渡邊金兵衛今村善太夫は一藩皆な其の人茂庭主水を遣はし書を持して片倉小十郎に與へ以て之を宗重に致さしめて曰く國侯尙幼、諸更の不公平の事を制せんと欲して事或は傳播せば侯家の美事に非ず足下宜く自ら忍び以て侯が親政の日を俟つべしと且其小十郎に與ふる書中に事既に執政に聞ゆ卿等宜く之を熟議すべしの語あり宗重曰く此事專ら公室の爲めに計る而して不利なる者ありと謂ふは吾が解せざる所なりと乃ち書を裁して主水に付し致して通人に謂て曰く宗勝等大臣を刑して且つ願みず而して今何んぞ必ずしも其一二姦更を憚るや且つ聞く既に執政に聞ゆと是れ固とより願ふ所なり敢て請ふ公館して敝藩の爲めに意を致せと十一月監察使內藤新五郎牧野數馬至る宗重又た擧げて之に告げんと欲す宗勝知りて之を沮む宗重曰く吾既に執政に訴ふ何ぞ監察使を憚らんやと遂に之れに面陳す觀察使慰諭して去らしむ柴田外記も亦た同志と協議し書を裁して之を觀察使に上る十二月通人檄を馳せて宗重及び柴田外記檢地の諸更を召す宗重自ら謂ふ宗勝は侯伯に結婚して頗る幕府の情誼を得れ我れ遠隊の陪臣を以て之と相抗す死に非ざれば則ち之を能く遂ぐることなしと翌十一年二月涌谷を發して江戸に至り麻布邸に入る時に老侯品川の別邸に在り書を宗重に賜ひ津田玄蕃に命じて之を致さしむ玄蕃轉じて宗勝に致す其の書は蓋し以爲らく卿忠を公室に竭くす苦心想ふべし今後凡百の事卿の處分に任ぜんのみと宗勝義憤と相議し辭を矯めて書を爲りて曰く方今事なし卿何の所見ありて言を幕府に上る宜く速に國に歸るべし我れ執政に謝するも猶ほ及ぶべしと宗重之を見て憮然たり老侯其の答辭なき怪しみ人をして來り問ほしむ宗重故を以て告ぐ老侯乃ち別に書を造りて以て宗重に賜ふ始めて爲めに實らるゝを知る因て老侯に謝す十六日大井新右衛門宗重を其の第に召し島田妻木と同く之を聽く十七日宗重遂に疏を草して之を執政に上つる其言の略に曰く近ごろ國是日に非にして人心怫々其所か安んずるゝ莫し且つ其の大なる者を舉げて之か言へば里見十左衛門人となり忠誠嘗て兵部（宗勝）所爲の非を諫む兵部怒る其書を與へて其の宜く諫に從ふべきを說く兵部愈〻怒る十左死するに及びて其の後を絕ちて祿せ

タテム

ダテ　ムネノリ　伊達宗德　薩宇和島藩主

タテヤ—タテユ

朝和歌を好む其詠ずる所多く敕撰諸集に入る（大日本史）

ダテ　ヨシムラ　伊達吉村　仙臺の領主なり陸奥守左中將に任ず徳川將軍より氏を賜ひて松平と稱す陸奥六十二萬餘石を食む吉村風雅の道に志し諸藝を好み傍ら書を嗜み狩野常信を師とす其書く所水墨の山水設色の花鳥等あり落款に左中將吉村と記す寶暦元年十二月廿四日歿す年七十二

タテ　リウワン　館柳灣　詩人なり名は機字は樞卿通稱雄二郎越後の人一に賞雨老人と號す弘化元年四月十三日歿す年八十三（續墓所一覽）

タドツ　ノリキヨ　多度津則清　姓は大江修理亮と稱す阿波の豪族にして三好氏に隷す三好氏亡びて森村春に屬す（阿波志）

タナカ　イチタラウ　田中市太郎　大阪の實業家なり家世〻肥料商を營む明治十六年六月大阪製燧株式會社を創立し爾來實業界に貢獻すると少からず日本棉花會社長の外攝津製油會社大阪アルカリ會社大阪セメント會社攝津製紙會社東洋捺鐵會社大日本麥酒會社日本火災保險會社神戸棧橋會社韓國棉花會社等の取締役となり豐田式織機會社監査役大阪商業會議所副會頭等を勤めたり四十一年八月棉花視察の爲め渡清し歸朝の途中病に罹り九月三十日長崎病院にて逝く年四十四

タナカ　イチラウヱモン　田中市郎右衛門　裝飾の彫工なり後藤家の門人薩州に住す其作極めて妙なり（裝劍奇賞）

タナカ　エツラウ　田中悅郎　陸軍砲兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ野戰砲兵第八聯隊附として從軍中三十八年三月一日淸國盛京省月傑子附近戰鬪の際負傷し同十三日遼陽兵站病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タナカ　ガイチラウ　田中賀市郎　陸軍步兵少尉なり北海道出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第七師團步兵第二十六聯隊附として從軍中三十八年三月八日淸國盛京省八家子附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タナカ　カウザウ　田中耕造　名は信雅、嘉永四年六月廿八日を以て江戸に生る父を田中多右衛門と稱し德川氏の臣織田上總介の臣なり母は今井氏久里と稱す耕造少にして學を好み業を昌平校に脩め後福地中江等の諸氏に就き佛蘭西學を脩む偏く佛書を研鑽し博識を以て名あり初め職を大學校に奉じて得業生となる後司法省元老院警視廳文部省に出仕し官に在ること凡十四年其警視廳に在るや官進みて一等警視補に至る明治十二年二月大警視川路利良に隨て佛蘭西に赴き專ら警察事務を視察し公務の餘暇同國博士エミール、アコラスに就き政法二學を研究す翌十三年八月歸朝す幾くもなくして文部省權少書記官に任じ位進みて正七位に至る明治十四年十月職を辭す後ち同志を糾合して後進を誘導し著書を出版す佛學塾を盛大にし及出版局を設立したるは耕造の力多きに居ると云ふ十五年東京府會議員となり常置委員に擧けらる又自由新聞に從事し尋て辭す翌十六年十月病に因て府會議員を辭す是より先き肺症に罹り久くして癒えず終に是の年十一月七日を以て歿す年三十三、著譯する所警察一斑、歐米警察見聞錄、行政訴訟論、初學須知等あり（傳記）

タナカ　カウセツ　田中香雪　畫家なり名は則卿、俗稱米藏、深川仲町に住せり文化年間の人（諸家人名錄）

タナカ　カウナン　田中江南（田中自ら脩して田と云ふ）江戸の儒者なり名は應淸字は子纓、江南は其の號、三郎右衛門と稱す江戸の人、餘熊耳の門に學び三禮を講究して專ら之を敎授す嘗て投壺の禮を研尋し始て其の法を唱ふ投壺指揮、投壺矢勢圖解を著はす（鑒定便覽、續諸家人物志）

タナカ　キウグ　田中邱愚（又た丘隅に作る）循吏なり字は喜古、冠帶老人と號す邱愚は其の號、通稱丘隅右衛門、後兵庫と改む武州八王子の人、本姓窪島氏、幼にして奇才あり兄硯道と書を近隣瀧山の大善精舍に讀む早に神童の名あり後川崎の里正田中兵庫一見之を奇とし請ひて嗣子とし妻はすに女を以てす因て田中氏を冒す後義父に代りて里正となる能く其の任に稱ふ閭鄕其の惠に賴る正德中江戸に遊び物徂徠の門に入り後成島錦江に從ひ經史を講習して已まず邑中子弟に喩告し勸むるに孝悌力田を以てす是より風俗一變詩書を誦し禮讓を尙び學に向ふもの大に起る郡令大岡忠相嘗て幕府に邱愚の用ふべきを言ひ併せて其の著はす所の治民策を上る大に旨に愜ふ享保癸卯召して農政水利の要を問ふ邱愚諱を避けず忠告懇々皆な時情に切なり乃ち十口糧を賜ひ荒川を治めしむ日ならずして畢る又酒匂川を濬はしむ亦殊効あり蓋し酒匂川は百川を會同し霖雨旬日に涉れば隄防壞裂し洪流滔々數里に亘る稱して治め難しとす邱愚之を治せしより永く其の患を絕つ享保十四年十二月擢てられて多摩埼玉二郡縣令となり五萬石の稅入を管し十口糧を加賜す其の任に蒞むに當りて賦稅を均うし冗費を除き徭役を省て公私を利す數月にして縣事大に治まる十月に至り疾俄に起り十一月十一日遂に歿す年六十八、人皆な其才を展ばすに至らざるを惜しむ著はす所治民策の外に民間省要、治水要力、冠帶筆記あり（先哲叢談）

タナカ　キシユン　田中歸春　江戸の書家なり名は五英字は淸友喜左衛門と稱す文化九年十一月十七日歿す江戸深川羅漢寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

タナカ　キンザウ　田中欽藏　陸軍步兵少佐なり長野縣更級郡小島田村の人長じて長野縣師範學校に入り將に卒業せんとするに際し敎師と論爭して遂に退學を命ぜらる後小學校に敎鞭を執りしも久しからずして職を免ぜられしが時恰も自由民權論の熾なる頃なりしかば自ら恪軒と號して「幽囚雜錄」と稱する一册子を脫稿して密に之を上梓し東西に奔走して志士論客と交はり贈るに此書を以てす事當時の出版條例に觸れ囚はれて未決監に在りしが會々陸軍敎導團より入團許可の指令あり官其罪を問はず放還す敎導團卒業後征淸役臺灣守備に從ひて功あり明治卅七八年日露戰役起るや步兵大尉を以て第三師團步兵第六聯隊附として出征し南山得利寺蓋平大石橋等の戰鬪に參加し終に遼陽の大戰鬪に參加せしか卅七年八月三十一日首山堡附近に於て敵彈の爲めに負傷し七嶺子定立病院にて療養中九月十日遂に歿す年四十戰功に依り少佐に昇任し勳四等功四級に叙せらる資性磊落最も詞藻に富むと云ふ

タナカ　キンパ　田中芹坡　近江彦根の人

名は榮初め秀次郎と稱す藥商鶴屋某の子なり幼より業を事とせず中川畊の門に學び詩文を善くし長濱縣十四等出仕を奉ず明治十五年死す年六十八（日本敎育史資料）

タナカ　ギヨクホウ　田中玉峰　書家なり名は爲則字は子翼、俗姓收藏、日本橋木原店に住せり文化頃の人（諸家人名錄）

タナカ　キヨヒサ　田中淸壽　江戸の金工なり文次郎と稱し東龍齋と號す

タナカ　クスノスケ　田中楠之助　勤王の志士なり諱は黏信河内國大縣郡堅下村大字法善寺の人父を兵左衛門と稱し家世々農を業とす天資豪宕少より武を好み家人の生產を事とせず常に劔を學び或は時事を痛論す常に同志と交りて國家の大計を論ず慷慨激烈忠義滿面に溢れ時々或は血淚を流すに至る法善寺は元大久保加賀守の所領たり領主痛く楠之助の擧動を忌み遂に捕へて獄に下す尋いて獄を出づるの後憂國の念益々厚く愈々廣く正義の徒に交りを結ぶ萬延中外舶頻りに渡來して幕府政を失ふと益々甚だし楠之助大に憙び點唱連呼して曰く機到れりと竊に窺ふ所あり此時に方り侍從中山忠光大義を唱へて幕府の非を鳴らし廣く忠義の士を鼓動す四方正義の徒相爭ふて之に赴く天忠組と稱するもの之なり楠之助思へらく天下今日の急務將來の大計此一擧に在り千歳の一遇復際會す可からずと文久三年八月四日遂に家を脫して京師に走り侍從に隨ふ是より常に侍從に侍し大和の擧に從ふ軍敗れて後卿を護して再擧を圖りしも志空しく敗衂し諸士亦四方に散す楠之助猶ほ沮喪せずして之を追跡せしが終に敵兵の捕ふる所となり京都西番所に護送せられ元治元年七月二十四日同所に於て斬らるる時に年二十二明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞して特に從五位を贈らる（甲子殉難士傳）

タナカ　クニヲ　田中邦男　勤王の志士なり名は通胤通稱主馬藏と稱し後邦男と改む大和國十津川の鄕士なり文久三年八月中山侍從忠光の軍に投じたりしが敗走の時紀藩の手に捕はるる後遁れて鄕里に歸り再び同志と共に上京して正親町三條實愛につき建議する所あり幕吏之を探知し慶應元年之を禁獄す明年四月再び脫れて家に歸りしかど在獄中受けたる病再發し十二月九日終に歿す年三十五明治二十四年十二月特旨を以て正五位を贈らる（殉難錄稿）

タナカ　クンアン　田中君安　名は樂美字は君安金峰と號す通稱右馬三郎父名は顯美通稱は內記華城と號すその先は丹波より出づ姓は源、氏は六田、君安三四歲に及んで常兒の戲物を弄せず日に衣冠を着け天朝に趨くの嬉遊を爲す人之を異とす六歲の時神武より仁孝に至るまで歷世の帝王序次を紊さず悉く之を暗記す又名相英將の名皆之を諳し能く其時世を分つ華城其虛弱を患へ未だ句讀を授けざれども君安儿に憑り卷を披き字林玉篇を引き漸く之を讀む十四の時既に父に代つて門徒を聚め左傳を講ず杜註を疑て奇說を發す藤澤泊園之を聞き五絕を賦して以て貽る君安平日見る所はず一日君安進んで和戰海防の策を論じ細かに其の六篇を議す華城君安の議に服し遽かに其稿を改む此時年十五君安十七の時米價沸踊す一日愀然として華城に請ふて曰く聞く問者米價一時に沸踊し窮して乞子と爲る者多しと些少と雖ども我が藏する所の束脩を傾け米を買ふて之を賑はさんと華城大に感じ即日囊金を出し君安の意の如くす性虛弱屢々病む病中猶華城に代つて素問及び論語八大家讀本を講ず而して冉々衰憊遂に大漸に及ぶ紙筆を求めて自から永訣の作二首を書し遂に歿す實に文久二年壬戌六月二十八日也年僅に十九中寺街妙壽寺先塋の側に葬る著す所大阪繁昌詩三卷、雜體詩三卷、文一卷、金字編四卷、金匱要畧正義一卷、及び漫錄三卷（田中君安傳）

タナカ　クラザウ　田中倉藏　陸軍步兵少尉なり三重縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て豫備役より召集せられ第三師團步兵第六聯隊附として從軍中三十七年八月卅一日淸國盛京省首山堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タナカ　クワンイチ　田中貫一　陸軍步兵中佐なり東京府出身にして明治卅七八年日露戰役に於て第九師團步兵第三十六聯隊附として從軍中卅七年十二月廿八日旅順要塞二龍山に於て戰死す戰功に依り中佐に昇任し勳四等功四級に叙せらる

タナカ　ケイジ　田中圭二　舊鹿兒島藩士にして明治十年西南役に於て三等少警部を以て別働隊第三旅團附と爲り從軍し八月三十一日大隅國始羅郡蒲生門に於て戰死す

タナカ　ゲンゴ　田中源吾　「コンドウヨシキ」

タナカ　ゲンサイ　田中玄宰　會津藩の老職なり初め玄堅と名づく通稱は小三郎後加兵衛と更め又た三郎兵衛と改たむ其先は玄儀、伊勢の人武田氏に事ふ孫正玄始めて會津藩祖土津侯に仕ふ侯之を優遇し祿四千石を賜ふ玄宰は其の四世の孫なり父は玄興數馬と稱す家を承けて幾ばくもなく死す玄宰時に甫めて十三嗣て秩千石を廕授せらるる時に寶曆十年なり明和二年に至りて使番となり奏者番小番頭に累歷し奉行となるに至りて落成す賞賜あり天明元年若年寄となり十一月九年藩和田倉本邸を營み玄宰をして之を督せしむ明年家老となる四年久しく病むを以て職を辭し五年に至りて疾癒えて職に復す寬政二年秩三百石を加へ賜ふ四年玄宰に命じて藩祖の廟祭儀註を修正せしむ既にして成る賞賜あり六年江戸城南火を失し延きて別邸を燒く玄宰又督して邸を營む八年秩二百石を加賜せらるる時に士大夫往々昌平を恃みて安逸に狃れ因循苟且して振作する所なし玄宰之を慨す乃ち大に黌舍を營み號して日新館と曰ふ以て學政を振興す又た演場を修して武技を課習し以て戒備を嚴にし闔藩の子弟をして學に就かしむ皆自から之を奬勵す風化大に行はる享和三年大老と爲り米廩を加賜し并せて三千石と爲し騎卒數隊を以て之に隷せしむ四年蝦夷の城に洋警あり官會津及び仙臺に命じ軍を發して北裔を戍らしむ時に欽文侯年少なり玄宰其事を攝行す部勒精整措置宜きを得たり洋人敗て侵掠せず幾ばくもなくして病に罹る欽文侯侍醫を遣はし就て治せしめ又た藥材を賜ふ易簀するに及びて侯殊に之を悼み闔藩痛惜して已まず玄宰三世に歷仕し老職に在る二十一年終始一の如し人となり溫厚弘毅にして性墳籍を嗜しみ志經に在りて區々たる章句を屑とせず射御兵法の諸藝に至りては咸な要領を究む諸有司疏記を納むる日々に數十牘を累ぬ之を讀みて詳悉斷決流るゝが如し皆な悅服して復た一事の追改することあるなし

恭泰侯嘗て官の命を奉じて會津風土記を重修し玄宰をして之を總裁せしむ時に公事繁劇にして絶えて餘暇なし稿を起すは多く肩輿中に成る其の精力人に過絶すること此くの如し眞昭侯の病に罹るや玄宰夙夜側に侍して看護し湯藥親ら嘗め傍ら庶務を營む十有餘日未だ嘗て睫を交へず既にして逝す欽文侯嗣ぐ尙ほ幼、玄宰力を盡して之を輔翼し乃ち輔導規則一卷を作り之を近侍に授く其の至誠至忠なる率ね此くの如し玄宰の嗇頭たるや屬士に性偏急なる者あり少しく觸忤するあれば則ち暴怒忽ち熾んなり同僚之を憂ひ以て玄宰に訴ふ玄宰曰く卿等宜く誘ひ至るべし我且つ之を戒めんと訴ふる者曰く彼は狂のみ爲す所實に測られずと曰く第ゝ須らく至らしむべし卿等憂ふる勿れと同僚以て其士に告ぐ士憤然として謂ふ言若し合はざれば即ち一擊あるのみ長官何ぞ畏るゝに足らんと至れば則ち玄宰其の過失を歷擧して少しも假借せず且つ曰く爾改むれば則ち可なり否らざれば則ち豈に生路を得んやと色貌儼然辭氣悃欵士逡巡して屈服し愧謝して去る其の人の爲めに長服せらるゝと此くの如し其の政を執るに方りて一士あり政事の不便數條を記し將に以て玄宰に告げんとして之を蓄ふると數日乃ち敢て之を視めす玄宰展べて之を讀む其の意懇到にして事皆な鄙瑣一の採る可きなし然れども一條毎とに輙ち嗟嘆し讀畢りて曰く他に尙ほ議する所あれば則ち或は匿すなかれと士感喜流涕して退く其の度量の宏豁にして能く人言を容るゝ亦た此くの如し(事實文編)

タナカ ケンサイ 田中謙齋 飫肥藩の儒者にして名は通德字は士潛兵藏の子にして藩の小吏たりしが天保九年志を懷いて東上し安井息軒及び林氏の門に學び歸りて藩の文學となる晚年脚疾を患ひて死す(日本教育史資料)

タナカ ケンザブラウ 田中健三郎 舊藝州藩士田中善平の五男なり維新の際兄正元と共に王事に勤め明治元年十二月鑛山司に出仕し以來外交官宮內式部官帝國制度取調掛內國勸業博覽會委員閑院宮家令內大臣秘書官北白川宮家令皇后職侍從職等に歷任せり四十一年一月二十九日病を以て逝く年六十四

タナカ ケンスケ 田中謙助 勤王の志士なり諱は盛明初め直之進と稱し後謙助と改む鹿兒島藩士なりもと池田氏を稱せしが出でゝ田中氏を嗣ぎ草牟田村に住す幼より文學を好み業大に進み撰ばれて造士館の訓導と爲る劍を伊集院某に學び又砲術を學び技大に長ず嘉永以後幕府の政宜しきを失ふや謙助憤慨措く能はず機を見て爲すとあらんとす安政の末江戸に出て中小姓を勤め東西に奔走す文久二年四月謙助の大阪に在るや有馬新七と共に什長永田佐一郎の部下に伍長たり密に新七等と謀り大義を唱へ姦吏を斬り以て夷狄を攘はんと欲し二十三日を以て大阪の藩邸を脫し伏見に至らんとして乘舟淀川に溯る會ゝ奈良原喜左衛門海江田武次堤上を過ぐ謙助以爲らく其意必ず我を諭すにあらんと急に銃を執りて之を狙擊せんとす而して火繩を遺れたるを知り乃ち腰間帶ぶる所の手巾を裂き栞と爲し火を點ぜんとすれども火忽ち消え再三にして遂に果さす既にして船伏見に着し寺田屋に投じ九條邸襲擊の手配を爲す奈良原幸五郎等繼て至り久光の命を宣べ之を諭すと雖も衆皆肯ぜず激論數次謙助奮て曰く我等の意已に決す假令命令なりと雖も復如何ともするゝと無しと言未だ終らざるに鎭使道島五郎兵衛刀を拔き上意なりと呼びて謙助を斬る眼睛奔放氣絕せしが間もなく蘇生し藩邸に送らる翌二十四日朝違命の廉を以て改めて死を賜はりしかば謙助自ら眉間の血を洗ひ遙に京都に向ひ再拜し更に藩主の在城を遙拜して後割腹せり野津七左衛門之を介錯す時に年三十五伏見大黑寺に葬る忍辱院寂然謙了居士と諡す明治二十四年十二月朝廷其忠志を追賞し特に從四位を送らる(伏見殉難士傳、殉難錄稿)

タナカ サタラウ 田中佐太郎 陸軍步兵少尉なり福井縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し步兵第三十六聯隊附として從軍中卅七年八月二十日旅順要塞龍眼北方角面堡壘に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タナカ ゲンチュウ 田中愿中 醫者なり名は榮信、愿仲は其の號、字を以て稱せらる播磨の人、吉益東洞の門人なり大阪に居る畑惟和の斥醫斷を著すや其產蓐、陰陽、醫意、癥疔、金瘡の諸論皆東洞の未だ言はざる所愿仲正に之を闡發す師門に功ありと謂ふべし著書辨斥醫斷の外長沙證粟、傷寒論逆原等あり(皇國名醫傳)

タナカ シウザン 田中周山 醫者なり初め名は三貞長崎の人、四三傳に從て學ぶ延寶中三傳薦めて藥を后宮に上らしむ功を以て法橋に叙す既にして三傳と協はず辭して鄕に歸り今名に改む周山藥を用ふる古方に泥まず時に隨ひ宜きを制す最も能く治否を洞決し言として驗あらざるなし大村侯延て客となす侯の子重員江戸に在り疾を患ふ周山往きて之を療す未だ幾ばくならずして痊ゆ元祿中侯に從ひ江戸に在り幕府の醫官杉浦玄流年七十を過ぎ請ひて弟子の禮を執る其の人に推重せらるゝ此くの如し(皇國名醫傳)

タナカ シキウ 田中止邱 (田中自から脩して田とす) 水戸藩の文學なり名は犀字は一角、止邱は其の號、理助と稱す幼にして孤なり年十一兄と同じく小濱侯に仕て若狹に赴く承應壬辰侯命に因り江戸に來りて業を林羅山に受く學成り擢てられて藩の儒員となる寬文甲辰母の疾を以て致仕し京に歸りて孝養す幾くもなく母歿す乃ち再び江戸に至り辻端亭の薦を以て水府に仕へ國史編輯の事に預る止邱少壯の時より心を史學に留め史漢を環讀すると數十回其の水府に筮仕するに及びて本土の典誥を講究し六史に精通す人質問するあれば本書を引用するを待たずして答辭剖晰す人其の强識に服す嘗て世の學士徒に博洽を事とし五經に精熟せざるを嘆き建議して漢時專門の學の如く專ら一經に通ぜんことを請ふ義公之を嘉納し諸儒をして分て之を治めしむ易は人見傳、書は吉弘元常、詩は板垣矩、禮は中村顧言、春秋は止邱とす平生朱舜水と交り親し安積老牛初め止邱に學ぶと云ふ止邱初の名は麟少壯の時長崎の僧玄兆と詩律を論辯し之れが爲めに說破せられて抗爭する能はず世に傳ふる所の儒釋筆陣是れなり林鵞峯之を讀み止邱の筆鋒の萎弱なるを怒りて曰く麟一角は今まさに犀一角に作るべしと是れより後名を犀と改むと云ふ天和二年八月二十五日歿す年四十六(先哲叢談、耆舊得聞)

タナカ シトク 田中士德 勤王の志士なり諱は綏猷字は士德別號を恭堂又臥龍といふ河內介と稱す但馬國出石郡香住村の醫師小森正造の次男なり幼名を賢次郎と呼ぶ夙に井上靜軒に從ひて和漢の字を修め天保十一年の初め京都に上り中山家の仕人となり同家の諸大夫田中氏に養はれ河內介に任じ從六位に叙せらる嘉永以後幕府の施政宜しきを失ふを見士民の間に奔走する所あり然れども之が爲め主家に累を及ぼさんとを慮り情を陳べて職を辭し家に隱退す諸國の志士來り訪ふ者頗る多く遂に幕吏の怪む所となりしかば文久二年の春京を出奔して大阪に下り薩藩邸に隱れ竊かに柴山愛次郎、橋口壯介及び其他の有志と共に計畫する所あらんとす偶ゝ島津久光が上京するを聞き平野國臣海賀直求等と久光を路に要し尊攘の議を建てられんとを懇願せしに久光其志を嘉し厚く勞らひて伏見まで同行したり然るに四月二十三日寺田屋騷動の事ありてより一味の黨與は悉く其藩に引渡さるゝとゝなれり河內介も亦薩州に護送せらる途中寺田屋事件の謀主と目せられ海中にて護衛の士の爲めに殺さる時に文久二年五月二日なり年四十餘其子磋磨介も亦此時共に斬らる年十八明治二十四年四月朝廷其忠志を追賞し特に正四位を贈らる(殉難錄稿)

タナカ スミタカ 田中純孝 舊鹿兒島藩士にして明治十年西南役に於て三等少警部を以て別働隊第三旅團附と爲りて從軍し六月二十四日薩摩國鹿兒島郡鹿兒島西田村に於て戰死す

タナカ セイゴ 田中省吾 (田中自ら修して田と云ふ) 詩人なり名は省、省吾は其字、一字は宗磐、霅華道人と號す物徂徠の詩友なり初め徂徠と共に柳澤侯に仕ふ後ち致仕して京攝に游ぶ晚年姓を富名を逸字を春叟號を桐江と更め京都に游ぶ所謂る富春山人是なり或は曰ふ詩纂に田省吾と富逸は別人なりとす守山侯は親しく徂徠に遇せるを以て省吾の事に於て訛なかるべし著述に東海漫遊稿、樵漁餘滴あり寬保三年二月四日歿す(諸家人物志)

タナカ セイダウ 田中晟堂 愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て日本赤十字社醫員として從軍中三十八年八月二十六日淸國盛京省遼陽兵站病院に於て病に罹り同九月十二日同所に於て病死す

タナカ セイホ 田中誠輔 長藩の士嘗て浦賀及び兵庫に戍役す元治元年六月福原越後江戸に使するに從ひ伏見驛に至り越後脫藩の士鎭撫の爲めに止て行かず七月十九日曉遂に闕下の變起りしかは藤森に戰ひ創を被ふり船に乘り淀川を下る敵兵之を櫻宮に要して捕ふ創甚しくして戰ふ能はず遂に他の負傷者と共に割腹して死す時に年三十四五歲なり(甲子殉難士傳)

タナカ セキ 田中積 海軍少尉なり佐賀縣の出身にして海軍兵學校卒業の後明治卅七八年日露戰役起るに及び少尉候補生として軍艦初瀨に乘組めり卅七年五月十五日旅順港外に於て初瀨敵の機械水雷に罹りて艦と共に壯烈なる戰死を遂げたる後戰功によりて少尉に陞任せられたり艦の將に沈沒せんとするや少尉は事の危急なるを見直に艦內に安置したる御眞影を外して艦長室の次室に移し又火藥庫の上部にありし分隊箱(總艦員の履歷等を記したる書類を收むる重要なる箱を上甲板に運ぶ等)萬事勇敢敏捷に動作したるは司令官艦長等の嘆稱して措かざる所なりとぞ

タナカ ゼンジ 田中善次 陸軍步兵少尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役起るに際し第七師團步兵第二十五聯隊附として從軍中卅七年十一月卅日旅順方面に於て戰死す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

タナカ センチク 田中川竹 狩野派の畫家なり畫法を狩野常信に學ぶ(扶桑畫人傳)

タナカ ソウエキ 田中宗益 德川氏の髡竪なり老練滑脫にして髡竪中最も名あり言を出す毎に人の意表に出て人をして一言の下に服せしむ嘗て宴に權貴に侍す壁に俵屋宗達畫く所の櫻花を揭ぐ古色黯澹として款印を辨ぜず宗益一見嘖賞稍久しく以て明畫と爲す權貴叱して曰く櫻花は彼邦に無き所なり汝豈に之を知らざるか宗益曰く我邦人虎を畫くことあり公豈に之れを忘れしやと一座啞然たり又其隣家の一顯官時々鉀馬の警あり顯官嘗て朝に在り之に戲れて曰く即ち北風に遇はゞ切に汝の注心を要せんと宗益聲に應じ答へて曰く南風に遇はゞ亦君を煩はさんと其の機警概ね此の如し(黃粱一夢)

タナカ ソウトク 田中宗得 加州藩の國學者たり一閑叟と號す一閑を以て通稱と爲す平安の人、學家江戸に移居す時に江戸に吉川惟足と云ふ者あり神道學に精通す宗得從ひて其秘蘊を受く寬文六年加州の太守松雲侯徵して俸十口及び金五十兩を賜ふ延寶八年朋に神事俸二口白銀五枚を賜ふ貞享二年八月十一日江戸邸に於て始めて神代卷を講ず侯命じて衆臣をして之を聽しむ是より例月之を講ず侯其の說を喜び寵遇殊に渥し元祿九年又俸十口を增す宗得子なし式如(左源太)を養ひて嗣となす元祿十三年歿す(燕臺風雅)

タナカ タイクワン 田中大觀 (自から修して田とす) 京都の儒者なり名は璜、字は文瑟、大觀は其の號、與三郎と稱す平安の人、父由眞算術を以て世に崇重せらる大觀幼にして孤なり父の門人川田中易に兄事して其の訓督を受け能く其の術に通ず又父の門人中井璋と云ふものあり尤も天學に精し大觀之に從て星學を講究す弱冠にして其の技老生の間に著はる又宇明霞に從て儒を學ぶ明霞大觀より長ずること十二歲而れども後進を以て之を遇せず屢ゝ其人となりを稱す文章に長じ尤も音韻の學に精し特に吳音を善くし亦俗語を解す遍く支那近時の小說稗乘を覽傍ら院本雜劇邦人の了解し難きものを譯す是より先き諸儒の未だ有らざる所なり享保廿年十一月十九日歿す年二十六著はす所尙書天文解、天經或問解、天學指要、聲韻徵闡、名公四序評、大觀隨筆、大觀遺稿あり(先哲叢談)

タナカ タイシウ 田中大秀 和學者なり一の名は月滿(舊紀文と云ふ)湯津香木園又千種園、荏野翁と號し彌兵衛と稱す飛驒の人なり鈴屋翁に從ひて學び國學並に和歌を能くす飛驒に國學和歌の盛なるは其の功なり傍ら笙、篳篥及び箏、琵琶を巧みにし從學の人多かりしと云ふ弘化四年九月十六日歿す年七十二著す所竹取物語解、土佐日記解、蜻蛉紀行解、落凹物語解、養老美泉辨、柿の一本、荏野集等あり(小傳)

タナカ ダイシン 田中大心 吉田派の射術家なり吉田重高の門人にして京都に名あり大心流を唱ふ

タナカ タキヲ 田中多喜男 陸軍步兵大尉なり熊本縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第五師團步兵第十一聯隊附として從軍中卅八年三月一日淸國盛京省王家窩棚に於て戰死す戰功に依り勳五等

功五級に叙せらる

タナカ　タダマロ　田中多太麻呂　寮守

中中衛員外少將兼上總員外介に任じ從五位上に叙せられ東海道節度副使、陸奥守、兼鎮守副將軍となり尋で鎮守將軍に拜せらる景雲中伊治城成るや敕して曰く陸奥國の奏に因て伊治城の成るを知る版築の功三旬に諧じて氣に功績を成す夫れ危きに臨みて生を忘れ命を奉たず朕甚だ焉を嘉す夫れ危きに臨みて外を制するの人非ず誠に戍を減じ邊を安んずるに足る若し褒進せざれば後徒を勤むるを得ず酬賞を加ふべし從四位下田中朝臣多太麻呂に正四位下を授け外從五位下道島宿禰三山は首として兇の謀を建つ今其功を美みし特に從五位上を賜ふ外從五位下吉彌侯部眞麻呂は率先力を盡し狄徒調服の功を以て外正五位下を賜ふ軍毅以上及び諸國軍士殿寃囚の事に臨みて功あり位を賜ふべき者は鎮守將軍宜く奏聞すべしと多太麻呂上言して曰く凡そ兵士たるものは機會を待ち生を輕んじ勇奮先を爭ふを要す而るに比年諸國より發する所の戍兵は好みて逃亡す請ふ國中の四千人を選用し以て戍兵二千五百人を減ぜん又此地寒甚しく積雪消え難し運輸不便なり苟らくは調庸を京庫に運輸する十年に一度の定とせんと之を許す又上言して曰く他國鎮兵の我が邊戍に在るもの三千餘人なり其中二千五百人符を被り既に罷む遠る所の五百餘人をして諸塞を守らしめんことを天平寶字三年の符を被りて柵生柵戸に配せらる浮浪一千人將さに城下に至らんとし相繼て逃亡す當今の計三丁以上を有せる戶二百を募り城郭に實し永く邊防となし漸を以て鎮兵を省くにありと太政官議奏して曰く鄕土を懷ふは人情の常なり無罪の民を邊城の戍に配す其逃亡する亦た已むを得ざるなり若し二城の沃壤に就て三農の利を求めんとする者あらば當國と他國とを論ぜず之を許し法外の給與をなし人をして遷を樂しめ以て邊戍となさんと奏可す入て宮內大輔となる寶龜中民部大輔を歷て奥濃守を兼ぬ後ち右大弁兼出雲守に轉じ九年卒す（大日本史）

タナカ　タリマロ　田中足麻呂　伊勢湯沐邑の令たり壬申の亂に天武帝を鈴鹿に迎へて倉歷道を守る位直廣壹たり文武帝の二年卒す直廣壹を贈る

（大日本史）

タナカ　チャウイウ　田中長祐　陶工なり佐々木氏俗稱長次郎後に田中氏を稱す其の父は韓人にして宗慶と稱し陶法に精し長祐父に就き陶法を學び名手と稱せらる其の製品を京燒又今燒と稱す天正十五年豐臣氏邸宅を聚樂に築き長祐を召して其の邸內に居らしめ一窯を設け茶器及び瓦等を製せしむ瓦に樂字を印すこれを聚樂窯といひ略して樂燒といふ文祿元年九月七日歿す年四十七長祐茶家千宗易と交はる深し宗易の需めに應じて作りし七箇の茶碗は名物として後人の珍賞する所なり（樂燒系圖、樂吉左衛門書上、雍州府志、工藝鏡）

タナカ　ツグヨシ　田中世誠　彦根藩の武術家なり通稱藤十郎後に五介と改め致仕して散木と稱す鎗術の功を以て外正五位下を賜ふ軍毅以上及び諸國軍士殿寃囚の事に臨みて功あり位を賜ふべき者は鎮守將軍宜く奏聞すべしと多太麻呂上言して曰く凡そ兵士たるものは機會を待ち生を輕んじ勇奮先を爭ふを要す而るに比年諸國より發する所の戍兵は好みて逃亡す請ふ國中の四千人を選用し以て戍兵二千五百人を減ぜん又此地寒甚しく積雪消え難し運輸不便なり苟らくは調庸を京庫に運輸する十年に一度の定とせんと之を許す又上言して曰く他國鎮兵の我が邊戍に在るもの三千餘人なり其中二千五百人符を被り既に罷む遠る所の五百餘人をして諸塞を守らしめんことを天平寶字三年の符を被りて柵生柵戸に配せらる浮浪一千人將さに城下に至らんとし相繼て逃亡す當今の計三丁以上を有せる戶二百を募り城郭に實し永く邊防となし漸を以て鎮兵を省くにありと太政官議奏して曰く鄕土を懷ふは人情の常なり無罪の民を邊城の戍に配す其逃亡する亦た已むを得ざるなり若し二城の沃壤に就て三農の利を求めんとする者あらば當國と他國とを論ぜず之を許し法外の給與をなし人をして遷を樂しめ以て邊戍となさんと奏可す入て宮內大輔となる寶龜中民部大輔を歷て奥濃守を兼ぬ後ち右大弁兼出雲守に轉じ九年卒す（大日本史）

タナカ　ツネノリ　田中常矩　京都の俳人なり眞齋と號す初片桐貞深の門に學び後一家を成す父風致あり松風軒と號す立甫の門人なり

タナカ　カキツ　田中館佳橘　陸軍大本營附を命ぜられ後聯合艦隊と共に海外へ差遣せられ二十九年四月臺灣總督府民政局事務官に任じ間もなく非職仰付けられ同九月貴族院議員に勅任せられたり是より先き日清戰役中の功に依り旭日中綬章及び年金二千五百圓を授けらる三十三年六月後備役仰付けらる三十六年三月二十五日病を以て逝く年五十九

タナカ　ティキチ　田中貞吉　南米探檢の率先者なり舊防岩國藩士なり明治五年藩主に扈從して米國ボストン府に遊學し歸朝後海軍省に奉職す後愛知縣富山縣の中學校長となり東京郵便電信學校長に任ず二十七八年日清戰役に第二軍郵便部長及び占領地總督部郵便部長に任じ功を以て勳五等雙光旭日章及び年金百圓を賜はる大に海外殖民事業を起さんとして南米を探檢し足跡到らざるなし三十二年森岡商會が初めて秘露に移民を送れるも其靈策に基づく三十八年東洋汽船會社が南米航路を開始するに至るも主として真吉の調査に待つと云ふ三十八年十二月九日東京に於て病歿す年四十九

タナカ　トキナリ　田中時哉　陸軍歩兵少尉なり岐阜縣出身にして明治卅七八年日露戰役起るや第三師團歩兵第十八聯隊附として出征し卅七年十二月十九日奉天省馬圈子に於て戰死す

タナカ　トウホウ　田中東峰　篆刻家なり名は眞秀字は白玉淺草廐前代地に住せり（諸家人名錄）

タナカ　トツゲン　田中訥言　京都の畫家なり名は痴字は虎頭大孝齋と號す法橋に叙す尾張の人平安に住す曾て藤原信實の畫軸を見て之を模し研究して其格を得た古畫の風致を得たり古畫の格に詳なると此人の右に出る者なし因て世頗る賞譽して其畫を珍とす殊に衣冠の人物宮殿の圖に妙手なり訥言常に云ふ我若し明を失せば則ち死すべしと晩年に至りて盲人となる訥言貪性剛直清廉一も言を貪むなし而して盲目となる人是を危ぶむ訥言言に曰かず死なんと欲して食を斷つ數日命未だ盡ず遂に自ら舌を噬みて死す人これを哀む時に文政六年三月廿一日なり門人渡邊清浮田一蕙是を兩翼となす（古今雅俗石亭畫談）

タナカ　トミジ　田中富次　陸軍歩兵大尉なり舊越後長岡藩士田中敬次郎の次男にして士官學校卒業後明治三十二年歩兵少尉に任ぜらる卅七八年日露戰役起るや第九師團歩兵第七聯隊附として從軍し旅順攻圍中卅七年八月の總攻擊に部下を率ゐて東盤龍山砲臺に向ひ數回の突擊を以て先登第一同砲臺を拔き乃木司令官より感狀を授けらる旅順陷落後北上して卅八年三月の奉天附近の會戰には最左翼に屬し行く〳〵敵を擊攘して同月十日奉天の北方三里許なる小新屯附近に到り優勢の敵に會して之と對戰する中敵彈に中りて重傷を負ひしかど部下の曹長に指揮を命じ尙遺書を認めさせ勅諭を朗讀しつゝ從容として後送されしが同十二

ず二十七八年日清戰役に第二軍郵便部長及び占領地總督部郵便部長に任じ功を以て勳五等雙光旭日章及び年金百圓を賜はる大に海外殖民事業を起さんとして南米を探檢し足跡到らざるなし三十二年森岡商會が初めて秘露に移民を送れるも其靈策に基づく三十八年東洋汽船會社が南米航路を開始するに至るも主として真吉の調査に待つと云ふ三十八年十二月九日東京に於て病歿す年四十九

タナカ　トキナリ　田中時哉　陸軍歩兵少尉なり岐阜縣出身にして明治卅七八年日露戰役起るや第三師團歩兵第十八聯隊附として出征し卅七年十二月十九日奉天省馬圈子に於て戰死す

タナカ　トウホウ　田中東峰　篆刻家なり名は眞秀字は白玉淺草廐前代地に住せり（諸家人名錄）

タナカ　トツゲン　田中訥言　京都の畫家なり名は痴字は虎頭大孝齋と號す法橋に叙す尾張の人平安に住す曾て藤原信實の畫軸を見て之を模し研究して其格を得た古畫の風致を得たり古畫の格に詳なると此人の右に出る者なし因て世頗る賞譽して其畫を珍とす殊に衣冠の人物宮殿の圖に妙手なり訥言常に云ふ我若し明を失せば則ち死すべしと晩年に至りて盲人となる訥言貪性剛直清廉一も言を貪むなし而して盲目となる人是を危ぶむ訥言言に曰かず死なんと欲して食を斷つ數日命未だ盡ず遂に自ら舌を噬みて死す人これを哀む時に文政六年三月廿一日なり門人渡邊清浮田一蕙是を兩翼となす（古今雅俗石亭畫談）

タナカ　トミジ　田中富次　陸軍歩兵大尉なり舊越後長岡藩士田中敬次郎の次男にして士官學校卒業後明治三十二年歩兵少尉に任ぜらる卅七八年日露戰役起るや第九師團歩兵第七聯隊附として從軍し旅順攻圍中卅七年八月の總攻擊に部下を率ゐて東盤龍山砲臺に向ひ數回の突擊を以て先登第一同砲臺を拔き乃木司令官より感狀を授けらる旅順陷落後北上して卅八年三月の奉天附近の會戰には最左翼に屬し行く〳〵敵を擊攘して同月十日奉天の北方三里許なる小新屯附近に到り優勢の敵に會して之と對戰する中敵彈に中りて重傷を負ひしかど部下の曹長に指揮を命じ尙遺書を認めさせ勅諭を朗讀しつゝ從容として後送されしが同十二

タナカ　ツネノリ　田中常矩　京都の俳人なり眞齋と號す初片桐貞深の門に學び後一家を成す父風致あり松風軒と號す立甫の門人なり

タナカ　カキツ　田中館佳橘　陸軍大本營附を命ぜられ後聯合艦隊と共に海外へ差遣せられ二十九年四月臺灣總督府民政局事務官に任じ間もなく非職仰付けられ同九月貴族院議員に勅任せられたり是より先き日清戰役中の功に依り旭日中綬章及び年金二千五百圓を授けらる三十三年六月後備役仰付けらる三十六年三月二十五日病を以て逝く年五十九

タナカ　ティキチ　田中貞吉　南米探檢の率先者なり舊防岩國藩士なり明治五年藩主に扈從して米國ボストン府に遊學し歸朝後海軍省に奉職す後愛知縣富山縣の中學校長となり東京郵便電信學校長に任

タナカ

功に依り中佐に昇任し勳四等功四級に叙せらる

タナカ　ヂザブラウ　田中治三郎　海軍船匠長なり長崎縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て軍艦初瀨乘組在職中卅七年五月十五日旅順口附近に於て初瀨沈沒の際戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タナカ　チャウクラウ　田中長九郎　京都の商人なり夙に勤王の誠有志と交はり國事に周旋す元治元年遂に幕吏の爲めに獄に投ぜられ同年十一月遂に獄中に死す

タナカ　ヂャウタラウ　田中錠太郎　陸軍歩兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第四師團歩兵第九聯隊附として從軍中三十八年三月四日清國盛京省來神堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タナカ　ツナツネ　田中綱常　海軍少將なり鹿兒島藩士にして明治四年陸軍大尉心得となり七年臺灣征討に從軍し西南の役には海軍將校として熊本總督本營に出張して功あり勳五等に叙せられ年金百二十圓を賜はる十二年兵學校監學課副長となり次で筑波艦に乘組を命ぜられ海軍少佐に進む十六年海軍中佐に任ぜられ十九年一月兵器製造所長に補せらる二十一年四月海軍造兵廠長に補せらる幾もなく本職井に兼職を免じて金剛艦員外乘組を命ぜられ同七月南洋諸島巡視を命ぜらる二十三年比叡艦長となり翌年迅鯨艦長に轉じ更に吳鎭守府兵器部長に補せらる二十六年六月海軍少將に任じ正五位に叙し肇備役仰付けらる二十八年二月大本營附を命ぜられ後聯合艦隊と共に海外へ差遣せられ二十九年四月臺灣總督府民政局事務官に任じ間もなく非職仰付けられ同九月貴族院議員に勅任せられたり是より先き日清戰役中の功に依り旭日中綬章及び年金二千五百圓を授けらる三十三年六月後備役仰付けらる三十六年三月二十五日病を以て逝く年五十九

タナカ　チャウクラウ　田中長九郎　京都の商人なり夙に勤王の誠有志と交はり國事に周旋す元治元年遂に幕吏の爲めに獄に投ぜられ同年十一月遂に獄中に死す

タナカ　ヂャウタラウ　田中錠太郎　陸軍歩兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第四師團歩兵第九聯隊附として從軍中三十八年三月四日清國盛京省來神堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タナカ　ツナツネ　田中綱常　海軍少將なり鹿兒島藩士にして明治四年陸軍大尉心得となり七年臺灣征討に從軍し西南の役には海軍將校として熊本總督本營に出張して功あり勳五等に叙せられ年金百二十圓を賜はる十二年兵學校監學課副長となり次で筑波艦に乘組を命ぜられ海軍少佐に進む十六年海軍中佐に任ぜられ十九年一月兵器製造所長に補せらる二十一年四月海軍造兵廠長に補せらる幾もなく本職井に兼職を免じて金剛艦員外乘組を命ぜられ同七月南洋諸島巡視を命ぜらる二十三年比叡艦長となり翌年迅鯨艦長に轉じ更に吳鎭守府兵器部長に補せらる二十六年六月海軍少將に任じ正五位に叙し肇備役仰付けらる二十八年二月大本營附を命ぜられ後聯合艦隊と共に海外へ差遣せられ二十九年四月臺灣總督府民政局事務官に任じ間もなく非職仰付けられ同九月貴族院議員に勅任せられたり是より先き日清戰役中の功に依り旭日中綬章及び年金二千五百圓を授けらる三十三年六月後備役仰付けらる三十六年三月二十五日病を以て逝く年五十九

タナカ

五左衛門と稱す後藤利兵衛光倫に從ひて學び後ち江戶湯島天神下に住し其の術を以て世に現はると云ふ（裝劍奇賞）

タナカ　ヒサシゲ　田中久重　筑後久留米の人なり通稱は儀右衛門後に近江と更む（弘化四年蛟峨御所大覺寺宮より近江大掾の稱を受領す）寛政十一年九月十八日を以て久留米に生る性慧敏幼より機巧を好み九歲の時自から硯函を製す其抽斗の鈕を活動せしめこれを捻れば人啓くこと能はず見る者其巧致に驚くこれより覃思精研し水力を運用することに注意し戲に水力を以て音樂を奏し偶人を舞踏せしむ文政三年風砲を造る天保五年京都に遊ぶ後踏園し再び妻子を携へ大阪上町に寓す同七年大蹶平八郎の亂に遇ひ家財悉く烏有となるたゞ澤瀉漬二樽を取出せるのみこれを窮人に施與し避て伏見に卜居す此時鼠燈、無盡燈、懷中燭臺等の發明創製あり、無盡燈は大に世に行はる弘化三年の頃防火の排水器を創製すこれを洋製のポンプに遙ふことなし弘化四年曾某の闘する所に據て須彌山儀を造る嘉永年間萬年時計を製す始め須彌山儀及萬年時計を造らんとするにあたり日月星宿の經度を撥り推步の術に趨せざれば爲すと能はず由て天文方戶田永左衛門に就き極小路土御門家へ入門し（束修金五十兩なり）伏見より梅小路まで二里程毎日黃昏に家を出て夜九ッ時（今の十二時）に歸宅す通學日數五十日間風雨を衝き一日も怠たらず既にして樂成りこの二器を製し始むといふ嘉永五年蒸汽船雛形二艘を造る一艘は車輪形一艘はスクルー形なり世人其奇巧を賞贊せり本邦蒸汽船製造の嚆矢といふべし是に於て名聲稱〻世に高し安政元年肥前佐賀藩主其國の精錬所に聘し銃砲其他の器械を製作せしめまた長崎に往き蘭人に就て工藝を研錬せしむ此より技術益〻進む後佐賀に在て電龍艦百馬力の蒸汽鐘十馬力の蒸汽船及び一切の器械を製しまた幕府の命を以て四十馬力の蒸汽鐘を作り幕府より賞賜ありまた品海臺場へ据付の大砲三十六ポンド數十挺鑄造のこと幕府より佐賀藩へ依頼あり久重みなこれを製造す幕府また其功勞を賞して金若干を賜ふ元治元年鄕國に歸る藩主擢て士族となし三人口米拾五石を給し製造所の長となす此より

タナカ

養子儀右衛門を佐賀に遣はし自から久留米に在て專ら器械製造に從事す銅製九十封度アルムストロング元込線砲及び銅製三十封ンド其の他許多の小銃を造る慶應二年支那上海に遊び諸種の器械を觀、頗る發明する所ありて昇水、精米、淺川等の諸器を製す明治六年東京に上り京橋南金六町に卜居し專ら製鐵業に從事し事業次第に隆盛に赴き數十名の工夫を使役するに至る時に年七十五といふその製作する所の中かの萬年時計の如きは實に精巧を極め一たび鑰を用ひて其機關を活動せしむれば終歲發々の聲を絶たず第一勸業博覽會に出品して世人の賞贊を博せし所なり久重人となり溫和寡言一事を爲さんと欲する時は晝夜沈默思慮を凝らし其精力老に至るまで衰へず平素甚だ淡泊寡欲なり嘗て水力を用ひ偶人を舞踏せしむるの工夫をなすや久留米なる五穀神社祭禮の時及び大阪道頓堀に於て諸人の縱覽に供したりしが之れに由て得し所の錢は牛車に載せて運搬するに及ぶしかるを皆酒肉を買ひ門人家奴等を集めて共に快飲し家に一錢を留めずと云明治十四年十一月七日病を以て卒す年八十三青山墓地に葬る養子儀右衛門先て卒す金子庄右衛門の第六子大吉を養ふて箕裘を繼ぐ則ち二代久重是なり益〻事業を擴張し製鐵場を芝浦に建設し規模頗る廣大なり(田中久重翁)

タナカ　ヒサシゲ　田中久重　幼名大吉久留米市呉服町金子庄左衛門の七男なり田中氏に養はれて嗣となる養父は近江大掾と稱し久留米侯の小銃製造所佐賀藩大砲製造所の創設者なり常に技師として其事業を助けたり明治六年東京に移り麻布大泉寺に假工場を設け工部省の命を受けシーメン電信機十座を作製したるに成績良好なりしかば事業漸く緒に就き西久保八幡町に開店し明治九年今の京橋區南金六町に移れり此時に當り工部省は直營工事を企て同商會の機械等一切を買上げ久重亦同時技師となりて工部省に出仕せり明治十五年政府の海防を計畫するや久重又布設水雷及魚形水雷を製造する爲め一大工場を芝浦に設く今の芝浦製作所即ち是なり其後明治十九年歐米の工業を視察し歸朝して非常報知機を發明す爾來電話電燈等の事業に貢獻する所多し明治二十八年以來東京車輛製造所を設け既に軍用車の製作に從事せり三十八年二月二十三日病を患ひ遂に歿す年六十一

タナカ　ヒロユキ　田中煕之　陸軍砲兵中尉なり石川縣出身にして明治卅七八年日露戰役に於て徒歩砲兵第二聯隊附として從軍中病に罹り卅七年十一月十九日青泥窪兵站病院に於て死去す

タナカ　フシウ　田中府舟　播州高砂の俳人左太夫と稱す文化五年歿す(俳家歿故年表)

タナカ　フジマロ　田中不二麿　舊尾州藩士にして夙に勤王の志厚く徳川幕府の末藩論勤王佐幕の兩派に分るゝや不二麿斷乎として佐幕論を排し大に國事に盡瘁して功あり明治元年正月徵士となり九月王政復古の功に依り千圓を下賜せらる四年十月文部大丞に任ぜられ累進して文部大輔に至り文教の爲め施設する所少なからず十三年三月司法卿に任じ十七年五月參事院議官兼特命全權公使として伊國駐劄仰付けらる二十年五月勳功に依り子爵を授けられ特に華族に列せらる六月佛國公使に轉じ二十三年六月樞密顧問官に任ぜらる二十四年六月司法大臣に任じ從二位に敍せらる二十五年六月司法大臣の職を辭し尋て樞密顧問官に任ぜらる二十九年十一月條約實施準備副委員長仰付けられ三十一年七月之を免ぜられ後其功に依り金杯一箇を賜はる四十二年二月一日病を以て逝く時に年六十五是より先き特旨を以て位一級を進められ正二位に敍せらる

タナカ　ヘイハチ　田中平八　豪商也藤島卯兵衞の第三子にして天保五年七月十一日信濃國伊那郡赤穗村に生れ幼名を釜吉と稱す中村儀重の門に入り名を子和と改む弘化九年三月七日學を辭して國人小林孫三郎に寄り始めて商業に從事す時に年十二なり嘉永元年去りて魚類賣買の業を營み尾信二州の間に往來し始めて獨立す五年十一月同國田中保兵衞の嗣となり其の姓を冒して今の名に改め且つ諱を命じて政春と曰ふ時に憤然として感ずる所あり夜を以て劍を齋藤某に學ぶ安政六年六月橫濱の開港あり海外貿易の事起るや平八率先して四方に奔走し生絲、製茶等を買ひて之を橫濱に運搬し以て貿易を營み大に利を得たり後ち萬延元年商業を以て屢〻中山道を往來し偶〻淸川八郎と云へるものに會して與に國事を談論し遂に大に盟約す蓋し八郎は當時の志士なり文久三年十月製茶を買ひて之を船に積み四日市より航して將さに橫濱に至らんとし暴風に遇ひて船覆沒して悉く製茶を流出し爲めに莫大の負債を起すに至れり同船の士伴林六郎を救ひて大に功あり遂に互に將來國家の爲め拮据盡力せんとを誓へりと云ふ元治元年五月京都に赴き三條橋畔の旅亭池田屋に投じて志士吉田大二郎古高頼世等に會し議論相ひ投じて深く交誼を結び一日吉田氏と與に佐久間象山を訪ひて其の卓論を聽き感奮大に悟る所あり是の年六月五日幕吏旅亭を襲ひて吉田、古高等を捕縛するや平八密に吉田氏の書を懷きて大阪に脫し同志久坂義助を訪ひて其の書を遞し與に約する所ありて相ひ分れ再び佐久間氏を京都に訪ひて前途の得失を問答し大に感ずる所あり後ち去りて江戶に來り深川の材木商某に寄食し機に乘じてなす所あらんとす適〻水藩の士藤田小四郎、田丸稻之右衞門等事を筑波山に擧ぐると聞き直ちに材木の伐出に托して途に上り往て其の軍に投ず軍敗るゝに及びて藤田氏と倶に武田伊賀の軍に加はり幕兵と大に那珂港に抗戰す然れども軍議の武田氏と合はざるありて退き將に江戶に歸らんとす途次幕兵の爲に捕へられ獄に在る數旬後放たれて橫濱に遁せり時に徒手なすを能はず乃ち神奈川、程ヶ谷間の驛夫となり艱難具さに嘗む後橫濱の商人大和屋三郎兵衞に寄食して洋銀賣買の業を營み稍〻資金を得たり慶應元年七月一日兩換店を同所仲通に開きて始めて獨立の商人となれり未だ幾ならずして火災に遇ひ多少の財產を燒失し偶々又商業に失敗を取りて悉く資本を失ひ殆んど活路に苦むと雖も屈せず撓まず日夜商業に勵精せしを以て漸く資產を增殖し翌年に及びては其の地位大商の一に列するを得たりと云ふ三年九月平八鄕里信濃に歸りて祖先の墳墓を拜拂し悉く舊債を償却して遺すなく且つ朋友故舊にも多少の資金を惠與し又從父弟を以て田中家を嗣がしめ再び橫濱に來れり當時橫濱の貿易は隆盛に赴くと雖も我が輸入稅金甚だ僅かにして踏費を辨ずるに足らず是に於て平八收稅官の下問に應じて鈴木保兵衞と相謀り稅額增加の策を獻じ大に釐正する等ありて忽ち四倍を增殖せしめたりと云ふ明治元年春平八商業を以て甲府に到るや偶〻幕兵官軍と勝沼の邊に相戰ふに際し

竊に官軍に說き兵を間道より進め賊の背後に出だし一擧幕兵を敗走せしむ五月江戶に來りて又官軍に投じ彰義隊と戰て功あり軍平ぎて後ち隊長某深く平八の膽勇を賞し永く軍務に從事せんとを勸むと雖も之を辭して橫濱に歸り八月を以て洋銀現場取引所なるものを設立し自ら其所長となり大に內商の便を謀れり蓋し平八の軍務を辭する所以は其意の商業を興起して以て國に報ずるを期すればなり二年三月通商司平八の議を用ひて貿易商社及び爲換會社を橫濱に設立す是に於て平八爲替會社の貸付掛を命ぜられ八月兼て貿易商社の肝煎に任ぜられ勤務中苗字御免の沙汰あり蓋し當時の制たる庶人は苗字の禁あるを以てなり九月高崎藩商法局より商法引立方を命ぜられ藩札を改良し財務を調理して功あり藩主召して士籍に列せんとす平八辭して應ぜず乃ち苗字帶刀を許され刀槍及び乘馬を賜はる十月爲換會社貸付方頭取並を命ぜられ又帶刀を許さる三年九月神奈川縣令水道布設の事を以て橫濱港民を諭すや平八率先して水道會社を設立し其の頭取となり日數僅かにして功を奏し玉川の水を引て大に飲用水の便を謀れり十一月更に爲替會社の頭取に任ぜらる四年二月官諭に依りて生絲改會所を橫濱に創立し蠶絲濫製の弊を改良するに與りて功あり其の年高島嘉右衞門學校を橫濱に設立し名けて高島學校と稱し大に生徒を養成す然るに翌年廢藩置縣の制立ちて大勢一變し生徒等爲に學資の給與を失ふもの多し是に於て平八其の中途にして挫折するを惜み私金を抛ちて五十餘名の生徒を養ふと數月に及ぶと云ふ五年九月京濱間鐵道開業の式あり車駕臨幸す時に平八港民の總代となり天顏に咫尺して詞を獻じ敕語を賜はる是より先き橫濱市街に瓦斯燈設置の事あるや實に平八の發議する所にして斡旋の功與りて大なりと云ふ而して當時平八の商業益〻隆盛に趣き大阪、神戶、新潟其の他信濃、飛驒、上野及び奧羽等の諸國に支店を設け出張所を立て或は他の商社と連絡を通じて專ら物產輸出の荷爲換業を營み隨ひて巨大の利を博せり六年五月東京蠣殼町中外商行會社の肝煎となりて專ら米穀賣買の事を擔當す翌月更に洋銀取引所を擴張し金穀相場會社なるものを設立して以て金銀米穀の定期賣買を營むの所となし自ら頭取の任に當れり九年米價俄に低落して農民爲に染色あり平八乃ち命を奉じて大に米穀を四方に買ひ以て其の價を騰貴せしめ農民其の利を受くと云ふ是の歲新に一會社を東京に設け名けて田中組と曰ふ筑摩、長野二縣の爲換方を擔任す十年二月橫濱港輸出品の賣込步合取立掛を命ぜらる十月東京兜町に米商會所を設立するに與かりて其の肝煎出納役に撰任せらる十一月神奈川縣第一大區議員に擧げらる此冬橫濱に株式取引所の設立あり平八與かりて最も力あり十一年二月兜町米商會所頭取となる五月第百十二國立銀行を創設す十二年十月大藏省爲換方を命ぜらる此年七月北米合衆國大統領我が邦に來遊す平八其の接待委員に選まれ斡旋盡力す十四年春肺疾に罹り久しく癒えず十五年病を大阪に養ひ尋て豆州熱海の溫泉に入浴す其の熱海に在るや病中と雖も種々經營し村中に水道を設け電信線を架し及び藤原藤房の爲に碑石を建つ八月蠣殼町兜町の兩米商會所を合して其の頭取に擧げらる後病を以て之を辭し十二月更に一銀行を創立して冠するに田中を以てし大に金融の道を開く翌年五月に至りて病益〻篤し月を越えて八月終に歿す年五十一なり十四日神奈川眞泉寺に埋葬す或は生糸製造所を設けて蠶糸の改良を謀り或は茶園を開きて國產を繁殖す賞金、賞盃、賞狀等を拜受する前後其の幾度なるを知らずと云ふ

タナカ　ホスケ　田中補助　陸軍步兵少尉なり長野縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第九師團步兵第四十二聯隊附として從軍中卅八年一月三十一日淸國盛京省鴨子泡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に敍せらる

タナカ　マサヨシ　田中政芳　金工なり京都の人文右衞門と稱す初苗村七郎右衞門に從ひ後藤悅乘の門に入り晚に五右衞門と稱す(古今金工便覽)

タナカ　マサヲ　田中正雄　廣島の藩士なり天保十二年六月廣島に生る資性豪邁文武に通ず常に曰ふ男兒宜しく竹筍の直上天を衝くが如くなるべしと因て子筍と號す大和十津川の擧及び生野銀山の擧に加はり又武田耕雲齋に組みして太平山に據る後ち逃れて藩に歸る藩主正雄をして江戶に遊學せしむ時に幕臣秋山某と交はり其姓を假りて秋山虎之助と稱し昌平校に入る在校の幕士正雄の擧動を怪しみ密に行李を探れば大和銀山太平山等の件に與したる書あり因て幕吏に密告す幕吏正雄を捕へて獄に繫ぐ幽囚三月慶應二年正月十七日遂に獄に毒殺せらる明治七年十月兒渡邊正元遺骨を千住より泉岳寺に改葬す明治廿四年一月十六日宮內省より特旨を以て祭粢料を下賜せらる

タナカ　マスノブ　田中益信　浮世繪師なり善居齋と號す畫風鳥居風に似たり五世柏筵の似顏に長ず又自書作の草雙紙多し享保元文頃の人(鈴木白藤筆記)

タナカ　マタサブラウ　田中又三郎　陸軍步兵中尉なり福井縣出身にして明治二十八年近衞師團步兵第一聯隊附として臺灣に出征し同年六月五日基隆に於て敵の地雷火に觸れ即死せり

タナカ　ミカミ　田中三上　天平中の人なり筑前目外從五位下に至る性和歌を嗜みて蘊奧を究め大いに世に其の名を著はす詠歌は載せて萬葉集に在り(萬葉集作者履歷)

タナカ　ミチマロ　田中道麿　國學者なり名は道麿榛木翁と號す通稱は庄兵衞後ち薙髮して道全と號す美濃多藝郡榛木村の人大阪に住す眞淵に學びて頻りに萬葉の古風を唱ふ天明四年十月四日歿す年五十五著す所撰集萬葉抄、萬葉名所歌鈔、萬葉東語槊、萬葉集問答書、暗愚鈔、榛木翁集等なり(續諸家人物集)

タナカ　ミノル　田中實　陸軍步兵大尉なり愛知縣出身にして明治卅七八年日露戰役に際し第三師團步兵第十八聯隊附として從軍中卅七年十月十六日淸國盛京省魏家樓子附近戰鬪に於て戰死す戰功に依り勳四等功五級に敍せらる

タナカ　メイモン　田中鳴門　大阪の詩人なり名は章、字は子明、近江の人、大阪に遷居す家鳴門橋畔に在り故に自ら鳴門と號す金屋七左衞門と云ひ釜鍋を冶するを業とす學該博を務む詩文一種の氣格あり混沌社に入り名一時に顯はる其の居所を愛日園と號す日夕一小室に在りて圖書を左右にす人となり磊落にして長者の風あり天明八年三月二十七日歿す年六十七(續近世叢語、浪華名家墓所集)

タナカ　ヤザエモン　田中彌三右衞門

陸軍歩兵少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て躍備役より召集せられ歩兵第六十二聯隊附として從軍中廿八年九月三日清國盛京省開原に於て病に罹り同十二日黑家屯舍營病院に於て死去す

タナカ　ヤスチカ　田中保親　藤堂侯の大夫なり姓は平氏、初の名は親門、後今名に改め隼之助と稱し後其兵衛と改む相州の大族三浦氏の裔なり祖は爲綱父は明親世々飯衛を以て侯家に仕ふ保親幼にして飯を家庭に學ぶ年方に十六父に代りて徒に授く既に長じて師職を公室に奉ずること三世一生遇する所の弟子一千五百餘人整月饌を講ずること四十餘會是くの如きと四十年駕に從ひ江戸邸に居て旬歲講藝し亦た國に如く是くの如き者七たび飯法及び武事を論撰すること一百十二種元文四年五月晦日疾みて歿す年六十六保親人となり和易にして物を容る父は過嚴測り難し能く之に事へて孝順人以て難しとす(事實文編)

タナカ　ヤスヨシ　田中安敬　字は子愛、彌兵衛と稱す喜多川某の季子、出でゝ田中氏を繼ぐ二氏世々宮川領主堀田侯に仕ふ而して田中氏最も舊閥たり安敬人となり溫厚にして技巧多く尤とも能く槍を用ひ築を同僚浦上景寛に受け幼年にして盡とく其の術を究ほむ文化十四年病のて大阪に歿す年六十四(墓銘)

タナカ　ヨシツグ　田中芳繼　江戸の金工芳章の弟子なり後に養子となる本姓は關部氏傳藏と稱す門人に三浦榮藏芳春と云へるものあり

タナカ　ヨシマサ　田中吉政　武藏の鍛工なり源左衛門と稱す後上野介に拜す關兼吉の末なり寛文中の人(古今銀冶銘早見出)

タナカ　ヨシマサ　田中吉政　宗弘(或は家繼に作る)の子なり本名は宗政又た長政と稱す姓は橘氏近江の人、族を田中と稱す蓋し先世より世々高島郡田中邑に住するを以てなり吉政初め久兵衛と稱す織田信長に仕へて偏諱を賜はり長政と改め疎三千石を食む信長光秀の爲めに弑せられて後ち柴羽秀吉に仕へ又た諱字を賜はりて今名に改め邑三萬石を領す城を近江甲賀郡八幡山に築きて之に居る(中興盛衰記に信長の在世已に八幡山に築くに作る)從五位下に叙し民部少輔に任ぜらる天正十八年秀吉に從ひて小田原を征し凱旋の後ち封を岡崎城に徙し邑を加へて十萬石となる初め秀吉吉政をして三好秀次を佐けしむ後ち秀次關白に補せらるゝに及びて驕傲不禮至らざるなし吉政其の晉虐を憂ひて之を諫む然れども秀次反て之を憂となし遂に之を遠さく秀吉深く吉政の忠を感じ常に禮を以て之を遇すと云ふ後ち封を筑後三十二萬石に轉じ從四位下に叙し侍從に任ぜられ兵部大輔に轉ず慶長十四年二月卒す法名は機耘道越、大統院と號す二子あり長麟、忠政と云ふ(野史)

タナカ　ヨリツネ　田中頼庸　國學者なり鹿兒島藩士にして通稱藤八郎と號を雲鄰と云ふ博覽の名あり教部大錄神宮大宮司神宮教管長となり正六位に叙す明治三十年四月十日歿す

タナカ　ヨシヲ　田中良男　陸軍歩兵大尉也山口縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第一師團歩兵第二旅團司令部附として從軍中廿七年十一月二十六日旅順要塞松樹山戰圖の際負傷同二十七日長眷庇第七師團第一野戰病院に於て死去す戰功に勳六等功五級に叙せらる

タナカ　ランリョウ　田中蘭陵(田中氏自ら修して田と云ふ)　江戸の儒者なり名は其暢字は子舒、蘭陵は其の號、武助と稱す江戸の人、早く孤なり叔父富春叟に養はれて其の家に寄居す十二三にして叔父の爲す所を見て獨り能く四書五經を誦讀す十六七にして能く其の大義に通ず叔父之れを喜び物徂徠に就て業を受けしむ醫社に寓する六年日夜憤勵して經義を研究す板帆丘、菅麟岐、岡嵓州と共に醫社の少年四傑と稱せらる年二十二醫社を辭して駒籠白山に僑居し講説して業とす然れども專ら師説を主とせず平生著す所の文章務て先修と異なし以て大人の時目を驚さんとす平生倔傑邁を以て自ら居り常に飲を嗜みて鯨吸すは之り先き十年安藤東野雒を此に下す東野は溫厚の長者なり以て稱せられ蘭陵は慷慨の烈士なり以て稱せらる享保十九年二月廿五日歿す年三十六墓ちさるを以て子なし方今人物誌、修辭考、蘭陵遺稿等あり(先哲叢談、鑒定便覽、諸家人物志)

タナカ　リツザウ　田中律造　陸軍歩兵大尉なり鳥取縣の出身にして明治二十八年近衛歩兵第二旅團司令部附となりて臺灣に出征中同年九月彰化城にて風土病に罹り東京に歸り療養中死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タナカ　リャウサイ　田中良齋　醫と茶道を善くする名古屋の人名は榮治、多兵衛と稱す狩野常信の門に入り黃狐と號す寶曆十三年十二月六日歿す年八十二

タナカ　エンサイ　田中園齋　遠洲流の茶人なり道か竹村鶴庵に學びて能くし蒔繪に住す(茶人系傳全集)

タナギノ　ベン　田ナキ辨「フヂハラコレナリ」

タナハシ　ショウソン　棚橋松村　名は嘉忠、字は伯貫、大作と稱す美濃國山縣郡伊自良郷松尾村の人なり天資英邁幼より書を好み尤も詩試を嗜む年十七眼を患ひて將に盲せんとす醫讃書を嚴禁す松村肯はずして曰く縱ひ讀書に因て肉眼の明を減ずと雖ども心眼の明を增すに若かんや且つ塙檢校長澤樂浪皆盲にして偉人たり余も亦二子の蹟を追はんと欲するなりと乃ち人を倩ふて書を讀ましむ年廿五遂に明を失ふ廿六七大阪に出て廣瀬旭莊に就て專ら詩學を究む長三洲芝六郎金森嚮齋等同窓の友たり皆松村の爲めに代り讀み代り筆して以て其業を勵む後ち復郷に在り王政維新天下騰然たるに際し勤王の士諸國に起る舍弟某も亦之に從ふ松村其顧問たり既にして轍軻落魄郷里の子女を教へ自ら操なり(名は絢子當時女流を以て鳴る)內助する所あり既にして一子を擧ぐ(名は一郎後郁文館長たり)夫妻庭訓倦まず後東京に出て中村敬宇、根本通明、岡本監輔、杉浦重剛、長三洲、內田周平の諸名士と文詩徵逐率れ盧目浦重剛と異行美踏列墨するに暇あらず明治二十六年五月二十五日年六十七にして歿す谷中全生庵に葬る遺稿あり(文莊漫錄)

タナハシ　ロクロク　棚橋碌々　俳人なり美濃安八郡楡俣村の人美濃派の正統に出て獅子庵を承繼す晩に岐阜に寓して獅子の林てふ雜誌に筆を執る大震に際し纔に身を以て遁れ書籍の類悉皆烏有に屬せるを以て發刊を廢す明治廿九年七月廿三日洪水の中に

自宅に病歿す年七十九(三樂松江氏寄)

タナベ　アキバ　田邊秋庭　或は謂ふ從七位下周防守に至ると和歌を善くすると以て其の名を知らる詠歌は戯せて萬葉集に在り(萬落集作者履歷)

タナベ　アリヒサ　田邊存久　陸軍歩兵中尉なり廣島縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第一師團歩兵第二聯隊附として出征中廿七年十月二十六日旅順要塞松樹山補備砲臺附近戰鬪の際負傷し同十一月二十七日甲子山屯第一師團第四野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タナベ　ウマヒト　田邊肥人　天平寶龜間の人なり詠歌は戯せて萬葉集に在り(萬葉集作者履歷)

タナベ　シンザイ　田邊晉齋　仙臺侯の文學なり名は希文字は子郁晉齋は其の號、國人稱して翠溪先生と曰ふ其の地を以てなり通稱喜左衛門、父希賢世々仙臺侯に仕へ儒を以て家を成す晉て京都に出でゝ邸監となる元祿五年晉齋京都に生る年甫めて二歲父に從ひて仙臺に來り長じて又た京に適き浸井重遠に從ひて學び專ら程朱の說を奉ず之を久して獅山公召して其の學を試む明經辯大に衆を驚かす公之を嘉みして物を賜ふ是に於て益々自ら勵みて諸經を窮思し深く山崎氏の說を唱ふ學成りて東し又た神道を高瀨眞直に受け書法を持明院基輔に受く射禮若しくは戰陣行伍の法に及ぶまで其の奧を究めざること莫し晉齋人と爲り清敏懿直已を處して潛泊、人を待つに溫厚、日用微細の事に至るまで躬自ら之を爲して人を勞せず晉て友人を訪ひ夜深くして方さに出で從者の門に立ちて甚だ疲を覺ゆるみ見て曰く我れ人の許に適くも亦自ら安飽す汝等何んぞ艱まんや此より公事に非ざれば未だ嘗て夜行かず其の人を待つ概れ此に類す講職に在ること二十餘年擢んでゝ世子の師と爲す世子立つ是を思山公と爲す恩賜禮遇益々厚く班大夫に至り祿七百石に至る一日侯其の宅に造り謦を張り饌を設け歡を盡くして還へる其の優異せらるゝこと此くの如し然れども晉齋誇らず益々恭みを以て聞ゆ寶曆の初め侯江戸に在りて病に罹る晉齋醫藥祠に謝り危坐して食を斷つこと三日身を以て代はらんことを願る家人亦た之を知ることなし年已に七十老を告げて退く人其の德を稱せざることなし國中號して老先生と云ひて姓字を稱せず著はす所に伊達世臣傳仙臺風土記翠溪文集等あり皆な錄して府に藏む安永元年十二月十二日病で歿す年八十一私に謚して守正先生と曰ふ晉齋嘗て伊達宗村に從ひて封內を巡按して某邑に宿す小兒十數輩來りて衣裾を挽くと夢む覺めて後ち其の父老の言を聞くに乃ち稱ふ此邑の習俗女を生めば養はす其の生長の後ち賣糶を費すを恐るゝを以てなりと晉齋之を憐憫上疏して其の狀を告ぐ宗村即日令を下して之を嚴禁し且つ亦女を生む每に米一石錢五百文を賜ふと云ふ(事實文編、先哲叢談)

タナベ　ジンベエ　田邊甚兵衛　田中吉政の家臣なり年十四にして關原の役に隨ひ出陣す從兵敵を馳き伏せ甚兵衛を馬より抱き下して首を取しむ故を以て一時武功の評判高かりき或時黑田長政甚兵衛に逢ひて之を褒め又其從者を招き其目の戰狀を問ふ曰く主人を馬より下せし時刀を拔て手戰ひけれ痛く恥めて首を取せたりと言ひけるに長政さては甚兵衛殿は眞の男士なるぞ其時戰はずして取掛りたらば正氣に非ず途方を失せなり恥しめられて首を取たるは勉勵により男の發せるなり後來類もしとて愈々美めたりと(豪雄言行錄)

タナベ　プテザク　田邊捨作　陸軍歩兵少尉なり福井縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ第九師團歩兵第三十六聯隊附として從軍中三十八年七月七日清國盛京省造化屯に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タナベ　セキアン　田邊石庵　儒者なり名は諱輔、字は季德、號は石庵、通稱は新次郎(一に晉二郎に作る)尾張の人なり本と村瀨氏少うして奈瀨に從て學ぶ會々藩士大番興力田邊次郎太夫養ふて子と爲す後ち昌平黌教授出役となり出役中甲府徽典館學頭となる自抄の史多し當時唐本の舶來極めて少なく殊に清人の著述は少中の少なり石庵謂らく隣國現今の形勢を知るは急務なりと清の地志及び清人の文詩集其他雜書に就き左右採摭し其典故に關するものあれば一切撮取し以て八百餘人の清朝名臣名士の傳を撰す世に傳ふるところの清名家小傳是なり又た文を學ぶもの或は近世の文を見る能はざるみ憐み其正しきものを擇び清の朱竹垞より溯て明の歸震川、王遵岩、唐荊川、王陽明、方正學、宋濂溪の文粹を編せり著す所他に續左傳合案、史漢合解、國策論文、清名家外傳等あり又蕭を弄ぶ安政三年十二月十二日歿す年七十六二子あり長男孫次郎號は勿庵四洋流火技を以て世に顯はる早く歿す子あり朔郎といふ次男太一號は蓮舟石庵墓は淺草區東本願寺本堂の裏にあり(吉田賓輔過報)

タナベ　テイサイ　田邊貞齋　江戸の人雜學者なり名は經忠字は世篤、次郎太夫と稱す安永二年三月十一日歿す淺草本願寺に葬る(江戸名家墓所一覽)

タナベ　トモマサ　田邊伴正　金工なり友直の子榮藏と稱し德水軒と號す柳川直春の門人江戸櫻田に住して壯年にして歿す(古今金工便覽)

タナベ　ノブコ　田邊櫟子　萬葉作者の一人なり其傳詳かならず(萬葉集作者履歷)

タナベ　ハチザエモン　田邊八左衛門　田邊流槍術の祖なり名は長五郎其の先は丹後田邊の城主藤原氏なり小笠原貞春葦谷冒眞に從ひて建孝流槍術を學び遂に一家を成す入城の後城兵に屬して功あり尾張義直に仕へて八百石を食む加賀侯三千石を以て數々召せども應ぜず寛文甲辰七月十三日歿す年八十七子常之四郎有衛門と稱す家業を善くす(武術流祖錄、尾張名家志二編)

タナベ　ヒャクダウ　田邊百堂　大阪の俳人なり名は敬明字は子玄步々齋と號す通稱は五郎兵衛堂島の米商なり又書を以て鳴る文化中の人(大家人名錄)

タナベ　フクマロ　田邊福麻呂　和歌を善くするを以て世に著はる詠歌は戯せて萬葉集に在り(萬葉集作者履歷)

タナベ　ユウザウ　田名部雄藏　陸軍歩兵少尉なり秋田縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團歩兵第五聯隊附として從軍中三十八年一月二十七日清國盛京省黑溝臺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タナベ　ラクサイ　田邊樂齋　名は匡勅字は子順通稱は三郎助又中州と號す本姓は野中氏家世々仙臺侯の家臣香曾我部氏に仕ふ幼にして大森清香に就

きて教を受け後田邊晋齋に師事す晋齋歿するに至り其子希元深く其人となりを愛し藩侯に乞ひ資を給して遊學せしむ京都に至りて久米訂齋、宇井默齋に從ひ又江戸に來りて澁井太室、關松窓等と交り樂成りて歸る時に天明八年なり希元其祿百石を分與せんことを請ふ藩主之を許し擢んて、儒員となす後希元の子希績請うて田邊氏を冒さしめて其支族となせり樂齋齋宗、齊嶷二公に仕へ侍講たること二十餘年禮遇甚厚かりき文政六年四月十七日歿す年七十、樂齋人となり廉潔にして義を好み毫も時好に投せず其學專ら三禮に精し著はす所四書、六經、小學、近思錄、文公家禮、周易啓蒙あり又大戴禮補註を著はし學生の特力を藉せりといふ藩學養賢堂にて醵刻せらる(日本)

タナベ　ヨスミ　田邊小隅　壬申の亂に弘文帝の爲に兵に將として鹿深山を越え轍を卷き戟を息め倉歷に至り軍號を定め以て敵兵に別つ衆皆な枚を啣みて夜半營を斫る事の不意に出るを以て營將田中足麻呂なす所を知らす衆潰走す足麻呂獨り軍號を知るを以て僅に免る小隅又進みて葛野營を擊つ多品治の爲めに邀擊せられ敗走す終る所を知らず(大日本史)

タナヤ　ケイイン　田邊桂陰　登間藩の儒醫なり名は元善字は元殉一字善庵、別に桂陰と號す鳳陽、天香齋等の號あり醫庵の長子也朝川善庵に師事し後藤田藤森の二老と遊び經史を講じ詞章を作り時務を策し聲譽漸く興る藩侯擢て侍醫と爲し躬て顧問に備ふ明治の初め大學を東京に建つ桂陰徵さるゝも病と稱して就かず明年命を奉じて本邦漢士の古今醫方を集錄す其書開闢に起り今世に至る上下數千歲政治の隆替制度の沿革歷々掌を指す學者傳誦し府縣學校採て以て生徒に授く明治十五年十月六日歿す年七十青山の墓に合葬す(河田麗江撰墓表)

タニ　イソシ　谷勤　歌人なり水戸藩士にして大和宮司となり後宮內省の歌所に奉仕す明治中歿す

タニ　イツサイ　谷一齋　京都の儒者なり名は松字は宜貞、三介と稱す一齋は其の號、又巳干と號す土州の人、初め樂を父時中に受く父歿して後ち野中兼山小倉三省に學ぶ性學韵、勤勉の積に賴て漸く成る小學、四書を尊信すること父母神命の如く逼く諸史に渉り百家を貫通し辰敗を綴し得失を研し悉く其の要歸を曉る後京都に出づ又江戸に來り稻葉侯の家に遊事す待遇殊に渥く壁間益々を暫す晚年之を黔す元祿八年三月江戸に歿す年七十一(近世叢語、先哲叢談、事實文編)

タニ　イツトクサイ　谷一得齋　名は重幼にして劍術を好み槊を一宮照信に受けて新夢流の奧旨を究む後其の孫康泉折衷して一家を成す之を谷派と稱す(谷派劍術記)

タニ　カキモリ　谷垣守　國學者なり重遠代新夢流劍法の達人なり通稱は小左衛門一得齋は其號

タニカゼ　イチラウエモン　谷風市郎右衛門　大阪の力士なり初月見山と名く體量四十貫白雪肥滿容貌格柯之助に育たり大阪の市人依て谷風と名樂らしむ梶之助と同時の人なり

タニカゼ　カヂノスケ　谷風梶之助(初代)　讃岐高松の力士なり容貌端麗身の丈六尺三寸體量四十一貫あり强力無雙にして之と角して勝つものなし泉州堺の力士八角楯右衛門之に勝たんとを願ひ其工夫を行司尺子一學に問ふ一學敎へて曰く尋常の手段を以て谷風に勝たんこと最も難し但彼が揚に上るや性急にして氣力正に張る卿是に於て直ちに之と相搏たず彼が挑みに應ぜず「待た」を冒ふこと數回彼が氣惰るを伺ふて急に彼を醫はば庶幾くは勝つを得んと八角此の教に從ひ京都及大阪の揚に於ては各一回の勝を得たり然れども八角の「待た」を冒ふこと後世鄙劣の模範を遺し人の指笑を買ふに至れり谷風が天下に敵なきことは以て觀るべし

タニカゼ　カヂノスケ　谷風梶之助(二代)　角力者なり奥州宮城野霞日村の農彌五右衛門の子、寛保三庚午年八月八日產る小字は與四郎幼より角力を好む十九歲の時年寄關の戶住右衛門等巡業して奥州に至る與四郎之が弟子たらんと乞ふ怪力無雙なるを以て關の戶大に喜びて弟子とな[illegible]と雖も命を得ざりき年四十八喉疾再發して明を失ひ復卷を執ること能はず常に門人をして掌上に指書せしめて講ぜしむ三山乃ち掌を出す詩文又は經語を其掌に書する數百字に及ぶもよく之を暗記して一一添削すべき箇所を指示す一日人あり掌上に洁問屋と書し洁字、字書になし如何と三山忽ち曰く洁問屋ならん其人故を問ふ三山曰く是き齋に由と書けと人より聞き誤て吉とかきたるならんと其穎敏なること此の如し慶應三年十二月歿す年六十著はす所遺稿數十卷あり三山の兄厚亭早く歿し諸姪尙幼なり三山代て之を撫育し訓恤備に至る諸姪三山に親むこと所生の如く服卒るの日骨像を刻し日夕之を奉祀すといふ三山病み服家居すと雖時を傷み世を憂ふる心老いて益々切なり封事を朝廷及び幕府に上りたるもの再三に及べりと云ふ(日本)

タニ　シウウン　谷秋香　女は書工なり通稱はしう名は蕚英字は小香文晁の妹にして中田藥堂の妻なり其妹えい紅藍と號す洞雲の妻なり各〻書名あり共に山水に長ず天保三年五月十六日歿す年六十一紅藍亦此冬歿す(書畫要略、鑒定便覽、扶桑畫人傳)

タニ　シゲツグ　谷重次　土佐の人少にして粗豪を以て稱せられ膂力人を傑人と爲り孝友にして財貨を愛せず勤勞を憚らず中年以來產襃落す而れども曾て意に介せず跌蕩談笑其の少時の如し其の宗族交友に於ける見れば親疎と なく直に面質して少しも假さず而して後は乃ち未だ嘗て一言も之に及ばず故を以て人皆な悅服して怨むることなし嘗て諸子を戒めて曰く士は當さに屈伏して謝を稱すること勿れ苟くも一たび屈伏稱謝の耻あらば則ち男兒の大節已に喪びだり他は觀るに足らざるなり其奮發剛剛の風大率れ此くの如し元祿戊辰病みて死す(事實文編)

タニ　シゲトホ　谷重遠　享保中の和學者

す年八十四洛仁和寺街道西王寺に葬る

タニグチ　ケイコウ　谷口鷄口　江戸の俳人なり木屋庵と號す人と爲り慷慨にして氣節あり俳歌を善くする を以て聞ゆ是の時に方りて薩侯の侍臣某鷄口に學ぶ一日鷄口某を訪ふ某一室に兀座して顏色怏々鬱悶切迫せる者の如し乃ち其異常なるを察し之を慰問す依遂して言はず鷄口曰く我れ今長一句を得たり曰く「今日咲く者は散せず昨日は乃ち花の風」と子以て如何と爲すと乃ち辭し去る某取りて之を閱し諷詠玩味して潸然凄惋し給仕初の如くす爾後鷄口を待つと益〻厚し其壽を以て終はる其の妻薩に在りて書を鷄口の嗣者たる者に寄せて曰く姿の夫終に臨みて姿に語りて曰く我嘗て鷄口翁の一佳句を得て以て天年を保つ更生の恩忘る可からず我死せば則ち汝宜しく翁の墓に拜して其の賜ものを謝す可しと唯〻姿が身四陸數千里の外に在りて墓を吊するに由なし聊か香火を供し以て微悃を致さんのみと鷄口子なし此書報して其の女婿月窓に致す月窓書を得て始めて其の軼事を知り且つ大に某の高義に感ずと云ふ鷄口晚年に歌して曰く近世諧歌の道市井の間に墜ち販夫馬卒と雖ども口を開けば歌ち蕉門の正派と稱す嘆ず可きかなと因て自ら譬ひて一句を哦せず其の實とする所の芭蕉の遺物端研を以て其女に授くと云ふ鷄口享和二年七月十一日を以て歿す年八十五(事實文編、俳家歿故年表)

タニグチ　ゲツサウ　谷口月窓　書家なり名は世達、字は孟臯、通稱庵と號す月僊の門人にして山水人物花鳥を能くせり慶應元年四月十三日歿す年九十二(扶桑畫人傳、畫乘要略)

タニグチ　ゲンタン　谷口元淡　和學者なり字は大雅、大和郡山の人、京都に來り歌學を修して之を善くす百人一首拾穗抄、補註徂徠學則問答を著はす(諸家人物志)

タニグチ　センシウ　谷口千秋　江戸の儒者なり字は子春多膳と稱す千秋は其號實歷四年四月二十五日歿す駒込瑞泰寺に葬る(江戸名家墓所一覽)

タニグチ　テイキチ　谷口禎吉　陸軍歩兵少尉なり福井縣出身にして明年卅七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ第十師團歩兵第二十聯隊附として從軍中卅七年十月十六日清國盛京省萬寶山西南灑沙河左岸に於て戰死す

タニグチ　ブツヨン　谷口蕪村　俳聖又た畫を善くす名は信章字は春星夜半亭と號す初め蕪著と云ひ後蕪村と改む又與謝長庚、三果、東成、四明、謝眞、巴人、春日庵、老々庵、浮風庵、臥龍、碧雲洞、紫孤庵、白雪堂、河南趙居、老雲等の數號あり攝津天王寺の人京都に從て二世夜半亭と號す晚て俳諧を內田沽山に學び後早野巴人に從ひ江戸に出て俳諧を內田沽山に學び後早野巴人と改むと云ふ天明三年十二月廿九日年六十七にして歿す又は七十歲とも云ふ(俳林小傳、畫乘要略)

タニグチ　ランデン　谷口藍田　詩人なり明治三十五年十一月十四日歿す

タニグチ　ロウセン　谷口樓川　江戸の俳諧師なり無爭庵と號す天明二年十一月二十九日歿す淺草本願寺に葬る(江戸名家墓所一覽)

タニザキ　カウタウ　谷崎勾當　江戸向岡に住み針醫を業とす人と爲り溫厚實老いて益〻健なり且つ和歌を能くす近鄰病者あれば必ず勾當に請ひて之を治せしむ時に碩儒塚屋襄老多病にして數〻且つ和歌を能くす近鄰病者あれば必ず勾當に請ひて之を治せしむ時に碩儒塚屋襄老多病にして數〻ひて之を治せし且つ其才を愛し方外の交を爲し殆ど二十年に及ぶ享保十七年の秋勾當俄に中風を患ふ鳩巢時に驚に臥し之れを聞き數〻人をして之れを訪はしむ翌年五月十一日遂に歿す其辭世の歌に云ふ「けふまでも渡り來にける世の中をおもへはかなき夢のうき橋」と其子之を書し鳩巢に示す鳩巢痛惜して已まず爲めに之が悼詞を作りしと云ふ(畸人傳)

タニザハ　チカネ　サンザン　谷澤近嶺「サハチカネ」谷三山　名は操字は子正通稱新助後昌平と改む穎齋、淡庵、無耳山人の號あり八木驛酒肆重之の二子なり母は樫原氏幼にして大和國八木驛に生る穎悟、利発を好み思孝節義に關するものに過へば輙ち感激し年十一にして眼及び耳を患ふ眼は僅に瘉えしも耳は遂に聾せり稍長して兄の冒に惑し稗史を止て正典を讀むされど耳聾にして師に就く能はず專ら字書に躬りて獨習す長して兄の室を出でざること十餘年諸子群經通ぜざるなく聲とし巨學となる年二十八兄厚亭と共に京都に遊ぶ諸儒よく談するに足るものなし獨り指嗣敬所あり時に齡六旬を踰え學識一世を壓ふ請うて其の門に入り研鑽し常に敬所の推服するところとなる是より三山の名日隆に操履の士其風を聞きて景仰せざるなし藩主植村侯其學を賞して月俸若干を賜ふ三山素餐を慚ぢて辭すれども命を得ざりき年四十八喉疾再發して明を失ひ復卷を執ること能はず常に門人をして掌上に指書せしめて講ぜしむ三山乃ち掌を出す詩文又は經語を其掌に書する數百字に及ぶもよく之を暗記して一一添削すべき箇所を指示す一日人あり掌上に洁問屋と書し洁字、字書になし如何と三山忽ち曰く洁問屋ならん其人故を問ふ三山曰く是き齋に由と書けと人より聞き誤て吉とかきたるならんと其穎敏なること此の如し慶應三年十二月歿す年六十著はす所遺稿數十卷あり三山の兄厚亭早く歿し諸姪尙幼なり三山代て之を撫育し訓恤備に至る諸姪三山に親むこと所生の如く服卒るの日骨像を刻し日夕之を奉祀すといふ三山病み服家居すと雖時を傷み世を憂ふる心老いて益〻切なり封事を朝廷及び幕府に上りたるもの再三に及べりと云ふ(日本)

タニ　シウウン　谷秋香　女は書工なり通稱はしう名は蕚英字は小香文晁の妹にして中田藥堂の妻なり其妹えい紅藍と號す洞雲の妻なり各〻書名あり共に山水に長ず天保三年五月十六日歿す年六十一紅藍亦此冬歿す(書畫要略、鑒定便覽、扶桑畫人傳)

タニ　シゲツグ　谷重次　土佐の人少にして粗豪を以て稱せられ膂力人を傑人と爲り孝友にして財貨を愛せず勤勞を憚らず中年以來產襃落す而れども曾て意に介せず跌蕩談笑其の少時の如し其の宗族交友に於ける見れば親疎と なく直に面質して少しも假さず而して後は乃ち未だ嘗て一言も之に及ばず故を以て人皆な悅服して怨むることなし嘗て諸子を戒めて曰く士は當さに屈伏して謝を稱すること勿れ苟くも一たび屈伏稱謝の耻あらば則ち男兒の大節已に喪びだり他は觀るに足らざるなり其奮發剛剛の風大率れ此くの如し元祿戊辰病みて死す(事實文編)

は悉く勝利なり安永五年年二十七名を谷風梶之助と改む背の高さ六尺身の重さ四十三貫目安永四年本朝角力の總行司吉田追風の家より土俵入横綱の護膀を許さる天明元年二月大阪難波新地の角力に五人を敵とす初日は松並、卷の戸、岩が谷、柏木、初瀨川此五人に谷風一人なり毎日斯の如く十日に五十人の相手に一回も負けず天明二年三月二十八日淺草蔵前八幡の相撲に始て小野川樂蔵の爲に敗を取れり寛政七年正月九日歿す年四十六法名釋性谷響了風、仙臺荒町東漸寺に葬る(谷風傳)

タニカゼ　ワカノスケ　谷風若之助　大阪の力士なり市郎右衛門の弟子にして後其名を繼ぐ

タニガハ　エンパウ　谷川延芳　挿花家なり父遠遙院實隆公(三條西)の門に遊び書を能くす生花は相阿彌の表鉢を傳ふ時恰も兵亂に際し挿花の流行全く地に落ちしかど悠々自適して久しく筑後の柳川に遊び文祿四年京に歸り其七月歿す年七十六(千羽喜三氏贈)

タニガハ　エンリン　谷川延林　挿花家なり盛太郎と稱す禮法故實に詳し折入花の妙を以て名あり餘ら茶道を嗜しみ今井宗久織田有樂齋などゝ友として善し或る時人に宵葉の付きたる自在を贈りしより時の人呼んで自在の宗匠と云ふ寛永四年八月歿す年六十六(千羽喜三氏贈)

タニガハ　コトキヨ　谷川士清　有名の和語學者なり伊勢渭の津の人醫を業とす名は昇字は士清淡齋と號す玉木葦齋に就て山崎淵の神道を學ひ後有栖川職仁親王の門に入りて和歌を脩し後ち頻りに國史及び語釋の學を研究し終に大成して一家の風を唱ふ傍ら歌を善くす安永五年十月十日歿す年七十著はす所日本紀通證、和訓栞あり(鑒定便覽)

タニガハ　リウザン　谷川龍山　易學家なり通稱順助浪花の人眞勢中洲の門人にして著書多し天保二年十二月四日歿す年五十八(浪花名家墓所集)

タニグチ　アイザン　谷口藹山　畫家なり名は貞富山の人幼より畫を好み谷文晁高久靄崖の門に入り脩練し其名大に世に顯る年廿九より京都に住し南畫を以て直入と比肩す明治三十二年十二月廿八日歿

なり通稱丹三郎土佐の人願る漢學に精しく島朝の國史律令格式等普れく渉獵せざるなく古書を校正して著書甚だ多し享保三年六月二十日歿す年五十六泰山と號す

タニ　ジチウ　谷時中　土州藩の儒者なり名は業有、時中は其の字、大學と稱す後三郎右衛門と改む土佐の人、家世々農を業とす時中初め僧となり慈冲と號す親靈の教を奉じて州の城南の眞常寺に住す暇あれば好みて儒書を讀む天文中南村梅軒程朱の學を唱ふ時中其徒天室に從ひ學ぶ遂に髮を薙へ大學と稱す儒を以て業とす大に程朱の學を州内に唱ふ當時之を南學と稱す從遊甚だ衆し野中兼山山崎闇齋等亦來りて業を受く國侯屢〻之を徵せども辭して就かず是の時喪亂の餘文運未だ闢けず僻境尤も書籍に乏く時中四方に求め多く之を儲ふ家本と富饒之が爲め殆んど落盡すと云ふ土佐の士人書を讀むを知るは時中之が唱なすなり慶安二年十二月晦日死す年五十二著はす處文集及び語錄あり（近世叢語、先哲叢談、鑒定便覽）

タニ　ジュン　谷遵　字は義夫佐之衛門と稱し維揚と號す家世々水府に仕へ老臣と爲る父忠迺從五位下に叙し甲斐守に任ず遵庶子を以て蔭を得官に補せられ後史員と爲る遵少より業み德田庸に受く强記博覽書を讀て親はざるはなし然れども生平不遇にして寛に坎壈を以て終ふ天明甲辰正月病篤し自から起たざるを勦し筆を引き碑文を作ると云ふ是月廿四日歿す年六十三水戸城四常磐の原に葬る（墓誌）

タニ　シュンヂ　谷舜治　陸軍歩兵少尉なり德島縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て肇備役より召集せられ第十一師團歩兵第四十三聯隊附として從軍中廿八年二月廿八日清國盛京省フマンヂヤン嶺附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タニ　スキセキ　谷水石　丹波の人なり初め右京と稱す家世々柏原侯に仕ふ人となり沈毅慷慨狀貌魁梧能く五斗米竜を玩弄す安政年間洋艦浦賀に來り五市を乞ふ幕府の閣老堀山侯之を許さんと欲す水石上書して其不可を論じ言甚だ激烈、報せず乃ち喟然として嘆じて曰く我が邦環海皆敵なり防禦の術講ぜざる可からずと因て大に力を鐵砲に專にし遂に自ら銃を製す奇巧人を驚かす後洋舶元込銃を齎し來る其の製水石の作る所と暗合すと云ふ一日山中に遊び一雉を銃射す雉死す取て之を見れば羽毛傷ぜず因て嘆じて曰く柔能く剛を制す信なるかなと遂に始て銃丸を禦ぐの一器を製し名けて車輻と曰ふ蓋し初め賀侯聞て之を異とし水石を延て射して襲れず萬延中加賀侯聞て之を異とし水石を延て製を欲す水石素より貧其の貧なきに苦む忠一乃ち之を勝海舟に謂る海舟貲を捐て〻之を助く水石乃ち一小艇を製し山縣陸軍卿に上書して之を試みんと乞ふ陸軍卿以て之を射せしむ百發洞する能はず遂に之を博覽會に出すと云ふ是より先き仙臺侯其の名を聞き月糧十口を饋る森川侯亦之を臣として以て顧問に備へ月糧七口を饋る而して侯悉く其の說を用ふる能はず水石終に辭し去りて埜に耕す明治十年疾を以て歿す年七十七城北日暮里南泉寺に葬ると云ふ（近世偉人傳）

タニ　センザウ　谷潛藏「タカスギシンサク」　大阪の俳人幾江戸に住す本姓は池田氏一陽井、三化、玉池の號あり小菅蒼狐の門人なり文政六年二月八日歿す年九十（俳家歿故年表）

タニ　チナリ　谷千生　國學者なり德島の人語學に長ず明治中歿す

タニ　チュウベエ　谷忠兵衛　長曾我部元親の士にして一ノ宮の城主なり豐臣秀吉元親に使を遣はして伊豫讓岐二國を獻ぜんとす元親服ぜずして使を返す秀吉怒りて羽柴秀長三好秀次をして兵六萬に將として元親を討たしむ秀長忠兵衛に說きて元親に和を勸む元親忠兵衛を卑怯として切腹を命ず忠兵衛元親の勝つ能はざるを察し且つ主家亡滅せん事を憂ひ家老等と議して再び和を促す然れども元親聞かず時に秀長南海より兵を進めて將に土州に迫らんとす元親勢ひ之を拒ぐ能はざるを見て忠兵衛又家老と謀て席を去らざるを見て切腹す長宗我部元親大に後悔して和を求む忠兵衛其威剛を以て之を見て遂に秀吉より慇懃の禮を受く是れ忠兵衛の苦諫に因りて家を保てりと云ふ（豹皮錄）

タニ　テツシン　谷鐵臣　薯彦根藩士遠谷周平の長子なり小字は驅太郎字は百錬太湖と號す少にして學を好み才名あり駒冠笈を負ひて江戸に到り林氏の門に入りて經義を受く既にして諸國を遍歷し長州に留り和蘭の醫術を修めて郷に歸り家業を繼ぎて刀圭に從事し傍ら文學を以て當世の諸名流と交る嘉永年間米艦の來航するや物論紛起海内騷然たり鐵臣夙に皇室の式微を歎じ常に外人の跳梁を憤り廣く有志の徒に結びて私に經世の策を講ず文久三年の春藩主鐵臣等數名を拔擢して士班に列し秩祿を給し老臣岡本半介に屬して京都に遣はし綜紳列藩の間に周旋せしめ或は時に鐵臣を占して侍讀と爲し讀經の暇藩政の機密に參せしむ鐵臣克く勤王の主義を持し百難を排して企畫する所あり幕府の大政を奉還するや藩主斷然方向を決し次で大兵を東北に出し各所に轉戰し以て藩屏の任を盡せり後朝廷其功を賞し永世祿二万石を賜はる此時に當り鐵臣常に藩主に侍して可否を獻じ否を替へ以て匡佐に任じ一方藩長土肥の志士と檄翹の間に折衝し藩是のある所を表したる功少からず明治元年閏四月擢でられて藩の參政となり秩祿千二百石を給せらる鐵臣固辭して受けず藩主之を諭すと再三終に其三名に其三分の一を受く此年自ら姓名を改めて谷退一と稱し後鐵臣と改む二年四月朝廷より微士の命下る是より先き藩主鈴意藩政を釐革し鐵臣を二等執事と爲し專ら其任に當らしむ故に事業半途にして藩を去るに忍ず鐵臣自ら衷情を岩倉公に內陳して許さるゝを得たり同八月執事を免し藩邸に出仕せしめ擢任する事故の如し三年正月彦根藩權少參事に任じ四月大參事に進む四年七月廢藩に當り大藏大丞に任じ尋て以て官を辭し位記を返上す爾來居を京都に移し意を世務に斷ち如意山人と號し儒雅風流以て攝養せり十五年五月特旨を以て位階を復舊し正五位に叙せらる十八年

七月宮內省支廳御用掛を命ぜられしが久しからずして罷む初め朱子學を修め四書分類心解（四册）大學提綱老子摘錄等の著あり七十歲の頃より陽明學に轉じ彌〻修養に勤む四村茂樹の弘道會を起すや其京都支會長として盡力少からず每月一回必ず講演に出席す其他各所に講演して倦まず三十八年十二月二十六日病み以て逝く年八十四京都紫野大德寺內黃梅院に葬る

タニ　デンエモン　谷傳右衛門　名は本敎又文治と曰ふ泰節と號す其先は江州の世士實曆二年七月十七日歿す淺草源空寺に葬る谷氏は代官の小吏なり本敎地方の事に精通し諸國郡代及び縣令等の吏務に裨益すると極めて多し褒美を賜はるゝ數度著遇は田園類說二卷、同錄四卷、縣令須知六卷、地方一樣記弊解二卷皆な寫本を以て行はる官より命じて田安府に附られ司計となる男麗谷其の職を襲ふと雖も鏗毅の事を厭ひ入江北海に學て詩を以て聞ゆ（名人忌辰錄）

タニ　トウカンザイ　谷等閑齋　畫家なり通稱源兵衛越後新潟の人狩野氏に學ぶ其の筆力吳淺明と雖ども過るゝことあたはず然れども妄りに翰を染めず故に其の名世に顯はれず吳元馥嘗て此人に就て少林祖の像を學ぶと云ふ神明祠前に等閑齋が畫く墨馬あり筆力興勁頗る大家の風度あり（畫乘要畧）

タニ　トノモ　谷主殿　藝侯の大夫にして秩二千石を食む學を好みて夙に賢名あり加賀侯の世子宗辰亦た文學を好む其藝侯と緣姻あるの故を以て往々主殿を引き以て學を講ぜしむ一日加賀侯良馬二匹を獲其一を宗辰に賜ふ之を試むるに頗る駿足なり父子之を稱讚するの間偶〻主殿至る侯之を見て曰く卿の學を傳ふるや兒輩常に益を受く幸甚と謂ふ可しと主殿頓首して曰く賢世子は學藝夙と に成り弓馬亦た其の長ずる所所謂才文武を兼ぬる者なり臣の如き固陋寡聞豈に万一に補あらんやと侯心に謂へらく文武を以て兒を稱す語意暗に我を貶するなりと乃ち命じて兩馬を率かしめ笑ひて曰く卿も亦た文武を兼ぬる者なり試に寡人の爲めに此の馬を相せよと主殿起ちて之を回視して寡人の爲めに曰く驅は眞に良馬なり驅は駿と雖も恐らくは其主に利あらざらん願くは君侯之を用ふる勿れ或は之を群下に賜ふも亦た不可なりと侯其故を問ふ曰く此馬額に白點あり是れ蜀王乘る所の的盧と云ふ者なり況や眼睛穩かならず物に遇ひて驚き易きは相者の忌む所なりと侯父子其の明斷に服し謝して曰く敬んで夫子の言に從ほんと而して隱驥す宗左未だ遽くるに及ばず胸に寄び且暮之を撫を惜み馬に拂拭す一日毛骨を撫して嘶さか其の臂を扣く馬驚き起ちて隱驥す宗左衛門に馬ふ宗左大を蹶られて死す侯世子と之を聞て大に驚き益〻主殿の明鑒を嘆じ深く之を欽慕して父子私かに相議し主殿を乞ひて臣となさんと欲し將に秩五千石を以て之を招んとす寵人大規傳歲時に戶外に在りて竊聞し心に之を怒み且つ謂へらく主殿未だ必ずしも騎を善くせず惟だ博學の致す所善く馬を相すや人を相するをや此の人藩に入らば吾肺肝を知らんこと必ずりと遂に之を妨害せんことを思ふ藝世子の夫人之を妨害せんことを懇願し心に之を怒む此の年身めることあり藝侯將に國に留めて產事を視せしむ賀侯之れを聞歲時に戶外に在りて竊聞し心に之を怒み且つ謂へらく主殿未だ必ずしも騎を善くせず惟だ博學の致す所善く馬を相すや人を相するをや此の人藩に入らば吾肺肝を知らんこと必ずりと遂に之を妨害せんことを思ふ藝世子の夫人之を妨害せんことを懇願し心に之を怒む此の年身めることあり藝侯將に國に留めて產事を視せしむ賀侯之れを聞き

みなり特に水墨山水に妙を得、曾て白川樂翁侯の命に依り集古十種を編纂す世人の能く知る所なり又た名山圖繪本朝畫纂等を著し世に稱揚せらる實に近代の畸仙と云ふべし天保十二年十二月十四日歿す年七十八江戸淺草源空寺に葬る文晁性寛量にして典故に耽りては最も深く意を用ふ又た劍を美遽部氏に學びて頗る其の技に精し又た喜みて兵を談ず議論英發四坐爲めに爽然たり性和歌を善くし屢冠にして加茂眞淵に從ひて學ぶ眞淵之を稱して天下の奇才となす其の作る所風韻高潔眞淵と頡頏す而して奇逸は適かに其の右に出づと云ふ著はす所神道本論、論聖、論佛、御國學、文集歌集あり其の餘稿を脱せざる者猶ほ多しと云ふ(事實文編)

タニ ミチタラウ 谷道太郎 陸軍歩兵中尉なり大阪府出身にして明治三十七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ後備歩兵第八聯隊附として出征中三十七年八月二十二日旅順要塞東盤龍山に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タニムラ カジュン 谷村嘉順(谷村嘉順(二世)) 清水流の茶道を清水道節に學びて能くせり其の歿年詳かならず名は正勝聽雪庵と號す(茶人系傳全集)

タニムラ カジュン 谷村嘉順(二世) 清水流の茶人なり名は正遠松庵少圓と號す父嘉順に學ぶ(古今茶人系譜)

タニムラ カジュン 谷村可順 清水流の茶人なり名は正直、即照庵宗薀と號す初め野村休榮に學び後清水道看より皆傳す嘉順二世の子御數寄屋組頭格たり安政四年五月廿七日歿す子三世嘉順嗣ぐ明治廿六年四月歿す(古今茶人系譜)

タニムラ ケイスケ 谷村計介 日向國諸縣郡倉岡の士族にして坂本利右衛門の第二子なり後出でゝ谷村平兵衛の家を繼ぎ明治五年熊本鎮臺の歩卒となる同七年二月佐賀人亂を作すや鎮臺歩兵第一大隊に發し分ちて二となし水陸並び進む計介中に大隊長心得大尉和田勇馬に從ひ海路より佐賀城に入る賊兵遽かに來り攻め銃砲交々發す既にして城中糧食盡き彈藥亦た乏しくして勢支ふべからず乃ち三梯陣に分ち圍を潰やし出でゝ陸路の兵に合せんと欲す計介中陣に屬し門を開きて突出す賊四面より夾擊す我兵殊死して戰ふ賊軍披靡す遂に一方を破るとを得たり然して隊伍混亂す又た分ちて三となす計介大尉奥保鞏に屬し且つ戰ひ且つ走りて觀取村に至る小川あり賊軍、兵を前岸に伏す我腹背敵を受く少尉三木一小部隊を率ゐ堤に據りて銃を放ち賊の右翼を擊つ計介身を挺でゝ奮鬪し遂に之を破り川を渉りて江見村に抵る偶ゝ田夫の疾く走るを見る衆謂ふ彼れ必らず我が動靜を賊に報ずるなりと計介進みて曰く我れ地理を諳んぜず屢ゝ岐路に迷ふ是れ賊の進擊を致す所以なり願ふに此より住吉津みを距る遠きにあらず我れ請ふ隊を離れて河津に到り船を艤ぜん沿途賊若しあらば必ず銃を發して我を射ん諸軍銃聲を聞かば則ち更らに他路を取れ我れ一死諸君の爲に犧導せんと衆感歎して之を許す計介乃ち單身前行す皆耳を傾けて之を尾し河津に進すると及び計介既に船を艤して待つ乃ち急ぎ渡る賊兵追至す船の漕ぐべきなし我兵遂に陸兵に會する得是の役や計介徒りせば則ち一部兵悉く河上の鬼と爲るも亦た未だ知るべからずと云ふ已にして大阪の鎮兵來り授け諸道井び進みて佐賀を攻む計介每戰甚だ力む人其膽勇を稱す六月陸軍伍長に任ず八月第十一大隊に屬して鎮壓の役に從ふ九年神風黨の熊本鎮臺を襲ふや參謀大尉敏事を以て小倉に在り變を聞て即ち還る聯隊長心得少佐乃木希典計介を以て團行せしむ蓋し計介の倚るべきを以てなり計介已に熊本に至る將に復小倉に赴きて臺中の形勢を報ぜんとす會ゝ秋月山口の亂人井び起り諸聯隊擾變湧るべかりしも乃ち計介をして便道探偵せしむ曰く柳川若し異狀あらば速に還り報ぜよと計介乃ち形を變じ單夫と爲り以て動靜を窺ふ其の異狀なきを以て遂に小倉に至る十年薩人反し大擧して熊本城を圍み內外阻絶し聲聞通ぜず時に少將谷干城熊本城兵を領し守城の方略を征討軍に報ぜんとす營其の人を得難し計介時に十三聯隊に屬す城中に聯隊長心得少佐川上操六なるものあり衆も聽し計介を擧げて密に其の意を諭す計介曰く一身は輕く使命は重し計介は一下士のみ豈能く之を辨ぜんやと申諭再三計介沈思之に久うして曰く謹みて命を報ぜんと既にして曰く事必成を保せん但ゝ復命の日は期し難き耳と少佐と俱に來て命を言ふ干城乃ち敎令を授く計介俯聽し退て煤煙を取り以て全身に塗り再三摩して去

常に兩家の言多く後人の假託に出でしことを疑ひ後ち神道本論御國學等の書を著はして大に發明する所あり漢學は少壯の時宋人を祖述し英氣餘りて時に圭角あるを免れず中年にして博く百家に涉り老に至るに及びては成文醇學終に大人の風あり皇朝の古記典故に至りては最も深く意を用ふ又た劍を美遽部氏に學びて頗る其の技に精し又た喜みて兵を談ず議論英發四坐爲めに爽然たり性和歌を善くし屢冠にして加茂眞淵に從ひて學ぶ眞淵之を稱して天下の奇才となす其の作る所風韻高潔眞淵と頡頏す而して奇逸は適かに其の右に出づと云ふ著はす所神道本論、論聖、論佛、御國學、文集歌集あり其の餘稿を脱せざる者猶ほ多しと云ふ(事實文編)

タニ ミチタラウ 谷道太郎 陸軍歩兵中尉なり大阪府出身にして明治三十七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ後備歩兵第八聯隊附として出征中三十七年八月二十二日旅順要塞東盤龍山に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タニムラ カジュン 谷村嘉順 清水流の茶道を清水道節に學びて能くせり其の歿年詳かならず名は正勝聽雪庵と號す(茶人系傳全集)

タニムラ カジュン 谷村嘉順(二世) 清水流の茶人なり名は正遠松庵少圓と號す父嘉順に學ぶ(古今茶人系譜)

タニムラ カジュン 谷村可順 清水流の茶人なり名は正直、即照庵宗薀と號す初め野村休榮に學び後清水道看より皆傳す嘉順二世の子御數寄屋組頭格たり安政四年五月廿七日歿す子三世嘉順嗣ぐ明治廿六年四月歿す(古今茶人系譜)

タニムラ ケイスケ 谷村計介 日向國諸縣郡倉岡の士族にして坂本利右衛門の第二子なり後出でゝ谷村平兵衛の家を繼ぎ明治五年熊本鎮臺の歩卒となる同七年二月佐賀人亂を作すや鎮臺歩兵第一大隊に發し分ちて二となし水陸並び進む計介中に大隊長心得大尉和田勇馬に從ひ海路より佐賀城に入る賊兵遽かに來り攻め銃砲交々發す既にして城中糧食盡き彈藥亦た乏しくして勢支ふべからず乃ち三梯陣に分ち圍を潰やし出でゝ陸路の兵に合せんと欲す計介中陣に屬し門を開きて突出す賊四面より夾擊す我兵殊死して戰ふ賊軍披靡す遂に一方を破るとを得たり然して隊伍混亂す又た分ちて三となす計介大尉奥保鞏に屬し且つ戰ひ且つ走りて觀取村に至る小川あり賊軍、兵を前岸に伏す我腹背敵を受く少尉三木一小部隊を率ゐ堤に據りて銃を放ち賊の右翼を擊つ計介身を挺でゝ奮鬪し遂に之を破り川を渉りて江見村に抵る偶ゝ田夫の疾く走るを見る衆謂ふ彼れ必らず我が動靜を賊に報ずるなりと計介進みて曰く我れ地理を諳んぜず屢ゝ岐路に迷ふ是れ賊の進擊を致す所以なり願ふに此より住吉津みを距る遠きにあらず我れ請ふ隊を離れて河津に到り船を艤ぜん沿途賊若しあらば必ず銃を發して我を射ん諸軍銃聲を聞かば則ち更らに他路を取れ我れ一死諸君の爲に犧導せんと衆感歎して之を許す計介乃ち單身前行す皆耳を傾けて之を尾し河津に進すると及び計介既に船を艤して待つ乃ち急ぎ渡る賊兵追至す船の漕ぐべきなし我兵遂に陸兵に會する得是の役や計介徒りせば則ち一部兵悉く河上の鬼と爲るも亦た未だ知るべからずと云ふ已にして大阪の鎮兵來り授け諸道井び進みて佐賀を攻む計介每戰甚だ力む人其膽勇を稱す六月陸軍伍長に任ず八月第十一大隊に屬して鎮壓の役に從ふ九年神風黨の熊本鎮臺を襲ふや參謀大尉敏事を以て小倉に在り變を聞て即ち還る聯隊長心得少佐乃木希典計介を以て團行せしむ蓋し計介の倚るべきを以てなり計介已に熊本に至る將に復小倉に赴きて臺中の形勢を報ぜんとす會ゝ秋月山口の亂人井び起り諸聯隊擾變湧るべかりしも乃ち計介をして便道探偵せしむ曰く柳川若し異狀あらば速に還り報ぜよと計介乃ち形を變じ單夫と爲り以て動靜を窺ふ其の異狀なきを以て遂に小倉に至る十年薩人反し大擧して熊本城を圍み內外阻絶し聲聞通ぜず時に少將谷干城熊本城兵を領し守城の方略を征討軍に報ぜんとす營其の人を得難し計介時に十三聯隊に屬す城中に聯隊長心得少佐川上操六なるものあり衆も聽し計介を擧げて密に其の意を諭す計介曰く一身は輕く使命は重し計介は一下士のみ豈能く之を辨ぜんやと申諭再三計介沈思之に久うして曰く謹みて命を報ぜんと既にして曰く事必成を保せん但ゝ復命の日は期し難き耳と少佐と俱に來て命を言ふ干城乃ち敎令を授く計介俯聽し退て煤煙を取り以て全身に塗り再三摩して去

る黑質自然の如し因て鶉衣を著け笑て曰く以て賊輩を欺く可しと夜に乘じて城を出て將に南關に赴かんとす賊の縛する所と爲り百方解謝するも聽かず守卒の眠るを伺ひ爪を以て繩を絕ち逃れて潛行す吉次山中を過て再び捕に就く計介佯て懦夫の狀を爲し股栗垂泣す賊之を憫み縛を解て擔夫と爲す復た間を得て逃れ邀に第一旅團に逮す時に二月廿八日なり縛に就くや椅掠悲横飲食共に絕つ官軍に逮する比ひに顏色悉く變ず噫兵に遇ひ告るに實を以てす信ぜず縛して之を本營に致す關長少將野津鎮雄計介を召見す歎歎言ふ能はず蓋し苦楚を脫し使命を終り喜び極り自ら禁ずる能はざるなり既にして徐ろに命を述べ戰狀を說かしむ悲壯慷慨聽く者皆感歎す之ふ少將之を厚遇し營にありて休止せしむ三月四日官軍田原坂を攻む計介戰隊に列せんとを請ふ慰諭して許さず堅く請ひて已まず乃ち命ずるに傳令の事を以てす適ゝ官軍利あらず計介怒氣勃々自ら抑ふる能はず躍起して偽人の銃を奪ひ單身叱咤賊壘中に突入し銃彈に中りて斃る年二十有五肥後國玉名郡木葉町字蘆浦に葬る計亟る壘蠆皆な歎惜す計介人と爲り忠實寡言上官に事ふる恭敬にして禮あり然して克く使令を逮し終に奮戰して命を殞す勇氣凜々人をして感動せしむ明治十六年同志相謀り碑を靖國神社の境內に建て以て不朽に傳へ陸軍大將二品有栖川熾仁親王殿下之に篆額し願して軍人龜鑑之碑と云ふ少將谷干城其の文を選む將校より兵卒に至るまで皆な欣然として資を捐て之を助く事聖聽に聞す勅して其の忠烈を賞し金若干圓を賜ふといふ(軍人龜鑑碑)

タニムラ サンイチ 谷村三育 清水流の茶道を清水道節に學ぶ名は正玄と直玄とに學ぶ名は正英德川氏の御數寄屋頭なり實暦三年十二月六日歿す(古今茶人系譜)

タニムラ サンセキ 谷村三夕 清水流の茶道を清水道節に學ぶ一家を成す吹上御庭方にして御數寄屋組頭格たり後護尺軒貝樂と號す(古今茶人系譜)

タニムラ セイヤウ 谷村正養 觀世流謠曲の師範なり江戸の人明治の初年より斯道の指南に從事し又能樂界の爲め盡す所尠からず三十七年十二月二日病死す年七十六

タニムラ ナホシ 谷村直 勤王の忘士なり初め名を秀壽と稱し後直と改む金澤の市醫なり殊に測量の術を好みたり文久三年藩生徒を募り費用を給し江戸に遊學したりしが直も其選に入り江戸に出して好む所の術を學ばしむ直も其選に入り江戸に遊學したりしが幾程もなく歸藩す元治元年七月京師に變起り藩世子皆を受くと聞き京に上り計る所あらんとし小川幸三と相謀り密に藩を出でゝ江戸に入る比ひに顏色悉く變ず噫兵に遇ひ告るに實を以てす信ぜず縛して之を本營に致す關長少將野津鎮雄計介を召見す歎歎言ふ能はず蓋し苦楚を脫し使命を終り喜び極り自ら禁ずる能はざるなり既にして徐ろに命を述べ戰狀を說かしむ悲壯慷慨聽く者皆感歎す之ふ少將之を厚遇し營にありて休止せしむ三月四日官軍田原坂を攻む計介戰隊に列せんとを請ふ慰諭して許さず堅く請ひて已まず乃ち命ずるに傳令の事を以てす適ゝ官軍利あらず計介怒氣勃々自ら抑ふる能はず躍起して偽人の銃を奪ひ單身叱咤賊壘中に突入し銃彈に中りて斃る年二十有五肥後國玉名郡木葉町字蘆浦に葬る計亟る壘蠆皆な歎惜す計介人と爲り忠實寡言上官に事ふる恭敬にして禮あり然して克く使令を逮し終に奮戰して命を殞す勇氣凜々人をして感動せしむ明治十六年同志相謀り碑を靖國神社の境內に建て以て不朽に傳へ陸軍大將二品有栖川熾仁親王殿下之に篆額し願して軍人龜鑑之碑と云ふ少將谷干城其の文を選む將校より兵卒に至るまで皆な欣然として資を捐て之を助く事聖聽に聞す勅して其の忠烈を賞し金若干圓を賜ふ

タニムラ モトキチ 谷村元吉 陸軍歩兵大尉なり滋賀縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備歩兵第十六旅團第五十三聯隊附として從軍中廿八年六月十一日清國盛京省永陵にて病に罹り同七月十七日安東縣兵站病院に於て病死す

タニムラ ミツヨシ 谷村光義 歌人なり山城石清水社士壺井の門人(鑑定便覽)

タニ モリトモ 谷衛友 衛好の子なり初め字は甚太郎、秀吉に屬す初二百石を食む文戰死する時甫て十七秀吉功を錄して信長に報じ蓄邑六千石に二所地を加へて之を賞賜す天正十五年秀吉に西征に從て監軍となり嚴石城を攻め自ら武を奮ひ戰を勵ます十六年從五位下丹但の人と丹後を侵伐す細川幽齋田邊の城に據應じて拒ぎ戰ふ衛友嘗て就て和歌を學べり是に於て私に攻擊を緩うし以て師恩に酬ゆ上國軍敗るに及び幽齋歎請し其の罪を救し蓄邑丹波山家の一萬六千石を賜ふ大和口に遁る城兵死戰し諸部之阪夏の役東軍に屬して大和口に遁る城兵死戰し諸部之が爲に敗績す衛友子衛成、衛勝、衛政と奮戰し深く入りて敵に圍まれ自ら槍を揮ひ聲を勵し遂に敵を逐ひて樓門に薄る是の日首を獲る九級、翌日細川興晴來り謂ふ昨日の戰を啓せんと對て曰く微功啓するに足らずと之ふ強ゆ聽かず凱旋の後黃金を賜ひて褒む寛永四年卒す年六十五子衛成、吉長、衛勝、衛政、衛長、衛忠の子孫皆幕府に仕ふ(野史)

タニ モリヨシ 谷衛好 美濃席田郡伊志良の人なり(兵家茶話に曰く江州犬上郡の人)姓は源氏、福田正之の子、大膳と稱す幼にして伯父谷野綱衛に養はれて江州甲賀郡長野邑に居る後父の許に還り猶谷野と稱す後甲賀郡中の地名に因て族を谷と更む初長井道利に屬す道利死して後ち勝龍寺の戰首級を獲て織田信長に謁し信長其の勇を賞して譜を勝ひ五餅を拜賞ぬきて授く天正六年羽柴秀吉の播磨を伐つや信長に請て衛好を寄將となさんと欲す信長曰く援將となすべしと乃ち播州に赴き別所長治を三木城に攻む衛好卒を賞伏坂に築き士卒を出して接戰す三騎あり衛好槍を揮て皆刺し從者をして之を誅す朝より午時に至まで接槍再來りて槍を接す復た之を刺す朝より午時に至まで接槍再回と雖も城中兵多くして嶮に據り輙く陷らず秀吉曰く大膳平素の勇膽老年となると衛好惡て曰く城嶮に兵雄にして遽かに拔け難しと秀吉赫怒して刀を按す衛好も亦劍を握て相抗す竹中重治蜂須賀家政開諭して衛好を陣舍に送る其夜秀吉親ら酒殺を携へて來り謝して曰く今日の戰功實に拔群なり我前言の過を愧づ請ふ憾を解き忠を致せと懇款信を竭して去る明年七月十日城兵平山の寨を襲ふ衛好及び子衛友赴き援く敵又來りて賀伏坂の寨を襲ふ衛好の家人福田左京等十一人戰死す士卒多く死傷す父子急を聞き騎を反へし奮擊血戰す衛好剛勇と雖も傷を被る五十餘處寨に入る能はず敵合圍す衛好死戰し遂に室小兵衛に滅ぜらる衛友奮怒し與に陣中に戰し其首を獲ゝ秀吉敵を卻け來り救ふ衛友免き得たり(兵家茶話に云ふ衛好部下を率ゐて三木城の伽佐郭を攻むるや城兵防禦す衛好寨を勵まして先登し一城門を拔き小坂に向ふ城兵敗入槍を把て戰ふ衛好奮擊力戰す敵兵三百之れが爲に辟易す士卒死傷する大半遂に其郭を奪ふ衛好創を被る數處頭腦銃に中り槍を把る能はず城兵由井小兵衛後より衛好を斬る衛友來りて小兵衛を滅すと云ふ)衛友衛好の屍を懷て歸り其由中に斃る年五十大小戰鬪總て五回なりと云ふ法名性徹淨彈、法源院と號す子衛友(野史)

タニ レンセン 谷廉泉 谷派劍法の祖なり通稱小左衛門祖重代一得齋と號し父重箭日四と號せり一得齋つねに劍術を好み一宮照信に就て之を學び其奥秘を究む一得齋之を日回に授り日回又た之れを川又

福顯に授く廉泉父祖の傳ふる所を以て敢て矢墜せず福顯に就て之を學び其の法を精究して練習年あり享保七年六月朔晨に起きて父祖の神主を拜し就て鬼祿を閲みするに本日死亡人員の中に一宮及下總を記せり一宮は左太夫照信にして下總は何人たるを知らず照信の死は其年月を詳かにせずと雖も而かも朔たるを知る故に亦拜して退く其夜の夢に一大厦あり照信上に居り次に坐する者兩三人祖一得齋に謂ひて曰く櫛きに驗す所の谷派今ま處分照信一得齋に謂ひて曰く固より望む所なりと照信墨せんと欲す如何一得齋曰く固より望む所なりと照信墨髮箱を開て書一卷を出す廉泉坐を起きて進む福顯も亦た相繼て進む廉泉其の書に接すれば乃ち一の帖摺本なり題して曰く一宮流谷派一國一人の書と廉泉之を披閲するに標目あり曰く萬事拔曰く無極刀曰く太極刀と書尾に誓神の辭及び年月日授受姓名を記すこと式の如し照信呼びて曰く式部來れと乃ち其の門人飯野式部なり起ちて無極刀の法を授かる次に一人あり亦た起ちて太極刀の法を授かる其の法、無極刀は坐して刀を拔き横に之を截る所謂居合なり太極刀は起ちて刀を拔き直に之を截る所謂立合なり既にして夢覺む廉泉其だ之を異しみ中夜燈を點じ刀を操りて之を試るに夢中に習ふ所心手相應ず悉く其法の如し翌日福顯を招きて之に告げて曰く夢兆此くの如し吾家傳はる所の居合術は今より號を改めて谷派と稱す（谷派劍術記）

タニ ロクコク　谷蘆谷　江戸の詩人なり名は本儒文化六年九月五日歿す年八十一、本數の子文晁の父（江戸名家墓所一覽）

タヌマ モトツグ　田沼意次　父は意行（或は重意に作る）と曰ふ本と紀州藩の胥吏なり吉宗將軍職を繼ぐに及びて意行入り近侍たり意次父の後を受け家重家治に仕へて寵あり延享四年小姓隊番頭兼中次に進ぜらる寛延元年番頭と爲り上總の田一千四百石を加賜せらる元文二年十二月從五位下に叙せられ主殿頭と稱す寶曆元年側衆に列す（或は寛永九年側衆と爲り是年執啓と爲るに作る）八年秋遠江の田を加へられ二萬石を食み侯爵に列せられ明和四年秋側用人と爲り從四位下に叙せられ命を受けて遠江の相良城を築き之に治す六年秋老中に進じ侍從に任ぜらる安永元年老中と爲り累れて食邑五萬七千石を加賜せらる是より先き老中松平乘邑卒して意次特り政柄を專らにす天明六年夏將軍家治疾あり意次乃ち若林敬順日向東菴の二醫を薦む而して東菴固辭し敬順專ら診脈を執り調藥を進む家治疾益々篤因りて老臣内人等商議し衆醫治藥を服して疾益々篤しむ衆謂ふ藥は乃ち十棗湯にして尊貴の服する所に非ずと是に於て後房衆姬内人相罵りて曰く庸醫焉を進むと而して家治疾益々篤くして竟に薨ず意次之を聞き遽かに留め内人喙唇たり老中水野忠友内人を誡めて曰く異藥を調進す我が曹悔歎して已まず然れども今放つべし則ち立ところに中らざることなし其の發するや彈電の先ずるが如く其鳴るや驚雷の轟くが如し聞く者其の耳を掩はざるなし時蘆之を見て以爲らく希世の珍なりと始め其の何の名たるを知らず亦た其の何の用たるを詳にせず既にして人名づけて戲砲と爲す者は知らず明人の名づくる所か抑も此島人の名づくる所か一日時蘆重譯して之を異人に學ばんことを請ふ異人曰く君若し之を學ばんと欲ぜば我亦た其の蘊奥を擇くして以て告げんと時蘆曰く蘊奥得て聞く可きか曰く心を正うすると目を胸にするに在るのみ時蘆曰く正心は藥の法と火を放つの道となりと時蘆把玩の餘戲匠數人をして其の形製を倣ふ之に似たりと雖も其の底を塞ぐ所以を知らず其の堅牢異人復た來る中に一人の戲匠あり時蘆以て天の授くる所と爲し即ち金兵衛尉清定をして其の底を塞ぐ所以を學ばしめ漸く歲月を經て之を知る是に於て歲餘にして新に數十の戲砲を製し然して後ち其の臺の形勢と其の飾の鍵鑰の如き者とを製造す時蘆の意は其の臺と其飾とに在らずして之を行軍の時に用ふ可きに在り是に於て島中視て之に倣ひ百發百中する者亦た其の幾多なるを知らず後遂に海内に傳播し以て今日の盛大を致すと云ふ（戲砲記）

タヌカズ　種員　小說家なり柳下亭と號す通稱は坂本屋新七酒商を業とし後小間物を商とし又書估なる姓は坂倉氏初め金次郎又万太郎と稱す乾坤坊貞雪の弟子となり紀海音と名のり講談の席にも出づ後種彦は曰ふ意知其の統系の微なるを憂ふ幕士佐野政言は源爲り累れて食邑五萬七千石を加賜せらる是より先き老中松平乘邑卒して意次特り政柄を專らにす天明六年夏將軍家治疾あり意次乃ち若林敬順日向東菴の二醫を薦む而して東菴固辭し敬順專ら診脈を執り調藥を進む家治疾益々篤因りて老臣内人等商議し衆醫治藥を服して疾益々篤しむ衆謂ふ藥は乃ち十棗湯にして尊貴の服する所に非ずと是に於て後房衆姬内人相罵りて曰く庸醫焉を進むと而して家治疾益々篤くして竟に薨ず意次之を聞き遽かに留め内人喙唇たり老中水野忠友内人を誡めて曰く異藥を調進す我が曹悔歎して已まず然れども今放つべし則ち立ところに中らざることなし其の發するや彈電の先ずるが如く其鳴るや驚雷の轟くが如し聞く者其の耳を掩はざるなし時蘆之を見て以爲らく希世の珍なりと始め其の何の名たるを知らず亦た其の何の用たるを詳にせず既にして人名づけて戲砲と爲す者は知らず明人の名づくる所か抑も此島人の名づくる所か一日時蘆重譯して之を異人に學ばんことを請ふ異人曰く君若し之を學ばんと欲ぜば我亦た其の蘊奥を擇くして以て告げんと時蘆曰く蘊奥得て聞く可きか曰く心を正うすると目を胸にするに在るのみ時蘆曰く正心は藥の法と火を放つの道となりと時蘆把玩の餘戲匠數人をして其の形製を倣ふ之に似たりと雖も其の底を塞ぐ所以を知らず其の堅牢異人復た來る中に一人の戲匠あり時蘆以て天の授くる所と爲し即ち金兵衛尉清定をして其の底を塞ぐ所以を學ばしめ漸く歲月を經て之を知る是に於て歲餘にして新に數十の戲砲を製し然して後ち其の臺の形勢と其の飾の鍵鑰の如き者とを製造す時蘆の意は其の臺と其飾とに在らずして之を行軍の時に用ふ可きに在り是に於て島中視て之に倣ひ百發百中する者亦た其の幾多なるを知らず後遂に海内に傳播し以て今日の盛大を致すと云ふ（戲砲記）

タヌカズ　種員　小說家なり柳下亭と號す通稱は坂本屋新七酒商を業とし後小間物を商とし又書估なる姓は坂倉氏初め金次郎又万太郎と稱す乾坤坊貞雪の弟子となり紀海音と名のり講談の席にも出づ後種彦

の門に入て種員と改め自繼物語、兒雷也譚等の草双紙を著す安政五年二月歿す又曰く秋コロリに罹りて歿す年五十二

タヌネシゲ　種繁「ヒヨウテイタネシゲ」

タヌネシゲ　種重　古刀の鍛工にして周防に住し二王を冒稱す或は云ふ文明年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タヌダ カナフ　種田叶　薩鹿兒島藩士にして明治十年西南役に於て警部補を以て別働隊第三旅團附と爲り從軍中三月三十日肥後國益城郡裝婆神越に於て負傷し四月三日同國八代郡八代警視病院に於て死去す

タヌダ サダカツ　種田定勝　彫工なり吉之丞と稱し加州金澤に住す演乘に學び其の業を以て世に現る（裝劍奇賞）

タヌダ マサアキ　種田政明　薩軍少將なり薩鹿兒島藩士にして熊本鎮臺司令長官在職中明治九年十月十一日熊本山口縣岡縣賊徒追討之役に戰死す

タヌダ マサユキ　種田正幸　名は平間、種田流槍術の祖なり大島伊六の子高賢の門に入り精に達す（武術流祖錄）

タヌダ モクノスケ　種田木工助　四村流の砲術家なり四村忠次の門人（武術流祖錄）

タヌダ ユキタダ　種田幸忠　種田流の槍術家也市右衛門と稱す槍を父正幸に學び松平備前守隆綱に仕ふ（武術流祖錄）

タヌナガ　胤長　小鞠愈太と稱す伊豆蓮山の刀匠にして文政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タヌナガ　種永　藥師寺氏四郎右衛門と稱す肥前長崎の刀匠にして阿蘭陀鍛を宗とす行廣の師なり寛永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タヌナガ　種永「カノウウシン」

タヌノブ　種信「カノウウヤ」

タヌノブ　胤信「カノタンエン、カノバイジュ」

タヌノリ　種則　筑後大石の刀匠にして天正年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タヌノリ シンワウ　種德親王　曦仁親王の子にして享保十九年四月生れ延享二年十二月櫻町天皇の猶子と爲り三年五月親王と爲る親王實相院に入り髮を剃りて名を增賞と改め戒を大僧正諦常に受く寶曆二年七月出崎入道親王の弟子と爲り十二月移りて聖護院に居り三年十二月蘭城寺長吏に補せられ五年十月二品に叙せらる七年七月大峯に入り明和三年八月護持僧と爲る七年六月牛車に乘じて宮中に出入するを聽れ尊て龔ず時に年三十七

タヌヒコ　種彦　柳亭と號す江戸の小說家なり高屋彦四郎と稱す德川氏の世臣にして祿二百石を食む本姓は横手氏系は甲斐の孫將横手某に出づ種彦初め畵を工みにし俳諧狂歌を善くし愛雀軒久足蓊翁と號す木卯狂歌名を柳の風流後に心の種俊と曰ふ後小說を以て名を得而して僭紫田舍源氏の一書は源語に根據し翻して近古の事と爲す文詞麗絶婦人情に入り大に世に行はる因て其の淺陋拙原の居濃を名けて僅紫樓と曰ふ時に俳優に坂東三津五郎と云ふ者あり其の伎に精し種彦窃貌だ肯る醉後戲れに之に扮す人誤りて以て眞と爲す因て或は三彦と稱す乃ち戲文に其の字を署し以て印章に代ふと云ふ種彦嘗て謂ふ小說家は猶ほ俳優紹鼓のごとし鼓の容色絶麗なる認ふるに錦繡珠玉を以てすず久優の伎藝超群なる假すに脚色華飾を以てせざれば未だ以て人を動かすに足らず作者縱横の才變化の華あれども讀圖の妙影刻の工を得ざれば則ち豈に落紙遽に賞を求むるを得べけんや昔し俳優中村秀鶴伎を學び稱の事を演ず秀鶴其の儕輩と厥祖を著て背後に列立すべて之を戚さむ數日を經て稜角新たなるが如し觀る者之を異とす伎益々進み後ち遂に上品に陞る善く其心を用ふと謂ふ可しと之を以て種彦著はす所の田舍源氏及び諸國物語等の書は獨り圖書彫刻の精のみならず裝潢著色の美も一に意料の外に出づ觀る者愛玩して手ら釋つる能はず天保中幕府の執政水野忠邦大に怒て草ため稗史小說を以て淫靡、俗を傷ふとして其の書を毀たしむ或ひと忠邦に謂ひて曰く種彦は幕府の士にして無用の文字を著はす國の蠹なり且つ其の逃ぶる所の田舍源氏は托して以て宮中の陰事を洩らす宜く處するに法を以てすべしと更に旨を承けて糺察す種彦分疏して理あり事解くが得たりと雖も言ふ者止まず憂懼して病を得幾ばくもなくして歿す實に天保十三年七月十九日なり年六十種彦年少にして氣岸甚だ峻朗なりすれば人と忤ふ父柳は風に折れざるの俳句を爲り以て之を誡む終身屈曆して怠らず父た巧思あり其の田舍源氏を著はすに圖する所の櫨閣齋樹樹獨窓檐及び物器玩好一に新機に出で意を畵工に拂けて反覆丁寧苟も一篇を施さず後人據て土木を興し物器を造くるに驚歎だも業はずと又選魂紙料、用捨箱の著あり（譚海、戲曲小說通志）

タヌヒコ　種彦（二世）

タヌヒコ　種彦（三世）　通稱高島藍泉と曰ひ轉々堂と號す東京繪入新聞の記者にして著名なり明治十五年中三世種彦を嗣き同十八年十一月十八日歿す年四十八幕府の茶茗なり

タヌヒデ　種秀「リツテイセンクワ」

タヌヒロ　種廣　源姓市太夫と稱し後肥後大掾と稱す肥前佐賀の刀匠にして寛文年間の人或は市太郎に作る（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タヌムラ キザン　種村箕山（種村自ら修して種と云ふ）儒者なり名は寶、字は元民、箕山は其の號、新治と稱す江州の人、澤琴所に學びて野村東皐と友と善し寛政十二年六月歿す年七十九著はす所國語補正集解、國管補註、詩學辨麗、修辭指南、白雪堂集あり（繪詞家人物志、鑒定便覽）

タヌモリ　種盛　源姓元龜年間の刀匠にして何れの處の人なるや詳ならず（古今鍛冶銘早見出）

タヌユキ　種行　藤原姓慶長後高田の刀匠にして元龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タヌユキ　胤行「トウタネユキ」

タヌヨシ　胤吉　鍛工なり近江石山の鷹堀井某の子なり農具を鍛ふるを業とす幼名來助大阪の月山貞吉の門に入り石山吉文と號す後嘉永四年江戸に出て莊司直胤の門に入り今の名に改む文久中膳所藩に仕へ明治廢刀の後家道大に衰ふるも節を變ぜず廿五年天皇の銀婚式に三宮義胤に依て刀二口を奉獻す廿八年上京し三宮邸に居り宮内省御用鍛冶を命ぜられ頗りに古刀に劣らざるの名刀を作る三十六年四月廿九日歿す年八十

三

タノノベ シゲユキ 田野邊重之 將監と稱す下野那須氏の支族なり父資次二子を生む重之は則ち宰なり田野邊に營して之に居る因て氏とす性慈慧にして武能慶く戰功あり敎岡城主千本資俊は其兄なり資俊始め息なし芳賀の茂木某の次子を養ひて嗣となし美濃と稱す一男あり學ぐ之を重之に託して田野邊に在り長じて十郎重政と稱す乃ち美濃を遇するの恩潮く竢ふ因て謝して芳賀に歸る生父甚だ之を銜みて之に報ひんことを思ふ適く資俊の妻憲大關氏と善からず重政母の意を承けて其婿を去る婿翁味菴意甚だ平ならず其の僕松下某の謀ことを用ひて資俊を那須資晴不明轍ち之を信じ共に謀議を定め茂木を以て授となす天正十三年十二月入日資俊父子を誑誘し之を瀧邑太平寺に殺す重之隨從すと雖も軍議の秘密を以て過りて墻外に在り變を知りて入りて鬪ひ縱橫奮鬪して壯士二人を斬り双幹枉撓す因て柱を以て賀となして之を矯直す敵衆じて之れを斃す資俊父子已に害に遇ひ重之獨り難に殉す之れを千本長安寺に葬る是に於て千本の族四散流落す（事實文篇）

タノムラ チクデン 田能村竹田 有名の畫家なり名は孝憲字は君彝、行藏と稱す竹田は其の號、又雪月書堂、鶴拙廬等の號あり豐後岡の人、家世々藩醫たり父を碩庵と曰ふ竹田幼にして學を好み詩を嗜む才思秀拔稍く長じて醫を學ぶ其の志に非ざるを以て藩主幸に命じて儒員とす時に年二十三、是に於て東都に至り古屋昔陽岳東海に從ひて專ら學藝を攻め傍ら畫法を谷文晁に學ぶ是より先唐橋世濟豐後地理誌を撰し稿を脫ぜずして死す藩主竹田及び伊藤叔をして其の槀を卒へしむ竹田因て江戸に居ると一年餘にして國に歸り寬叔と同じく其の書を倫む書成るに及びて藩主之を德川大府に捧呈し又竹田等に時服を賜ひて其の功を賞す竹田後幾ならずして熊本に遊びて李紫溟、大城霞梁、村井琴山等の諸名士と交り又京都に出で村瀨栲亭に就て修學し居ること二年岡に反る竹田多病、世務に堪へず屢く致仕を請ふ藩主終に之を許し更に養老俸を賜ひて優遇す時に年三十八、竹田是より復た經史を講ぜず優遊性を養ひ風流自ら娛む數く京阪に往來し特に賴山陽篠崎小竹、小石樞蘭、雲華上人等と交最も厚し竹田素より才藝多し詩文を能くし書畫に長じ傍ら喫茶香道の技に至るまで究得せざるなし本邦古來詩餘を作る者多なり竹田以て藝苑の缺典とす風に刻苦之を學ぶ覓に壎詩圖譜を著して世に刊布す竹田詩文書畫に於ては悉く一時名聲の許す所と雖も其の得意のものは畫を以て第一とす其の畫を作るに高く標的を樹て世人の纏舍に從はず初谷文晁の風を畫くと雖も後明清人の遺蹟を研究して遂に一家の畫風を作す山水人物花鳥共に堪能にして其の形狀明清人の筆意に伯仲す頼山陽雲華上人皆畫は賞歎舍かず實に近代の一代名家なり常に曰ふ畫は筆を用ふるの工ならざるを患へず精神の到らざるを患ふ筆を用ふるの工なるものは特に古人を摸するに宜し精神到るものは自家一脚を立つと又當時畫風の陋俗に流るゝを歎じ務めて古人の規矩に從ふべきを務む初大阪に遊ぶ時に米山人と云ふものあり亦た書畫を善くす特に竹田の畫を喜びて曰く後來我が畫の眞意を傳ふべきものは唯吾子のみと其の夙に名士に知らるゝと此くの如し天保八年八月二十六日大阪に病死す年五十九（續近世叢談、扶桑畫人傳）

タノムラ チョクニウ 田能村直入 畫家なり豐後の人幼名を松太と云ひ後嬾と改む小虎散人と號し直入山樵笠翁青梧飲茶庵主人等の別號あり甫めて九歲田能村竹田の門に入りて南畫を學ぶ師深く之を愛し終に養ふて義子と爲し田能村の姓を冒さしむ（或は曰ふ竹田の姓を稱するは竹田の歿後其長子某に請ふて之を名乘れるなりと）壯年諸國を遊歷し各山大川を跋渉し二十六歲にして浪花に入り學を篠崎小竹に受けて武を大鹽後素の門に識ず明治の初め京都に居し首唱して畫學校を創設し推されて攝理兼教頭となり又宗派の畫學生徒を養成したり後の京都私立算術工藝學校則ち寬叔と同じく其の書を倫む書成るに及びて藩主之を德川大府に捧呈し又竹田等に時服を賜ひて其の功を賞す竹田後幾ならずして熊本に遊びて李紫溟、大城霞梁、村井琴山等の諸名士と交り又京都に出で村瀨栲亭に就て修學し居ること二年岡に反る竹田多病、世務に堪へず屢く致仕を請ふ藩主終に之を許し更に養老俸を賜ひて優遇す時に年三十八、竹田是より復た經史を講ぜず優遊性を養ひ風流自ら娛む數く京阪に往來し特に賴山陽篠崎小竹、小石樞蘭、雲華上人等と交最も厚し竹田素より才藝多し詩文を能くし書畫に長じ傍ら喫茶香道の技に至るまで究得せざるなし本邦古來詩餘を作る者多なり竹田以て藝苑の缺典とす風に刻苦之を學ぶ覓に壎詩圖譜を著して世に刊布す竹田詩文書畫に於ては悉く一時名聲の許す所と雖も其の得意のものは畫を以て第一とす其の畫を作るに高く標的を樹て世人の纏舍に從はず初谷文晁の風を畫くと雖も後明清人の遺蹟を研究して遂に一家の畫風を作す山水人物花鳥共に堪能にして其の形狀明清人の筆意に伯仲す頼山陽雲華上人皆畫は賞歎舍かず實に近代の一代名家なり常に曰ふ畫は筆を用ふるの工ならざるを患へず精神の到らざるを患ふ筆を用ふるの工なるものは特に古人を摸するに宜し精神到るものは自家一脚を立つと又當時畫風の陋俗に流るゝを歎じ務めて古人の規矩に從ふべきを務む初大阪に遊ぶ時に米山人と云ふものあり亦た書畫を善くす特に竹田の畫を喜びて曰く後來我が畫の眞意を傳ふべきものは唯吾子のみと其の夙に名士に知らるゝと此くの如し天保八年八月二十六日大阪に病死す年五十九（續近世叢談、扶桑畫人傳）

タノムラ チクデン 田能村竹田 有名の畫家なり名は孝憲字は君彝、行藏と稱す竹田は其の號、又雪月書堂、鶴拙廬等の號あり豐後岡の人、家世々藩醫たり父を碩庵と曰ふ竹田幼にして學を好み詩を嗜む才思秀拔稍く長じて學を學ぶ其の志に非ざるを以て藩主幸に命じて儒員とす時に年二十三、是に於て東都に至り古屋昔陽岳東海に從ひて專ら學藝を攻め傍ら畫法を谷文晁に學ぶ是より先唐橋世濟豐後地理誌を撰し稿を脫ぜずして死す藩主竹田及び伊藤叔をして其の槀を卒へしむ竹田因て江戸に居ると一年餘にして國に歸り寬叔と同じく其の書を倫む書成るに及びて藩主之を德川大府に捧呈し又竹田等に時服を賜ひて其の功を賞す竹田後幾ならずして熊本に遊びて李紫溟、大城霞梁、村井琴山等の諸名士と交り又京都に出で村瀨栲亭に就て修學し居ること二年岡に反る竹田多病、世務に堪へず屢く致仕を請ふ藩主終に之を許し更に養老俸を賜ひて優遇す時に年三十八、竹田是より復た經史を講ぜず優遊性を養ひ風流自ら娛む數く京阪に往來し特に賴山陽篠崎小竹、小石樞蘭、雲華上人等と交最も厚し竹田素より才藝多し詩文を能くし書畫に長じ傍ら喫茶香道の技に至るまで究得せざるなし本邦古來詩餘を作る者多なり竹田以て藝苑の缺典とす風に刻苦之を學ぶ覓に壎詩圖譜を著して世に刊布す竹田詩文書畫に於ては悉く一時名聲の許す所と雖も其の得意のものは畫を以て第一とす其の畫を作るに高く標的を樹て世人の纏舍に從はず初谷文晁の風を畫くと雖も後明清人の遺蹟を研究して遂に一家の畫風を作す山水人物花鳥共に堪能にして其の形狀明清人の筆意に伯仲す頼山陽雲華上人皆畫は賞歎舍かず實に近代の一代名家なり常に曰ふ畫は筆を用ふるの工ならざるを患へず精神の到らざるを患ふ筆を用ふるの工なるものは特に古人を摸するに宜し精神到るものは自家一脚を立つと又當時畫風の陋俗に流るゝを歎じ務めて古人の規矩に從ふべきを務む初大阪に遊ぶ時に米山人と云ふものあり亦た書畫を善くす特に竹田の畫を喜びて曰く後來我が畫の眞意を傳ふべきものは唯吾子のみと其の夙に名士に知らるゝと此くの如し天保八年八月二十六日大阪に病死す年五十九（續近世叢談、扶桑畫人傳）

タノムラ チョクニウ 田能村直入 畫家なり豐後の人幼名を松太と云ひ後嬾と改む小虎散人と號し直入山樵笠翁青梧飲茶庵主人等の別號あり甫めて九歲田能村竹田の門に入りて南畫を學ぶ師深く之を愛し終に養ふて義子と爲し田能村の姓を冒さしむ（或は曰ふ竹田の姓を稱するは竹田の歿後其長子某に請ふて之を名乘れるなりと）壯年諸國を遊歷し各山大川を跋渉し二十六歲にして浪花に入り學を篠崎小竹に受けて武を大鹽後素の門に識ず明治の初め京都に居し首唱して畫學校を創設し推されて攝理兼教頭となり又宗派の畫學生徒を養成したり後の京都私立算術工藝學校則ち

タヒラ　キヨモリ　平清盛　刑部卿忠盛の長子なり母は白河帝の宮女、帝出して忠盛に賜ひ清盛を生むや長じて顯悟秀絶美なり忠盛後藤原宗兼の女を娶りて子あり故を以て清盛出て宗兼の甥藤原家成に依り大治四年從五位下に叙せられ左兵衛佐に任ぜらる保延中中務大輔に遷り肥後守を兼ね從四位上に累進す久安二年正四位下に進み安藝守に任ぜらる將に熊野社に詣らんとして路伊勢安濃津を經る鰻魚あり躍りて舟中に入る人之を賀して曰く昔白魚周武の舟に入る以て嘉瑞となす今公之を獲る豈に神の眷佑する所に非ずやと清盛喜びて手自ら之を割き從者に與へて共に食す保元元年上皇兵を白河北殿に集む清盛の叔父忠正及び源爲義召に應ず初め鳥羽帝豫め亂兆を知り帝黎に備ふ清盛は其父上皇の命を奉じ要を以て重仁親王を乳養せしむるの故を以て預からず然れども其彌宗世將たるを以て美福門院遺詔と稱して之を召す乃ち義朝と共に北殿を攻む北殿敗るるに及びて清盛に命じて爲義を執へしむ清盛搜索して未だ得る能はず爲義忠正窘迫して出て降る忠正清盛に就て死を宥められんことを乞ふ清盛雅と之と善からず遂に忠正を殺す清盛功を以て播磨守に任ぜられ尋で太宰大貳に叙せらる平治元年藤原信頼亂を作し義朝の清盛と隙あるを以て誘ひて謀主となし清盛、熊野に詣るを聞て兵を發して皇居を犯す清盛切部に至て變を聞き將に京師に歸らんとして兵士の寡弱を患へ使み熊野別當湛增及び湯浅宗重に遣して兵を徵す會ゝ伊勢の伊藤加藤の族兵を率ひ阿部野に來迎するに遇ふ衆皆勇躍す遂に京師に入る時に信頼入りて禁内に居り將士を分ちて宮門を守る清盛名簿を信頼に致し佯りて他志なきを示し藤原惟方藤原尹明隱かに清盛と謀りて夜、火を二條大宮に放つ賊兵宮門を棄てゝ赴き救ふ是に於て帝潛かに婦人の車に乘りて藤壁門を出でゝ六波羅第に幸す清盛騎兵三百餘を遣して諭して曰く今宮城新に成る汝將士を率て帝清盛を召して曰く弱を示さしめば賊必ず兵を悉して出て鬪はん因て速かに入りて之に據らば宮城兵襲に罹るの憂を免れんと清盛乃ち重盛頼盛等を遣し兵に將として之を擊たしめ戰ひ酣にして入る信頼狼狽して出て走る義朝兵を回らして更らに六波羅を攻む清盛遽に兜鍪を著く譟りて之を倒まに戴く左右之を言ふ清盛詭り應へて曰く至尊此に在り我之に背する為欲せず乃ち北辰を生む

て死す維盛等還りて勢多に至り先づ使を遣して狀を陳べしむ清盛大に怒りて許さず維盛懼れて至らず後ち陰かに京師に來り藤原忠綱の家に匿る清盛之を聞て維盛を逐ひ忠清を斬らんとして果さず明年叔父重衡と源行家を尾張洲股に擊ちて大に之を敗る頃くして右近衛權中將に轉じ藏人頭に補し尋で從三位に叙せらる壽永二年兵十萬に將として北、源義仲を討つ義仲之を聞て其の將仁科守弘林光明等を遣して燈城を守らしむ平泉寺の長東齊明も亦た其の徒を率て之に屬す其の城は北陸第一の要害なり維盛至りて攻むること能はず乃ち岩神山に陣す齊明貳心を生じ書を爲りて之を矢に約し以て射る平氏之を獲て堰あるを知り卒を發して之を決す俄かにして水溢る平氏の軍進みて攻む齊明之れが內應を爲す守弘等支ふる能はず城を棄てゝ走る追ひて之れを河上城に三條野に篠原に安宅に擊ちて連りに之を破り林、富樫城を拔く又齊明の言を用ひて平盛俊を越後の國府に遣し以て義仲を擊たしむ盛俊兵敗れて加賀に歸る是に於て維盛諸將と議して兵三萬を分ちて志雄山に向はしめ親ら七萬餘に將として礪波山に向ふ義仲五萬騎を率て越後より來りて礪波山に陣す維盛猿馬場に營し以爲らく地勢嶮峻義仲攻圍に艱まんと其の夜義仲軍を潛めて攻擊す呼聲山谷に震ふ維盛軍を擧げて驚擾し爭ひ走りて南整に陷り死する者一萬八千餘維盛纔かに餘衆を收めて加賀に走る義仲進みて維盛と平岳野に戰ふ兩軍兵馬を休すること十餘日維盛義仲の將に來襲せんとすると聞き川を濟りて宵に遁ぐ兵士溺るゝ者一千餘乃ち安宅港に陣す義仲水を涉りて至る是に於て維盛等兵を勒して義仲と會戰し且つ戰ひ且つ卻く義仲追擊して成合に至る實盛以下精兵多く死す維盛潰卒を收めて京師に歸る既にして京師守を失ひ帝西海に幸す宗盛族を擧げて皆從ふ維盛軍事を以て意と爲さず日夜妻子を思ふ三年左右二人と潛かに屋島を出て舟行し紀伊に至り京師に入りて妻子を見んと欲す而れども道路梗塞して達するを得ず高野山に登る路に粉川寺に至り僧源空を見て戒を受く時に重盛の舊臣齋藤時頼僧となりて寺に在り偶〻其の舍に投ず時頼一見且つ驚き且つ悲み泣きて其の故を問ふ維盛曰く我愛を割く能はず常に兒女を思ふ內府（宗盛）之を察せず我を池大納言（經盛）に比して稍〻猜忌せらる是を以て遁れ來る我今熊野神を一拜し水に赴て死せんと欲すと乃ち相携て高野山に登り髮を剪りて僧と爲る時に年二十五既にして熊野に至り舟に乘りて那知海に浮び伴りて海に赴き死する爲れして匿れて卒滿郡藤繩に居れり子孫遂に土人となる小松氏色川氏は即ち其の裔なり（大日本史）

タヒラ　サダフミ　平貞文　歌人なり仲野親王四代少納言好風の息にして容姿頗る美なり從五位上左兵衛佐に叙任す和歌に達し古今集に入る延喜元年九月二十七日病を以て卒す

タヒラ　サダモリ　平貞盛　葛原親王の玄孫なり父は國香鎮守府將軍常陸大掾たり貞盛困て常平太と稱す承平中國香姪將門の爲に殺さる貞盛時に左馬允たり京に在り父の死を聞き其の仇を報ぜんと欲し官を棄てゝ東歸し常陸大掾と爲る貞盛力敵す可らざる將門と隙あり貞盛に驗して曰く親族多く將門の爲めに殺され資財亦掠奪せらる而も今反て之に事へんと欲するか盡ぞ力を勠せて讎を復せざるを貞盛遂に眞兼に從て將門に戰ふ利あらず貞盛以爲らく久く賊地に居らば恐らくは同惡の罪に陷らん如かず朝命を禀け罪を贖ひて上に叙し右馬助を授け鎮守府將軍に任ぜらる初め貞盛の間丹波陸奥守を歷て從四位下に叙せらる初め貞盛の京師に在る嘗て式部卿敦實親王に詣る時に將門も亦親王に謁して曰く恨らくは手下に兵なくして將門み殺す能はず常に兒女を思ふ內府（宗盛）之を察せず我を池大納言（經盛）に比して稍〻猜忌せらる是を以て遁れ來る我今熊野神を一拜し水に赴て死せんと欲すと乃ち相携て高野山に登り髮を剪りて僧と爲る時に年二十五既にして熊野に至り舟に乘りて那知海に浮び伴りて海に赴き死する爲れして匿れて卒滿郡藤繩に居れり子孫遂に土人となる小松氏色川氏は即ち其の裔なり（大日本史）

タヒラ　サダフミ　平貞文　歌人なり仲野親王四代少納言好風の息にして容姿頗る美なり從五位上左兵衛佐に叙任す和歌に達し古今集に入る延喜元年九月二十七日病を以て卒す

タヒラ　サダモリ　平貞盛　葛原親王の玄孫なり父は國香鎮守府將軍常陸大掾たり貞盛困て常平太と稱す承平中國香姪將門の爲に殺さる貞盛時に左馬允たり京に在り父の死を聞き其の仇を報ぜんと欲し官を棄てゝ東歸し常陸大掾と爲る貞盛力敵す可らざる將門と隙あり貞盛に驗して曰く親族多く將門の爲めに殺され資財亦掠奪せらる而も今反て之に事へんと欲するか盡ぞ力を勠せて讎を復せざるを貞盛遂に眞兼に從て將門に戰ふ利あらず貞盛以爲らく久く賊地に居らば恐らくは同惡の罪に陷らん如かず朝命を禀け罪を贖ひて上に叙し右馬助を授け鎮守府將軍に任ぜらる初め貞盛の間丹波陸奥守を歷て從四位下に叙せらる初め貞盛の京師に在る嘗て式部卿敦實親王に詣る時に將門も亦親王に謁して曰く恨らくは手下に兵なくして將門み殺す能はざりしも他日彼必ず天下の患とならんと後果して其の言の如し（大日本史）

タヒラ　サダヨシ　平貞能　筑後守家貞の子なり筑後肥後等の守と爲る清盛恃みて以て腹心と爲す治承四年菊地高直等兵を起して源頼朝に應ず貞能肥後に赴き九國の兵を發して高直を攻む城兵固守す貞能其の拔く可らざるを計り合圍して之を守り險要を掘して繼道を絕つ高直食盡きて降る原田日杵戸次等相謀て款を納る既にして振旅して京師に還る時に京師流言す多田行綱兵を以て川尻を塞ぐと貞能騎兵五百に將として往きて之を擊つ事の妄なるを聞て還る路宗盛の命を奉じて西に奇るに遇ふ貞能馬を叩て諫む宗盛聽かず貞能悽然として曰く臣は京師に眷戀す駕に從ふと能はずと乃ち京師に還り重盛の墓に詣り慟哭移し墓を發いて骨を收め之を高野山に藏め又宗盛に謁原に從ふ其の大宰府に在るに及びて緒方惟能兵を發して來り攻む宗盛貞能を遣し兵に將として之を禦がしむ利あらずして退く後逃亡して髮を剃り名を以典と改め宇津宮朝綱に因て死を免れんことを鎌倉に請ふ許さる肥後入道と稱す（大日本史）

タヒラ　シゲコ　平滋子　後白河帝の后なり兵部少輔時信の女初め少辨と稱す後ち東御方と稱す殊寵あり仁安元年從三位に叙す二年女御となり高倉帝を生む高倉帝位に即き尊みて皇太后となす明年號を上りて建春門院と曰ふ高倉帝其宮に覲し簾を隔てゝ之を拜す宮人盛に其の榮を稱す后曰く前生の因、吾預らずと聞く者之を稱す后嘗て後白河帝に從ひ安藝嚴島有馬溫泉に幸す篤く佛法を信じ最勝光院を創す安元元年熊野に詣り宿禱を賽し鞋を著けて徒步し四十日を歷て本宮に至る親ら胡飲酒を社前に舞ふ大雨俄に至る衣悉く沾ふ顧みずして舞を竟る明年六月不豫なり詔して天下に大赦す常に赦免せざる所の者も悉く赦す后自ら起たざるを知り院號官爵及び封戶を辭し薙髮して戒を受く七月法住寺殿に薨ず年三十五、嘗て法華三昧堂を蓮華王院の側に創す薨ずるに及て堂成る即ち此に葬むる天下に詔し哀を擧げ殺生を禁ず高倉帝親ら法華經を寫し其の冥福を修す（大日本史）

タヒラ　シゲヒラ　平重衡　清盛の子なり

應保二年從五位下に叙せられ尋で尾張守に任ぜられ左馬頭に叙せらる嘉應承安の間累進して正四位下に叙せらる治承三年左近衛權中將に任ぜられ幾ばくも無くして之れを辭す四年藏人頭に補せらる是の歲五月以仁王の事起る維盛等と兵二萬に將として源頼政を宇治川に破る十二月兵數千騎を率て奈良に赴き東大興福の二寺を攻む僧徒奈良阪般若路に據る重衡進擊して火を民舍も亦灰燼と爲る僧徒大に敗る養和元年三月維盛等と七千餘騎に將として源行家を尾張の洲股に擊て大に之を破る行家奏敵せず乃ち兵を引て還る再たび左近衛中將に任じ從三位に叙せられ壽永二年閏十月源義仲の將高梨高信等と備中水島に戰ひ大に之を破る十一月惟資を備前東川に源行家を播磨室山に破る三年二月源義經等來り一谷城を攻む重衡生田森を守る城陷りて走る莊家長父子愈に之に迫る重衡馳せて須磨浦に至る家長追ひて及ばず矢を放ちて馬を射る重衡副馬あり親臣後藤守長を乘て騎らしむ疾呼して之を索む守長顧みずして走る重衡自刎せんと欲す家長疾く馳せて之に逼り己れが馬を授け之を鞍に緊縛して行かしむ既にして義經之を京師に送りて土肥實平の家に拘ふ法皇重衡に詔して曰く宜しく宗盛に諭して三種の神器を上らしむべし若し詔旨を奉ぜば即ち頼朝に命じて死を宥るし以て屋島に歸す既にして戰敗れて神器海に投ず重衡僧服に從はんと欲ふ法皇許さず三月頼朝梶原景時をして之を鎌倉に致さしむ伊豆に至る會〻頼朝北條に獵して之を引見す重衡侍色自若として屈撓する所なし頼朝乃ち工藤宗茂に屬して善く之を遇せしむ既にして鎌倉に至る宗茂爲めに湯沐を具ふ重衡以爲らく死期已に迫ると頼朝豫じめ侍女千手をして往て之に侍せしめて其の欲する所を問はしむ重衡曰く他なし只だ朝髮して僧と爲らんと欲す と千手還り報ず頼朝聽かず又千手及び藤原邦通工藤祐經を遣し酒肴を饋りて之を慰さめしむ夜闇に宴罷む重衡千手を留めて酒を勸めしめ一曲を期して曰く「燭暗數行虞氏淚、夜深四面楚歌聲」と明年頼朝重衡を奈良に送る是より先き東大興福二寺の僧徒重衡を怨み、以て甘心せんと請ふ此に至りて之を遣る僧徒之を境內に殺す欲せず唯だ其の首を乞ふ因て之を木津川の上りに斬る時に年二十九僧徒其の首を得て之を奈良阪に梟す（大日本史）

タヒラ　シゲヒラ　平重盛　太政大臣清盛の長子なり資性忠讜にして武勇人に軼ぐ物に接して溫和長寬二年正三位に進み永萬元年參議となる是の秋帝崩ず諸寺の僧侶會葬す延暦興福の二寺次を爭ひて兵を構ふ時に詔旨あり上皇陰かに僧徒に命じて平氏を討たしむと清盛大に驚き兵を聚めて自ら守る重盛堅く執りて以て妄となす果して其の言の如し仁安元年權中納言に任ぜられ春宮大夫を兼ぬ二年從二位に叙せられ權大納言に遷り帶劍を聽るさる三年病を以て官を辭す嘉應元年正二位に叙せらる二年子資盛路に遇ひて車より下らず基房の從者車簾を斫りて之を辱しむ重盛資盛を讓めて曰く官に高下あり尊列尊敬すべし況や舅政に於てをや汝十歲を過ぎて禮法を知らず辱を取る固より宜べなりと基房縛して其の手を下す者を送り以て謝す重盛畏懼、慙勞して之を還す清盛聞きて大に怒り心に報復せんと欲す重盛固く諫む清盛納れず陰かに武士を遣して基房を辱かしむ重盛懼れて其の事に預る者を黜け資盛を伊勢に逐ふ承安元年權大納言に復せらる四年右近衛大將を得治承元年左に轉じ尋で內大臣に拜せらる是歲延暦寺の僧徒神輿を奉じて京師を犯す重盛陽明門に待賢郁芳の三門を守り禦で之を卻く是より先き藤原成親竊に結びて竊かに平氏を滅さんと謀る事泄れて捕へらる清盛武士に命じて速かに成親を斬らしむ重盛因て二隊と爲る五百騎を大宮街に留め其の半ばを帥に從ひ賢門を攻む信頼大に懼れて退き兵皆な潰え走る重盛進み大庭の椋樹下に至る義平騎兵十六騎を率ゐて躬自ら搏戰し目を重盛に注ぐ重盛且闘ひ且つ卻きて大宮街に至り弓を杖にして馬に息す平家貞進み贊して曰く曩に平家貞進み贊して曰く曩に平家貞進み贊して曰く曩に

將ほ兵權の歸する所而して吾適ゝ此の職を爭す濫りに我邦を著す甚だ宜しき所に非ず若し或は賊魁倡厥にして王師利を失すれは大臣の重きと雖も固より宜く甲を稜り兵を執るべし我未だ諸君の所爲如何を曉らず其の指して以て敵となす所の者は誰ぞ且つ所謂大事なる者は朝家の事のみ是れ私事なり何ぞ大事と言ふを得んと衆皆な蠻動す清盛心に慚ぢて服を改むるに遑あらず俄に起ちて素紺を着して出で甲の露にれんことを恐れて額りに轡を正し故さらに閉眼を示て從容として言ひて曰く來ること何ぞ晚き吾四光を拷治して備さに其情を得たり波親の姦謀は實に法皇に由るなり今當に法皇を他所に徙し以て禍本を除かんとすと重盛垂泣して曰く今大人の擧動を視るに悲懼交ゝ至る未だ官、相國に至る者朝ら甲冑を擐ぬ況や剃髮の後に於てをや聞く佛說に四恩あり國恩を最も重しとすと之を知る人と爲し知らざるを禽獸となす夫れ吾家は桓武帝の苗裔なりと雖も中古以來絕て顯達せし者なし平將軍の將門を討つ賞、受領に止る刑部卿得長壽院を造くるに及び官より起りて位人臣を極む閥愚重盛の如きも資薩を以て切りに顯要に居る一門の榮邑殆んど天下に半ばして寵榮極る今忽ちに隆恩を忘れ皇敍を輕蔑せば鬼神必ず怒りて覆沒日なからん重盛深く懼る今一二の首謀を拘へて罪すべきを罪せば足らん何ぞ至尊に迫るに至らんや且つ大人縱ひ之を爲さんと欲すとも重盛豈恩に背くに忍びず部下に死士二百あり以て法皇を護るに足らん然りと雖も子為以て父に抗する亦忍びざる所眞きに義朝の父を害する君命を以てすと雖も逆悖を奈何せん重盛孝子とならんと欲すれば飼ち不孝となり逆退維谷れり言若し聽かれずんば請ふ先づ重盛を斬れと清盛曰く餘命幾ばくもなし惟々子孫を慮るのみ今は惟ゝ子の計る所と起ちて內に入る重盛諸弟を責て曰く大人老耄して此不肖士を戒て曰く汝等愼て我言を守り敢て妄動する勿れ若し大人に從はんと欲せば必ず先づ我を斬れと既にして第に還り尙ほ其の鬚をなさんを慮りて乃ち急に將士を召す將士皆な謂へらく此の公未だ嘗て輕易事を作さるに今忽ちにして吾邑の租賦は多く佛事に供す(大日本史)

タヒラ タダツネ 平忠常(常一に經或は恒に作る) 上總介高望の曾孫、鎭守府將軍良文の孫なり忠常下總に居り上總介に任じ從五位下に叙せられ武藏押領使と爲る忠常世ゝ東國に居て族衆彊盛勢ひを恃みて碁橫二總の地に盤踞して朝貢を輸さず衞役を供せず長元元年兵を擧げて反し上總國府を陷れ安房を侵し國守惟忠を燒殺す朝廷檢非違使平直方等を遣し東海東山二道の兵を帥て道討せしむ明年又官北陸道に符を下し二道の兵と同じく討たしむ三年安房守藤原光業忠常を長れ印鑰を棄てゝ京師に逃れ歸る直方等久しく功なし詔して之を召還す甲斐守源頼信に敕して之に代らしむ四年頼信軍を進めて常陸に次す左衞門尉平惟基屬す總常の間に大水あり忠常要害を扼して防守の備と爲す頼信人を遣はして之を諭す忠常曰く僕素と君の名を聞く常に身を麾下に委ぬへし然れども惟基は僕の仇家而して公の左右に在り僕仇人の前に跪拜するに忍びず且つ大河船なし渡るを得べからざれば卒に命を奉ぜずと既にして頼信兵を率て直ちに涉る忠常倉皇として出づる所を知らず薙髮して名を常安と改め二子常昌常近等と碧を奉じて降る頼信忠常を以て還りて美濃野上に至る忠常病みて死す因て首を斬りて京師に入る廷議忠常既に降り且つ東國疲弊せるを以て寡討を煩はさずして寢む(大日本史)

タヒラ タダノリ 平忠度 刑部卿忠盛の子なり熊野に生長す力衆に邁れ驍名一時に震ふ兼ねて和歌を善くし藤原俊成に就て學ぶ仕へて正四位下に至り左兵衞佐薩摩守に任ぜらる養和元年姪重衡等と源行家を洲股川に破る忠度の麾下殺獲頗る多し行家の子行頼を擒ふ壽永二年源義仲延曆寺に抵り足利義淸丹波に抵り將に京師を犯さんとす宗盛道を分ちて諸將を遣す忠度兵を率て義淸を拒ぐ既にして宗盛諸將を召し還し帝を奉じて西に幸す源義經一谷を襲ふ忠度時に西門を守りて丹肥賀平を拒ぐ事不意に出づ軍大に敗る忠度左右三人と水潯に走る岡部忠澄十餘兵を率て大に呼びて之に薄る忠度紿いて曰く我は是れ東兵なりと乃ち馬を躍らして走る忠澄及ぶに垂んとして從士遮りて之を禦ぐ忠澄遂に進みて忠度と交搏して馬より墜つ忠度刀を抽て之を刺すこと三たび纔かに其の領下を傷く忠澄の後卒驅て至りて後より忠度を擊ち右臂を斷つ忠度自ら度りて曰く汝且らく綏せよ我對さに佛名を唱へて死せんと乃ち忠澄を引て之を投ぐる丈餘是甲を脫て西に向て端坐し高く佛名を唱ふ忠澄曰く汝何ぞ顯なる今此極に告げんや汝我を殺ば必ず重賞を受けんと忠澄遂に之を斬る時に年四十一忠澄一卷あり平日作る所の和歌なり中に題して道ふ常に身を鎭の日と雖も猶は生ける年の心を用ふる當に此の如くなるべし兵士の忠度たるを知る初め忠度の鎭西に赴て潛に五陵に抵り俊成に見て別を叙し乃ち言ひて曰く聞く大人公向きに敕を奉じて集を撰すと竊かに叢ふ忠度も亦公の庇を以て一首を留ることを得んと意はざりき今日此に至る若し昇平に屬せば必ず其の擧あらん卷中或は採錄を賜ひて一首を載せば死するの日ゝ雖も瞑目し生ける年の心を用ふる當に此の如くなるべし兵士の戚涙を抑て許諾す忠度喜び謝して出づ俊成手載を撰び乃ち言ひて曰く昔一條院は源頼義を親近して未だ嘗て側を去らしめざりしと聞く今汝も朕が身を離るゝ勿れと法皇に寵姫あり別宮を祇園社の東南に作りて居らしむ世に祇園女御と稱す法皇歷ゝ幸す一夜澄行す忠盛北面を以て從ふ會ゝ暗雨驟に至る前路に鬼あり頭髮鍼を束ぬるが如く身に光あり且つ明且つ滅す見る者驚怖す法皇命じて之を驅らしむ忠盛進て將に之を射んとし意らく若し其鬼に非ずして狐狸妖をなす者たらば如かず生ながら獲んにはと徑ちに前みて之を提ふれば乃ち一の老僧なり將に燈を點ぜんとして夢程を數て兩を蔽ひ油注を提げて燈器を持し行く〳〵其火を吹たるなり是に於て其の實を得衆心始めて安んず法皇其の膽略を稱す後ち女御を以て忠盛に賜ふ仁平三年卒す年五十八(大日本史)

タヒラ チカキヨノ ヂヨ 平親淸女 其名詳かならず當時倭歌を以て世に名あり不幸にして父の憂に逢ふ哀情某だし既にして喪事を了ふ因て和歌を詠じて曰く「今日までも存命ふべしと思ひきや別れし儘の心なりせば」と權大納言爲氏撰みて此歌を續拾遺集に載して銀箔を檢り室を飾りて繡卷の如くして之を佩ぶ家臣平家直從ふ忠盛殿に昇り暗處に向ひて刀を抽て之を視せしむ光芒水の如し群僚惶懼して謀こと遂に行はれず衆に方りて歌舞迭ひに興る乃ち忠盛に命じて舞を奏せしむ群僚變調にして歌ひて曰く伊勢瓶子は醋甕なりと忠盛幼なる時伊賀伊勢の間に居る世其の族を呼び伊勢平氏と云ふ且つ一日眇す故に言に託して以て嘲る忠盛憤悲衆未だ能ならざるに退く出づるに及びて刀を解き主殿司に授け去る既にして群僚奏言す忠盛敕に由らずして餌を帶び殿に上り擅まゝに兵衞を設く諸ふ官籍を削りて罪に處せんと上皇驚きて忠盛を召して之を問ふ忠盛陳謝して曰く誓きて臣の家士群僚誤ることありと聞き跡を蹤んで至る臣實に知らず罪は固より逃るゝ所なし臣の佩刀の如きは即ち主殿司に付す請ふて集を撰すと竊かに叢ふ忠度も亦公の庇を以て一首を留ることを得んと意はざりき今日此に至る若し昇平に屬せば必ず其の擧あらん卷中或は採錄を賜ひて一首を載せば死するの日ゝ雖も猶は生ける年の心を用ふる當に此の如くなるべし兵士の戚涙を抑て許諾す忠度喜び謝して出づ俊成手載に撰び乃ち言ひて曰く聞く大人公向きに敕を奉じて集を撰すと竊かに叢ふ忠度も亦公の庇を以て一首を留ることを得んと意はざりき今日此に至る若し昇平に屬せば必ず其の擧あらん卷中或は採錄を賜ひて一首を載せば死するの日ゝ雖も猶は生ける年の心を用ふる當に此の如くなるべし兵士の戚涙を抑て許諾す忠度喜び謝して出づ俊成手載を

に編入すと云ふ（本朝列女傳）

タヒラ　ツネマサ　平經正　參議經盛の子なり和歌に工みに善く琵琶を彈ず少にして仁和寺に入り守覺法親王に給事す親王甚だ之を眷愛し其愛する所の琵琶青山と名くるを賜ふ朝に仕て息后宮亮但馬守となり正四位下に進む安德帝西狩に及びて琵琶を攜して仁和寺に詣り親王に謁して數曲を彈じて叙別す聽者涕を隕さゞるなし彈じ畢て琵琶を親王に還して曰く此の器は昔日の賜ふ所當に寶愛して身を終へんと欲す今ま將に遠く別れんとす身西海に沒せば此の器も亦た隨ひて亡びん是を以て奉還す異日亂平らぎて再び奉謁を得ば請ふ復た之を賜らんと親王垂泣答る能はず經正遂に和歌を作りて辭し去る壽永三年一谷城陷る走て大藏谷を過ぐ敵兵莊高家大呼して曰く敵を見て走る豈に平家の公達に非ざらんや來て我と死を決せよと經正回顧して曰く敢て走るに非ず爾ほ我が偶に非ざるなりと高家怒りて急に之に逼る經正免る可らざるを度り馬より下り刀を引て自ら腹を割て死す子あり甫めて六歲平家族滅して六條河原に斬らる（大日本史）

タヒラ　ツネモリ　平經盛　刑部卿忠盛の子なり和歌に工みに善く笛を吹く久安中從五位下に叙せられ保元嘉應の間累遷して從三位に至る治承の初め正三位に進み大皇太后宮大夫となり尋て修理大夫を兼れ養和元年參議に任ぜらる壽永二年安德帝に西海に從ふ壇浦の敗れに潛かに山に入りて剃髮す既にして海に赴て死す時に年六十一（大日本史）

タヒラ　トキヂネ　平時實　權大納言時忠の長子なり仁安元年從五位下に叙し讃岐守に任ぜらる壽永中正四位下に進み左近衛權中將と爲る安德帝に從ひて鎭西に赴き平氏滅するに及びて虜へられて京師に還り周防に流さる未だ配所に赴かざるに囉經輌朝と隙を搆へて將に鎭西に赴かんとす時實之に從ひて大物浦に至り船を發す暴風倏ちに起りて前行するを得ず從士四散す時實も亦た義經と相失し將に京師に還らんとす輌朝の兵士之を捕へて鎌倉に致す輌朝朝官の罪擅まゝに決す可らざるを以て送り朝廷改めて上總に流す文治五年赦されて還る建暦元年三位に叙せられ建保元年暴かに薨ず年六十三（大日本史）

タヒラ　トキタダ　平時忠　大納言高棟の後兵部權大輔時信の子なり久安中非藏人左衛門尉と爲る後白河の朝刑部兵部大輔を歷永暦元年右少將を兼ぬ幾ばくもなく官を解かる應保二年陰家を呪詛するに坐して出雲に流さる永萬元年弾に囑ず仁安中參議となり從三位に叙に復し尋で左少將に轉ず權中納言に任せられ右衛門督檢非違使別當を兼れ尋で權中納言に任ぜらる嘉應元年中納言藤原成親の罪狀を奏して實ならざるに坐し又た出雲に流さる明年延暦寺の訴を以て京師に徵還し官位を復せら元年延暦寺の僧徒神輿を擧じて闕を犯す朝廷之を患ひて官使を遣して之を諭止せんと欲す朝士長縮して皆な行くを欲ぜず時忠繒紳中に於て素と氣俠と稱せらる遷み に應して行く僧徒怒りて僧徒怒りて僧を加へんと欲す時忠神色變ぜず直に大講堂に抵り筆を援りて書を作り諭すに順逆を以てす辭旨剴切なり僧徒傳觀して歎賞す事遂に解く人其の膽勇を稱すと三年正二位に進む四年安德帝即位す幼主を立てゝ以て私權を擅にするを譏る時忠之を聞て色を作し和漢古今の例證を擧げて之を貳す聞く者笑ひて謂ふ昔な佳例に非ずと將永二年權大納言を爲す是秋帝に鎭西に從ふ緒方惟能等之を拒て入聽かず遂に兵を率て來攻む宗盛等帝を奉じて遁る明年一谷城陷り重衡虜と爲る法皇重衡を召入して書を宗盛に送らしめ且つ院宣を時忠に降して三種の寶器召次花方院宣を齎らして屋島に遣し召次花方院宣を齎らして屋島に遣し汝法皇の使と なりて遠く風浪を涉る勞苦甚だし今汝が爲に終身の記を作らんと乃ち其の面に火印して花方の二字をなし髻を剪り鼻を截りて遣る、帝海上に崩じ鮫鼈も亦た海に沒す惟ゝ內侍所尚ほ存す兵士其の何物とす忽ち瞋眦血を注ぎ時忠之を視て叱して曰く此は是れ內侍所なりと兵士恐怖して退く已にして時忠京師に還り鎭西に赴かんとす時實之に從ひて大物浦に至り船を發す暴風倏ちに起りて前行するを得ず從士四散す時實も亦た義經と相失し將に京師に還らんとす輌朝の兵士之を捕へて鎌倉に致す輌朝朝官の罪擅まゝに決す可らざるを以て送り朝廷改めて上總に流す文治五年赦されて還る建暦元年三位に叙せられ建保元年暴かに薨ず年六十三（大日本史）

タヒラ　トキヤネ　平時實　權大納言時忠の長子なり仁安元年從五位下に叙し讃岐守に任ぜらる壽永中正四位下に進み左近衛權中將と爲る安德帝に從ひて鎭西に赴き平氏滅するに及びて虜へられて京師に還り周防に流さる未だ配所に赴かざるに囉經輌朝と隙を搆へて將に鎭西に赴かんとす時實之に從ひて大物浦に至り船を發す暴風倏ちに起りて前行するを得ず從士四散す時實も亦た義經と相失し將に京師に還らんとす輌朝の兵士之を捕へて鎌倉に致す輌朝朝官の罪擅まゝに決す可らざるを以て送り朝廷改めて上總に流す文治五年赦されて還る建暦元年三位に叙せられ建保元年暴かに薨ず年六十三（大日本史）

タヒラ　トキヤス　平時忠　大納言高棟の後兵部權大輔時信の子なり久安中非藏人左衛門尉と爲る後白河の朝刑部兵部大輔を兼ぬ幾ばくもなく官を解かる應保二年陰家を呪詛するに坐して出雲に流さる永萬元年弾に囑ず仁安中參議となり從三位に叙に復し尋で左少將に轉ず權中納言に任せられ右衛門督檢非違使別當を兼れ尋で權中納言に任ぜらる嘉應元年中納言藤原成親の罪狀を奏して實ならざるに坐し又た出雲に流さる明年延暦寺の訴を以て京師に徵還し官位を復せら元年延暦寺の僧徒神輿を擧じて闕を犯す朝廷之を患ひて官使を遣して之を諭止せんと欲す朝士長縮して皆な行くを欲ぜず時忠繒紳中に於て素と氣俠と稱せらる遷み に應して行く僧徒怒りて僧を加へんと欲す時忠神色變ぜず直に大講堂に抵り筆を援りて書を作り諭すに順逆を以てす辭旨剴切なり僧徒傳觀して歎賞す事遂に解く人其の膽勇を稱すと三年正二位に進む四年安德帝即位す幼主を立てゝ以て私權を擅にするを譏る時忠之を聞て色を作し和漢古今の例證を擧げて之を貳す聞く者笑ひて謂ふ昔な佳例に非ずと將永二年權大納言を爲す是秋帝に鎭西に從ふ緒方惟能等之を拒て入聽かず遂に兵を率て來攻む宗盛等帝を奉じて遁る明年一谷城陷り重衡虜と爲る法皇重衡を召入して書を宗盛に送らしめ且つ院宣を時忠に降して三種の寶器召次花方院宣を齎らして屋島に遣し召次花方院宣を齎らして屋島に遣し汝法皇の使と なりて遠く風浪を涉る勞苦甚だし今汝が爲に終身の記を作らんと乃ち其の面に火印して花方の二字をなし髻を剪り鼻を截りて遣る、帝海上に崩じ鮫鼈も亦た海に沒す惟ゝ內侍所尚ほ存す兵士其の何物とす忽ち瞋眦血を注ぎ時忠之を視て叱して曰く此は是れ內侍所なりと兵士恐怖して退く已にして時忠京師に還り周防に流さる未だ配所に赴かざるに囉經輌朝と隙を搆へて將に鎭西に赴かんとす時實之に從ひて大物浦に至り船を發す暴風倏ちに起りて前行するを得ず從士四散す時實も亦た義經と相失し將に京師に還らんとす輌朝の兵士之を捕へて鎌倉に致す輌朝朝官の罪擅まゝに決す可らざるを以て送り朝廷改めて上總に流す文治五年赦されて還る建暦元年三位に叙せられ建保元年暴かに薨ず年六十三（大日本史）

タヒラ　トモアキラ　平知章　權中納言知盛の子、武藏守たり壽永年中一谷城陷るに及びて父知盛に從ひて走る兒玉黨數人躡して之を追ふ監物太郎頼賢射て一人を殺す二人進みて知盛に迫る知章遽りて之と搏ち其の首を獲知盛間に乘じて免る知章遂に戰ひて死す時に年十六頼賢知章の首を收めんと欲して重創を被り遂に死す（大日本史）

タヒラ　トモモリ　平知盛　相國清盛の子なり平治元年從五位下に叙し累遷して左近衛中將に任ぜらる治承中從三位に叙し左兵衛督に任ぜられ院廳別當となる以仁王の兵を梟ぐるや知盛重衡等と之を宇治に擊つ敵橋を撤して拒ぎ戰ふ衆背て進まず知盛衆を勵まして涉る遂に大に之を破る山本義經兵を近江に起す知盛姪資盛等と兵數千に將として擊て之を破る養和元年二月兵を移して源行家を美濃板倉に襲ふ行家敗走す時に平氏の軍屢ゝ戰ひて罷倦し知盛も亦疾に罹る因て遂に京師に還る幾ばくも無くして參議に任ぜらる壽永元年大納言に遷る二年源義仲近江に至る知盛兵に將として之を拒ぐ克たず兵を引て京師に還る宗盛大に懼れて遂に議を西狩に定む既にして宗盛之を悔ゆ知盛怒りて曰く前途倚憑する所未だ必す可らず故に向きに固く今此に至る又た奈何ともすべきなしと既にして屋島に抵る源頼朝義仲と隙あるに及びて義仲宗盛に書を遺りて和を請ふ宗盛喜びて之を許さんと欲す知盛諫めて曰く向きに彼の爲めに逼られて以て此に至る今復た之と和せば頼朝我を何とか目はん且つ天子焉に在り彼若し降を乞ほゞ則ち之を許さん何の媾和か之あらんと宗盛曾房に寓し蓬髮して戒を受く法名眞如覺、徒りて華山帝野河山莊に居る一族滅するの後自ら鎌倉に赴き嫌ひ又大原寂光院の旁に徒る艸廬竹牀僅に風日を蔽ふ師典侍阿波內侍尊皆尼と爲り薪水に供す法皇往てゝを訪はんと欲す而して源頼朝を憚りて果さず文治二年補陀洛寺に幸するに託し其の居に至る相ひ泣きて往事を叙す后具さに軍中の窘厄汚辱を横受するを說き嗚咽禁ぜず建保元年十二月大原に薨ず年五十七后親ら安德帝の震翰及び手書する所の故紙を糊して其の像を造る現に寂光院に在り（大日本史）

タヒラ　トモヤス　平知康　左衛門尉に任ぜらる治承中從五位下に叙し左兵衛督に任ぜられ院廳別當となる以仁王の兵を梟ぐるや知盛重衡等と之を宇治に擊つ敵橋を撤して拒ぎ戰ふ衆背て進まず知盛衆を勵まして涉る遂に大に之を破る山本義經兵を近江に起す知盛姪資盛等と兵數千に將として擊て之を破る養和元年二月兵を移して源行家を美濃板倉に襲ふ行家敗走す時に平氏の軍屢ゝ戰ひて罷倦し知盛も亦疾に罹る因て遂に京師に還る幾ばくも無くして參議に任ぜらる壽永元年大納言に遷る二年源義仲近江に至る知盛兵に將として之を拒ぐ克たず兵を引て京師に還る宗盛大に懼れて遂に議を西狩に定む既にして宗盛之を悔ゆ知盛怒りて曰く前途倚憑する所未だ必す可らず故に向きに固く今此に至る又た奈何ともすべきなしと既にして屋島に抵る源頼朝義仲と隙あるに及びて義仲宗盛に書を遺りて和を請ふ宗盛喜びて之を許さんと欲す知盛諫めて曰く向きに彼の爲めに逼られて以て此に至る今復た之と和せば頼朝我を何とか目はん且つ天子焉に在り彼若し降を乞ほゞ則ち之を許さん何の媾和か之あらんと宗盛之に從ふ三年源義經一谷城を陷る知盛城の東門を守り帝野河山莊に居る一族滅するの後自ら鎌倉に赴き嫌ひ又大原寂光院の旁に徒る艸廬竹牀僅に風日を蔽ふ師典侍阿波內侍尊皆尼と爲り薪水に供す法皇往てゝを訪はんと欲す而して源頼朝を憚りて果さず文治二年補陀洛寺に幸するに託し其の居に至る相ひ泣きて往事を叙す后具さに軍中の窘厄汚辱を横受するを說き嗚咽禁ぜず建保元年十二月大原に薨ず年五十七后親ら安德帝の震翰及び手書する所の故紙を糊して其の像を造る現に寂光院に在り（大日本史）

タヒラ　トモヤス　平知康　左衛門尉に任ぜらる治承中從五位下に叙し累遷して左近衛中將に任ぜらる治承中從三位に叙し左兵衛督に任ぜられ院廳別當となる以仁王の兵を梟ぐるや知盛重衡等と之を宇治に擊つ敵橋を撤して拒ぎ戰ふ衆背て進まず知盛衆を勵まして涉る遂に大に之を破る山本義經兵を近江に起す知盛姪資盛等と兵數千に將として擊て之を破る養和元年二月兵を移して源行家を美濃板倉に襲ふ行家敗走す時に平氏の軍屢ゝ戰ひて罷倦し知盛も亦疾に罹る因て遂に京師に還る幾ばくも無くして參議に任ぜらる壽永元年大納言に遷る二年源義仲近江に至る知盛兵に將として之を拒ぐ克たず兵を引て京師に還る宗盛大に懼れて遂に議を西狩に定む既にして宗盛之を悔ゆ知盛怒りて曰く前途倚憑する所未だ必す可らず故に向きに固く今此に至る又た奈何ともすべきなしと既にして屋島に抵る源頼朝義仲と隙あるに及びて義仲宗盛に書を遺りて和を請ふ宗盛喜びて之を許さんと欲す知盛諫めて曰く向きに彼の爲めに逼られて以て此に至る今復た之と和せば頼朝我を何とか目はん且つ天子焉に在り彼若し降を乞ほゞ則ち之を許さん何の媾和か之あらんと宗盛

之に從ふ三年源義經一谷城を陷る知盛城の東門を守り敗走す追兵幾ゝ及ぶ子知章力戰して死す知盛長馬に乘じて免ることを得、水を涉りて船に上る船疾くし て馬を容るべからず乃ち艘に還らし田口成能射て之を殺さんとす知盛曰く是れ我を厄に脫す寧ろ賊に殺すに忍びんやと四年二月屋島陷る族を擧げて海に泛み長門壇浦に漂泊す義經追ひ至りて大に海上に戰ふ舟師四合す知盛獨り船首に立ちて將士を勵ます衆奮激す知盛宗盛に謂て曰く今日の合戰士氣皆な常に倍す但ゝ田日成能獨り否ちず我れ其の異志あるを察す請ふ斬りて以て軍に徇へんと宗盛聽かず果して叛す東兵攻むること急なり知盛御船に至る宮女泣て狀を問ふ知盛笑ひて曰く東男兒を見るべきのみと乃ち自ら舟中を掃除して悉く猥雜物を棄てしむ既にして帝海に崩じ宗盛へらる知盛聞きて垂泣して深く之を恥ぢ遂に叔父教盛と竝び坐して自刎して死す時に年三十四（大日本史）

タヒラ　トモヤス　平知康　左衛門尉に任ぜらる治承中從五位下に叙し累遷して左近衛中將に任ぜらる治承中從三位に叙し左兵衛督に任ぜられ院廳別當となる以仁王の兵を梟ぐるや知盛重衡等と之を宇治に擊つ敵橋を撤して拒ぎ戰ふ衆背て進まず知盛衆を勵まして涉る遂に大に之を破る山本義經兵を近江に起す知盛姪資盛等と兵數千に將として擊て之を破る養和元年二月兵を移して源行家を美濃板倉に襲ふ行家敗走す時に平氏の軍屢ゝ戰ひて罷倦し知盛も亦疾に罹る因て遂に京師に還る幾ばくも無くして參議に任ぜらる壽永元年大納言に遷る二年源義仲近江に至る知盛兵に將として之を拒ぐ克たず兵を引て京師に還る宗盛大に懼れて遂に議を西狩に定む既にして宗盛之を悔ゆ知盛怒りて曰く前途倚憑する所未だ必す可らず故に向きに固く今此に至る又た奈何ともすべきなしと既にして屋島に抵る源頼朝義仲と隙あるに及びて義仲宗盛に書を遺りて和を請ふ宗盛喜びて之を許さんと欲す知盛諫めて曰く向きに彼の爲めに逼られて以て此に至る今復た之と和せば頼朝我を何とか目はん且つ天子焉に在り彼若し降を乞ほゞ則ち之を許さん何の媾和か之あらんと宗盛

タヒラ　トヨヒコ　平豐彥　薩摩琵琶の名手なり舊鹿兒島藩士平要之助の長男なり家に古傳の琵琶あり豐彥密かに之を竊習し二十一歲の時には技大に進む日清戰爭後伊東海軍大將が軍艦松島に乘りて蘆灣征討に赴くや招かれて琵琶を彈じ遂に乘組を命ぜられ蘆灣征討を終るまで軍中に在りて彈奏士氣を鼓舞したり其功績により勳八等瑞寶章を賜はりて又一時勳金を受けたり後臺北縣知事の秘書官となり或は島津家山林掛となりしが明治三十年上京して音樂學校及び東京稅務署に奉職す蓋し琵琶彈きと呼はるゝを厭へる爲めなり四十年病に罹り辭し爾來專ら門弟の敎授と病氣療養に力めたり其設立せる東京薩摩琵琶研究會の會員も二百五十名に上れりと云ふ四十一年十二月十二日病を以て郷里鹿兒島に逝く年三十九

タヒラ　ナリスケ　平成輔　權中納言惟輔の子なり中宮亮藏人頭を經て參議に任ぜられ治部卿彈正大弼を兼ね正三位に進む元弘の初め後醍醐帝北條高時を誅せんと謀り成輔等を以て竊かに義旅を糾合せしむ大列事中原章房之を諫む帝機事の漏れんことを懼れて密かに成輔に命じて之を殺さしむ成輔乃ち刺客を募りて之を刺す帝笠置に幸するに及びて六波羅成輔を捕

し還るの功を以て其の罪を免れんことを請ふ廷議遽かず遂に時忠を能登に時實を周防に流す文治五年是所に終る年六十時忠高倉安德の二朝に在り若りに顯要に昇る且つ清盛の婿の見たるを以て勢焰一時を傾け叙位除目多く其の意に出づ世人期するに大臣を以てし呼びて平關白と曰ふ凡そ三たび檢非違使別當と爲る廳務嚴を尙ぶ時人之を畏る（大日本史）

タヒラ　トキノリ　平時範　書を能せり尾張守定家の子官は中書右丞たり天仁元年出家す法名定惠次年正月人に謂て曰く仲春去らんと欲すと二月五日に至り彌陀誕生法華懺法を修し又黃金色の不動尊の像を圖す十日病革なり自ら起たざるを知り彌陀を念じて寂す（元亨釋書、續本朝書史）

タヒラ　トキモチ　平時望　正三位高棟王の孫中納言惟範の子なり從三位中納言兼中宮大夫たり母は人康親王の女時望和歌の道に長じ後撰集に入る承平八年三月二十五日卒す年六十二

タヒラ　トクコ　平德子　高倉帝の中宮なり太政大臣清盛の女、後白河法皇之を子として養ふ承安元年從三位に叙し女御と爲る明年中宮と爲る清盛安藝殿島に謁り后の皇子を生むを疑ゝ治承二年后身ありて出でゝ重盛の第に居る高倉帝使を四十一社七十四寺に遣し僧及び陰陽博士を禁中に召入して安產を禱り輕因流人七十二人を免ず產するに及びて甚だ艱む或人言ふ藤原成親四光法師曾俊倭崇を爲すと清盛愛色に見はる后亦使を石清水平野日吉に遣し之を禱る中使路に接し冠蓋相望む法皇產室に臨み自ら手手經を誦し之を禱る既にして皇子を生む是を安德帝と爲す故事に皇子生るれば屋に升り甑み投ず男は南女は北是の時誤りて北に投ず人皆之を異とす養和元年號を上りて建禮門院と曰ふ壽永二年四海に赴く初め后の產に雛むや母時子之を憂へ親ら一條反橋に住き車を駐め奧人の誦を聽き以て之を下す童子十二人あり橋を渡る手を拍ち同く唱へて曰く榎は何榎、國王榎、八重の潮路は波寄榎と時子還て見の時忠に告ぐ時忠曰く波寄扁は未だ何の義たるを知らず然れども國王榎は蓋し皇子の兆也ゝ安德帝海上に崩ずるに及びて果して典誦の言ふ處の如し后邪海に投ず源氏の兵鐵塔を以て之を鉤し京師に奉還す吉田の

らへて之れを相模の早河尻に殺す（大日本史）

タヒラ　ノリツネ　平教經　教盛の子なり初の名を國盛、日ふ正五位下に叙し能登守に任ぜらるる諸永二年平氏山陽南海を復す源義仲其の將足利義清等を遣して來攻めしむ軍備中水島に次す宗盛教經を遣し大に舟師を率ゐて之を拒がしむ敵七千餘騎曉を侵して發す教經士卒を激勵す乃艤を以て戰艦二百を舫ざ板を施して進退に便ならしむ舟中坦然大路の如し期を刻して會戰す教經能く射る射自ら搖戰し射て敵將高梨高信以下十三人を殺す會ゝ日蝕して天晦らく東西を辨ぜず敵大に敗れて走る明年父に從て備中下道に在り讃岐の應梁來り襲ふ教經大に怒り輕舸に駕して兄盛と之を窮追す應梁淡路に抵き急に之を攻む一晝夜義嗣義久に屬す教經兄弟遂に淡路に抵り急に之を攻む一晝夜義嗣を斬り義久を虜にす餘黨逃散す悉く追ひて之を殄す首を獲ること一百二十二級捷を福原に報じて又河野通信を攻めんと欲し乃ち盛と路を分ちて四國に赴く教經屋島行宮に至る通信安藝に走りて沼田次郎と合す教經進めて遂に之を破る通信逃れて伊豫に還る沼田次郎窮蹙して遂に降る之を執て以て還る教經又義嗣の黨淡路の人安摩宗益兵を率て竊かに京師に赴くと聞き百五十騎を率ゐて之を西宮の海上に要す宗益進むことを得ず退いて舟を和泉吹井浦に泊す其黨紀伊人關部重茂來りて之と合し俱に京師に赴んと欲す教經又紀伊に赴き擊ちて之を破る首を獲る三十六級又豐後人緒方惟能海田宗親白井惟高各ゝ其の衆を率て今木城に據る通信も亦伊豫より往きて之に屬す教經兵二千餘騎を將て之を攻む一晝夜にして之を拔く惟能通信敗走す、源義經一谷を攻めんとして先づ三草山に至る資盛有盛等之を拒ぎて敗走す宗盛更らに兵を遣して之を禦んとして諸將を督促す皆な之を沮む宗盛教經曰く諸將の難んずる所教經之に向んと遂に三草に赴き營を山下に結ぶ二三の鹿あり突出す教經士卒に謂ひて曰く鹿は野獸なり當さに人を見て逃藏すべし今此に至る意ふに是れ敵兵潛に襲ふならん汝等警備を忘る勿れと義經果して至る軍大に潰ゆ諸將命令隙す者多し四年義經屋島を攻む宗盛等舟に乘じて之を避く特り教經をして岸に登て之を拒がしむ教經乃ち船を回らして陸に登り矢を發して力戰す敵兵死傷多し義經麾下佐藤繼信矢に中りて馬より墜つ教經の家士菊王進て將に其首を斬らんとす繼信の弟忠信射て之を殪す忠信の從卒菊王の首を取らんゝ欲す教經菊王を提げて之を船に投げ既にして日暮る義經退きて卒禮高松に陣す此夜教經義經を襲はんと欲す江見守方平盛嗣と先を爭て且に進す故を以て果さず義經自ら發して之を禦ぐ然れども騎歩敵凌ぎて來攻む教經矢を發して退く、壇浦の敗るゝや東兵教經の驍名を聞き先を爭て之を獲んゝ欲す教經身を挺て、血戰して之を殺す會ゝ日蝕して天晦らく東西を辨ぜず敵大に敗れて走る明年父に從て備中下道に在り讃岐の應梁來り襲ふ教經大に怒り輕舸に駕して兄盛と之を窮追す應梁淡路に抵き急に之を攻む一晝夜義嗣義久に屬す教經兄弟遂に淡路に抵り急に之を攻む一晝夜義嗣を斬り義久を虜にす餘黨逃散す悉く追ひて之を殄す首を獲ること一百二十二級捷を福原に報じて又河野通信を攻めんと欲し乃ち道盛と路を分ちて四國に赴く教經屋島行宮に至る通信安藝に走りて沼田次郎と合す教經進めて遂に之を破る通信逃れて伊豫に還る沼田次郎窮蹙して遂に降る之を執て以て還る教經又義嗣の黨淡路の人安摩宗益兵を率て竊かに京師に赴くと聞き百五十騎を率ゐて之を西宮の海上に要す宗益進むことを得ず退いて舟を和泉吹井浦に泊す其黨紀伊人關部重茂來りて之と合し俱に京師に赴んと欲す教經又紀伊に赴き擊ちて之を破る首を獲る三十六級又豐後人緒方惟能海田宗親白井惟高各ゝ其の衆を率て今木城に據る通信も亦伊豫より往きて之に屬す教經兵二千餘騎を將て之を攻む一晝夜にして之を拔く惟能通信敗走す、源義經一谷を攻めんとして先づ三草山に至る資盛有盛等之を拒ぎて敗走す宗盛更らに兵を遣して之を禦んとして諸將を督促す皆な之を沮む宗盛教經曰く諸將の難んずる所教經之に向んと遂に三草に赴き營を山下に結ぶ二三の鹿あり突出す教經士卒に謂ひて曰く鹿は野獸なり當さに人を見て逃藏すべし今此に至る意ふに是れ敵兵潛に襲ふならん汝等警備を忘る勿れと義經果して至る軍大に潰ゆ諸將命令隙す者多し四年義經屋島を攻む宗盛等舟に乘じて之を避く特り教經をして岸に登て之を拒がしむ教經乃ち船を回らして陸に登り矢を發して力戰す百人十級遂に備前播磨を復す三年宗盛帝を奉じ一谷城に據り叙位除目を行ひて教盛を正二位大納言に拜す教盛和歌を作りて曰く「今日までも有れば有るとや思ふらん夢のうちにも夢を見るかな」と遂に辭す帝壇浦に崩ずるに及びて自殺して死す時に年五十七（大日本史）

タヒラ　ヒラコ　平平子　藤山帝の女御なり若狭守粘忠の女母なり事務と曰ふ華山帝乳母の女なり帝稍ゝ淫業を德み華山を出でゝ東院に居り中務を召して之を幸し清仁親王及び二皇女を生む又平子を幸し昭登親王及び二皇女を生む故に世清仁親王を稱して母腹宮と曰ひ昭登親王を女腹宮と曰ふ帝崩ずるに臨みて曰く朕獨り死するを欲せず不日必らず諸女を將て去らんと中務平子皆な憂懼す其の年諸女相繼て皆な夭すと云ふ（大日本史）

タヒラ　ヒロコ　平寛子　清和帝の女御なり貞觀六年女御となる八年正五位下に叙せらる十一年從四位下に進む（大日本史）

タヒラ　ヒロツネ　平廣常　上總介高望よりの出づ父を常隆と曰ふ上總介に任ぜらる廣常上總權介となり介八郎と稱す保元年治の亂に源義朝に屬し勇を以て聞ゆ所謂十七騎の一なり後平氏に屬す源頼朝の兵を起すや北條時政頼朝に說くに廣常は東國の望族たるを以てして先づ之を致さしむ頼朝和田義盛を遣して廣常を召す廣常觀望して未だ應ぜず既にして石橋の軍敗するに頼朝上總に奔り復た義盛を以てして之に赴かしむ廣常託して終に赴むかず千葉常胤等頼朝に應ずと聞き始めて周東周西伊南伊北藤南關北の兵二萬を帥ゐ往て隅田川に會す頼朝其の後れ至るを怒りて驟ち之を見ず士肥實平をして命を傳へしめて曰く常に後軍に在りて以て指揮を受く可しと初め廣常意へらく方今天下の兵馬は平相國の管轄に非ざるなし頼朝單身にして兵を起すと雖ども事必ず濟らず若し其の人唐瓜にして將帥の器に非ざれば即ち斬りて以て平氏に獻ぜんと且以謂らく我れ今大兵を驅りて之に赴かば其れ必ず大に喜ばんと命を聞くに及びて意大に沮む謂へらく人君の度ありと遂に心を傾けて之に從ふ頼朝廣常の軍を併せて兵勢大に振ふ平維盛を富士川に敗るに及びて頼朝兵を進め後を躡ばんと欲す時に佐竹義政

秀義衆を擁して常陸に在り廣常千葉常胤三浦義澄と先づ之を滅さんことを勸む頼朝常陸に赴き諸將と胥議して廣常姻好あるを以て往て義政秀義を說て降さんとす而して秀義は其父平氏に屬して京師に在るを以て從はず嗾ゝ義政廣常と俱に來る頼朝紿いて其從者を屏け廣常を召して之を大矢橋の上りに斬らしむ秀義遂に金沙城に據る金沙は高峻險絶なり頼朝進み攻めて拔く能はず明日廣常頼朝に謂て曰く秀義叔父に藏人義弘と云ふ者あり疾黠にして多欲あり陷はしむるに重利を以てせば必ず將に離畔せんとす若し義弘を得ば秀義を取るは難からずと廣常往て義弘に說て曰く子の爲めに計るに宜しく早く闕を改めて攻めて冠者を殺すべし則ち官に死を免るのみならず所在の采地は永く子の有とならんと義弘大に喜び廣常の兵を引て鼓譟して城後より出づ城兵驚擾して支ふること能はず秀義城を棄てゝ走る、廣常糸とより兵馬多し功を恃みて驕恣なり三浦義澄頼朝を三浦に聲す廣常召に應じて來會し頼朝を望み見て鞍に據りて長揖す佐原義連之に下馬を勸む廣常曰く我家三世未だ其禮に慣れずと遂に背て下らず宴酣にして岡崎義實と醉に乘じて怨爭す頼朝積て平なる能はず漸く之を疏んず嘗も亦た稍ゝ之を覺り頼朝雅れに京師の人を愛重せるを以て其女婿前伯耆守平時家を薦めて以て自ら廢に代へんとす時家を薦めて以て自ら廢しむ義時廣常を博し其の不遜に怒り乘じて之を斬る廣常嘗て甲一領を上總一宮に納む是に至りて嗣官之を告ぐ頼朝其の異あらんことを意ひ人を遣して之を取らしむ中に一封書あり折閲すれば則ち皆な頼朝の爲めに讐佑を所るの語なり是に於て始めて其の寃を知りて大に悔い其の弟天羽直胤相馬常清を殺す（大日本史）

タヒラ　マサカド　平將門　上總介高望の孫鎭守府將軍良將の第三子なり相馬小二郎と稱す勇敢人に過ぎ兼ね騎射に工みなり少にして攝政忠平に事へ其の薦に因て檢非違使たらんことを求む忠平之を省みず將門失望怨憤し去りて關東に赴き下総豐田郡に居り往屬を率て常陸下總の間に往來し攻劫を以て事となす時に伯父國香常陸大掾たり將門攻めて之を殺す源護と云ふ者あり其の子扶、隆、繁、皆な將門の爲めに殺さる護報ゆること能はず居常之を歎恨す將門の伯父良兼正と竝びに護の女を娶る良正良兼相勸め將門を殺して婦家の讐を報いんとす是より先き良兼女の事を以て將門と忤ひ又た良將と田を爭ひて互に相怨む平六平良兼將門を常陸に擊つ國香の子貞盛往て新治郡に迎へて之を禦がんとし百餘騎を率て常陸に赴く維幾備を設けて以て待つ將門其の嚮導に藉りて常陸を取らんと欲し乃ち千餘人を率て常陸に赴く維幾聽かず將門擊て三千人を殺す將門追て之を闕み已にして闕一角を破る貞盛人數を以て兵を收めて還る良兵千餘人數百人を得たり朝廷擢ま百姓を侵擾することを以て將門を罷し將に之を捕ふ將門馳せて京師に詣り陳情自辨し七年良兼復た將門を擊ちて常陸下總の中に神異あるを以て兵を收めて還る良兼兵を縱ちて焚掠す栗栖院常羽御厨皆な灰燼に歸る良兼將門を奪さるを憾みて其の奴子春丸に賄ひ石井營を襲ふ將門の奴子春丸に賄ひ石井營を襲ふ將門倉皇として出でゝ拒ぎ大に敗る貞盛秀郷勝に乘じて之を攻む將門自ら衆寡敵せざるを度り二將を除に誘致して之を擊ちんと欲し走りて幸島を保つ貞盛秀郷火を縱ちて其の營を燒き追ひて島の北山に戰ふ是より先き將門常に精兵八千人を選びて以て自ら衛る時に未だ集まらず衆僅かに四百餘人拒ぎ戰ひて甚だ力む官兵少く郡を貞盛秀郷士卒を督して貞盛射て之れを斃し旨を破る將門單騎にして陣を突く貞盛射て之れを斃し旨を京師に傳ふ籟興皆な誅に伏す（大日本史）

タヒラ　ミチモリ　平通盛　權中納言教盛の子なり初め公盛と名く永暦元年藏人に補し從五位下に叙せらる長寛治承の間正四位下兵衛督守兼中宮亮に累遷し從三位に叙せらる養和元年三月重衡等と共に將軍として源行家を洲股川に擊ち之を被る八月通盛但馬守經正と共に將として義仲を擊ち通盛越前國府に至り義仲の兵勢甚だ盛なるを以て使を遣して授を乞ふ通盛經正を待ち俱に進んと欲す經正兵を菁俠に屯め逗留して至らず九月通盛兵衛尉清家をして加賀に赴かしめんとす適ゝ加賀の人稻津實澄叛して義仲に應じ衆後より來襲ふ府中兵寡なし通盛應に下八十餘人を率て出で戰ひ力支ふる能はず退て敦賀を保ち復た兵を益さんとす請ふ朝廷行盛忠度を遣して赴き援はしむ北兵來り攻む城支者大子となる弓箭の藝に於ては我れ之を性に稟く復た何の憚りか之れあらんゝと雖ども是に於て下總に歸り僞宮を殺島郡石井郷に匿す磯橘を以て京師山崎に擬し大井津を以て大津に擬し大臣以下文武百司を置く唯ゝ暦博士のみ其の人を得ず又た將頼將文等を諸國の守となす長吏皆な風を望みて遁亡す世呼びて外都鬼王となす信濃常陸驍勇相繼ぐ官、命じて東山東海の要害を修め鄰境に守備を增す初め將門比叡山に登り京師を下瞰して窺窬の心あり藤原純友と相約して曰く他日我れ天位に據ちて友將門の起るを聞き亦た攻めて守宰を殺し瀕海を擾亂す三年參議右衛門督藤原忠文を以て征東大將軍となして之を討たしむ將門武藏相模を巡りて留主を置き賦役を課す貞盛常陸に在りと聞き兵を率て還り下總に歸り將帥の器に非ざれば即ち斬りて以て平氏に獻ぜんと且以謂らく我れ今大兵を驅りて之に赴かば其れ必ず大に喜ばんと命を聞くに及びて意大に沮む謂へらく人君の度ありと遂に心を傾けて之に從ふ頼朝廣常の軍を併せて兵勢大に振ふ平維盛を富士川に敗るに及びて頼朝兵を進め後を躡ばんと欲す時に佐竹義政

ふる能はず十一月軍を回へして京師に還る壽永三年二月父敎盛に從て備中下道に在り時に讃岐の國衆二千餘人叛して京師に赴く路其營を襲ふ敎盛、通盛敎經みして之を擊たしむ國衆逃れて淡路に走る通盛敎經之を攻めて之を殄す進みて伊豫に抵り河野通信か攻めを欲し乃ち四國に赴く敎經屋島の行宮に通盛阿波花弗に至る通信懼れて安藝に走る一谷城陷るや通盛走りて湊川を過ぐ佐々木俊綱追ひて之に及ぶ通盛力戰して死す（大日本史）

タヒラ　ムネキヨ　平宗清　彌平左衛門と稱す（或は彌平兵衛に作る）鎮守府將軍貞盛八世の孫、左衛門尉季宗の子なり平頼盛に仕ふ、頼盛尾張守たるに及びて宗清を以て目代となす永暦元年源義朝誅に伏す其の子朝長死し頼朝逃ぐ宗清尾張より京師に入らんとして路に頼朝に遇ふ戮て之を捕し青墓驛に至りて朝長の墓を掘りて其の首を獲併せて之を六波羅に送る清盛頼朝を宗清の家に囚へしむ刑を行ふ日宗清頼朝に謂ひて曰く耶君死を免れんと欲するか對て曰く保元以來父兄宗族寃滅して將さに盡んとす冀くは僧となりて冥福を修せん耳と宗清意之を愍む已にして宗清池の尼に抵り告るに頼朝の意を以てす尼惻然として之を哀れみ乃ち平重盛に囑して清盛に說き其の死を宥めしむ清盛聽かず尚ほ刑期を緩む會々義朝の五七日忌至る頼朝卒都婆を造らんとを請ふ宗清爲めに百枚を製して之に與ふ頼朝手づから佛名を寫し衣を解き僧に施す禪尼聞て益々之を哀み營救備に至る遂に死を免るゝを得たり是を以て頼朝深く宗清を德とし平氏を擊つに及びて毎に將士に誡めて宗清を害する勿らしむ平氏の四奔するや宗清頼盛に從て京師に留まる頼朝池尼の恩を思ひ頼盛宗清を鎌倉に招致せんと欲す宗清行くを欲せず頼盛之を强ふ宗清固く辭し且つ曰く公鎌倉に至らば頼朝必ず臣を問はん請ふ爲めに辭するに疾を以てせよと乃ち頼盛を送りて近江野路に至りて辭し歸る直に屋島に往て宗盛に仕ふ頼盛鎌倉に至りて曰く宗清疾を以て來らずと頼朝以て遺憾となり乃ち其擬する所の給物を以て悉く頼盛に贈る、平氏亡ぶるの後宗清遁れて終る所を知らず（大日本史）

タヒラ　ムネコ　平棟子　後嵯峨帝の典侍なり水工頭棟基の女初め四條帝の宮に入りて掌侍となり從ゐ位上に叙す兵衛內侍と稱す宮に在て銀鶴を守る後嵯峨帝密に之を幸し宗尊親王を生む後嵯峨帝位に即き寵幸日に渥し寛元三年二月典侍となる後ち從二位に叙す宰相三位と稱す宗尊征夷大將軍となる棟子方さに從二位に叙し大納言局と稱す尋で從一位に叙し三宮に准す（大日本史）

タヒラ　ムネナカ　平棟仲　安藝守重義の子なり因幡周防守に任じ從五位上に叙せらる和歌を以て世に著はれ藤原範永等六人と竝び稱して和歌六藪と號せらる（大日本史）

タヒラ　ムネモリ　平宗盛　太政大臣清盛の子なり二條帝の朝に遠江淡路美作等の守左兵衛佐左馬頭を歷て仁安二年右近衛中將に任ぜられ尋で參議となる明年正三位に進み權中納言兼左衛門督に任ぜらる治承元年右近衛大將を兼ね翌年正二位に進み權大納言兼春宮大夫に任ぜらる三年官爵を辭す重盛薨ずるに及びて清盛益々專橫なり法皇素より平氏の擅權を疾む藤原成親の事發はれてより清盛も亦常に憤怒み蓄へ法皇の黨を幽せんと欲す宗盛兵を師して法性寺殿を圍む法皇悲泣して曰く將に朕を遠流せんとす宗盛曰く敢て然せず暫く鳥羽北殿に遷す法皇歎息す明年宗盛清盛を諫めて法皇を八條烏丸第に徙す是の歲安德帝位に即く清盛外戚を恃みて益々權擅を逞うす養和元年正月畿內及び伊賀伊勢近江丹波等の總管となる時に源義仲源頼朝兵を東北に起す宗盛大兵を將て賊を禦ぐ義仲源頼朝兵を東北に起す宗盛薨じて止む是に於て宗盛法皇に白して曰く先臣のなす所間々臣の欲せざる者あり而して臣の不肖諫め止むること能はず今より後事皆聖旨を奉ぜん聞く東征の兵士糧食方さに盡くと先臣向に道なして軍糧を輸せしめんと欲して未だ施行に及ばずして歿す願くは聖裁を聽かん且陛下賊を宥めんと欲するか將た討ぜんと欲するか請ふ朝議を得て一決せんと法皇公卿を集めて之を議せしむ法皇頼朝を宥めんと欲す宗盛聽を遺して法皇に將に欲す宗盛聽を遺して之を拒がしむ頼經緒方惟能と謀して東國に赴かしむ重衡大に行家を洲股に破りて還る詔を下して平氏を進むことを得ず船を回らして瓊浦に漂泊す義經舟師を率て來攻む平氏大に敗る知盛帝船に來り北の諸源將に京師に入らんとす宗盛軍事を以て意となさず華麗自ら誇る時人之を譏る二年從一位に叙せらる內大臣を辭す七月義仲近江に抵る宗盛延暦寺に遣りて援を請ふ僧徒聽かず宗盛諸將を遣して義仲を近江に防がしむ時に諸源の頼朝に應ずる者皆將に京師に入らんとす是に於て諸將を召還し將さに鎭西に奔らんとす知盛以て不可となす宗盛聽かず、議、四狩に定まる是より先き宗盛竊かに法皇を挾みて去らんと議す或ひと其の謀を知りて密かに法皇を宮を出づ宗盛惶惑して詣の出る所なし乃ち自ら第宅を火き餘燼を收め帝及び建禮門院皇第守貞を奉じて西す闔族皆從ふ既にして法皇詔を下して平氏二百餘人の官爵を削り高倉帝第四の皇子を立てゝ位に即かしむ是を後鳥羽帝と爲す宗盛等之を聞きて曰く悔らくは三四の宮を并せ取りて來らざるとなり三宮は雄明親王四宮は則ち後鳥羽帝なり時に藤原頼輔豐後の國司たり平氏太宰府に入ると聞き子頼經を遣して之を拒がしむ頼經緒方惟能と謀りて九國二島の兵士を率て平氏を攻む宗盛諸將を遣して之を禦がしむ諸將支ふる能はず宗盛等帝を奉じて箱碕に奔り尋で藤原秀遠の山鹿城に還る惟能兵十萬を以て來ると聞き海に泛て之を避け遂に屋島に抵る既にして宗盛勢ひ復た振ひ稍々山陽道を徇ふ明年正月城を攝津一の谷に築く頼朝弟範頼義經をして一の谷を攻めしむ宗盛倉皇、帝を奉じて海に泛ぶ屋島に往く士卒寢狼狽を爭ひ溺るゝ者多し此役に通盛忠度經正敦盛知章經俊業盛盛俊等戰死し重衡虜へらる法皇、三種の神器の外に在るを憂へ重衡を獲るに及びて書を宗盛に遺りて之を上らしめ約するに其死を宥んとを以てす宗盛院宣及び重衡の書を得て乃ち奉答す大意は臣等院宣を奉ずれば武士に詔して戰鬪を停め遷幸に妨げなからんことを云ふに在り（委しくは大日本史清盛列傳下宗盛の傳に就て見よ）四年二月義經火を屋島の民舍に放つ延て行宮に及び平氏海に入りて之を逃く是に於て海陸矢を放ちて相挑む平氏支ふる能はず宗盛帝を奉じて志渡に遁る義經來り攻む又禦ぐ能はず舟に泛ぶて引き島を經て箱碕に往く時に範頼大兵を領して豐後に在り故を以て平氏進むことを得ず船を回らして瓊浦に漂泊す義經舟師を率て來攻む平氏大に敗る知盛帝船に來り

て曰く事既に此の如し復た言ふ可きなしと侍御悉く悲泣す二位歎じて曰く宗盛は實に相國の胤に非ず亦我が生む所にあらず宜なるかな其の心操の小松內府に似ざるこそや彼必ず死する能はず廢と爲りて辱を受けんと豈に二位尼既に重盛を生みて後ち復た男あらず清盛之を憐ふ既にして復た女を生む二位尼之を秘して告げず清水阪北傘工の家の兒を覓め得て密かに之に易ふ清盛世を沒するまで終に之を言はず此に至りて始めて之を言ふと云ふ乃ち帝を抱き海に投ず宗盛清宗決すること能はず舟中に彷徨す兵士之を醜として故さらに手を失する爲れして相觸れて之を擠す父子素より善く泅ぐ東兵鐵搭鉤を以て之を提らへ京都に送る五月義經慰めて曰く我必ず軍功を以て贖はんと宗盛喜ぶ六月鎌倉に入る頼朝崖を垂れて之を別室に引き庭を隔てゝ見る宗盛竦動懼忌して曰く若し一死を宥さるゝことを得ば則ち當さに出家して佛に事ふべしと頼朝之を刑に致すに忍びず其の自裁せんことを欲して俎上に魚を盛り刀を置き以て之に示す宗盛覺らず清宗其の意を知る然れども父に先だつに忍びずして止む頼朝宗盛を呼びて讃岐權守と曰ひ名を末國と改む又京師に送還せられ在て近江篠原に抵りて遂に斬らる時に年三十九首を京師に傳へて獄門の樗樹に梟す（大日本史）

タヒラ　ムネヨリ　平致頼　勇士なり平維衡源頼信藤原保昌と名を齊うし四天王と稱す下總介良兼の孫武藏守公雅の三男從五位下備中掾たり長保元年下野守維衡と私鬪して共に流に處せらる致頼は鬪み挑みたるを以て遠く隱岐國に流さる寛弘八年十二月病て卒す其子左衛門大尉敎經は詞花集の作者にして和歌に長ぜり（今昔物語）

タヒラ　モトノリ　平基度　伊勢の人なり進士三郎と稱す元久元年平盛時と兵を起し伊賀の守護首藤經俊を誅して之を走らし伊賀伊勢の郡邑を徇ふ基度朝日郡宮田岡に據り貞重等安濃多藝に據り平賀朝雅と戰ひて敗る基度弟盛光と同く之に死す（大日本史）

タヒラ　モトモリ　平基盛　其の出所を詳にせず清盛養ひて以て子となす保元元年歲十七にして檢非違使を以て兵を率ひ宇治を守る途に宇野親治に值ふ基盛呼びて曰く敕を奉じて兵士の甲を釋らして入京泣す二位歎じて曰く宗盛は實に相國の胤に非ず亦我が生む所にあらず宜なるかな其の心操の小松內府に似ざるこそや彼必ず死する能はず廢と爲りて辱を受けんと豈に二位尼既に重盛を生みて後ち復た男あらず清盛之を憐ふ既にして復た女を生む二位尼之を秘して告げず清水阪北傘工の家の兒を覓め得て密かに之に易ふ清盛世を沒するまで終に之を言はず此に至りて始めて之を言ふと云ふ乃ち帝を抱き海に投ず宗盛清宗決すること能はず舟中に彷徨す兵士之を醜として故さらに手を失する爲れして相觸れて之を擠す父子素より善く泅ぐ東兵鐵搭鉤を以て之を提らへ京都に送る五月義經慰めて曰く我必ず軍功を以て贖はんと宗盛喜ぶ六月鎌倉に入る頼朝崖を垂れて之を別室に引き庭を隔てゝ見る宗盛竦動懼忌して曰く若し一死を宥さるゝことを得ば則ち當さに出家して佛に事ふべしと頼朝之を刑に致すに忍びず其の自裁せんことを欲して俎上に魚を盛り刀を置き以て之に示す宗盛覺らず清宗其の意を知る然れども父に先だつに忍びずして止む頼朝宗盛を呼びて讃岐權守と曰ひ名を末國と改む又京師に送還せられ在て近江篠原に抵りて遂に斬らる時に年三十九首を京師に傳へて獄門の樗樹に梟す（大日本史）

タヒラ　ムネヨリ　平致頼　勇士なり平維衡源頼信藤原保昌と名を齊うし四天王と稱す下總介良兼の孫武藏守公雅の三男從五位下備中掾たり長保元年下野守維衡と私鬪して共に流に處せらる致頼は鬪み挑みたるを以て遠く隱岐國に流さる寛弘八年十二月病て卒す其子左衛門大尉敎經は詞花集の作者にして和歌に長ぜり（今昔物語）

タヒラ　モトノリ　平基度　伊勢の人なり進士三郎と稱す元久元年平盛時と兵を起し伊賀の守護首藤經俊を誅して之を走らし伊賀伊勢の郡邑を徇ふ基度朝日郡宮田岡に據り貞重等安濃多藝に據り平賀朝雅と戰ひて敗る基度弟盛光と同く之に死す（大日本史）

タヒラ　モトモリ　平基盛　其の出所を詳にせず清盛養ひて以て子となす保元元年歲十七にして檢非違使を以て兵を率ひ宇治を守る途に宇野親治に值ふ基盛呼びて曰く敕を奉じて兵士の甲を釋らして入京泣す二位歎じて曰く宗盛は實に相國の胤に非ず亦我が生む所にあらず宜なるかな其の心操の小松內府に似ざるこそや彼必ず死する能はず廢と爲りて辱を受けんと豈に二位尼既に重盛を生みて後ち復た男あらず清盛之を憐ふ既にして復た女を生む二位尼之を秘して告げず清水阪北傘工の家の兒を覓め得て密かに之に易ふ清盛世を沒するまで終に之を言はず此に至りて始めて之を言ふと云ふ乃ち帝を抱き海に投ず宗盛清宗決すること能はず舟中に彷徨す兵士之を醜として故さらに手を失する爲れして相觸れて之を擠す父子素より善く泅ぐ東兵鐵搭鉤を以て之を提らへ京都に送る五月義經慰めて曰く我必ず軍功を以て贖はんと宗盛喜ぶ六月鎌倉に入る頼朝崖を垂れて之を別室に引き庭を隔てゝ見る宗盛竦動懼忌して曰く若し一死を宥さるゝことを得ば則ち當さに出家して佛に事ふべしと頼朝之を刑に致すに忍びず其の自裁せんことを欲して俎上に魚を盛り刀を置き以て之に示す宗盛覺らず清宗其の意を知る然れども父に先だつに忍びずして止む頼朝宗盛を呼びて讃岐權守と曰ひ名を末國と改む又京師に送還せられ在て近江篠原に抵りて遂に斬らる時に年三十九首を京師に傳へて獄門の樗樹に梟す（大日本史）

タヒラ　モリツグ　平盛嗣　盛俊の子なり衛源頼信藤原保昌と名を齊うし四天王と稱す雅和元年平維盛に從ひ源義朝を追ふ嘉永二年平維盛に從ひ源義朝を追ふ嘉永二年平維盛に從ひ源義朝を追ふ嘉永二

て檢非違使なり平判官と稱す治承元年大納言藤原成親法勝寺執行俊寛等と共に平清盛の專恣を惡み密に之を滅さんとの謀る事露はれて成親の子成經俊寛と共に流黄島に流さる翌年赦されて成經と共に歸る（平家物語）

タヒラ　ユキモリ　平行盛　清盛の孫、基盛の子なり正四位下左馬頭たり壽永三年備前兒島に盤し五百餘騎に將として拒守す源頼朝の將佐々木盛綱の爲めに敗らる安德帝崩ずるに及びて左近衛少將有盛と射て數人を殺し敵舟に入る乃ち短兵を執りて奮戰して死す初め父の宇治川に溺れて死するの日行盛尚ほ幼弱なり長ずるに及びて其の母夢みることあるを以て日に提婆品を誦して以て追福す銀雖寫陀に處ると雖も未だ嘗て廢弛せず是に至りて亦之を誦す聽く者之を悲む行盛權中納言藤原定家に從ひて和歌を學ぶ其の西海に赴くや平生著す所の稿一卷を遺し和歌を作りて留別す定家之を讀み感泣して謂へらく他日敷を奉じて和歌を撰まば必ず當さに之を載すべしと後ち新敕撰集を撰むに及びて之を載す（大日本史）

タヒラ　ヨリノブ　平緣信　和學者なり六友堂と號す又不知庵呂と云ふ初荷田在滿に從ひて有職古學を研究し後又縣居門に入て疑を質せり（鑑定便覽）

タヒラ　ヨリモリ　平賴盛　刑部卿忠盛の第五子にして清盛の異母弟なり初め平氏に二實刀ありと曰く小烏、拔丸、忠盛卒す清盛家嫡を以て小烏を得賴盛亦た母池尼の故を以て拔丸を得是れに繇りて清盛と隙あり保元中安藝守に任ぜられ右兵衛佐を兼ね從四位下に叙せられ中務大輔と爲り尋で參河守を兼ね平治の亂に郁芳門に入り襲朝と戰ひて敗績し單騎にして郷き走る鎌田政家の從兵八町二郎追ひて之に及び鍛搭を以て之を鉤す賴盛勢を傾けて之を避く遂に爲めに鉤せられて幾んど馬より墜ちんとす即ち拔丸を揮ひて鍛搭を截る二郎頓仆す間を得奔りて六波羅に歸る既にして藤原信賴等敗れて仁和寺に匿る賴盛兄敎盛と三百餘騎を率ゐ圍みて之を勝にす功を以て尾張守を兼ね永曆應保の間累進して修理大夫に任ぜられ正四位下に叙せらる永萬二年太宗大貳を兼ね仁安元年從三位に叙せられ養談に任ぜらる治承四年正二位に進む壽永二年權大納言に拜せらる其居を池殿と曰ふ因て池大納言と稱す、平氏帝を奉じて西奔するや賴盛亦後ち職を棄て往く然れども實は京師を離るゝに意なし鳥羽の南に至りて赤幟を撤して還り法住寺殿に匿さしむ是より先き源頼朝池尼の故を以て屢〻書を遺りて之を慰安し且つ士卒に戒飭して濫りに戈を執る勿らしむ是を以て四狩に從はざるなり或ひと其門に傍して仇家に依倚して苟も身命を全うするを譏る賴盛深く之を愧づ三年五月賴朝使を遣して賴盛及び其の臣平宗清を鎌倉に招致す賴盛將に往かんとす宗清固辭して從はず賴盛遂に鎌倉に抵る賴朝接待甚だ渥し六月京師に還る賴朝贈るに金鞍刀一口沙金一囊馬十匹を以てしを以て其の官職采地を復せしむ文治元年朔髮して名を重莖と改む明年薨ず年五十五（大日本史）

タヒラ　ロクダイ　平六代　三位中將維盛の長子なり文治元年北條時政京師に至りて平氏の子孫を購求す時政、六代の母と同じく遍照寺の僧文覺に匿ると聞き往きて之を擒にす其の乳母神護寺の僧文覺の書を奪ふ時政聽かず文覺曰く願くは期二旬を禮留せん我將さに自ら請はんとすと時政之を聽るす文覺乃ち使を遣して固く請ふ賴朝遂ふを許す文覺の使期を過ぎて至らず時政六代を將て鎌倉に還らんとす會ゝ馬を馳せて東より來る其の相及ばざらんことを恐れて笠を揚げて遙かに示す時政之を見て刑を停む已にして書至る遂に六代を以て文覺に還す賴朝屢〻書を文覺に遺りて其の擧動を問ふ文覺曰く六代は不肖なり意に介するに足らずと其の母懼れ勸めて髮を削しめ名を妙覺と更む世に三位禪師と稱す建久五年妙覺恩を謝す賴朝薨ずるに及びて文覺不軌を圖む事發覺して流に處せらる妙覺時に高雄に在り賴家其の變を聞き參んことを捕らへ相模田越川に斬る時に年二十六墓は今逗子にあり（大日本史）

タフサイ　タブセ　タダムネ　田布施忠宗　源助と稱す田布施流砲術の祖なり河内の人天文六年南蠻に遊びて砲術を研究す（武術流祖錄、本朝武藝小傳）

タブチ　マゴサブラウ　田淵孫三郎　薩軍一等主計なり埼玉縣出身にして明治二十七八年日露戰役に於て第二師團司令部附として從軍中三十八年八月十日清國盛京省沙嶺堡にて病に罹り同十月五日南沙嶺堡會營病院に於て死去す

タフノミネノ　セウシャウ　多武峯少將　「フヂハラタカミツ」

タフヰンノ　リッシ　塔院律師　僧壹定なり天慶七年七月醍醐寺座主に補せられ職に在ること三年

タベノノスクネ　ヨタリ　田部宿禰男足　醫者なり寶龜二年典藥員外助となる（皇國名醫傳）

タヘマ　當麻　大和當麻の刀匠國行を見よ

タヘマ　カモツグ　當麻鴨繼　醫者なり侍醫に任ぜらる嘉祐貞觀の間兼ねて越後介筑前介典藥頭主殿頭、阿波介、讃岐權介、伊豫守に歷任す年老いて致仕を請ふ許されず遂に官に卒す（皇國名醫傳）

タヘマ　クニユキ　當麻國行　元應中の鍛工なり大和當麻鍛工の祖なり（萬寶全書）

タヘマ　マロ　當麻麻呂　其の先は麻子墓子より出づ天武帝の十三年姓眞人を賜ふ和歌を善くするを以て著はる詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

タヘミツ　才光　大和當麻の刀匠にして友光の子正和比の人なり或は云嘉慶比の人と又云應永比の人或は建治比の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タヘミツ　妙光　備前長船の人にして古刀の鍛工なり或は云ふ文明年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出）

タマ　玉　古刀の鍛工にして近江の人或は云有行の子にして山城粟田口國友の門人源多六郎と稱す建暦承久年間の人なりと又云國友の六子にして近江勢田に住し勢田六郎と稱す建保比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タマノカタ　玉方　名は宗子、秋野殿と稱す

本莊宗利の養女、父業は京師の人なり玉永好姫に東府に從ひ春日局に遊る玉顔る容色あり時々將軍家光に侍す家光見て之を悅び因て之を幸す身ゆるとあり秋野と改稱す正保三年正月家綱を生み館林館に徙る家綱嫡統を承ぐに及びて第二郭に轉居す貞享十一年從三位に叙せられ元祿十五年從一位に進む玉賀性慈仁溫柔神を崇み佛を敬し廢を興し絕を繼ぎ靈井祠を修營し戒壇を東大寺に建つ寶永二年六月二十二日卒す年八十二三緣山に葬る謚して桂昌院仁譽興國惠光と云ふ（野史）

タマアリ　玉有　出羽の刀匠我里馬の子にして建久年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タマガキ　ガクノスケ　玉垣額之助　カ士也肥前島原の人天資勇悍にして義を好む初名を連と云ふ同邑人某と江戸に遊び角觝長玉垣に從て技を學ぶ落魄困苦す然れども其名稍〻世に著はる時に阿波侯角觝を好む麗を厚うして之を招く某謂ふ吾が藩に入窮困骨に徹す而して吾が藩之を恤まず如かず其招きに應ぜんには と連に强ふ連可かずして曰く阿波の稻は島原の粱には若かざる也と是に於て某獨り阿波に仕ふ後數年連泯華に至る堀面鵠衣困苦益〻甚し某之を見て曰く甚し子の羸るゝや嚮きに余が言に從へば寧ろ今日あらん乎と連其故國に背き而して他國に仕へ富を挾み以て己を凌ぐを惡み興に技を角らべ以て之を屈辱せんと欲し角觝長の家に至り某と對せんと請ふ時に某階級大に進み連に上ると數等例興に對するを得ず長其志を義とし百方周旋遂に之と對することを許す將に對せんとするの前夕長連の或は勝つ能はざるを恐れ中夜連を呼び起して曰く彼某技を以て來らば汝何を以て之に應ぜんと連曰く吾以て甘腰すべし彼復た患ふるに足らずと期に及び曰く遠近爭ひ來り場の中央を觀れば積土二尺外繞すに土豚を以てし中に八席を容る是を演技の所と爲す某東より進み連四より進む某軀幹傀偉俯して連の頂を視直ちに之を擠して豚外に出さんと欲す連屈せず其彈た擺み身を捻り一踢して之を地に投ず地爲めに凹み衆皆嗟げ之に言つて曰く阿波の稻覓に島原の粱と如何と某怒りこれを復せんと請ふ乃ち許るす之を投ずる始の如し是に於て連の名天下に聞ゆ其師玉垣之を聞き終に其號を推して之に讓り己れに代つて天下角觝の柄を執らむ麗商公之を聞き五人扶持を賜ひ班步士隊に列す玉垣惑害止まず公の薨ずるや玉垣其徒と棺槨を舁ぎ參州本光寺に至る江戸を距ること七十里時人其厚義を稱すと云ふ明治十四年八月廿五日歿す年六十九（横山正郊所撰玉垣傳）

タマガキ　ガクノスケ　玉垣額之助（十五代目）相撲年寄なり相模國浦賀に生れ荷積問屋藤井傳五郎の長男なり幼にして膂力人に越え慶應三年二月十七歲の時力士たらんとして實家を次男に讓り江戸に出て〻十二代玉垣額之助（原庭玉垣）の門に入り三遍目となり浦の海と改名す後推と稱す漸次昇進して三段目となり浦の海と改名す後推薦直技藝を勵みしかば漸次幕下まで進みしも病の爲め遂に十五代玉垣を繼くに至れり身を持すること明治二十二年力士を廢業して年寄專務となれり二十七年日清戰役の起るや玉垣は同年寄君ケ濱、清見潟等と相謀り近衛師團司令部に向つて從軍を出願し幸に許可せられたれば同志の力士五十餘名を引率して從軍し擔夫と云へる名義にて渡清し後北白川宮能久親王に扈從して蘆溝に渡り軍務の餘暇には角力を興行して軍隊を慰藉したり觀王不例の後同じく扈從して東京に歸り其の葬儀の際は特に許されて柩を舁き爾來陸軍部內に出入することを許されたり三十七年日露戰役起るや先年の例に倣ひて再び從軍を希望せしも軍隊の規律改正の爲め遂に許されず三十八年三月横濱にて興行中病を發し同十一日同地の客舍に死す享年五十六遺骸は東京小石川區大塚町西信寺に埋葬す勢玉院仁養淨顏居士と謚す

タマカヂ　ザウコク　玉楮象谷　讃州高松の漆工にして藩主松平氏に仕ふ近世の名手なりもと藤川氏名は爲三字は子成俗稱敏造象谷は其の號なり一説に藏黑に作る藏黑は孔子家語より撰び出せる文字なり一説に藏黑は孔子家語より撰び出せる文字なりといふ文化三年十月四日讃岐の高松外磨屋町に生る其の父理右衛門洪隆稻徐師を業とし兼て篆刻を善くす象谷幼より父の膝下にあり筆物を製作する多し中に就き其の技元年松平氏に仕へ器物を製作する多し中に就き其の技量を騙はし名工の賞を得たるは同十年八月藩主に奉り一角の印籠これなり方一寸の印籠に荷葉五十五、花三十、太湖石二、龜三百四十三、蟹四百三十三、蛙四十一、蝸牛二十七、蟻蛤二十四、蝟九、蜂四、蝶二十六、玉虫二、蛇蛻四、蚕四、蟋蟀二、蟷螂四、蛛十八、蟻二、蜈蚣五、兜虫一、蚕十九、蠶七、蜀翠十、鶴鴿一、鷺三合せて千零八十六個の物象を彫刻せり其の製精細殺密にして殆肉眼にも て窺ふこと能はざるが如し細にこれを視れば靄々として皆生動の勢あり藩主大に其の妙技を嘆賞し帶刀を許し苗字玉楮を賜ふ一藩之を榮とす此の頃象谷は一種の髹法を發明せりこれを象谷塗又讃岐塗といふ即竹藍又は木材を樸として黑漆又は朱漆を塗り極めて緻密なる花卉草虫等を彫り而して同色又は黑色の漆を もて之を塗りたるなり是即支那の張成存星等を本として我が古背の髹法を添へたるものなり又支那の蒟醬の製に據り蒟醬を作る甚妙なり之れを讃岐蒟醬といふ其の後象谷は紫漆白漆を發明せんと欲し頗る苦心せしも終に其の目的を遂すること能はずして止みぬ象谷性豪落にして高潔なり常に文人墨客に交はり書畫骨董を愛し世事を顧みざるもゝ如し明治二年二月一日歿す年六十四高松四濱村四方寺に葬る其の製品は殺せて勉心簿に載せる妙覺時に高雄に在り賴家其の變を聞き參んことを捕らへ相模田越川に斬る時に年二十六墓は今逗子にあり（大日本史）

タマガキ　キチジラウ　玉川吉十郎　裝劍彫刻師なり義久の門人、常州水戸に住す其の作鮮麗にして手強く甚だ巧なれども名遂に顯はれず（裝劍奇賞）

タマガハ　シャウジュ　玉川正壽　彫工なり文平と稱す承壽の男、常州水戸鍛冶町に住し後ち江戸淺草に徙居す正壽の其の術に於て毫も父に劣らず作る所甚だ奇麗にして器用なりと云ふ（裝劍奇賞）

タマガハ　ショウジュ　玉川承壽　水戸の金工なり三郎兵衛と稱す矢田部遍壽の門人（裝劍奇賞）

タマガハ　センノジョウ　玉川千之丞　江戸の俳優なり元京師の人寛文元年江戸に來り女優を以て鳴る（還魂紙料）

タマガハ　ソウヂウ　玉川宗重　石州流の茶人なり宗雪の子父に從ひて茶道を學び之れを能す其の歿年詳かならず（茶人系傳全集）

タマガハ　ヨシヒサ　玉川義久　彫工なり常州水戸銀治町裏五丁目に住し太七と稱す如英軒又九九軒雲隱の號あり承壽の甥にして弟子となり又通壽に從ふ龍を刻むに妙を得其彫む所勢ありて活動すと云ふ寶政元年歿す年六十五（装劍奇賞）

タマギク　玉菊　芳原角町中萬字屋勘兵衛の遊女なり容貌美にして性頗る慈仁を好む故に廓中の男女皆望を屬す玉菊絲竹管絃を善くし兼て香茶俳諧を好む最も江戸河東の兩曲に工みなり享保十一年三月廿九日病みて歿す年二十五倩屋虎文松居八兵衛等之を愍み其周忌に當りて燈を廓中に掲げ以て其靈を弔ふ是れ芳原に燈籠を掲ぐるの始めなり（實事譚、俳林小傳）

タマキ　ジョウサイ　玉置讓齋　儒者なり名は直雄字は子恭環一郎と稱す環左衛門勝雄の長子にして肥前平戸侯の支封松浦豐後守修の世臣たり文政十一年六月江戸に生る幼にして朝川善庵の門に遊び和漢の經史に涉獵し博覽强記の譽あり小山田與清に從ひ和歌を學び又た澤田東洋に就て書法を善くし兵學及び馬術は最も長所なり明治維新の際酒主に從ひ平戸に移住し明治三四年來私塾を設けて平戸本支藩内の學年子弟に教授す同門より出づる者千有餘名に及ぶ就中官沼貞風、稲垣鴻次郎、吉富鼎一、久住呂董太郎、伊崎繼三郎等風に優秀の聞あり著す所觀月堂雜記、讀意漫筆、飛鷺島の記等の數種あり晩年脚氣症に罹り明治廿二年九月廿一日歿す年六十二（平門偉人錄）

タマキ　タイジュン　玉置泰順　陸軍軍醫試補なり東京府出身にして熊本鎭臺附を以て明治九年十月十二日熊本、山口、福岡縣賊徒追討の役に戰死す

タマキ　ネイ　玉置寧　陸軍歩兵中尉なり岡山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し後備役より召集せられ第十師團後備歩兵第十聯隊附として從軍中三十七年九月二日清國遼陽東南方エフヲに於て戰死す

タマキ　ヒコスケ　玉木彦助　勤王の志士なり長州藩士譯は正弘文久三年五月世子の近侍となり屢〻京都大阪の間に往來し遂に江戸に行かんとす俗論黨に沮まれて果さず後藩論各爭闘を開くや彦助勤王黨の先鋒となり慶應二年正月十六日赤村口に力戰し創を蒙りて死す年二十五明治三十五年十一月朝廷其忠志を道賞して特に正五位を贈らる（殉難錄稿）

タマキ　ヰサイ　玉木葦齋　神學者なり名は正英、五十鐵南翁と號す學を山崎垂加の門に修し大に研究して終に一家をなし頗る世に稱譽せらる其の門に入りて業を受るの徒多く遂に一家の風を興す元文元年七月八日歿す藻鹽草、原根錄、玉籤集を著はす（鑒定便覽）

タマクシヒメ　玉櫛姫「セヤタラヒメ」
タマクラノケンカウ　手枕兼好「ヨシダケンカウ」

タマタ　ツネヤス　玉田經康　陸軍歩兵少尉なり岐阜縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團歩兵第六聯隊附として從軍中三十七年五月二十六日清國盛京省南山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タマツクリ　イラツメ　玉槻娘子　醫馬上郡の人大寶中の人なり和歌に善くす詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

タマツクリベ　クニオシ　玉造部國忍　天平寶龜の間和歌を善くするを以て其の名を知らる詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

タマツクリベ　ヒロメ　玉作部廣目　和歌を善くするを以て其の名を知らる詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

タマツシマ　ミヤウジン　玉津島明神　衣通姫を祀る社は紀伊國和歌浦にあり和歌の神なり

タマテ　キクシウ　玉手菊洲　畫人なり棠洲の二男、大阪の人畫を父に學ぶ（扶桑畫人傳）

タマテ　タウシウ　玉手棠洲　畫人なり大阪の人、明治四年十月二十二日歿す年七十七（扶桑畫人傳）

タマテ　バイシウ　玉手梅洲　畫人なり棠洲の長男、大阪の人畫を父に學ぶ（扶桑畫人傳）

タマナリ　玉成「ゴサンダウタマナリ」

タマノ　セイリ　玉乃世履　明刑官なり周防岩國の士倍助の子名は泰吉郎又東平と曰ふ五龍と號し字を公業と曰ふ藩の儒臣玉乃九華に就て學ぶ才名あり父事に因て藩を脫す乃ち母桂氏と居る藩主特に命じて藩校の訓導となす後京都に藤捐堂牧鹿雷等に從ふ九華歿するに及んで家を挈ぐ京都に在て賴三樹曾月照等と交る吉田松陰に會し萩侯岩國侯と相疎きの不得策を說ず松陰共に力を親交に盡すべきを約して去る世履後阪上村の撫育方となり治績あり又常に子弟をして操銃武技を習はしめ亦自ら翻譯の兵書を讀む文久二年長藩主岩國藩主に過り頗る親み善し蓋し松陰之を勸めしなり幕府毛利氏を伐つに及び世履農兵を率て盤原村を守る之が半隊を分て井上馨に屬せしむ其兵の訓練頗る嚴の敬服する所たりと云ふ事平ぐ藩主より物を贈りて之を賞す岩國藩主世履を擧て國政に與らしむ維新の後明治二年御屋を以て若松縣民政取締を命ぜられ數士となり會計官刑事試補たり同年七月民部省訟司知事廳訟權正となり幾なく民部少丞に任じ同三年九月民部權大丞に任じ同四年東京府權大參事を免ず同月東京府出仕を命ぜらる同月十八日司法中判事に任ず同年十一月權大判事、十二年正五位に叙す同五年先般不逞之徒處置一件格別盡力致せしに付綉三匹金七千匹を賜はる同七年英國人民より我政府に對する訴訟七件裁決の儀委任を命ぜらる事蒼藩の武器等を買ひたる假金未濟の件に係る者多し英國刑官滿念と會計の末五件は藩の私償となす滿念猶不服を唱ふる者二件あり佛國公使の調停を經て決する能はず同八月金三百圓下賜せらる果進して一等刑事に任ぜられ大審院長代理を命ぜらる同十年大山綱良犯罪一件臨時裁判所を開き尋で高知縣士族藤村靜、村松政克等の嚴問掛を命ぜらる裁決流るゝが如く罪囚善く服す明年大審院長を命ぜらる同十二年十月司法大輔に任じ元老院議官を兼ね民法訴訟法審査委員に任ず同十五年勳五等に叙せらる十六年福島高田國事犯事件に付高等法院裁判長を命ぜられ同十九年五月大審院長に任じ勅任官一等に叙せられ同八月七日特旨を以て從三位に叙せらる同九日公用の書類等悉く處理し深宵自殺して死す何の故を知らず谷中墓地に葬る（日々新聞）

タマノ　ミヤ　玉廼宮「エイキヤウニワウ」
タマノヤ　ゴダイキンミハシラ
タマノヤノ　ミコト　玉祖命　始めて八坂

環勾玉を作る後天孫に從て中國に下る玉祖連等の祖なり伊弉諾尊の子にして周防の一の宮なる佐波郡の玉祖神社は此神なり（古事記、日本一宮紀）

タマヒカル　ミヤ　玉光宮　名は敦慶宇多帝第四の皇子醍醐帝の同母弟なり二品親王にして式部卿に任ず延長八年二月二十八日薨ず年四十四

タマヤツ　マサキ　玉松眞幸　舊公卿なり山本實政卿の次男なり明治五年其支流たる玉松操の繼嗣となる幼にして和漢の學を修め本草學國學に長じ殊に先代操の薫陶を受けしと勤からず十七年七月男爵を授けられ正五位に叙せらる二十八年五月貴族院議員に當選し爾來其職に居る四十年五月二十六日京都の自邸に於て病歿す年四十九

タママツ　ミサヲ　玉松操　勤王家なり名は眞弘從四位下侍從山本公弘の長子なり少くして醍醐寺に入り僧となる猶海と號し大僧都法印に任じ僧律を鑒幸せんと欲し榮僧の爲に憎まれ髮を害へ山本穀軒と改め尋て姓を玉松と改む國學を野々口隆正に學ぶ勤王の志あり諸方に戯き近江阪本の茂國寺に隱る住僧操を岩倉具視に介す明治維新具視政を執るに及び操を擢て内國事務權判事に任ず東遷東移及び六師征討の制誥文移を草する筆を授て立ろに成る二年職を辭し從五位下に叙し三年侍讀に任じ世祿二百五十餘石を賜ふ尋て具視開國の說を唱るに及び怒て官を辭し具視と交らず五年二月十五日歿す年六十三洛東靈山に葬る神武天皇建國を紀元となす事及び女官の政事に關係するを禁ずる事共に操の建議に成る具視の功多くは操が畫策する所にして具視は操を推して我が初年の事業は皆彼の力なりと云へり明治廿六年一月廿一日從三位を贈る操精魂强健能く三日の儲食と三日の儲眠をなす國學の門人に三宮義胤物集高見等あり（墓碣銘、井上頼圀氏談）

タマミヅ　ヤヘヱ　玉水彌兵衛　樂燒屋一入の二男なり始て玉水燒の陶器を作る一入の妾は南山城玉水の產なり彌兵衛は其子なり一入死去の後其妾と長男宗入との問睦からず依て妾は幼少の子を懷にして在所玉水に歸り彌兵衛を養育し成長に隨ひ樂燒を仕習はせ玉水彌兵衛といひて茶碗など燒せたり後名を一元と改む一元の子二代目彌兵衛となる此彌兵衛を任齋といふ三代目甚兵衛是なり四代も甚兵衛と曰ひ後樂籍と改む（續遊奚略）

タマムシ　ミノル　玉虫實　陸軍歩兵大尉なり岡山縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第四師團歩兵第九聯隊附として從軍中明治廿八年三月二日清國盛京省北臺子に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タマヨリヒメ　玉依姫　活玉依姫と云ふ鴨の建津身命又の名は大山祇、又は大陶祇、又の名は三島溝樴耳の女母は丹波の伊賀古夜姫と云ふ、玉依日子の妹なり茅渟に住す事代主邂逅して茅渟に至り之と婚す父母其の情人の誰なるを姫に問ふ姫曰く吾が夫常に夜來りて夜去る其の貌を知らずと父母敎へて針と絲環を姫に與へて情人の來るに及て其裳に繼はしむ情人鑰孔より去るの後其の糸綉環を蹤して茅渟山吉野山を過ぎ三諸山に入る其の糸綉環上に三匝を餘す依て其神を呼て三輪の神と云ふ因て生む所の子天日方奇日方命及び姫蹈五十鈴姫及び五十鈴依姫となす（古事記、三輪神三社鎭座次第、二十二社本縁、舊事紀）

タマヨリヒメ　玉依姫　海津見神の女、鷦鷯茅葺葺不合尊之を娶りて神武天皇を生む（古事記、日本紀）

タマル　イナノエモン　田丸稻之右衛門　勤王家なり水戸藩士山田彌左衛門の次男なり名は直允通稱を稻之右衛門といふ後田丸直諒の養子となる天保年中同藩封内の田畝丈量に當り繩奉行となり嘉永二年書院番頭に進み安政戊午の難には同志の士と江戸に魄せ君寃を雪がんとを謀る翌年二月又目付役に轉ず朝廷内勅を藩主慶篤に賜ふに當り主民諸所に屯集し勅旨を奉行し且つ齊昭の罪を釋されんとを幕府に直訴す可しと云へり明治廿六年一月廿一日從三位を贈る操精魂强健能く三日の儲食と三日の儲眠をなす國學の門人に三宮義胤物集高見等あり（墓碣銘、井上頼圀氏談）

タマミヅ　ヤヘヱ　玉水彌兵衛　樂燒屋一入の二男なり始て玉水燒の陶器を作る一入の妾は南山城玉水の產なり彌兵衛は其子なり一入死去の後其妾と長男宗入との問睦からず依て妾は幼少の子を懷にして在所玉水に歸り彌兵衛を養育し成長に隨ひ樂燒を仕習はせ玉水彌兵衛といひて茶碗など燒せたり後名を一元と改む一元の子二代目彌兵衛となる此彌兵衛を任

月軍を進めて日光山に據らんとせしに宇都宮藩士縣勇記の周旋によりて太平山に屯し一舘の檄文を近郷に傳へ徒黨を招く日ならずして來聚する者二百餘人再び筑波山に據り軍艦を集め兵器を作り戰備を整へ自日往來旌旗を立て劍戟を閃めかして憚る所なし有司敢て近づかず鎭りし江戸に注進す幕府之を聞き大に驚き步騎を發し又近國諸藩に令して追討の軍を出さしむ稻之右衛門合戰數度に及び雌雄未だ決せざるに市川弘美等水戸に於て松平頼德と戰ふを聞き先づ市川等の奸徒を平げ後天下に大義を擧ぐ可けれとて俄に山を下り平磯に赴き武田正生と力を協せ屢〻敵兵を破りしが其後頼德照照等幕軍に降るに及び正生と同く兵を率ゐ水曾路より上京す途中敵衆に遮止せられ加賀藩の陣に降り敎賀にて斬らる時に年六十一老母幼子背水戸に戮へられて獄中に死すと云ふ明治二十四年十二月朝廷其忠志を道賞し特に從四位を贈らる（殉難錄稿）

タマル　キクジ　田丸喜久二　陸軍歩兵少尉なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第九師團歩兵第七聯隊附として從軍中廿八年三月十日清國盛京省東揚上に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タマル　トモヤス　田丸具安　伊勢國田丸の城主なり永祿九年四月侍從に任じ右近衛中將從四位下中務大輔に任ぜらる十二年大河内城に據りて信長の兵を拒ぐ北畠具敎の亡ぶるに及びて具安流離す後ち藩生氏郷の妹を娶る氏郷會津に封ぜらるゝに及び蒲戚の故を以て之に附屬し陸奥須賀川の城主となりて三萬石を食む天正十九年七月氏郷秀吉の命を受けて會津城を發足するに際し具安之に從軍して諸案を陷いれ大に功を奏す後ち秀吉の命に因りて三春の城主となり食邑五萬五千石を賜はれり慶長五年家康に小山の軍に從ふ偶〻上國に於て騷亂の起るに際し請ひて國に歸り三成に黨して遠山友政と戰ひ軍敗れて剃髮城を致して弄る亂平ぐに及びて死一等を減じ蟄後に流され七年五月赦されて會津に往き實相寺に籠す（野史）

タマヤ　キサク　玉井喜作　山口縣熊毛郡光井村の人明治十六七年の頃東京に上り醫學に志して大學豫備門に入り後札幌農學校の聘に應じて獨逸醫の

致授となる在職三年遂に職を罷めて札幌に農業を營む然れども資本缺乏の爲め悲境に沈淪し二十四年私に札幌を出て浦鹽斯德に至る尋いで徒歩四比利亞を横斷せんと欲し幾多の艱難を嘗めて遂に伯林に到著し幾もなく伯林の日刊新聞ケルニッセツアイツンクの記者となり日本通信の擔任を爲ぜり爾來苦心經營日獨貿易の發達を圖りて獨力機關雜誌獨文「東亞」を發行す時に三十一年三月なり爾來全力を其經營に注ぎ爲めに日獨貿易の發達に資せしと勘少ならず三十九年九月二十六日遂に異域に於て逝く年四十一

タマキ　タラウベイ　玉井太郎平　陸軍歩兵中尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し歩兵第二十二聯隊附として從軍中三十七年八月廿二日旅順要塞東雞冠山に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タマキ　マサキヨ　玉井方清　長門の鍛工なり刑部左衛門と稱す元祿中の人(新刀辨疑)

タマヨ　タミコ　玉緒「ミヤザキタマヨ」民子「カダタミ」

タミノ　オホビ　民大火　壬申の亂に高市皇子に從て天武帝に伊勢に會す位從五位下たり大寶三年卒す使を遣し正五位上を贈り賜ふ(大日本史)

タミヤ　コタラウ　田宮小太郎　(世俗に戰岐丸龜の人田宮源八の子なり源八人所謂坊太郎)の爲めに殺さる小太郎幼にして國を去り江戸に來りて劍法を學び術長じて後ち國に歸り遂に其の讐を報ふ是に於て其の名四方に聞ゆ然れども小太郎仕を欲せず尊で復た江戸に來り住し年尚ほ壯にして病みて死す墓は上野に在り碑石殘缺して文字詳ならず或は云ふ空仁大德の四字ありと(賞事譚)

タミヤ　サンノスケ　田宮三之介　田宮流の劍客なり名は朝成、後常快と號す長家の子なり子次郎右衛門成常其業を繼き將軍吉宗に仕ふ(武術流祖錄)

タミヤ　ナガカツ　田宮長勝　對馬と稱す池田利隆の臣なり大阪冬の役に片桐且元の士卒敵に遇ひて敗れ走りて宮崎に至り城に入らんことを請ふ時に長勝等拒みて納れず因りて且元の士卒多く死亡す且元之れを德川家康に愬ふ家康乃ち命じて鞫問せしむ長勝對て曰く嘗て之を聞く尼崎は樞要の地なりと故に利隆嚴に禁誡を加ふ夫れ片桐氏の士は綸令殘盡さるゝも臣の闕する所に非らず過て守を失はゞ是れ主公を辱しむるなり故に槃ぐと家康其の答言に感じ更に命じて曰く城外亭あるも一人も敢て出づること勿れと長勝擊劍を善くし田宮拔刀流の奥義を究む後ち仕を辭して紀伊國宣に仕へ(綠八百石を食み剃髮して常圓と法名す(野史、武術流祖錄)

タミヤ　ヘイベエ　田宮平兵衛　田宮流拔刀の祖なり名は重正(一に成致に作る)或は曰く照常なり元治に從て上流の劍を學ぶ後一家をなし田宮流と云ふ(武術流祖錄)

タンアン　タンアン　澹庵「ミヤケタンアン」

タンアン　タンアン　淡庵「クマザハタンアン」

タンアン　タンアン　坦菴「イトウタンアン」

タンエイウ　タンエイ　探幽「カノモリノブ」

タンエフ　湛睿　字は本如俗性を知らず少より凝然に隨て羯磨に從事す雜華海に遊んで哲理圓熟す後嗣に嗣て戒壇院の學頭となる三學並び備りて一衆德の蘊奥を極め且鬼一の掣となるを以て湛海心に之を怨の爲めに殺さる小太郎幼にして國を去り江戸に來りて劍法を學び術長じて後ち國に歸り遂に其の讐を報ふ是に於て其の名四方に聞ゆ然れども小太郎仕を欲せず尊で復た江戸に來り住し年尚ほ壯にして病みて死す墓は上野に在り碑石殘缺して文字詳ならず或は云ふ空仁大德の四字ありと(賞事譚)

タンエフ　淡雅「キクチタンガ」丹霞　播磨手柄山の刀匠四世氏繁の道號なり氏繁を著よ

タンガイ　タンカイコウ　丹崖「タカヰタンガイ」湛海坊　長け六尺に餘り力量衆に過ぎ劍法に上達す鬼一法眼に由緣あるを以て其の業を纘がんと欲す會ゝ義經鬼一の門人となりて兵法の蘊奥を極め且鬼一の掣となるを以て湛海心に之を怨み寶藏を盜み出て逃げ去る義經之を追ふ海心遂に義經を襲はんと謀るに義經を襲はんと謀るに義經を討つべきの旨を得已に劣らざる無棍五六人を隨へ五條に來りて義經の至るを覘ふ義經常の如く笛を吹て天神に詣る是に於て湛海三尺六寸の太刀を拔き擊て之に向ふ手下の者左右より圍み攻む然れども皆な義經の小刀に反擊せられて死す(本朝武功正傳)

タンカウ　ダンカウ　潭香「イシヤタンカウ」

タンカウ　シウオン　斷江周恩　禪僧なり總州常泉寺に住し道譽四方に聞ゆ剃髮南禪和尚に天童に依る一旦徹悟して直ちに入室し解する所を呈す後ち席を法兄信中和尚に繼ぎ法を見性和尚に受る法道大に振ふ晩に總州伊豫の郷に常泉寺を創し其の墓塔と爲る(洞上聯燈錄)

タンガク　ダンギウ　丹壑「クロカハタンガク」

タンギウ　タンギウ　丹丘「アクタガハタンギウ」

タンギウ　タンギウ　探牛「カノタンギウ」

タンクウ　單況　禪僧なり字は無比幼より虎闕和尚に侍して宗說を貫究す延文年中法兄龍泉淬公を勸めて上書して重て釋書の入藏を請ふ旨あり勅許せらるゝ於是諸山の尊宿偈を作りて之を賀す況して亦偈あり曰く日域新に編す釋典の文此れ梵語と唐言とに非ず紫泥時に下りて龍藏に入る五百の高僧至尊に朝すと況編して巨軸となし題して鄂子筋といふ況後孺津の報國寺に住して開山の第一世となる(本朝高僧傳)

タンキャウサイ　タンキョウ　探恭「カノタンキャウ」

タンギョウ　單玉　書人なり設色畫法に住吉法眼に學びて最とも精し其畫世に多からずと云ふ(皇國名畫拾遺)

タンクウ　湛空　字は止信本姓藤原氏左大臣實能の孫なり幼より叡山に上り圓實僧都に隨て剃髮して戒を受く其性明敏なるを以て座主實全に附す年二十を過ぎて諸方を遍歷して深く顯密の敎を研く世稱して無著菩薩の化身となす晩年所學を捨て淨邦を欣求す年五十二にして法然に謁して圓頓戒を受けて專念稱誦す晁沙門堂の明禪と莫逆の友たり互に出離を誓ふ嵯峨の二尊院は法然基業の地なり空移りて敎を弘む又楞嚴、雲林二院を搆て同志の衆を結び二十五の三昧念佛を修す

公剛士庶歸信するもの雜沓す法然謫行する時空又隨て讃岐に至る常て船窗にあり紙に糊し中を空にし然の眞容を模造し歸りて二尊院に置く建長五年七月二十二日西を望み念佛して終ふ年七十八なりき(本朝高僧傳)

タンクワワク　丹鶴「ミズノタダヒデ」

タンケイ　湛慶　大佛師運慶の男にして尾張法印と稱す東寺南大門四方力士の像を造る絕妙と稱せらる湛慶彫刻に巧なるのみならず善く佛像を畫く頼經卿の仁王經を六波羅に修めらるゝや湛慶其の本尊に用ゐる料にとて大安寺釋迦の像を模寫したり(東寶記、玉葉、工藝鏡)

タンケイ　タイゲイ　澹兮「キザハテンドウ」

タンゲツ　探鯨「ツルザハタンゲイ」

タンゴ　湛月　江州彦根の藩士通稱橋本儀右衛門と云ふ俳諧を許六に學ぶ初景山と號し後雲林館と稱す(俳諧人物便覽)

タンゴツ　タンゲツ　彈月「サカホサダ」

タンゲン　タンゲン　探源「カノタンゲン」

タンゲン　タンゲン　探元「キムラタンゲン」

タンゲン　タンゲン　探元「ダイニタンゲン」

タンゴ　シチラウザエモン　淡軒「タケノウチタンケン」

タンゴ　丹後七郎

左衛門　(或は云ふ杉山丹後之丞と同人なりと該傳參看すべし)　元龜天正間の人なり音曲を以て鳴る今の肥前家の祖是なり(寛文中の肥前より四世の祖なり豐臣秀吉の妻(或は云ふ信長)嘗て侍女お通を以て長生殿十二段の戲曲を作らしめ七郎左衛門及び橋本筑後をして之に譜を下して唱和せしむ淨瑠璃節此に權輿すと云ふ(或は云ふ賢者角澤檢校又た岩船檢校之を謠り出すと)故に今に至りて長生殿十二段を以て肥前家の得技と爲すと云ふ(書々物語、江戸名所話)

タンゴノ　ジジウ　丹後侍從「タヒラタダフサ」

タンゴノ　ツボネ　丹後局「タカシナヒデコ」

ダンゴモリ　キウベエ　團子森久兵衛　陸奥安達郡の隱民なり勇敢にして義氣を尙べり少なる時奴兵を以て安達の島山氏に仕ふ島山義繼伊達正宗と戰て死し其の要塞名氏餘衆を收めて二本松城を保つ正宗之を圍むと雖だ急なり城兵已に疲れて復た闘ふ可ず是に於て問ふ以て正宗を刺さんと欲し其の人を索て闘子森を得たり之に謂ひて曰く一緒人の敢て死せざる所の者は讐未だ報ぜず辱未だ雪がざれば也然れども兵寡く城小にして存亡旦夕に懸る晉力之を如何んとすること莫し日夜焦心切齒以て讐を報ぜんことを思へども計の出づる所なく已むを得ずして斯の圖を建て問を得て正宗の軍に入り以て刄を其の胸中に刺さんと欲す顧ふに今まで使ふ可き者なし幸ひにして使ふ可き者唯ゝ汝一人のみ汝能く吾が爲めに之を致さんか果して然らば則ち家の存亡は汝の身に在りと因て歔欷して語ること能はず闘子森慨然泣し目を拭ひて曰く賤臣顧問なくして尙ほ能く大家に辱知せられ命を受けて此に至る死すとも且つ疥ちず敢て身を殺して之を致さんと遂に刀を提げて往く是より伊達の軍夜毎に驚くこと多し久兵衛正宗の所在を狙ひて出入すること十六たび入れば則ち刄轍ち血ぬり手人首を提ぐ一軍之が爲めに動搖す而して正宗に中ること能はず正宗久兵衛を索むること亦た急にして得ず既にして正宗二本松に克ちて蘆名を攻め會津に走らす會津亦た尋で滅す久兵衛寬に意を得ず退きて郷の杉田に耕す後ち正宗陸奥守と爲り江戸に往くに及び路、杉田を過ぎ之を召す久兵衛使者に辭して曰く奥州の我を召すは必ず當に吾を肚とするならん吾老いたり今召見すると雖も何の益かあらんと固く辭して行かず使者復た至る已むを得ずして之に從ひ門を出でんとし又た遂に辭して曰く卿等今未だ其の故を悉さず故に吾を强いて召す吾義として固と奥州に見ゆ可らず其の故は唯ゝ奥州と我と之を知るのみ我は匹夫なり豈に大人に私怨あらんや然れども人の爲めに刄を擬すること數次なり奥州は天授なり當る可らず然りと雖も我れ宿心を懷く荷も目瞑せざれば奥州に近づく可らず奥州亦た我を爲して馬前に近かしむ可らず請ふ是を以て之を辭せんと正宗之を聞きて曰く壯なるかな唯ゝ其の意に任せんのみと竟に復た問はず(事實文纂)

タンサイ　坦哉「コマクワンサイ」初世

タンシ　タンシウ　澹齋「ミウラクワウクワク」

タンシ　タンシウ　淡齋「タニカハシセイ」

タンシ　タンシウ　淡齋「ムラシタンサイ」

タンシ　タンシウ　澹齋「タケハナランコク」

タンシ　タンシウ　澹齋「イトウタンサイ」

タンシ　タンシウ　澹齋「ヲカタンサイ」

タンシ　タンシウ　淡窓「ヒロセタンサウ」

タンシ　タンシウ　澹窓「ソノベハウケイ」

タンシ　タンシウ　探索「ツルザハタンサク」

タンシ　タンシウ　探山「ツルザハタンザン」

タンシ　セイカイ　丹山青海　翠田燒一派の陶工なり(工藝志料)

ダン　サエモン　彈左衛門尉　長吏なり其の先は秦氏武虎と云ふ平正盛の女を娶ひ而も其の威らざらんことを慮り之を察はんとす正盛之を知り武虎を捕へて之を誅せんとす武虎走りて關東に之く平氏の權は關東に及ばざるを知ればなり裔頼兼鎌倉に居り頼朝に仕へ其の朱印を賜ふて世々關東八州捕吏の支配を命ぜらる德川氏に至り其の裔武州府中に出て舊の如く職を執らんことを家康に乞ふ許さる江戸開都の後淺草に住し世々年始には廐上下帶刀にして老中に謁し例として踞人取扱の事及び斃類の死屍取扱を司る(環窗記聞)

タンシ　探志　俳諧師なり近江膳所の人其の姓氏及び歿年詳かならず(俳林小傳)

タンシウ　タンシウ　澹州「スズキセンシウ」

タンシウ　タンシウロウ　探秀「カノクニノブ」

ダンシ　セイケイ　淡洲樓「タテカハエンバ」團芝清馨　丹波圓通寺の住僧なり姓は源佐々木氏の族なり年十三父母を喪ふ因て深く浮俗を厭ひ總寧寺に投じ十五にして剃髮す偶ま六組禪經を閱す中に曰く心迷へば法華に尊ぜられ心悟れば法華を尊ずと雖ども心未だ悟らず何を以て父の德に酬ひんと棄てゝ叢林に參ず十餘年を踰えて悟らず後ち大透の道を聞き往て參ず未だ旬日ならずして竟に深奥に至る天文壬子歟を接て住持す永祿癸亥四月十日逝す(洞上聯燈錄)

タンシン　タンシウ　探信「カノタンシン」但唱　滿巖と號す高輪如來寺の開

基たり寛永十八年六月十五日化す乃ち寺中に葬る事蹟は行實事跡合考に詳かなり（江戸名家墓所一覽）

タンジャウ　探當「カノタンジャウ」
ダンジャウ　シンワウ　彈正親王「シゲアキシンワウ」

タンシュン　探春「ロクメイタンシュン」
タンシュンサイ　探春齋「コシバモリナホ」
タンシュンサウ　探春莊　奇人なり名は隆宇は文伸、江戸の人京師に遷りて賈に隱る家甚だ貧而れども詩を作りて自適す頗る詩才あり人となり謙遜にして名利に近かず故を以て人知るもの稀なり僧六如と親み善し詩を作る毎に宇の稿當ならざるあれば輒ち之を六如に質す六如の云ふ所若し己が意に稱へば喜色顏面に形はれ而し意に稱はざれば傲然頭を掉りて從はず天明戊申螢下大に災す家蕭瑟として身益々窮すれども敢て之を以て憂となさず恒に書畫帖を懷し諸名家をして之に書せしめ人に語りて曰く是れ我が別墅なりと優遊自ら樂しむ尋で疾を得て歿す著はす所春莊詩稿あり（續近世叢語）

タンショ　澹所「ヒラヰタンショ」
タンジョ　澹知「キクチタンジョ」
ダンスヰ　團水「ホウデウダンスヰ」
タンスヰ　丹水　俳人なり東湖の門人にして深川に住す姓氏及び歿年詳かならず（俳林小傳）

タンセイ　澹盛「カノモリノブ」
タンセウ　湛照　高僧なり東山と號す備の中洲の人講肆に浮遊し懸日の化熾んなりと聞き乃ち衣を更て東福寺を領せしむ湛照諸徒に讓る四年藤丞相懸日の託を以て無請す湛照已むを得ず第二世となる然れども勇退して纔かに法義を充すのみ正應帝詔して宮に入れて道を問ふ湛照萬壽寺を權す帝寺座を賜ふ四年八月晏然として化す乃ち閣離して骨を收む第七の朝其の徒に骨を分たんことを乞ふ者あり函を開くに舍利燦然として數ふ可らず初め正念（大休）の訃至るや或人の曰く大休火浴して舍利を流布すと奇なるかなと湛照の曰く然り我れ亦た他日子の奇なるかなの一圓を費さんのみと此に至りて世湛照の先知を歎す圓通寺に塔し諡號を寶覺禪師と賜ふ（元亨釋書）

タンセウケン　湛笑軒「コウシンソウサ」
ダンセツ　團雪　江戸の俳人なり二世紫鳳の門人村松氏にして初山曉と云ふ安永八年正月四日歿す年四十九（俳諧人物便覽）

タンセツ　探雪「カノタンセツ」
タンセツ　探泉「ツルサハタンセン」
タンセン　探仙「ヨシムラタンセン」
タンセン　探船「カノタンセン」
タンセン　儋叟「セイダタンソウ」
タンソウ　坦叟「コマクワンサイ」二世
タンソウ　淡々「マツキタンタン」
タンタン　丹治信正　字は子直、武州中山の人なり大父家範は北條氏に事へ父信吉は水戶家に事へ信正は德川氏に仕ふ大阪の役に信正秀忠に屈從す彼の軍の潰ゆるや騎兵三百奮戰して走る我卒三十許人甚勢に畏懼して廐田曜に伏す信正叱して曰く汝等敵を見て伏す何ぞ失れ怯なるかと是に於て衆卒鳥銃を連放す信正單騎之を追擊す寛永元年特に命じて江戸の大夫となし父と共に政を乘らしむ尋で從五位下に叙せられ東市正と爲り遂に父の祿を襲ぐ政に任ずる年あり既にして軟脚疾を患ふ是に於て慶安五年請ひて致仕し蕪髮して風軒と號す信正資質順和寧靜魁偉膂力人に過ぐ常に古風を慕ひ最も神道を崇ぶ講武の暇時に和歌を詠ず又た嘗て幼孫の爲めに書を著はす上は天理より下は治國に至り終に兵は亡器已を得ずして之を用ふるを謂ふ卒する年七十八（軍實文彙）

ツルマル　丹頂庵鶴丸「ショウテイイジュザン」

タンチャウアン　湛澄　京都報恩寺の住僧なり字は染間、別に向西子と號す未だ生緣氏族を詳かにせず智行兼備にして尤も國書に精し貞享三年三部假名鈔諡註圓光大師の和歌を註す夢に擬ひ三十六なり集といふ又頼阿の淨土長歌註、三部鈔要解、往生至要決要解、『葉葉和歌抄、女人往生傳、有鬼論等無慮若干部を著はす佛祖の遺訓を擧揚して吉水の正流を揮灑す安心起行の要盡さざるなし正德二年二月疾に疲ぬ二十九日勢湯の質洲が寄する所の念佛奇特集を訂正し自ら序文を製し門人信智をして謄寫せしむ之を洲公に贈し諸子に永訣す爾後勵聲念佛し偈を書し明日昧爽寂然として逝す年六十二（東國高僧傳）

タンチョウサイ　丹鳥齋「オクムラマサノブ」
ダンテンモンイン　談天門院「フヂハラタダコ」

タンネイ　澹寧「イヒヨカギサイ」
タンネン　澹然「カノモリノブ」
タンノ　ケイザウ　丹野慶藏　陸軍工兵中尉なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し第一師團工兵第一大隊附として從軍し旅順攻圍軍に參加し三十七年八月二十日水師營附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タンノ　シゲヨ　丹野重雄　陸軍歩兵大尉なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第三十六聯隊附として從軍中三十七年十一月二十六日旅順口要塞二龍山に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タンパク　澹泊「アサカタンパク」
タンバンパク　澹伯「タキケイザン」

タンバ　シゲマサ　丹波重雅（雅一に明に作る）名醫なり康賴の子典藥頭、權鍼博士、右近衛過ぐ常に古風を慕ひ最も神道を崇ぶ講武の暇時に和歌を詠ず又た嘗て幼孫の爲めに書を著はす上は天理より下は治國に至り終に兵は亡器已を得ずして之を用ふるを謂ふ卒する年七十八（軍實文彙）

タンチャウアン　湛澄　京都報恩寺の住僧なり字は染間、別に向西子と號す未だ生緣氏族を詳かにせず智行兼備にして尤も國書に精し貞享三年三部假名鈔諡註圓光大師の和歌を註す夢に擬ひ三十六なり集といふ又頼阿の淨土長歌註、三部鈔要解、往生至要決要解、『葉葉和歌抄、女人往生傳、有鬼論等無慮若干部を著はす佛祖の遺訓を擧揚して吉水の正流を揮灑す安心起行の要盡さざるなし正德二年二月疾に疲ぬ二十九日勢湯の質洲が寄する所の念佛奇特集を訂正し自ら序文を製し門人信智をして謄寫せしむ之を洲公に贈し諸子に永訣す爾後勵聲念佛し偈を書し明日昧爽寂然として逝す年六十二（東國高僧傳）

タンチョウ　丹頂「ツルマル」

タンセイ　澹盛「カノモリノブ」
タンセウ　湛照　高僧なり東山と號す備の中洲の人講肆に浮遊し懸日の化熾んなりと聞き乃ち衣を更て東福寺を領せしむ湛照諸徒に讓る四年藤丞相懸日の託を以て無請す湛照已むを得ず第二世となる然れども勇退して纔かに法義を充すのみ正應帝詔して宮に入れて道を問ふ湛照萬壽寺を權す帝寺座を賜ふ四年八月晏然として化す乃ち閣離して骨を收む第七の朝其の徒に骨を分たんことを乞ふ者あり函を開くに舍利燦然として數ふ可らず初め正念（大休）の訃至るや或人の曰く大休火浴して舍利を流布すと奇なるかなと湛照の曰く

タンバ　ゼンソウ　丹波全宗　醫者なり近江の人丹波康賴の後なり初め叡山に登りて僧と爲り後ち浮屠を脫して醫術を一溪道三に學び頗る名を世に博せり關白秀吉聳遇殊に厚く常に左右に近侍し冒ふ處必ず驕かる天正十三年七月秀吉爲に奏請して法印に叙し施藥院使に任じ始て昇殿を聽す仍て施藥院を氏とす、初め孝謙帝の時勅して院を創置す普く貧民の疾苦を濟ふ後此の制廢すること久し秀吉奏して之を再興す是に於て全宗大に藥局を開きて天下病疾の人を招集し藥を施して其の病を治す全宗又た德運軒と號す文祿年間秀吉に請ひて延曆寺の僧に祿五千石を賜ひ以て一山に充給す後ち慶長中更に坂本等の田を賜はり尋で藥樹院を興し僧正家盛をして之が第一世たらしむ延曆寺再興の功は全宗興りて力多きに居る全宗父茶法を千利休に學ぶ慶長四年十二月十日歿す京都上寺町十念寺に葬る子秀隆嗣ぐ（野史、鑒定便覽、皇國名醫傳）

タンバ　ソウハク　丹波宗伯　醫者なり本と近江の人三雲三郎左衛門貪隆の子にして醫丹波全宗に養はる因て丹波氏を冒す宗伯幼にして怙を喪ひ一鳴宗虎と云へる者に鞠養せられ就きて醫を學ぶ又丹波に赴きて如意庵に師事す書を讀む年あり藥を卒て京師に歸り撮要集を著はす時に宗虎老いて子なし姻姬の好に因り宗伯を以て嗣と爲し悉く醫術を傳へ藥方を授く而して全宗の子秀隆歿するに及び全宗宗虎に請ひ宗伯を以て嗣と爲す是に於て太閤秀吉奏して施藥院使に補し法眼に叙す爾後世世其の術を宜んず子雅忠（皇國名醫傳）

タダヤス　丹波忠康　醫者なり典藥頭となり穀倉院別當を兼ぬ（大日本史）

タンバ　ツネモト　丹波經基　朝廷の醫官なり典藥頭、權侍醫、女醫博士、施藥院使、兼右兵衛佐、圖書頭を歷る文明二年右大將藤原良通癲を患ふ經基桂心湯を作り疾の發作に臨みて之を服せしむ亦た附子散を作り疾の發作に臨みて之を服せしむ亦た附子散を作り疾の發作に臨みて之を服せしむ亦た附子散

心方三十卷ル著はす其の書醫唐方書百餘家を鉤撫す每門發するに東元方が病源餤論を以て主療諸方之に次ぎ本草藥性明堂孔穴養生服石食餌等に至るまで具戰せざるなし稱して本邦方書の府庫とす永觀二十一年書成りて奏進し又た以て諸生に課試す子孫奉じて家法となす二子あり長は重雅次は清雅（皇國名醫傳）

タンヘウサイ　炭瓢齋「オホノシウワ」

タンボク　探牧「カノタンボク」

ダンボク　潭北「トキハタンボク」

ダンマツマ　ダムマツマ　面打なり姓名詳ならず片假名にてダムマツマと彫付けしのみ豐臣時代の人にして當時の名手五人中の一なり一說に長命德右衛門の伯父なりといふ（假面譜）

タンメイ　潭明「ニシヨリセイサイ」

タンヨウ　丹容「マスヤマモリマサ」

**タムラ　イチザウ　田村一三　陸軍通譯たり宮崎縣宮崎郡大淀村字中村の人なり初め宮崎高等小學校に敎鞭を執りしが後東亞同文書院の縣費生たらんと欲し屢〻人を介して交涉せしも果さず偶〻廣瀨の人安藤某氏北清より歸省したるを聞き之に面して其宿志を遂げんことを議る安藤某復其志の拔く可からざるものあるを察し其請を容れ三十五年五月同伴して淺清の途に上る既にして北京に入り東京學堂の日本語敎師となり傍ら支那語學を研究し同僚松崎保一及び冲禎介等と往來す後禎介新に文明學校を起すに及び更に該學堂の敎員に轉ぜり三十七年二月日露の國交斷絕するや他の五名と共に陸軍通譯に擧げられ軍事上の秘密重要なる使命を帶びて北京を發し北向す一行皆胡服辮髮して寧を變じ深夜潛に北京を出て鳳雪を犯し危難を冒しつつ深く朔北不毛の地を經て四月八日東索より敵の後方齊々哈爾附近に出張し其輸送の途を杜絕せしめんが爲めに雅關河の鐵橋を破壞せんと企つ偶〻敵の巡邏隊の發見する所となり他の四名と共に纔に危難を脫し辛ふじて東索古の一部落庫倫河に遁れ以て再擧を圖らんとしたりしも土人の慘殺に遇ひ遂に不過に斃れたり年二十三時に四月五日なり日露戰役終結して志士論功行賞の事あり四人と共に勳六等に叙し單光旭日章及金一千圓を賜はり弔祭及扶助料特別賜金等下賜せられ特旨を以て靖國神社に合祀せられたり

**タムラ　イヨザウ　田村怡與造　陸軍中將なり安政元年十月十日甲斐國東八代郡相與村に生る明治八年入陸軍士官學校に入學し西南の役に生徒として出軍して功あり十二年少尉に任じ熊本鎭臺附となる十五年四月少兵大尉となる二十年二月獨逸留學を命ぜられ二十二年十一月少兵少佐に任じ參謀本部第一局員に補せらる二十五年四月露國スタニスラス第二等勳章受領二十六年海軍々令部第一局員に兼補す二十七年八月步兵中佐に任じ第一軍參謀となり出征す一日策戰計畫に就き小川參謀長と議合はず激論の後遂に容れられざるを以て無斷廣島に歸り大本營に到り川上參謀次長に面して自己の作戰計畫の可なるを說く川上次長之を容れ山縣司令官に交涉して無斷歸途に對し何等の處分なからしめたりといふ同二十八年一月步兵第九聯隊長に補し同九月獨逸國公使館附仰付けらる同十月二十七八年戰役の功四級に叙し金鵄勳章年金五百圓及び勳光旭日章を賜ふ三十年六月獨逸公使館附免せられ參謀本部第二局員仰付けられ同十月步兵大佐に昇進し參謀本部第二部長に補す三十一年一月學漏西國赤鬢第二等勳章及瓦敦堡國王冠第四等勳章受領同二月白鬢たり尋で命を受けて藥を伊豆諸邊に采る門人に平賀國倫、鈴木素行あり著はす所度量小識、要藥修治錄、豆州諸島物產圖說、物品靈考等あり（皇國名醫傳）

タムラ　チャウゲン　田村長元　醫者なり丹波氏と宗を同うす世〻丹波に居る長元始めて京師千本に徙り御醫に擢んでらる世に千本典藥と稱す子宗圓宗圓の子長久、長久の子長慶、長慶の子長昌、長昌の子宗仙、皆な業を承く而して宗仙尤も名あり北條早雲の辟に應じて相州に赴く子長榮安栖軒と稱す繼て北條氏に仕ふ德川家康其子長傳を辟して醫官とす長傳の子長顯、長顯の子長祇並に法印に叙せらる安栖を以て通稱とす（皇國名醫傳）

タムラ　トウケイ　田村東溪　畫人なり名は蕃秀字は長鬧東溪は其號、畫法精密にして又描金を爲すに巧みなり當時其名最も高し（扶桑畫人傳）

タムラ　テンワウ　田村天皇「モントクテンワウ」

ふ文化中の人（大家人名錄、俳林小傳）

タムラ　オトゾウ　田村音藏　勤王の志士なり長藩の士諱は三宅氏出て田村氏の嗣となる初め青木周輔の門に入りて軒岐の術を學び後江戸に上り伊藤玄朴の弟子となり遂に其塾長となる性勇壯にして節義を尙ぶ久坂義助等と深く交を結び力を勤王に盡す東西に奔走して鄕處あらず元治元年七月十九日長藩士櫪を京師に起すに際し之に與みして義助と共に鷹司邸に入り卒に邸內に死す年二十九（甲子殉難士傳、殉難錄稿）

タンラクサイ　モリトシ　探樂齋守俊　狩野派の畫人なり柳島妙見にある三浦大助の額を畫く（東都社寺額面略記）

タムラ　ゲンサミ　田村玄佐美　陸軍步兵大尉なり福島縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團步兵第十六聯隊附として從軍中三十七年七月十七日清國盛京省石門嶺附近に於て戰死す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

タムラ　ゲンチャウ　田村元長　德川幕府の醫官なり名は善之、西湖と號す元長は其の通稱、江戸の人藍水の子なり父の職掌を繼ぎ寬政中進みて內直醫たり尋で命を受けて藥を伊豆諸邊に采る門人に平賀國倫、鈴木素行あり著はす所度量小識、要藥修治錄、豆州諸島物產圖說、物品靈考等あり（皇國名醫傳）

タムラ　チャウゲン　田村長元　醫者なり丹波氏と宗を同うす世〻丹波に居る長元始めて京師千本に徙り御醫に擢んでらる世に千本典藥と稱す子宗圓宗圓の子長久、長久の子長慶、長慶の子長昌、長昌の子宗仙、皆な業を承く而して宗仙尤も名あり北條早雲の辟に應じて相州に赴く子長榮安栖軒と稱す繼て北條氏に仕ふ德川家康其子長傳を辟して醫官とす長傳の子長顯、長顯の子長祇並に法印に叙せらる安栖を以て通稱とす（皇國名醫傳）

タムラ　トウケイ　田村東溪　畫人なり名は蕃秀字は長鬧東溪は其號、畫法精密にして又描金を爲すに巧みなり當時其名最も高し（扶桑畫人傳）

タムラ　テンワウ　田村天皇、モントクテンワウ

タムラ　ネイガ　田村寧我　松江藩の儒者にして名は令終字は士則通稱彌一兵衛水谷基命の四子なり男田村光武の養子となる幼にして岐嶷詞藝に長ず既にして關山酉山と相共に明馬鄕諸家の說を講じ尤も思を三藏論語に鄭す四十餘にして門人大に進む人か敎ふるに躬行を主とす嘉永四年七月朔歿す年八十二（日本敎育史資料）

タムラノ　ミカド　田邑帝「モントクテンワウ」

タムラ　ヒトシ　田村等　陸軍步兵少尉なり高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ第十一師團步兵第四十四聯隊附として從軍中廿七年十月廿日旅順要塞東雞冠山附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

タムラ　マサアキラ　田村正明　通稱平太左衛門、久左衛門の子なり寬政九年山內貞昌に代り藩の敎授となる後大目付となり更に用人に轉ず天保十二年歿す（日本敎育史資料）

タムラ　マサノリ　田村正儀　陸軍三等獸醫なり東京府出身にして明治廿八年征臺役に於て近衛野戰砲兵聯隊第二大隊附として出征中風土病に罹り同年九月二十八日彰化第二野戰病院に於て死去す

タムラノ　ワウジ　田村皇子「ジヨメイテンワウ」

タムラ　ムネアキ　田村宗顯　清顯の族、清重の子なり初め孫七郎顯季と稱す天正十四年十一月清顯卒するに及び嗣なし清顯始め相馬高胤の女を娶り子なきを以て弟宗顯を養ひ嗣となさんと欲す宗顯千石森に戰死するに及び諸士議して孀婦を以て主と爲んとす族臣月齋顯廣梅雪顯元及び右衛門顯綱本顯氏等四人清顯の遺囑を受けて曰く清顯嗣なくんば家を擧て伊達正宗に委附し其の子を以て田村氏を承けしめんと是に於て月齋顯氏遺言を申べ正宗に告らんと欲す梅雪顯綱は不其臣逸に感を爭ふ梅雪等高胤の子義胤と通じ又佐竹岩城會津の派士を聚て兵を擧ぐ天正十六年四月月齋正宗に告て曰く今諸將叛く者多し公若し來らざれば國人皆相馬氏に屬せんと正宗便ち發す五月三春の群臣相議して曰ふ相馬は舅なり伊達は甥なり勢兩ながら相從ひ難し共に之を辭するに如かず衆皆然りとなす然れども孀婦既に義胤を招く顯氏之を知り悉く兵を收め義胤を招く顯氏之を知り悉く兵を收め馬を斃す義胤偉に免る孀婦も亦中村に奔る十三日正宗至り諸城を降す是月大越顯時嘩く月齋之を伐て克たず九月月齋正宗に請て孀婦を逐ひ顯季を初代となし梅雪等の黨三十八人を逐ふ二十六日顯季城に入る正宗己の諫を授け宗顯に改む天正十七年義胤佐竹氏等と來り侵す宗顯援を正宗に乞ふ最上氏の兵亦た至る敵皆退く顯時使を遣し岩城の二將を斬り復歸せんと請ふ宗顯之を許す事顯れ岩城に誅せらる正宗兵を遣し梅雪等の小野城を攻む岩城常隆使を遣し之を宥さんと請ふ正宗之を許す十月宗顯正宗に從ひ須賀川を取り矢田部橫田の地を畧す十六年宗顯城邑を失ふ正宗之を收め養ふ初め清忠の女正宗に適き忠宗を生む其の二男顯長を以て立て、田村氏の後と爲す子孫世〻侯たり（野史）

タムラ　ヤスノリ　田村康憲　陸軍步兵大尉なり宮城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備步兵第五十一聯隊附として從軍中三十八年三月九日清國盛京省蛇家屯戰鬪の際負傷し後又病に罹り三十九年七月十七日自宅に於て死去す

タムラ　ランズキ　田村藍水　德川幕府の醫官なり名は登字は玄臺元雄と稱す姓は坂上江戸の人世〻醫を業とす交圃豐宗宣と稱す上古紀傳の學を好み書數種を著す藍水少にして本草を以て名あり寶曆中幕府學僕官となす時新に製參所を建つ藍水命を受け又毛經野奧の諸州に往き人參を買はし其の事を管す又毛經野奧の諸州に往き人參を買はし初め朝鮮國人參を幕府に獻ず將軍吉宗命じて之を日光山の初め對州俵又六根を獻ず俵又六根を下に擇種せしめ數歲にして三たび其地を移し始て生殖を得たり乃ち諸州の民を募り益〻之を種えしむ果株繁息五百萬に及ぶ藍水の製する所の熟參一擧千有餘本を藥贖ひ難きに苦まず藍水采藥三十諸州甘藷、白河附子、白牛膝、芒硝及火浣布を經涉す其人參甘藷、白河附子、白牛膝、芒硝及火浣布、綿羊等に於て尤發明する處多し云ふ著はす所參製秘錄、人參耕作記、人參譜、竹譜、甘藷製造傳、琉球產物誌、木綿培養傳、藥肆人參類集、醋泉群瑞說、日本諸州藥譜等あり安永五年三月二十三日江戸に歿す淺草北寺町眞龍寺に葬る（皇國名醫傳）

タムラ　エンジラウ　田村圓治郎　陸軍步兵中尉なり巖手縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團步兵第三十一聯隊附として從軍中三十八年三月六日清國盛京省魚鱗堡に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ダンリウ　勇龍「オホヲカタツ」

ダンリン　探林「カノタンリン」

ダンリン　クワウゴウ　檀林皇后「タチバナナカチコ」

ダンリンケン　談林軒「タシロショウイ」

ダンリャウ　探梁「マツバラタンリヤウ」

ダンリャウサイ　探良齋「キクヲカミツマサ」

タンレイ　丹靈「カハキダタンレイ」

タンレイ　ソチュウ　丹嶺祖衷　賀州寶圓寺の住僧なり丹嶺は其の號若州佐田鄕の人父は田邊氏年九歲清芳叟公に投し驅烏となる十二歲のとき人の法語を聽き宗門の事あるを信ず十六遊方し諸名宿に歷參す皆な與はず後ち月曦白嶽師の名を聞き徑に往て之を扣く曦付するに道要を以て又乃ち辭して江の深淸村に於て庵を建て辨道す一日般若心經を論じて省すれども猶足れりと爲さず孜〻勤勉す城州平尾山に在りし時始めて大徹す即ち寶圓に歸り所解を呈す曦之を可とす後ち總持寺に出世し若の發心芳春寺に歷主す濃州加納の城主丹州の刺史松平氏聘して全久寺に遷し脈て參の龍溪を領せしむ岡崎の城主左金吾水野氏第宅に迎へて法要を咨詢す待遇最も渥し加州の大守前田氏遠く道風を聞き寶圓を以て請ふ共住すること多年己に應接倦み丹波の小尾山に隱れ慈德寺を創め先師曦老を以て始祖となす又法華寺を中の臺に營み之に移る寶永七年七月十六日逝く年八十七（洞上聯燈錄）

タンワウ　單王　狩野派の畫人なり狩野元信の畫風を嘉ひて彩色墨共に巧なり（扶桑畫人傳）

**タンエ　湛慧　沙門湛慧又理性上人と云ふ二位中將忠嗣の息なり正覺上人の淨土門に入り二尊院四代

の住職となる正慶元年五月廿九日入滅（二尊院過去帳）

タンエン　探圓「カノタンエン」

タンエン　探淵「カノタンエン」

タンエン　淡淵「ナカニシタンエン」

タンエン　澹淵「オホタセイサイ」

タンエン　淡園「アキモトシスキ」

タンヨウ　坦翁「ヒラカハタンヨウ」

タンヨウ　嘽翁「カリヤエキサイ」

タメイヘ　爲家　橘姓攝津の刀匠にして爲康の門人なり貞享年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメイヘ　爲家　備前長船の刀匠にして保弘の子正中建武年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タメイヘ　爲家　備中背部松山の刀匠にして大永年間の人なり河野興太郎と稱す青江爲次の末裔と云ふ（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメイヘ　爲家　河野氏理兵衛尉と稱す備中背部の刀匠にして三郎兵衛國重の弟なり背部水田と稱す寛永年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）二世爲家は河野興太郎と稱す寛文年間の人備中背部に住す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメイヘ　爲家　河野興四郎と稱す備中背部の刀匠にして二世爲家の弟なり延寶年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメイヘ　爲氏「フヂハラタメイヘ」

タメウヂ　爲氏　河内の刀匠にして有氏の子寛仁長久年間の人（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメウヂ　爲氏「タクマタメウヂ」

タメカツ　爲勝　通稱九藏後太左衛門に改む陸奥會津の刀匠にして下坂爲康の子なり寛永の末年保科家の刀匠と爲り元祿三年歿す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメキヨ　爲清　大和の刀匠にして建武比の人（古今鍛冶銘早見出）

タメキヨ　爲清　伯耆の刀匠にして眞綱の子なり天祿年間の人或は云眞綱の門人にして仁壽齊衛年間の人或は眞守の門人なり或は横瀨三郎太夫と稱すと又云寛仁比の人にして大原新大夫と稱すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメキヨ　爲清　伯耆の刀匠にして大原眞守の末孫横瀨三郎太夫と稱す北條時賴の刀匠建長比の人なり（古今鍛冶備考）

タメキヨ　爲清　備前の刀匠にして元暦比の人或は云永保比の人なりと又云長船宗依の子にして長元比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タメキヨ　爲清　備前の刀匠にして文保年間の人或は云長船宗仲の子にして建長比の人と又云延文比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメキヨ　爲清　備中青江の刀匠にして應永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメキヨ　爲清「ニデウタメシゲ」

タメキヨ　爲精　通稱清助後甚兵衛と改む陸奥會津の刀匠にして下坂氏爲永の子なり寛延年間の人明和七年歿す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメクニ　爲國　備前福岡の刀匠にして元暦比の人或は云定則の三子にして則宗の弟保安保延年間の人或は永保比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメコ　ナイシンワウ　爲子内親王　醍醐帝の妃なり光孝帝の女、元慶八年姓淳朝臣を賜ふ寛平三年内親王と爲る醍醐帝譲を受け宮に入れ三品を授け妃と爲す勸子内親王を生む昌泰二年三月薨ず帝事を親ざること三日中納言藤原國繼を遣し家に就て宣制し一品を贈る（大日本史）

タメサダ　爲貞　山城の刀匠にして仁治年間の人なり散位永昌と同人なりと云ふ或は云元暦比の人にして醫の磨工なり或は爲眞と同人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タメサダ　爲貞　相模山内の刀匠にして建武比の人（古今鍛冶銘早見出）

タメサダ　爲貞　備前長船の刀匠にして元應比の人なり（古今鍛冶備考）

タメサダ　爲定　備前長船の刀匠にして是宗の二子正慶建武年間の人（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメザネ　爲眞　山城の刀匠にして承元年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメシゲ　爲重「ニデウタメシゲ」

タメスケ　爲助　伯耆の人にして爲吉の子古刀の鍛工なり或は云天慶比の人或は治安比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメスケ　爲相「フヂハラタメスケ」

タメスケ　爲隆　通稱大吉後甚左衛門と更む陸奥會津の刀匠にして下坂氏爲精の子なり明和年間の人天明五年歿す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメタカ　爲隆　根附師なり喜多右衛門と稱し尾州名古屋本町八丁目に住す一流み彫出ぜり人物の衣紋に唐草を堆く彫み上し等尤も奇勢なりと云ふ（裝劍奇賞）

タメチカ　爲近　備前長船の刀匠にして爲貞の門人曆應年間の人或は云爲隆の子にして延文比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タメチカ　爲近　備前の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメツグ　爲次　美濃不破郡の刀匠にして姓は藤原應安年間の人或は云ふ亦山城に住すと（古今鍛冶銘早見出）

タメツグ　爲次　通稱太左衛門後甚兵衛と改む陸奥會津の刀匠にして下坂氏爲利の子なり元祿七年家督享保五年歿す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメツグ　爲次　越中の刀匠義弘の門人なり或は云ふ後美濃不破郡に移る爲繼と同人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメツグ　爲次　備前の刀匠にして建武比の人（古今鍛冶銘早見出）

タメツグ　爲次　備中青江の刀匠にして守次の子なり延暦年間の人或は云承久比の人にして亦備前に住すと又云次家の門人にして建永比の人或は次忠の子にして正和比の人同名二世に連ぶと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タメツグ　爲次　備中の刀匠にして寛元年間の

人或は云青江の一派なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメツグ　爲繼　越前の刀匠にして姓は藤原延文年間の人或は云ふ越中の爲繼と同人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメツグ　爲繼　藤原姓通稱四郎兵衛越中の刀匠にして松倉郷義弘の子なり應安年間の人亦美濃に住す或は云義弘の門人にして康永比の人後美濃不破郡に住す亦爲次に作る或は則重の門人初名爲次と云亦越前に住すと又云義弘の末子にして正中元年生れ康暦元年歿す年五十七なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タメツナ　爲綱　玉工なり正和四年近江國日吉神社の造營に召されて諸器を作る當時の名手なり（工藝志料）

タメツナ　爲綱　美濃關の刀匠にして兼升の子永祿元龜年間の人（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメツネ　爲恒　備前長船の刀匠にして爲家の子建武貞和年間の人（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメツネ　爲恒　備中青江の刀匠にして宗恒の子寛喜比の人なり或は云正恒の子なりと（本朝鍛冶考）

タメツネ　爲恒　備中の刀匠にして應永年間の人或は云是重の子にして文明比の人或は康暦比の人なりとも云（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメツネ　爲恒　豐後の刀匠紀の一派にして弘長年間の人或は云紀正恒の子にして建保比或は寛元比又は永承比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメトキ　爲時　相摸山内の刀匠助眞老後の名なり助眞を看よ

タメトシ　爲利　平治年間の人河内の刀匠有成京都に在る時の名なり有成を看よ

タメトシ　爲利　通稱太左衛門後甚兵衛と改む陸奥會津の刀匠にして下坂氏爲勝の子なり明暦三年家督寶永元年歿す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメトシ　爲利　伯耆の刀匠にして寛和比の人四劍の一人なりと云（古今鍛冶備考）

タメトシ　爲利　備前の刀匠にして元暦年間の人或は云ふ福岡一文字の派にして真應比の人又云初代助房の門人にして大福嘉禎年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメトシ　爲利　備前の刀匠にして文保年間の人或は云ふ長船に住す或は云爲吉の門人にして正應比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメトホ　爲遠　山城梨田口の刀匠常遠の一名なり常遠を看よ

タメトホ　爲遠　菅原姓兵衛尉と稱す備前粉河の刀匠にして文保年間の人一に君河に作る或は云福岡一文字の派にして嘉元比の人と又云爲安の子にして正安比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タメトホ　爲遠　備中の刀匠にして元暦比の人或は云ふ保元年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

タメトホ　爲遠「タクマタメトホ」

タメトモ　爲朝　河内の刀匠にして爲成の子なり寛治年間の人或は云永承比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメトモ　爲朝　上總の刀匠にして相摸の爲吉の門人建武年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメナガ　爲長　通稱山三郎後甚兵衛と稱す陸奥會津の刀匠にして下坂氏爲次の二子なり享保四年家督延享四年歿す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメナガ　爲長　通稱文吉陸奥會津の刀匠にして下坂氏兼宣の子なり享和年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメナガ　爲長　備前の刀匠にして元德年間の人或は云正和嘉暦年間の人又云爲吉の二子にして元應比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タメナガ　爲永　信濃筑摩郡の刀匠爲祥の門人にして嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タメナガ　シュンスキ　爲永春水「シュンスキ」

タメナガ　タラウベヱ　爲永太郎兵衛千蝶と號し竹田出雲掾の門人なり狂言作者を以て世に知らる所作に本朝斑女扇、遊君衣紋譜、酒色江戸紫等十種あり（聲曲類纂）

タメナホ　爲直　通稱大吉後甚左衛門と改む陸奥會津の刀匠にして下坂氏爲隆の子なり初爲信と云ふ文化年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメナリ　爲成　河内の刀匠にして爲吉の子なり治暦年間の人或は云長久比の人又云長德寛仁年間の人或は爲吉の弟なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タメナリ　爲成　畫人なり而して未だ其姓氏を詳にせず弘高同時の好手にて速畫を以て世に稱せらると云ふ（本朝畫史）

タメナリ　爲成「タクマタメナリ」

タメノブ　爲信「カノパイウン」

タメノブ　爲信「カノサウエン」初代

タメノブ　爲信　備前長船の刀匠にして爲遠の子なり延慶應長年間の人或は云ふ長寛中に同名ありと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメノブ　爲信　備前長船の刀匠にして貞和年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメノブ　爲信　備中青江の刀匠にして則高の門人なり建仁年間の人或は云則貞の三子にして建保比の人と又云青江の一派にして元暦比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメノリ　爲則　備前の刀匠にして元暦比の人或は云古爲信の子にして治承比の人刑部三郎と稱すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメノリ　爲則　備前長船の刀匠にして元應年間の人或は云刑部三郎と稱す又云爲信の子にして元亨比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメノリ　爲則　備前吉井の刀匠にして正和年間の人或は云長船爲則と同人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメノリ　爲則　備前の刀匠にして天和年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメノリ　爲則　備中青江の刀匠にして則高の

子刑部三郎と稱す承久眞應年間の人なり或は爲信と同人なりと云（本朝鍛冶考）

タメノリ 爲則 備中青江の刀匠にして爲次の子なり寶治年間の人或は云嘉禎比の人或は康永比の人と又云初めの爲次の門人にして貞永比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメノリ 爲範 備後三原の刀匠にして永正年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメハチ 爲八 德川氏旗下小出氏の馬卒なり性廉潔心を實て善く勤仕す其の家主家より富めり領邑の民困苦し怨憤すれども之に報ずる能はず爲八嘗て某に金を借んとす某罵て曰く爾錢を得んと欲せば人の門に立て乞丐せよ爲八怨憤に堪ず彼れ何者ぞ家千金を累れて一窮人を救はず且世辱を加ふ吾誓て衆の爲に之を殺さんと一夕風雨劇しきに乘じ裸體となり白布を以て頭を裹み刀を提げて其の臥内に突入す某驚き起たんとす跳て其の左手を切斷す某右手を以て之を拒ぐ又之を斷り纏て其の腰を斬り之を倒す其子更舍に當直す爲八轉じて其の所に至り衾上に跨て一刺之を殺し直ちに自から腹を切る舍中驚起し其の故を問ふ爲八氣息僅に通じ拜手の狀をなし謝して曰く不慮に主家を驚かす死すとも其の罪を贖ふに足らずと言畢りて死す遺書に君の爲に賊を戮し民の爲に害を除けり假令ひ死すとも必ず地獄に墮ちずと小出氏其の義烈を哀み士の禮を以て之を葬る（藝雄冒行錄）

タメヒサ 爲久「タクマタメヒサ」

タメヒサ 爲久 備前長船の刀匠にして爲義の二子弘安年間の人或は云弘長比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメヒラ シンワウ 爲平親王 村上帝の皇子なり母は中宮安子藤原師輔の女一品式部卿となり染殿式部卿宮と號す寛弘七年十月薨ず年五十九

タメヒロ 爲廣 藤原姓又源姓相摸大掾又相摸守と稱す播津の刀匠にして寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメヒロ 爲廣 橘姓福地多羅藏と稱す播津刀匠本國は紀伊なり康慶の門人にして寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメヒロ 爲廣「レイゼイタメヒロ」

タメミチ 爲道 亦爲道に作る備前中路の人にして古刀の鍛工長船の一派なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメミツ 爲光「レイゼイタメミツ」

タメミツ 爲光 備前の刀匠にして嘉慶年間の人或は云長船爲吉の子にして延文比の人或は應安比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメユキ 爲宗 備前の刀匠にして初代長光の門人なり正和年間の人或は云宗長の子にして正和比の人或は爲近の子にして永德比の人と又云延文貞治年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメユキ 爲宗 備前長船の刀匠にして至德年間の人或は云前の爲宗二世なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメモト 爲本 大和法龍寺の刀匠にして天正年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメモリ 爲守 伯耆大原の刀匠にして天福年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメモリ 爲守 備中の刀匠にして應永年間の人或は云ふ片山に住す又備前に於て作る所ありと云ふ或は云爲恒の子にして建長比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメモリ 爲守「ゲウゲツ」

タメヤス 爲安 備前の刀匠にして正治建仁年間の人或は云長船に住し後備中に徙ると又云爲義の子爲久の弟にして弘安比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

タメヤス 爲康 陸奥會津の刀匠にして下坂氏の時幼なるを以て近江西坂本の刀匠下坂八郎左衛門康綱の家に生長し鍛冶の業を學び後伊勢松山に移り領主加藤氏の刀匠となり下坂甚兵衛爲康と稱す寛永四年加藤氏封を陸奥會津に遷すに及び隨ひ移ると云二世は爲勝と稱す（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメヤス 爲康 紀伊の刀匠にして姓は橋氏は富田土佐將監と稱す近江蒲生郡石堂の族にして紀州石堂の祖なり寛永年間の人所作の刀銘に十六葉の菊を彫すと云（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）二世爲康は富田六郎左衛門と稱す康慶の兄なり陸奥守に拜す後播津大阪に移る寛文延寶年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメヤス 爲泰「ラカタタメヤス」

タメユキ 爲行「タクマタメユキ」

タメユキ 爲行 豐後高田の刀匠にして寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメユキ 爲是 備前長船の刀匠たりて嘉暦年間の人或は云光長の子にして鵜飼莊に住す正慶延文年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメヨ 爲世「フヂハラタメヨ」

タメヨシ 爲吉 山城三條派の刀匠にして平治比の人なり或は云家利と同人なりと又云河内の有成在京中の名なりと（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメヨシ 爲吉 河内の刀匠にして有氏の門人なり長暦年間の人或は云有成の門人にして長德寛弘年間の人又は治暦比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメヨシ 爲吉 相摸鎌倉の刀匠にして後武藏に住す建武年間の人或は云元亨比の人にして龍二郎と稱す又云元弘比の人亦越後に住すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメヨシ 爲吉 相摸の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメヨシ 爲吉 源姓武藏長弁の刀匠にして寛永年間の人或は云法名堅白一に德白に作る（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメヨシ 爲吉 信濃筑摩郡の刀匠爲嶽の門人にして嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タメヨシ 爲吉 伯耆の刀匠にして有綱の子なり永延年間の人或は云爲清の子にして貞觀比の人或は延長比の人と又云永延の上工四人の一なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメヨシ 爲吉 備前の刀匠にして弘安年間の人或は云長船爲義の子なりと又云福岡一文字の派なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメヨシ 爲吉 備前長船の刀匠にして嘉暦年間の人或は云忠宗の三子にして建武比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメヨシ 爲吉 備中の刀匠にして建武比の人或は云ふ青江に住すと或は貞應比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメヨシ 爲吉 法藏寺と號す應永年間の刀匠なり國詳ならず（古今鍛冶銘早見出）

タメヨシ 爲義 山城の刀匠にして元暦比の人或は云天養安久年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメヨシ 爲義 備前の刀匠にして元暦年間の人或は云建長文永年間の人なりと又云仁安比の人國名詳ならずと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

タメヨシ 爲祥 永井權之介と稱す信濃算論の刀匠にして文化年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

タメヨリ 爲頼 山城の刀匠にして建仁年間の人或は云亦飛驒に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

タメヨリ 爲依 備前の刀匠にして應長年間の人或は云ふ爲久の門人にして長船に住すと又云爲久の子にして正和文保年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

タメヨリ 爲依 備中青江の刀匠にして爲信の子なり貞永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメヨリ 爲居 平姓日向の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

タメノ ヒデアキ 田母野秀顯 慷慨の士なり幼名惠寛後ち千秋と稱し終に秀顯と改む三春の藩士赤松某の庶子なり秀顯幼にして父を喪ひ孤となるを以て其の地の常樂院に入り修驗者と爲る院は俗姓を田母野氏と曰ふ是秀顯の田母野氏を冒す所以なり秀顯既に風塵を避くと雖も人と爲り甚だ活潑にして寺院の業を以て屑とせず武を嗜み文を好み大に爲す所あらんとす時に藩中の倡聖動もすれば其の庶子たるを賤みて之を侮慢する者あり秀顯毎に之を含み報ずるに殺戮を以てせんと欲し發するに前後三回して皆人の爲に沮止せられて果さず戊辰秀顯慷慨國を憂ひ勤王の義を唱ふ然れども他の諸大藩擧げて佐幕黨ならざるはなし是に於て本藩の擅政（當時藩侯猶ほ幼にして叔父某氏政を攝す）以下悉く幕府を奉ぜざる者なく白石に於ける奥羽各藩の同盟會の如き使臣を特派して同盟を誓約す又十一月奥羽七州の聯合會に仙臺に會して大に談議耶を二本松に各々賞罰として之を送れり斯の如く佐幕輿論の熾盛なる中に立て秀顯毫も勤王の志を屈せず河野守右衛門、其の弟眞二郎（磨中）、安積儀作、影山正博、松本芳長等と相謀り屢〻深更を以て密議する所あり終に山埴、熊田の二人を朝廷に遣はし情を陳じて敕旨を請はしむ朝廷之を嘉みし乃ち敕旨を授く二人還らして歸著すは是に於て秀顯等の決意愈〻堅く稍〻之に應ずる者あり遂に各藩の嫌疑を招き探偵頗る嚴なり就中二本松藩の如きは其の地相接するを以て終に之を推察し將に兵を舉げて來り討たんとす是に於て秀顯等憂憤激昂自問緒に就きて秀顯河野等六人を除くの外皆な免數せられ尋で公判を開き命じて辯護人を附し充分辯解討論せしめ後ち秀顯等を以て現政府を顚覆せんとの企をなしたるものとなし輕禁獄六年に決し府下石川島の獄に幽閉せらるる時に九月一日なり後ち幾もなくして寒疾に觸れ日を逐ひて漸く重く終に起たず時に年三十四實に明治十六年十一月廿九日なり秀顯幼より豪俠事に臨みて區々小事に拘はらず平生好みて魯實氏の民約篇を愛讀せり天王寺に埋葬す論して義岳秀顯居士と曰ふ（傳記）

タモン シャウザエモン 多門庄左衛門 俳優を以て業とし兼ねて音律に精し最も小唄を善くす嘗て出來島小佐郎志、花井才三郎、玉村吉彌、山川内記、玉川主膳等と加賀節（淨瑠璃にも亦た加賀節あり宇治加賀掾の節附なり）を作りて名あり曲節は萬治寛文の間大に世に行はる（聲曲類纂）

タヤス ムネタケ 田安宗武「トクガハムネタケ」

タヤマ ケイギ 田山敬儀 文化中の歌人なり通稱從事伊賀の人藤堂家の藩士たり京都に出て〻蔭庇の門に入りて修學し終に一家をなして時に鳴る門四天王の第一と稱せらる文化十一年四月九日歿す年四十九（鑒定便覽）

タヨ 多代「イチハラタヨメ」

血淋漓衣帶皆な赤し實に十五年八月十五日なり翌日同地の士秀顯に勸めて去らしむ秀顯聽かず諸人切諫して終に三春に歸る秀顯既に重傷を蒙り鼻苦痛に堪へずと雖も尚ほ毫も屈せず直ちに四白川及び石川郡等を巡回す又十一月奥羽七州の聯合會に仙臺に會して大に談議する所ありと云ふ後ち福島に還り又若松に赴き道路開墾事件に關し會津地方六郡の爲めに大に計畫する所あり事に激して遂に河野等と内亂の企圖をなし其の第五十餘人前後相尋で各地に捕縛せらる秀顯警吏の逮捕を聞きてより所在に潛居し辛うじて仙臺に逃す假裝して汽船に乘じ十二月を以て横濱港に著し直ちに東京に入り爲す所あらんとす捕へられて若松の獄裡に繫幽せらる後ち五十餘人と共に再び東京に送致せられ高等法院を開き以て之が審判をなす豈し殊に國事犯者の爲に高等法院を開設するは之を始めとなす翌年四月に至り糾問緒に就きて秀顯河野等六人を除くの外皆な免數せられ尋で公判を開き命じて辯護人を附し充分辯解討論せしめ後ち秀顯等を以て現政府を顚覆せんとの企をなしたるものとなし輕禁獄六年に決し府下石川島の獄に幽閉せらるる時に九月一日なり後ち幾もなくして寒疾に觸れ日を逐ひて漸く重く終に起たず時に年三十四實に明治十六年十一月廿九日なり秀顯幼より豪俠事に臨みて區々小事に拘はらず平生好みて魯實氏の民約篇を愛讀せり天王寺に埋葬す論して義岳秀顯居士と曰ふ（傳記）

タラシナカツヒコノ　スメラミコト　足仲彦天皇「チュウアイテンワウ」

タラリロウ　哆囉哩樓「サンパ」　多羅尾永陸　狩野派の畫家にして狩野主信の門人なり（扶桑畫人傳）

タラリロウ　エイリク　多羅尾永了　狩野派の畫家なり初め七左衛門と稱す狩野安信の門人（扶桑畫人傳）

タラヲ　ススム　多羅尾進　陸軍少尉補なり薩摩島藩士にして熊本鎮台歩兵第十三聯隊第一大隊第四中隊附を以て明治九年十月十二日熊本、山口、福岡縣賊徒討之役に戰死す

タル　サンエモン　樽三右衛門　江戸町地廻役なり初代藤左衛門の次子にして初の名を總兵衛と稱す遠州濱松に居る家康に從ひ江戸に出て日本橋南一丁目に邸宅を賜ふて居る後世人呼て樽屋と云ふに至る（環齋紀聞）

タル　トウザエモン　樽藤左衛門　江戸町年寄なり水野右衛門大夫忠政の七子水野彌平太夫忠勝の子水野彌吉康忠後に名を樽三四郎と改む永祿三年父彌平太夫三河苅屋に戰死す彌吉年八歳堅年家康に謁し扈從となる十六歳にして元服し名を康忠と賜ふ元龜三年味方原の役年二十武田氏の士黒澤藤五郎赤張三左衛門等十二人を殺し又大久保甚五郎の急を救ふ家康之を賞し三四郎の名を賜ふ天正三年長篠の役酒樽を獻ず之を信長に致す武田氏の士松下金太夫を斬る信長之を聞て樽三四郎の功かと問ふ即ち樽の異名を得たり後遠江諸市街の支配を命ぜらる筧八左衛門と共に之を司る天正十八年家康に從ひ江戸に出て江戸町の支配を命ぜられ神田玉川兩上水の支配と關口小日向金杉三ヶ村の代官を兼ぬ町年寄となる後阜に町年寄となり帶刀を許され毎年正月新年の禮を城中に逃べ將軍に謁し上野增上寺御成には先づ寺院に於て拜謁を許さる代々以て例とす關東三十三ヶ國の桝を司り又奈良屋市右衛門と共に東海道中仙道の一里塚を司る子孫相嗣て神田連雀町に居り德川幕府の末に至る（環齋紀聞）

タルヒト　シンワウ　熾仁親王　有栖川幟仁親王の長子なり母妃は藤原廣子天保六年二月十九日を以て生る嘉永二年親王となり太宰帥に任ぜられ三品に叙せらる文久二年孝明天皇海防の廢弛を憂ひ策を問はる親王奏して旨を答ふ明年加茂國社と石清水とに事あり親王をして先づ往て事を祓せしめらる元治元年國事掛となる是時國家多端にして物情騷然たり親王幕府の忌む所となり職を免ぜられて屏居せられ既にして事釋け召れて朝政に參す慶應二年十月復た國事掛となり十二月總裁職に補し二品に叙せられ鎧鼻兵仗を賜はり帶劍を聽さる是歳天皇崩じ今上登極せらるる明年元を改め明治と會々東軍命に抗するにより二月征東大都督となし錦旗節刀を授けらる是に於て衆を率て東下し數月にして賊を平げ多く金帛を賜はる七月太宰帥を辭す三年四月兵部卿に任ぜられ明年之を罷む是歳諸侯封土を納む福岡藩の內訌治め難きを以て故に親王を用ひて藩知事と爲す衆心爲めに悅服す明年功を賞して直垂一領と黄金五萬匹とを賜はる八年七月議官に任ぜられ十二月勳一等に叙せらる九年三月副議長に任ぜられ尋て歷て議長兼議官となる十年一月行幸に京都及び大和の二國に從ひ二月西南の亂起るや親王征討總督となり六師奮戰し賊勢漸く挫く東久世侍從西郷中將等を遣はし欽て其壹策宜しきを得たるを褒し又侍臣侍醫を遣はして酒饌藥劑を賜はる事平ぐに及んで勳して其功を賞せらる十月陸軍大將兼議長に拜せらる而して議定官は故の如し十四年行幸に東北諸州に從ひ參謀本部の事を攝行す還るに及んで慰勞として金を賜はる十五年議定官を兼ぬる故の如し十四年十二月又神宮祭主を兼ねらる十五年議帝の即位あるや親王を以て往て之を賀せしめ因て歐米諸國を巡遊し歳を踰えて還る十八年左大臣を罷められ參謀本部に兼任す十九年九月近衛都督に補せられ二十一年參軍を兼任す二十二年參謀總長を兼任し二十四年十二月又神宮祭主を兼ねらる明年特別大演習觀兵式總指揮官に補せられ廿七年冥朝鮮の變に出て清國と遂言あり乃ち大擧して之を伐つ因て大本營を宮城に設く親王奏して大計を定む九月大蠶を廣島に進めらるゝや鄭に扈して四行す時に捷報屢〻到る二十八年一月特に大勳位菊花章頸飾を賜はり又特に功二級に叙して金鵄勳章を授けらる是より先き親王疾に罹る軍國大事を以て夙夜離宴に侍す醫師相勳め乞ふて假りに播州舞子濱別業に療養し遂に東京に歸る是月廿四日薨せらる年六十一天子訃を聞て悼惜ぜられ廢朝三日宮中喪五日遠密三日に及ばれ鍋島式部長なして吊且つ賻ぜらる二十九日國葬儀を以て柩を城北豐島岡に藏む親王威儀端莊にして大度あり風に力を國家に致し中興の元勳たり獨り海內之を仰ぐのみならず露墺獨伊蘭西諸國亦皆贈るに勳章を以て其德望斯の如し（憲誌）

ダルマ　達磨　山城綾小路の刀匠正宗創髮後の刀銘なり正宗を看よ

ダルマ　コザエモン　達磨小左衛門　其の事蹟を詳にせず達磨伊右衛門　達磨小右衛門と同胞にして共に江戸の俠客たり（實事譚）

ダルマ　ジフベエ　達磨十兵衛　氏を川村と曰ふ達磨は其の綽名なり嘗て某劇場の座主某未だ幼なるを以て十兵衛之が後見たるなし本町の商家某より金を借るの約を爲す期に及びて某約を違ず十兵衛大に怒り刀を拔て腹を刺す某驚きて前約を履むと云ふ十兵衛後ち大阪に赴き又た戲場手代となる人綽名して智暴浪人と曰ふ（實事譚）

ダルマヤ　ゴイチ　達磨屋五一　號を無物老人と云ひ又花の屋蛙麿とも云ふ岩本氏江戸繪地小田原町紀州家米御用商伊勢屋文三郎の次男にして幼名を市太郎と云ふ書肆某の丁稚となり後芝切通、後日本橋四日市町に住し書肆を業とす世に珍書屋五一と呼ぶ和歌俳諧等を好み風流の一奇人なり晩年四日市の店を子左七（後三二）と云ひ活東子と號す）に讓り自から淺草藏前に書肆を開く慶應四辰年七月十八日歿す年五十二弟坂一ッ木町浄土寺に葬る法名覺阿彌禪定門（名人雜傳、岩本三二氏談）

タルミ　ヒロンド　垂水廣人　本姓は大津、博く經史に涉りて華言を能くす天武帝の大寶元年姓を垂水君と賜ひ遺唐大通事となる（日本儒林傳）

タルミ　マサギミ　垂水眞公　本姓は阿利、豐城入彦の孫鷲妻乃眞椎の後裔なり才識宏博にして事理に通曉す孝元帝の時天下大に旱し井水亦た涸絕す眞公乃ち爲めに禱を祭げて水を四山に取り之を宮內

の引き以て御膳に供す天子其才を嘉みして姓を垂水と賜ふ（日本儒林傳）

タキ　ヨリカタ　田井頼堅　藏人と稱し攝津有馬郡田井の人なり池田元政に隨し三好希雲の募に應じて越水城攻に加はる城中外援絕えて危きこと旦夕にあり城兵倉部興二郎弟治郎太郎と謀り一快戰して双方の睡を覺さんとし出て戰を挑む田井頼堅單騎之に敵へ擊火花を散す頼堅猛士といへども老ひて憊す遂に壯者二人に敵する能はずして戰死す兄弟も重疾癒えずして死す

タヲカ　トシサブラウ　田岡俊三郎　幼名佳太郎伊豫國菩小松藩士なり夙に槍術に長じ藩の師範役に任ず又頗る經史に通じ勤王の志最も深かりき文久二年藩主の命を受け京都に赴き四方勤王の士と交る三條卿以下七卿の長州に走るや之に隨從して西下す後三郎疎に澤宣嘉の信頼を享けて毎に其樞機に參與せり文久三年十月卿を佐けて但馬生野に義兵を擧げ以て四方勤王の徒を糾合せんとせしも機熟せずして解散し卿を擁護して美作備前阿波讃岐等の間に流離し後伊藤に抵り宇摩郡蕪崎村の三木俊三、尾崎山人等に頼り又轉して新居郡垣生村の三木佐逆の許に潛伏し居ること數閏月終に三田尻に在る三條卿と消息を通じ元治元年五月卿を護して赤間關に至る幾ならずして長州の士福原元僩久坂通武等と共に諸公卿及び毛利侯父子の寃を雪がんが爲めに京都に上り近衛卿に歎き執奏を請はんとするや會桑二藩の兵に拒まれ遂に座殺し士佐の士尾崎宰之進と俱に槍を揮ひ駢進し遂に敵丸に中りて斃る年三十六實に元治元年七月十九日なり三十六年十一月其の忠志を追賞して正五位を追贈せらる

タヲヲ　クスピコ　田尾楯彦　高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て機關長として陸軍借上船金城丸に乘組み三十八年八月二十二日門司より宇品へ向け航行中姫島沖に於て外國船パラロンク號と衝突の際溺死す

チ　之部

チアン　ヂウイ　知庵「フルイチウウヤ」初世　高僧なり伯州の人、台山に入り顧密の教を習ふ嘗て鞍馬に居して山を出でざること六年又大治二年より保延六年に至るまで十四年間小豆を以て算となし彌陀の號を唱ふる凡そ二百八十餘又鑾詣の際預め時の至るを知り沐浴して衣を更へ門弟子と問答し畢りて左手に五鈷杵を執り右手に念珠を帶持し西に向て化す時に年六十六（元亨釋書、東國高僧傳）

ヂウゲン　重源「チヨウゲン」　重作　陸奥伊具郡大內村の人なり天保中兄音吉と父の讎を擧げ以て四方勤王の徒を糾合せんとせしも機熟せずして解散し卿を擁護して美作備前阿波讃岐等の間に流離し後伊藤に抵り宇摩郡蕪崎村の三木俊三、尾崎山人等に頼り又轉して新居郡垣生村の三木佐逆の許に潛伏し居ること數閏月終に三田尻に在る三條卿と消息を通じ元治元年五月卿を護して赤間關に至る幾ならずして長州の士福原元僩久坂通武等と共に諸公卿及び毛利侯父子の寃を雪がんが爲めに京都に上り近衛卿に歎き執奏を請はんとするや會桑二藩の兵に拒まれ遂に座殺し士佐の士尾崎宰之進と俱に槍を揮ひ駢進し遂に敵丸に中りて斃る年三十六實に元治元年七月十九日なり三十六年十一月其の忠志を追賞して正五位を追贈せらる

ヂウサク　重作　陸奥伊具郡大內村の人なり天保中兄音吉と父の讎を擧げ以て四方勤王の徒を糾合せんとせしも機熟せずして解散し卿を擁護して美作備前阿波讃岐等の間に流離し後伊藤に抵り宇摩郡蕪崎村の三木俊三、尾崎山人等に頼り又轉して新居郡垣生村の三木佐逆の許に潛伏し居ること數閏月終に三田尻に在る三條卿と消息を通じ元治元年五月卿を護して赤間關に至る幾ならずして長州の士福原元僩久坂通武等と共に諸公卿及び毛利侯父子の寃を雪がんが爲めに京都に上り近衛卿に歎き執奏を請はんとするや會桑二藩の兵に拒まれ遂に座殺し士佐の士尾崎宰之進と俱に槍を揮ひ駢進し遂に敵丸に中りて斃る年三十六實に元治元年七月十九日なり三十六年十一月其の忠志を追賞して正五位を追贈せらる

タヲヲ　クスピコ　田尾楯彦　高知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て機關長として陸軍借上船金城丸に乘組み三十八年八月二十二日門司より宇品へ向け航行中姫島沖に於て外國船パラロンク號と衝突の際溺死す

チカイ　ヨリカタ　智海　天台宗の僧なり畵を能くす木華原氏に仕ふ父を知德と云ひ主馬と稱す智覺經濟の才あり小笠原氏は西州の巨鎭となす左近將監忠苗の時に及びて頗る書を讀み賢を愛し士に下る適〻先世奢侈の後を以て不動及び二童子を畵く專ら奇怪の勢を極む明應年間の人（扶桑畵人傳、本朝畵史）

チカイ　ヨリカタ　智鎧（或は智愷）　京都の僧なり內藏氏密教を綜ぶ傳燈大法師位に任ぜらる延喜十年雜摩會の講師に擧げられ答釋衆の意表に出でたるを以て其名一時に喧傳せり尋て法華最勝二會の講主を歷て十二年春東大寺住持となる在職七年猶一日の如し十八年八月八日寂す年六十八（本朝高僧傳）

チカウ　雉岡「クロサハチカウ」

チカウ　池香「アサノチヤウソ」

チカカゲ　近景　備前長船の刀匠にして文保觀應間の人或は云近信の子にして三郎左衛門尉と稱す文保貞和年間の人又云大宮派の刀匠にして長船に住す景政の子なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

チカカタ　シンワウ　周賢親王「ソンショウホウシンワウ」

チカカネ　近包　播磨の刀匠國吉の子建長年間の人或は云安頼の門人にして永延比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

チカカネ　近包　備前の刀匠にして元暦年間の人或は云長船近恒の子にして永久比の人或は長暦比の人にして正眞の子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

チカカネ　近包　備前の刀匠にして建武年間の人或は云吉岡一文字の流にして正中建武比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チカギ　近菊　出羽の刀匠鬼王の子にして正治年間の人亦奥州に住す或は云陸奥舞草派の刀匠にして元暦比の人亦出羽にも住すと又云陸奥の刀匠にして世安の子承保比の人或は嘉保元和元暦建長等の諸説あり鑒し別人ならん（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

チカギリ　近霧　陸奥舞草派の刀匠にして元暦年間の人亦羽州に住す或は云延暦年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

チカク　知覺　大甘兵庫と稱す世〻小倉侯小笠原氏に仕ふ父を知德と云ひ主馬と稱す智覺經濟の才あり小笠原氏は西州の巨鎭となす左近將監忠苗の時に及びて頗る書を讀み賢を愛し士に下る適〻先世奢侈の後

を承けて國用給せず府庫洗ふが如し忠苗之を憂へて智覺の才用ふべきを知り擢任して國老となし委ぬるに財政を以てす智覺知己に感激奮勵して職に當り日夜從事して冗費を省き節儉を勤む是時に當りて上下愉惰し驕逸風を成して頗る智覺のなす所を便とせざるもの多く讒間百方騰々沮撓を謀る然れども忠苗爲めに動かず知覺に任ず居ること數歲國計饒足し府庫充實す一日智覺忠苗に謂て曰く臣君の威靈に倚りて力を財政に專らにし餘を積み兩を審へて漸く贏餘あり君一たび之を見ば所の黄金數千擔を舁て之を一屋に置く重さ其床を壓して床爲めに陷る忠苗大に喜び爲めに祿秩を增す既にして忠苗病みて歿す嗣なし老臣等相議して同族安忠俟の子を迎へて嗣となす俟性敏達にして奢侈を好み政事に變革する所多し嘗て小笠原出雲の言を納れ財を朝貴に散じて四位少將に陞り用度洪繁にして先世の藏將に盡きんとす智覺諫めて曰く府藏の金は是れ先公老臣と計畫して緩急に供ふる所以なり今徒らに之を糜す甚だ惜む可きのみと俟聽かず漸く之を疎斥す時に藩士に上原興市と云ふ者あり任俠にして奇を好む謂ふ今俟は支族より入嗣し擅まゝに家法を亂だすと竊かに同志と謀り俟を廢して別に良主を擇ばんと欲し事俄かに發覺す興市縛に就く詞智覺に連なる智覺實に知らざるなり是れ智覺を獄に下す然れども未だ其の刑狀を得ず乃ち興市を拷掠し杖蔽繩拶、身完膚なし唯々曰く知らずと俟大に怒り命じて炭を爐に熾んにし興市を驅りて之に上らしむ骨灼け肉爛れて臭近づく可らず興市痛を忍びて一言を發せず乃ち其の僕を拷す僕痛苦に堪へず實を吐く興一嘆じて曰く大事を謀らんと欲し言を奴隷に漏して自から嘲笑を貽す將に誰をか是れ怨みんとすと遂に焚刑に遭ひて死す而して智覺の罪未だ決せざるに更に之を土窖に移す智覺獄に在れども神色自若として屈撓の色なし奸人夢聞て之を惡む智覺性蛇を忌み偶々之を見るも毛髮變起す奸人是を知り乃ち多く蛇を捕へて以て窖中に投ず蛇蜿々として體に纏ひ或は其骨を嚙む智覺呼號宛轉し數日にして死す人之を憫れむ今猶ほ其の祉を存すと云ふ智覺既に死す因て出雲代りて政を執る兩藏猶ほ結びて解けず未だ幾ばくならず智覺の黨數十人藩を脱して墨田氏に投ぜんと欲し出て〻墨崎に至る藩捕手を遣りて之を追ひ盡く獄に繫ぐ時人其黨を名づけて黑黨と曰ひ出雲に屬する者を白黨と曰ふ幕幕府に聞え旨を下して詰責す俟門を閉ちて出でざること累日(譚海)

チカクニ　親國　肥後菊池の刀匠にして延壽の末流永祿年間の人(古今鍛冶備考)

チカクフメイ　コクシ　知覺普明國師「メウハ」

チカゲ　千陰「チチバナチカゲ」

チカサダ　近貞　備前長船の刀匠にして近眞の子元暦文治年間の人なり(本朝鍛冶考)

チカサダ　近貞　備前長船の刀匠にして近眞の門人貞治應安年間の人或は云俊光の門人なりと(古今鍛冶銘早見出、古鍛冶備考、本朝鍛冶考)

チカサト　近里　播磨の刀匠にして建治年間の人(古今鍛冶銘早見出)

チカザネ　近眞　備前の刀匠にして建武年前の人或は云弘安比の人と又云長船近則の子にして平治永暦年間の人と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

チカザネ　近眞　備前長船の刀匠にして建武年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チガサンセツ　チカシゲ　千賀山雪「カノサンセツ」

チカシゲ　近重　信濃の刀匠にして有國の子文安年間の人(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

チカシゲ　周重　武藏下原の刀匠但馬守と稱す天文享祿年間の人或は云山本氏にして恩方村に住すと又云相摸綱家の族にして武藏八王寺に住す文龜永正年間の人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

チカシゲ　周重　武藏の刀匠にして山本內匠と稱す元龜年間の人或は云但馬守周重の子にして天文比の人或は自重の子なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

チカシゲ　周重　武藏下原の刀匠にして山本外記と稱す寛文年間の人(古今鍛冶銘早見出)

チガダ　ダウリウ　千賀道隆　文化の醫師なり名は久顯享保六年五月二十三年歿す檜場總泉寺に葬る(江戸名家墓所一覽)

チカタカ　シンワウ　周翰親王　典仁親王の子なり明和五年六月生れ六年四月勅法院を繼ぎ安永七年七月桃園天皇の養子と爲り八月親王と爲る十月寺院に入り剃髮して名を眞仁と改む戒を尊眞入道親王に受く天明二年六月一身阿闍梨に補せられ九月灌頂し五年十二月二品に叙し六年八月天台座主に補せらる後寛政二年六月表を上り座主を辭して曰く醜て庸劣の才を以て久しく榮顯の職を蒙り屢〻時宜に合はず是れ不能の一なり藩柳の質にして常に病あり是れ不能の二なり山を治むる已に五年にして未だ賢を選むを得ず是れ不能の三なり と詔して曰く法務夙に聲譽あり殊に壯年にして能く勉む未だ職を罷むるに及ばざるなりと懇諭して聽さず六年二月牛車を聽され七年二月一品に進めらる十一月終に座主を辭し文化二年八月薨ず時に年三十八、謚して那羅延院と號す(野史)

チカタダ　近忠　備前の刀匠にして建保年間の人或は云光忠の父にして延暦比の人長船一流の祖なり或は承安承治年間の人と又云長船刀匠中興の祖にして承久寛元年間の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

チカタダ　近忠　備前長船の刀匠にして永正大永年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカツグ　近次　備前の刀匠にして延慶年間の人或は云青江の一派にして建治比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカツグ　親次　備中の刀匠にして弘安年間の人或は云長船則と云と(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

チカツグ　親次　備後三原の刀匠にして文和貞治年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

チカツグ　親次　備後三原の刀匠或は云ふ永正年間の人と(古今鍛冶銘早見出)

チカツネ　近恒　備前の刀匠恒次の子にして承暦年間の人或は云常保の二子にして寛治比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

チカツネ　近恒　備前の刀匠にして元暦年間の人或は云長船の一派にして正應比の人又云近房の門人にして永仁比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考)

チカトシ　親利　備中の刀匠青江親俟の子にして文永年間の人(古今鍛冶銘早見出)

チカトモ　近倫　備前長船の刀匠にして寛元年間の人或は云忠近の子にして仁安寛元年間の人或は建仁中の人なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

チカネ　近嶺「サハチカネ」

チカノウラ　ウヴエモン　千賀ノ浦羽　左衛門尉　相撲年寄なり羽前國西田川郡榮村大字擂磨農業訪利右衛門の次男にして本名を辨次郎と云ふ明治六年二十歲の時力士とならんと欲し上京して朝日樂勸之助の弟子となりしが故ありて此を出て各地を流浪し後越後に抵しが偶〻東京力士改正組の頭取高砂の來るに會し之に隨て再び力士界に入りて大達と稱し技術力量著しく進歩したり十七年五月四小結となり十八年五月關脇に進み十九年一月遂に四方大關となれり二十三年五月病氣の爲め廢業して年寄專務となり後本戸年寄となりて晩年を送る三十七年八月十七日病死す年五十二淺草區北清島町長林寺に葬る

チカノブ　親信　浮世繪師なり松野氏伯照軒と號す安永頃の人(浮世繪師便覽)

チカノブ　近信　備前の刀匠にして元暦年間の人或は云長船の一派にして年代詳ならずと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカノブ　親信　筑後柳川の刀匠にして下坂と稱す陸奥會津兼友の門人享保年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカノブ　親信「カノシウヨ」

チカノブ　親信「カノエイジュン」

チカノブ　周信「カノチカノブ」

チカノブ　近則　山城の刀匠にして元暦年間の人所作の刀銘に或は日明の字を用ふと云或は云近菊の子にして保安天治年間の人或は長和比の人鬼王丸と同人信報の太刀の作者なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

チカノリ　近則　出羽の刀匠近菊の子にして天福年間の人(古今鍛冶銘早見出)

チカノリ　近則　出羽の刀匠にして月山と稱す文龜永正年間の人(古今鍛冶銘早見出)

チカノリ　近則　加賀の刀匠橋爪の一派にして貞治應永年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカノリ　近則　備前の刀匠にして建久年間の二世近則は嘉吉年間の人(古今鍛冶銘早見出)

チカノリ　近則　加州の刀匠行光の子にして永正年間の人(古今鍛冶銘早見出)

チカノリ　近則　備前長船の刀匠にして近房の子大治保延年間の人なり(本朝鍛冶考)

チカノリ　近則　備前の刀匠にして正應年間の人或は云長船の一派にして近恒の族嘉元比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカノリ　親則　備中青江の刀匠にして正中年間の人或は云有行の子にして寛喜比の人なり或は親俟の子なりと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考)

チカノリ　近範　伯耆の刀匠初代元重の弟にして應安年間の人或は云承元比の人宗隆と同人なり或は元重の門人にして正嘉比の人或は元重の子にして文和比の人と又云貞治比の人にして本國備前初名近則と稱すと(古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考)

チカノリ　シンワウ　周典親王　文仁親王の子なり寶永三年十二月生る五年六月仁和寺を繼ぐ享保三年六月靈元帝の養子となり尋で親王となる七月剃髮して名を守恕と改め仁和寺に居り戒を大僧正頼遍に受く十一年三月灌頂す十二月二品に叙せられ十四年四月一品に進み明日薨ず年二十四、後光明齋院と號す(野史)

チカヒロ　親弘　東喜三八と稱す大隅の刀匠にして薩摩元平の門人寛政文化年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカヒロ　周廣　相摸の刀匠にして永祿年間の人或は云明應永正年間の人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカヒロ　周廣　山本氏武藏下原の刀匠にして承應年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカフサ　近房　備前長船の刀匠にして近恒の二子寛治康和年間の人なり(本朝鍛冶考)

チカフサ　近房　備前の刀匠にして建久年間の二世近房は初代近房の子にして天永永久年間の人なり(本朝鍛冶考)

チカフサ　近房　備前の刀匠にして建久年間の人或は云長船の一派にして承元二年の番鍛冶廿四人の一なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカフサ　近房　備前の刀匠にして弘安年間の人或は云長船の一派にして左近と稱す建長比の人なりと(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカフサ　近房　備前長船の刀匠にして貞和延文年間の人(古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考)

チカフサ　近房　備前長船の刀匠にして貞和延二世近房は應永年間の人(古今鍛冶銘早見出)

チカフサ　近房　土佐の刀匠にして弘安年間の人(古今鍛冶銘早見出)

チカフサ　近房　肥前の刀匠にして應永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

チカブミ　近文「タカヤチカブミ」

チカマサ　近正　和泉の人にして古刀の鍛工なり或は云ふ堺加賀四郎の一派にして文明比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チカマツ　トクザウ　松近德三　大阪の淨瑠璃作者なり大樹屋勝助と稱し母は長崎丸山の妓某父は清人なり娼樓の主人勝右衛門の養子なり司馬芝叟又芝屋德叟と號す俳名雅亮と云ふ近松半二に從て戲曲及び狂言作者となり立作者となる文化七年八月廿六日歿す年五十七其著す所の淨瑠璃中箱根靈現鬘仇討、朝顏日記等大に世に行はる（小説家著述目錄、戲曲小説通志、浪花名家墓所集）

チカマツ　ハンジ　近松半二　大阪の淨瑠璃作者なり穆積以貫の子にして少うして放逸終に梨園に入り竹田出雲に從て作者となる好評あり推されて竹本座の立作者となる妹背山婦女庭訓、關取千兩幟の如き最も名作なり晩年山科に閑居し天明三年二月四日歿す年九十九（戲曲小説通志）

チカマツ　モンザエモン　近松門左衛門　有名の淨瑠璃作者なり名は信盛本姓は杉森氏幼名を彦四郎と曰ふ平安堂と號す又巢林子、不移山人の號あり長門萩の人、世々毛利氏に仕ふ或は云ふ越前の人又三河の人と孰が是なるを知らず幼にして肥前唐津近松寺に入り髮を剃りて古淵と號す博覽多通にして才識超群す師某寺に住持せしむ古淵謂へらく一寺の主は凡俗に異ならず衆生を濟度せんと欲せば豈に唯り圓頂方袍のみならんやと京都に至り其弟岡本一抱に依りて髮を薙へ出で丶一條家に仕へ從六位に叙せらる博く朝典に涉り兼て古學を修む既にして致仕し去りて市廛に寓し姓名を改めて近松門左衛門と曰ひ傳奇小説を作て業と爲す歌舞妓座万太夫宇治加賀太夫井上播磨掾等の爲めに淨瑠璃を作り元祿四年浜花に徙り竹本筑後掾の爲に淨瑠璃を著はす亦數十種是時に方りて木偶の戲盛んに行はる率れ皆な淨瑠璃曲を用ふ然れども古曲に佳なる者少なし近松乃ち創めて之を作る文章巧緻にして惻然人を動かす而して其嘻笑怒罵皆な至理あり一時風靡して淨瑠璃を道ふ者近松氏を宗とせざるはなし其の著はす所の曲に神代振袖始あり人情を假借して以て神道を論ず釋迦如來誕生會あり遊劇に寄托して以て佛理を說く國姓爺合戰あり外事に根據して以て義勇を鼓す蓋し稍樺三重雌子あり著譯に附會して以て國體を示す皆な主とする所ありて以て胸中の鬱勃抑塞の氣を洩らす徒作には非ざるなり享保九年十一月廿二日を以て涙華に歿す年七十二（一説に年八十三に作るは非なり）墓は大阪谷町寺町法妙寺及び久々知村鷹濱寺にあり終り代々甲冑の家に生れながら武林を離れ三槌九郎につかへ咫尺し隱にあらず賢にして賢ならず物知りに似て何も知らず世のまがひもの唐の大和のなしへある道に技能雜藝滑稽の類まで知らぬ事なげに口にまかせ筆にはしらせ一生を暇りちらし今はの際にいふべく思ふべき眞の一大事は一字半言もなき倒惑心に心の恥をおほひて七十餘りの光陰おもへばおぼつかなき我世經歸ぬもし辭世はと問ふ人あらば「それ辭世去るほどに扨もその後にのこる櫻の花しにほひ一享保九年中冬上旬（八寂名阿彌院穆癸日一具足居士不傳日記奉秋七十二才印）のこれとは思ふも愚なる者少なし近松乃ち創めて之を作る文章巧緻にして惻然人を動かす而して其嘻笑怒罵皆な至理あり一時風

チカマツ　ユキシゲ　近松行重　赤穗四十七士の一人なり勘六と稱す其の先は近江蛭田の人世世淺野氏に仕ふ行重兵法を好み長矩に事へて馬廻となる祿二百五十石を食む國滅ぶるに及び蛭田に還り悉く田宅重器を以て舊友に與へて去る吉田兼亮と俱に江戸に赴き姓名を變じて森清介と曰ふ或は田口三介と稱す其の仇家を襲ふや一人と搏鬪す其の人走る行重之を追ふ譏りて池中に墜つ其の人顧みずして去る自首の後死を賜はる時に年三十四（赤穗四十七士傳）

チカミツ　近光　古刀の鍛工にして備前長船の人（古今鍛冶銘早見出）

チカミツ　親光　下野得次郎の刀匠にして永正年間の人或は云ふ廣宗の子にして應永正長年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

チカミツ　周光　備前長船の刀匠にして應永年間の人或は云至德比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チカミネ　近宗　丹波の刀匠にして綾部に住す嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

チカン　智鑑　能州孝恩寺の住僧なり照庵と號す初め大智和尚に祇陀に參じ後ち松岸和尚に從て道を聞く悟道の後ち能州永光寺に出世す次に孝恩寺に移る退選師崇して玄風日に揚がる能州の刺史某長松寺を創して鑑を延き其の鼻祖と爲す（洞上聯燈錄）

チカン　智鑑　京都淨土宗大谷寺の住僧なり字は玄譽、俗姓平氏、遠州濱松の人なり稟性特異才機超倫、年甫めて十三知童公に從ひて薙髮納戒經藉を耽嗜し三藏に貫通す嘗て鎌倉建長寺に寓す三碧巖及び諸禪藉を精究し曹洞の道を傳ふ初め孤峰山に住し後ち華頂上に董し法嚴を樹て四衆に接す寬文中敕を奉じ淨敎を紫震殿に說く天子大に悅ぶ時に纖眼禪師あり英名當時に貴し眼久しく鑑の德望を聞き或は學海を試んと欲し大谷に參ず待者謁を通ず鑑獅子座に坐して拂子を拈す眼見て愕然たり既にして鑑曰く仁者何の學か所ある眼曰く首楞嚴を講ずと鑑曰く仁者何人の所を指す楞嚴たるか眼擬議す鑑即ち勢至の圓通章に依りて三般試問を擧ぐ眼憎々として退く門庭日に熾んなり大いに祖風を震ふ一日微恙あり端坐念佛して逝く年八十餘事理縱橫集十五卷を著はす世に行はる（續東國高僧傳）

チカン　智侃　字は直翁工部刑足利泰氏の子にして上野の產也早歲より出家して天台敎を學び兼て密乘に通ず別傳の旨あり と聞て衣を更て四方に遊ぶ初め蘭溪和尚に建長寺に參す溪一面して直に許して左右に置く異彩を放つ之を久うして南遊の志あり船に投じて宋に入り諸老に面謁す法に別致なきを知り歸りて蘭溪を省す後東福寺に往いて聖一國師を見て問ふところあり國師曰く是何ぞ侃座を起て曰く今日親しく和尚に見ゆと便ち禮拜す國師曰く此蹤漢登堂し去れと侃輪下に止て日に學海に浴す嘉元の末筑前の承天寺席を缺く衆侃を請じて住持せしむ嗣香を聖一に供す德治の初出羽守大友親平萬壽寺を剪後に建て侃を招て開山第一祖と爲す九州の禪客會同して堂中數百人に盈つ朝夕の鐘

鼓鏗爾として卯午の粥飯殿如たり延慶元年闕白藤原忠敎命じ鑑日山を主らしむ侃室に據りて柱杖を執る居ること一年檀越藤原氏疾み侃を招て末後の誨訓を案らんことを請ふ因て即日豐後に歸り爲めに末後安樂の法門を說く復萬壽寺に住すること十年諭導甚博し元亨二年四月十二日衆を集め後事を囑して寂す年七十八勅して佛印禪師と謚す（本朝高僧傳）

チガン　智嚴　和州補嚴寺の住僧なり竹窓と號す江州の人大源和尚を拜し又た諸老宿に參じ較〻所者あり遷て了堂に補嚴寺に謁す堂其の所證を驗するに擬滯なし因て命じて其の席を繼がしめ第二世となす次に總持寺に住して大いに宗旨を唱ふ應永二年加州に往きて龍頁山瑞川寺を創し了堂を迎へて第一祖となす應永三十年寂す（洞上聯燈錄）

チカムネ　近宗　備前長船の刀匠にして近景の門人貞和年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チカムネ　近宗　吉村氏土佐の刀匠にして安政年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

チカムラ　近村　山城三條の刀匠宗近の子にして萬壽長久年間の人亦備前に住す或は云吉家の子或は宗近の二子なり四條洞院に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

チカムラ　近村　備前福岡の刀匠にして元暦年間の人或は云一文字派にして嘉元比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チカムラ　近村　備前長船の刀匠にして建武年間の人或は云近包の門人にして久安仁平年間の人或は京宗近の二子にして長德比の人或は長久比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

チカヤス　近安　薩摩谷山波平の刀匠にして元暦年間の人或は云行安の門人にして長元長暦年間の人或は安俊の子にして元久比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

チカヤス　近安　薩摩谷山波平の刀匠にして明德年間の人或は云安久の子にして應永比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

チカヤス　近安　薩摩谷山波平の刀匠にして明德年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チカヤス　親安　薩摩波平の刀匠にして應永年間の人或は云永享文安年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

チカユキ　親行　備前の刀匠にして元暦年間の人或は云永久比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チカユキ　及行　豐後の刀匠高田の一派にして姓は藤原寬文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チカヨシ　近吉　備前長船の人にして古刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チカヨシ　周吉　薩摩谷山波平の刀匠にして延德年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チカヨシ　親喜　武州の刀匠にして文化年間の人（古今鍛冶銘早見出）

チカヨシ　親喜　備前新田の刀匠にして親依の族なり德治年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チカヨシ　シンワウ　周慶親王　靈元帝の第五子なり母は宮人菅原氏、寶永四年十二月生る六宮と稱す貞享元年三月妙法院に入る三年九月親王となる十月剃髮して名を堯延と改め堯恕入道親王に從て業を受く元祿六年二月灌頂す十月天台座主に補す十一年七月二品に叙す寶永四年八月安鎭大法を新宮に修め尊職に轉て三たび座主に補す五年六月座主を辭す尋で天台座主に補す五年六月座主を辭す享保三年十一月疾に罹り請ひて一品に叙せらる幾ならずして薨ず年四十三、寶心繫院と號す法住寺に葬る（野史）

チカヨリ　近依　備中青江の刀匠にして文保年間の人（古今鍛冶銘早見出）

チカヨリ　親依　備前新田莊の刀匠にして正和元德年間の人（古今鍛冶銘早見出）

チカヨリ　親依　備中青江の刀匠爲信の子にして貞永年間の人或は云親則の子にして承元建長年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

チカライシ　カンスケ　力石勘助　水戸藩の儒者なり名は忠一字は叔貫、伊賀の人、召されて水藩に仕ふ最も纂書に妙なり彰考館の印は勘助の考、義公の書、伴暢の刻、三絕の物なり勘助嘗て命を奉じ鎌倉志を撰すと（善蒼得聞）

チガラ　キクタン　千拓菊旦　江戸の茶人なり仙右衛門と稱し觀立庵と號す日本橋西河岸の坊正なり寬政十三年二月二日歿す（江戸名家墓所一覽）

チキ　智暉　城州春日寺の住僧なり字は大幻、俗に處る甘んぜず幼年にして明石の寶藏寺に投じ剃度瑜珈宗に隸す受業日に新なり稍〻長じて笈を負ひ上國に觀光し錫を智積院に掛け切磋琢磨膏を焚き晝に繼ぎ觀密性相研究せざることなし次に槙尾山に登り毘尼藏を學び又た五智山の臺寂に謁して顯密の蘊奧を究む暉嘗て大原野春日寺を修む次で播州加東郡小山寺を營構し分衛を主とる衆に兩處に接す大法幢を樹て頽りに古三藏を唱ふ淺代の講習淵源を失へるを嘆じ青年學徒に示して曰く性相を學ぶ者は性相を學ぶにあらずして文字を學ぶ文字を學ぶにあらずして蕪穢を學ぶ蕪穢を學ぶ聯れ世儒へて趣と稱す甚殺學の襲ふるや希世の學者蕪穢を舍て丶文字を學び文字を舍て丶而して性相を學べば或は余が謂ふ所の佛學を識る者なり又云く今の者を讀むや其の貴となす者を貴ぶにあらず糟粕を餔し玄黃を相す何んぞ隙暮の明鏡を乘り駑夫の絲竹を聞くに異らんやと時に慨雲和尚古三藏を唱へ正法律を學揚す德望峻高四方の學徒爭ひて龍門に趨き暉の眞風に醉喜す弟子某々に補す天平四年十二月十五日恬然入滅す年六十八暉護法の心厚く入阿毘達磨論、大乘成業論、辨中辨論、大乘掌珍論等を校訂し世に刊行す弟子玄觀別號樓霞云ふ者あり家學を承けて春日寺に住す（高僧傳）

チキ　智義　松嶺と號す後深草帝の子なり幼より寶覺禪師に從て薙髮して僧となり出世の法を學ぶ其の人となるに及び普く諸方に參禪す天性俊邁にして宿命智を得たり鏡堂圓禪師に建仁寺に侍して益〻證解を深くす同りて寶覺の後を嗣ぎて圓通三聖、萬壽二寺に歷遷し所在法柄を乘る後如意庵に退居す嘉暦元年十月十一日に化す（本朝高僧傳）

チキャウ　ギギャウダウ　智鏡「ソノ」　カタマル　地形堂堅九

狂歌師なり山崎氏名は春方通稱を又次郎と云ふ幕府の士にして栗園と號し齒を嚙みて唐衣橘洲の門に遊びて狂號み地形常堅丸と云ひ醉竹側の詠人たり老後浪華の地に遊びて文政六年四月三日同地に歿す同所小橋寺町傳長寺に葬むり法號を「高專院殿戈岸了智居士」といふまた遺骨を分ちて東都小日向水道端日輪寺に葬る（古今狂歌人物誌）

チキヨク　池旭「コイケチキヨク」

チクアン　竹庵「ギヨウ」

チクアン　竹庵「オホタチクアン」

ヂクアン　竺庵　書僧なり名は淨印、明の人なり歸化して黃檗山に住す即ち其第十三世なり後ち洛西山海寶寺に退隱す字は萬宗、梅隱と號す（鑒定便覽、書乘要略）

チクイツ　竹逸「キノウヘチクイツ」

チクイツ　竹逸「セウチ」（七世）

チクイツ　竹隱　畫家なり荷鷺の圖を畫く探幽齋の粉本に見えたり（繪本朝畫史）

チクイン　竹隱「タカタケイホ」

チクイン　竹隱「セウチ」

チクウ　知空　京都淨土宗壬生寺の住僧なり字は唯稱、京都の人、伸村氏、天機俊邁、群兒に異なり年甫めて八歳家兄に從ひて書を讀む恰かも宿習の如し兄之を鍾愛し文苑に遊遨せしめんと欲す空早に出塵に志し敢て點頭せず年十四細林に遊び遂に落髮染衣し心を梵籍に傾け晨開夕誦孜々倦まず居常專念宗を慕ひ心を靈して鑽仰す一時衆請に應じ選擇集を講ず時に年十八なり明年良澄和尚に從ひて俱舍台教を學ぶ三たび寒暑を更へ採汲の勞未だ嘗て倦色あらず凡そ負笈の徒所疑を澄公に決せんと欲する者あれば空ちして代りて之を辯析せしむ澄く者以て恒となす一日澄公空に謂ひて云く教乘の奧義徹底附屬す子此れより游方せよ見聞善く叢し且つ人の爲めに倦むこと勿れと空年二十三衆請に依て法華玄義を開講す名聲雷震四衆雲集堅年和州法隆寺に往き了生比丘に謁し毘尼藏を諮詢す又觀音院高策に從ひて法華勝鬘を聞き兼て瑜珈乘を學ぶ時に南京の諸德俱舍論を講ずんと請ふ因て俱舍を勸學院に講ず聽衆歎伏せざるなし京に歸りて茅屋を城北に構へ塞耳庵と號す堅く禁戒を守り口稱三萬日課懈るとなし或る時徒に謂りて曰く我道場に於て聖衆の來迎を感じ樂土の奇相を拜する一二にあらず然れども我之を屑しとせず汝等麗て人に謂ること勿れと晩に壬生寺の側に於て茆を把り廬を作り安養庵と號す彌陀三聖を安じ恒に竹扉を鎖し晝夜六時淨業怠りなし偶々仰望の信士あれば爲に安心起行の要を說く聞者感悔落泣せざるなし薙染受戒の者二百餘人延寶八年夏五月微疾を示す自ら起たざるを知り香花を佛前に獻じ四壁に淨土の變相を安置し五色の線を引き僧伽梨を着け至心發願し口に佛名を稱す徒衆唱和す空其の期至るを知る其の聲や否や空點頭微笑するのみ唱名の聲と興に安祥として逝く年六十四時に延寶八年五月十八日なり全身を壬生寺西南の隅に葬る空死に先づ三日諸徒に告げて曰く我平生白骨の圖を壁上に懸け冷座凝觀年已に久し故に色身全く白骨となり更に一物として用處なし豈に世情塵埃の識神を礙るあらんや汝等無常を觀ぜんと欲せば白骨觀に如くなし汝等其れ努めよ吾從來の行願今已に成巻あり（繪東國高僧傳）

チクウ　癡空　高僧なり字は懸澄愚谷と號す近江滋賀郡仰木村の人なり父は高橋業通稱は利八母は松野氏父母橫川の慈慧大師に禱て懷むことあり安永九年十二月五日を以て生る幼なる時衆然として愚の如し其の嬉戲常に群兒を集めて自から高座に登り說法する狀なる學族これを易どる獨叔父異愛し嘗てその頂を摩し母氏に謂て曰く斯兒癡ならず善く之を育せよと寬政元年年甫めて十歳比叡山の安樂院に登り覺忍和上を拜して落髮し五戒を受て大雲律師の法嗣となり紀伊和歌浦の作是庵に隨侍す四年律師寂す乃ち安樂院に歸り文道沙彌に依る九月海忍和上に從て八齋戒を受く十年二月性淳和尚を請ふて證明とし自誓して菩薩の十重戒を受ち時に年十九十月胎藏界の學法灌頂を受く疑空少より多病而して刻苦書を讀み腹食を廢するに至る故に羸弱日に加ふ然れども夷然として意となさず志尚遠大にして玫細に渉らず事に拙にして理に敏なり盲ふ所迂に似て往々驗あり享和元年二月金剛界の學法灌頂を受く五月始て正脫沙彌が俱舍を講ずるを聽く顯乎として比叡尾張の間に遊學し久しうして出藍の譽あり文化六年二月安樂院に下て仁海和上を拜し形同沙彌となる時に年三十是歳三月衆の請に應じて始て筵を叡の無動寺に開き俱舍の疏疏を講ず七年夏正脫世す九年春東叡山に抵り留錫六年法華玄義文句を講じ講學て安樂に歸る十四年進て具足戒を受く時に年三十八專ら律部の諸書を研究す文政元年傳法灌頂を受けて都法の大阿闍梨となる六年叡諦の世尊寺に移り摩訶止觀を講ず天保元年三月從一位紀侯十禪院を粉河に創し師を請ふて開基となす八月東叡の淨名院に輪住し自在心院菩賢行院の開大王に侍讀す十年安樂院に輪住す文久二年二月微疾を感ず三月朔日自ら起たざるを知り弟子を召して遺誡を告ぐ二日午後諸徒圍繞し佛名を默念す癡空起座珠を捻し晩に至て泊然として終ふ年八十三坐夏四十四淨名院に葬る癡空始めて講を比叡に開き簀を易ふること至まで其間五十四年大小の諸部を講貫し歳に虛日なし著す所の諸部闔乘力を戮せて上梓して世に行ふ嘉永五年十二月三大部講義板成る癡空天王寺に詣り源學臺の墓に展し卒業を告ぐ是れ知己の言に酬ゆるなり癡空十六の時淨名に住し詩を學ばんと欲し稿を濟して學臺に見ゆ一閱して謂て曰く師の才識を以て奚ぞ彫蟲の小技を事とせん宜しく三大部を精究し傍ら古文を學び以て註疏を著はすべしと癡空是れより翕然として學に就く學臺教ふるに作文の法を以てし癡空至れば必らず席を擯てこれを延く癡空深く之を惑ず故に老に至つて時々詩我江西徐孺子、一生知己有斯人を口誦すこれ蘇頴濱が張文定を想ふの詩なり蓋し學臺のために發するなり（行業記）

チクウ　竹塢「ハツトリチクヲ」

チクウ　竹塢「ヨカシマチクヲ」

チクウサイ　竹塢

チクウ　竹雨齋「アマリゲンチヤウ」

チクウ　竹雲「キヤウサンセツ」

チクガイ　竹岡「ホソヰチクコウ」

チクガイ　竹岡「イシカハシケイ」

チクグワイ　竹外「フヂヰチクグワイ」

チクグワイ　竹外「ナガヤマカウチヨク」

チクグワイ　竹外　江戸の俳人なり深澤世昧庵

と號す佐久間柳居の門本所割下水裏に住す御祐筆組頭なり（俳諧人物便覽）

チクケイ　竹溪「ミウラチクケイ」

チクケイ　竹軒「キノシタインリヤウ」

チクケン　竹軒「ヨカダチクケン」

チクケン　竹軒「サカイヅミチクケン」

ヂクゲン　竺源　字は東海俗姓は藤原氏紀伊の人母日輪を懷くと夢みて源を誕む幼にして法燈國師に侍し年十四の時髮を剃りて戒を受く己を責て參決し雲遊するに及び無關門公に東福寺に從ふ數年南院禪師に南禪寺に侍して記室及藏主となる龜山上皇遊に臨み源の提唱を聞き寮に幸して顧問せらる一衆皆榮と稱す西麗臺公興覺寺を主る日執權北條氏源を招きて典藏に充つ職滿ちて約翁儉公に建仁寺に謁して簽翰を掌る翁建長寺に移るに及び擧げて後版に居らしむ江湖を歷遊して要職に補せらる建武の末紀伊の誓度寺席を空うす光嚴上皇勅を降して住持せしむ御香法燈の闕を證す同門議して鷲峰山の席を董さしむ尋て筑前の聖福寺を領す印を解て京都に至るや帝召して法を問ふ特に綸旨を賜て再び聖福寺に住せしむ又旨ありて洛の萬壽、建仁寺を領して共に法燈を揭ぐ晩年洛西の妙光寺に退居し一日疾に臥す門人藥を進むに源曰く老病暫すべからず只死を待つのみと臨終に遺誡し偈を書し安然として逝く時に康永三年十月十六日なり年七十五、敕して法光安國禪師と謚す（本朝高僧傳）

チクコク　竹谷「ヨダチクコク」

チクゴ　ホウイン　竹谷　筑後法印　其姓名を詳にせず豐後法橋の門流巨勢派の畫家なり應永年間の人（狩野畫人傳）

チクサ　竹沙「イガラシチクサ」

チクサ　千種　假面十作の一にして薬く面を打ち又善く鼓の胴を作り鍔を作る彫刻の名手なり（假面譜）

チクサアン　千種庵（初代）　狂歌師なり名は恒海、通稱山口要助（一に山中氏に作る）と云ふ常陸の產なり壯年の頃江戸に來り淺草馬道に住し和漢の書を讀きて樂とす狂歌を嗜みて初霜の解又霜解道和留と號し後に霜翁と改む老後諏訪町に居を移して狂名四方に聞ゆ文化八年四月廿六日年五十一にして歿す今戸稱福寺に葬る法號「釋靜刹信士」と云ふ（古今狂歌人物誌）

チクサアン　千種庵（二世）　狂歌師なり名は勝田名を諸持通稱を雄輔と云ふ松蘿又芙蓉花とも別號す淺草誓願寺前に居住し土地の庄官たり國學及び俳諧歌を能くして二世千種庵の號を繼ぎ香以山人が狂歌の判者となり名聲四方に鳴る齊と呼び最もその業に秀づ不和を生じ因て其號を廢し更ふるに宇治紫文をもつてす以後都の作に係る物を唱ふ自ら飯を採て新に一中節數曲を作る頗る世に賞せられ遂に一家をなし後世に至るまで宇治の家元と稱せらる老後下谷池の端に移り住す安政五年二月廿三日年六十八にして歿す淺草馬道元東中谷金龍山妙音院に葬る法號「心靜院圓山道榮居士」と云ふ（古今狂歌人物誌）

チクサアン　千種庵（三世）　磐樹と稱す狂歌師なり姓は梅澤通稱を東臣林太郎と云ふ江戸本所元町に叙し文政五年左近衛權少將に任じ尋て權中將正三位に進む和歌は藤原忠良有栖川職仁親王久世通理等に學び又景樹季雄等と交り一種の風を詠ず故に冷泉飛鳥井兩家と好からずと云ふ安政元年八月廿八日歿す年五十八（諸家著述目錄）

チクサ　アリムネ　千種有梁　舊公卿なり家代々和歌を以て名あり明治初年父有任詳馬縣の社寺係となりし時同縣立醫學校に入り卒業後赤十字社病院大學病院に奉職し後本所區日本橋區等に開業せしも病の爲め更に埼玉縣鴻の巢又は下野日光町等に移り三十年貴族院子爵議員に當選して上京したるが三十七年改選の際之を辭し京都に模範養蜂場を設けんとて計畫する所ありしが病竟に癒えず三十九年七月十一日東京に於て歿す

チクサイ　竹齋「カドリチクサイ」

チクサツ　セイスケ　竹齋成介　陸軍騎兵中尉なり岩手縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第五師團騎兵第五聯隊附として從軍中三十八年六月十六日清國盛京省三道林子附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

チクサ　ダイジャウダイジン　千種太政大臣「ミナモトミチスケ」

チクサ　ダダアキ　千種忠顯「ミナモトタダアキ」

チクサドノ　千種殿「トモヒラシンワウ」

チクザン　筑山「ナルシマリヤウジヨウ」

チクザン　竹山「ナカヰチクザン」

チクサン　竹霰　豐後の刀匠にして應永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

チクシン　竹心「セウチ」

ヂクシン　竺信　禪僧なり城州興聖寺の住僧なり梅峯と號す、大阪の人俗姓舟橋氏、年甫めて三歳屏風の字を讀む遠近傳て異とす八歳にして塾に就き書を讀む僅に旬日に至て四書十卷を朗誦す時人其の穎敏を歎ず十一歳にして播州安養寺長屋養公に投じ剃髮す受具の後南都に遨き經論を研鑽して其の義髓に徹す既にして萬安和尚に興聖寺に參ず次て關東の叢社に徧歷なり正三位有綱の二男千々麿舍と號す文化四年從五位下に叙し文政五年左近衛權少將に任じ尋て權中將正三位に進む和歌は藤原忠良有栖川職仁親王久世通理等に學び又景樹季雄等と交り一種の風を詠ず故に冷泉飛鳥井兩家と好からずと云ふ安政元年八月廿八日歿す年五十八（諸家著述目錄）

チクサ　アリコト　千種有功　有名の歌人

す後ち輕禪を山崎寺に招く禪の意に順ひ興聖寺の龍蟠を見る蟠一見之が器とす信朝夕咨問暑く機要を知る一日問答の次機語相契ふ因りて衣偈を承く嘗て播の護生寺に在り第一座に居る次に加北に遊歴す復た播州に歸て樂師養公を省觀す公信の至るを喜び院事を領せしむ寛文丙午能州總持寺に出世す但州の養源寺に移りて緇素を風化す聲譽方に震ふ豐岡の城主京極氏深く信の德を欽し外護となす丙子の秋信州の太守懇請して興聖寺の秋水尸黄門光圀遙に信の風德を聞き請じて耕山に館す居ること三年病を謝して舊土に歸る庚辰の歳鷲峰の卍山禪師と議して官衛に訴へ大に宗弊を敕はんと欲す螢し百年來洞門中にあり間々院に依て嗣を易へ或は某師寂するの後同門代て付すること有るを憂へ自ら洞門創談を撰て以て敕弊の先容となす已にして江戸に到り城外青龍寺に寓す且つ宗門の利害を陳べ自ら愬へて忠憤已まず更に瑠璃光寺の田霜長老の力を協せ助くるに會す是に於て癸未の春飛驒守阿部氏及び本多永井の諸氏書かに其の身を忘れ法の爲にするの誠を察し乃ち上奏し允準を賜ふ永平總持及び宗門の巨刹數十員を召して各〻處分を聽く秋八月特に條令を下して永く上の如き弊惡の事を禁ず九月南歸し直に和の白雲山興福寺に入り林丘客話を著し以て弊を革め惑を解くの意を述ぶ寶永丁亥の秋疾を示す躁め先づ徒に命じて棺を作らしめ自ら入棺の頃を戒く十一月十九日諸徒を集めて警戒し華を求めて偈を書し睡るが如くにして坐化す年七十五臘緣あり頗る叢林に行はる（洞上聯燈錄）

チクシン　竺心紹智「セウチ」五世

セウチ　筑水「クボチクスキ」

竹水「サタケチクスキ」

竹醉「ハタナカセイザン」

竹瑞「オヲノゲンカク」

竹石「ナガマチチクセキ」

竺僊「セキヂクセン」

竺仙「ボンセン」

チクセン　竺僊仙公　元の歸化僧なり來禪寺、來々、又梵仙と號す早歳行脚して晦機、潙雲、外鄰、中峰本等の諸老を歴叩す凝滯未だ脱せざるを以て憂となす古林の道望を聞き即ち往て從ふ遂に潤然者悟する處あり後ち東浙に還り荊楚に遊び徑山に登る明極本朝の聘に應ずるの處なし出て諸老宿に參じ遂に丹の虛屋の上堂に至り首山竹篦の話を聞き脱然として契悟し解する所を陳ぶ屋無然として之を印す長祿己卯席を闢て住持し次に青原寺に移る緇白翕然として常に六百員に減ぜず文明三年九月二十七日脱然として化す年五十三僧臘三十七（洞上聯燈錄）

チクハクエン　竹柏園「ササキヒロツナ」

チクバノトモヨシ　竹馬友義「ヤマシタミカゼ」

チクフウ　竹風「ゴトウシザン」

チクヘイ　竹平「カンザキノリヤス」

チクホウ　竹圃「ヲカダチクホ」

チクボク　竹墨「ウエキチクホウ」

竹木　書人なり祐勢を學びて雜圖を畫けり（本朝書史、鑒定便覽）

チクマ　ナガヒコ　千熊長彦　何處の人なるやを知らず或は曰ふ武藏の人なりと應神帝丁卯の歳百濟新羅朝貢す新羅路に百濟の使人を勒して其の貢物を奪ひ其の國の賂物を以て相易て獻ず朝廷百濟の使を詰問す百濟の使久氏等實を以て對ふ是に於て敕して新羅の使者を鑒責し遂に使を遣して事情を察せしめんと欲し天神に筶を以て使すべき者を祈る天神誨へて曰ふ宜しく武内をして議を定めしむべしと千熊長彦を以て使者とす因て長彦を新羅に遣して之を責めしむ已已の歳荒田別、鹿我別を遣し兵に將として新羅を擊て之を破らしむ諸軍皆な歸る獨り長彦百濟に至り其の王肯古と辟支山に盟ひ又古沙山に登り共に磐石の上に坐す肯古盟ひて曰く自今以後永く西蕃と稱し春秋に朝貢せん乃ち長彦と其の國都に歸る禮待厚を加ふ久氏を遣して歸朝を護送せしむ辛未の歳久氏使事竣て歸る又た長彦に命じて共に百濟に至り詔命を宣布せしむ明年長彦還る百濟王復た久氏をして朝貢せしむ是より歳貢絶えず長彦與て力あるなり（大日本史）

チクラウ　竹浪「サトウチクラウ」

チクリ　竹里「イトウチクリ」

チクリ　竹里「カトウチクリ」

チクリンバウ　クワウエイ　竹林坊光映　上野東叡山の亂に覺王院と名る齊うせる僧なり字は疊翠蘭樹と號し又一如庵と稱す豐後國東郡中村の人俗姓赤松氏文政二年十二月十九日生る幼時多病且肉食を忌み僧たらんことを請ふ父母聽かず映强請して止まず文政十一年十月甫て十歳江戸に來り同十三年十一月二十四日遂に父母の允を受け東叡山見明院光千に就き薙染し居ること數年學業大に擧る天保五年十一月初て輪王寺宮一品公紹親王に謁し同十年八月比叡山に登り廣學堅義の大業を修め同十五年七月本住院に主となる弘化二年九月大阿闍梨位に進み魚山梵唄秘曲を傳受す同三年三月仁孝天皇中陰の法會に列す嘉永元年六月管領宮の命を奉じ東叡山に還り修禪院の主となる後ち更に壽昌院に轉じ德川氏靈廟の別當職に補す同五年五月大僧都に進む此の年冷泉中納言爲理の猶子となる文久元年十月命じて睨近となし清淨林院の唱號を賜ふ同三年八月大和國多武峰竹林坊に轉任し學頭に補し權僧正に進む弟子光弼東叡山等覺院に居り法統を繼ぐ同年十月京都に上り初めて天顔を拜す時に菁蓮院宮尊融親王を以て紫衣を賜ふ慶應三年八月僧正に進む同年十月京都に上り再び天顔を拜す是れより先き公武合體論の起るや數〻貴顯紳士の間を奔走して私かに國政を論じ頗る意を佐幕に傾けたり然れども事遂に成らざるを以て悒鬱として談山に在り會〻慶應四年春討幕の軍起り關東の騷然たるを聞き心平かなる能はず閏四月遂に自ら江戸に下り東叡山學覺院に入り密に執當覺王院等と意を通じ隱然諸藩の志士と結ぶ五月十五日東叡山事變起るや公現親王を護り內佛役僧淨門院邦仙常應院守慶の二人と共に三河島村を經て尾久村に至り潛匿し翌十六日尾久村を出て淺草東光院に至る此の時に當り官軍親王の行途を探ること甚だ嚴にして或は金を賂し或は物色す而して脱兵亦た密かに親王を拉し去つて爲すあらんとす故に光映は翌十七日唯單身親王を護し共に貧僧苦學の旅裝をなし市ヶ谷自證院に至る途次前日戰鬪の爲め斃屍猶ほ纍々として鮮血淋漓たる上野廣小路の地を通過したるが如きは其の豪膽實に愴愕せざるものなし其の自證院にあるや院主亮榮と戚協はず親王之れを憂へ諭して映を去らしむ映止むを得ず自證院を出て一時向島長命寺に潛み後遂に奥州に至り再び覺王院等と計畫する處あり然れども雄自ら說協はず往々衝突ありと雖ども其の佐幕たるや相同きなり其の奥羽に俗姓赤松氏文政二年十二月十九日生る幼時多病且肉食あるや列藩の重臣と交り頗る尊重せらる同十一月公現親王使を相馬口總督四條隆謌の軍門に遣し陳謝狀を呈せらるゝに先だつ數日暇を賜ひ仙臺仙岳院を去り出羽に赴き庄內藩に投じ歸を官に謝す官處するに寬典を以てす同年十二月大阪に還りて四天王寺に居り蘆愼了明治二年十月公現親王天璽已に解くと聞き比叡山に歸り金臺院の別院に居る公現親王曾て清淨林院の號を賜ふ自邇して如々院と稱す是より專ら世塵を斷此に亟つて自邇して如々院と稱す是より專ら世塵を斷ち淨業を修す三年三月權大僧正に拜し延曆寺の主となる七月官台宗の所轄を命じ管長に補す爾後拮据黽勉宗規を制定し衣體の格を定め台學の科を定むる等主として比叡山の荒廢を興し堂格の廓杓を修す其の績傑然として逃すべし明治十一年十一月凱奥の巡幸を奏請す主上大隈重信をして代りて登山せしむ同十二年四月表を上り職を辭す官旨を聽し之を止む同五月大教正に補す同七月管長を辭し十四年六月遂に病を以て職を辭し金臺院に轉す同二十一年七月山科毘沙山堂に移り講筵を開き三部經を校正す同二十七年六月病を以て金臺院に歸り同二十八年八月十五月寂す

チクリンキン　ザダイジン　竹林院左大臣「フヂハラキンヒラ」

チクリンキン　ニフダウ　竹林院入道「サイヨンジキンヒラ」

チクワウ　智光　高僧なり河內の人、禮光と友たり南都の元興寺に住し智藏法師に就きて三論の奥旨を得智藏の室中二人を推して神足とす禮光晚に不語戒を持す逝るに及びて智光常に其の生を夢みるに嚴麗光潔種々の奇勝あり乃ち前みて之を問ふ禮曰く此れ極樂界なり汝常に我を懷ふを以て故に暫く此に至る宜く速に歸るべしと光曰く若し此れ極樂界たらば素より余に願ふ所なり惡んぞ歸らんと禮曰く汝淨業なし安んぞ此に居るを得ん光曰く予が平生の行を顧みるに未だ我に過ちあらず唯〻近來口を柱るのみ我れ何の尤あらんと禮曰く往生の資料は觀想に如くはなし是を以て言語を絶し人事を謝し以て單に淨觀を存す功之より大なるはなし光曰く然らば當に我に其の訣を授くべし禮曰く須らく佛に問ふべしと光遂に佛の處に詣り稽首して云く何等か是れ往生の正業なる佛曰く如來の相好及び淨土莊嚴を觀ずるは是た正業なり光曰く今此の極樂界を見るに廣博嚴飾にして心眼及ばず況や如來の相好をや豈に凡慮の能くする所ならんやと是に於て彌陀金色の臂を擧げて大光明を放ち其の掌中に於て小淨土を現ず嚴飾具足す光既に寤めて後ち書工に命じて佛掌の淨土を圖して以て觀法となす後ち吉祥にして寂す（元亨釋書、東國高僧傳）

チクヲ

チクヲヲ

竹塢「ハツトリチクヲ」

チクヲヲウ

竹塢「ヲカジマチクヲ」

チクヲヲウ

竹翁「カツダチクヲウ」

チクヲツ

竹翁「ソウシヨウ」

智月　尼近江大津の俳人なり乙洲の母にして共に芭蕉の門人なり尼嘗て芭蕉に向て句を乞ふ曰ふ紀念となさんと欲するなりと蕉六十有餘の老媼に遺句を乞はれて忸怩たりしと雖も苦笑して終に之を書す是歳蕉歿す尼葬め蕉の死を知るものゝ如しと（俳林小傳、蕉門頭陀物語）

チゲツ　遲月　俳人なり名は如日號は照空、空阿と稱す文化九年十月十五日門人碑を深川圓覺堂子院不動院中に建つ（江戸名家墓所一覽）

チゲツアン　池月庵「タチバナカウコ」

チケン　耻軒「ゴキヂケン」

チゲン　持軒「ゴキヂケン」

チゲン　智玄　醫僧なり下野安蘇郡糖尾郷に居る嘗て宋に趣きて醫方を受く後鳥羽帝不豫なり藥を進めて速かに癒ゆ因て法眼に叙せらる世の所謂る錄事法眼是れなり（皇國名醫傳）

ゲゴクダイフ　地獄太夫　和泉國堺北の莊高須の町の琢斧長者が抱妓なり實は梅津某の子如意山の雪中に山賊に獲られ妓に賣らる容姿艷麗年十九にして名聞聞に聞ゆ一休和尚地獄なる名を聞て之を心憎しとし一日醉に乘じて之を樓に訪ふ一休の法衣襤褸の如しを而して地獄其凡僧に非るを知り登じて禪を問ふ一休敎ふる所あり地獄一休の行を試みんと欲し美姫を聘して父を喪となす古林の道望を聞き即ち往て從ふ遂に潤然者悟する處あり後ち東浙に還り荊楚に遊び徑山に登る明極本朝の聘に應ずるの處なし出て諸老宿に參じ遂に丹の虛屋の上堂に至り首山竹篦の話を聞き脱然として契悟し解する所を陳ぶ屋無然として之を印す長祿己卯席を闢て住持し次に青原寺に移る緇白翕然として常に六百員に減ぜず文明三年九月二十七日脱然として化す年五十三僧臘三十七（洞上聯燈錄）

チクハクエン　竹柏園「ササキヒロツナ」

チクバノトモヨシ　竹馬友義「ヤマシタミカゼ」

チクフウ　竹風「ゴトウシザン」

チクヘイ　竹平「カンザキノリヤス」

チクホウ　竹圃「ヲカダチクホ」

チクボク　竹墨「ウエキチクホウ」

竹木　書人なり祐勢を學びて雜圖を畫けり（本朝書史、鑒定便覽）

チクマ　ナガヒコ　千熊長彦　何處の人なるやを知らず或は曰ふ武藏の人なりと應神帝丁卯の歳百濟新羅朝貢す新羅路に百濟の使人を勒して其の貢物を奪ひ其の國の賂物を以て相易て獻ず朝廷百濟の使久氏等實を以て對ふ是に於て敕して新羅の使者を鑒責し遂に使を遣して事情を察せしめんと欲し天神に筶を以て使すべき者を祈る天神誨へて曰ふ宜しく武內をして議を定めしむべしと千熊長彦を以て使者とす因て長彦を新羅に遣して之を責めしむ已已の歳荒田別、鹿我別を遣し兵に將として新羅を擊て之を破らしむ諸軍皆な歸る獨り長彦百濟に至り其の王肯古と辟支山に盟ひ又古沙山に登り共に磐石の上に坐す肯古盟ひて曰く自今以後永く西蕃と稱し春秋に朝貢せん乃ち長彦と其の國都に歸る禮待厚を加ふ久氏を遣して歸朝を護送せしむ辛未の歳久氏使事竣て歸る又た長彦に命じて共に百濟に至り詔命を宣布せしむ明年長彦還る百濟王復た久氏をして朝貢せしむ是より歳貢絶えず長彦與て力あるなり（大日本史）

チクラウ　竹浪「サトウチクラウ」

チクリ　竹里「イトウチクリ」

チクリ　竹里「カトウチクリ」

酒殺を設けて之を饗す一休醉ふて且つ舞ひ終に仆れ臥して吐す地獄自ら看護の勞を採る款待頗る至る傳へ云ふ一休が樓閣に倚て吐く所の物池中に入て魚となると地獄乃ち地獄極樂の狀を問ふて教示を得又禪に參して悟道を得たり一日病あり珠名長者に言て曰く死は歸なり生ける者は必ず滅す姿の病癒ゆべからず唯生育の恩に報ぜざるを饋むるのみ願はくは一休師に會して入滅の度を得んことなと偶〻一休地獄が死期を知て來り會す地獄沐浴衣を改め端坐琴を撫し悟道の曲を彈じ了りて殁す遺書に曰く「吾死なば燒くな埋むな野に棄てゝ飢たる犬の腹を肥せよ」此厭世に一休の作と云傳ふ何れか是を知らず）と一休命じて其の如くす四十九日の後一休珠名の長者及び兒悟助と骨を收め八木郷久米田寺に火葬す今女郎塚と云ふ者是なり地獄が衣る所の袿衣は六郎兵衛入道蓮行の圖を以て繡する所地獄變相の繪なり後之を以て卓圖に製し丹後成相觀音堂に藏すと云ふ（泉南口碑に傳ふる所）

チゴ　トナン　兒圖南　薩摩俊の儒者なり名は一鵬、圖南は其字、字を以て行はる一字は希雲、薩摩の人なり父を金麟と云ふ學を好みて鄕里に教授す五男子あり圖南を長とす人と爲り渾撲にして衷美を事とせず孟落にして高世の風あり嘗て江戸に來て室鳩巢を師とし蘆德林、集大典、伊知量山、維深田維等と友とし善く日々に相與に周旋し相得て歡を極む是の如きと三駿圖南學大に進み師を辭して國に歸る國中の士大夫共に其の材を稱す薩侯擢でゝ文翰を掌らしむ薩人最も此の職を榮なりとす圖南の名大に振ふ寛保辛酉職を以て江戸に至り何ぱくもなく病みて藩邸に殁す年四十一、圖南容貌英偉にして一目重瞳子衆中に在りて頎然たり書を高玄岱に學びて艸隸を善くし宏放其の人と爲りに類すと云ふ家世々武人圖南も亦た豪健にして弓馬を使ひ銃を能くし常に暇あれば出でゝ山林を跋渉して已まずと（事實文編儒林部）

ヂゴエモン　治五右衛門　姓氏詳ならず越中の人にして砥波郡城端邊の祖なり一說に文明年間淨土眞宗の僧祐玄といふ者あり本願寺の僧蓮如と共に越中に來る治五右衛門は即祐玄の孫なり嘗て鎖西に遊び支那人より漆畫の妙技を傳へ家に歸りて製作をなす其の製は黑漆に各色の漆或は五彩の蜜陀僧を以て畫きたるなりこれを城端鎗又治五右衛門塗といふ（工藝志料、美術新報）

チサイ　チザウ　耻齋　智藏　吳國の僧なり福亮法師が俗たり時の子なり嘉祥に謁して三論の微旨を受け本邦に來りて法隆寺に居し盛んに空宗を唱ふ白鳳元年僧正と爲る（元亨釋書）

ヂザウキン　ソウジョウ　地藏院僧正「シンゲン」

ヂザウキン　ダイソウジョウ　地藏院僧正「カクユウ」

チサト　智至　千里「ヘグリチサト」　禪僧なり字は愚溪法を龍泉淬禪師に嗣く行業確實にして世緣に拘泥せず師叔性海公請方を勸化して重て釋書を得る至一筆に繕寫す南禪寺の竺仙和尙偈を寄せて之を稱す初め筑前の承天寺に住し後遷る至嘗て論じて禪侶の師位を猥りにす虛空を圖讖して何をか作んと即ち至呵して曰く汝等事業概此類なり（本朝高僧傳）

チジツアン　遲日庵「ツダハウシウ」

チシン　知眞「レウオンニ」

チシンアン　知新庵「コンドウチシンアン」

チジュン　智順　越前松隈寺の住僧なり承顏と號す初め教乘を習ふ玉田和尙に從て悟道す田下世せんとするや順を以て院事に任ぜしむ後ち遷て總持寺を領す（洞上聯燈錄）

チショウ　智證　延曆寺第五世の座主なり名は圓珍、姓は和氣氏讃岐那珂郡の人、弘法大師の外甥、父名は宅成母は佐伯氏、弘仁六年を以て生む幼にして岐嶷目に重瞳あり頂骨隆起して覆盆の如し始めて八歲父に謂て曰く內典の中に應さに因果經あるべし我れ誦讀せんと欲すと父陰かに之を奇とし即ち經を索めて以て與ふ智證歲にして毛詩漢書を讀み能く其の大義を了す十五にして延曆寺の座主義眞法師に師事す何ぱくもなく所習を試みられて得度納戒す山に居ること十二年力を極めて修練す名天子に聞え厲く恩輝を蒙る嘉祥三年一夕夢に山王の神唐土に入りて法を求むるを勸む是に於て海に航して福省に抵る時方に宣宗の大中七年なり開元寺に寓す梵僧に逢ひて悉曇章を學び金剛界大悲胎藏等の法を受け又存式法師が大乘の經律を講ずるを聽く後ち天台に遊びて石橋を觀る相傳ふ此橋ば乃ち智證大師說法の時擊て衆を集むるものと大師滅せし後ち橋即ち聲なし智證試に石を以て之を擊つに響き山谷に震ふ一衆驚き異とす遂に國清寺に就て物外法師が既にして去りて長安の金法大德に謁し瑜珈の密旨を受く一日阿闍梨位の灌頂を授けんことを請ふ金法雖も色あり大師が底蘊を探るに及び其の庸器に非ざるを知り乃ち授くるに阿闍梨位の灌頂を以てす天安二年歸朝し乃ち授くるに阿闍梨位の灌頂を以てす天安二年歸朝し台宗の密藏及び諸宗の經書千餘卷を朝廷に進む上大に悅ぶ眞觀六年智證に勅して仁壽殿に於て大悲胎藏の灌頂壇を結ばしめ上親ら大臣三十餘員と入壇せしに智證の威光赫如たり乃ち眞言止觀の二法を弘傳すべしと云へる公驗を賜ふ緇伍之を榮とす是より常に詔して內宮に講ぜしむ一日上不豫なり之に勅して咒願せしむるに立ち所ろに癒ゆ八年發して梵壇を冷泉院に築き聖壽を祝す十年帝江州の園城寺を以て傳法灌頂の道場とし智證に賜ひ唐土より傳來せる佛像經籍を安置す智證園城寺を中興し寺門の天台の祖と稱せらる盞し慈覺此の時台界に勢力ありて其の上に出で離きを知り別に寺門を開きしなり而して未だ幾くもあらずして慈覺寂するに會し延曆寺の座主に升る寬平二年僧都となる終りに臨み門人に謂て曰く如來は法を以て身とす比丘は慧を以て命とす法懸菊も傳へ得ば何の死と云ふことか之れあらん汝等宜しく之を記すべしと夜に及びて定印を結び佛を誦す五更に至り水を索めて口を漱ぎ大衣の裂裝を枕とし右脇にして逝す時に寬平七年四月晦日なり年七十八台山に葬る門弟子中阿闍梨の位を受けしもの百餘人剃髮大比丘となるもの五百餘人延長五年諡を智證大師と賜ふ（元亨釋書、東國高僧傳）

チショウ　ヂイ　稚松亭「ツツミカウガイ」

チセイ　智靜「クワンジュ」

チセウ　智樵　越前心月寺の住僧なり夫巖と號す海關に侍して研磨十年機語相契ひ遂に付囑を蒙る嗣て心月寺を主り慈眼寺に遷る晚に英林寺を創して殁すと云ふ（洞上聯燈錄）

チセキ　知石　京都の俳人なり、鈴鹿寸松堂と號す自から蘆花翁と稱す弱齡にして嗣田雞石の門に入る雞石之れを上して執筆を役せしむ故に師の顧愛を得て家秘口傳之を傳へて遺なし家書野馬叢集三卷あり元文五年十二月十三日を以て殁す年六十（俳諧年表、俳諧大系圖）

チゼツ　チセン　癡絕「デンシン」　智遲　播州魚崎眞淨寺の住僧にして當時の鴻匠なり智德一世を風靡す然るに學解に就いて霧師の所立を難じ一己の見識を立つ之に由て數〻本山に召されて料繩を蒙る其頃叢林の諸龍象と數番の對決往復の次第傳へて遺策にあり其傳未だ詳にせず（清流紀談）

チセン　智泉　畵僧なり讃州の人、弘法大師の族姪なり弱歲より其巾瓶に侍すること二十四年遂に兩部の密灌を承く高尾山の三綱司となり後ち東寺に居す能く諸天を畵けり（皇朝名畵拾彙）

チセン　智闡　加州大乘寺の住僧なり提宝と號す幾年に大乘寺に參ず其の提唱を聞て豁然として悟入有司偏く靈祠に叩く俱に應なし使を遣はし大乘に詣りて之を禱らんと請ふ閉窗めに水面に向て誠み說く即時怒雷發して雨盆を傾るが如し是の年大に稔す朝野之を稱す是れより法席益〻盛なり天文五年四月二日疾なくして寂す年七十六（洞上聯燈錄）

チソク　知足　俳人なり尾州鳴海の人姓名は千代倉勘左衛門其居を寂照庵又蝸籠亭と號す蕉翁の友たり其秀句に曰く「から風や吹程ふきて霜白し」寬永元年四月十三日殁す年六十六（俳諧奇人談）

チソクアン　知足庵「ノダチソクアン」

チソクアン　知足庵「スズキチソクアン」

チソクアン　遲速庵「サクラキヨシミツ」

ヂソイウ　知足庵月悠「イシヤマゲツイウ」

チソクサイ　知足齋　名は孝親字は和卿初め貫次郎と稱す信濃國諏訪郡湖南の鄕士、岩本忠義の第二子なり天資溫厚學を其父及び兄麓洲に受け最も周易玄義を著はし中歲に及びて好みて老莊を讀み摩氣を脈ひ棲隱を樂み日々深山幽谷の間に盤旋し飢うれば木實を食ひ渴すれば山泉を飲み家居甚だ稀れなり既に老いて明を失ふ乃ち掌を拍ち悅て曰く我今にして肉眼を失ひ心眼を開くを得たり身も亦將に不老不死の境に至らんとすと是に於て廬を湖南山中老松下に結び扁して松韻亭と曰ふ琴を鼓す伯牙の趣あり時に和するあり鄕人松琴仙人と呼ぶ子五人あり皆老莊を修む然れども東西居を異にし常に來往せず一日相會し靜坐道を談ず後數日を經て父子相俱に廬を棄て〻去る其終る所を知らず時に年百二十有一事實慶長十八年八月に在りと云ふ（賢人傳）

チソクバウ　イツペウ　知足坊一瓢「イツペウ」

チソクキン　クワンパク　知足院關白「フヂハラタダザネ」

チソクキン　セツシャウ　知足院攝政「フヂハラタダザネ」

チソクキン　ゼンカフ　知足院禪閤「フヂハラタダザネ」

チソン　智尊　壬申の亂兵に將として弘文帝の先鋒となり大に瀨田に戰ひ兵敗れて死す（大日本史）

チタク　雉啄　安房の俳人なり大磯明立庵に住す葛三の門弘化元年六月十四日を以て殁す（俳家壺故事）

チタテ　千楯「キドチタテ」

チタテ　千立「カドチタテ」

チチク　遲竹　千々廼舍「チグサアリコト」

チヂノヤ　コジラウ　秩父小二郎「ハタケヤマシゲタダ」

チチブ　シャウジ　秩父庄司「ハタケヤマシゲタダ」

チヂワ　ゴラウザヱモン　千々輪五郎左衛門　天草一揆の將なり元加藤俟の臣にして鈴馬の衛を能くす父五郎左衛門二千石を領し朝鮮の役に從ひて功あり清正卒し忠廣に仕へ尋で德川氏に屬す後去て豐臣秀頼に屬し戰死す五郎左衛門天草に移り住す寬永八年五月の節島原の庄官甚兵衛の家に飲み共に甚兵衛の伯父赤星宗祐の宅に至り蘆塚忠左衛門等と遂に叛を謀り島原城に據て蜂起し官軍を破る十五年二月廿七日落城の時五郎左衛門鍋島氏の勢兵を拒ぎ其將鍋島甲斐守と戰ふ是より先き五郎左衛門若將の一騎衆に擢でゝ我兵數十か疊する見槍を把て向ひ若將の鎧胴を刺す甲堅くして入らず鎌爲に折る因て刀を拔て相擊つ勝敗決せず日昏るゝに因て互に後日を約して別る五郎左竊に其の勇に感じ之を人に問ふに鍋島氏の息甲斐守直澄なりと是に至て爲に首を授けんと欲し刀を投じて相搏ち故さらに自ら倒る直澄亦た其の五郎左たるを知り因て冒ふ所を問ふ五郎左城中伏兵の景況を密告す但し他將に告ぐべからざるを以てす後ち鍋島氏果して伏兵に遭ふを免かれたり直澄曰く汝子なきか吾之を臣とせんと五郎左感泣對へて曰く吾に子あり今八歲肥後八代郡の法花寺に僧たり公若し救ふ可くんば希はくは之を取れと言了りて首を延べ刃を受く時に年五十二、子齋宮姓を變じて原氏を稱し鍋島氏に仕へ祿千石を領す（天草騷動記）

チチヰ　コウ　乳井貢　建福といふ津輕藩士なり弘前に生る寶曆三年藩主信寧襲げて勘定奉行となす當時藩內の財政紊亂し民庶の困苦甚しかりしが貢銳意財政の整理に力を盡し之が挽回に力めたり數年ならずして財政の餘裕を見るに足れり後罪を得て川原平村（弘前の西南七里餘）に蟄居を命ぜら寬政四年四月六日殁す年八十二

チツウ　智通　高僧なり齊明帝四年七月僧智遠と唐に遊び三藏玄奘法師に謁して唯識の旨を究め國に歸るに及び時葉通の親く學を奘師に受る為に或な翕然として之れ從ふ是に由りて聲稱藉々たり白鳳元年僧正の職に任ぜらる後ち其の終る所を知らず（元亨釋書、東國高僧傳）

チヅカ　ソクソウ　遲塚速曳　通稱九二八常陸の儒者にして守山藩に仕ふ（諸家著述目錄）

チヅカ　ヒサノリ　遲塚久則　裝劍彫工なり文次と稱し江戸小石川に住す元と水戸大學頭の家臣

なり其の技頗精巧にして兩面の色給分一流の元祖なり（裝劍奇賞）

チヅコ　ニョウウ　千鶴子女王　織仁親王の女なり享和元年中宮寺を繼ぎ文化三年尼と爲りて名を榮昵と改め尊脩と號す戒を僧叡辨に受て後ち弘化二年五月薨ず時に年五十四謚して慈信院と號す（野史）

チテウ　智町　江戸の俳人なり氏は岩本机光舍と號す又蘭鯨人と稱す二世乾什の門人なり（俳諧人物便覽）

チヂン　知傳　或は云ふ相國寺の僧なりと單庵と號す性圓滑を好み周文に學ぶ後宋人牧溪玉澗の筆意を追慕す好みて水墨の圖を作る（本朝畫史、鑒定便覽）

ヂトウ　テンワウ　持統天皇　第四十二代の帝なり名は鸕野、天智帝の第二女にして天武帝の后となり每に天武を輔け多く朝政に預る天武崩ずるに及び后朝に臨みて政を聽くこと五年帝位に即き和州藤原宮に遷居し位に居ること十年改元する者二朱鳥大寶位を輕皇子に讓り自ら太上皇と號し後六年にして崩ず壽五十八安古山の陵に火葬す（大日本史）

チトクキン　クワンパク　知德院關白「フヂハラアキヨシ」

チトツ　智訥　高僧なり字は古劍三光國師に參して悟解純眞なり衆のために依賴せらる和泉の大雄寺に出世す學資奔會して講壇甚た熾なり南朝の後村上帝其偉望を聞き召して法要を諮はせられ寵遇殊に厚かりき帝嘗て訥と傳燈錄數則の因緣を商議せらる訥曰く陛下山僧が口辯を取るとなかれと帝得る所あり特に號を賜ひて佛心禪燈國師といひ寺を陞せて洛の南禪寺に比すといふ（本朝高僧傳）

チトラ　チドリアン　千虎「カハサキチトラ」千鳥庵「カハサキシゲヤス」

チノネ　イヨノスケ　茅根伊豫之介　水戸藩士なり名は泰、字は伯陽、奕絲と號す幼より遊戲を喜ばず母授くるに句讀を以てす誦讀倦まず長じて學を好み風度端凝厚重にして大志あり會澤正志藤田東湖等之れを奇とす每に謂ふ二十年後吾輩の志を成すものは必ず此の子なりと引て忘年の友と爲す藩主齊昭致仕するや結城貢蕃等幼主を擁して國事を恣にす伊豫之介以爲らく力を國家に致すこと能はずんば退て人材を教育し以て他日の用に供せんに若かずと乃ち雛を下して子弟に教授す其學敬神愛民に本づき尊王攘夷の義を明かにす時に年二十二なり齊昭聞て其の志を嘉みし親ら「默而識之、學而不厭、誨人不倦」の語を書して之れに賜ふ伊豫之介益々感奮し教育を以て己が任と爲す日に邇み近隣諸藩より來遊する者多し齊昭寛白す生徒日に邇み近隣諸藩より來遊する者多し齊昭寛白するに及び再び要職に擧げられ江戸邸に徙る時藩主慶篤大に文武を振興せんとす伊豫之介學令一當を草して之を上る當時學則大に備はるものは伊豫之介與て力あり安政五年幕府復た齊昭を幽す時に幕府の有司剛愎自ら用ひ復た正義を顧みず伊豫之介之れを慨し執政安島帶刀と議り諸藩有志と力を協せて國事に盡瘁す六年四月幕府命じて伊豫之介等を召す伊豫之介自ら必死を分とし父母の靈位に別を告げて出づ幕府鞫問するに鵝飼吉左衛門と通謀して僧神に結び幕府を誹謗し一橋刑部卿を四城に入れ宗統を襲がしめんことを謀るとなし且つ勅書降下の事に關して訊問を受く伊豫之介慨然として事々皆誣罔なるを辯じ辭理明晰、幕吏幾び反問するも寛に屈せず然れども幕吏罪を誣ひて斬に處す時に八月二十七日なり年三十六、伊豫之介刑に臨み天を仰ぎ再拜して刃を受く忠憤の氣顏色に見はれ幕吏皆戰慄す（文久二年十一月幕府朝命を傳へ伊豫之介の罪を責し其の後を錄せしむ伊豫之介學術深邃詩文を能くし著はす所投筆餘錄、息距備考、翰訊筆記及び詩文集若干あり明治二十四年十二月特旨を以て正四位を贈らる）

チヤバ　イヅタラウ　千葉郁太郎　勤王の志士なり但馬氣多郡栗山村の人田路鼎齋の子にして勤王介が國事に盡瘁せるを見て其指揮に從ひ東西に奔走し故あり千葉氏を名乘る文久二年四月伏見寺田屋の事起りてより叔父と共に捕へられ鹿兒島に送らるゝ途中細島に於て薩兵の爲めに殺さる年十八明治三十一年七月朝廷其忠志を追賞し特に正五位を贈らる（殉難錄稿）

チヤバ　ウヂタネ　千葉氏胤　貞胤の子なり父の職を襲ぎ千葉介と稱し從五位下に叙せられ和歌を能くす正平六年足利直義男山に據る氏胤往きて之に屬す已にして又た尊氏に從ひ直義と薩埵山に戰ひ道ひて上杉憲顯等を擊ち早河尻に戰ひ之を破る明年復た尊氏に從ひて新田義宗と箱根峠に戰ひて之を敗る十八年病みて美濃に死す（大日本史）

チヤバ　ウンカク　千葉芸閣　江戸の儒者なり名は玄之字は子玄芸閣は其の號、茂右衛門と稱す江戸の人、初め熊本の儒官秋山玉山に學ぶ其の塾に寓すること五年、玉山期滿ちて國に歸る此より塾を開むこと又五年終に詩藪文章を以て時に稱せらる其の學玉山に受くと雖も性理の說を好まず專ら徂徠の說を奉ず談論に長じ最も講說に善し實歷中古河侯に仕へ世子の侍讀たり頗る眷遇を受く居ること數年讒に遇ひて致仕す是より後意を仕途に絕ち諸侯厚聘するありと雖も固辭して應ぜず居を駒籠に構へ講說を業とす從遊の盛んなる當時の井上金峨紀平洲等と相敵す世稱して大家とす寛政四年十一月七日歿す年六十六、著はす所標箋孔子家語、標箋荀子、標注國語、孔子行狀圖解、官職通解、年中吉事鑑、唐詩選掌故、唐詩選講釋、四聲韻選、詩學小成、文章小成、續悟詩傳、芸閣文集等あり（事實文纂、續諸家人物志）

チハウエン　チハウヨウ　カツゴラウ　知芳園「オクムラセキラン」千葉勝五郎　歌舞伎座の創立者なり天保四年七月信濃國上伊那郡中澤村に生れ十五六歲の時兄と共に江戸に出で日本橋中橋五郎兵衛町に住する佐竹藩士千葉常五郎の手代となり貸付けし金の取立を爲しが遂に其養子となれり後勝五郎芝居の衣裳屋を繼續す其後演劇改良會の設立あるに當り其會員となり福地櫻痴居士の勸誘により遂に明治二十二年本挽町に歌舞伎座を建築するに至れり既にして之を他に讓り又所持の衣裳を他に讓りて其後は一切芝居に手を出さゞりしと云ふ三十六年四月十三日年七十歲を以て逝けり

チヤバ　カドノ　千葉葛野　國學者なり本姓は原氏初め葛舍と號し後に白樞園と號す字は希言又は三暉と云び通稱は大藏屋正右衛門信濃國飯田の人江戸に住す植松茂岳の門人なり安政二年三月七日歿す年五十六（諸家著述目錄）

チヤバ　カネタネ　千葉兼胤　平氏陸奥守貞

胤の曾孫なり父を滿胤と云ふ世々千葉介を襲ぎて下總千葉城に居る兼胤父に繼て修理大夫に任ず應永十七年秋新田貞方漂泊する年あり足利滿兼卒すと聞き竊かに兵を擧げんと謀る事漏る兼胤貞方を擒へ鎌倉に送り之れを七里ヶ濱に殺す應永二十三年上杉禪秀亂を作す兼胤禪秀の女婿たるを以て爲めに兵を起す十月兼胤及び支黨康胤相馬大須賀原園城寺等騎兵八千を率ゐ米町に陣す二十四年正月今川範政足利持氏を扶けて鎌倉に入る兼胤族を擧げ歸降して與に鎌倉を攻む子を胤直と云ふ（野史）

チハク　クニタネ　千葉邦胤（房總治亂記に都胤に作る）　胤富の子にして下總千葉の城主なり年二十六家を嗣ぎて千葉介と稱す天正十六年正月歲首の慶賀に親族宿老を書院に讌す時に侍臣鍬田萬五郎年十八給仕配膳す偶ゝ謬て放屁する再回邦胤色を作して罵辱す萬五郎中央に跪坐して曰く卒爾失敬亦謝するに言なし然れども坐上讌賞を殺る慘酷と謂ふべしと邦胤益怒り坐を起て蹴倒し將に劍を抽かんとす左右萬五郎を率ゐて去り敎を請ふ邦胤聽かず而して萬五郎亦密かに憤恨し是秋七月七日夜半潛かに寢室に入り邦胤を刺し迯て出づ邦胤呼び曰く憎いかな白面奴と嘗直の士驚き廳ぐ邦胤曰く萬五郎奴なりと言未終らずして暝す衆部索迫尾す會ゝ月落ちて夜暗し獲る能はず萬五郎亦昏黑なるを以て走る能はず潛匿曉を俟ち壁を踰えて走り柔間饗に到る（草刈邑に在り）迫者將り至る乃ち叢林に入て自殺す邦胤の子千鶴丸生れて僅かに六歲群下小田原に如き命を乞ふ北條氏政謂ふ千葉佐倉は敵境に介せり最も樞地なり宜く臼井の城主原胤成をして佐倉城に徙居せしむべしと乃ち千鶴丸を小田原に駐めて賀とす家人殿樂左衛門尉從て小田原に在り千鶴丸後重胤と稱す北條氏直重胤の姉時に年十二なる者か鹿島に徙し中村常顯をして養はしむ（野史）

チハク　サダタネ　千葉貞胤　下總介胤綱の玄孫なり襲て千葉介と稱し修理大夫となる元弘元年大佛貞直に從て楠正成を赤阪城に攻む二年北條高時貞胤等を遣し軍駕を護衛して隱岐に至らしむ明年新田義貞兵を起す貞胤往きて之に從ひて足利尊氏を討ちて屢々戰功あり帝延曆寺に幸するに及び貞胤兵に將として護衛す源顯家の陸奥より勤王するや貞胤往きて之に屬す義貞圍城寺を攻む貞胤伯父宗胤と先登し門を奪て前む足利高經の軍に遇ふ貞胤の士卒皆な飢凍して復た鬪ふこと能はず然自殺せんと欲す高經使を遣して之を招く貞胤遂に部下五百騎と之に降る正平の初め高師直に從ひて楠正行と四條畷に戰ふ六年京師に死す年六十一（大日本史）

チハク　サネタネ　千葉實胤　千葉介胤直の弟中務少輔胤將入道了心の子にして下總市川の城主なり享德四年八月父了心上杉氏に黨し兄胤直と俱に自殺す後ち上杉氏實胤及び弟自胤を以て千葉の家督となし下總市川城を保たしむ原胤房亦た馬加康胤を立て足利成氏に屬す相分れて二派となる康元年成氏實胤市川城に據ると聞き南圓書助梁田出羽守をして來り攻めしむ次年正月終に城を拔き實胤石濱に走り自胤赤淵に徙居す上杉氏實胤を下總に復せんと欲す成氏先づ孝胤を西に居り世亂に倦み世を遁れて美濃に遷り而して千葉に居らしむ故に實胤入るを得ず而して石濱葛葉に居らしむ幾もなく女子死て重胤長じて居民の間に漂ふ土井利勝竊かに扶持し之を佐倉に置て實性疎放無賴遂に出奔し寛永中歿す（野史）

チハク　シウサク　千葉周作　劍客なり字は成政仙臺氣仙郡氣仙村に生る幼名は寅松父を忠左衛門と云ふ宗吉仙臺藩の客たりしが後ち江戸に來る後劍客浅利又七郎の養子となる幾くもなくして更に一派を創出でゝ醫を以て業とす嘉永中江戸に住す水戸藩の聘に應じて南番となる塾弟子常に五六十人其數を愛る者其數人家人殿樂左衛門尉從て小田原に在り千鶴丸後重胤と稱す北條氏直重胤の姉時に年十二なる者か鹿島に徙し中村常顯をして養はしむ（野史）

チハク　サダタネ　千葉貞胤　下總介胤綱の玄孫なり襲て千葉介と稱し修理大夫となる元弘元年大佛貞直に從て楠正成を赤阪城に攻む二年北條高時貞胤等を遣し軍駕を護衛して隱岐に至らしむ明年新田義貞兵を起す貞胤往きて之に從ひて足利尊氏を討ちて屢々戰功あり帝延曆寺に幸するに及び貞胤兵に將として護衛す源顯家の陸奥より勤王するや貞胤往きて之に屬す義貞圍城寺を攻む貞胤伯父宗胤と先登し門を奪て前む足利高經の軍に遇ふ貞胤の士卒皆な飢凍して復た鬪ふこと能はず然自殺せんと欲す高經使を遣して之を招く貞胤遂に部下五百騎と之に降る正平の初め高師直に從ひて楠正行と四條畷に戰ふ六年京師に死す年六十一（大日本史）

チハク　サネタネ　千葉實胤　千葉介胤直の弟中務少輔胤將入道了心の子にして下總市川の城主なり享德四年八月父了心上杉氏に黨し兄胤直と俱に自殺す後ち上杉氏實胤及び弟自胤を以て千葉の家督となし下總市川城を保たしむ原胤房亦た馬加康胤を立て足利成氏に屬す相分れて二派となる康元年成氏實胤市川城に據ると聞き南圓書助梁田出羽守をして來り攻めしむ次年正月終に城を拔き實胤石濱に走り自胤赤淵に徙居す上杉氏實胤を下總に復せんと欲す成氏先づ孝胤を西に居り世亂に倦み世を遁れて美濃に遷り而して千葉に居らしむ故に實胤入るを得ず而して石濱葛葉に居らしむ幾もなく女子死て重胤長じて居民の間に漂ふ土井利勝竊かに扶持し之を佐倉に置て實性疎放無賴遂に出奔し寛永中歿す（野史）

チハク　シンタウサイ　千葉新當齋　名は右門字は率然、下總佐倉の人、新當齋は其の號なり擊劍を以て一世を闘ふ劍を執り場に上りて其の技を比較するに開闔捻縱機會萬變方處なく定體なく一刀蟄電向ふ所拔拉す其の鎗術は寶藏院の秘蘊なり蓋し其法僧胤榮より嫡々統々相承けり是に於て聲名一世に震爍す嘗て安房益々其の秘を啓く是に於て聲名一世に震爍す嘗て安房に遊びて從游の徒と之を廣野に試む矢來ること雨の如く鎗集るも悉く如し新當齋鎗を挺にて立ち擊色動かず左に擺し右に當る倏焉忽焉變化窮まりなし矢皆な粉粹して地に墜つ衆其の技の神に服す乃ち鋸山の地を卜して石を立てゝ其の事を勒す（試技碑）

チハク　タカタネ　千葉孝胤　康胤の子なり父と足利成氏に屬す康胤家を孝胤に讓る孝胤立て千葉介と稱し下總千葉城に居る是を以て其族實胤千葉に入る能はずして武州石濱に居る寛正三年二月孝胤日蓮の徒日親を捕へ京師に送る是より先き日蓮諸州に遊行し

て法華經の妙理を說き以て他の宗門を誹謗し或は又妙麗庵雪底の門弟等と爭論して屢〻異言を唱ふるもあり是を以て之を幕府に致し悉く禁獄を命ず文明三年六月成氏古河を去り來りて孝胤に賴る十年三月孝胤長尾景春と羽生村に次す太田資忠上杉定正兵を率て之を防ぐ孝胤戰はずして退く上杉黨自胤を援く太田道灌鴻臺に陣し假りに陣柵を築く十二月孝胤原二郎木内某をして先鋒となし下總の國境根源に屯す道灌施を進めて接戰す孝胤軍敗る原木内等悉く之に死す餘衆白井に歸る文明十一年正月道灌及び二階堂某兵を率て白井城を攻む孝胤族人土屋賴康等を率て之が後援となし廣野に陣す七月白井城陷る孝胤の曾孫を利胤と云ふ(野史)

チバ タクマ 千葉太久馬 陸軍憲兵少尉なり奈良縣出身にして明治三十一年豐澤第十憲兵隊附として渡臺中同年十月十四日臺南縣下茄苳南堡三層崎庄に於て土匪討伐の際戰死す

チバ タネツラ 千葉胤連 九州千葉の庶流にして世々晴氣城に居る祖父を胤資と曰ひ少貳政資の弟なり政資大内氏と戰ひ敗れて晴氣城に脫走し胤資に憑る大内氏の兵來り圍む急なり胤資遂に拒ぎ戰て死す政資多久楫峰城に奔る胤連の父を胤勝と曰ふ世々嬪家と矛盾す胤連父に繼ぐ天文中錫島清房二男彥法師を以て養子となす而して後一男を擧ぐ是に於て胤勝養老の地を彥法師に附與す彥法師後ち辭して佐賀に歸る天文十四年正月馬場賴周少貳冬尙の命に託し千葉胤賴と會議し胤連を逐ひ晴氣城を奪ふ胤連勝に禦死せんとす老臣或は世變を察し固く諫て去る三月龍造寺剛忠復た佐賀に入る胤連も亦小城郡の人を募る持永治部大輔古賀八頭司等の果世宿臣伏を設け小城を攻む賴周嘗て胤連を輕侮す子政員為て兵三百を率ゐ霧川を渡り來り擊たしむ伏兵起るに會し政員敗走す胤連の兵追躡して政員を獲佐賀兵進て祇園山を攻む是の時に當り賊役する所の丁皆千葉氏の遺民たり各井躍鎌を執り鍬を荷ひ縱橫奮擊す賴周拒ぐ能はず壁を踰え嶮岨を履み將に山に走らんとす牟田平右衞門嚮導たり茅萱を結びて前み黑岩に及ぶ賴周路に迷ひて大願寺に到り川上山に入る衆見て謂ふ斯人や屢〻義に戾り濺血社壇を穢す是我が神の譴徹なりと嚮集群起萃り擊つ賴周僅に免れ水を踰えて去らんと欲す河の中流に至り馬斃れて濟ること得ず遂に加藤彈正の爲に誅せられて死す十六年胤連龍造寺の族と兵を率ゐ城原城を攻む冬尙防禦する能はず筑後に走る是の時胤連松尾城に據る族長胤賴牛尾城に據ることを請ふ驪かず府中に歸るに及びて復諫めて曰く臣之に據る勢を競ひ相抗衡す永祿二年正月胤連陸信の援兵と攻む胤賴戰死し城陷る胤連小城郡を併食するを得たり大友宗麟亂を謀り人を馳せて兵を募る南肥に趨す有馬晴純之に應じ將さに千葉氏を滅し采邑を併せんと欲す族人を率ゐ先驅將に小城を圍まんとす胤連遁兵を率ゐ諸丹坂に阻支し援を佐賀に乞ふ隆信騎八百を發し之を援ふ六年七月持永江頭に先登す晴純利を失ひて去る横田逸に阻戰す會〻隆信親ら鍋島信生と兵を去る橫田逸に阻戰す會〻隆信親ら鍋島信生と兵を督して來り援く堪尾に到る晴純弭め散ず(野史)

チバ タネトシ 千葉胤利 字は二郎、自胤の後にして武州石濱城に治し上杉朝興に屬す北條氏康に攻められ城を遁げて去り後ち之に降り舊邑を復するを得たり後家を胤宗(或は治胤に作る)に讓る胤宗字は二郎幾もなくして夫妻俱に天折し家絕つ(野史)

チバ タネトミ 千葉胤富 千葉介胤利の長子にして親胤の兄なり親胤弟を以て父の後を繼ぐ暴流にして世々晴氣城に居る祖父を胤資と曰ひ少貳政資の弟なり政資大内氏と戰ひ敗れて晴氣城に脫走し胤資に憑る大内氏の兵來り圍む急なり胤資遂に拒ぎ戰て死す政資多久楫峰城に奔る胤連の父を胤勝と曰ふ世々嬪家と矛盾す胤連父に繼ぐ天文中錫島清房二男彥法師を以て養子となす而して後一男を擧ぐ是に於て胤勝養老の地を彥法師に附與す彥法師後ち辭して佐賀に歸る天文十四年正月馬場賴周少貳冬尙の命に託し千葉胤賴と會議し胤連を逐ひ晴氣城を奪ふ胤連勝に禦死せんとす老臣或は世變を察し固く諫て去る三月龍造寺剛忠復た佐賀に入る胤連も亦小城郡の人を募る持永治部大輔古賀八頭司等の果世宿臣伏を設け小城を攻む賴周嘗て胤連を輕侮す子政員為て兵三百を率ゐ霧川を渡り來り擊たしむ伏兵起るに會し政員敗走す胤連の兵追躡して政員を獲佐賀兵進て祇園山を攻む是の時に當り賊役する所の丁皆千葉氏の遺民たり各井躍鎌を執り鍬を荷ひ縱橫奮擊す賴周拒ぐ能はず壁を踰え嶮岨を履み將に山に走らんとす牟田平右衞門嚮導たり茅萱を結びて前み黑岩に及ぶ賴周路に迷ひて大願寺に到り川上山に入る衆見て謂ふ斯人や屢〻義に戾り濺血社壇を穢す是我が神の譴徹なりと嚮集群起萃り擊つ賴周僅に免れ水を踰えて去らんと欲す河の中流に至り馬斃れて濟ること得ず遂に加藤彈正の爲に誅せられて死す十六年胤連龍造寺の族と兵を率ゐ城原城を攻む冬尙防禦する能はず筑後に走る是の時胤連松尾城に據る族長胤賴牛尾城に據ることを請ふ驪かず府中に歸るに及びて復諫めて曰く臣之に據る勢を競ひ相抗衡す永祿二年正月胤連陸信の援兵と攻む胤賴戰死し城陷る胤連小城郡を併食するを得たり大友宗麟亂を謀り人を馳せて兵を募る南肥に趨す有馬晴純之に應じ將さに千葉氏を滅し采邑を併せんと欲す族人を率ゐ先驅將に小城を圍まんとす胤連遁兵を率ゐ諸丹坂に阻支し援を佐賀に乞ふ隆信騎八百を發し之を援ふ六年七月持永江頭に先登す晴純利を失ひて去る横田逸に阻戰す會〻隆信親ら鍋島信生と兵を督して來り援く堪尾に到る晴純弭め散ず(野史)

チバ タクマ 千葉太久馬 陸軍憲兵少尉なり奈良縣出身にして明治三十一年臺灣第十憲兵隊附として渡臺中同年十月十四日臺南縣下茄苳南堡三層崎庄に於て土匪討伐の際戰死す

チバ タネツラ 千葉胤連 九州千葉の庶流にして世々晴氣城に居る祖父を胤資と曰ひ少貳政資の弟なり政資大内氏と戰ひ敗れて晴氣城に脫走し胤資に憑る大内氏の兵來り圍む急なり胤資遂に拒ぎ戰て死す政資多久楫峰城に奔る胤連の父を胤勝と曰ふ世々嬪家と矛盾す胤連父に繼ぐ天文中錫島清房二男彥法師を以て養子となす而して後一男を擧ぐ是に於て胤勝養老の地を彥法師に附與す彥法師後ち辭して佐賀に歸る天文十四年正月馬場賴周少貳冬尙の命に託し千葉胤賴と會議し胤連を逐ひ晴氣城を奪ふ胤連勝に禦死せんとす老臣或は世變を察し固く諫て去る三月龍造寺剛忠復た佐賀に入る胤連も亦小城郡の人を募る持永治部大輔古賀八頭司等の果世宿臣伏を設け小城を攻む賴周嘗て胤連を輕侮す子政員為て兵三百を率ゐ霧川を渡り來り擊たしむ伏兵起るに會し政員敗走す胤連の兵追躡して政員を獲佐賀兵進て祇園山を攻む是の時に當り賊役する所の丁皆千葉氏の遺民たり各井躍鎌を執り鍬を荷ひ縱橫奮擊す賴周拒ぐ能はず壁を踰え嶮岨を履み將に山に走らんとす牟田平右衞門嚮導たり茅萱を結びて前み黑岩に及ぶ賴周路に迷ひて大願寺に到り川上山に入る衆見て謂ふ斯人や屢〻義に戾り濺血社壇を穢す是我が神の譴徹なりと嚮集群起萃り擊つ賴周僅に免れ水を踰えて去らんと欲す河の中流に至り馬斃れて濟ること得ず遂に加藤彈正の爲に誅せられて死す十六年胤連龍造寺の族と兵を率ゐ城原城を攻む冬尙防禦する能はず筑後に走る是の時胤連松尾城に據る族長胤賴牛尾城に據ることを請ふ驪かず府中に歸るに及びて復諫めて曰く臣之に據る勢を競ひ相抗衡す永祿二年正月胤連陸信の援兵と攻む胤賴戰死し城陷る胤連小城郡を併食するを得たり大友宗麟亂を謀り人を馳せて兵を募る南肥に趨す有馬晴純之に應じ將さに千葉氏を滅し采邑を併せんと欲す族人を率ゐ先驅將に小城を圍まんとす胤連遁兵を率ゐ諸丹坂に阻支し援を佐賀に乞ふ隆信騎八百を發し之を援ふ六年七月持永江頭に先登す晴純利を失ひて去る横田逸に阻戰す會〻隆信親ら鍋島信生と兵を督して來り援く堪尾に到る晴純弭め散ず(野史)

チバ タネトシ 千葉胤利 字は二郎、自胤の後にして武州石濱城に治し上杉朝興に屬す北條氏康に攻められ城を遁げて去り後ち之に降り舊邑を復するを得たり後家を胤宗(或は治胤に作る)に讓る胤宗字は二郎幾もなくして夫妻俱に天折し家絕つ(野史)

チバ タネトミ 千葉胤富 千葉介胤利の長子にして親胤の兄なり親胤弟を以て父の後を繼ぐ暴戾なる為に天正元年古賀に戰死す北條氏政屬なき為に憐み支配の二男を以て胤宗の女と配せしむ是を胤村とす冥なる為に天正七年五月弑に遇ふ衆胤富を迎へ立てて主となす遂に下總千葉氏に居る是時に當て宗室稍〻衰へ内、鐘木と曰ふ圍城寺出でゝ石濱の千葉に屬し後三老臣國命を執る千葉氏に四老臣あり原、圍城寺、木屬す胤則は小金を康治は上氣を重光は東金を以て勢皆強大なり依りて山東の諸士を遇する宛も皇隸の如し我が宗襲僭すと雖も鴆に對して奚ぞ臣庶の禮を取らんやと乃ち信長の使者を戮辱し髻を削り其贈る所の馬の鬣尾を剪て道邪す天正十三年五月卒す子を邦胤と云ふ(野史)

チバ タネナホ 千葉胤直 兼胤の子なり父の後を嗣ひ千葉介と稱し下總千葉城に居る永享十年九月足利持氏上杉憲實を滅さんとして陣を海老名に移す是れより先き胤直屢〻持氏を諫め憲實と成を行はんことを請ふ驪かず府中に歸るに及びて復諫めて曰く臣管領の擧動を察するに更に異謀なし願くは其の戰を復興に交を厚くせよ且聞く憲實の部下謀臣尙ほ多しと臣不肖と雖も命を奉じて往き俱に之れを府下に驗致せんと衆衾な此議を贊す二十四日將に義久を遣し之れを迎へんとす若宮社務尊信之れを聞き梁田河内守をして諫めて之を抑止す胤直聽て曰く三たび諫めて而して驪かれざれば則ち其の國を避けんと遂に背て軍に從はず寶德二年叔父康胤の勸に因て足利成氏に歸屬す四月小山及び宇都宮氏と太田長尾を由比濱に伐ちて利あり享德四年成氏に背き上杉氏に驚す支族原胤房、同胤茂、圍城寺尙任皆勢あり而して胤房最も耆老なる為に成氏に歸せしむ尙任獨り上杉氏に屬す亦た胤直を勸め上杉氏に驚せしむ是に於て胤直父子遂に上杉氏に歸す胤房怒て援を成氏に乞ひ三月來りて急に襲ふ胤直及び子胤宣兵を率ゐて多胡志摩の二城に據り以て上杉氏の後援を俟つ時に馬加康胤入道常輝父子成氏に屬し兵を率て胤房に應ずし胤房大に悅び自ら忘擲城を攻め常輝父子を生て多胡城を圍まし常輝遁走を斷ち一面を空うして圍み攻むるを急なり城中窮窘す胤房亦志摩城に薄る尋不意に發し胤直防禦に堪へず八月に迨び終に城を棄て土橋如來堂に徙り胤宣奮戰院に潛匿す胤房代て城に入り十五日急に如來堂を襲ふ胤直入道常弟中務入道了心と共に自殺す池内胤相介錯して而して殉す圍城寺因幡守、木内左衞門尉、池内藏人、粟飯原右衞門尉、多田伊豫守、高田胤行等亦た各〻夫人及び婢妾を刺し皆な自殺す原胤茂屍骨を大日寺に收め塔を建て魂を弔す胤直の子を胤宣と云ふ(野史)

チバ タネノブ 千葉胤宣 千葉介胤直の子なり千葉新助と稱す享德四年父と足利成氏に叛て上杉氏に驚す原胤房兵を率て急に來りて其の居城千葉を攻む胤宣出でて多胡城に據る馬加康胤足利成氏の爲めに糧道を斷ち三面城を攻圍す麾下多く逃走し胤宣二十騎と乳母の子圍城寺直時を敵陣に遣し請ひて曰く願くは死して城を致さんと乃ち監使を招き大橋阿彌陀堂に徙りて自殺す時に八月十二日なり年甫めて十五直時及び椎谷胤家等十四人殉す下總國金剛授寺中納言房年弱くして書を能くす嘗て胤宣に就て書を學ぶ父子の死を聞き阿彌陀堂に詣り其死體を見て讀經念誦、絕命の和歌を見て涙を灑ぎ自らも又歌を堂中に書して曰く「見るもうし夢になり行く草の原うつはに殘る人のおもかげ」乃ち身を深淵に投じて死す

チバ タネマサ 千葉胤正 常胤の長子なり襲て下總介となる世に新介と稱す賴朝の起る伊北常伸を上總に擊ちて功あり藤原泰衡の故將大河兼任兵を陸奥に擧ぐ胤正葛四清重と擊ちて之を平らぐ(大日本史)

チバ タネヤス 千葉胤泰 陸軍步兵少佐なり宮崎縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備步兵第十三聯隊附として從軍中廿八年二月廿二日清國盛京省灣柳河附近に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

チバ タネヨリ 千葉胤頼 新介と稱す九州千葉の庶流なり木と少貳冬尙の弟、出でて千葉嘉胤の嗣となる因て千葉氏を冒す天文十四年馬場賴周冬尙の命に託し千葉胤連を逐ひ胤賴を晴氣城に徙す十六年牛尾城を築き之れに據る永祿二年正月冬尙來り晴氣城に據る胤連龍造寺隆信の援兵と晴氣城を圍攻す胤賴戰死す冬尙城原に奔る胤賴の子胤誠山内に走り神代勝利に倚賴す勢終に振はず(野史)

チバ タネヨリ 千葉胤頼 常胤の第六子なり下總東莊を食む因て東六郎太夫と稱す操持堅正なり少にして京師に在り是時平氏事を用ふ胤頼權勢に阿れらず遠藤持遠の薦めを以て上西門院に仕へ從五位下に叙せらる神護寺の僧文覺の名を聞き往きて之を訪ふ一見して契り遂に弟子となる文覺の伊豆に謫せらるるや協謀して賴朝に兵を起さんことを勸む檄至るに及びて又た父に說きて之に應ぜしむ賴朝深く之を德とし て咨遇最も優なり(常胤の傳を參觀せよ)(大日本史)

チバ ツネタネ 千葉常胤 平廣常と同族なり高胤常將下總千葉郡に居す常將常永を生み常永常兼を生む從五位下下總權介たり常雄常重を生む常胤は其長子なり世々千葉介と稱す人となり厚重謹儉世々關東の望族たり源賴朝の兵を起すや安達盛長を遣はして檄を下總に傳へしむ盛長常胤を見て賴朝の意を致す常胤沈吟して未だ答へず子胤正胤賴側に在り進みて說て曰く武衞義に仗て兵を起し國の爲めに害を除かんとして兵を我に徵す順を扶け逆を討つ事疑はざるに在り請ふ速かに命に應ぜんとす常胤乃ち命じて曰く將軍祖先の爲めに廢絕の業を興す常胤敢て命を奉ぜざらんやと乃ち盃を命じて之を勞し且つ盛長に告げて曰く亦た當に子弟を率て奉迎すべしと盛長還り報ず賴朝大に悅ぶ常胤兵を聚めて將に發せんとす胤賴曰く國の目代を逐ひて而して後ち兵を進むべしと常胤之を然りとし代は平氏の置く所豈我所爲を坐視せんや宜く先づ目代を斬る所は要害の固めあるに非ず相模の鎌倉は源家祖先の故地宜く軍を移して之に據るべし常胤も因あり目代敗死すと聞き兵を勒して常胤を攻めんとす常胤の孫成常擊て親政を擒にす是に於て常胤騎三百餘を率ゐ迎へて賴朝に下總國府に謁し譬を獻ず賴朝大に喜び延て坐右に置く欵接甚だ渥し且つ曰く自今以往我れ剩を視ること當に父の如くせんと常胤建議して曰く軍祖先の爲めに軍容を壯にすべし江戶莫西の徒に觀望する者皆な謂へらく精兵大に集ると當に踵して來り歸すべしと賴朝之に從ふ壽永三年源範賴に從ひて源義仲を討ち又た平氏を西海に攻む皆な功あり常胤老將にして威望素より著はる賴朝範賴に命じて特に之を尊禮せしむ範賴の周防に在る諸將日夜東歸を思ひて軍を奪て、竊かに歸らんと謀るものあるに至る常胤獨り勢苦を冒はず既にして範賴權を近國に徵して戰艦稍〻集まる將さに發せんとす常胤襄齊の齡を以て奮ひて身を來り歸すべしと賴朝之に從ふ壽永三年源

するか欲せず率にして利胤軍を出す是れ我が欲する所なり泥必ず氏康と謀り兵を併せて來らんのみと則ち太田三樂を擇び先師となし長野業正之れに次ぎ境川を踰ゆ利胤の黛深谷・本莊・高山等河岸に次ぎ將さに阻んとす甘糟景持擊て之れを邪く而して村岡磧に到る會〻赤井入道法蓮富岡重正佐野昌綱等兵を率ゐて謙信に加る謙信之れをして先鋒となす原胤繁邀へ戰て旗色搖く越の隊長長尾政勝齋藤朝信等左右より擊つ利胤の麾下設樂・鯖木・佐和・椎里・宮川等防禦力戰す利胤自ら奮擊し創を蒙むること二三馬瘞る危急なり椎木左衛門利胤に代り千葉介と稱し衆と血戰して死す利胤僅かに脱し歸る弘治三年八月卒す年三十二子あり長は胤富次は親胤

チバ　ナホタネ　千葉直胤　江戸の和學者にして塙保己一の門人なり（諸家著述目錄）

チバ　ナリタネ　千葉成胤　胤正の長子なり小太郎と稱し嗣で下總介となる父祖に從ひて頼朝に歸し兼任の亂に戰功あり頼朝其の勇を壯とし且つ敵を輕んじて深入せんことを恐れ書を賜ひて曰く戰に臨めば自ら重んじて先登を競ひ以て危殆を覆む勿れと頼朝那須野に獵す近臣の善く射るもの二十二人を選み弓矢を執りて左右に列從せしむ成胤此に預かる其の他の勳蓄は弓矢を持つを許さず時人艷羨す和田義盛の亂に家族を率て難に赴く幕府頼りて安んず（大日本史）

チバ　ヒデタネ　千葉秀胤　常秀の長子なり下總權介たり三浦泰村の妹を娶る泰村敗死するに及びて北條時頼兵を遣して秀胤を上總一宮館に襲ふ秀胤薪炭を積みて其の家に環らし火を縱ちて自殺す（大日本史）

チバハフ　ミツタダ　持法「ヂホウ」　千馬光忠　赤穗四十七士の一人なり三郎兵衛と稱す淺野長矩に事へて馬廻りとなり百石を食む國既に滅ぶ一處士某あり頗る仇家吉良氏の虛實を知る光忠給するに資財を以てし與に俱に江戸に赴て探偵し姓名を變じて原三介と曰ふ死を賜る時年五十一子藤之丞後ち備前に仕へ擢でられて隊長となる餘は大石良雄の傳に詳なり（赤穗四十七士傳）

チバ　ムタク　千葉夢澤　尾張の儒者なり名は眞重字は興信勘平と稱す後潛夫と改む安永癸巳歿す年八十（諸家著述目錄）

チバ　ヤスタネ　千葉康胤　大介滿胤の二子なり初め族を馬加と云ひ陸奥守と稱し入道して常輝と號す享德四年胤直胤宣胤將軍足利成氏に屬す八月胤直父子皆な死し上杉の黨胤將房足利成氏に屬す八月胤直父子皆な死し上杉の黨胤將扶け市川城に居り千葉氏の家督となす〻千葉の家督となし成氏に屬し千葉城金城に居る是に於て千葉氏分れて二流となる康胤の子を孝胤と云ふ（野史）

チバ　ヨシタネ　千葉嘉胤　姓は平氏千葉介貞胤（或は胤綱に作る）の子宗胤三井寺に戰死す宗胤の子胤貞刑部大輔に任じ官軍に屬し吉野に參じ懷良親王に從て筑紫に赴き大隅守を兼れ肥前の國事を知し世世肥前に住す父を興常と曰ひ千葉介と稱す嘉胤繼て祇園城に居り應流千葉氏と併せんと欲し前條侵入し槃を失す龍造寺家門之を聞き嘉胤をして成を少貳氏に行はしめ少貳冬尚の弟を以て嘉胤の嗣と爲す是を胤頼とす冬尚と連和し兵威頗る張る晴純兵を收む後嘉胤家に移居す胤房小金城に居り萬里・山代田・比良等興に各部を守る每戰果さず天文十二年三月嘉胤惡瘡を患ひ苦痛惡疼して自殺す年四十四（諸士畧傳）

チバ　ヨリタネ　千葉自胤　初の字は小二郎、實胤の弟なり文明九年太田道灌に屬し江戸城に據る十年實胤世を遁る後上杉氏自胤を以て千葉介と稱せしむ是を武藏千葉と號す尋で道灌と兵を率て孝胤を攻て之を破る餘黨猶白井城に屯む而して道灌軍を旋す孝胤太田資忠と俱に之を攻む自胤兵寡して利あらず援を上杉氏に請ふ果さず兵を頓けて驛南城を攻む三河入道拒禦して力竭き七月を以て降る乞ふ眞里谷上總介亦降る尋で飯沼城を拔く而して海上師胤を攻め又之れを下し自胤千葉に入る能はずと雖も武名二總に振ひ大半歸服す是に於て以爲く白井城に拠て自ら紀明す妹實を告げて死を乞ふ光秀六郎を闘まず疲れんと乃ち陣を拂ひて去る城兵追躡す自胤反戰して敵に附し城に乘じて遂に之を陷る資忠等五十三人之れに死す自胤成を城に置き武州石濱城に凱旋す（野史）

チハラ　キヨサイ　茅原虛齋　中國の儒者なり名は定則號は長南又は茅窓字は叔同一に玄常と名け文勳と稱す京都に住し醫を業とす又墨を樂み東藩日記等の著あり天保十一年正月廿六日歿す年六十七（平安墓所集、諸家著述目錄）

チハラ　ロクラウタイフ　千原六郎大夫　義人なり後藤氏丹波氷上郡千原村に生る世々農家たり天性勇を好みて劍術及醫術を嗜む一時三好家に仕へて屬〻戰功を立つ一日母諫めて曰く敵を殺し戰功を以て富貴に至るは我願ふ處にあらず今は妹あるのみ若し汝死せば老年誰にか寄らん貧賤は我之を苦とせず汝側にあるを以て我悅びとす汝武士の望みあらば我死後仕官せよと六郎其語に從ひて直ちに三好家を辭して千原村に歸り醫を以て業とし傍ら農事を勵む然れども生計貧困を極めて母を安んずる能はず妹と共に大に心を痛む時に八上（一に三上に作る）の城主波多野の族福井主水先年明智光秀と兵を交ふるの際落馬して脆を折り戰場を脱して千原村に潛む六郎なして傷を治せしむ光秀波多野を誘ひ降し始て其族十三人を安土に殺す主水之を聞き光秀の奸謀不義を怨み且つ仇を報いんと欲す然れども身不具にして志を遂ぐる能はず心密かに六郎を頼み親しく結んで其貧を救ひ兄妹をして孝養の心を盡さしむ六郎深く其恩に感ず主水時を計りて六郎に請ふに我に代り光秀に復讐せんことを以てす六郎未だ母あるを以て一兩年を延さんことを語る主水母に托して逃るゝと察し事の發覺を恐れて自殺す六郎我胸中を知らずとして之を哀しみ爲く埋葬す慈何もなく母死するを以て其の約を守り妹に事實を語る妹六郎の義あるを悅び勸めて家を出でしむ六郎短刀を懷にして安土城に入り忍んで殿中に至り光秀を刺さんとす事成らずして近臣に捕へらる六郎其破れたるを以て舌を嚙んで死す光秀梟首して其黨を求むること三百貫の賞を以てす然れども固より同類なし妹之を聞き驚に出でて我兄なるを告げ且つ梟首を止められんことを哀訴す光秀引見して自ら糺明す妹實を告げて死を乞ふ光秀六郎の義心に感じ妹の兄に厚く死を恐れざるを賞し六郎の梟首を止め妹の罪を免し召して信長に仕へしむ上藤となり名を阿能局と改む後ち本能寺の役奮戰して死す諸

將其の烈婦たるに感ずと云ふ一說光秀を信長に作る（事實文編、豹皮錄）

チハル　チヒサコベノ　サビチ　千春「タカシマチハル」　小子部鉏鉤　尾張の國守たり壬申の亂天武帝不破に入り郡家に及ぶ比ひ鉏鉤衆二萬を率て來歸す帝之を喜び其の兵を分遣して諸道を扼せしむ近江の兵と戰ふに及びて鉏鉤山に匿れて自殺す帝曰く鉏鉤功ありて罪なし而るに自殺す其れ或は陰謀ありしかと（大日本史）

ヂブキャウノ　ツボネ　治部卿局　伏見帝の宮人なり其名を詳にせず法印任快の女、又春日局と稱す伏見帝之を幸し慧助法親王を生む（大日本史）

ヂブキャウ　ホウイン　スノキマサトヲ　治部卿法印「クスノキマサトヲ」

チフル　チベン　千古「ヒトツヤナギチフル」

チホウ　智鳳　高僧なり大寶三年唐に入りて唯識を學び靈く其の旨を得て歸る甚だ當時に名あり其門より出でたるもの龍門寺の僧義淵の如きは皆な法中の圭璧とす後ち終る所を知らず（元亨釋書、東國高僧傳）

ヂホウ　持法　高僧なり專ら法華を持す因て以て號とす金剛を持する者あり亦自ら持金と稱し法と隣居する僅に半里許り律身甚だ嚴なり齋食自然に來り嘗て人に丐ふなし而れども法は日食給せず常に鉢を持して市に乞ふ金其の行業の優ならざるを患て竊かに之を諷る法之を聞て微笑するのみ忽ち金の食二三日來らずと雖も未だ法利を得ず彼の持法比丘は汝を憐み羅刹女をして出生飯を送りて汝に與へしむ汝何ぞ慢を生ずると金乃ち大に愧ぢ法の處に至りて罪を謝す（元亨釋書、東國高僧傳）

チボク　知木　京都の俳人なり氏は鈴江寄松堂と號す知石の門人家書橘立松あり元文五年五月廿八日歿す年四十四辭世「行く水とともに涼しい石川や」（俳諧大系圖、俳諧年表）

チホノ　カタ　智保之方　德川家治の側室なり御部屋と稱す伊奈備前守忠宥の養女實は津田宇右衛門信成の女世嗣家基を生む寛政三年三月逝す寛永寺に葬り瓊光院と號す

チミヤウ　智明　高僧なり蒙山と號す播津玉造郷の人幼にして父母を失ふ元國の萬戸將軍來て本州にあり頗る博識の士なり明の孤獨を憫み養て子とし鄉音を以て四書を教ふ性明敏萬に就て能く講す鄉人相勸て施藥院に投じて僧とならしむ年十六去て規庵和尙に南禪寺に依り蔵鎗を司る庵之を器とす一山和尙庵の後を繼ぐに及び明を以て書記に充つ禪册の疑義重譯を用ひず之を質して通曉せざるなし嘉曆の末相模に入る到る處の禪刹待つて厚禮を以てす明極和尙鹿谿に住する間學けて第一座に居らしむ會中の俊耆衣を搖けて從學す既にして門を杜て大藏經を閱みす病中にありて閑吟十喝を作る清拙、竺仙跋して之を賞す曆應の初將軍足利尊氏聽して法を筑前の聖福寺に請ぜしむ辭香を規庵に供す居ること六年印を解いて洛に入る足利直義延見して法を問ひ相知の晚きを恨む乃ち建仁寺を董し南禪寺を管す臘德高きを以て四衆景附すると百川の注くが如し晚年上乘院を剃めて退隱の地となす將軍義詮先妣の爲に法齋を營み明を請して宗衆を開揚せしむ後光嚴帝の勅に因て東方二井露門之稱あり武藏の大守平氏東永精舍を創め海を聘して開山の祖となし衣鉢を受けて第子の禮を取る赤城山に行者あり三十年山を下らず水食調飲して其神異あり海偶其地に至る行者迎て曰く第子師の道法を仰ぐこと久し然れども願あり故に此を出ず今幸に貧窶せらる願は戒法を受て勝因を結ばんと海三歸戒を授け名を了儒と命ず一朝其人忽丈室に至る海問ふ汝何より來る赤城より來る今晨彼を發して趣すと海微笑す其人乃ち禮を作して去る下野日光山に灌頂法を修す海を請して大阿闍梨と爲す壇上に鈴あり體製至妙一たび之を振へば衆鈴皆鳴る老宿謂て曰く昔異僧あり此寶鈴を持ち磐石上に坐す獵者の來るを見鈴を捨て〻去る獵者之を得て獻ず之を神廚に藏して多く年所を歷今師を請するに當り神に啓して之を出すと海鈴を執て歎して曰く稱有なり神鈴我今此法筵に於て阿闍梨となる實に是れ夙德の感するところなり無量の珍を以て老僧に贈せんよりは一寶鈴を施さんには如ずと即ち鈴を抱きて去る衆愕然として謹惜すること能はず德治二年關白藤原師教海を聘して東福寺に主たらしむ壽年ならずして微疾あり先師聖一國師遺像の右に至り端坐瞑を求め

チミヤウ　ヂミヤウキン　ヂミヤウウキン　持明院入道親王「ゴタカクラノキン」　持明院法皇「フシミテンワウ」

チンイン　チンカイ　塵隱「クニノミヤツコヂンイン」　椿海「トコヨダチヤウスキ」、「ナカヤマテウダウ」

チンカイ　珍海　醍醐寺の住僧なり禪那院に住す性靈を能くし三寶院の定海を師とす又土佐基光に學ぶと或は云ふ其の男なりと（鑑定便覽）

チンカイ　琛海　字は月船播贄古郡の人姓は菅原氏氣骨凡ならず早く在經を厭ひ書窩山に登り薙髮して僧となる笈を南北京に負ひ踏り蹠の聖教該通せざるなし特に密典に精し既に本山に歸り蹠を四偏に結び常に禪觀を以て務となす一衆師事して驪密を受くるもの多し熱山帝海の學業を聞き權法眼に補す海名を視ること繁屣の如く棄て上野の長樂院に往て一衆豪公に參る翁延に盛禮を以てし別室に居らしむ教禪兩陣日夕相戰ふ海每に戈を倒す此に於て衣を革て相從ふと數年日に玄奧に至る始て臨濟の宗旨廻に常悄を出て佛を呵し祖を罵るの事あるを信す時に聖一國師佛鑑の禪を唱ふ海渴心日に熾なり懸日山に登り目擊して道契す服勤數年弘安四年一翁順世す上足斷岸公繼て長樂院に補す年を越て岸亦寂す鎌倉執權北條時宗特に海を起して出世開堂せしむ聖一の闘とする是時院制粗備て四方の學者輻湊す海長樂院に住すること二十年禪教律を以て大成らずして近臣に捕へらる六郎其破れたるを以て舌を嚙んで死す光秀梟首して其黨を求むること三百貫の賞を以てす然れども固より同類なし妹之を聞き驚に出でて我兄なるを告げ且つ梟首を止められんことを哀訴す光秀引見して自ら糺明す妹實を告げて死を乞ふ光秀六郎の義心に感じ妹の兄に厚く死を恐れざるを賞し六郎の梟首を止め妹の罪を免し召して信長に仕へしむ上藤となり名を阿能局と改む後ち本能寺の役奮戰して死す諸

て偶を書して化す年七十八實に延慶元年六月二十六日なり敕して法照禪師と號す（本朝高僧傳）

チンギ　珍儀　畸繪師なり姓氏年代詳ならず赤塚氏所藏野馬畸繪の印籠に此の銘あり（漆器圖錄、畸繪師傳）

チングワイロウ　キヨヅミ　塵外樓清澄　狂歌師なり本姓石川氏後に中村と改む名は清澄一名を万年と云ふ字は芝之通稱を清三郎と曰ふ六樹園雅望の男にして狂歌を父に學び塵外樓また玉阿と號す其の性いたく酒を嗜みて花街柳巷に聲色を事とし家に在ること稀なり天保十五年四月十五日病で歿す行年詳かならず四ッ谷愛住町天長山永昌寺に葬る法號「塵外樓清智大澄居士」と云ふ（古今狂歌人物誌）

チンケン　椿軒「ウチヤマガテイ」

チンケン　沉軒「ナンヴサウジユ」

チンゲンコウ　陳元興　明の歸化人なり曾て木庵老師の法席に參じ又畫を能くす黄檗諸師の眞相を描けり（續本朝畫史）

チン　ゲンビン　陳元贇　明の歸化人なり字は義都、既白山人と號す又菊秀軒、芝山、升庵の號あり明の虎林の人、崇禎中進士に試みられて下第す寛永十五年亂を避けて我が邦に來り尾張侯に客事す時々京師又江戸に來りて諸名士と文字の交なす元贇能く邦語を解す故に人と語るに唐語を用ひず初め萬治二年名古屋に於て曾元政と始めて相ひ識り契合尤も厚し其の平生互に唱和する所衆めて元々唱和集と云ふ世に行なはる元政詩文は寛中耶を墓ふ本邦中耶を奉ずるは元政を以て首めとす而して元政は本と元贇に因りて中耶あるを知るなり元贇書は趙子昂を宗として大に風致あり又自ら陶器を製す其の風安南に似て頗る雅致あり世人稱して元贇燒と云ふ又拳法を善くす拳法とは明國に於て人を捕ふるの術なり當時未だ此の技あらず元贇創めて之れを浜士三浦與次右衛門義辰、磯貝次郎左衛門、福野七郎右衛門に傳ふ三人これに工夫を加へ柔術を發明し正保中江都城南西久保國正寺に於て徒に教ふと云ふ寛文十一年六月九日歿す年八十五同寺に葬る（先哲叢談、名人忌辰錄、陶器考、工藝鏡、和事始）

チンコクザン　陳穀山「ヲタコクザン」

チンザウス　鎮藏主「シカウ」

チンザン　椿山「ツバキチンザン」

チンザン　ゲンセウ　珍山源照　越中信光寺の住僧加州の人なり淨住寺の可鐵鎮四堂に投じて剃髮す鏡の滅後遺命を襲けて螢山和尚に從て弟子の列に就く之に久して契合す元亨三年入室して衣盂を傳持し經行して越中に入り信光寺を創して螢山の爲に燒香すと云の祖となす是に於て開堂演法し螢山の爲に開山ふ（洞上聯燈錄）

チンザン　枕山「オホヌマチンザン」

チンジユサイ　椿壽齋「キヤウデン」

チンゼイ　ハチラウ　鎮西八郎「ミナモトタメトモ」

チンセキ　珍碩「ハマダチンセキ」

チンセンタウ　陳錢塘　名は原字は生卿上總の儒者なり（諸家著述目錄）

チン　ソウケイ　陳宗敬　元の歸化人なり名は延禮應安の初め元亡びたるを以て歸化し筑前博多に居る博學にして能く醫方に通ず人稱して陳外郎と云ふ其元に在る曾て仕へて禮部員外郎たるを以てなり室町幕府其の名を聞きこれを召ぜども應ぜず後ち僧無方に從ひて禪を學び名を明照と改む應永二年七月二日歿す年七十三子宗奇繼て醫業を修む將軍義滿之を徵し命じて明國に渡り藥法を學びて還らしむ世に外郎藥と稱す其の子常紘其の子方治義政の命を以て宇野氏の後となり加賀守と稱す其の孫定治藤右衛門と稱す後北條長氏に仕へ小田原に住す天文八年二月氏綱命じて河越領三十餘郷の代官となし其の藥効を賞し他に滿さゝらしめて釐寶丹或は透頂香と稱す（學國名醫傳、松窓漫錄）

チンダウ　椿堂　伊勢の俳人なり氏は德田通稱長大夫東竹菴と號す士期の門人文政八年十一月十八日歿す（俳世畫人物便覽）

チン　ザン　椿々山「ツバキチンザン」

チン　チヨウ　珍重「ハカハチンチヨウ」

チンネン　椿坊「アキチンバウ」

チンバウ　ゲンヤ　珍峰玄也　大菴に長安光寺の住僧加州の人なり淨住寺の可鐵鎮四堂に投じて剃髮す鏡の滅後遺命を襲けて螢山和尚に從て弟子の列に就く之に久して契合す元亨三年入室して衣盂を傳持し經行して越中に入り信光寺を創して螢山の爲に燒香すと云の祖となす是に於て開堂演法し螢山の爲に開山ふ（洞上聯燈錄）

チンザン　枕山「オホヌマチンザン」

チンジユサイ　椿壽齋「キヤウデン」

チンゼイ　ハチラウ　鎮西八郎「ミナモトタメトモ」

チンセキ　珍碩「ハマダチンセキ」

チンセンタウ　陳錢塘　名は原字は生卿上總の儒者なり（諸家著述目錄）

チン　ソウケイ　陳宗敬　元の歸化人なり名は延禮應安の初め元亡びたるを以て歸化し筑前博多に居る博學にして能く醫方に通ず人稱して陳外郎と云ふ其元に在る曾て仕へて禮部員外郎たるを以てなり室町幕府其の名を聞きこれを召ぜども應ぜず後ち僧無方に從ひて禪を學び名を明照と改む應永二年七月二日歿す年七十三子宗奇繼て醫業を修む將軍義滿之を徵し命じて明國に渡り藥法を學びて還らしむ世に外郎藥と稱す其の子常紘其の子方治義政の命を以て宇野氏の後となり加賀守と稱す後北條長氏に仕へ小田原に住す天文八年二月氏綱命じて河越領三十餘郷の代官となし其の藥効を賞し他に滿さゝらしめて釐寶丹或は透頂香と稱す（學國名醫傳、松窓漫錄）

チンダウ　椿堂　伊勢の俳人なり氏は德田通稱長大夫東竹菴と號す士期の門人文政八年十一月十八日歿す（俳世畫人物便覽）

チン　ザン　椿々山「ツバキチンザン」

チン　チヨウ　珍重「ハカハチンチヨウ」

チンネン　椿坊「アキチンバウ」

チンバウ　ゲンヤ　珍峰玄也　大菴に長安光寺の住僧加州の人なり淨住寺の可鐵鎮四堂に投じて剃髮す鏡の滅後遺命を襲けて螢山和尚に從て弟子の列に就く之に久して契合す元亨三年入室して衣盂を傳持し經行して越中に入り信光寺を創して螢山の爲に燒香すと云の祖となす是に於て開堂演法し螢山の爲に開山ふ（洞上聯燈錄）

チンヤウ　キヤウゴラウ　陳幕久五郎　十二代横綱力士なり本名を石倉遠高と稱し嶋根縣八東郡意東村伊左衛門の三男なり初め松江御船家相撲頭取瀧登鋼市を師とし後備後尾の道なる初潮久五郎に弟子入して黑鐵と名乘り廿歳の時大阪に出で、朝日山の門に入り安政三年遂に江戸に來りて兩國横綱司秀の山雷五郎の弟子となり慶應元年横綱の免狀を受く是より先き島津家に召抱へられしを以て戊辰の際西郷吉之助等の陣に出入し盡す所ありしといふ明治三十六年十月二十一日腎臓病にて日本橋區北新堀町の自宅に逝く年七十五遺骸は東京府下荏原郡大崎村光取寺に葬る法號高台院久心道照居士と云ふ

チンモク　珍目　禪僧なり作州黄蓮寺の住僧禪室と號す雲州源氏の子性質凡ならず幼より戲を好まず俗に混せず天性禪を好み自ら釋氏の樣あり父母宿緣あることを知り携て永祥寺に抵り實峯和尚を禮して驅鳥となす年弱冠を過ぎて南詢し遍幻に永澤寺に謁し機堂に新豐寺に參じ又然極を龍泉寺に叩く東關北越丹山播水一時諸老の門足跡徧く叩す尋で備中に旋りて實峯に親す峯の命に順ひ作州に抵て綱庵に謁す庵一見機語相合す密に法衣を授けて付囑の意を寓す應永六年嘗遊の處務を補ふ筑前守原滿祐宅に延て法旨を問ふ將軍足利義政田を捨て寶輪を轉す伯州黑坂の城主某氏泉龍寺を剃め相州の大守源敎之觀音寺を創め皆目を以て鼻祖となす文明五年疾あり三月初三日に至り鐘を撞き衆を集め後事を囑し湯浴し衣を更へて化す年六十七（洞上聯燈錄）

チンヤ　ゲンムラ　塵也「サトウシウケン」

チンヤ　ガコ　千村鶩湖（千村自ら修して千と云ふ）尾張の儒者なり名は諸成、字は伯就、鶩湖に參す無字を看せしむ提撕十五年入頭の處無し庵說破せざるを憤て起單して走んと欲す一時叟あり也と相善し特に行て意を告ぐ叟聲を勵して呵して曰く將に謂へり是れ個の漢と今悔らくは十五載徒に個の俗漢と相交ることを也釋然大悟し鉢て寺に入り鞋を著て室に詣る庵曰く個の漢何ぞ鞋を脱し來らざる也曰く一變の破艸鞋脚盧頂を蹈著す菴領可す後也席を嗣ぐ（龍門夜話）

は其の號、孫太夫と稱す尾張の士良重の子父及び松平君山の門に學び詩を善くす寛政二年六月歿す著はす所自適南詩集、同文集、冷野草等あり（續諸家人物誌、鑒定便覽、尾張名家志）

チン　ヤウ　キガク　沈惟岳「キヨミキガク」

チンヤウ　ヤウ　椿園「サトウチンヤウ」

チンヤウ　ヤウ　椿園「コセトミカズ」

チンヤウ　椿園　戯作者なり伊丹氏江戸の人女水滸傳及び翁草等の著書あり天明中の人

チヤ　ヤウ　茶「オチヤノツボネ」

チヤウ　丈阿　戯作者なり觀水堂と號す江戸の人寶暦明和頃の人丈阿草雙紙を著して始めて某戯作と署名す草雙紙に作者の名を署すること此に始る（戯曲小說通誌）

チヤウイ　長意「イヒザチチヤウイ」

チヤウイ　長意　姓は紀氏和泉國大島の人なり幼より慈覺大師に隨て顯密の教を受け又安慧座主に依りて灌頂せらる年二十間澄法師を拜して菩薩戒を受け尊て傳法密灌を大師に稟く人となり精氣潔白にして少しも俗塵に染まず時人貴んで露地和尚と稱す眞觀の始め大極殿の最勝王經會に列席し辯雅應答流るゝ如く四方の會衆節を擊つて歎稱措かざりき昌泰二年冬十月帝内宣を下して延曆寺の座主となす翌年十月内供奉十禪師に補す年七十一明年四月勅して僧正法印大和尚の位を贈らる（本朝高僧傳）

チヤウイウ　チヤウイウ　長祐「タナカチヤウイウ」

チヤウイウ　長祐　永正年間支那より歸化せし宗慶の子なり長次郎と通稱す宗慶京師に居り一種の陶器を製することを發明せり長祐もまた父の遺法に據て陶器を製す天正五年織田信長の命により點茶家の宗匠千利休の意匠を用ひ赤黑釉の茶碗を製す天正十六年豐臣秀吉長祐を京師の聚樂第に召して千利休の意匠に從ひ赤黑釉の茶碗を造らしむ其製甚た佳なり秀吉これを賞して樂の字の金印を賜ふ長祐大に喜ぶ爾後自ら製する所の陶器に必ずこれを印して樂燒と名づけ且榮を以て家の號となす慶長年間に至り故ありて金印を廢して用ひず更に樂の字の印を造る爾來代々これを用ふ燒は質柔かにして色白し其赤色のものは黄土を塗り燒きて赤色に化せしむ黑色のものは加茂川石を細末となし燒て黑澤を見はすその製する所の器は皆指頭を以て捏造し器械を用ふることなし故に形狀甚だ奇にして頗雅致あり茶家者流極めてこれを賞稱せり樂燒の祖は以て第一世とす第二世を常慶といふ吉左衛門と稱す第三世を道入といふ第四世を一入といふ第五世を左入といふ第六世を長入といふ第七世を得入といふ第八世を且入といふ第十一世を慶入といふ並に皆吉左衛門の通稱となす（工藝志料）

チヤウイン　長隱　江戸の俳人なり鶴々坊と號す初め曲秀といふ四世一流の門人なり（俳諧人物便覽）

チヤウイン　長隱　江戸の俳人なり造化坊花實庵と號す姓は平氏兒玉の族なり諸老に歷叟して機契未だ投ぜず三了に福昌寺に叟じ了の上堂の擊を見て省あり丈室に投じ所解を呈す了之を領し記室を掌らしむ親疾するを七年元和丙辰嗣て福昌寺に住し大に玄風を揚ぐ丁巳九月二十三日寂す（洞上聯燈錄）

チヤウエイ　チヤウエキ　長英「イトウチヤウエイ」

チヤウエキ　長益　薩州福昌寺の住僧なり大川と號す姓は平氏兒玉の族なり諸老に歷叟して機契未だ投ぜず三了に福昌寺に叟じ了の上堂の擊を見て省あり丈室に投じ所解を呈す了之を領し記室を掌らしむ親疾するを七年元和丙辰嗣て福昌寺に住し大に玄風を揚ぐ丁巳九月二十三日寂す（洞上聯燈錄）

チヤウオウ　長應　キダウチヤウオウ」

チヤウカウ　暢好「ヒラヲカチヤウカウ」

チヤウカウ　長好「オダチヤウカウ」

チヤウカウ　長好「モチヅキチヤウカウ」

チヤウカウ　カウザウ　長耕造　陸軍歩兵大尉なり福岡縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第十四旅團第五十五聯隊附として從軍中病に罹り甞八年三月十八日清國盛京省沙嶺堡戰地定立病院に於て死去す

チヤウカク　定覺　康慶の次子にして運慶の弟なり兄と共に佛工の名を得せられ法橋に叙せらる建久六年東大寺釋迦四天北方天を作り同八年快慶と共に同寺大佛脇士觀音を造る其の長各二丈五尺定覺最も觀音の作に妙を得て奈良一流の祖となる（東大寺造立供養記、工藝鏡）

チヤウカク　長覺　高僧なり出羽の人、少にして高野山に登り頼師の門に歷遊して時譽あり且つ資禀穎悟辯舌縱橫人皆な之を推す嘗て鎌倉の俊譽法師に就き西院流の奥旨を究め無量壽院に住して金剛輪を建て一門の管轄となる應永二十三年十一月十五日安祥にして寂す年七十一平生撰述する所の書甚だ多し其の懿德高行寶性院の宥快法師と並び稱せらると云ふ（東國高僧傳）

チヤウカン　ザイ　長間齋「アケチミツタダ」

チヤウキ　長喜　浮世繪師なり榮松齋と號す始め子興といふ鳥山石燕の門人なり草雙紙及び錦畫を畫くこと多し（浮世畫師便覽）

チヤウキアン　長敷　カウアミチヤウキウ」

チヤウキウ　定橋「ホソキヂヤウキツ」

チヤウキツ　長訓　高僧なり近江滋賀郡の人俗

蓓錦氏、脫俗髮を剃て玄憐法師の高弟となり延暦中具足戒を受く會〻帝最勝會を啓く因りて長訓に命じて講主とならしむ辯舌優長禮くも登動す仁壽の間僧正となる齊衡二年世を謝す年八十平生持律甚だ謹む世に其の律行を稱す（元亨釋書、東國高僧傳）

チャウクワク　長鶴　俳人なり志村氏、紫仙の門人にして其の名を嗣ぐ別號青蓼亭と云ふ享保二十一年初夏披露す（俳林小傳）

チャウクワン　長寛「サノチャウクワン」

ヂャウクワンジ　長寛「サノチャウクワン」

ヂャウクワンデン　シャウジ　貞觀殿尚侍「フヂハラトミコ」

チャウケイ　テンワウ　長慶天皇　南朝の帝なり名は寛成、後村上帝の太子なり位にあること五年位を其の弟照成に讓りて出奔す改元すること三度（國史畧）谷森善臣著す所の嵯峨野の露に此の天皇曾て即位せざる事を記して云く天皇は道尊の諡號なり南朝後龜山天皇の弟にて兄帝の即位に依り太子となる天授七年元を弘和と改む兄帝の御子長泰親王御年十二即ち之れに太子の位を讓り紀伊に軍して身を軍務に專にす後尊號を奉りて太上天皇と云ふ南北講和後落飾して覺理と云ふ應永元年八月一日嵯峨の大覺寺長慶院に崩ず年四十二

チャウゲツ　長月「ノセチヤウゲツ」

チャウゲツシヤ　張月舍眞弓

マユミ　狂歌師なり姓關口氏にして名は勝馬と呼べり長野縣の士族にて江戸に住し狂歌は赤坂なる（相良侯）繊月連に列り月號免許の判者たり明治十六年十二月廿日歿す年七十二辭世の歌に「我がこの身動くからくりいときれて空風火水地にぞ歸しける」青山共葬墓地に葬る（古今狂歌人物志）

チャウゲツセウ　張月樵　畫人なり名は行眞字は元啓、倉根の人尾張名古屋に住す市川君圭を師とす人物花鳥に長じ又た雜畫を善くす其名尾濃の間に高し天保三年六月廿二日歿す年六十三（畫乘要畧）

チャウゲン　長嚴「デンエツ」

チャウコ　漲湖「イハタチャウコ」

チャウコウゲン　ジャクメイ　長江軒寂明「ヲガタクワウリン」

ヂャウサイ　定濟　久我内大臣源定通の子なり母氏は後嵯峨天皇の乳母たり童卯にして寵深僧正に依て剃髮して業を受く聰明群に出づ稍長ずるに及び母に帝曰く他日學道成熟せば當に汝を以て護持僧となすべしと濟此より益〻鋭意精進す博く性相を學ぶ初醍醐に歸りて定の樹慶に就て三論を習ひ醍醐に歸りて定親僧正に依て南部の灌頂を受く寛元元年三會の講を畢て衆其の釋義に服す僧官遷りに昇て建長五年法印に叙す八年の秋醍醐寺の座主に任ぜらる正元元年春法務を兼ぬ弘長二年東寺の長者を司る文永元年清瀧神祠に就て朝家安穩の祈禱會を修す二年五月權僧正となる四年春東大寺寺務に補せらる十年六月旱あり又清瀧に祈て賞を受く七月十六日月蝕を祈て驗あり虧ることなき正道朝に讓り帝の崇寵日に渥く遂に大僧正に任ぜらる建治二年四月十五日月蝕を禱て驗を得二年夏旱す詔を奉じて雨を神泉に禱て應あり弘安四年正月勅を奉じて伊勢太神宮に詣して元賊を調伏す夏六月西院に於て不動使者法を修して蒙古を降伏す五年十月三日奄然として化す年臘詳ならず濟、道德、富貴兩なから具備す三實院燒失後堂宇未だ建たず依て自ら衣財を捨て〻悉く舊觀に復す又屢〻結緣灌頂を修す弟子三人あり定勝、通海、定梅にして門業愈〻著し（本朝高僧傳）

チャウサウ　丈帥「ナイトウヂヤウサウ」

チャウサウケン　聽霜軒「カヂセイホウ」

チャウサン　長算　台宗の高僧なり中納言藤原宗の奥義究めざるところなし又池上の皇慶阿闍梨に就て密灌を受く檀那院に住して台教を敷演す論場を馳騁して聲名を振にせり天喜五年奄爾として寂す（朝高僧傳）

ヂャウザン　丈山「ヲカムラヂヤウザン」

ヂャウザン　丈山「イシカハヂヤウザン」

チャウサンシウ　長三洲　儒者にして書家なり傍ら南宗の畫を善くす名は芝宇は世草又秋史、本姓は長谷氏、幼名富太郎又光太郎、梅外の子、膚瀬淡意の門に入り後其の弟旭莊の大阪の塾に塾長たり尋攘の有志に交り感憤する所あり萬延元年長門を過り長藩の儒士屋蘆海及び執政周布兼翼宍戸眞澄等に交り同藩明倫館の講師となる後藩命を以て彦山僧徒及び二豐志士を遊說し小倉藩の爲に捕へられんとす元治元年外艦赤間關を襲ふの時三洲奇兵隊に入り前田砲臺を守る三洲部下を督し敵の陸戰隊と奮戰し傷きて退く時に長藩分れて正義俗論の二黨となる三洲俗論黨の爲に忌まる去て長府侯に寄り萩侯の俗論黨を斥けんとを說かしむ慶應二年長府侯の爲に筑前に使し又薩の西鄕隆盛に會し萩藩の素志を說き兩藩の軋轢を和ぐ已にして萩藩に歸れば俗論黨裏へ正義軍藩政を執り大に三洲を重用す明治元年討幕の役三洲越後口に向ふ東軍と奥羽に進撃し會津平ぐに及んで歸る三年冬權大史に任ず時に廢藩論起り而して一二の雄藩可かず三洲新封建論を著して之を駁す四年大學少丞に任じ侍讀を兼ぬ學制五篇を草して上る尋で大丞に陞り教部大丞を兼ぬ七年參議局長に遷り侍書を兼ぬ八年一等修撰となる十年龍駕に扈し大和京都に巡回し一等編修官に任ずは より先三洲參議木戸孝允の爲めに用ひられ其奏議多く三洲の草に成る孝允愛ずるや三洲其の知己を亡ふを痛み職を辭し詩文書畫を以て樂とすること二十年龍骨裏へず時に勅ありて書畫を作りて上らしむ二十七年東宮の侍書に拜す戮くもなく辭す二十八年正五位に陞叙す三月十三日卒す年六十三（三島毅撰碑文）

ヂャウザン　ゼンサイ　定山漸齋「モリゼンサイ」

ヂャウシウ　定秀　豐前の僧にして彦山の學頭なり豐後に住す永暦養和年間の人一名貞秀（古今鍛冶銘早見出）

ヂャウシウ　定秀　豐後彦山の僧にして賢正坊と號す好て刀劍を鍛作す紀の行平の師なり承安比の人或は云長和又は天平又は正治比の人なり或は元暦比ま

で生存すと（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

チャウシウ　長洲　畫人なり大阪の人尾形光琳の畫風を學ぶ安永天明年間の人（扶桑畫人傳）

チャウシウ　長秀　歸化の僧なり唐の人、天暦中來りて鎭西に居り醫術に長ずるを以て徵されて梵釋寺に住し傍務を嘗し兼て醫事に從ふ長秀一日桂宮に詣り庭樹を觀て曰く此れ眞の桂樹なり以て藥劑に供すべしと時人始めて用ふべき桂樹の木邦に在るを知れり長秀方書を撰して之れを朝廷に進む世又た其遺方を傳ふ（島國名醫傳）

チャウシウ　長州「トミダチヤウシウ」

チャウシウ　長收「アリガチヤウシウ」

チャウシウ　張洲「エイイ」

チャウシウチ　長七「カミチヤウシチ」

ヂャウシウ　定生　大和當麻の僧にして康和比の人薙刀を鍛するの妙を得ると云ふ（古今鍛冶銘早見出）

チャウシャウキン　長昌院「ホラノカタ」

チャウジャエン　ハギヲ　長者園萩雄　狂歌師なり通稱を石川李之助と云ふ幕府の士にして狂歌を詠み殊に蜀山と交りて最も其風を得たり後年越後國水原の代官下役たり後東京に歸り所々に居を轉じ根岸に於行松の邊りに住す明治六年九月廿日年九十歳にして病て歿す四ッ谷南寺町法華宗正妙山法恩寺に葬る法號「長者園萩雄居士」と云ふ（古今狂歌人物誌）

チャウジラウ　長次郎「テウジラウ」

チャウジュ　長孺　カハヂチャウジュ」

チャウジュ　長孺「ハヤシクワクリヤウ」

チャウジュ　長樹　禪僧なり東木と號す久しく大空に參じて印記を受く出て〻福聚寺に住し次に遼の松嶽寺に遷る永正丙寅龍澤寺を主る後ち福聚に終ふ（洞上聯燈錄）

チャウシュンキン　長春院「アシカガモチウヂ」

チャウジュキン　長壽院「アシカガタカウヂ」

ヂャウジュン　定順　鎌前の僧にして定願法師と稱す建武年間の人にして刀劍の鍛冶を能くすと云ふ（古今鍛冶銘早見出）

チャウジョウ　長乘「ゴトウチチヤウジョウ」

チャウショウアン　聽松庵「タニムラカジュン」

チャウショウアン　聽松庵「ヨシダソウセツ」

チャウショウキン　マサヨシ　長勝院「マンノカタ」

チャウシュエン　丁子園雅好　狂歌師なり通稱を伊東昇吉といへり小石川白山の邊り吸き て業とせしが維新後諸所に移轉せり振の狂歌に長じたりしが後に故有て丁子園雅好と改め兄弟の名を嗣ぐ別號を七面堂武昇と呼び最も天明振りの狂歌に長じたりしが後に故有て丁一淺草山谷通入寺に葬る（古今狂歌人物誌）

チャウシュエン　長者園の門弟にして初號を七面堂武昇と稱す伊東昇吉といへり小石川白山の邊り

チャウシュエン　長者園の門弟にして初號を七面堂武昇と

チャウシュエン　長者園の門弟にして初號を七面堂武昇と

チャウスキ　長水「タケウチタイチユウ」

チャウスキ　長翠「トコヨダチヤウスキ」

チャウセイ　長清「キヨクワクチヤウセイ」

チャウセイ　長盛　京師の人東南坊の僧なり千利休に學びて茶道を能くせり慶長三年四月五日寂す（茶人系譜全集）

チャウセイ　長勢　佛師なり法眼定朝の弟子にして治安二年十月法成寺造佛の賞として法橋に叙せられ延久二年十二月法勝寺講堂造立の賞として法眼に叙せられ承暦元年十二月圓宗寺金堂造立の賞として法眼に叙して法印に叙せらる寛治五年十一月九日歿す年八十二其の子法印圓勢も亦屢〻勅命を奉じ佛像を造り名を譽げしとぞ（大佛師誌）

チャウセイアン　長生庵「ホリウチセンクワクワ」

チャウセイテイ　長生亭「テイイリウ」

チャウセイテイ　定照　高僧なり姓は藤原、京師の人法相を仁數に學び密灌を寛空に受く少年より色戒を犯さず嘗て曰く我れ少なる時曾て一指を以て女人の身に觸る今當に此指を燒とし三尊に供して懺悔を發露すべしと乃之を燃す嘗て山階寺の一乘院に居す橘樹あり枯悴す衆伐り去らんと欲す照大佛頂呪を誦じて加持す即日萠芽を生じ數日を越えて枝葉滋茂して漸く花果を嘖々たり住僧庇すら能はず又香宗城の閣、泉坂村に豆腐と云ふものあり姉復た竊かに之に囑し舟を以て轉多に送らんと欲す豆腐應諾其賄賂を貪て果さず意を飜へ

チャウセイ　長我「ゴトウチチヤウジョウ」

チャウセイ　長水「タケウチチヤウジョウ」

チャウセイ　長翠「トコヨダチヤウスキ」

チャウセイ　長清「キヨクワクチヤウセイ」

チャウセイ　長盛　京師の人東南坊の僧なり千利休に學びて茶道を能くせり慶長三年四月五日寂す（茶人系譜全集）

チャウセイ　長勢　佛師なり法眼定朝の弟子にして治安二年十月法成寺造佛の賞として法橋に叙せられ延久二年十二月法勝寺講堂造立の賞として法眼に叙せられ承暦元年十二月圓宗寺金堂造立の賞として法眼に叙して法印に叙せらる寛治五年十一月九日歿す年八十二其の子法印圓勢も亦屢〻勅命を奉じ佛像を造り名を譽げしとぞ（大佛師誌）

チャウセイアン　長生庵「ホリウチセンクワクワ」

チャウセイテイ　長生亭「テイイリウ」

チャウセイテイ　定照　高僧なり姓は藤原、京師の人法相を仁數に學び密灌を寛空に受く少年より色戒を犯さず嘗て曰く我れ少なる時曾て一指を以て女人の身に觸る今當に此指を燒とし三尊に供して懺悔を發露すべしと乃之を燃す嘗て山階寺の一乘院に居す橘樹あり枯悴す衆伐り去らんと欲す照大佛頂呪を誦じて加持す即日萠芽を生じ數日を越えて枝葉滋茂して漸く花果を嘖々たり住僧庇すら能はず又香宗城の閣、泉坂村に豆腐と云ふものあり姉復た竊かに之に囑し舟を以て轉多に送らんと欲す豆腐應諾其賄賂を貪て果さず意を飜へり躍り出て舟を擧て岸上に置く行人驚き怪しむ終りに臨みて藥王品を誦し命終即往安樂世界の處に至り門人に語りて曰く我れ死して後ち火浴を用ふる勿れ我死すとも當さに誦經して一切の饒益すべしと語り已りて結印して寂す門人遺命に從ひ全身を燒く其の後塔中果たして誦經振鐸の聲ありと云ふ（元亨釋書、東國高僧傳）

チャウセウシ　長嘯子「キノシタチヤウセウ」

チャウセツアン　聽雪庵「タニムラカジュン」

チャウゼン　長祚　定禪「ホリカハヂヤウウ」

チャウソ　アサヂヤウウ

チャウソカベ　クニチカ　長曾我部國親　土佐の人なり姓は秦氏其の先は秦始皇帝の後ち普洞王より出づ始め姓を波陀と賜ふ其の後裔秦川勝任を土佐に受く後ち仕を辭して同國長岡郡曾我部鄕に居る因りて以て族稱となす中葉を能俊と曰ふ朝廷に奎候し天盃を賜はる盃中鳩酸草一葉を浮ぶ之を拜し以て記號となし後世子孫之を傳ふ之を長曾我部の始祖となす能俊、俊宗を生み俊宗、忠俊を生み忠俊、重氏を生む重氏の八世信能足利尊氏に屬し軍功あり大埴鄕吉原の地頭職となり朝倉を得て之を領す深淵鄕介良莊中鹽田に居る信能の七世元門君父の命に悖戾し伯邦に漂流す親族錯亂、年あり後赦に遇ひ舊邑を復す而して弟雄親に讓る雄親繼て卒す子兼序（一に元秀に作る）繼ぎ宮内少輔と稱す是の時に當り細川氏四國を兼併す兼序最も親昵せらる本山梅慶、山田教道等猜忌年を歷る細川氏衰るへ三好氏興り代りて國柄を執り四國之が有となる梅慶教道等兼序を三好氏に讒毀す三好氏の守護代來りて山田城に居るに會す國人赴き謁す教道使を遣はし來り謂て曰く守護更に禮服を制し國人をして皆な紅袴を著せしむ宜しく制令に從ひ赴き見るべしと兼序其の言を信じ而して往く梅慶、教道兵を長岡郡に伏せ險に據りて紅袴を認め之を殺せんと欲す兼序の姊嘗て教道に嫁す密かに其の入に囑し兼序を勸めて脫し去らしむ兼序竊かに輿嚔寺に入る住僧姊の依託に因りて佛鉢を取り之れに酒し日を歷る寺中或は鎗器の虛なるを怪しみ私言嘖々たり住僧庇すら能はず又香宗城の閣、泉坂村に豆腐と云ふものあり姉復た竊かに之に囑し舟を以て轉多に送らんと欲す豆腐應諾其賄賂を貪て果さず意を飜へ

して謂へらく我苟も香曾我部氏の民たり私に秦氏を脱かさしめば恐らくは後嗣あらんと乃ち之を香曾我部景好に告ぐ景好も亦た長曾我部氏と相善からず豆腐と約し將きに之れを殺さんとす豆腐曰く明官兼序なして住吉詣での女裝みなし舟に乘らしめん請ふ狙擊し過まること久れと乃ち期を刻し兵を伏せ遂に兼序を殺す是を國親の父となす國親（南海治亂記に元家に作り四國軍記には元國に作る）小字は千王生れて僅かに六歳吉良、大平、本山等兵を起し來りて豐岡城を攻め悉く屠ふり殲す世臣近藤某遺孤を竹皮籠に匿くし廻國修業者に擬し甲浦を經て海路中村に行き孤を國司一條房家に依托す房家憫みて能く撫育し其七歳に及びて殊に左右に侍せしめ翰養す一日房家高櫻に上ぼり暑を避け戯れに謂ひて曰く汝千王能く腰戸の上より前庭に飛ぶことを得ば則ち子が姓氏を復せしめんと其の言未だ終らざるに千王唯と稱し身を翻して下る房家其の志を憐愛し本山（吉良、大平等を開驗し酒餌三千貫の食邑を復せしめ元服を加へ名を國親と稱し宮内少輔と改たむ還りて豐岡城に入る天文二十年八月兵を起し山田城を攻て城主山田丹波守を獲其の城を拔く（秦山集四國軍記）國親嘗て女を以て本山梅慶の子式部少輔に妻はし以て親交を修む而後雜說紛紜彼是解けず會々國親檀を稲崎に運び途に潮江を歷、梅慶人を遣はして之を奪ふ國親忿りて交を絶つ弘治二年梅慶長濱の支城を修造す而して匠工を缺き果さず國親之を聞き紐下の匠工福富右馬允に說き諭して曰く汝ち往て修を請ひ能く工を練り我をして竊かに城に入らしむるを得んか右馬聽諾す國親即ち刀を把り右馬を傷く右馬斃り城門を建るを聞き迎へ入れて城壁を造らしむ右馬爲に城門を建つ竊に其の一結を拔けば總結緩みて柱礎轉倒するの製をなす且能く内外の地理を諳んじ以て報ず六月國親兵三百を發し種崎に艤し胥に海路を渉り右馬を以て嚮導となし長濱に抵り城壁に薄まり外より結を拔き城門を壓倒し遂に之に乘ず城兵捍禦する能はず遁れ走るもの多し守將大窪治定城を棄てゝ木津城に走る梅慶繼を聞き朝倉城を發して永津賀に抵る明日辰の刻長濱に達す是の夜國親の子元親御疊瀬を經て長濱に到り兵三百餘を率ゐ梅慶が兵一千餘と慶運寺の前に戰ふ巳より午に迄り遂に之に克ち騎兵一百餘を獲、式部浦戸城を出て若宮に到る吉良親貞之と戰ひ復た之に克つ櫛を若宮の前に結び浦戸の通路を斷つ五六日を歷て國親攻口を通塞せしめ而して右馬を召し愚賞を

攻む兵威日に振ふ香川信景讃岐六郡を有す初め細川氏の襄ふるや其家人香西、香川、長尾、羽床椙角相爭ふ長尾羽床約盟し急に香川を攻む香川頼信敵す能ずして城を棄てゝ備後三原に走り小早川隆景に遷り其の城邑を復せんことを乞ふ隆景應諾す天正三年五月井上春忠浦宗勝を遣はし將となし摺白山城に攻む香川頼信敵す能ずして城を棄てゝ備後三原に走り小早川隆景に遷り其の城邑を復せんことを乞ふ隆景應諾す天正三年五月井上春忠浦宗勝を遣はし將となし摺白山城に攻めて之を陷れ頼信を遣はして其の故に復せしむといふ其の子信景嘗て毛利氏と相通ず元親謂へらく力を以て爭ひ難しと乃ち成を行ふ信景元親の次男を請ひて養子となし女を以て之に妻はす是を五郎二郎と稱す信景導て老ゝ是に於て西讃悉く服屬す七年春元親師を伊豫に出し宇和喜多二郡を侵伐し火を縱て抄略す是より先き河野氏頻年兵威衰へ武名を張らず元親の孝久武内藏助等屢ゝ勸めて之を伐つ元親其の毛利氏と親婚あるを以て故に礪かず是に於て轉じて内藏を先鋒となし河籠城を圍む城主川原淵源八兵衛鄂ぎ戰ふ利あらずして降る多田攝津守も亦た降る宇都宮氏の孝菅田直之大洲城を以て歸降し援を乞ひて八幡鍛冶城を拔く河野通直怒りて兵七千を率ゐ大津莊に陣す來島通康、村上武慶、因島吉允等をして兵三千軍艦三百を管せしめ大津宇和路を絶て十州鬼屋に振り火を縱て土民を殺戮し皆艦を掠奪し内城、目黒の二城を拔く元親變を聞き汾川玄蕃を遣て赴きて直之を援けしめ而して自から師を班へす是の夏元親師二万を帥ゐ復た宇和喜多に入り郡邑を侵略し三瀧、甲森城を攻めて之れを陷れ内藏武善あるを以て伊豫の總督となる宇和郡三間郷に土居、金山、岡本、深田、高森等の數塞あり相連りて數援す内藏譏知し潛に人を擇びて間路を穿ち敵の不意を擊ち岡本の牙城を取る其の二郭を戍る所の兵屈せずして固く禦ぐ土居清義急を聞て馳せ援ひ鉞手を伏せて誘ひ擊つ是に於て内藏尊戰死するもの多し元親其の弟親直を以て代りて兵を統べしめ遠圍日を歷れども解かず敵遂に棄てゝ去る風を望み潰ゆるもの數城、御莊越前守、里城、絲城、猿屋新城等を築き拒ぎ備ふ是の時長曾我部右衛門大夫は宿毛城に在り十市備後は吉奈城を守る備後計策を廻らし猿越城を攻む右衛門先んぜらるるを恥ぢ急に兵を起して絲城を攻め之を下だす互に相抗すること月越前縋竭き力盡れ遂に置を出し降を乞ふ四月元親兵五千餘を率ゐ羽床嘗戰を那珂郡高篷郷に攻めて之を破る尋いで資敏和平を乞ふ鷲山城も亦降る是の歲元親春より冬に渉り轉戰轍ち克ち城を有除を取る又た敵地を侵伐する每に健歩を縱ち禾を刈り苗を覆へさしむ十二月興居島城主宇都宮豐綱及び四國公廟成を請ひ白木、土居、金山、岡本、高森、板島、岩井、森等悉く賞を納れ款を送る河野通直、來島通康亦た成を行ふ唯だ德居其の島に據守して服せず元親も亦た侵さず八年五月國人波川玄蕃北川某竊かに國司内政官某を以て謀じ亂を謀る元親兵を起して波川を擊破し又た北川降を乞ふて黄幡城に圍み桑名太郎左衛門之れを攻む北川降を乞ふ太郎欺きて焉れを殺す元親人を遣はし國司内政に謂て曰く我れ君が孤弱を憐み以て女婿となし大津に城を築き既に子女を生めり我れ豈に君を疎んぜんやと雖も手を揚げて洪河を渡り仇を報ぜんと欲す況や一たび約して之を嘲む（實餘、治亂記天正九年に作る）九年元親讃岐の鵜足郡に抵り城を四長尾氏の奈良勝政と綾坂及坂吉を守り左右相援ふ元親香川信景を倡へしむ奚慶歩騎數千を率ゐて四莊城を保たしめ四長尾と相救ひて還る十年春信長三好奚慶をして阿波を徇へしむ奚慶歩騎數千を率ゐて阿波に入る元親信長に屬する國人赴き服するもの多し池田を出して雑賀を援ぐ援ぐれば則ち他日陳謝するに所なくして土州を減することを必せり臣往きて之を探るに敵の兵威豐饒我兵に倍すること遠し敢て對敵すべきならざるなり我が四國の如き兵亂既に四十年所、邑墟り民舍を焚き耕耘時を失ひ民罷れ共滝む野馬田如きと雖も昔なれり癸寅を上國の兵馬に對するを以て故に臣降參の禮を取り勵めて完封を請ふと雖も可かず稍ゝ土佐一州を全するを得しのみ君の欲する所に非ずと雖も宗が覆して相抗衡する此れ亦恥ぢざるの甚だなり臣ゝ逆討の一計あるのみ君の若し忠澄の言是なりゝ昔な諫止す試みに先づ忠澄を召して秀吉の泉州大坊の陣に赴かしめ方物を獻じ禮を厚うし以て使命を達す秀吉召見て曰く長曾我部夫れ何を加言ふ忠澄對て曰く元親苟ゝ虎威を假り以て四國を均平す他日請ふ麾下に候し四國の兵を率ゐ以て先驅を四海に爲さん秀吉曰く元親恣に南海を横行す故に我今之を征伐せんと欲す既に師十萬を約し今ま此に在り然れども使者到り拜謝禮を致す故に征伐を寄るし而して特に其の罪を赦し阿讃豫三州を收め而して土佐を以て元親を封ぜん疾く來りて拜覲すべしと忠澄拜揖し退て曰く臣試みに國家の爲めに之を說かんに四州を元親に封じ以て先鋒となさば則ち五畿七道を征討すと雖ゝ敢て抗衡すべき者なし今若し三州を收めて他人を封ぜば未だ其の強態を識るべからず元親初め長岡郡より起り四國を剿平す武勇と謂ふべしと秀吉曰く吁汝ぢ辯口に任せ荒言を吐くか元親私に三州を掠奪す其罪逆るべからず速に國郡を收めずんば則ち人を遣はして元親が首を刎れん忠澄曰く君は横掠すと云ふと雖ゝ方今天下亂れて上下交ゝ利を爭ふ儻勇者は勝て國を闢き怯劣者は敗れて家を亡す設令ひ聖人復た出ると雖も制することを能はず君は天命なり是の時に當り元親四國を侵暴す更に横奪の罪ありと稱すべからず乃ち是れ天命なり君も亦天命に因て天下を有つ元親之に繼ぎて四國を平治す小は大に服するの世智今ま元親身を屈して陛下に伏す是れ亦た天命なり元親夫れ何の罪か之れあらん秀吉曰く元親が首を刎れんと欲すと雖も使者忠澄が大言を美と謂ふ大西に在り謂らく我れ四國の歩騎を併せて紀州の應援を爲し岸和田を濟り羽柴氏を逆へ擊て輸贏を決せん我居ながら彼に我が紀州を侵さしむ武に非ざるに似たりと谷忠澄と云へる者本一宮の社職にして頗る智勇あり元親に隷し國老に列す其の議を聞き次を離れ前みて曰く斯學の如きは實に國家存亡の大機なり願はくは臣を以て使節と爲し赴きて羽柴氏の機務を裏ひ和議を以て要と爲し機甸の形勢を探究せん是れ上策なり必ず期日を遲ばずして戰を爲すこと勿れ先づ節の意を和解せしむるに如かずと元親頭を掉りて曰く迂遠の策我は欲せざるなり臣ゝ逆討の一計あるのみ君の臣士感な謂らく未だ敵の多寡虛實を知らず叨りに師を進む是れ危計なり忠澄の言是なりゝ昔な諫止す試みに先づ忠澄を召して秀吉の泉州大坊の陣に赴かしめ方物を獻じ禮を厚うし以て使命を達す秀吉召見て曰く長曾我部夫れ何を加言ふ忠澄對て曰く元親苟ゝ虎威を假り以て四國を均平す他日請ふ麾下に候し四國の兵を率ゐ以て先驅を四海に爲さん秀吉曰く元親恣に南海を横行す故に我今之を征伐せんと欲す既に師十萬を約し今ま此に在り然れども使者到り拜謝禮を致す故に征伐を寄るし而して特に其の罪を赦し阿讃豫三州を收め而して土佐を以て元親を封ぜん疾く來りて拜覲すべしと忠澄拜揖し退て曰く臣試みに國家の爲めに之を說かんに四州を元親に封じ以て先鋒となさば則ち五畿七道を征討すと雖ゝ敢て抗衡すべき者なし今若し三州を收めて他人を封ぜば未だ其の強態を識るべからず元親初め長岡郡より起り四國を剿平す武勇と謂ふべしと秀吉曰く吁汝ぢ辯口に任せ荒言を吐くか元親私に三州を掠奪す其罪逆るべからず速に國郡を收めずんば則ち人を遣はして元親が首を刎れん忠澄曰く君は横掠すと云ふと雖ゝ方今天下亂れて上下交ゝ利を爭ふ儻勇者は勝て國を闢き怯劣者は敗れて家を亡す設令ひ聖人復た出ると雖も制することを能はず君は天命なり是の時に當り元親四國を侵暴す更に横奪の罪ありと稱すべからず乃ち是れ天命なり君も亦天命に因て天下を有つ元親之に繼ぎて四國を平治す小は大に服するの世智今ま元親身を屈して陛下に伏す是れ亦た天命なり元親夫れ何の罪か之れあらん秀吉曰く

州を平夷し國言して大に四國を伐んとすと時に元親阿波の大西に在り謂らく我れ四國の歩騎を併せて紀州の應援を爲し岸和田を濟り羽柴氏を逆へ擊て輸贏を決せん我居ながら彼に我が紀州を侵さしむ武に非ざるに似たりと谷忠澄と云へる者本一宮の社職にして頗る智勇あり元親に隷し國老に列す其の議を聞き次を離れ前みて曰く斯學の如きは實に國家存亡の大機なり願はくは臣を以て使節と爲し赴きて羽柴氏の機務を裏ひ和議を以て要と爲し機甸の形勢を探究せん是れ上策なり必ず期日を遲ばずして戰を爲すこと勿れ先づ節の意を和解せしむるに如かずと元親頭を掉りて曰く迂遠の策我は欲せざるなり臣ゝ逆討の一計あるのみ君の臣士感な謂らく未だ敵の多寡虛實を知らず叨りに師を進む是れ危計なり忠澄の言是なりゝ昔な諫止す試みに先づ忠澄を召して秀吉の泉州大坊の陣に赴かしめ方物を獻じ禮を厚うし以て使命を達す秀吉召見て曰く長曾我部夫れ何を加言ふ忠澄對て曰く元親苟ゝ虎威を假り以て四國を均平す他日請ふ麾下に候し四國の兵を率ゐ以て先驅を四海に爲さん秀吉曰く元親恣に南海を横行す故に我今之を征伐せんと欲す既に師十萬を約し今ま此に在り然れども使者到り拜謝禮を致す故に征伐を寄るし而して特に其の罪を赦し阿讃豫三州を收め而して土佐を以て元親を封ぜん疾く來りて拜覲すべしと忠澄拜揖し退て曰く臣試みに國家の爲めに之を說かんに四州を元親に封じ以て先鋒となさば則ち五畿七道を征討すと雖ゝ敢て抗衡すべき者なし今若し三州を收めて他人を封ぜば未だ其の強態を識るべからず元親初め長岡郡より起り四國を剿平す武勇と謂ふべしと秀吉曰く吁汝ぢ辯口に任せ荒言を吐くか元親私に三州を掠奪す其罪逆るべからず速に國郡を收めずんば則ち人を遣はして元親が首を刎れん忠澄曰く君は横掠すと云ふと雖ゝ方今天下亂れて上下交ゝ利を爭ふ儻勇者は勝て國を闢き怯劣者は敗れて家を亡す設令ひ聖人復た出ると雖も制することを能はず君は天命なり是の時に當り元親四國を侵暴す更に横奪の罪ありと稱すべからず乃ち是れ天命なり君も亦天命に因て天下を有つ元親之に繼ぎて四國を平治す小は大に服するの世智今ま元親身を屈して陛下に伏す是れ亦た天命なり元親夫れ何の罪か之れあらん秀吉曰く元親が首を刎れんと欲すと雖も使者忠澄が大言を美と謂ふ大西に在り謂らく我れ四國の歩騎を併せて紀州の應援を爲し岸和田を濟り羽柴氏を逆へ擊て輸贏を決せん我居ながら彼に我が紀州を侵さしむ武に非ざるに似たりと谷忠澄と云へる者本一宮の社職にして頗る智勇あり元親に隷し國老に列す其の議を聞き次を離れ前みて曰く斯學の如きは實に國家存亡の大機なり願はくは臣を以て使節と爲し赴きて羽柴氏の機務を裏ひ和議を以て要と爲し機甸の形勢を探究せん是れ上策なり必ず期日を遲ばずして戰を爲すこと勿れ先づ節の意を和解せしむるに如かずと元親頭を掉りて曰く迂遠の策我は欲せざるなり臣ゝ逆討の一計あるのみ君の臣士感な謂らく未だ敵の多寡虛實を知らず叨りに師を進む是れ危計なり忠澄の言是なりゝ昔な諫止す試みに先づ忠澄を召して秀吉の泉州大坊の陣に赴かしめ方物を獻じ禮を厚うし以て使命を達す秀吉召見て曰く長曾我部夫れ何を加言ふ忠澄對て曰く元親苟ゝ虎威を假り以て四國を均平す他日請ふ麾下に候し四國の兵を率ゐ以て先驅を四海に爲さん秀吉曰く元親恣に南海を横行す故に我今之を征伐せんと欲す既に師十萬を約し今ま此に在り然れども使者到り拜謝禮を致す故に征伐を寄るし而して特に其の罪を赦し阿讃豫三州を收め而して土佐を以て元親を封ぜん疾く來りて拜覲すべしと忠澄拜揖し退て曰く臣試みに國家の爲めに之を說かんに四州を元親に封じ以て先鋒となさば則ち五畿七道を征討すと雖ゝ敢て抗衡すべき者なし今若し三州を收めて他人を封ぜば未だ其の強態を識るべからず元親初め長岡郡より起り四國を剿平す武勇と謂ふべしと秀吉曰く吁汝ぢ辯口に任せ荒言を吐くか元親私に三州を掠奪す其罪逆るべからず速に國郡を收めずんば則ち人を遣はして元親が首を刎れん忠澄曰く君は横掠すと云ふと雖ゝ方今天下亂れて上下交ゝ利を爭ふ儻勇者は勝て國を闢き怯劣者は敗れて家を亡す設令ひ聖人復た出ると雖も制することを能はず君は天命なり是の時に當り元親四國を侵暴す更に横奪の罪ありと稱すべからず乃ち是れ天命なり君も亦天命に因て天下を有つ元親之に繼ぎて四國を平治す小は大に服するの世智今ま元親身を屈して陛下に伏す是れ亦た天命なり元親夫れ何の罪か之れあらん秀吉曰く

高篷郷に攻めて之を破る尋いで資敏和平を乞ふ鷲山城も亦降る是の歲元親春より冬に渉り轉戰轍ち克ち城を有除を取る又た敵地を侵伐する每に健歩を縱ち禾を刈り苗を覆へさしむ十二月興居島城主宇都宮豐綱及び四國公廟成を請ひ白木、土居、金山、岡本、高森、板島、岩井、森等悉く賞を納れ款を送る河野通直、來島通康亦た成を行ふ唯だ德居其の島に據守して服せず元親も亦た侵さず八年五月國人波川玄蕃北川某竊かに國司内政官某を以て謀じ亂を謀る元親兵を起して波川を擊破し又た北川降を乞ふて黄幡城に圍み桑名太郎左衛門之れを攻む北川降を乞ふ太郎欺きて焉れを殺す元親人を遣はし國司内政に謂て曰く我れ君が孤弱を憐み以て女婿となし大津に城を築き既に子女を生めり我れ豈に君を疎んぜんやと雖も手を揚げて洪河を渡り仇を報ぜんと欲す況や一たび約して之を嘲む（實餘、治亂記天正九年に作る）九年元親讃岐の鵜足郡に抵り城を四長尾氏の奈良勝政と綾坂及坂吉を守り左右相援ふ元親香川信景を倡へしむ奚慶歩騎數千を率ゐて四莊城を保たしめ四長尾と相救ひて還る十年春信長三好奚慶をして阿波を徇へしむ奚慶歩騎數千を率ゐて阿波に入る元親信長に屬する國人赴き服するもの多し池田を出して雑賀を援ぐ援ぐれば則ち他日陳謝するに所なくして土州を減することを必せり臣往きて之を探るに敵の兵威豐饒我兵に倍すること遠し敢て對敵すべきならざるなり我が四國の如き兵亂既に四十年所、邑墟り民舍を焚き耕耘時を失ひ民罷れ共滝む野馬田如きと雖も昔なれり癸寅を上國の兵馬に對するを以て故に臣降參の禮を取り勵めて完封を請ふと雖も可かず稍ゝ土佐一州を全するを得しのみ君の欲する所に非ずと雖も宗が覆して相抗衡する此れ亦恥ぢざるの甚だなり臣ゝ逆討の一計あるのみ君の若し忠澄の言是なりゝ昔な諫止す試みに先づ忠澄を召して秀吉の泉州大坊の陣に赴かしめ方物を獻じ禮を厚うし以て使命を達す秀吉召見て曰く長曾我部夫れ何を加言ふ忠澄對て曰く元親苟ゝ虎威を假り以て四國を均平す他日請ふ麾下に候し四國の兵を率ゐ以て先驅を四海に爲さん秀吉曰く元親恣に南海を横行す故に我今之を征伐せんと欲す既に師十萬を約し今ま此に在り然れども使者到り拜謝禮を致す故に征伐を寄るし而して特に其の罪を赦し阿讃豫三州を收め而して土佐を以て元親を封ぜん疾く來りて拜覲すべしと忠澄拜揖し退て曰く臣試みに國家の爲めに之を說かんに四州を元親に封じ以て先鋒となさば則ち五畿七道を征討すと雖ゝ敢て抗衡すべき者なし今若し三州を收めて他人を封ぜば未だ其の強態を識るべからず元親初め長岡郡より起り四國を剿平す武勇と謂ふべしと秀吉曰く吁汝ぢ辯口に任せ荒言を吐くか元親私に三州を掠奪す其罪逆るべからず速に國郡を收めずんば則ち人を遣はして元親が首を刎れん忠澄曰く君は横掠すと云ふと雖ゝ方今天下亂れて上下交ゝ利を爭ふ儻勇者は勝て國を闢き怯劣者は敗れて家を亡す設令ひ聖人復た出ると雖も制することを能はず君は天命なり是の時に當り元親四國を侵暴す更に横奪の罪ありと稱すべからず乃ち是れ天命なり君も亦天命に因て天下を有つ元親之に繼ぎて四國を平治す小は大に服するの世智今ま元親身を屈して陛下に伏す是れ亦た天命なり元親夫れ何の罪か之れあらん秀吉曰く

は盛親次某右近太夫と稱し加藤清正の羈客となる兄盛親の事に坐し死を伏見に賜ふ（諸士傳略）

チャウソカベ　モリチカ　長曾我部盛親　元親の四子なり、初字は、右衛門太郎後新右衛門と更ため宮内少輔と稱す初め元親降を秀吉に乞ひ盛親を以て質とし仕へしむ兄信親戰死の後ち國に還ることを得たり増田長盛一字を授く因て今の名を稱す父卒して封國を繼ぐ慶長庚子の亂長盛、盛親を召し石田三成に黨せしむ盛親兵を率ゐて勢田城を攻め尋で南宮山に陣す一たびも支戰するに及ばずして潰走し伊賀路を經て和州より泉州を廻歷し小出吉親と大津に遇ひて接戰し遂に大阪に走り井伊直政に因て罪を謝し降を乞ひ國に還りて命を俟つ直政爲に哀憐歎訴す家康之を許し盛親を大阪に召す其の發するに臨み道に岩村に入り兄親忠に澤り自殺せしむ實に九月晦なり初め親忠出でゝ野津氏を繼ぎ須崎に在り元親業已に盛親を以て嗣となす親忠嘗て藤堂高虎と善し久武親直等或は盛親に言て曰く藤堂氏方さに親忠を寵す氏若し其の汲引を爲さば恐くは封國の半を分たんと盛親之を然りとし且つ親忠の兄を以て父の後を繼がざるを以て心安んぜず遂に之を岩邑の寺院に實く是に於て人を遣はし偖りて自盡せしむ十一月大阪に到り直政に通じて伏見に赴く直政以開す家康問ふ盛親の兄に野津と云ふものありやと高虎侍坐し對て曰く有り盛親嘗て彼と和せず彼れ先に歸順の志あり故に偽りて自殺せしむと家康曰く元親の子にして斯の無謀者あるかと乃ち命じて其の罪を正し國を除し廢して庶人となし直政をして土佐國に赴かしむ直政乃ち其の臣鈴木重好松井民太夫を遣はし土佐に赴き鄙邑を鎮撫す乃ち浦戸に到る國人之を立石に迎へ而して命を聽く嘗て一領具足と稱するもの萬數人あり相謂へらく老臣君を大阪に弑し敵を國内に引きて横奪せしむと乃ち銃を重好の舟に縱つ其の驚五千七百餘人浦戸城に據り拒備す重好大呼して曰く是れ内府公の命なりと是に於て兵船三百餘忽ち命を拜し重好を導き雪蹊寺に入る猶ほ未だ服從せず酋長竹内總左衛門等請ひて曰く土州の半を以て盛親に賜はゞ則皆出て、命を拜せん重好對て曰く分封の事我が爲す能はざるところ宜く以聞して上裁を仰ぐべしと又た請て曰く若し得ざれば乃ち一郡或は十邑廿邑と雖も請ふ賜ひて以て家系を繼がしめんと往復數旬を經て果さず乃ち藤堂高虎、加藤嘉明をして隙阿讃の兵を發し土佐に赴かしむ是に於て盛親の臣桑名彌二兵衛等往々歸順し兵を興して服せざるものと長濱に戰ふ敵衆多なりと雖も將帥なきを以て號令整はず故に遂に敗亡す將帥自殺し餘衆城を重好に致して散ず重好乃ち盛親の妻孥を大阪に送る盛親剃髮入道して祐夢と稱す司代板倉勝重祐夢が異望あるを慮り毎日探り來りて浅野長晟と書約あり願はくは大阪に走り井伊直政に因て罪を謝し降を乞ひ國に還りて命を俟つ直政爲に哀憐歎訴す家康之を許し盛親を大阪に召す其の發するに臨み道に岩村に入り兄親忠に澤り自殺せしむ實に九月晦なり初め親忠出でゝ野津氏を繼ぎ須崎に在り元親業已に盛親を以て嗣となす親忠嘗て藤堂高虎と善し久武親直等或は盛親に言て曰く藤堂氏方さに親忠を寵す氏若し其の汲引を爲さば恐くは封國の半を分たんと盛親之を然りとし且つ親忠の兄を以て父の後を繼がざるを以て心安んぜず遂に之を岩邑の寺院に實く是に於て人を遣はし偖りて自盡せしむ十一月大阪に到り直政に通じて伏見に赴く直政以開す家康問ふ盛親の兄に野津と云ふものありやと高虎侍坐し對て曰く有り盛親嘗て彼と和せず彼れ先に歸順の志あり故に偽りて自殺せしむと家康曰く元親の子にして斯の無謀者あるかと乃ち命じて其の罪を正し國を除し廢して庶人となし直政をして土佐國に赴かしむ直政乃ち其の臣鈴木重好松井民太夫を遣はし土佐に赴き鄙邑を鎮撫す乃ち浦戸に到る國人之を立石に迎へ而して命を聽く嘗て一領具足と稱するもの萬數人あり相謂へらく老臣君を大阪に弑し敵を國内に引きて横奪せしむと乃ち銃を重好の舟に縱つ其の驚五千七百餘人浦戸城に據り拒備す重好大呼して曰く是れ内府公の命なりと是に於て兵船三百餘忽ち命を拜し重好を導き雪蹊寺に入る猶ほ未だ服從せず酋長竹内總左衛門等請ひて曰く土州の半を以て盛親に賜はゞ則皆出て、命を拜せん重好對て曰く分封の事我が爲す能はざるところ宜く以聞して上裁を仰ぐべしと又た請て曰く若し得ざれば乃ち一郡或は十邑廿邑と雖も請ふ賜ひて以て家系を繼がしめんと往復數旬を經て果さず乃ち藤堂高虎、加藤嘉明をして隙阿讃の兵を發し土佐に赴かしむ是に於て盛親の臣桑名彌二兵衛等往々歸順し兵を興して服せざるものと長濱に戰ふ敵衆多なりと雖も將帥なきを以て號令整はず故に遂に敗亡す將帥自殺し餘衆城を重好に致して散ず重好乃ち盛親の妻孥を大阪に送る盛親剃髮入道して祐夢と稱す司代板倉勝重祐夢が異望あるを慮り毎日探り來りて浅野長晟と書約あり願はくは大阪に走り井伊直政に因て罪を謝し降を乞ひ國に還りて命を俟つ直政爲に哀憐歎訴す家康之を許し盛親を大阪に召す其の發するに臨み道に岩村に入り兄親忠に澤り自殺せしむ實に九月晦なり初め親忠出でゝ野津氏を繼ぎ須崎に在り元親業已に盛親を以て嗣となす親忠嘗て藤堂高虎と善し久武親直等或は盛親に言て曰く藤堂氏方さに親忠を寵す氏若し其の汲引を爲さば恐くは封國の半を分たんと盛親之を然りとし且つ親忠の兄を以て父の後を繼がざるを以て心安んぜず遂に之を岩邑の寺院に實く是に於て人を遣はし偖りて自盡せしむ十一月大阪に到り直政に通じて伏見に赴く直政以開す家康問ふ盛親の兄に野津と云ふものありやと高虎侍坐し對て曰く有り盛親嘗て彼と和せず彼れ先に歸順の志あり故に偽りて自殺せしむと家康曰く元親の子にして斯の無謀者あるかと乃ち命じて其の罪を正し國を除し廢して庶人となし直政をして土佐國に赴かしむ直政乃ち其の臣鈴木重好松井民太夫を遣はし土佐に赴き鄙邑を鎮撫す乃ち浦戸に到る國人之を立石に迎へ而して命を聽く嘗て一領具足と稱するもの萬數人あり相謂へらく老臣君を大阪に弑し敵を國内に引きて横奪せしむと乃ち銃を重好の舟に縱つ其の驚五千七百餘人浦戸城に據り拒備す重好大呼して曰く是れ内府公の命なりと是に於て兵船三百餘忽ち命を拜し重好を導き雪蹊寺に入る猶ほ未だ服從せず酋長竹内總左衛門等請ひて曰く土州の半を以て盛親に賜はゞ則皆出て、命を拜せん重好對て曰く分封の事我が爲す能はざるところ宜く以聞して上裁を仰ぐべしと

殺せられ能登大に亂る織田信長隨を窺ひ越後を取らんと欲し重連を誘ひ招く重連之に應ず是夏四月土寇を糾煽して七尾に據る越中の國人多く之に應ず乃ち益々兵を出し郡邑を掠畧す義隆の叔父上杉義春越後に在り聽を聞き援を上杉謙信に乞ふ六月謙信師を率ゐ義春を以て先驅せしめ越中能登を侮へ諸寇を畧定す七月遂に七尾を圍む重連弟恩光寺の僧宗顯（逸史に孝恩に作る）をして急を信長に告げしむ既にして越中の人温井三郎と云ふもの重連及び弟杉山則直飯河義實等を殺し城を以て降る（松隣夜話に云く天正五年信長謀を廻らして松任の城主筑前守を誘招す筑前人と爲り剛强勇敢丹波の人赤井、信濃の人平賀と並に英名あり筑前越中の人神保治部と俱に上杉氏に叛て信長に見て曰く謙信は强將なり苟も送り陰に安土に赴き信長に見て曰く謙信は强將なり苟も異心あるを察せば疾く來り伐たん公必ず師を出さんか柴田羽柴を以て來り救はしめば臣他日を顧ず彼と雌雄を決せんと信長應諾す筑前城に歸り意を決し大聖寺と諜合して越中を侵畧し火を椎谷口に縱ち越の部將河田親章と相戰ふ四月謙信師を率て越中に入る五月親章及新發田治長等を以て來り伐たしむ筑前檄を飛し援を乞て曰く援兵遲緩して期を失ぜば臣謙信に屬して先驅となり越前を蹂躪して以て西するは十旬に在らんと是に於て信長、柴田勝家、佐久間信盛、丹羽長秀、長谷川秀一、前田利家等九人矣四萬八千を以て救はしむ謙信の營と相ひ去ること二里程、畏縮敢て前まず親章等城を攻る急なり筑前兄弟及男女少長二千六百餘人皆五層殺せらる）信長師四萬を帥ひ八月水島に陣す謙信亦悉く能登を討平して兵を加賀に收め重連及一族の首七級を倉部柏野濱に梟す信長謙信の對抗するを聞き沮む色あり宗顯欺て曰く我往て梟首を見るに面貌皆異れり彼れ公の到るを聞き士寇を斬て以て首を梟し能登を棄てゝ松任に來り以て後援を拒ぐのみと信長鼎を師を班し宗顯を誅して髮を剃る遑俗して家を繼がしむ是に於て宗顯名を改て連龍と曰ひ九郎左衛門と稱す父兄の爲に仇を復せんと欲し越前に往て柴田勝家に憑る後能登に入る來り屬する者八十四人天正七年三月能州穴水城に入る又會する者百人是に於て問檢見與十郎を遣はし有神保氏春に依賴す後前田利家に仕へ勇を以て聞ゆ天正十年六月利家に從て不動山を攻め前田安勝と七尾城を守る末森の軍起るに及び利家の命を奉じ赴き援て功あり後七尾城主となる邑七萬七千石を食む晩に恕庵と稱す子好龍關ぐ前田氏に仕ふ（野史）

チャウテイルマル　ゴラン　長亭五蘭「ニシキクヤウテウ　定朝　佛工なり京都七條の人なり兩目盲し家甚だ貧し父母老衰起居に便なり或は春之或は盥手其實錢を得て奉養に供す僅主食を倉部柏野濱に梟す信長謙信の對抗するを聞き沮む色あり宗顯欺て曰く我往て梟首を見るに面貌皆異れり彼れ公の到るを聞き士寇を斬て以て首を梟し能登を棄てゝ松任に來り以て後援を拒ぐのみと信長鼎を師を班し宗顯を誅して髮を剃る遑俗して家を繼がしむ是に於て宗顯名を改て連龍と曰ひ九郎左衛門と稱す父兄の爲に仇を復せんと欲し越前に往て柴田勝家に憑る後能登に入る來り屬する者八十四人天正七年三月能州穴水城に入る又會する者百人是に於て問檢見與十郎を遣はし有

鷹灑最も古人の風あり又た字學に精しく併せて書を善くす然れども皆詩の餘事のみ入幡氏か娶り四男二女を生む而して長子英家か嗣ぐ三湖是なり

チャウハク 長伯「アリガチャウハク」

チャウバンネン 長萬年 紀州の儒者なり肥後の人片山兼山に學ぶ(鑒定便覽)

チャウフ 長普「クスノキチャウフ」

チャウフ 長府 蒔繪師なり姓氏詳ならず木地蒔繪を進歩せしめたる人なり一說に長門國府中の人なれば長府と呼びたるなりと(蒔繪大全、工藝志料)

チャウフクシ 長福子 良醫なり吉田宜、御立胡明、城上眞立等と名を齊うす(皇國名醫傳)

チャウベエ 長兵衛 裝劍彫工なり江戸馬喰町四丁目に住す菊を沈彫するに妙なり(裝劍奇賞)

チャウホ 長甫 禪僧なり字は嶽翁伊勢中原の人乾峯和尚に參して悟機投契す峯法衣及偈を授く此より一錢諸方に行化して日向に至る郡主田島氏其德を崇び一寺を建て强ひて駐錫せしも大光寺此なり傑閣隆樓雲烟の乘等の六精舍を開く康安二年八月二日峯を集めて誡を垂れ偈を書して化す塔を多福といふ(本朝高僧傳)

チャウミヤウ 長明 高僧なり年二十五にして信州戸隱山に居し語を禁じて法華を誦し夜中臥せざること三年、一日門人に語りて曰く我は是れ一切衆生喜見菩薩なり此に來りて身を焚くこと已に三度なり今命盡きて兜率に上らんとすと遂に薪を積み內に入りて自ら焚く時に康保年中なり(元亨釋書、東國高僧傳)

チャウメイ 長命 榮次郎

エイジラウ 長命榮次郎 鷲流狂言師なり本名を增田直興と云ふ鷲流の分家鷲仁左衛門の門弟となり練磨の功積み十九歲にして松平和泉守の御抱となれり戊辰の役後前將軍家井に諸士等多數は靜岡に移住したるを以て榮次郎も亦之に隨從したり明治十年中東京に歸り仁左衛門の遺子鷲權之丞と共に大に同流の發揮に力めたり復大藏流の山本東次郎は痛く榮次郎の技に感服し榮次郎を聘して一門の演技に加はらしむ晩年演技を懸ふに至りたるが四十年六月梅若の夜能に出て尋いで能樂倶樂部の夜能に出たる後急症を起し同十八日逝く年六十七鷲流狂言は是に至り殆ど絕えたり

チャウヤウドウ 長陽堂安知 浮世繪師にして儁月堂の門人なり年代詳ならず(浮世繪師便覽)

チャウヨ 長譽 能登の人なり紳志高尚にして義論比なし應永十四年丹生神の託を以て論席を山王院に開く宥快證義者たり譽は暨者となる兩雄往復し言鋒相交る更深け坐すること久うして聽衆倦むことなし常に無量壽院に居りて學徒を誘掖す同三十年七月十四日に卒す(本朝高僧傳)

チャウラウ 長朗 高僧なり本法相宗の學徒なり後正義に從て華嚴を習聽す性英利にしてよく圓融の旨を解す義公朝に奏し官府の宣を以て華嚴の宗旨を嗣かしむ期藥師寺に住して講を開き人を導く弟子義聖善五致章を明にす(本朝高僧傳)

チャウラクモンキン 長樂門院「キンシ」

チャウラン 長蘭「タムラトウケイ」

チャウリウ 長流「ヲヂキチャウリウ」

チャウリウ 長流「シモカハベチャウリウ」

チャウリウサイ 長柳齋 畫人なり實性畫を好み能く墨布袋を畫けり其の畫意甚だ楊月と相似たりと云ふ(本朝畫史)

ギャウリン 定林 高僧なり聖寤と號す、泉州の人、幼にして顯達、彌勒院の實俊僧都に參じて鉢錫に侍す頭角嶄然衆に屬目せらる既に長じて中性院の增喜に隨て法を受く喜甚だ器許して益く授るに秘藏を以てす又順繼賴豪二老の門に出入して益く其蘊奧に臻る既にして兼て諸宗の章疏を研覽し洞徹疑なきに至りて學成り德立つを見、命じて中性院の衆之を重んじ推して學頭とす林晚年乃ち筆を援て阿字觀一篇を著はす詳ずるの法を問ふ林乃ち年を以て修行の秘訣とす明德三年五月廿日泊然として逝く年八十六(東國高僧傳)

ギャウエ 定慧 高僧なり大織冠鎌足の長子なり少にして聰慧明利、老成の風あり沙門慧隱に投じて出家す白雉四年唐に入り長安に抵りて慧日寺の神泰に謁し十年にして國に歸る時に白鳳七年、父巳に薨ぜり即ち弟丞相不比等に父の墳墓の在る所を問ひて攝州阿威山に在るを知る乃ち曰く父昔し嘗て曰く和州の談峰靈勝の區にして唐の五台に劣らず若し我れ他日彼に葬らば子孫必ず昌ならんと我れ前に台山に在りし時夢に談峰に上りて父に見ゆ父告げて曰く我巳に天に生ぜり汝當さに此地に就て梵刹を建て佛乘を修すべし吾も亦此に降りて攝護せんと此時已巳の歲十月十六日の夜二更なりと丞相聞き已りて泣て曰く兄が夢に感ずる時の如きは實に老父垂薨の時なりと慧即ち阿威山に登りて遺骸を取り遷して談峯に葬り其の上に十三級層の塔を建つ其の材皆慧が唐に在りし時作る所なり歸路舟重くして悉く載する能はざるを以て唯十二級を得て歸る立て已りて圓備せざるを恨む一夜雷飛び電走りて山嶽搖動す黎明一級飛び至る慧大に喜ぶ即ち文殊大師の像を塔中に安じて敬仰す和銅七年入滅す(元亨釋書、東國高僧傳)

ギャウエ 貞惠 花園天皇の時の蒔繪師なり正和四年朝命を奉じ近江國日吉神社の造營に從事せり當時の名手なり(工藝志料)

ギャウエ 定惠「タヒラトキノリ」

ギャウエン 定惠圓 鎌四の人なり幼き時說俗して叡山に居り常に法華を持し不動の法を脩す後に葛城山に入り三七日斷食誦經す夢に八金剛童子吳口同音に之を感嘆して曰く勤苦脩行は猶ほ婆伽梵の如し玄應般若經音義に曰く「婆加此譯云德、梵此言三成就」義三衆義成滿「名」婆伽梵」と三摩地に上りて諸の菩薩と相ひ居るを得ると偶ま河を渡らんと欲す氷結ひて水の深淺を知らず俄に大半あり山より出て丶河を渡る往復數回す因て以て渡るを得長久中沒す(元亨釋書、東國高僧傳)

チャウエン 長圓 豐前の刀匠にして元暦建保年間の人なり(古今鍛冶銘早見出)

チャウエン 長圓 豐前の刀匠にして亦大和に住す永延年間の人(古今鍛冶銘早見出)

チャキ 千屋菊次郎 勤王の志士なり諱は孝健初め菊次郎と稱し後榮と改む土佐藩士千屋半平の三男なり文久二年八月上京して後諸國を經歷し翌年八月國に歸る幾もなく松山正夫と書を遺して亡命し其後周防三田尻に抵り七卿に隨從す後諸藩を歷遊し當時の俊傑と交を結ぶ元治元年七月初旬長州勢と俱に東上し攝津天王山に在り七月十九日進て鷹司邸に據り越彥等の兵と戰ふ榮次郎力戰皆く一統なも衆ず而して軍遂に利あらず退て再び天王山に據り追兵を拒ぎ戰ふ然れども其竟に支ふ可からざるを知るや同志十七名と共に從容觀覽して死す時に七月二十一日にして榮次郎年二十八なり死する前一日遺書を弟金策に贈りて其志を繼かしむ明治二十四年十二月朝廷其忠志を追賞して特に從四位を贈らる(海南畿烈傳、甲子殉難錄、殉難錄稿)

チャザイ 茶齋「キノウヘチヤザイ」

チャザン 茶山「クワンサヂム」

チャチチヤ 茶茶「ヨドギミ」

チャノツボネ 茶之局「オチヤノツボネ」

チャヤシラウジラウ 茶屋四郎次郎 茶人なり京都の人茶道を千利休に學びて能くせり(茶人系譜全集)

チャライ 茶雷 大阪の俳人なり氏は山縣東居齋と號す鹿島白羽の門に入り十南齋を繼ぐ安永元年六月十八日歿す(俳諧人物便覽、浪花名家墓所集)

チヤリクラウ 血鎗九郎「ナガサカノブマサ」

チユ 知瞻 僧なり天智天皇の時始めて指南車を造り朝廷に獻ず(工藝志料)

チユウア 中阿 江戸の俳人なり氏は鈴木無篤庵と號す旬樹庵五陵の門人(俳諧人物便覽)

チユウアイ 仲哀天皇 十四代の帝なり名は足仲彥、景行帝の孫にして日本武尊の第三子なり母は兩道入姬と曰ふ位に即き筑紫の叛賊熊襲を討んと欲し長州穴門に遷る豐浦の宮にあり遂に筑紫に崩ず位にあること九年壽五十二殖香長野林の陵に葬る越前の一の宮敦賀郡の筍比宮は天皇を祀るものなり(大日本史、日本國一宮記)

チユウアン 仲安 畫家なり名は梵師松屋と號す別號は竹天叟、相國寺開山普明國師の弟子なり牧溪に學び多く不動尊及び應六年十一月前天龍松屋梵師筆すとあり又米年梵師と記す(鑒定便覽)

チユウエイ 仲英「ハツトリチユウエイ」

チユウエン 忠延 高僧なり天長の初め東大寺に住す華嚴部の灌頂を傳ひて華嚴部の灌頂を傳ひて大黑天を畫く自贊に云く明龍松屋梵師筆すとあり又米年梵師と

チユウガクグワシ 仲岳「カウフヨウ」

チユウガクダウ 中岳堂「サワキスウシ」

チユウカンシ 仲間子「カノエイケイ」

チユウキ 仲基「トミナガチユウキ」

チユウギコウ 忠義公「フヂハラカネミツ」

チユウキヨウ 仲恭天皇 名は懷成順德帝の子なり帝位にあること三月餘にして廢せらる世に九條廢帝と曰ふ

チユウクワアン 仲悉「アリヅミキシウ」

チユウグワモンキン 仲屈庵九州 サキコ

チユウケイ 仲鑑 高僧なり其本貫を詳にせず天資清邁にして才調餘あり元興寺の護命僧正を師とし深く奧を究む宿老等推奬して宗の棟梁となす後大和藥師寺を主領して大に布教に勉む當時の學修爭うて其門に入る天長六年の春繼最勝王會を藥師寺に修して以て永式となさんことを請ふ制して其奏を可とす因て名德を招きて三月朔日に始め一七日中最勝王經を講ず敕して律師に任じ承和十年某日住所に寂す高第三人あり明詮、眞聽、隆光これなり(本朝高僧傳)

チユウケン 中軒「コンドウチシンアン」

チユウコウ 忠故「ヤナガハナホノブ」

チユウコウ 中興 畫人なり何許の人たるを知らず狩野元信の風を學びて能く其趣きを得たり(皇國名畫拾葉、扶桑畫人傳)

チユウサイ 中齋「オホシホチユウサイ」

チユウサイ 中齋「ヤマモトチユウサイ」

チユウサイ 盅齋「クボチユウサイ」

チユウサイ 冲巢 江戸の俳人なり氏は林一鳩と號す初め四世一漁の門に入り後ち岡田米仲に隨ふ(俳諧人物便覽)

チユウサン 中珊「コカイチユウサン」

チユウザン 中山「タチバナギヨクラン」

チユウサン 仲算 高僧なり實性畫聽にして氣字凡ならず見たりし時嘗て南都の寺外に戲る空晴法師偶ま見て之を異とし携へて寺に入る稍ま長じて博く內外の典籍を綜べ最も論議に精し當時都內推して翹楚とす衆より聲名を嗜まず或は僧官に擧げられ或は敕詔を蒙むるも皆な辭して受けず安和二年熊野山に在りて般若心經を講ず千手千眼の相忽ち現はる算講じ已りて岸に昇り去りて往く所を知らず但一紳履を遺すと云ふ(元亨釋書、東國高僧傳)

チユウジ 忠次 上野國定村の人父を吾兵衛と曰ふ忠次年廿七にして人を殺し讎を避けて下野の博徒河越榮五郎に投ず榮五郎勇敢人に超え博徒之を長る忠次を奇とし約して兄弟となる居ること歲餘にして里に歸る忠次勇にして機智あり財を擲つこと土の如し博徒爭ひて之に服し推して親分と爲す猶ほ義父と曰ふが如し天保甲午義子文藏島村伊三郎と嚴ひ痛く毆擊せらる忠次曰く汝奴輩の拳頭を喫し何の面ありてか來りて我に見ゆると乃ち文藏か率ゐ伊三原山に斬りて遂に信濃に走り松本の博徒勝太の家に客たり中野の徒と違言あり博徒二十餘人鳴りて捕丁となり來り襲ふ忠次双か揮ひて跳り出づ鳴浦丁皆な逃る遂に本州赤城山に還る是に於て四方の博徒請ひて義子となる者日に多し日光圓藏、八寸才市、山王長五郎、武井淺二、三木文藏等之が羽翼たり爾毛は博徒多くして所在に踏を開き日々に諍鬪を事とす官之を禁ずる能はず忠次赤城に在り日々に義子を派遣し其の稅を收む典へざる者は或は毆ち或は之を殺す皆な股慄屏息して命に從はざる者なし忠次も亦た任俠にして財を輕んず貧を告ぐる者あれば立どころに數十金を與へ富豪子弟の博戲せんと欲する者あれば篤く訓誡を加へて之を止め又は他盜の近邑に入る者あれば徒を率ゐて擊ちて之を殺し時に或は出て丶刼掠す

るも然かも法を立てゝ甚だ嚴、義子等を禁じて里中の一物をも取るを許さず乙未秋玉村の博徒京藏及び弟主馬、忠次の義子民五郎を毆つ二人並びに驕名あり忠次大に怒りて民五を誅へ其の徒二人と之を圍らしむ會〻京藏在らず主馬迎へ鬪ひて左右奮擊す民五等遂に斫りて之を倒し三人亦た創を裹むる既にして邨民大に集まる乃ち逃れ還る忠次懼ばずして曰く豈に人を殺して其の喉を刺さざることあらんや彼にして死せざれば將さに報復を謀らんとすと丙申義子平兆信濃の博徒源七の爲めに殺さる忠次報を聞き起て曰く義子他州人の手に死するは恥なりと單身にして往く義子等刀槍火器を提げて從ふ者三十餘人大度關を過ぐ關吏竦息して出でず既にして仇、官の爲めに捕へらると聞き還る是歲關東大に旱す忠次數百金を出して鄉里に賑恤す民大に喜ぶ明年大に田部井に博し其の稅を課して邑中の磯沼を浚ふ沼は國定村の上流に在り因て旱災を逃るゝことを得是の時に方りて忠次の名遠近に聞え之を畏るゝことを虎の如し官捕吏數十人を遣はし所在に搜索して之を捕へんと欲す義子神崎友五郎自ら忠次と稱して捕に就く忠次身を變じ賈となりて薩奥に走る義子文藏才市並びに捕へられて死す初め主馬民五郎の爲めに傷つけられて殆ど死し偶〻奇藥ありて瘉ゆることを得是に至りて忠次の在らざるを伺ひ其の徒藤德和三人と民五郎を誘ひて之れを利根川の上りに斬る明年忠次逃捕漸やく緩むを以て復た赤城に還り之れを聞き切齒して曰く果して然り吾言を用ひざればなり然れども以て報ぜざる可らず忠次の義子二人に謂ひて曰く汝能く既に死して親分に報ずる乎と又た義子十八人を擇ち各〻洋製の短銃を持して俱に往く主馬の黨、風を聞き逃れ匿る遂に主馬を捕へ民五の死所に斬り首を利根川に投じて還る是秋賭場を田部井に開く捕吏四面より之を圍む忠次圓藏と大に呼びて又を揮ひて出づ捕吏辟易し遂に逃れ去る既にして小齊の博徒勸助の爲めに告げらる忠次の義子淺二は勸助の姪なり會〻淺二在らず其の同謀たるを疑ひ手から之を刃せんと欲す圓藏曰く淺二は義を知る豈に親分の讎をなす者ならんや若かず其を以て勸助を殺さしめ以て其不貳を明らかにせしめんにはと忠次之に從ふ淺二大に喜び義子八人と馳ること六十里にして小齊に至る夜已に二更其家を窺ふに燈影の下勸助の醉て兒を擁して臥すを見淺二槍して其背に洞す勸助屈せず擲つに火盥を以てす灰飛び燈滅す淺二義子と跳りて屋外に出て復た入りて其首を斫り見て之を併せて之を殺す明日淺二勸助の首を籠にして忠次に赤城の紫藤洞に見ゆ忠次熊皮に坐し義子三十餘人皆刃を執りて左右に排列す淺二首を擎げ膝行して進む忠次問し舉て曰く是なりと金を其主に還す俠義檢れ此くの如し忠次の義子四方に散在する者無慮七八百尋て曰ふ我檄を傳ふれば一日に四百兵を得べく十月に四千兵を得べしと（譚海）

チユウシシウ　中洲「マセチユウシウ」
チユウシシウ　中洲「ノダチユウシウ」
チユウシシウ　中洲「トウエイフ」
チユウシジン　中尋　第四十六世の天台座主なり土佐守源忠季の子師主は覺尋大治五年十二月二十九日の宣命を以て座主に補ぜらる東陽房座主と號す保延四年十月十四日入滅す年七十四忠尋二十五歳の時一日絕入して炎魔宮に至る偶〻山王中堂の藥師及慈惠大師よりの書炎魔宮に至りて忠尋を召返す其書に曰く六十六歳にして座主たるべきの仁なりと即ち蘇生すと云ふ（天台座主記）

チユウジンコウ　忠仁公「フヂハラヨシフサ」
チユウジヤウノ、ツボネ　中將局　靈元帝の宮人なり安倍泰貞の女初め小左京と稱し斷髮して智光院と號す（野史）

チユウジヤウヒメ　中將姫　右大臣横佩豐成の女にして母は藤原百能なり長谷觀音に祈りて而して身もあり天平十九年八月十八日か以て生る明年誕辰の宴に姫筆を採り歌を書して曰ふ「勅願寺敕世の誓を現して女も法の國に迎へん」と人大に驚く三歳にして母を亡ふ九歳禁中に入り笄を奏す帝大に賞す繼母日之姫む十有歳の時帝復た召して笄を奏せしむ其妙初めに倍す帝愈〻之を奇とし三位に叙し中將の名を賜ふ繼母屢〻姫を害せんと謀りて成らず終に人をして姫を山中に誘ひ殺さしむ其人忍びず共に雲釜山中に潛む後父此に狩りして伴ひ歸る（或は曰く伴ひ歸らんと欲せしも姫辭して從はず）繼母之を聞き病と稱して家に歸り終に死す姫謂らく吾命を保つ得たるは偏に佛力なりと愈〻脫俗の心を生じ實曦元年遂に當麻寺に入り善心止む忠次の赤城に在るや或る人禁を築て自ら固めんも勸む忠次笑て曰く是れ兵を招くのみ一去一來官兵もなし我が在る所為知らしめざる而やと又常に劫殺を行ふ然れども嚴に火放ち及び婦女を犯すことを禁じ又人の財を騙取するを許さず義子あり嘗て熊皮に坐し義子三十餘人皆刃を執りて左右に排列す淺二首を擎げ膝行して進む忠次怒りて義子と絕ち金を與へて之を貸し義子八人に及ぶ初め主馬勸助の二黨獨り忠次に隨せず是に至りて圓州の博徒熊從せざる莫し事都下に聞ゆ官其患をなさんことを慮り大に捕丁を發し又た諸藩なして兵を出して賊の走路を絕たしむ是より先き義子秀吉捕へられ更に請ひて曰く奴賊巢に入りり忠次を殺し以て罪を贖ふ如何と更之を許す乃ち走りて忠次に告ぐ忠次金を其黨に散じ間道より復た陸奥に入る圓藏秀吉淺二皆な途に捕へられて誅死せらる丙午復た上野に還り黨與漸く集る然れども亂日の盛の如きこと能はず忠次に三妾あり各〻別宅に置き時に往きて宴飲す庚戌七月二十一日一妾の家に遊び大に醉ひて臥す夜半身廐に起ちて之に藥し數日にして少しく愈ゆ時に榮五郎年六十餘にして猶ほ健竊かに書を遣りて曰く中風は治せず益あらん捕吏四窺す引決するに若かず醫藥を其妾に命じて曰ふ能はず然れども捕吏忠次を憚りて輙く手を下さず既にして其病むを探知し數十人を發して宅を圍むこと數重入りて之を床に縛し并びに三妾及び七義子を捕へ十二月廿一日を以て大度關前に磔殺す嘗て其露發にして關を越ゆるの罪最とも重きを以てなり其檻車大度に至るも動止自若として平時に異ならず刑を行ふの前日吏に謂ひて曰く大度に加部氏あり善く醫を亡ふ九歳禁中に入り笄を奏す帝大に賞す繼母日之姫む十有歳の時帝復た召して笄を奏せしむ其妙初めに倍す帝愈〻之を奇とし三位に叙し中將の名を賜ふ繼母屢〻姫を害せんと謀りて成らず終に人をして姫を山中に誘ひ殺さしむ其人忍びず共に雲釜山中に潛む後父此に狩りして伴ひ歸る（或は曰く伴ひ歸らんと欲せしも姫辭して從はず）繼母之を聞き病と稱して家に歸り終に死す姫謂らく吾命を保つ得たるは偏に佛力なりと愈〻脫俗の心を生じ實曦元年遂に當麻寺に入り善心

尼と號し後妙法と稱す傳へ言ふ翌年七月十日觀世音彌陀佛共に來り五色の蓮糸を作り姫を引て曼荼羅布を織らしむと布上に極樂の圖あり是極樂圖の始なり天應元年三月（又四月とも爲す）十四日歿す年二十九（本朝烈女傳）

チユウシユン　忠春　僧にして藤原孝仲の孫また僧季の子なり幼にして天台山に入り僧正忠尋の弟子となり阿闍梨となる三會の講匠を歷て說法の名當世無雙の評あり久安五年正月廿八日寂す（本朝世紀）

チユウシユンデイ　ウザエモン　駐春亭宇左衛門　下谷龍泉寺町田川屋と云ふ料理店の主人なり俳名前羅現成上人に隨ひ剃髮して願乘と云ふ芝に生る糸屋源七の次男源次郎と云ふ世人佛源七と稱す初め伯母の家を繼て深川新地に茶屋をなしゝと云後吉原江戸町河岸に遊女屋を開く或時龍泉寺町に地所を求め別莊にせんとせしに井戸の水出ざれば料理屋にて風呂を設けたるを造らばやと高砂町の名主一賀、新甫、鶯村等と計らひ寛に此に一亭を設くることなしぬ座敷は一間／＼に盆をかけ茶を立つるを得又風呂場は方丈にして丸竹の四方天井湯の滝水の滝を落す（閑談敷刻）

チユウシヨウウ　中書王「カネアキラシンワウ」

チユウゼン　中漸「ムラキチユウゼン」
チユウゼン　中仙　伯州瑞山寺の住僧なり笠翁と號す薩州の人性非凡壯歳にして日州長善寺に抵り業を天海和尚に受け出遊して石屋に謁昌寺に參ず復た出て諸方に漫遊す嘗て無字の話を聞て深旨を悟る天海を伯州圓福寺に省す海其の悟解あるを悅び衣盂を付し其の席を嗣がしむ何くもなく上諸嶽及定光に莅む伯州の太守原重成本州の瑞仙寺を創し仙を迎て開山第一世となす文政元年相州の牧原敎之田園若干頃を施て永く食輪を轉ず仙晩に海晏性公を招きて席を付し自ら東庵に退きて養老の所となす（洞上聯燈錄）

チユウタイ　中臺「カハラホウジユ」
チユウタイ　中臺「ハシモトイナヒコ」
チユウタイ　中臺「ヲガハチユウタイ」
チユウタイ　中諦　高僧なり字は觀中、日奉氏阿波の人其母奇夢を感して娠めるあり生れて英敏容塵に染まず觀應元年九歳洛に入り正覺國師に侍し翌年剃髮戒を納る此秋國師遷化す因て諸兄に就て習學不怠去て鎌倉に往き諸老に參叩す俄に南遊を思ひ商船に附して元に入り台州より福州に抵る時に黃市の亂あり道路通ぜず犢を卷いて東歸し春屋範公に天龍寺に依りて肥室を掌る朝夕研鑽遂に玄旨に達す應永七年將軍足利義滿聘して相國寺を主らしむ檀護日に熾なり後諸法檀す京兆の尹細川頼之奏院を建て之を延く一日疾を示し衆を集め偈を說き一喝して逝く實に應永十三年四月三日なり年六十五勅して性眞圓智禪師と謚す三會の語錄及び青嶂集林に傳はる（本朝高僧傳）

チユウダイドウ　重大動　豐後守と稱す美濃大道派の刀匠にして寛文年間の人なり（古今銀治銘早見出）

チユウタン　冲澹「ナカバヤシチクドウ」

チユウデン　コデンジ　中條小傳次　慶長中の人なり弟牛九郎と共に分部侯に仕ふ關原の役に侯勢の津城を保つ小傳次力戰して敵を却け勇名大に振ふ世人鬼小傳次と稱す牛九郎亦た驍勇、故に人稱して見たり難しとす小傳次の墓は伊賀上野附郭に在り墓前に松あり世に小傳松と曰ふ村人堅く其の遺靈を飲し敢て樵せずと云ふ（事實文編考證記）

チユウデン　サブラウ　中條三郎　海軍少機關士なり長野縣出身にして明治廿七八年日清戰役に於て佐世保水雷隊數部附として從軍せしか廿七年九月千代田乘組中病に罹り一旦輕快に赴きしも公務の爲め身體を顧みる遑なく勤務に從事し遂に同二十八年八月二十二日横須賀に於て死去す

チユウデン　ヒャウゴノスケ　中條兵庫助　中條流劍術の祖なり名は長秀鎌倉の人同所地福寺の僧慈音に從て刀槍の術を受け之を甲斐國前に傳へ豐前之を大橋勘解由左衛門に傳ふ（武術流祖錄、豪雄言行錄）

チユウハウ　仲方「セイキン」
チユウフダウジン　中孚道人「ゲツシウ」
チユウホ　仲圃　薩州諏訪全院の住僧なり桃屋と號す本州中諏氏の子、幼にして僧となり關東の諸老に從參す未だ省する所あらず復た還りて大川に參じ其の言み聞きて深旨を得たり川上堂に揭げ衆に告げて曰く仲圃深く石屋の道を得たり後學の輩宜く之れに依るべしと遂に信衣を付す元和辛酉薩隅日三州の太守島津氏請じて福昌に住せしむ寛永元年上足守智みして席を繼せしめ花舜に退老して終る（洞上聯燈錄）

チユウリヨウ　中陵「サトウチユウリヨウ」

チユウワ　中和「ニシムラバイケイ」
チユウワ　中和　江戸の俳人なり氏は喜多初め後ち初世沽山に從ふ（俳諧人物便覽）

チユウエン　忠圓　淨土寺の住僧にして僧正たり後醍醐帝の鎌倉を滅せんと謀るや忠圓、圓觀、文觀等と竝びに謀ごとに預かる元弘元年春帝圓觀文觀を延て北條氏を兜鍪せんとして事泄れて捕へらる忠圓素と帝の爲めに信用せらるゝを以て亦併せて鎌倉に送致せらる忠圓性怯なり至るに及び首服し朝廷の密計より參謀主名まで狀を具して進む高時乃ち忠圓を越後に竄す亂平らぐに及て本寺に還住す（大日本史）

チユウエン　忠淵「カノタンシン」
チユウヨウ　仲公「シユホウ」
チユウヨウ　仲公「ホンダタダノリ」

チヨ　智譽「バンズキヨン」
チヨ　千代女　有名の俳人なり加州松任の人表具師瀧屋六兵衛の女、十八歳にして金澤の表具師瀧田彌八に嫁す幼にして俳諧を嗜む但し僧邑師に乏し會〻有名の俳家廬元坊行脚して松任に來る千代女其の旅亭を訪ふ廬元坊正に廢に在り千代女就て志を述べ教を請ふ初夏の候なるを以て廬元坊時鳥を題として一句を作らしむ句成るに及び廬元坊舍て顧みず又一句を作るに復斯の如し而して元既に睡れり然れども千代去らず沈吟且に達す元起き驚き問ひて曰く夜明けたりやと時に千代一句を詠じて曰く「ほとゝぎす鄙公とて明にけり」と是に於て元大に賞して曰く是なり是なり此にして止まずんば他日名天下に顯はれんと遂に師弟の約を結ぶ後果して俳諧を以て大家となる甘五歳にして夫死す乃ち一人の男子をして其の家を嗣がしめ已れ尼となり（尼となる時廿八歳といふ說あり）別居して槃園と

號し風流自ら娛む安永四年九月八日歿す年七十四千代女畫を越後の吳浸明に學びて頗る風致あり百合の圖多し或人畫を作りて贊詞を其下に加へんとなを乞ふ乃蕣花を畫きて其の下に「朝がほや地につくとなをあぶながり」と句旨韻雅にして女流の逸あり其の他婚を迎へし時「しぶかろかしられど柿の初ちぎり」の句、夫に訣れし時「起て見つ寐てみつ蚊屋のひろさ哉」の句「あさがほに釣瓶とられて貰ひ水」の句の如き能く人口に膾炙して嘖々稱譽あり永平寺の長老一念三千の意を句に作らんことを求むるに「百なりや蔓一筋の心から」と詠ぜりと句集あり世に行はる（近世畸人譚）

チヨ　千代　將軍德川家光の女、尾張大納言光友に配す藩士に中山茂兵衛と云ふものあり發狂して後宮に入り乳媼を殺し刀を提げて四走す仕女驟奔し家中大に擾ぐ夫人恬然として驚かず姆を呼て曰く當直の士當に捕へて之を誅すべし決して懼るゝ勿れと頃らくありて中山井に投じて死す其子の嬉は乃ち殺す所の乳媼の女なり夫人之を召し從容として語て曰く汝の舅後房に入りて汝の母を殺す罪至りて重く父子當に誅せらるべし汝は母を葬むり冥福を修して可なりと屍を欲するに悲慟す翌年天大に雷し忽にして井に隕つ乃ち中山投死するの處日月も亦同じ宮人雲懼跌蕩す夫人爽然として平時の如し後房令夫久保金兵衛白して曰く玆の井は不祥なり請ふ之を塞がん夫人曰く舊井を塞て更に之を鑿ればこれ僕隷數十人を勞せん若かず之を浚ひて以て毒を除かんにはと、松平義行の室は松平綱廣の女なり廣橋資給の所綱廣に及ばず毎に宮人の爲に侮らる姆憤怒して義行の室を酖せんと欲す夫人其の蹤跡を視之を疑ひ姆を召して鞫問し遂に實を首し姦謀悉く露はれ斬に當たる夫人以爲らく之を尾張に礫するが如きは唯々闔國之を知るのみならず隣邦と雖も亦聞き知らん是れ吾國の羞を彰はすなり夫れ刑罰は將に以て惡を懲さんとす然れども婦人男子は同じからず宜く之を刑する隱に處すべしと後春秋廢と高し然れども容止婉にして恭未だ嘗て儀を愆らず疾且つ篤なるに及て則ち侍女を召して髮を理さめしめ憤然として逝く（烈婦傳）

チヨ　アリカズ　千代有員　狂歌師なり三河の人綉庵と號す本名は中島峻洞醫師を業とせり

チヨウア　重阿　大和千手院の刀匠日王を見よ

チヨウイツ　澄一　醫僧なり慈濟軒と號す方書六卷を著はす（皇國名醫傳）

チヨウエイ　澄睿　僧なり平安の人、姓は岡屋氏經論に粹なり弘長八年三月寂す（元亨釋書）

チヨウエイ　重榮「タケヤマチヨウエイ」

チヨウガ　澄賀「タクマチヨウガ」

チヨウカ　重厚「シゲアツ」

チヨウカウ　澄江「ハタチヨウカウ」

チヨウカク　澄覺　法親王梶井第二十一世の門主にして天台の座主なり六條宮雅成親王の子正應二年薨ず

チヨウキウサイ　重九齋「キクガハエイザン」

チヨウケイ　重慶　僧なり畠山重忠の第三子建保の初め日光山に在り陰に亡命を聚む軍鎌倉に聞ゆ源實朝長沼宗政を遣して之を捕へしむ宗政首を斬りて之を慰ぶ實朝怒りて曰く汝は年既に長ず我れ甚だ汝の罪誅に至らず我れ甚だ汝の過を憐む所あるも又何ぞ能く一として爲し得る事なし見る彼の澄月年僅に十三然るに諸行汝に長ずること遠かなり朝には早く起き昏には衆僧に遲れて臥し且つ誦經勤學手跡を學ぶに至るまで其の苦學勉强既に汝が見る所の如し加之院內の掃除厨所の小役まで悉く精細なり實に彼が如くに諸事爲し得ず後は當院の如き大寺の住職とも成ぬべし汝が如き惰身にては一小庵を得るさへ難かるべしと大に澄月を賞して若僧を叱しけるか澄傍らに居て之を聽き住持の師僧に對して曰く今老和尚の言理あるに似て適意ぜざるものあり我等朝夜の起臥を安んぜずして學問修行なすとは天下の高德智識と稱仰せられ衆生を濟度し天台纔に此一寺の住職たらん事を欲せんやいかに勉學すとも其境に至らずんば何の本意かあらんと大に慨嘆す和尚之を聞て益々驚嘆す是れより澄月遂に斯の如き俗僧に絕ゆ東大寺の重祐は慶の師なり祐公法藏大德の納衣を付して法信と爲す筑紫の人某死して蘇生し忍辱に對り慶に語りて曰く我死して安養界に詣り偏く金殿樓閣を觀る更に金殿の新なるあり傍人我に謂ひて曰く此は是れ南閻浮提大日本國和州忍辱山觀音院重慶師の金瑩なりと慶師今より後三年十月十五月往生して此金堂に入る我素と生れて筑紫に在りし日屢ゝ慶師の化導を榮むる法緣甚だ厚し之に報りて此の金堂に入り看護の人と爲るを得て慶師の來るを待つ汝此堂に入らんと欲せば早く闔浮に歸り慶師の手印を得て來れ爾後此堂に入るか許さんと言ひ訖りて蘇す是を以て我此の山に詣る願くは師の手印を賜へ慶乃ち手印を書して之を與ふ事遐邇に傳へ手印を請ふ者勝て計ふべからず三年期至る冬十月山衆預め法事を修め慶の浄業を助く十五日午時紙衣上に法服を着し彌陀供養法を修し大衆と與に同音に念佛して寂然として逝く時に慶長十年十月望日なり年六十慶逝後門徒等天狗祭を開く果して坐皮を失す皆謂ふ鬼魅約に違はずと（續東國高僧傳）

チヨウゲツ　澄月　歌僧なり備中の產なり或は云ふ備後福山の人なりと醉夢庵又翠雲軒と號す、幼にして髮を剃り出家して同國玉島なる天台派の某寺に入りて勤學す一時同寮の若僧懈怠の行狀あり住持の僧大に怒り罵りて曰く汝は年既に長ず然るに諸行怠慢して一として爲し得る事なし見る彼の澄月年僅に十三然るに諸行汝に長ずること遠かなり朝には早く起き昏には衆僧に遲れて臥し且つ誦經勤學手跡を學ぶに至るまで其の苦學勉强既に汝が見る所の如し加之院內の掃除厨所の小役まで悉く精細なり實に彼が如くに諸事爲し得ず後は當院の如き大寺の住職とも成ぬべし汝が如き惰身にては一小庵を得るさへ難かるべしと大に澄月を賞して若僧を叱しけるか澄傍らに居て之を聽き住持の師僧に對して曰く今老和尚の言理あるに似て適意ぜざるものあり我等朝夜の起臥を安んぜずして學問修行なすとは天下の高德智識と稱仰せられ衆生を濟度し天台纔に此一寺の住職たらん事を欲せんやいかに勉學すとも其境に至らずんば何の本意かあらんと大に慨嘆す和尚之を聞て益々驚嘆す是れより澄月遂に斯の如き俗僧に絕ゆ東大寺の重祐は慶の師なり祐公法藏大德の納衣を付して法信と爲す筑紫の人某死して蘇生し忍辱に對り慶に語りて曰く我死して安養界に詣り偏く金殿樓閣を觀る更に金殿の新なるあり傍人我に謂ひて曰く此

一宿なだに許容せず澄大に困じ諸院に入て志を告るといへども故國の師または俗緣親族等の誘引にあらざれば山內に置きがたしとて放逐せられたれば大に歎息して黃昏に及ぶ彌々困究して佇立す一人の下僕之を見るに忍びず竊に一宿せしめ其の僕の親しき寺院を頼み辛うじて山上に滯留するを得たり而して普賢の德學高德の僧を索るに嘗て期せしに似ずして絕て知識のなかりしかば本山の衰頽宗門の末季になりしを慨嘆し愁然として再び志を變じ竟に風流文雅に逃れ武者小路實岳卿の門に入て和歌を學び頗りに研究勉强して終に妙所に至る然かして洛の東岡崎邑に住しこゝにて醉雲軒または醉夢庵と號し專ら諸文人と交遊し徒を延て教示す其門に入るもの頗る夥し時聖澄月、蒿蹊、芦庵、慈延を以て平安和歌四天王と稱す其の詠歌に於るや能く中古の風を得て離とする所なく然かも雄々しき姿ありて凡を超越したるの先鋒なり寛政十一年五月二日歿す年八十五（近世世六家集）

チヨウゲン　重源　醫僧なり姓は紀氏父を靜源阿闍梨と云ふ或は曰く清原滋秀の孫にして瀧口左馬允重季の子刑部左衛門尉重定と稱す黑谷の源空の高弟、仁安二年宋に入りて明庵の榮西禪師に四明に遇て同く天台山に登る又た明州に還りて鄮嶺の舍利を禮す明年の秋同く歸朝す會々東大寺回祿に値ふ朝廷源に勅して建造の事を幹せしむ源天下の力を募て共に成さんと欲す乃ち一車を造りて其の中に坐し左に詔命を奉じ右に幹疏を懸け州郡を巡行して淨瑩を勸化す已にして工を鳩め料を聚め十數を經て後ち成る其柱高さ二百尺大さ數抱圍、雕甍綉閣林巒に照曜す建久六年三月太上天皇百官を率ゐて寺に幸きす大將軍源頼朝監護宿衛す鑒し法事の壯觀なり源殁して後衆肖像を立て杖笠を左右に陳れて忘れざるを示すと云ふ元久二年六月五日（或は六日）寂す年八十六（元亨釋書、東國高僧傳）

チヨウシン　澄心　天台宗の高僧にして加賀の人なり經論を觀理僧都に學て專ら空宗を唱ふ長德三年維摩會の講に塵談紛を解くこと明快なり僧階昇進して少僧都に任ぜらる寛弘四年東大寺を管す一住七年衆を率して願を興す長和三年二月卒す年七十六（本朝高僧傳）

チヨウジヨ

チヨウゼン　重舒「アトベヨシアキ」

澄禪　肥後眞言宗地藏院の住僧なり宇は海藏、肥後相良侯の國老菱川氏の子なり寛永風に崩し二十歲家を出づ天性高邁志韻剛潔稍々長じて京都に遊學し智積院に掛錫して瑜伽の教義を究敝公法を習ふ小野廣澤の秘訣密訣竭盡して餘りなし兼て梵字悉曇に通じ七例八轉音義妙を究む山に住む數年第一座に居る禪祿佛像及山水を書き精妍潤澤景致高遠茶を嗜み華を玩び物外に逍遙し自適す胸中茶毒を留めず勅して梵字を書せしむ王命止むを得ずして紙衣布帽を被り駕り自ら華を携へ徒步して直に仙宮に入る公卿雲客其眞率を觀て默賞して止まず梵法謹嚴煙雲煙活動す數數御前に衞す皇情大に悅び觀者驚動す乃ち屯鶴編褐を要賜ふ固辭して曰く予雅と紙衣の散僧のみ此の美服を要せずと一時巡敝僧正勅を奉じて將に聯歌の會に朝せんとす講筵に入り諫言して曰く夫れ法柄を把る者宗乘を講論するが爲め殿に昇るは則可なり苟も智山の碩學たる者徒に聯歌の爲めに宮掖に朝せば自今已後園山の學徒悉く空詩浮文を事として密宗の行解是れより替廢せんと歟公感服して乃ち罷む禪は世態に迂濶なり凡そ物を購ひ信を通ぜんと欲せば時に自ら大佛門前の街頭に出て、南都大阪來往の人に訪ひて諸尺牘貴賤を問はず若し晉に一面識ぜざる者に託して恬然として疑はず曉に梓里に歸り愛宕山の地藏院に住し掘てゝ權僧正に任ぜらる著す所悉く愚鈍、稚類集等若干部あり未だ終の年月を詳にせず（續東國高僧傳）

チヨウホ　重宗甫　茶人なり千利休に茶道を學びて能くせり泉州堺の人（茶人系譜全集）

チヨウイン　楊雲　江戶の俳人なり氏は多湖月尺號す初世冬映の門人（俳諧人物便覽）

チヨウン　楊雲　江戶の俳人なり氏は牧初め林庵句水舍と號す初世冬映の門人（俳諧人物便覽）

チヨウエン　澄圓　和泉阿彌陀寺の僧なり諱は苞、宋國の人廣く經論に涉り淨敎を以て宗となす後醍醐天皇の朝海に航して來る錫を京畿に駐て四方を勸發す一時の狎庶風を望んで追從せり圓常に南禪寺の虎關禪師を禁び禁び厲々函交に謂て談交々和宋を雜ふ時に藥果を贈り書信遞に相通す虎關の答書に曰く伏して惟ればこれ白蓮和尚は宋國の偉才、日城の先導なり法を都城の內に開き譽を縉紳の間に馳すと旭後談內を化遊し和泉の堺に精舍を建立して淨土敎を唱ふ四隣の民驚集して檀越益多く旭蓮社を結んで念佛を修す一日寺を出て、遂に遐ぢず衆人遍く尋ぬれども行く處を知らず時に應安五年七月十五日なり旭遺弟なし檀越故舊相集り其出日を以て擬て忌辰となす著はす所淨土十勝論十卷松風論三卷あり今世に行はる旭平律身慈仁故に澄圓菩薩と稱せらるといふ（本朝高僧傳）

チヨウエン　重淵「サハチヨウエン」

チヨウギン　楊牛「タカヤマリンジラウ」

チヨウクゲン　直玄「シミヅダウカン」

チヨウクサイ　直哉　イマノチヨウサイ」

チヨウクラ　テフウ　千代倉蝶羽　俳人なり通稱勘左衛門、尾張鳴海の人知足の男なり寛保元年十一月歿す年六十五（俳林小傳）

チヨウクヨウ　楊直翁　ソウレン」

チヨウケン　楊軒「ヲカダチヨウケン」

チヨウサクダウ　著作堂　パキン」

チヨウザン　楊山　佚齋とも號し江戶の隱士なり和漢の學に精通し特に老莊の學に精しく之を以て享保十二年友人請ふて其戲著を公にし田舍莊子といふ忽ち聲譽を博して終に內外篇及び附錄をも發行するに至れり楊山は蓋し市井の學者にして風に世敎を補はんため故に此著を成せしものなるべし其他天狗藝術論等の著書甚だ多し（田舍莊子、天狗藝術論）

チヨウダウ　楊堂「クリタチヨウダウ」

チヨウヅル　千代鶴　越前の刀匠にして應永比の人なり（古今鍛冶銘早見出）

チヨウヅル　千代鶴　越前の刀匠にして天和貞享年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

チヨトン　楊墩「ハヤシトウシヨ」

チヨノウ　千代能女「ケイアイ」

チヨノ　ハシメ　千代はし女　秋蹄庵と號す狂歌師なり奧州八戶南部の藩士加島七五郎の妻なり秋長堂河井物錄を師として俳諧歌を學び秀吟あり文政

七年七月十九日病で歿す麻布今井町淨土宗清性山善學寺に葬る（古今狂歌人物誌）

チヨノハルミチ　千代春道　江戸の人なり板下書にて橘本德瓶と云ふ戯太夫稽古本の板下尤も能し傍ら戯作を爲し浮世喜樂とも云へり文政八年十一月三日歿す著す所小野小町戯場の化粧、宮戸川三社の由來、若緑照手の松等あり（名人忌辰錄）

チヨノヤハルヨ　千代屋春雄　本名を伊藤勝重と云ふ美濃の人にして狂歌を能くす

チヨヒサスケ　千代久助　裝劍彫工なり作州津山に住す粟窠鮮麗にして趣きあり（裝劍奇賞）

チヨヒロ　千代廣　加賀の刀匠にして元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

チヨヘイ　千代守　藤原姓加賀の刀匠にして永正年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

チヨモリ　樗平「ノムラチヨヘイ」

チヨラ　樗良　伊勢の俳人なり氏は三浦通稱勘兵衛無爲庵と號す後京都に住す安永五年五月六日伊勢山田に歿す（俳諧年表）

チヨライ　猪來　伊賀の俳人なり通稱豬田屋久五郎蒼虬の門人上野片原町に住す（俳諧人物便覽）

チヨリウ　女龍　巧に浮世繪を畫けり江戸山崎氏の女享保中の人（扶桑畫人傳）

チヨワカ　千世若　面打なり時代詳ならず假面古作八人の一なり（假面譜）

チヨヲク　樗屋「ニヨキ」

チリウ　智隆　僧なり土佐國高岡郡仁井田村の人堀内新助の次男にして幼名を男次と稱す同郡半山郷繁國寺に剃度し名を智隆と改む學業日々に進む後ち學げられて須崎村發生寺の住職となる是より先き須崎の土人等久しく惡風に浸染し墮胎拉殺の繁窟に行ひる智隆寺に入り村内の惡風を慨歎し務めて之れを洗除せんことを謀る因て當者に向ては恒に倫理の紊亂す可からざるを辯明し百方之れを說諭し貧者に遇ひては金穀を給與し以て生見を輔育せしむ而して其數兒にして尙ほ輔育に苦む者あるを觀れば其の兒を分て乳母を傳し以て撫養せしめ其の懷を離るゝに至て始めて之れを其の父母に還す斯の如くする者數年繁風大に改まり爲めに救養する者無慮三十餘人文久二年某月同郡多の郷觀音寺に移る智隆の去るに臨て須崎の村民等忽ち父母に別るゝの思ひを爲し道路に相哭す智隆懇ろに諭して之を遣る是の歳十一月京都に入る初智隆國勢の日に衰頽に赴き上下騷然衆庶の惝々たるを憂ひ己浮屠の身を以て遂に國を去る是時に當て諸有志の輩來て壺霞の下に周旋する者幾千人智隆其厚く交はる者は武市小括（土藩の士）久坂通武寺島忠三郎（長藩の士）轟武兵衛宮部増實（肥後の士）金子勇次郎（水戸の士）山中俊助藤本鐵石（京都の儒者）天草坊（建仁寺の僧）等皆な當時の俊秀なり明年二月廟議覺に外攘に決す智隆等踊躍將に以爲す所あらんとす未だ輙く行はれず五月土佐に歸り諸寺の佛器冗具を蒐集し硝礮を鑄造し以て國用に供せんことを謀り偏く國中を歷說す而して諸寺の僧皆な固陋にして智隆の言を肯ぜず智隆其の益なきを覺り憤然去て伊豫に入り大和を經て再び京都に行く而して事皆瓦跌す且暮竊に之を爲に悲憤憂悶す十一月豐後に行き庄内谷中原村正德寺の別庵に潛居す覺に病みて歿す年五十、時に慶應元年七月二十六日なり祐圓法印と謚す（南海義烈傳）

チリウバウ　稚龍「カメダボウサイ」

ヂワウバウ　タルツグ　地黃坊樽次「イバラキシユンサク」

チワタ　ヨシタカ　千綿義孝　海軍少尉なり佐賀縣出身にして明治二十八年八月より同十月廿一日迄運送船監督として横濱丸乘組中屢々天候險惡炎熱燒くが如きの際連日職務に刻苦精勵身體に有害なるを顧みる遑なく遂に之が爲めに病を起し三十年六月二十六日神奈川縣（轉地療養中死去す

チエイヂノカミ　智惠伊豆守「マツダヒラノブツナ」

チエノナイシ　知惠の內子　狂歌師なり狂歌師元の李綱の妻なり夫に鬪ひて狂歌を能くす鐵砲洲に住せる時客の來るあり李綱の在らざるを聞き憎然歸らんとす要詠じて客に示して曰く「鐵砲洲音に聞えしたまの客亭主の留主は親ひそれたか」老年に及び黑髮おろすとて詠める歌の序に曰く年頃かしらをおろさんとれぎつれ共とかくとゝめられて過しけるが如月初の四日つとめて髮けづるついでにそぎすつと「けふよりはつげの小櫛も打すてゝ木のはしなりと人にいはれん」文化四丁卯年六月二十日天に先逝て歿す深川萬年町正覺寺に葬る法號「芳春院圓壽妙榮大姉」と云ふ（古今狂歌人物誌）

チエン　知圓「ゲツシヤウ」

チエンサイ　致遠齋「スギヤマタダアキ」

ツ之部

ツウクワン　通觀　僧なり天平寶龜年間の人和歌を善くす詠歌は歌ぜて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

ツウケウ　通曉　畫家なり和泉守又邦貞と稱す通曉、隆盛、覺智、隆昌四員合作して信州諏訪社の繪卷を畫く詞書の筆は兩說あり或は云後年之を繼書すと僞して云ふは菁莪院尋道の兩親王、久我內府、石山前大僧正、六條黃門、敍は尊氏時に延文元年十一月二十八日云々と其歿年詳ならず（繪本朝畫史）

ツウケン　通軒「ナカジマツウケン」

ツウゲン　通玄　禪僧なり字は一峰竹馬の頃より東福寺の天柱禪師に從て剃髮して僧となる登禪の年所永く稔て悟機に觸るゝを得たり印可を受け洛の普門寺に出世し後ち出雲の安國寺に移る延文の初虎關禪師撰ぶところの釋書初めて入藏の勅許を得たり禪林の諸師偶を以て之を賀す凡そ軸に上るもの五十餘員無比況公之を編して鄧子筋と號す玄撰ばれて其跋文を草せりといふ（本朝高僧傳）

ツウジヨウ　通乘「ゴトウツウジヤウ」

ツウセウ　通笑「イチバツウツウセウ」

ツウセンキン　通仙院「ナカラキズキサク」

ツウチ　ヂスケ　初代　津打治助「サクラダヂスケ」

ツウチ　ヂヘエ　津打治兵衛　江戸狂言作者の祖なり大阪の產にして俳優津打治兵衛の子なり幼名治三郎、俳名を英子と曰ふ後ち江戸に來り狂言作者を以て業とす元祿中「二河白道」を作りて稍々其の名を知られ寶曆三年市村座狂言に「淡島榮花智」に淸玄を脚色し其の名益々著はる寶曆十年正月廿日歿す年七十八（聲曲類纂、戲曲小說通誌）

ツウチ　ヂヘエ　ウヨサウベエ　津打治兵衛二世「ドンツウテツ」

ツウテツ　通徹　高僧なり字は淸溪、天遊と號す姓は三浦相摸の人少より出家し諦福寺の寒潭和尙を拜して戒を入る洛に上て遊學す壯歲元に傳り諸刹を歷遊すること三十餘年壁徑寺にありて藏輪を掌る歸路海風に遇ひ無人島に漂着し既にして本國に還り夢窓國師に天龍寺に依る甲斐の淨居寺に出世す次で臨川より天龍寺に遷る勅あり南禪寺を管す足利義滿紫衣を贈る光嚴上皇徹を召して碧巖集を講ぜしむ僧夾山に問ふ如何なるか夾山の境と山曰く猿子を抱て青嶂の後に歸り島花を啣て碧巖前に落つるの語あり上皇契吉す後丹波の常照寺に在り至德二年十一月四日偶を書して遷化す年八十六門人遺命により遺骨を大井川に投ず（本朝高僧傳）

ツウトク　通德「トリヤマホモン」

ツウネン　通念「タウスキ」

ツウヤウモンキン　通陽門院「フヂハライヅコ」

ツウエン　通圓　茶道を能くせり大愛庵と號す宇治橋南岸に住し茶み寶ゐを以て業となす其の遺墨大德寺中に在り（茶人系傳全集）

ツウヨウ　通翁「キヤウエン」

ツカダキヨクレイ　塚田旭嶺　儒者なり名は行宜字は延美、幼名は慧一、長じて善助と稱し老いて梅翁と稱す旭嶺は其の號、信濃水內郡の人なり幼にして敏悟、性好みて書を讀み强記にして諸誦す十六勤行業大に進む又た好みて詩を作り新井白石に從て學ぶ兼れて又た雨森芳洲に就き華音を受く終に儒を以て家を郡下に爲さんと欲す嶋巢も亦た特とに愛遇し將さに之れを以て聘けて以て其の志を成さしめんと欲す而して會ゝ父の病を以て故郷に歸り後再び東都に遊ばんと欲して遂に其の志を果さず郷里に留りて生徒に教授し以て業とす初め其の少なる時父之を試むるに字蔬中に於て平生用ひざる文字を探り時に以て之を旭嶺即ち之を答ふ其の音韻訓詁悉く之を諳誦して一見して生見を忘失する所なしと云ふ其の强記此くの如し居常曰く汝善く曰ふ記する所を忘失すと則ち是れ固と記臆と謂ふ可らず若し能く記臆せざ則ち復た以て忘失すする所あり故に其の幼より老に至るまで凡そ見聞する所は遺失することなし明和四年に歿す年七十（墨誌）

ツカダタイホウ　家田大峯　儒者なり名は其號信濃の人父を旭嶺と云ふ室鳩巢の門人なり大峰初め父に學びて程朱の教を奉じ其後師を求めずして古今の書を研究す遂に經義に流派を立つるを不可として曰く我は經に依りて經を解すと是に於て自ら諸經の解を作りて其の學を廣む紀兩侯は其門に學ぶ其他武門の子弟多く教を受く天明元年尾張侯の侍讀となる寬政年間幕府より朱子學の外昌平坂學問所にて學ばざるを令し異學の禁を嚴

く無手勝流は是なり佩ぶる所は何に用ふる曰く是れ私心を斷つなり人を斬るに非ざるなり士益ゝ怒りて曰く子徒手にして我に敵するか曰く可なり士舟人を呼びて岸に上らしむ卜傳遙かに一洲を指して曰く岸上の格闘は或は人を傷けん請ふ彼に於てせんと乃ち舟人に命じて洲に近づく士躍起して陸に上り劔を拔きて離きて曰く客來れ客來れと卜傳刀を脫て之を舟人に付し其棹を奪ひて一蕩す舟開て岸を去ること數丈大に笑ひて曰く無手勝流は是なりと後香取に在りて專ら後生を教授すと云ふ三子あり皆な善く劍擊に達す卜傳皆て三子の量を試みゝ以て神陰の奧法を授けんと欲し試に一小枕を戶幕上に掛け人觸るれば則ち翻然として墜ゐを要し事に托して先づ長子を召すに命を奉じて到り像め視て物の有るを察し戶上の枕を承けて之を戶側に置きて入り起ちて故の如くす第二子を召すに將さに入らんとして落枕に觸れ其の翻墜するを兩手を以て之を承け入りて復た故の如くす季子を召すに來りて俯して入り枕の墜ちて頭に觸るゝに及びて遽かに驚き飯を抽きて之を斬る枕未だ地に墜ちずして兩斷となれり既に各ゝ入りて坐に就くや卜傳一刀を以て長子彦四郎に授けて曰く汝能く其の器に任へたりと而して二子に謂て曰く汝之を勉めよと而して季子を罵りて曰く豎子去るべし必ずや家聲を滅すあらんと後卜傳病篤きに及び三子に謂て曰く我が死且夕に迫れり汝等走りて伊勢國司は能く我が道を得たりと竟に殺す三子乃ち勢に往きて備さに父の言を告ぐるや具敎喜びて厚く之れを遇すと云ふ而して三子其の終りを詳にせず卜傳後郷里香取に歸り門人益ゝ進む松岡則方、諸岡一羽、真壁道無（眞壁城主）齋藤傳鬼等其尤も傑出せるものなりと卜傳弟子を誨ふる甚重持敬を以てし其人にあらざれば一太刀の秘法を傳へず人と爲り沈毅端正尋常武人の比にあらずと云ふ（元龜三年三月歿す年八十三（譯海、野史、常陸國志）

ツカモト　ゼンゴラウ　塚本善五郎　海軍少佐なり兵庫縣出身にして明治二十二年三月海軍兵學校に入り卒業後更に海軍大學校に進む廿七八年日露戰役に際し舞鶴鎭守府幕僚より第一艦隊參謀となりて軍艦初瀬に乘組み從軍中三十七年五月十五日初瀬旅順港外に於て敵の機械水雷に觸りて沈沒するや艦と共に難に殉す年三十六戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

ツカモト　トクジ　塚本德治　陸軍歩兵少尉なり愛媛縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團歩兵第十八聯隊附として從軍三十七年十月十一日清國盛京奉天得牛嶺南方畑地に於て戰死す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

ツカモト　ネイカイ　塚本寧海　諱は明毅字は桓甫、寧海は其の號、天保四年癸巳十月十四日を以て江戸下谷山下に生れ幼名を金太郎と曰ふ寧海幼にして穎悟常に書畫を好みて甚だ竹馬紙鳶の遊戲を喜ばず風に坊間の兒童に異なれり曾て此の兒ならんと乃ち文字を吾が家を起すものは必ずや此の兒ならんと乃ち文字を給殺に書して歌牌に代へ寧海をして之を收拾し以て諸誦せしむ因りて文字を識ると三四千、近隣之を呼びて識字兒と稱すと云ふ年甫めて十三にして田邊石庵に從學す時に祖母長沼氏病みて家日に貧しく寧海之に處し云ふ嘉永三年昌平黌に入り六年試に應じて甲科に及第す岩瀨、吉賀、乙骨等の諸氏最も其才を愛し大成を期す云ふ偶ゝ米艦始めて我が神奈川海に來る寧海感ずる所あり乃ち加藤の士吉田某に就て和蘭學を講習す後ち安政二年九月矢田堀延敏（後ち鴻と改む）に從ひて長崎に赴むく三年五月永井尚志と云へるもの幕府の命を寧海に就きて海軍術を學ばしむ寧海命を奉じて日夜黽勉讃究し業大成す文久元年軍艦組に補せらる翌年長崎より還る蓋し以て進めしむべしと後其所論行はると云ふ寧海後ち命を受けて日本地誌提要七十七卷を撰み八年春上表して之を進む是より先き六年五月少史に轉ず七年八月內務省地理寮五等出仕に兼任す八年五月權大內史に陞り法制課長に兼任す九月從五位に叙せられ一等編撰を兼ね尋で本官を罷む十年一月改て一等編修官と爲る十二月之を辭し尋で內務省御用掛に任せらる十八年二月五日內務少書記官に任ぜられ其日を以て病歿す年五十三府下豐島郡內藤新宿北町成覺寺に葬る寧海、狀貌魁偉氣宇恢廓學問該博而して能く文を屬す故に其撰著する所甚だ多し日本地誌提要、三正綜覽、郡名異同一覽、地名索引並に既に梓に上る日本國沿革考九卷（選都考十八格に進む九月命を受け艦隊を率ゐて常陸の賊を討ち其の那珂港を砲擊し十一月賊を平げて還る是月寧海譯に補りて小十人隊に貶せらる速坐する者甚だ多し後慶應元年閏五月選めて小普請組と爲る二年騎兵指揮勸方と爲り軍艦役勤方に轉ず是歲十二月父法立歿仕し寧海其の後を承け復た富士見寶藏番格と爲る三年十月小十人格と爲る明治元年正月軍艦役となり尋で軍艦頭並と爲る閏四月病を以て之を辭す六月陸軍事務を管す十月駿河に遷り沼津に居り陸軍一等教授を經て兵學校頭取と爲る後ち四年一月に至り朝廷の徵に應じて兵部少丞に任ぜられ兵學大教授に兼任す十二月正六位に叙せらる五年三月改めて陸軍兵學大教授と爲り五月陸軍少丞に轉じ九月權大外史に任ぜらる是の時に當りて太政官新たに歷史、地誌等の諸課を置き寧海を以て地誌課長と爲し統計課を據せしむ會ゝ改歷の議あり寧海之を規畫贊成し遂に命を受けて大中掌り歷官數名を率ゐて指授推算し十餘日にして其の稿を上る朝廷之を嘉納す寧海嘗て謂ふ本邦往古風土記の撰あり後ち千餘年を經て散逸殆ど盡く間ゝ之に徵ひて作る者ありと雖ども概ね草野の士の撰む所に屬りて其の完全を得ざるを以て文化中幕府命して纂修せしむと雖も其成る所僅に數州のみなり方今政令一途に歸す而して方奧の書未だ修めず國家の一大闕典と謂ふべし當に全國の地誌を撰みて一代の闕典に備ふべきなり然り而して各州の風土は固より之を各府縣に徵するに非ざるよりは其精細を期すべからざれば宜く凡例を頒ち之に遵ひて纂記し以て進めしむべしと後其所論行はると云ふ寧海後ち命を受けて日本地誌提要七十七卷を撰み八年春上表して之を進む是より先き六年五月少史に轉ず七年八月內務省地理寮五等出仕に兼任す八年五月權大內史に陞り法制課長に兼任す九月從五位に叙せられ一等編撰を兼ね尋で本官を罷む十年一月改て一等編修官と爲る十二月之を辭し尋で內務省御用掛に任ぜらる十八年二月五日內務少書記官に任ぜられ其日を以て病歿す年五十三府下豐島郡內藤新宿北町成覺寺に葬る寧海、狀貌魁偉氣宇恢廓學問該博而して能く文を屬す故に其撰著する所甚だ多し日本地誌提要、三正綜覽、郡名異同一覽、地名索引並に既に梓に上る日本國沿革考九卷（選都考

證一卷、古郡考、古驛考未だ稿を脫せず圖は則ち大日本全圖、府縣分轄圖、實測東京圖、畿內圖、伊賀、伊勢、志摩、尾張四州、駿河、甲斐、伊豆三州、相模、武藏二州圖皆世に行はる其他南朝世記、足利世記、列國世譜、泰西紀年、官職通暑、嘉量表、尺度里法表、權衡表（皇朝通曆、中外通曆、新撰春秋通曆、諸系譜、花押譜等あり三子あり長明篤嗣く（行狀錄）

ツカモト　ヨシヲ　塚本芳郎　陸軍歩兵中佐なり兵庫縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第八師團歩兵第五聯隊附として從軍中廿八年一月廿七日清國盛京省黑溝台に於て戰死す戰功に依り勳四等功四級に叙せらる

ツガル　イサン　津輕以三　醫者なり本姓大河內氏、兵庫頭政親の孫にして參河の人なり松下道慶に從ひて瘍科を學ぶ子建廣を生む（皇國名醫傳）

ツガル　ゲンエン　津輕儼淵　醫者なり弘前藩主津輕氏の支族にして名は貞正後組熙と改む字は子壯永學と稱し儼淵と號し幼にして穎悟學を好み初め松田正卿を師とし後山崎道冲に學ぶ稍ゝ長じて昌平黌に遊び天下の俊髦に接し名聲大いに發す恒に藩に敎學の設けなきを歎じ百方焦慮して遂に學館を建築す是より一藩の學大に興る實に貞正の功なり寬政中督學より參政を歷藩宰に昇る時に尙弱冠父貞榮と相並びて藩政を執る後醫を癒て屏居し農商倡優を問はず學行ある者は必ずや之に接遇す儒士の赤貧なる者は己が衣食を減じて之を救ふ常に心を周易に潛め易經畧說二卷を著はす（日本敎育史資料、諸家著述目錄）

ツガル　ショウジョ　津輕承叙　薩黑石藩主なり廢藩後子爵を授けられ正三位に叙せらる明治三十六年十二月七日病歿す年六十四谷中墓地に葬る

ツガル　タケヒロ　津輕建廣　醫者なり左馬頭と稱す初め北條氏政に仕へ後ち藩を辭し歸りて父の業を承く嘗て本多正信の重病を療して効あり遂に擢られて幕府の醫官となる（皇國名醫傳）

ツガル　タメノブ　津輕爲信　姓藤原、初め大浦を稱し後津輕と更む幼名局、通稱右京亮其先は鎭守府將軍基衡の次子左衞門尉秀榮に出づ秀榮津輕十三城に居り始めて津輕氏を稱す其後數世にして家運漸く衰へ武威振はず左衞門尉秀則に至り南部守信の誘ふ所となりて下久慈に幽死す子威信猶幼なるを以て南部氏其族金澤家光を後見として家政を監せしめたるに威信年長ずるに及びて舅武祥に踰えしかば南部光政之を憚れ好會に托して遂に之を襲殺す子元信之を憤り父祖の冤を上國に訴んと欲せしに南部氏之を鬼柳に要擊して遂に子光信を下久慈に囚ふ後僅に津輕に歸る事を聽す是に於て津輕の地全く南部氏の令を奉じ殆んど屬邑たるの姿をなすに至れり其孫信濃守爲則羸弱にして子信の子屬を養ひて其後を承けしむ即ち爲信なり爲信雄才大畧常に祖宗三世南部氏の爲めに其制を受け又封土其管領に歸するを憤り之を恢復するに意あり老臣森岡信元等と密計を定め遂に大浦城より崛起し南部高信和德城主小山內讃岐を滅するに至る爾來南征北伐瀧川重行を大光寺城に奧瀨善九郎を油川城に千德政武を稻德政氏を汗石城に攻め悉く之を亡す是に至りて全郡再び津輕氏の有に歸せり乃ち家臣八木橋備中を遣して鷹及馬を豐臣關白に獻じ其厚意を嘉し遂に封地の覆書を賜ふに至る其後爲信自ら駿河に至り豐公に謁して其恩を謝す九戶政實の南部氏に反するや爲信豐臣氏の命を奉じ兵を福岡に出して其城を攻む既にして政實誅に就く慶長五年正月從四位下に叙し右京大夫に任ぜらる九月關ヶ原の役爲信東軍に屬し水野勝成と同じく大垣城を攻めて之を拔く功を以て上州大館の地を賜ふ同十二年病あり冥醫に上國に就かんとして京都に至りしに十二月五日遂に卒す年五十八乃ち四條礫に火葬し遺骨を上國に送る後謚を癒て屏居し農商倡優を問はず學行ある者は必ずや之に接遇す儒士の赤貧なる者は己が衣食を減じて之を救ふ常に心を周易に潛め易經畧說二卷を著はす（日本敎育史資料、諸家著述目錄）

ツガル　ノブアキ　津輕信明　陸奧弘前城主なり從五位下朝散大夫土佐守名は信明、字は安鄕、合浦と號す、性溫恭明敏幼より戶澤惟顯を師とし後宇佐美淵水に師事して其學を傳ふ、天明大凶荒の際、家督を相續せしを以て一生の心力を盡して救濟の方法を策畫す後年富國の實を得たるもの實に公の措置宜きを得たるに由るといふ當時白河樂翁上杉鷹山と并稱して奧羽の三明君と稱せらる寬政三年六月廿二日卒す年僅に三十、上野津梁院に葬る

ツガル　ノブマサ　津輕信政　陸奧弘前城主なり名は信政字は法正養正軒と號し越中守と稱す天性聰明果決にして能く文武の業に達す壯年より山鹿素行を師として理學神道の奧秘を傳ふ、津輕家中興の英主にして政治、軍備、墾田、山林、租稅、禮式、產業等の諸制度悉く完備せざるはなし最も力を植林に致す津輕郡の海岸平砂渺々風暴く浪高うして丘陵皆兀禿なり信政深くこれを憂ひ天和二年樹藝の道に精しき者數人を撰び四より東に曲折して幅一里長さ十里の所に松及び雜木を栽植せしめ一は海岸の飛砂を防ぎ一は宮城山の山麓に備へ名づけて屏風山といふ天明六年の飢饉東國最も甚し當時土人爭ひて屍風山の樹木を伐採し之を販賣して稍流離の苦を免かれしといふ當時列侯中英才の人を求むるに七人を得信政其うちの一人なりといふ寶永七年十月十八日卒す年六十六、岩木山の麓に葬り高照靈社と稱す今縣社に列せらる（明治十五年山林共進會報告）

ツガルヤ　サンエモン　津輕屋三右衞門「カリヤエキサイ」

ツキ　アフミ　調淡海　百濟の人參理使主の後なり和銅二年六位を歷て從五位下に叙せられ六年從五位上に進む神龜四年皇子誕生し殊に絁十匹を賜ふ淡海和歌を善くする者なり以て名あり詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歷）

ツギアリ　次有　大和當麻の刀匠延延比の人有法師の名なり或は云友俊の子にして弘安比の人或は有法師の子なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツキ　イキナ　調伊企儺　難波の人、應神の朝に參理使主と云へる者あり百濟より歸化す參理の曾孫彌和顧宗の朝に調首を賜ふ伊企儺は蓋し其の後なり號して調吉士と曰ふ人となり勇烈、欽明帝の時紀男麻呂に副となり新羅の賂を問ふ軍敗れて執らへらる伊

企圖屈せず新羅人刀を拔きて之に逼り其の釋を脫し其の譽を露し日本に向ひて呼ばしめて曰く日本の將我が鷹雅を戰へと新羅王我が鷹雅を戰へと伊企儺大に呼びて曰く新羅王我が鷹雅企儺色變せず遂に害に遭ふ其の子舅子父の屍を抱て死し其の妻大葉子禱中に在り悲痛して歌を作りて曰く「韓國のきのべに立ちて大葉子は領巾ふらずもや大和へ向きて」聞く者皆なを之を憐む（大日本史）

ツギイヘ　次家　越前藤島の刀匠にして文明年間の人或は云ふ亦加賀に住すと（古今鍛冶銘早見出）

ツギイヘ　次家　備前の刀匠にして宗家の子文應年間の人なり或は云宗安の子にして天福比の人又吉家の子同名一人ありと又云福岡一文字の派にして寛元比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツギイヘ　次家　備前長船の刀匠にして正應年間の人或は云福岡一文字の派にして二世吉房の子正應永仁年間の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツギイヘ　次家　備中青江の刀匠にして守次の子貞次の弟承元中の番鍛冶廿四人の一なり始め右馬尉後備中權介に拜す（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツギイヘ　次家　備中の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツキ　オトナ　調老人　其の先は百濟の人、老人持統の朝に撰善言司に拜せられ後ち大學頭となり卒す大寶の始め正五位上を贈り律令を撰するの功を追賞して其の子に功田十町封百戸を賜ふ封は身に止まり田は一世に傳ふ（大日本史）

ツギカゼ　亞風　古刀の鍛工にして遠江の人なり或は云元暦比の人或は一丸と稱す又云亞丸と同人なり（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツキガタ　セウクワ　月形鴇窠　名は賞字は君璞幼名は潤通稱市平又七助有禧の子世々福岡侯の料理人たり初め眞藤世廻及び竹田定良に學び後京都に遊びて四依周行鈴木温若槻敬に學ぶ藩の儒者に擧げられまた藩政の顧問に供す天保十三年十二月六日歿す年八十六（日本教育史資料）

ツキガタ　センゾウ　月形洗藏　慷慨家の嫡子なり嘉永三年三月家を繼ぎ馬廻組に加る萬延元年時勢漸く革る洗藏書を上り王覇の辨別、下民の困窮、官員の倫安等を論ず事忌諱に觸れ中老毛利內匠元英に預けられ文久元年御笠郡古賀村に幽居す元治元年に至る慶應元年復罪を得て同族某に預けらる從弟月形七郎直も連坐す遂に是歲十月廿三日を以て同志十三人死刑に處せらる時に年廿八明治三年七月一日黑羽勤王の志厚く官武混雜の秋に方り確乎方向を定め只管國家に心力を盡すと雖も不幸一時寃枉に罹り誠忠の宿志を遂げざるを憾み朝廷特に祭祀料を下し賜ふ同卅一年七月正四位を贈らる（筑前殉難士傳）

ツキガタ　ヒロム　月形弘　福岡の藩士なり字は伯重、通稱三太郎、晩に改めて深藏と稱し滿嵐政二年家を承け祿百石を襲ひ馬廻組となり學校助教に遷る既にして赤間驛茶屋奉行に轉ず嘉永三年致仕す子詳嗣ぐ此時に當て幕府政を失ひ外人放恣志士怨憤して天下將に亂れんとす弘之を憂へ同志と尊攘を主とす弘其の七南北隊に一老儒あり洋學を好み和議を主とす弘其の七古體を次し口を極めて罵詈す文久元年藩弘父子が人を鼓動し藩政を妨害するを以て門人に接するを禁じ詳の祿を奪び獄に下し其の幼孫恒に鷹米若干を賜ひ纔に其の家を存す弘幽居憂鬱遂に疾病を成し二年四月五日を以て歿す年六十五、明治廿五年十一月正四位を贈る弘人となり撲直氣節を尙び謹諛を惡み一生權門に伺候せずと云ふ（近世偉人傳）

ツギカネ　次兼　美濃の人にして古刀の鍛工なり或は云關の一派にして應永年間の人と或は金弘の子又は兼丸の子なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツギカネ　次包　藤原姓攝津の刀匠にして元祿年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツキ　イキナ　調吉士伊企儺　玉井幸助と稱す長門二王派の刀匠にして清房の子寶暦年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツキ　コマロ　調古麻呂　養老中明經第二博士となり後ち皇太子學士に遷り正六位上に至る（大日本史）

ツギサダ　次貞　出雲仁多郡の刀匠にして天文年間の人或は云ふ永祿年間石見に住すと（古今鍛冶銘早見出）

ツギサダ　次貞　石見の刀匠にして寛正年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギサダ　次貞　備前長船の刀匠にして應仁年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギサダ　次貞　備中青江の刀匠にして應永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギサダ　次貞　太郎兵衛尉と稱し備中松山に住す古刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

ツギサダ　次貞　古刀の鍛工にして備後に住す或は云ふ建武年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ツギサダ　次貞　古刀の鍛工にして薩摩波平に住す或は云ふ文龜年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ツギサダ　繼貞　下坂氏越前の刀匠後武藏江戸に住す或は云ふ文龜年間の人と（古今鍛冶銘早見出）

ツギサダ　次定　備中の刀匠にして正和文保年間の人或は云ふ青江に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギサダ　繼定　下坂氏越前の刀匠後武藏江戸に移る天和年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギザネ　次眞　古刀の鍛工にして備中に住す或は云ふ青江に住す寛元年間の人一名稱遠と云ふと或は云朝次の子にして天福比の人なり又家次の門人に同名一人ありと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツギシゲ　次重　土佐神田村の刀匠にして貞次の四子弘化嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツギスケ　次助　備中の刀匠にして文和年間の人或は云貞和延文年間の人又云建暦比の人にして青江に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツギスエ　次末　備中萬壽莊の人源左衛門尉と稱す古刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

ツギタダ　次忠　備中青江の刀匠にして建永年間の人或は云次家の子にして建暦比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツギタダ　次忠　備中の刀匠にして建治年間の人或は云包次の子にして正應比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツギタダ　次忠　土佐神田村の刀匠にして貞次の二子天保嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツキタツフナドノカミ　倒立船戸神（イザナギノカミを省よ）一說に曰く岐神天夷鳥神と同神にして即ち武甕槌神に副ひて中國を征せし神なりと（古事記傳）

ツキダ　マウサイ　月田蒙齋　字は伯恕、通稱右門鐵太郎と改む熊本の儒者にして世々荒尾縣野原八幡の社司たり幼にして學を辛島鹽井に受け長じて京に遊び千手旭山に從て山崎氏の學を受く家頗る貧にして苦學甚だ力む爲めに時に絕食するに至る天保中家に還り長洲に教授す（日本教育史資料）

ツギチカ　次親　藤原姓下坂氏越前の刀匠にして寛永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギツネ　次恒　古刀の鍛工にして備前長船の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギツネ　次恒　備中の刀匠にして正中年間の人或は云ふ青江に住すと或は嘉暦比の人にして左近將監と稱す又云助次の子にして延文比の人と（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツギトシ　次利　備中の刀匠にして建武比の人或は云青江の一派にして建暦比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギトシ　次俊　備前の刀匠にして文永年間の人或は云福岡一文字派にして次家の子寶治比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツギトシ　次俊　備中青江の刀匠にして次家の子貞治比の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギトシ　次俊　備中青江の刀匠にして次家の子暦仁年間の人なり或は正嘉比の人又は仁治比の人又次郎と稱すと或は建武に同名ありと云（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツギトシ　次俊　齋藤金次郎と稱す安政年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギトシ　繼利　藤原姓下坂氏越前の刀匠後武藏江戸に移る元祿年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギトミ　繼富　武藏江戸の刀匠にして繼秀の門人享和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツギナガ　繼永　亦繼長に作る下坂氏越前の刀匠にして亦武藏江戸に住す元祿年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツギナホ　次直　備中の刀匠にして文永年間の人なり或は建永年間となす者非なりと又云長次の子にして寛元比の人或は吉次の門人なり或は青江の一派にして文應比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツギナホ　次直　備中青江の刀匠にして真和延文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギナホ　次植　備中の刀匠にして延慶年間の人或は云正保比の人青江に住すと或は次家の二子にして正嘉比の人或は助次の子或は親次の子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツギナホ　キヨチカ　月直清親　浮世繪師なり京都の人祇園社の額堂に大和大路定芝居村山座狂言の圖の額あり天和二年壬戌正月廿一日月直清親筆と欵せり（扁額軌範）

ツキナリ　月成「メイセイドウキサンジ」

ツキノエ　月野柄　蝦夷の酋長なり寛政元年松前の監吏及び南部の商九十餘人を殺す初め商人松前藩に請ひて市をクナシリに開き酒米烟艸を賣り監吏に賂ひ以て市利を網す夷民忿恨す月野柄乃ち五百人を將て夜市場を襲ひ之を壓す將軍德川家齊之を聞き松前城主松前道廣に命じて之を討す其の將見次某兵纔三十を率ゐて先發す未だ至らざるに賊皆な逃れ去る（續々皇朝史略）

ツキノ　オミ　調使主　和歌を善くす詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者暦歷）

ツギノブ　次信　備前福岡一文字派の刀匠にして宗國の六子建久比の人なり或は云宗國の門人なりと（本朝鍛冶考）

ツギノブ　次信　備前福岡一文字派の刀匠にして基定の子正嘉比の人なり（本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツギノブ　次信　備前の刀匠にして次家の子正應年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツギノブ　次信　筑後三池の人にして典太と冒稱す古刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

ツギノブ　次信　備前長船の人にして古刀の鍛工なり（古今鍛冶銘早見出）

ツギノブ　繼信　藤原姓通稱は又左衛門出羽大掾と稱す越前の刀匠下坂派にして後武藏江戸に移る享保年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギノブ　續信　古刀の鍛工にして筑後三池に住す（古今鍛冶銘早見出）

ツギノ　マドカ　月の圓　狂歌師なり本名は藤尾爲德近江の人なり別號を桂花園、琴の屋と云ふ

ツキノモト　キザン　月本爲山　俳人なり通稱關水藏初め梅本と云ふ江戸の人梅室の門人明治十一年一月十九日歿す年七十五

ツキノモト　ヨノソスキ

ツキノヤ　モリマル　月守丸　狂歌師なり佐伯氏芽月園、凌雲亭、應柏子等の別號あり上野の人

ツキノヤ　月舍「サハチカネ」

ツキノヤ　月舍「ヨコヤマヨシキヨ」

ツキノヤ　ハラカネザネ　月輪關白「フヂワンパク」

ツキノヤ　クワンパク

ツキヒコ　月彥　江戸の俳人なり姓は穗積通稱鈴木鐵太郎文政八年四月三十日麻布に生る幕府の士なり初め雨夢といふ文素學と號す田川鳳朗の門人なり後三世東杵庵の門に入る又國學に通じ淺草鳥越神社の祠官たり寶迴屋、言靈道人、紫花園とも稱す明治廿五年三月廿日歿す年六十八向島長命寺中堤葬地に葬る（俳諧人物便覽）

ツギヒサ 次久　備前長船の刀匠にして兼光の門人應永年間の人（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツギヒサ 次久　陸奥盛岡の刀匠久次三世の孫にして新藤國義の門人實曆年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギヒデ 繼秀　藤原姓井氏通稱は源次近江守と稱す武藏江戸の刀匠にして繼平の門人なり天明文化年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギヒデ 次秀　備中の刀匠にして次吉の子建治年間の人或は云ふ寛元比の人にして青江に住すと又云次家の子にして建曆比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツギヒラ 繼平　藤原姓藤田氏通稱は興兵衛近江守と稱す越前の刀匠三世下坂康繼の門人なり武藏江戸に住す寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

二世繼平は通稱は興右衛門近江守を襲稱し江戸神田に住す元祿享保年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

三世繼平は通稱興四郎亦近江守と稱す寛延寶曆年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

四世繼平は通稱興四郎亦近江守と稱す明和安永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギヒラ 繼平　柏原仲左衛門と稱す薩摩の刀匠元平の門人にして大隅に住す文化年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギヒロ 次廣　相模の刀匠にして明應永正年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギヒロ 次廣　若狹小濱の刀匠にして永正天文年間の人或は云ふ冬廣の門人なりと或は云冬光の子にして文明比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツギヒロ 次廣　加賀の刀匠にして永正年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギヒロ 次廣　又次弘に作る石見の刀匠にして寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギヒロ 次廣　備中青江の刀匠にして天福年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギヒロ 次廣　備中の刀匠にして延文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギヒロ 次弘　石見長濱の刀匠にして長祿年間の人或は云ふ永享比の人にして太郎左衛門と稱すと又云貞綱の門人にして明德比の人或は應安比の人にして頼綱の女婿なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツギヒロ 次弘　備前の刀匠にして正應年間の人或は云ふ正中比の人にして長船に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギヒロ 次弘　備前長船の刀匠にして應永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギヒロ 次弘　備中の刀匠にして延慶年間の人或は云ふ建治比の人にして青江に住すと又云助延の子にして應安比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツギヒロ 繼廣　藤原姓下坂氏近江守と稱す越前の刀匠にして應永比の人なり武藏江戸にても造る所及武藏江戸にても造ると云ふ（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギホ 繼穂「クワゲンドウツギホ」

ツギマサ 次正　備中の刀匠にして貞治年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギマサ 繼正　藤原姓下坂氏六兵衛と稱す越前の刀匠にして三世康繼の門人なり後武藏江戸に徒る亦上野館林下野足利に住す元祿年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギマサ 繼政　下坂氏越前の刀匠にして享保年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギマロ 月麿「キクマロ」

ツギマロ 月麿「タナカタイシウ」

ツギミツ 次光　備前の刀匠にして文和年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギミツ 次光　備前長船の刀匠にして延文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギミツ 次光　備前長船の刀匠にして文明年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギミツ 繼光　下坂氏越前の刀匠にして延寶年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギモリ 月守　江戸の俳人なり響音廬、京太郎と號す初め車韋と稱す響中庵蕉太の門人なり江戸八町堀に住す（俳諧人物便覽）

ツギモリ 次盛　備前大宮の刀匠にして曆應年間の人或は云弘安比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツギモリ 次盛　平姓豐後高田の刀匠にして文龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツキヤマドノ 築山殿　今川義元の養女、實は關口氏廣の女なり弘治二年二月義元養て德川家康に駿府に配す永祿二年三月信康を岡崎城に生む明年三月女を生む女後ち奥平信昌に配す是を盛德夫人と爲す信康長じて雄偉織田信長諱字を授け女を以て之に妻はす元龜二年婚姻を結ぶ是を見星孺人となす築山殿性妒悍嫺道を挾み或は酷虐を極む永祿五年嫉忌甚し姑德寺まず之を伊勢に徒す築山殿勢越の間に通る信康私に迎へて岡崎に寓く後築山殿孺人織田氏を猜忌す織田氏亦妒み築山殿と屬と相惡む築山殿之を信康に短し龍日に襃ふ築山殿疾あり甲斐の醫減慶と姦し密に不軌を謀り之を信康に告ぐ信康可かず尋で事露はれ天正七年八月十日信康を二股に幽す二十九日石川太郎左衛門行吏となり死を築山殿に小藏に賜ひ四東院に葬る法號を清池院澤月秋天と曰ふ築山殿嘗て參河に居り山な築く故に號となすと云ふ九月信康自殺す（野史）

ツキヤマ 築山樂山「ラクザンダウ」

ツギユキ 繼行　藤原姓下坂氏越前の刀匠にして貞享年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギユキ 繼行　藤原姓豐後高田の刀匠にして寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギヨ 繼代　大友惣十郎と稱す薩奥仙臺の刀匠にして國次の子なり武藏江戸に來り繼平の門人となり業を修む安永寛政年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギヨシ 次吉　若狹小濱の刀匠にして永祿年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギヨシ 次吉　越後桃川の刀匠にして天文年間の人或は云永享比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギヨシ 次吉　備前の刀匠にして永仁年間の人或は云嘉元比の人或は一文字派次俊の子なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツギヨシ 次吉　備中青江の刀匠にして次家の子曆仁年間の人なり或は云次家の二子にして建長比の人或は寛元比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

二世次吉は文永年間の人青江に住す或は云建治比の人にして左近將監と稱すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

三世次吉は德治年間の人備中に住す（古今鍛冶銘早見出）

ツギヨシ 次吉　左近將監と稱す備中の刀匠にして元德曆應年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツギヨシ 次吉　備中の刀匠にして康永貞治年間の人にして曆仁次吉の四世なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツギヨシ 續吉　越後桃川の刀匠にして永正年間の人或は云永享嘉吉年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツキヨミノ ミコト 月夜見命　伊弉那岐神の子にしてイザナギノカミ右の目を洗ふ時產るると云ふ天照大神命に勅して曰く葦原中國に保食神あり之に使すべしと命保食神の處に至れば之に饗するに口より出す所の飯肉諸器を以てす命大に怒り之を殺す（此の事オホゲツヒメノカミのスサノヲノカミを饗する談に似たり各參看すべし素盞嗚尊は蓋し命の別名ならん）大神其暴惡を憤り命を斥く（古事記、日本紀）

ツギヨリ 次依　備中の刀匠にして弘安年間の人或は寛元比の人にして青江に住すと又云次直の子にして建治比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツギヨリ 次頼　備前の刀匠にして永仁年間の人或は云福岡一文字派にして文永比の人又云次信の子にして安貞寛喜年間の人或は正嘉比の人一名介休亦助休に作ると（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶考）

ツギヨリ 次頼　備中の刀匠にして德治年間の人或は云ふ正應比の人にして青江に住すと又云ふ次恒の子にして永德比の人一名宗遠或は次依と同人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツキヨ 月雄　俳人なり朝日氏武藏秩父郡我野神社の神官たり養仁叟と號す性篤實にして門に入る者多し明治二十年八月八日歿す（三森松江氏寄）

ツキヨカ イツロサイ 月岡一露齋　幼より刀槍の術を好み弱冠に及びて齋藤傳鬼房の徒小松一卜齋に就き天道流（一に天流）の奥旨を得て名を世に顯はす後ち其の終る所を詳にせず（事實文編）

ツキヨカ セツゲイ 月岡雪溪　畫人なり雪鼎の二男江洲の人、父の畫風を學びて能くせり法橋に叙せらる（扶桑畫人傳）

ツキヨカ セツサイ 月岡雪齋　畫人なり江州の人、雪鼎の長男にして父の畫風を學び法橋に叙せらる（扶桑畫人傳）

ツキヨカ セツテイ 月岡雪鼎　有名の畫人なり本姓は本田、名は昌信、雪鼎は其號又信天翁と號す俗稱は丹下、江州の人、大阪に住し畫法を高田敬甫に學びて大に研究し又和漢の畫法を兼ひて後ち一變す畫く所邦俗の美人を巧にす又好みて春宵秘戲の圖を作り設色緻密にして透明なる者は人心を動すに足る又人物魚類の畫も巧にす應擧と雖も此圖に倣ひて遂に人物動物を畫けりと云ふ法橋に叙せらる天保六年十二月歿す年七十七（鑒定便覽、扶桑畫人傳、燕石十種、畫乘要略）

ツキヨカ ヨシトシ 月岡芳年　畫工なり大藤と號す東京の人本姓吉岡氏父を金二郎と云ふ月岡雪齋の養子と成る元一勇齋國芳の門人洋風を折衷して一家を建つ弟子頗る多し門人に非ざるも其の風を慕ひて之を學ぶものあり明治廿五年六月九日歿す年五十四東大久保村專福寺に葬る（名人忌辰錄）

ツクシ ギモン 筑紫義門　勤王家なり初め名を道正字を伯龜通稱を衛といふ福岡藩士筑紫四郎左衛門の子にして幼名を虎吉と稱す世〻黑田家に仕へて祿千石を領す義門幼より慷慨激烈の氣あり最も長沼流の兵學を遂し後泰西諸國の兵法及び海防術なも研磨し遂寇私議西洋兵法取捨辨等を著す元治元年十一月長防の役起るや義門藩主の命を受け淺香市作と共に長州に往き之を說く所あり長州侯大に悅び使を義門が客舍に遣はして之を謝し且つ厨料を送りて厚く禮遇したり同年十二月月形洗藏と共に萩に至り藩主に謁し其藩士前田孫右衛門楢崎彌八郎等の爲めに寃を訴ふると頗る力む慶應元年五月長州を去りて太宰府に移るに及び七卿の爲に寃を雪がんとして或は京都に赴き或は幕府の宗族の許に至り是非を說き利害を辨じて周旋頗る到る其後歸藩せしに讒に遇し六月二十日俄に家に禁錮せらる義門憤激に堪えず九月六日の夜遂に竄に脫出して川を徒渉せんとして遂に溺死す時に年三十明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞して特に正五位を贈らる（殉難錄稿）

ツクシ コレカド 筑紫惟門　筑前の人なり姓は藤原氏、少貳氏と同族、少貳貞經の弟資法の七世御門三笠郡筑紫を食む因て氏とす御門の曾孫正門惟門を生む惟門上野介左馬頭に任ぜられ下野守と稱す永正五年將軍義稙を奉じて京師に入り大內氏に屬し東肥山浦城に在り秋月文種と讙して毛利元就に逐ず弘治三年七月大友宗麟兵を遣て秋月城を攻む文種戰死す惟門戰敗て九千部領に走り五箇山第一峯を保す已にして敵司ちざるを察し城を燒き海に航して元就に遷る子を廣門と曰ふ（野史）

ツクシ ヒロカド 筑紫廣門　惟門の子なり上野介と稱す肥前の人永祿十年高橋鑑種大友氏に反す廣門肥前に還り故舊を招集し三條城に據り以て鑑種に應ず七月大友宗麟の兵と戰ひ數〻若戰して遂に降る乞ふ十四年六月島津義久と戰ひ敗て降る義久之を筑後大善寺に幽す而して薩兵引き還ると聞き潛に出で〻舊邑に入り故舊を聚て五箇山の寨を保つ十五年秀吉薩を平げ廣門を召して筑後上要郡を賜ひ山下城に居る文祿二年五月朝鮮に在りて熊川を守り小早川隆景立花宗茂と明軍を擊ちて大に之を破り多く敵首を獲たり十月毛

利秀包と星州城に在て明將李如梅が兵と戰ひ大に之を破る慶長三年秀吉薨じ征韓の諸將還らんとするに及びて小西行長順天に在り敵兵水陸之を攻む島津義弘立花宗茂赴き援ふ唐門從ひ敵み撃て行長を助く慶長庚子の役石田三成に筑す軍敗れて逃歸る十月加藤清正之を招き山下城を守らしむ髮を削て夢庵と號す清正卒して細川忠興に欵き家康に謁す元治元年四月卒す年六十八、長子晴門美濃守と稱し幕府に仕ふ（野史）

ツクシ　マス　筑紫益　家世々學を業とす天智帝の時筑紫太宰府典となる天武の時爵直廣肆を賜ふ蓋其の官を久くするを以てなり因て筑紫を氏とす持統帝の五年詔して曰く筑紫太宰府典直廣肆筑紫史益は一たび任を受けてより清白忠誠敢て怠慢せざること今に二十九年一日の如し依りて賞して食封五千戸絁十五匹綿二十五屯布五十端稻五十束を賜ふと後ち終に官に卒す（日本儒林傳）

ツクダ　カズナリ　佃十成　一作次郎兵衛、加藤嘉明左先鋒の將たり征韓の役唐島水戰に十成眞先に進み竈船に斫入る敵劍を其口中に突入たれども少しも撓まず拂落して猶ほ進む敵挺を振ひ痛く十成が兜の頂を撃つ十成仆れて海底に陷り間ありて水面に浮ぶ從兵熊谷覺兵衛薙刀の柄を伸べ十成をして之を拉らしむ十成再び其船に入り大刀を振て一船を鏖にし難なく其船を奪ふ其日の戰爭の第一の功は十成に定まる其後關原の軍起る嘉明東軍に屬し居城松前（伊豫）を發して東擣部等伊豫を徇へ使者を以て松前城を開かしむ十成陽りて命を聽き數日を紓べて籠城の手配をなす時に藤堂高虎大洲城を守り松前急なりと聞き援兵を出す十成固辭し厚く犒ひ歸す一夜毛利の營を襲ひて手から其將村上擣部を斬り并せて野島内匠曾根兵庫の副將を獲たり爾後連戰皆捷ち四軍支へずして藝州に退く關原の役後嘉明師陣し十成寡兵にして鎭城を寧はれず且三强敵を獲たる其智勇の拔群なるを以て采地六千石に進め松前支堡の戍將とす尋で大阪の役に嘉明の男明成に扈從し又軍功あり寛永四年嘉明封を會津に轉ずしより十成一萬石を貪む數年を歷て病作る十成豫め起たざるを知り子孫を聚め遺言して曰く我壯年より戰に服すること數度疵を蒙むること十三箇所なり就中久米の戰に銃丸右額に穿入り今猶ほ皮肉の間にあり而れども命あれば死に抵らず此を以て考れば武士は一生中必らず怯懦の行あるべからず今茲に其の念を遺さんとて刀を引て皮を剝ぎ銃丸を挾出して膝下に置き端然として瞑す年八十二（豪雄傳）

ツクダ　マタエモン　佃又右衛門　慶長年間の天主教信徒なり宗藝の人にして天主教を信ずる厚し此の人戰功あるを以て諡して改宗せしめんとす肯せず終に捕へてこれを誅す（邪蘇天誅記）

ツクバアン　筑波「イシジマツクバ」

ツクバアン　筑波「シイン」　筑波庵紫蔭（初代）狂歌師なり江戸下谷摩利支天横町に住す姓は君塚通稱を伊兵衛と云ふ丸屋と呼べる賈商にして狂歌を樂みとす天保三辰年十月三日歿す享年不詳谷中初音町（元三崎）法華宗日照山長明寺に葬る（古今狂歌物誌）

ツクバアン　シゲキ　筑波庵繁樹（二世）　通稱を荒井伊兵衛と云ひ初代筑波庵紫蔭の二男なり神田連雀町江戸屋茶の養子となり荒井氏を繼ぐ狂歌をよみ初名を八重の家菊枝と云ひ安政五年四月父の號を繼ぎ二世筑波庵繁樹と號す兩國橋町に蕎麥屋を開業せしが數年を出ずして閉居し新和泉町に移り住み田所町の井菁に通勤して狂歌を弄び明治十九年三月五日年六十三にして歿す谷中初音町（元三崎）法華宗日照山長明寺に葬る（古今狂歌人物誌）

ツクバコ　筑波子「シゲコ」

ツグヒミノカミ　津咋見命（天日鷲命を見よ）

ツクミ　ギンシ　津久見吟市　俳人なり尊海和尚の門人（俳林小傳）

ツグヤマ　ケンダウ　繼山撿挍　入橋檢挍の門人にして學の妙手なり遂に一家を成し繼山流と稱し其名高し（古今人物故事）

ツゲクラウ　柘植善九郎　石州流の茶道なり松浦肥前守に學びて能くせり其歿年詳かならず（茶人系傳全集）

ツケシバ　トモサブラウ　附柴知三郎　陸軍砲兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團野戰砲兵第三聯隊附として從軍中三十七年八月三十日清國盛京省首山堡附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ツゲ　シュクジュン　柘植叔順　醫者なり名は彰常、龍州と號す叔順は其字、河内の人、醫名あり嘗て謂ふ近國魚食の民腸胃溫熱な嘗へ因て蟲蠱を生ず其の害極て大なり而して從前方書の備はらざるを病ふと是に於て已に經驗する所を書し曼雜錄を著す世に蛔病專書あるは之を以て始となす叔順高取侯に仕へ大阪に居る業盛に行はる（皇國名醫傳）

ツゲノ　ミタ　鬪鷄御田　雄略天皇の時の木工にして名手と稱せらる其の身輕捷にして樓の梁上にありて疾く四方に走る恰も飛禽の如し（工藝志料）

ツゲ　フモト　柘植麓　陸軍二等軍醫なり三重縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備役より召集せられ後備歩兵第二十二聯隊附として從軍中三十八年九月七日清國盛京省二里寨にて病に罹り同十月十日開原兵站病院許家台分院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ツザカ　セツシュウ　津阪拙脩　名は逢宇は有功賀之進と稱す伊勢の人東陽の嗣子なり豪邁不羈膂力人に絕し聲洪鐘の如し少時四方に周遊し詩を以て顯はる其友詩輯之に詩を贈り東阿擊世稱三詩虎一の句あり亦以て其の詩學世人の及ぶ所にあらざるを知るべし（藝苑叢記）

ツザカ　トウヤウ　津阪東陽　津藩の文學なり名は孝綽字は君裕東陽は其號、伊勢の人父は節齋、十五にして醫師村瀨氏に依る居ること三歲心に其技を鄙しとし成らずして去る笈を京師に負ひ專ら經業を攻む學ぶに常師なく書讀み夜抄して或は暗に通ずるに至り留ること十餘年帳を螢下に設け古學を以て家を立つ門徒頗る多し尋で梶井王府の門客となり兼て諸公卿の間に遊ぶ皆な賓師を以て待遇す天明戊申災に罹り歸して鄉に還り儒官に擧げられて十五口糧を賜ひ賀上野に敎授せしむ文化丁卯遂に召し還して侍問直學士に補し諸公子敎諭を兼ぬ益し上野に在ること凡そ十有九年戊辰の新政に封事を上りて中興の治を頌贊す適々一藩要專ら財利を圖り事を生じて民を擾がす東陽其治化を傷ふ

を慨し退思錄を著はして治務を論じ當路を論して考ふる所あらしむ義薩諦構して危難に瀕す癸酉侍讀學士となり日々入りて治敎を論ず獻替する所多し國法舊制は死刑の外止だ放逐あり徒流を設けず恐らくは論罪の際或は失する能はざらんと爲めに考立制を著はし以て欠典を補ふ既にして事を以て俸を削られ留守散騎に充てらるる是れより意を進取に絕ちて專ら力を著述に肆まゝにし孝經論語卷秋諸禪の義註成る此の間屢々飛語に中り又た擯倖の構ふる所となり門を杜ぢて罪を待つこと再び文化戊寅命を奉じて藩祖創業記を代撰す水戸侯號を賜ひて聿修錄と曰ふ己卯五月學館を創建し督學兼侍讀に任じ俸を改めて田祿二百石を賜ひ班を士貴首に上ぼす十一月班を中大夫に進め祿百石を益し第を城中に賜ひ書齋二員隸卒十二名を給す辛巳十一月大成殿成る建議して吉備公菅公を配享し始めて釋奠を行ふ壬午三月學敎行はれて士風の率服せるを賞し再び祿を益す前を併せて四百石班執政大夫に亞ぐ既にして年老いたるを以て致仕し文政八年八月廿三日歿す年七十（自撰壽碣）

ツジ　イクノスケ　辻幾之祐　勤王の志士なり原姓は小野諱は統茂一に郁之助と稱す家農を以て業とす後辻禹治郎に養はる風に勤王の志を抱き其機を窺ふ文久三年八月中山侍從忠光兵を大和に擧ぐるに先ち其謀議に與り五條の役及び高取藩の攻撃に於て大に功績あり吉野郡鷲家口戰爭に利あらず終に敗績するや遂に幕吏の爲めに捕へられ京都の獄に下る元治元年七月十九日獄中に斬らる年二十七明治三十五年十一月朝廷其忠志を追賞し特に正五位を贈らる（甲子殉難志傳）

ツジ　カウシラウ　辻好司郎　陸軍歩兵中尉なり石川縣出身にして明治三十七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ歩兵第七聯隊附として從軍中三十七年十一月二十六日旅順要塞盤龍山に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ツジ　カクリャウ　辻格亮　彫工なり平四郎と稱し姉水堂と號す鐵鍔縁頭等の賞をこなすと上手にて金銀の象眼も亦た更に妙なりされど其の彫む所風致に乏しく專ら臨川堂を學べりと云ふ江州坂田郡國友村に住す（裝劍奇賞）

ツジ　キザエモン　辻喜左衞門　寛文年間肥前有田の陶工なり自から製造する所の磁器を朝廷に獻ず爾來年々例となす其器淡華明潔なり其中に菊花章および鶴鶴の紋を著すもの御器なり其子嘉平次もまた其工の名あり（工藝志料）

ツジ　クワンド　辻完度　新四郎と稱す永川堂と號す彫工なり其の鑿の丁り臨川堂に似て甚だ見事なり（裝劍奇賞）

ツジ　ケイギ　辻敬義　陸軍歩兵中尉なり熊本縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て歩兵第十四聯隊附として從軍中廿七年九月五日清國盛京省遼連溝に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ツジ　ゲンサイ　辻玄哉　泉州堺の茶人なり武野紹鷗に從ひて茶道を能くす（茶人系傳全集）

ツジ　コナン　辻湖南　儒者なり名は敏樹、字は穉卿、湖南は其號江州辻村の人なり本姓は源丹波笹山侯に仕へ俗生徂徠に學ぶ（鑒定便覽）

ツジアン　辻澤就庵　越後新發田の醫なり名は泰、字は一守、觀察堂主人と號す小字は萬平後從善又就庵と改む父靜安千之と稱す世々藩の醫官なり就庵は其の第二子にして人以て神童と爲す年十五六にして詩文を善くし尋で玄昌の門に入り專ら眼科手術を研究し其の術に精通す又會藩の木村雲庵に就て外科を學び傍ら蘭學を學び内科、産科に涉る戊辰の役藩の軍病院副院長となり功を以て藩主より賞金帛を賜ふこと前後六七回後ち新發田醫會の長となる明治廿七年十二月三十一日歿す年六十二

ツジ　シナノ　辻信濃　伶人なり道を箏業に學びて聲譽を得たり（野史）

ツジ　タカヒデ　辻高秀　伶人なり本姓狛、近元の四男にして吹笛を善くし別に一家を興す正保二年生れ當時雅樂の泰斗たり東山帝召して笛の御師範と年の正四位上肥後守に至り寶永四年二月九日卒す年六十三（辻氏家傳）

ツジ　タカフサ　辻高房　高秀の子なりよく父業を襲ぎ吹笛に堪能なり中御門帝の御師範に候す父子相次ぎ御師範を命ぜらる時人以て盛榮となす從四位下圖書權助に任ぜられ延享元年十月十七日卒す年四十三（辻氏家傳）

ツジ　タツ　辻達　洛人なり初名了的或は鄰適と稱し端亭を以て號とす後名を達と改む字は思聰其父了純頗る連歌を以て聞ゆ達幼にして字を知り學に志さず十四歲東武に來り水戸源盛公に筮仕す而して林羅山に謁し之に師とし事ふ羅山以て岐嶷と爲す學問稍々進む盛公之を奇とし食祿を賜ふ寛永の末官命じて諸家系圖傳を輯せしむ達其事に預り平氏の譜を撰して稿を終ふ柳營に徵され恩賞を享け其名漸く顯はるまた東國通鑑に訓點を加ふ全部功成りて世に刊行す且其抄纂著述する所若干卷あり或年更秋の交宿痾遂に起たず九月十五日歿す嗣なし姪隆を養ふ

ツジ　チカタフ　辻近任　近元の孫にして近恒の子なり延寶四年二月六日生る近寛の後を襲ひ笙、舞に堪能なるを以て有名なり享保二十年二月琴曲取調の爲め關東下向を命ぜられ當時の鴻儒荻生徂徠等と之に從事し雅樂曲十五曲を再興す同年十一月廿五日院の御所に於て昇殿を聽され琴曲を叡聞に達し賞を蒙る元文三年再たび關東に下向し更に琴曲百有餘曲を再興せり正四位上豐前守に至り寶暦七年十月廿九日卒す年八十二（辻氏家傳）

ツジ　チカヒロ　辻近弘　南都の樂人なり本姓狛父を近朝といふ後陽成帝奈良の樂人を召す時に當り笙を善くするを以て擢て京師に上り禁裡の樂人となる慶長年間伯耆守に任じ寛永十年從五位下に叙せらる近弘は笙を善くするのみならず亦た彫刻に巧みなり寛永年中德川家光日光祖廟を大に改修するの時後陽成帝勅旨の陽明門の額を近弘に命じて彫刻せしむ近弘年已に老いたるを以て固辭す幕府之を許さず即ち日光に下向す刻成り江戸城に入り家光に謁す家光其勞を賞する頗る厚し同十二年八月十日卒す年六十六（辻氏家傳）

ツジ　チカヒロ　辻近寛　近元の孫にして近完の子なり初名を高元又た近家といふ笙、舞に堪能なりまた笛を伯父高秀に學び屢々高秀に代り東山帝の師範に候す靈元帝貞享二年正月舞樂御覽の時傳家の舞陵王を奏し叡感を蒙り從五位下伯耆守に推叙せらる正德元年朝鮮使節來朝に當り將軍德川家宣江戸城に於て

之れを襲し舞樂を奏せしむ是時近寛左方の一者たりまた日光廟樂府に赴き舞樂の事を掌る正德二年舞曲家傳記、雅樂管絃鼓類記、左右舞番記、及樂府雜記等の書を著し之を獻ず享保三年正月舞樂御覽の時散手の曲を奏し叡感を蒙る從四位上に進み享保五年十二月卅日卒す年五十三（辻氏家傳）

ツジ　チカモト　辻近元　近弘の子なりよく父業を襲ぎ笙並に舞を善くす德川家光初めて日光廟に樂府を置く近元を擧げて之に教へしむ寛永年間從五位上伯耆守たり寛文五年近元幕府に請ひ京師南都天王寺の樂人に新領地を賜はんとを以てす則ち聽さる之を三方樂所領と稱し此時に始まる延寶五年正五位上に進み同九年六月廿二日卒す年八十（辻氏家傳）

ツジ　チュウベエ　辻忠兵衛　茶人なり一尾伊織に學びて茶道を能くす（茶人系傳全集）

ツジ　ツネナリ　辻常成　彫工なり孫助と稱し清水堂と號す江州國友村の人にして辻丹治の從兄弟なり常成其の衛臨川堂の風に擬し嚴々として日に進む然れども不幸短命にして死す（裝劍奇賞）

ツジ　テキシ　辻荻子　俳諧師なり名は景方通稱五平治伊賀上野の人享保十四年十月十日歿す超誓寺に葬る（俳林小傳）

ツジ　ノリマサ　辻則正　近元第十二世の孫則是の子なり天保三年五月十日生る幼名を則察といふ近代雅樂の名手なり嘉永年間左近衛將監兼伯耆守たり安政五年從四位上に叙せらる文久元年孝明帝崩の御師範たり同三年正月二十八日卒す年三十二（辻氏家傳）

ツジ　バンアン　辻晩庵　島取藩の儒臣にして林氏の門に學ぶ正德三年六月死す（日本教育史資料）

ツジ　ヘイナイ　辻平内　彦根藩士にして名は承志稽古館の物主兼書物奉行添役たり後憲飼割役兼鳥札奉行を經て城門番頭に轉ず文化十二年二月十日死す年五十三（日本教育史資料）

ツジ　ホセツ　辻保雪　江戸の金工なり政親の門人にして渡邊助九郎と稱す初政幸又彦九郎甫雪ともいふ或は蘊景とも刻するあり（金工名譜）

ツシマ　對馬　江戸芳原海老屋の遊女にして性甚だ寛濶なり始て正月仲の町にて羽子をつきまた道中に了髪をして羽子板を持して列に從はしむ其風今ま尚ほ存す（早引人物故事）

ツシマ　ギンペイ　津島銀平　陸軍步兵大尉なり山梨縣出身にして明治三十七八年四月十二日奉天にて病に罹り爾後餘病併發して三十九年一月二十日東京豫備病院藤谷分院に於て死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ツジ　マサカタ　辻政方　金工なり滿右衛門といふ代々德川家の金工にして其の作は無銘のもの多し寶曆十一年歿す（金工名譜）

ツジ　マサチカ　辻正近　江戸の金工なり元京都の人政英の子源右衛門と稱す寛文中水戸侯に召され萬治九年歿す（古今金工便覽）

ツシマ　マンイチ　津島滿一　陸軍步兵少佐なり岡山縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て步兵第十聯隊附として從軍中廿七年十月十二日清國盛京省三塊石山戰鬪の際負傷同十四日第二野戰病院に於て死去す戰功に依り勳四等功五級に叙せらる

ツジ　ミツマサ　辻充昌　彫工なり丹治と稱し臨川堂と號す鐵砲師辻又左衛門の門人にして江戸坂田郡國友村に住し終身娶らずと云ふ其の彫工甚だ美麗なり就中鐵縮樗の象眼其の外鍛花高彫上彫等最も奇妙なり江戸に之き横谷宗與に寄食し又た奈良風を問ひて辻右衛門と稱す既にして歸郷し其の業に專ら日に進む安永五年歿す時に年五十六なり（裝劍奇賞）

ツジンポ　津尋甫　金工なり野村庄左衛門正道の門人後ち通乘に從ふ八左衛門と稱す江戸銀座に住す寶曆十二年六月歿す年四十二（古今金工便覽）

ツジムラ　ヒデノブ　辻村秀信　陸軍步兵中尉なり高知縣出身にして明治廿七八年日清戰役に於て第四師團步兵第十聯隊第六中隊附として出征中病に罹り廿八年八月三日清國坡廠會營病院に於て死去す

ツジ　ヒデワカ　辻英若　陸軍輜重兵中尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團輜重隊附として從軍中三十八年八月十一日

日清國盛京省富有庄にて病に罹り同九月四日大房身會營病院に於て死去す

ツジムラ　モヘエ　辻村茂兵衛　浮世繪師なり京師の人清水觀音奉納の額諸侯行列の圖は茂兵衛の筆なり承應四年未卯月八日辻村茂兵衛寫の歌あり（扁額軌範）

ツジモト　アサキチ　辻元淺吉　陸軍步兵中尉なり奈良縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し豫備役より召集せられ第四師團後備步兵第廿八聯隊附として從軍中廿七年十一月廿八日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ツジモト　スワアン　辻元松庵　醫者なり字は山松、冬嶺と號す多紀桂山に學ぶ少にして山本北山の塾に在り賞甚だし時に園中の穢を賞り以て自ら給す嘗て夏時に方りて蟬を買ふ能はず每夕聽嚮内の蚊群を驅り以て其の中に眠る然れども人となり果毅にして勤學倦まず遂に其の家を興し名醫を以て稱せらる嘉永年中召されて幕府の侍醫となり號を寓春院と賜ふ當時車馬門に壻弟子家塾に居る者數十人而して巷陌每に人に語るに昔時窮阨の狀を以てして落涙し

（香亭雜談）

ツジ　ヤヘエ　辻彌兵衛　甲斐の將山縣昌景の同心なり永祿四年九月川中島の役に十七歲にて初陣し首を取り疵を負ふ其より天正元年まで十たび戰場に出て首五級を獲證文二通を得たり其頃廣瀬鄉左衛門三科肥前と云ふ者亦昌景の同心にして老功の者なりければ俱に采配を免されしが鄉左衛門時に年四十六是まで首を得る五十九證文十六通あり肥前時に四十八首を得る十六證文十七通あり彌兵衛訴て某が首數は五つなれども皆戰槍黑なれば采配巳上の首なり廣瀬三科の首數多しとも端武者なり某其下風に居るが屑とせずと肥前曰く首は多きを上功とす采配かけし首は猶更に尤物とす彌兵衛曰く采配かけて後武功の定まる者なれば汝等も自今ならでは武邊功者と謂ふべからず昔時堀川夜討の時辨慶は棒にて多兵を打倒せりとあれば其内に首の七八は有つらんに伊勢義盛の首ニ為ば經殊に賞美せりとぞ然れば少なくてよき首と多くして雜兵の首とは同日に論ずべからず二人曰く彌兵衛は今年二十九歲

我等に勝つは手柄なり我れ彌兵衛に勝たりとて手柄にならず彌兵衛曰屈せず口ばかりかは武邊も若者には敵すまじきぞと聲高になり冒募りければ二人大に笑ひて止む是に於て彌兵衛の所說理となり十五貫の地を加增せられたり（豪雄百行錄）

ツジ　キガク　辻維岳　勤王家なり文政六年七月安藝國廣島に生れ初め勘三郎又將曹と稱す家世々淺野侯に仕へ祿千二百石を食む職專ら君側にありしが時の執政昇平に馴致し奢侈怠慢の行爲少からざりしを見て心竊に快々たり偶々嘉永六年米艦浦賀に來航するや天下湧くが如く騷然たるも執政の餘安尙依然たるを以て愈々憤慨に堪へず國老淺野遠江及黑田圖書石井雄之介黑田益之丞小鷹狩介之丞等の同志士と協謀して大に整政を釐革せんとせしこと數回に及ぶも每に執政等の探知防衛する所となり遂に職を罷めらるゝに至る文久二年尊王攘夷の論四方に起り其年九月近衛關白內勅を藩主に傳へて國家の爲め周旋せんことを倚賴す藩主は維岳を拔擢して執政と爲す藩主朝觀京に在らざるときは維岳代りて滯京し以て尊王に從事し周旋頗繁寧日なし慶應二年五月幕府長州を伐つの時閣老小笠原壹岐守安藝に滯陣す幕府之に命を傳へて維岳に譴慎閉居を命ず蓋し執政首坐に在つて建策する所あり藩主をして再回の征長は名分立たず宜く退軍すべしと幕府に促したるに依る然るに小笠原閣老は藝の藩中の子弟が憤然沸騰して大いに强迫する所あらんとするを傳聞し晦夜竊かに廣島を脫して九州に渡る維岳の藩慎も亦幾ばくもなく解かる同年八月幕臣勝安房守が長州の處分を擔任し藝の廣島に來るや維岳長藩士廣澤兵助井上聞多等と具に房州と會して謀る所あり既にして征長休戰となるに及び薩の藩士小松帶刀西鄕吉之助等に謀り將軍をして大政を奉還せしめんとし議全く整ふ因て之を實行せんと期す三年十月の初め土御門家に於て中山忠能岩倉具視に謁し三藩の決議を示し且つ三ケ條を約し同月六日書を藩府に呈す書中天下を私有せず大に革新あらんことを陳べたり同月十三日德川將軍は重臣を二條城に會し開議するに當り特に維岳と薩の小松帶刀士の後藤象二郎とを其席に召して意見を陳述せしめ將軍其言を熟聽し還政の上請を嘉納せり是に於て同年十二月九日王政復古の令下り十一日薩士參與に拜し明治元年內國事務局判事を命ぜらる明治三年元老院議官に任ぜられ次て從四位に叙し特に男爵を授け華族に列せらる同年十月麝香間祗候を命ぜらる是より先き勳三等に叙せらる其他御物の賜受枚舉に遑あらず廿七年一月四日特旨正四位に叙せられ同日を以て卒す

ツダ　アイノスケ　津田愛之助　勤王の志士なり藩は政信通稱初め權藏といひ後に愛之助と改む肥前國基肆郡田代町に生る藩主宗氏に召されて家祿八石を食む元治元年甲子四月藩命に依り周防三田尻に同六月同藩の忠勇隊に列し東上して十九日の繼蹕司家の門前に於て戰ひの海濱に至る暴風船を漂し翌年五月初て雲山ある の地方に漂着す上陸して逃み六月五日に至て人類に遇ふ皆柔和にして信あり北米の露領オンデレイツケと稱する地なり此に止まり養ほゝこと一周年寛政七年の春露船長ガラロウが船をカムサツカに回航するに會ひ之に助けられて海路三千八百七十露里を航し六月廿八日オコーツクに着す八月十八日より翌七年七月三日まで逐次鼓を發して イルクツクに至り伊勢の漂民にして歸化せる新藏に會し又漂民幸太夫を護送して日本に到りたる通辨官ゴロロフに會す露政府の爲に養はれて愛に止り又自ら力作して八年を經過す享和三年露帝一行を京に召す五月入て明石藩に於て漂民幸太夫を護送せり其年十月露帝及撫政皇太后カタリーン二世に謁し物を賜ふ太后曰く國に歸らんと欲する者は告げよと津太夫儀平左平太十郎の四人歸らんと曰ひ六人留らんと云ふ太后殊に歸らんと願ふ者を優遇す六月十三日クロンスタットを發しレサノツトの司命に係るナデシダ號に搭してコツペンハーゲ英國カナリー南米巴四を經て翌年夏マルケサス布哇等に寄港し勘察加を經て九月六日長崎の硫黃島に着すレサノツト奉行に會して漂流民を交付し交易通商を請ふ時に鎖國の嚴盛に日本に行はれて之を許すの期至らず（環海紀聞）

ツダ　エイザウ　津田永三　狩野派の畫人にして狩野主信の門人なり（扶桑畫人傳）

ツタガキウチ　カタヨカヒロミツ　蔦垣內カタヨカヒロミツ　津田閑齋「イマキトウケ

唱へ千葉縣下調井戸の原野開墾に從事したり三十八年六月二日病歿す年七十四爲人風貌嚴勵威嚴自ら持し抱負頗る大爲めに元老間に忌憚せられ世に容れられず然れども理財の才に長じ藩の執政中紀州家の資產を增殖し自家亦十萬の富を成せり晝和歌山藩出身の人才は皆其門下生にして陸奥宗光伯の如きは其高足なり病危篤の旨天聽に達するや特旨を以て位一級を進め從二位に叙し勳一等瑞寶章を賜ふ

ツダイフ　津太夫　露國に漂流せし漁夫なり陸奥國石の卷の漁夫にして船頭平兵衛の屋ふ所となり寛政五年十一月儀平左平其他十一名と木材繰米等を帆船若宮丸に積み江戸に回航せんとす石の卷を發し岩城の海濱に至る暴風船を漂し翌年五月初て雲山ある の地方に漂着す上陸して逃み六月五日に至て人類に遇ふ皆柔和にして信あり北米の露領オンデレイツケと稱する地なり此に止まり養ほゝこと一周年寛政七年の春露船長ガラロウが船をカムサツカに回航するに會ひ之に助けられて海路三千八百七十露里を航し六月廿八日オコーツクに着す八月十八日より翌七年七月三日まで逐次鼓を發して イルクツクに至り伊勢の漂民にして歸化せる新藏に會し又漂民幸太夫を護送して日本に到りたる通辨官ゴロロフに會す露政府の爲に養はれて愛に止り又自ら力作して八年を經過す享和三年露帝一行を京に召す五月入て明石藩に於て漂民幸太夫を護送せり其年十月露帝及撫政皇太后カタリーン二世に謁し物を賜ふ太后曰く國に歸らんと欲する者は告げよと津太夫儀平左平太十郎の四人歸らんと曰ひ六人留らんと云ふ太后殊に歸らんと願ふ者を優遇す六月十三日クロンスタットを發しレサノツトの司命に係るナデシダ號に搭してコツペンハーゲ英國カナリー南米巴四を經て翌年夏マルケサス布哇等に寄港し勘察加を經て九月六日長崎の硫黃島に着すレサノツト奉行に會して漂流民を交付し交易通商を請ふ時に鎖國の嚴盛に日本に行はれて之を許すの期至らず（環海紀聞）

ツダ　エイザウ　津田永三　狩野派の畫人にして狩野主信の門人なり（扶桑畫人傳）

ツタガキウチ　カタヨカヒロミツ　蔦垣內カタヨカヒロミツ　津田閑齋「イマキトウケ

ツタカラマル　葛唐丸　戯作者にして狂歌を善くす葛屋重三郎と號す初吉原大門の傍に住して細見記を繙くに柯理耕書堂

り越後流の兵學を修む尋いて父に請ひて家嗣を實弟鐵治郎に讓り東上して箕作玩甫の門に關學を佐久間象山に洋式兵法を學ぶ次で伊藤玄朴の塾に入る後津山藩の軍事方と爲り須臾にして藩籍を脫し再び江戸に遊び大久保一翁勝安芳等の知遇を受け幕府に徵されて蕃書調所に出仕す文久三年幕命を奉じて和蘭に就し法政學を研究す在留二年餘歸朝後開成所教授と爲る泰西國法論を譯し後表書提要を譯述す是を西洋法論及び統計學書出版の嚆矢とす幕府政權を奉還するに際し頑迷の徒不穩の擧あり眞道目付役を以て往て其非を諭す明治元年靜岡藩大目付となり翌年徵されて刑法官權判事兼議事取調を命ぜられ次で制度寮准撰修刑律取調事務として新律綱領の編纂に從事す四年中刑事兼外務權大丞に任ず同年條約改正に關し外務卿伊達宗城特命全權公使を以て清國に赴くや眞道之が副使たり爾來司法中刑事大法官等に歷任し民法治罪法取調事務に與る六年陸軍四等出仕となり陸軍刑法及び治罪法編纂に從事す九年元老院議官に任じ從四位勳三等に陞叙し旭日中綬章を賜ふ是より先き彝有禮等と圖り明六社を興し法制學の振興を計る十二年東京學士會院會員に擧げらる二十三年東京府第八區選出衆議院議員と爲り同年十月錦鳥間祗候仰付けられ次で衆議院副議長に任ぜらる二十九年貴族院議員に勅任せられ三十三年五月勳功を以て特に華族に列し男爵を授けられ正三位勳二等に叙せらる三十五年法學博士の學位を受領したり三十六年八月特旨を以て位一級を進めて從二位に叙し勳一等瑞寶章を授けらる九月三日薨ず年七十五谷中墓地に葬る

ツチカド　ゲンジラウ　土門源次郎　茶人なり古市澄胤に學びて茶道を能くし南都に住せり其の先は松永氏後松の屋と改め後土門氏の姓を賜ふ明應七年九月十八日卒す年六十七（茶人系傳全集）

ツチカド　ゲンノジョウ　土門源之丞　茶人なり南都に住す古市澄胤の門人なり（茶人系傳全集）

ツチカハ　シャウザウ　土川省三　陸軍歩兵大尉なり愛知縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第三師團歩兵第十八聯隊附として從軍中廿七年十月十二日清國盛京省英得牛嶺戰鬪の際負傷同日斃靈

子第三師團第三野戰病院に於て死去す戰功に依り勳五等功五級に叙せらる

ツチカハ　ヘイベエ　土川平兵衛　義民なり江州野洲郡三上村に鎭坐する御上明神の神戸の士なり里正となり守山驛助郷勤番たり中江藤樹の人となり慕ひ躬行實踐を主とす時に助郷賦役の負擔大藩の領民に輕く小藩及び旗下の領地に重し平兵衛其の不公平を慨して文政十一年五月之を道中奉行に訴へ其の弊を改む天保二年公命あり新開の田は更に畝歩を檢し賦課を改定すべしと幕吏市野茂三郎來りて地を測る而して新開の田のみならず舊田を檢するに五尺八寸の尺度を用ひ剩餘と稱して削去る所の田各家多少あり平兵衛乃ち黃瀨文吉田島治兵衛と謀り三郡の庄屋を糾合して願書を製し三上村の市野が旅宿に詣り哀訴す其の勢一萬餘人此地の領主は遠藤但馬守なり其家老平野八右衛門出でゝ之を拒が為めに平兵衛其の不公平を慨して文政十一年五月之を道中奉行に訴へ其の弊を改む天保二年公命あり新開の田は更に畝歩を檢し賦課を改定すべしと幕吏市野茂三郎來りて地を測る而して新開の田のみならず舊田を檢するに五尺八寸の尺度を用ひ剩餘と稱して削去る所の田各家多少あり平兵衛乃ち黃瀨文吉田島治兵衛と謀り三郡の庄屋を糾合して願書を製し三上村の市野が旅宿に詣り哀訴す其の勢一萬餘人此地の領主は遠藤但馬守なり其家老平野八右衛門出でゝ之を拒が為めに非ず但し民衆の為めに非ず但し平兵衛は之を殺さんとす平野八右衛門曰く敢て他意ある

於て讓備役より召集せられ第八師團歩兵第十七聯隊附として從軍中卅八年一月廿八日清國盛京省黑溝臺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ツチヤ　トウウンサイ　土屋東雲齋　名は正琛金工なり佐吉と稱す東雲齋は其號初め菊川氏の門に入り後ち安親に學ぶ江戸淺草に住す（古今金工便覽）

ツチヤ　トツサイ　土屋訥齋　江戸の儒者なり名は辨愛字は士明一字は反求寛政五年七月歿す高田亮潮院に葬る（江戸名家墓所一覽）

ツチヤ　ナホムラ　土屋直村　武田氏の臣なり初め金丸と稱し後ち治右衛門尉と稱す信玄に仕て小姓たり信玄の死するや直村追悼して已まず進て殉死せんと請ふ高坂彈正慰諭して之を止め事遂に已む後ち長篠の役に同僚等皆事のなすべからざるを度りて戰死す直村亦た意を討死に決し其の兵を率ゐ高く呼びて曰く今より三年の前已に殉死して命を墜すべかりしに恨むらくは高坂氏の爲めに遮られて事遂に已みぬ今や時機至れり快よく戰死して君恩を地下に報いんと欲すと敵此に因りて始めて信玄の死を知ると云ふ既にして織田の軍銃を放つこと雨の如し直村之を侵して櫓を越え進みて第二柵に及ぶ銃丸を破むること數箇屈すず遂に柵を破る時に砲聲激發銃丸其の胸を貫く直村柵に倚りて死す年三十一家康天下を統一して後ち其子孫を求めて祿せんとす辭して就かずと（本朝武功正傳）

ツチヤ　マサナホ　土屋政直　遠州流の茶人なり初め左門と稱し後能登守に任じ又相模守に任ず從四位侍從に任ず小堀政一の門人俊翁道害と號す享保七年十一月十六日卒す年八十二（古今茶人系譜）

ツチヤマ　タクエイ　土山澤暎　眞宗四本願寺派の連枝高德なり曾て四本願寺執行長たりしが後富山縣伏木勝興寺住職となり明治三十九年一月二十四日示寂す年六十二

ツチヤ　マタザウ　土屋又藏　幼名貫松と稱し父を久右衛門と云ふ世々莊內侯に仕ふ久右衛門子なし堀才藏を養ひ女を配して嗣となす妻四子を生む長は萬次郎次は則ち又藏醫なり久米益庵に學ぶ萬次郎酒を嗜みて無賴なり父殺するに及び益々放肆才藏之を一室に幽す患ると甚し又藏每に之を慰諭し一日來り訪ふ時に傍ら人なし泣きて之に語て曰く彼の夫妻性慘酷素より吾が儕を厭惡し吾が小過を執りて口を藉り遂に之を死地に置く亦汝に及ばんとす壹人ぞ吾を助け出だして與に俱に江戸に赴き以て一身を立てず於て又藏曰く衣物を寶り旅費となし一夜風雨に乘じて逃る萬次郎酒を喫し驛妓を買ひ宇都宮に至ると是に於て又藏に及びて豪已に空し因て曰く意ふに吾過てり吾將に國に還り貧を借り來らんと庄內近郊音無村に往き吾を待て金を借らんとす庄吉之を肯んぜず乃ち竊かに之を才藏に告ぐ才藏亦子なし黑谷丑藏を養ひて嗣となす萬次郎之を見て愕き逃せんとす二人溫言慰藉して携へ歸り黃昏を待て往く林盡き川に及ぶ日已に沒す萬次郎二人を水中に投ぜんとす丑藏身を飜し之を擊つ萬次郎滑り倒る丑藏之を刺し三藏擊ちて之を殺す時に文化元年五月十六日なり又藏江戸にあり萬次郎の來らざるを怪み明年春竊かに乳母を井岡村に訪ひ丑藏の兄を殺すの狀を詳問し憤泣墓に謁し誓て曰く吾れ必ず兄の讐を復せんと再び江戸に抵り身を御徒士頭小笠原重右衛門に寶り奴となる重右衛門刀法を善す學ばんことを請ふ又藏形軀眇小風貌凡陋重右衛門試みに之を敎ふ果して鈍劣偶人の如し業大に笑ふ又藏心を凝し精を碎き殆ど寢食を忘る居ること四年技終に大に進む重右衛門奇愛し擢げて士となす一日拜謝して曰く家人母の病を報ず請ふ幸に暇を賜へと僉然涙を含みて去る既にして再び來て曰く不幸母歿す願くは前業を畢へんと復學ぶと二年勤苦往日に倍し藝益々進む是に於て實を告げて曰く昔還て仇を狙ふ戒備甚だ嚴且つ刀法超絕恐くは敵し難からんと故を以て再び學ぶ意ふに今則ち可ならん唯々生死期す可らず洪恩の報ずるなきを悲むと涙下る重右衛門手を拍て曰く嗟是あるかな精誠の積む所鬼神冥贊す吾必ず汝の能く仇を報ずるを知ると因て刀一口を取て之に與ふ遂に路に上り乳母の家に投じて動靜を探る時に才藏江戸に役し丑藏留守す明日祖父の忌辰を以て墓に展せんとす墓は鍛冶街總穆寺に在り又藏之れを躁知し欣舞して曰く豈に父兄の靈誘ひて以つて讐を復せしむるにあらずやと拂曉墓に至り香を炷き之を待つ少くして丑藏至る奮躍呼びて曰く我は貫松なり汝曾て我が兄を害す今之を報ぜんとすと丑藏從容として曰く吾の萬次郎に於ける恩なく恨みなし但く彼吾を刺さんとす三藏擊ちて之を殺す仇は則ち三藏なり然れども吾を以て仇となさば吾に於て何ぞ逃れんと乃ち刄を拔て直立す丑藏軀幹長大又藏を視る鷗の燕雀を攫み虎の犬羊を制するの勢あり又藏奮迅勇鬪數合々創數十を被る渾身朱に染む事城中に達す歩卒一隊馳せ至る又藏曰く兄の讐を復するなり請ふ還して之を護れと丑藏又藏之を護れ急に之を拂ふ深く隙に入る又藏亦た刺し各々瘡を決して瞠視す氣息將に絕えんとす又藏曰く相刺して死す如何曰く可なりと互に刺して絕す統を閲するに又藏二十四丑藏二十二と時に文化八年九月二十二日なり（傳記）

ツチヤ　ムネトホ　土屋宗遠　土肥實平の第相模士屋に居る因て士屋三郎と稱す初め頼朝の下總に至るや將に關東諸國の兵を發し駿河に至り平氏を待んとし宗遠を甲斐に遣し武田信義一條忠頼を諭して北條時政に從ひて黃瀨川に會せしむ信義等命に應ず宗遠義經に從ひて平氏を擊つ承元中私怨を以て槻原家茂を殺して幕府に自首し和田義盛の許に因へらる既にして實朝に訴ふ實朝謂へらく請ふ所理なしと然れども頼朝の忌日に值ふを以て赦さる（大日本史）

ツチヤ　ヤスチカ　土屋安親　有名の金工なり奈良風三傑の一と稱せらる（奈良利壽及び杉浦乘意を云ふ）羽州庄內の人彌八と稱し東雨と號す初の名は安信江戸神田龍閑町に住す奈良長政の門人なり延享元年九月二十七日歿す年七十五（古今金工便覽）

ツチヤ　ヨシキヨ　土屋義清　岡崎義實の子なり叔父土屋宗遠の爲めに子として養はる小二郎と稱す平氏に事へて京師に在り頼朝兵を起すと聞き竊に關東に赴く會々宗遠甲斐に使して夜足柄山に相遇ふ父子相得て甚だ悅び從て甲斐に至り遂に府に仕て大學權助に任ぜらる和田義盛の亂に義清之に黨して幕府を攻め朝比奈義秀古郡保忠と聯騎奮戰して勇軍中に冠たり府墓に展せんとす墓は鍛冶街總穆寺に在り又藏之れを躁知し欣舞して曰く豈に父兄の靈誘ひて以つて讐を復せす義盛の兵復た振ふ能はずして遂に敗る（大日本史）

ツチヤ　ランシウ　土屋藍洲　小倉侯の儒醫なり名は昌英字は伯暉、藍洲は其の號、豐前中津の人、江戸に來りて儒を物徂徠に學び詞章を以て稱せらる延岡侯に仕ふ（近世叢話）

ツチヤ　リウエモン　土屋龍右衛門　大島流の槍術家なり大島高賢に學び以心と號す子雲九郎業を繼ぐ（武術流祖錄）

ツヂキ　テツイチ　都築徹一　陸軍騎兵少尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て後備第一師團騎兵隊附として從軍中卅八年三月五日清國盛京省北大嶺に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ツツキノミヤニ　アメノシタ　シロシメシシ　スメラミコト　筒城宮御宇天皇「ケイタイテンワウ」

ツツミ　アサカゼ　堤朝風　江戸の和學者なり通稱三五郎幕府の賄組頭を勤仕す鈴屋の門にして古學を修し平田篤胤と交友尤も善し天保五年四月歿す年七十（鑒定便覽）

ツツミ　カクイチ　堤角一　陸軍歩兵少尉なり長崎縣東彼杵郡の人明治三十七年二月陸軍士官學校を出て歩兵少尉となる日露戰役起るや出征の命を蒙り韓國に渡航し歩兵第二十四聯隊附として黑木軍に屬し漸次北進して五月一日九連城總攻擊に參加し苦戰甚力めたりしが遂に敵彈に中つて斃る年二十二戰功により勳六等功五級に叙せらる

ツツミ　タケヲ　堤武雄　陸軍騎兵大尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第二師團附長廠附として從軍中卅八年五月六日清國盛京省遼陽に於て乘馬調教の際負傷し後餘病を發し軍馬補充部三本木支部へ復歸服務中病症再發の爲め精神異狀を來し同七月廿七日自殺す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ツツミ　タザン　塘它山　越前大野藩の儒者なり名は公愼俗稱鴻之佐一に雅松亭と號す壯歲の時藩の執政の暴く遇せざるか慍り仕を辭し妻子か擧げて江戸に至り大田錦城の門に入る これより學業大に進み博渉を以て稱せらる人となり才氣あり後姬路侯酒井氏に仕へて若干偏を貪み ぬ嘉永二年二月四日歿す年六十七著す所棠駝考、孝經改觀、清齋錄、讀論語集註、莊子全解、藝餘詹言、韓非子論解、白鹿洞學規發揮、儒辯あり（大田才次郎氏報）

ツツミ　チユウナゴン　堤中納言「フヂハラカネスケ」

ツツミ　チユキ　堤千之　陸軍軍醫副なり日熊本、山口、福岡縣賊徒追討の役に戰死す

ツツミ　トウリン　堤等琳「トウリン」

ツツミ　ハングワン　堤判官「タイラトモツネ」

ツツミ　ハウザン　堤賓山　賓山流捕術の祖なり寢山は其名下野芳賀郡の守護職にして山城守と稱す檢、刀、捕術に通ず元祿中の人（武術流祖錄）

ツツミ　マツエモン　堤松右衛門　勤王の志士なり諱は義次と云ふ兼て尊王攘夷の志篤く同藩宮部鼎藏等と與に王事に奔走し文久二年江戸に來り同藩横平四郎が幕吏の勢焰を煽ぎて朝旨を妨ぐるを傳聞し憤懣に禁へず友人安田喜助黑瀨一郎と相謀り平四郎を襲ひしに遂に成らず後京都に上り長州邸に寄寓すると數月にして遂に成らず後京都に上り長州邸に寄寓すると數月にして びしが後大日山に上り自ら屠腹して果つ時に年二十五（殉難錄稿）

ツツミ　ミヨキチ　堤三代吉　陸軍歩兵少尉なり茨城縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第一師團歩兵第一聯隊附として從軍中卅七年十一月二十八日旅順要塞攻撃の際負傷同二十九日大東溝第一師團第一野戰病院に於て死去す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

ツツキ　キジユウ　筒井紀充　河內の鍛工なり越中守包國の子初代吉道の門人越中守輝邦と曰ひ紀充と號す又た大和郡山に住せしとありと享保中の人なり（新刀辨疑）

ツツキ　サダツグ　筒井定次　筒井順國の子なり母は順慶の妹幼名四郎元龜二年順慶養ひて子となす天正十二年嗣ぐ十三年正月封を伊賀に徙され城勢二州の田七萬石を加へ上野城に居り十二萬石を領す三月堀秀政と根來寺を伐つ曾徒能く拒ぐ定次火箭を射て火藥櫃に中つ人畜皆死し諸寨悉潰ゆ七月徒四位下に叙し侍從に任じ伊賀守を兼ね慶長庚子の秋德川氏に從ひ上杉景勝を奧州に討つ上國軍起るに及び命を受けて國に還らんとす大阪の兵之を拒みて入るを得ず岐阜城を攻て之を拔き前みて關原に戰ひ大に功あり十一月封國を復す慶長十三年四月定次酒色に耽り嬖人大野道見と狎寢す人之を訴ふ遂に伊豫に流され舊臣を擇みて之に祿す元和元年三月定次に死を賜ふ定次織田氏を襲ひ順定を生む順定の子藤太郎父と同く流され同日死を賜ふ（野史）

ツツキ　サダヨシ　筒井定慶　主殿助と稱す第慶之と昔順慶が族子なり定次亡びて後德川氏其の後なきを憐み求て定慶を大和に得山邊郡の地四千石を賜ひ權りに郡山城を領し岡崎の士卅六人を附す元和元年四月大阪の兵再び起る國人多く大阪の募に應ず大野治長以て響導とし火を縱て南都九條を掠む定慶畏れ城を棄てゝ遁る東師至ると聞き定慶慶之と與を恐れて自殺す（野史）

ツツキ　ジヤウメウ　筒井淨妙　三井寺の僧なり名は明眷、治承四年五月二十六日宇治の戰に淨妙黑糸縅の甲を提し三尺五寸の長刀を帶び陣頭に進み衆を呼んで矢を放つを止めしめ橋桁を踏んで其の中央に至り敵箭の襲至する中に立つて廿四箭を放ち敵十二人を殺し十一人を傷け乃ち弓を投じ薙刀を把て進み敵九人を殺し六人を傷け大刀折るるを以て七人を殺し六人を傷け大刀折るるを以て七人を殺しみれば六十三箭身に蝟るゝ之を抽て創に灸し弓を杖つき高展を穿ちて奈良に去る（源平盛衰記）

ツツキ　ジユンケイ　筒井順慶　姓は藤原氏、遠祖順快興福寺に居て因て之れを氏とす順快の子順永郡色を鑒貪し始めて筒井に城く子孫皆世襲官位を受く而して平戈に從事す足利氏の季世國亂る順慶の祖順昭土寇を平げ地境を拓延して以て自から封ず父順政（一說に順慶は順昭の子と）其の後を承く順政卒して順慶家を嗣ぎ六三郎と稱す初の名は藤政

或は藤勝と曰ふ年猶幼なり國人或は叛て松永久秀に屬す永祿八年十二月筒井を去りて布施城に徙る順慶膽略あり郡邑を略す織田信長久秀をして筒井を伐たしむ十二年三月順慶之と戰ふ元龜二年八月再び筒井に入る天正二年七月筒井を復す三年久秀子久通と順慶に降を乞ふ天正二年七月子定次を信長に送り質となす三年二月信長女を以て之に妻す四年四月順慶大阪を攻て勝たず五年七月久秀信長に叛く順慶謀て兵を久秀が信貴城中に入れ内外夾み攻む久秀自殺す信長大和を以て順慶を封ず九年九月信長に從ひ伊賀を伐ち又た從て甲斐を討つ十年三月信長の弑せらるゝや順慶人を遣り光秀を援しむ秀吉東上すと聞き兵を還す光秀使を馳せ贈慶に餌するに紀泉和三州を以てす順慶之に應ぜんとす島松倉固く諫む乃ち光秀を欺くに順慶疾に歟すと稱し兵を併せ島等をして秀吉の爲に八幡に屯せしめ而して自ら兵を率ゐ秀吉に應ぜず山崎の役功多し秀吉之が二心を憎み賞を加へず人呼て日和見順慶と云ふ十一年五月秀吉に從ひ瀧川一益を攻む二月賤嶽に從ふ十二年五月長島の役にあり疾を發して歸り遂に卒す年三十六瑞舜坊法印と號す子なし姪定次を養ひて嗣となす（野史）

ツツキ　テイジラウ　筒井貞次郎　陸軍歩兵中尉なり兵庫縣出身にして明治廿七八年日露戰役に際し軍備役より召集せられ第十師團歩兵第三十九聯隊附として從軍中廿七年十月十二日清國盛京省三塊石山戰鬪の際負傷同廿三日遼陽兵站病院に於て死去す

ツツキ　マサノリ　筒井政憲　字は子恒號溪と號す通稱は左馬助後左治右衛門と改む任官の後伊賀守紀伊守肥前守等歷て改むる所あり父を左膳といふ政憲實は旗下の名家久世三四郎廣景の子にして母は内藤越前守の女なり年二十餘にして筒井氏に螟蛉たり曾て歷て夜遊して晩く歸るとあり親戚左膳を慫慂して之を離間せしめんとす左膳聽かずして曰く彼夜遊して檢束なきが如しと雖も歸れば則燈を點じて讀書且に徹す未嘗に去るべからざるなりと寛政某の年試に應じて甲科に中り尋いで書院番士となり使番目付を歷て漸く登庸せらる文政四年南町奉行に任ぜられ其の訟へを聽く公正明決なるを以て職に在ること二十一年の久しきに亟れり文政の末評定所に於て近藤守重の獄あり北町奉行榊原主計頭能吏を以て聞え其の坐に列す然れども守重個強雄辯父子相庇護し主計頭動もすれば口塞がり數重相識る故を以て人其の處決し難きを危む政憲始めて廷に臨む守重氣を作し抗辯せんと欲す而して政憲先づ舊を叙し漸く世事に移る守重氣稍〻挫け徐に獄辭を陳ぶ政憲曰はくなぜんやと守重心竊に其の極刑に措かれざるを覺り寛に首服す天保八年仙石騷動の時神谷轉を抽へし銅せらるゝや政憲進某を以て罷けられしが後定謙授して其の寃白するに及び官其の子を誅し政憲を西丸留守居に任ず嘉永六年秋曾國水師提督布恬延長崎に來り通商定界の事を乞ふ時に慎德公薨じ上下畏懼す是に於て官政憲を大目附に任じ勘定奉行川路聖謨と共に全權大使を以て長崎に到らしむ二使布恬延に會し通商は大喪を以て期を延べ定界は彼の樺太全島曾國の所屬なりといへるを反覆辯論し遂に島中に於て界を立てんことを約して去らしめたり是に於て官目附堀利熙を蝦夷に遣はしたるに當時曾國英佛と雖を構へて其の期に違ひ明年冬に至りて布恬延再び至りしかど政憲聖謨之に下田に會して通商を許し而して樺太を雜居の地として以局を結べり二人已に歸り其の意見を官に陳し文化中樺太をむべからざるを論ぜり此の時政憲齢正に七十七歳なき安政六年六月八日（又曰く朔日）を以て卒す年八十二葬てたるを非とし今の計を爲すには決して我が土を縮め戍子常圓寺に葬る男政稽家を嗣ぐ次子下曾根金三郎江川英龍と共に洋砲を高島秋帆に學び後先手頭たり三子政順目を言し嚴住撿校といふ近世平象琵琶の名手たるは人の知る所なり政憲學問富贍最經籍に精し故に其の閑職に在るとき林祭酒故ありて侍講する能はざれば代りて講を進む其の詩世多く傳ふ必しも記さず技に其の狂歌一首を錄す「いぎりすもふらんすも皆里ことば度々來るはいやでありけり」（春亭手稿）

ツトウ　ツナイヘ　津藤「ヒナキ」「カウイサンジン」

ツナイヘ　綱家　相模の刀匠にして天文年間の人なり或は云ふ小田原北條氏の刀匠なりと又云相州の末流にして島田義助の門人明應比の人小田原刀匠の祖なり或は初代綱廣の門人にして平三郎と稱す小田原刀匠の一派享祿天文年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツナイヘ　綱家　村岡氏相模落合村の刀匠にして弘化嘉永年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツナイヘ　綱家　相模落合の刀匠十二世にして弘化元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツナイヘ　綱家　相模落合村の刀匠綱家の子にして嘉永元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツナイヘ　綱家　陸奥仙臺の刀匠にして天正文祿年間の人或は云文保比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツナカゲ　綱景　備前長船の刀匠にして永正年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナコ　綱子　若狹國三方郡四津邑小松原角左衛門の女也同郡刀關茂太夫の家に事ふ明和六年六月十一日年甫めて十四主家の稚兒を負ひて門外に遊ぶ會〻病狐あり狂獅にして走り將に背上の兒を咬まんとす綱子遽て〻己の衣裙を醮へし以て蔽ひて兒を匿して代倒す狐而みて綱子の臂を嚙み更に將に嚙まんとす衆群率る狐乃ち去る衆綱子を載せて將に其の家に送らんとす綱子衆を顧みて曰く主家の兒惡なきかと而して啜ず乃ち送て其の家に到る主家の婢遽て來て安危を問ふ綱子の母稚兒を擁して其の過なきを慶し以て之を託・守護潤井氏憐賞し爲めに碑を四德寺に建て銘して忠烈綱女の墓と曰ふ葬祭三日其の父を召して田園の租調を免ず（野史）

ツナサダ　綱貞　常陸の刀匠にして元龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナサダ　綱貞　石見長濱の刀匠にして應永後の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツナシゲ　綱重　上野の刀匠にして相州綱廣の門人天正年間の人或は云景重の子にして永正比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツナシゲ　綱重　藤原姓陸奥守と稱す陸奥の刀匠にして相州綱廣津輕に在る時の門人寛文年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツナシゲ　綱重　藤原姓加賀守と稱す元祿年間の刀匠にして國詳ならず（古今鍛冶銘早見出）

ツナシマ　エイイチラウ　綱島榮一郎　梁川と號す岡山縣備中國上房郡有漢村の豪農綱島長四郎の長男なり十九歳の時志を立て〻上京し坪内氏に寄食し早稲田專門學校に入り卒業の後擢でられて雜誌早稲田文學の編輯員となる明治廿九年中肺患に罹り病を神戸諏訪山に養ふ卅年四月歸京して暫く雜誌日本教育の編輯に從事し其後早稲田の講義錄に筆を執りしが三十一年中宿痾再發して以來全く病床に臥すること約十年終に四十年十月十四日を以て長逝す年三十五其著書として主なるものは西洋倫理學史快樂派倫理學說梁川文集病間錄回光錄等にして晚年ルレンの耶蘇傳譯譯に筆を染めしが遂に果さず

ツナスケ　綱助　樋口氏保則の子にして水心子正秀の門人享和年間の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツナトシ　綱俊　加藤氏出羽米澤の刀匠にして天保年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナトシ　綱俊　越前下坂派の刀匠にして寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナトシ　綱俊　下村源二郎と稱す土佐の刀匠にして嘉永安政年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツナトシ　綱俊　下村源太郎と稱す土佐の刀匠にして安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツナナガ　綱長　下坂氏越前の刀匠にして天和年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナノブ　綱信　出羽米澤の刀匠にして天保年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナハル　綱晴　片倉氏出羽米澤の刀匠にして元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツナヒサ　綱久　石見長濱の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナヒロ　綱廣　源姓近江守と稱す山城の刀匠にして元祿年間の人伊勢の吉廣と同人なりと云ふ（古今鍛冶銘早見出）

ツナヒロ　綱廣　相模の刀匠にして綱光の子元弘年間の人なり（本朝鍛冶考）

ツナヒロ　綱廣　山村氏法名連向相摸の刀匠にして天文年間の人なり或は云ふ初名正廣小田原北條氏の刀匠にして氏綱より一字を授けられ綱廣に改め對馬守に拜す永正享祿年間の人と又云綱家の子なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツナヒロ　綱廣　陸奥仙臺氣仙の刀匠にして元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツナヒロ　綱廣　藤原姓下坂氏越前の刀匠にして寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナヒロ　綱廣　傳右衛門尉と稱す紀伊石堂派の刀匠にして延寶年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナフサ　綱房　橋吾と稱す江戸本郷霧川宿の刀匠にして元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツナフサ　綱房　初名兼定古川孫四郎と稱す陸奥會津の人にして藩生氏の刀匠なり慶長中藩生氏の命に因り名を改むと云（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツナフサ　綱英　出羽米澤の藩士にして江戸に住す文化年間の人治刀を善くす（古今鍛冶銘早見出）

ツナミツ　綱光　相模鎌倉の刀匠にして行光の門人後正宗の門に入る正和年間の人或は云弘安比の人なりと又云正宗老後の名なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツナミツ　綱光　相模の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナミネ　綱宗　相模の刀匠にして文安年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナムネ　綱宗　相模の刀匠にして文明年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナムネ　綱宗　亦總宗に作る相模小田原北條氏の刀匠にして綱家の門人天文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツナムネ　綱宗　伊達氏仙臺の藩主なり從四位下少將に叙し陸奥守と稱す政宗の孫にして忠宗の子なり寛文年間の人鍛刀を好み常に刀匠安倫を對手となすと云ふ（古今鍛冶銘早見出）

ツナヨシ　綱吉　攝津の刀匠にして寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナヨシ　綱吉　常陸の刀匠にして元龜年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナヨシ　綱能　了戒と冒稱す山城の刀匠にして天文年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツナヨシ　綱慶　源姓五兵衛と稱す肥前唐津の刀匠にして後ち安藝廣島城下中島に住す寛文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツヌエ　エマロ　角兄麻呂　養老中六位を授て從五位下に叙せられ詔して絁十匹絲十絇布二十端鍬二十口を賜ふ蓋し學業を奬勵するなり神龜元年姓羽林連を賜ひ丹後守に任ぜらる是の年罪を以て流に處せら

る兄麻呂和歌を善くす詠歌は載て萬葉集に在り（萬葉集作者履歴）

ツヌガノシロシメシシ　ケヒノミヤニスメラミコト　アメノシタ
飯宮御宇天皇「チュウアイテンワウ」角鹿筒
ツヌグヒノカミ　角鐵神　沙土賣神に次ぎて生れたる男神なり（古事記）

ツネ　恒　備中青江の刀匠三世恒次を着よ

ツネアキラ　シンワウ　恒明親王　龜山帝の第七の皇子なり一品式部卿に任じ常盤井宮と號す正平六年九月六日薨ず（皇胤紹運錄）

ツネアツ　シンワウ　毎敦親王　後陽成帝の第五子なり母は典侍藤原輝子慶長七年十月生る十二年三月大覺寺に入り十八年三月親王となる十九年十二月剃髪して義性法親王の弟子となり名を尊性と改む元和七年二月一品に叙し法務となる八年四月灌頂す寛永十二年四月東寺の長吏となる慶安四年三月薨ず年五十佛母心院と號し長尾山の麓に葬む（野史）

ツネイヘ　經家　備前畠田派の刀匠にして正應年間の人或は云二世守家の子なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツネイヘ　經家　備前長船の刀匠にして應安年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネイヘ　經家　備前長船の刀匠にして應永正長年間の人或は云光久の子にして應永比の人なりと又云明德應永年間の人にして彌次郎と稱すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツネイヘ　經家　備前長船の刀匠にして永享應仁年間の人或は云上の經家の子にして嘉吉文安年間の人又云永享文明年間の人にして上の經家二世と爲す三世經家は長享永正年間の人にして亦長船に住すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツネイヘ　常家　備前の刀匠にして正長年間の人或は云ふ長船に住すと（古今鍛冶銘早見出）

ツネイヘ　恒家　備前長船の刀匠にして文明永正年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネイヘ　恒家　備中の刀匠にして寶治年間の人或は云正恒の流にして仁治比の人なりと又云正恒の門人にして建暦承久年間の人なりと（古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツネウヂ　恒氏　備前長船の刀匠にして貞和延文年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツネカズ　シンワウ　常賢親王　後水尾帝の第十二子なり慶安二年四月生る登美宮と稱す明暦四年六月親王となり一乘院に入る萬治二年四月剃髪して名を信敬と改め後又眞敬と改む尊覺入道親王の弟子となる寛文四年十一月緇摩大會に堅議遠講し興福寺の主務となる五月三日大會講師興福寺の別當となり清水寺別當に補す尋で二品に叙せらる元祿十四年五月復た興福寺別當に補す寶永三年七月薨ず年五十八、三菩提院と號し興福寺に葬る親王書を學びて之れを善くす（野史）

ツネカタ　シンワウ　常賢親王　後水尾帝の第十二子なり慶安二年四月生る登美宮と稱す明暦四年六月親王となり一乘院に入る萬治二年四月剃髪して名を信敬と改め後又眞敬と改む尊覺入道親王の弟子となる寛文四年十一月緇摩大會に堅議遠講し興福寺の主務となる五月三日大會講師興福寺の別當となり清水寺別當に補す尋で二品に叙せらる元祿十四年五月復た興福寺別當に補す寶永三年七月薨ず年五十八、三菩提院と號し興福寺に葬る親王書を學びて之れを善くす（野史）

ツネカハ　キカウ　恒河唯江　名は儘字は子健竹陰と號す通稱唯江世〻近江淸藩士なり資性聰明好んで書を讀みて江戸祇役の時佐藤榭書院に謁するに保癸酉の歳吉村秋陽の近江に遊び藤榭書院に謁するに當り始めて交を結ぶ初め藩儒八田頁介に就いて仁齋の學を修む後一齋の說に及んで頗る說を變せり眷て眷日澤菴の姚口を宗旨とするを聞き始めて門を叩き て教を乞ふ澤菴辭して曰く終身道を學ばんと欲する者にあらざれば業を授くる能ざるなりと唯江終日去らず是に於て之を許可せり是より往來講學怠らず高足河野靜山鬼頭忠純岡田吾等と相共に切磋講究す唯江の妹なり藩主唯江を用ゐて諸職に試み將に執政たらしめんとしたりしが安政二年二月廿二日病を以て江戸芝二葉町分部氏の藩邸に客死す年三十八火葬し此禮を行はしむ其の後八十餘年廢して行なはず今太宗門信士と謚す遺髪を近江大溝の先塋の次に埋む（澤菴先生弟子錄抄）

ツネキ　タチバナツネキ」

ツネキヨ　常樹　常清　和泉の刀匠にして吉廣の子寛治比の人なり（本朝鍛冶考）

ツネキヨ　常清　古刀の鍛工にして和泉に住す或は云ふ加賀四郎派の刀匠にして文安年間の人なりと或は清常の子にして應永比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツネキヨ　常清　備前の刀匠にして應安年間の人或は云永和比の人にして長船に住すと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツネキヨ　恒清　備前の刀匠にして寶治年間の人或は云寛喜比の人にして宗恒の子或は正恒の子なりと又云正恒の流にして貞永比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツネコ　ナイシンワウ　常子內親王　後水尾帝の女にして新齋義門院の生む所なり寛永十九年三月生る級宮と稱し內親王となる寛文四年十一月櫛大納言藤原基照に適して家照を生む元祿十五年八月薨ず年六十一、無上法院淨信香海と號し大德寺に葬る（野史）

ツネサダ　恒貞　備前長船の刀匠にして明德年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネサダ　シンワウ　恒貞親王　淳和天皇の皇子にして母は贈皇后某氏なり恒貞幼にして岐嶷能く經史を讀み頗る文を屬す嵯峨帝之を奇とす仁明帝譚を受け立て〻皇太子とす小野篁、春澄善繩を擇みて東宮學士とす淳和帝崩りに爲めに其の儲貳を辭す仁明帝聽かず恒貞脩て紫震殿に朝す時に九歳嵯峨帝老成人の如し嘗て從容奏して曰く皇太子大學に釋奠すは禮儀なり此の禮久しく廢絶す未だ其の所以を知らずと仁明帝曰く昔天平の末大臣吉備眞備高野天皇に勸めて大學に幸し此禮を行はしむ其の後八十餘年廢して行なはず今太子心に興復を存す甚だ嘉すべし即ち恒貞に勅して百官を率て禮を修めしむ博士經を講じ群僚詩を賦す恒貞亦詩を製す承和五年十一月紫震殿に冠し大に天下に赦す恒貞才慧日に新に深く世事に達す自ら以爲らく皇家嫡に非ずして儲宮に居る若し兩太上天皇崩ぜば禍機測り難しと乃ち眷澄善繩をして表を作らしめ太伯に倣ひて以て賢路を避けんとす而れども許されず七年淳和帝崩ず九年嵯峨太皇崩ず禁くもなく眷宮帶刀伴四岑等反を謀て發覺す恒貞恐れて又表を奉じ位を辭す仁明帝慫慂して曰く雖孚、談逆何ぞ太子に關せん宜く意に介する勿るべしと恒貞猶ほ自ら安んぜず數日飛書あり曰く儲孚の反計は太子の爲めに發すと仁明帝之を信ずず會〻帝暑み冷泉院に避く恒貞之に從ふ帝左近衛少將藤原冀相に勅して近衛四十人を率て太子の直曹を圍みて其の帶刀兵仗を奪はしむ又左衛門權佐藤原岳雄、右馬助佐伯宮成等近衛を率て大納言藤原愛發、中納言藤原吉野、參議文室秋津を縛し分て院中に幽す詔して太子を廢し愛發を京外に擯け吉野を太宰員外帥秋津を出雲員外守に貶す其他配流に處せらる〻者六十餘人橘逸勢、伴健岑亦配流せらる初め官兵太子の直曹を圍むや恒貞憂然和暢し傍人に謂て曰く吾れ非分を以て此の重任を荷ふ竭の崩兆早く自ら之を知る故に數年以來諸君に謝して此の敗に罹らざらんと欲す而れども背離するに忍びず以て憂患を招く豈に天に非ずやと尋で淳和院に監送せらて降りて親王となる恒貞左右を顧みて曰く幸に重負を脫ぜりと乃ち院東の亭子に住す世に亭子親王と稱す是より專ら佛に歸す妃嬪復た進御せず恒貞令聞夙に著はれ天下望を屬す一旦廢黜せらる〻其の罪に非ず朝野之を悲しむ嘉祥二年三品に叙せられ遂に僧となり名を恒寂（一に寂恒とするは誤なり）と改め持戒精進す貞觀三年其の莊園數十所を大覺寺に施し佛像を造り經論を寫して之に安置す初め史傳を奉澄善繩大江音人に五經を中原月雄に後又顯密の要祕を僧眞如道昌に受け皆其の幽奧を究む尤も草隸に妙なり時に兩太上皇書に工みなり論者曰く蟾蜍は勁筋肉に乏し淳和は豐肉軟筋なり雖恒貞は筋肉雙奇肥瘦宜を得たりと又鼓琴を善くし鑒く高橋文室麻呂の曲調を得たり文室麻呂每に曰く曲折宛轉なるものは勤習の功なり敢て以て之を傳へり音律淸雅のもの自然の妙なり誠に及ばざる所なりと初め恒貞八歳の時猶養はれて內裏に在り蟾蜍太上皇其の好音を聞き召して琴を彈ぜしむ因て親ら羽調易水の曲を授く恒貞學び畢りて其の起る所を問ふ太上皇曰く昔日湘嬪燕の太子の爲めに謀りて始皇を刺さんと欲す太子易水に餞す嬪羽聲にて歌て曰く壯士往分不返、匕首振分染匕鐔と慷慨感激、怒髮冠を指し車に跡て去り復反顧なし事竟に成らず嬪死して後人之を七絃に寫す乃ち此曲なりと恒貞曰く此れ正聲に非ず臣學ぶを欲せずと太上皇悅び書を淳和帝に貽りて曰く親王は唯音を知るのみに非ず亦能く言を知ると元慶八年天子位を陽成院に遜る太政大臣基經心を恒貞に屬し左大臣源融右大臣源多を率ゐて翼戴の志を陳ず恒貞泣て曰く內經に王位を厭て佛道に歸するものあり未だ沙門を謝して世榮を貪るものあらず此れ邪緣なりと食はざること數日是に於て光孝帝を奉迎す恒貞慍怒なく念佛讀經の外戲言せず是の年九月薨ず年六十（一に仁和元年九月薨ずに作るは非なり）前一夕沐浴し衣を整へ壇に入り坐禪す明日年後弟子戶を開て之を視れば四向結跏宛も生けるが如し初め恒貞二子を生む皆な才藝あり恒貞と同時に僧となる（大日本史）

ツネザネ　恒眞　山城の刀匠にして寛治比の人なり（古今鍛冶備考）

ツネザネ　恒眞　大和の刀匠にして建武比の人最も雜刀を鍛するに巧なりと云ふ（古今鍛冶銘早見出）

ツネザネ　恒眞　備前の刀匠にして元暦比の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネザネ　恒眞　備前長船の刀匠にして貞治年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネザネ　恒眞　備中青江の刀匠にして守次の子なり承元年間の人或は云建久比の人にして守次の子太郎源太と稱す或は安恒の子にして弘長比の人と又云正恒の流にして太郎源太と稱す弘長比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツネザネ　恒眞　備中の刀匠にして次家の第二子なり天文年間の人或は云片山の一派にして永享比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツネシゲ　常重　源姓笹尾多一郎と稱す播磨明石の刀匠にして安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツネシゲ　ムネヨシ　常澄宗吉　醫者なり河內高安の人安藝の醫師となる元慶三年姓高安宿禰を賜はる（皇國名醫傳）

ツネスエ　恒末　藤原氏遠江の刀匠にして三河中原刀匠の別なり平治年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネスエ　恒末　遠江の刀匠にして元安の子正長永享年間の人或は云恒本の子にして建治比の人なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツネスエ　恒末　古刀の鍛工にして備前に住す或は云ふ永久年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出）

ツネスエ　恒末　備中の刀匠にして歴仁年間の人或は云青江恒永の子にして建治比の人或は初の正恒の子なりと又云正恒の流にして貞永比の人と（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツネタカ　シンワウ　常尹親王　後水尾帝の第十四子なり母は典侍藤原氏慶安四年八月生る英宮と稱す萬治三年七月親王となり八月梶井に入る剃髪して名を盛胤と改め無胤入道親王に從ひて業を受く寛文十三年四月天台座主となる延寶八年六月薨ず、年三十、正法院と號す魚山大原寺に葬る（野史、皇胤紹運錄）

ツネタネ　シンワウ　常胤親王　邦輔親王の子なり永祿七年四月妙法院に入り正親町帝の猶子となり業を嘗尊法親王に受け剃髪す天正三年二月親王となり三品に叙せらる慶長二年四月天台の座主となり元和七年六月薨ず雲龍院と號す和歌を好めり（野史）

ツネツグ　經次　備前長船の刀匠にして應永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネツグ　常次　中島七郎と稱し水關子と號す常陸土浦藩の刀匠にして正次の門人安政元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツネツグ　常次　備中の刀匠にして寶治年間の人或は云ふ左兵衛尉と稱し青江に住すと又云承元比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツネツグ　常次　備中の刀匠にして助植の子正長比の人なり（本朝鍛冶考）

ツネツグ　恒次　左近入道と號す大和千手院の刀匠にして建治年間の人なり或は云ふ由光の初名なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツネツグ　恒次　備前の刀匠にして初代正恒の子長久年間の人なり或は云奧州太郎と稱す長元治暦年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツネツグ　恒次　左近將監と稱す備前の刀匠に

して元享年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネヅグ 恒次 備前長船の刀匠にして應永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネツグ 恒次 備中青江の刀匠にして守次の子承元中の番鍛冶廿四人の一なり備中守に拜す名刀數珠丸の作者なり（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）二世恒次は建暦年間の人備中に住す或は云ふ貞永年間の人と（古今鍛冶銘早見出）三世恒次は弘長年間の人備中に住す一に建長年間とす或は云所作の刀銘恒の一字を題するものありと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツネツグ 恒次 左兵衛尉と稱す備中万壽莊の刀匠にして正和元德年間の人一に左衛門尉に作る或は云行次の子にして正嘉比の人なりと（古今鍛冶銘早出、本朝鍛冶考）

ツネツグ 恒次 備中の刀匠にして觀應年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネトシ 恒利 大和の人にして古刀の鍛工なり或は云ふ千手院に住す元暦年間の人忠香と同人なり又云承仕法師と同人後備前に住すと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツネトシ 恒利 備前長船の刀匠にして應永年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネトホ 經遠 雛波二郎と稱す備前の刀匠元暦前の人なり或は云ふ康平年間の人又云遠近の子にして天仁永久年間の人或は久壽比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツネトホ 經遠 備前長船の刀匠にして應永比の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツネトホ 常遠 一名爲遠山城栗田口の刀匠にして貞永天福年間の人（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考）

ツネトホ 常遠 備中青江の刀匠にして則高の流にして元暦比の門人なり正治年間の人或は云則高の子にして實治比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツネトホ 恒遠 山城の刀匠にして元暦比の人或は云建暦比の人にして洛北市原に住す或は承久比の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツネトホ 恒遠 備前の刀匠にして元暦比の人或は云長船正恒の二子にして奥州二郎と稱す治安延久年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、本朝鍛冶考、古今鍛冶備考）

ツネトミ 常富 皆川恒二郎と稱す武藏の刀匠にして弘化元治年間の人なり（古今鍛冶銘早見出）

ツネナガ 常永 兒玉氏傳助と稱す武藏江戸の刀匠にして水心子正秀の門人寛政文化年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツネナガ 恒永 備中の刀匠にして青江宗恒の子文永年間の人或は云正恒の流にして弘安比の人亦恒長に作る或は恒清の子にして天福比の人或は正恒の門人にして建保承久年間の人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツネナガ 恒永 備中青江派の刀匠にして文保年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツネナガ シンワウ 恒良親王 後醍醐帝の六子にして母は宮人藤原廉子なり初め親王となる元弘元年帝六波羅に幽せらる時に恒良雨て八歳賊其幼なるを以て之を藤原宣明の宅に居く恒良日夜帝を思慕し宣明に謂て曰く開く上は白河郷に在りと何ぞ一たび我を將て往き謁せざると宣明潸然涙を掩ひ曾能因の歌を誦へて曰く白河は陸奥に在り其の地に關あり安んぞ轍く至る可けんと恒良即ち藤原雅經津守國夏の歌を誦して曰く京師に自ら白河あり名は同くして地異なるのみ卿將に我を誑ちんとする耶と偶くまゝに倚りて晉鐘を聞き詠じて曰く「つくづくと眺めて上將軍となり令を下だして兵を召し進みて六波羅を攻め利あらずして男山に退く建武元年立て皇太子となる延元元年帝足利尊氏と和し暦寺より京師に還り恒良を奉じて兵を起し源忠顯に丹波篠村に會す忠顯奉じて恒良を但馬に遷し守護太田守延の家に因ふ三年守延恒盛んに此歌を傳へて涕を下たさゞるものなし北條高時の黨を奉じて攻め來る時に恒良雨て八歳賊其幼なるを以て之を藤原宣明の宅に居く恒良日夜帝を思慕し宣明に謂て曰く開く上は白河郷に在りと何ぞ一たび我を將て往き謁せざると宣明潸然涙を掩ひ曾能因の歌を誦へて曰く白河は陸奥に在り其の地に關あり安んぞ轍く至る可けんと恒良即ち藤原雅經津守國夏の歌を誦して曰く京師に自ら白河あり名は同くして地異なるのみ卿將に我を誑ちんとする耶と偶くまゝに倚りて晉鐘を聞き詠じて曰く「つくづくと眺めくらして入相の鐘の音にも君ぞ戀しき」と是の時都下

出、古今鍛冶備考）

ツネヨシ　シンワウ（ンホウシンワウ）　常嘉親王「ゲウネ

ツネヨリ　常縁「トウツネヨリ」

ツネヨリ　常依　備中青江の刀匠にして常遠の門人建保年間の人或は云正治比の人と又云常遠の弟にして文永比の人或は常遠の二子にして正恒の門人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツノクラ　レウイ「レウイ」　角倉了以「スミノクラ

ツノ　セイシャウ　津野成章　陸軍少佐なり舊長州藩士にして明治十年西南役に於て近衛歩兵第二聯隊第一大隊長として從軍し三月二十二日肥後國山本郡植木村に於て負傷し四月十八日筑後國久留米陸軍病院に於て死す

ツノダ　アウガク　角田櫻岳　儒者なり名は定經一名勃幼名與三郎通稱與市駿河國富士郡大宮の人なり本姓佐野氏與惣右衛門安清十世の孫也四世の祖四郎兵衛角田氏より出づ明治四年改て角田氏と稱す父與市母小永氏櫻岳幼にして學を好み稍〻長じて東遊し朝川善庵の門に入る年十五器識夙に成る大宮町の役員となり後組頭と爲る在職四十年其志利を興し害を除くに在り始終一の如し大宮の屬地に萬野原あり四方轟徙の民集り蕪を闢き荒を墾し困苦萬狀櫻岳之を撫育し施設方あり衆賴りて以て安し後家を築きて之に居る萬農庵と號す衆櫻岳を推して邑長と爲す大宮は本獄麓の通道たり徭役多し而して又吉原驛の役を助く民之に苦しむ櫻岳江戸に往き屢々蠲除を請ふ而して允されず暮相を道に要し輿前に訴ふる者數〻なり二十四年を經て始めて允を得たり實に元治元年也是其成功の最も著るしき者なり嘉永年間外交の事起る東海道往來繹騷雨毎に川溢れ行旅爲めに沮む櫻岳江戸青山より足柄を經て駿遠參の北に出で間道を開き以て之を通ぜんと欲す規畫具に成る而して事故有りて行はれず富獄木湖を洒之を涸らさば則ち田萬頃を得べし測量跡成る亦扞格して行なはれず然れども是皆以て櫻岳の志を見るに足れり晉て地球儀を製して之を水戸烈公に獻ず公之を嘉奬す邦人の地球儀を製する此を始めとす平田篤胤門人新莊道雄駿河風土記料を編纂し之を幕府に上つる而して富士駿河の二郡を缺く櫻岳之を補ふ既に十餘冊を草し未だ成らずして歿す享年五十六

ツネヨリ　常依　備中青江の刀匠にして常遠の門人建保年間の人或は云正治比の人と又云常遠の弟にして文永比の人或は常遠の二子にして正恒の門人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツノクラ　レウイ「レウイ」　角倉了以「スミノクラ

ツノ　セイシャウ　津野成章　陸軍少佐なり舊長州藩士にして明治十年西南役に於て近衛歩兵第二聯隊第一大隊長として從軍し三月二十二日肥後國山本郡植木村に於て負傷し四月十八日歿後國久留米陸軍病院に於て死す

ツノダ　アウガク　角田櫻岳　儒者なり名は定經一名勃幼名與三郎通稱與市駿河國富士郡大宮の人なり本姓佐野氏與惣右衛門安清十世の孫也四世の祖四郎兵衛角田氏より出づ明治四年改て角田氏と稱す父與市母小永氏櫻岳幼にして學を好み稍〻長じて東遊し朝川善庵の門に入る年十五器識夙に成る大宮町の役員となり後組頭と爲る在職四十年其志利を興し害を除くに在り始終一の如し大宮の屬地に萬野原あり四方轟徙の民集り蕪を闢き荒を墾し困苦萬狀櫻岳之を撫育し施設方あり衆賴りて以て安し後家を築きて之に居る萬農庵と號す衆櫻岳を推して邑長と爲す大宮は本獄麓の通道たり徭役多し而して又吉原驛の役を助く民之に苦しむ櫻岳江戸に往き屢々蠲除を請ふ而して允されず暮相を道に要し輿前に訴ふる者數〻なり二十四年を經て始めて允を得たり實に元治元年也是其成功の最も著るしき者なり嘉永年間外交の事起る東海道往來繹騷雨毎に川溢れ行旅爲めに沮む櫻岳江戸青山より足柄を經て駿遠參の北に出で間道を開き以て之を通ぜんと欲す規畫具に成る而して事故有りて行はれず富獄木湖を洒之を涸らさば則ち田萬頃を得べし測量跡成る亦扞格して行なはれず然れども是皆以て櫻岳の志を見るに足れり晉て地球儀を製して之を水戸烈公に獻ず公之を嘉奬す邦人の地球儀を製する此を始めとす平田篤胤門人新莊道雄駿河風土記料を編纂し之を幕府に上つる而して富士駿河の二郡を缺く櫻岳之を補ふ既に十餘冊を草し未だ成らずして歿す享年五十六

ツネヨシ　シンワウ（ンホウシンワウ）　常嘉親王「ゲウネ

ツネヨリ　常縁「トウツネヨリ」

ツネヨリ　常依　備中青江の刀匠にして常遠の門人建保年間の人或は云正治比の人と又云常遠の弟にして文永比の人或は常遠の二子にして正恒の門人なりと（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考、本朝鍛冶考）

ツノクラ　レウイ「レウイ」　角倉了以「スミノクラ

ツノ　セイシャウ　津野成章　陸軍少佐なり舊長州藩士にして明治十年西南役に於て近衛歩兵第二聯隊第一大隊長として從軍し三月二十二日肥後國山本郡植木村に於て負傷し四月十八日歿後國久留米陸軍病院に於て死す

ツノダ　アウガク　角田櫻岳　儒者なり名は定經一名勃幼名與三郎通稱與市駿河國富士郡大宮の人なり本姓佐野氏與惣右衛門安清十世の孫也四世の祖四郎兵衛角田氏より出づ明治四年改て角田氏と稱す父與市母小永氏櫻岳幼にして學を好み稍〻長じて東遊し朝川善庵の門に入る年十五器識夙に成る大宮町の役員となり後組頭と爲る在職四十年其志利を興し害を除くに在り始終一の如し大宮の屬地に萬野原あり四方轟徙の民集り蕪を闢き荒を墾し困苦萬狀櫻岳之を撫育し施設方あり衆賴りて以て安し後家を築きて之に居る萬農庵と號す衆櫻岳を推して邑長と爲す大宮は本獄麓の通道たり徭役多し而して又吉原驛の役を助く民之に苦しむ櫻岳江戸に往き屢々蠲除を請ふ而して允されず暮相を道に要し輿前に訴ふる者數〻なり二十四年を經て始めて允を得たり實に元治元年也是其成功の最も著るしき者なり嘉永年間外交の事起る東海道往來繹騷雨毎に川溢れ行旅爲めに沮む櫻岳江戸青山より足柄を經て駿遠參の北に出で間道を開き以て之を通ぜんと欲す規畫具に成る而して事故有りて行はれず富獄木湖を洒之を涸らさば則ち田萬頃を得べし測量跡成る亦扞格して行なはれず然れども是皆以て櫻岳の志を見るに足れり晉て地球儀を製して之を水戸烈公に獻ず公之を嘉奬す邦人の地球儀を製する此を始めとす平田篤胤門人新

ツノダ　キウクワ　角田九華　儒者なり名は簡字は大可一の字は廉夫才次郎と稱し九華山房と號す實は大阪座更仲島休治の子、幼にして孤なり角田東水の養ひて義子と爲し中井竹山に學ばしむ既にして東水歿す角田氏を繼ぐ由學館内豎となり侍讀より班近習頭に進み祿二百六十石に至る安政二年十二月二十八日歿享年九十有二一年色養懈らず母性花を好む最も牽牛花を愛す櫻岳百方之を樂め五百餘種の多きに至る長男鍬太郎家を嗣ぐ（中村敬宇撰墓銘）

ツノダ　ヨシクニ　角田清溪　江戸の儒者なり名は平、字は公淵、青溪は其の號、平左衛門と稱す江戸の人、片山兼山と友とし善し天明八年四月二十四日歿す青山久保町梅窓寺に葬る著述に古今文同異、毛詩同異、經說考、老莊翼解あり（繼諸家人物誌、鑒定便覽）

ツノダ　トウスキ　角田東水　醫者なり名は一和、東水は其の號、又交誤庵と號す豐後岡の人、世〻藩侯に仕ふ年二十二嗣て馬廻と爲り故ありて家を養子に讓り自ら病と稱して致仕し京都に遊び吉益東洞に學び心を長沙の書に潛む後去りて吉益東洞の門に遊び治方を問ふ後藤艮山香川太冲山脇東洋等の門に遊び寛政九年歿す享年六十五嘗て高野に遊り晩に又た大阪に出づ寛政九年歿す享年六十五嘗て高野に遊り居り醫業の暇に佛書を讀み始めて彼の土の醫方は四大（地水火風を謂ふ）の增減に基くを知る乃ち歎じて曰く其の言は長沙と異にして其意は符合す尤も通曉し易しと是に於て地水火風を以て病を論じ又之を以て傷寒論を解し遂に一家の言を立つ號して醫聖逢原と曰ふ（續近世叢語）

ツノダ　ヒデマツ　角田秀松　海軍中將なり津若松の人なり維新の際舊藩主の命を以て會津の兵百餘人を率ゐて京都に至りしか薩兵と戰ふ後斷然一身を航海に托するに決し某商艦に乘組み專ら運用術を研究す偶〻海軍彌河村純義の知る所となり明治七年十月長崎海軍出張所屬となり同十二月海軍少尉に任ぜらる八年朝鮮國江華褥事件に際し雲揚艦乘組として拔群の功あり九年一月黑田特命全權大臣に隨行して清國に至る十年軍艦清輝にて九州に航し爾後東艦迅鯨艦に乘乘して二十年海軍大佐に任ぜらる二十七八年の役には大本營海軍參謀官軍令部第二局長たり勳功を以て功四級金鵄勳章を授けらる二十八年海軍少將に進み參謀總督府參謀副長海軍局長兼務仰付けらる三十一年吳鎭守府司令官に轉じ三十二年常備艦隊司令官に補せられ三十三年海軍中將に任ぜらる三十四年常備艦隊司令官となり三十六年十二月竹敷要港部司令官に轉じ三十七年二月對馬戰時指揮官仰付けらる三十八年十二月十三日病を以て對馬竹敷病院に於て逝く享年五十六此日特旨を以て位一級を進め正三位に叙せられ三十七八年戰役の功により功二級に叙し金鵄勳章を賜はり勳一等に叙し旭日大綬章を授けらる

ツノダ　ブンカ　角田文河　俳人なり通稱八郎上毛那波郡上福島村の里正たり西馬の門人銀檜島術に通じよく上を敬ひ下を愛す名里正の聞えあり凉道舍と號す明治廿三年九月十二日歿す享年七十四（三森松江氏寄）

ツノダ　モリンド　角田盛人　陸軍少尉なり東京府出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第七師團歩兵第二十八聯隊附として從軍中壯年十二月一日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依勳六等功六級に叙らせる

ツノヒメ　津野媛　反正帝の夫人なり木事の女反正帝元年八月夫人と爲り香火姬皇女、圓皇女を生む（大日本史）

ツノ　ヒロヲケ　角廣辨　和歌を嗜みて其の蘊奥を究め蒼葉作者の一に列して世に其の名を知らる（萬葉集作者履歷）

ツバキ　ゲツショ　椿月杵　俳人なり初名は里椿下總香取郡潮水川岸の人父名は伸輔和歌に長ず

月杵は四馬の門に入り俳諧を學び靜堂と號す後東京蠣殼町に寓して柳兮舍と改む下總常陸に純然たる正風の行はるゝは月杵の功多し明治十五年七月七日蠣殼町の寓に歿す年六十餘墓は深川大矢數町の共葬地にあり（三森松江氏寄）

ツバキ　チンザン　椿椿山　儒人なり名は弼、字は篤甫、忠太郎と稱す琢華堂又休庵と號す書を谷文鬼及び渡邊崋山に學びて大に研究し後ち又清人張秋谷の風を慕ひ後ち一變して益〻勉む人物花鳥虫獸山水を能くせり特に花鳥に至りては其の妙眞に迫る當時崋山と共に稱譽せらる就中五穀の圖は人口に膾炙す椿山大橋訥庵と友とし善し訥庵嘗て冒ふ余椿山と交る三十年椿山は竄逐にして衣に勝へざるものゝ如し然れども精神極めて篤く余と同く片山派の拔刀法を庄内某に學び吹笙を丹羽某に受く椿山劇忙余は多く閑にして皆彼に及ばず一日其故を椿山に問ふ椿山曰く僕終日人の爲に書を作り他技を講ずるに暇なし由りて自ら嚴課を設け毎日昧爽風に起きて拔刀を試み辰時にして止め暮夜吹笙を習ふ三更にして息む是れ或は君に贏る所以かと訥庵是を聞き憮然これに久うすと椿山事をなす大率斯の如し其の書の非凡なる又た偶然に非ざるなり又軍法を平山子龍に學びて蘊奥を極むと云ふ安政元年七月十三日卒す時に年五十四牛込圓福寺に葬る（古今雅俗石亭叢談）

ツバキ　チュウホ　椿仲輔　和學者なり初名は千稔小字は源吾、四郎左衛門と稱し常磐舍と號す又た商塘、藕塘、寂庵等の別號あり下總香取郡猿山村の人、幼より讀書を好み江戸に遊びて小山田與清に國學を受け頗る國朝古今の制度に通じ最も和文を善くす嘗て和文國史を修めんとして果さず年四十二佐倉侯に仕ふ幾もなく辭して京都に出て穗井田忠友等と交り歷史制度を考覈せしが弘化三年二月四日病みて客死す年四十四著す所萬葉集發揮、小倉百人一首記、二鏡遺韻、歌文集あり（小傳）

ツバキノカミ　レウソン　椿蓼村　書家なり名は眞和字は荷齋通稱は堯左衛門（繼嘉所一覽）

ツホウテ　エイユウ　坪内銳雄　陸軍歩兵中尉なり愛知縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第三師團歩兵第六聯隊附として從軍卅七年七月二十四日清國盛京省大石橋附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ツホタ　グワンシュンシャウ「ユンシャウ」　壺春章「カツカハシ

ツホウ　ヤウシュン　答本陽春　眞醫なり正寶永七年琉球人來朝の時井上因碩と共に島津家に招かれ使臣仲原筑登之二目置かせて打分を打ちたり（因云藻を善くす大伴皇子常に延きて相ひ與に唱和すと云ふ六位上に叙せらる神龜元年姓麻田連を賜ふ陽春又た詞藻に秀でたり（皇國名醫傳）

ツホヤマ　トウザン　坪山洞山　秋元藩の儒師なり狩野洞白に就きて學ぶ（河鍋曉齋傳）

ツホヤ　カウリウ　壺井好柳　調和の門人にして俳諧を善くせり東都京橋に住す（俳林小傳）

ツホヤ　クワクヨウ　壺井鶴翁　有職家なり名は義知、鶴翁は其號、又温故軒と號す通稱安右衛門慈論、遠西二十四方、詮候大概及び詩文遺稿一卷其他已に譯述して未だ稿を脫せざるもの若干篇ありと云ふ（洋方醫傳）

ツホヤ　ヤウ　坪井信友　蘭醫信道の次男なり後ち醫て亦た信道と稱す其の先は岐阜城主織田秀信より出づ信友初め西島蘭溪及び廣瀨旭莊に從ひて漢籍を學び後ち緒方洪庵に從て洋學を受け藥戚り幼にして藩侯の外班醫員に列し後ち長州の難に赴く慶應三年五月二十五日肺病に罹り山口に於て歿す享年四十五

ツホヤ　シンイウ　坪井信道　蘭醫なり美濃國池田の人信之の第四子、名は道、誠軒と號す信道は其の字なり其の先は岐阜の城主織田秀信より出づ信道幼にして孤となり伯父の勸めに徒り初め尾張の秦洽派及び江戸の倉成龍渚に就きて漢籍を學び又た西國の師儒名醫の門に遊ぶ後ち江戸に來り導引を以て口を糊す又宇田川玄眞の門に入り了西洋醫術を受く玄眞特に其の廉介にして奈貧なるを憫れみ之を塾中に置き衣食を給す信道是に於て力を學業に專らにする為得て早く儕輩を駕するに至り後ち深川に開業す治を乞ふ者門に滿つ而して其の貧者を療するや藥物より米鹽薪炭に至るまで皆之を賑給し又た文人墨客よりは謝金を受けず其の他物品を以て恩に報ゆる者あれど亦た必ず他品を以て之れに酬ゆ故を以て當時其の恩に感ぜざるものなし會〻長州侯其の名を聞き聘して侍醫となし俸を累れて三百石に至る信道又た能く人材を得て之を養ふ業を受くる者數百人青木周弼、川本幸民、緒方洪庵、杉田成卿、黑川良安、赤澤寬堂、廣瀨元恭等の如き人士其の門に出づ信道伊東玄朴、戸塚靜海と交を結び名を齊うし三大西洋家を以て當世に稱せらる嘉永元年十一月入日歿す時に年五十四淺草菩願寺に葬むる信道人となり剛毅にして恭敬尤も孝義に篤し年甫めて十二の比ひ母疾に罹るや日々某神社に詣て其の平癒を祈り家を距る二里餘嘗て風雨の爲に之を廢せず又妻の父青池林宗歿して嗣子尙ほ幼稚なり信道乃ち其の家族八人を養ひて各〻嫁娶を得せしむ妻青池氏三男三女を生む著す所に精煉發蒙、醫則、萬病治準、歇氏神經熱論、治法

ツホヤ　シンリャウ　坪井信良　蘭醫なり越中の人、元の名を佐渡良益と稱す後ち蘭醫坪井信道の爲に養はれて子となり其長女に配し別に家を成し擢用せられて幕府の侍醫となると云ふ（洋方醫傳）

ツホヤ　ジラウ　坪井次郎　紺醫學者にして鹿兒島藩士なり幼にして算悟十三歲外國語學校に入り獨逸語を修め次て明治十年東京大學醫部に入り修學八年十八年四月藥科及び本科を卒業し直に大學御用掛となり同年八月醫學全部を卒業して醫學士となる十九年三月大學助手を命ぜられ二十年十一月助教授に昇任す其後獨逸留學を命ぜられコッホ博士に就き肺結核治療法を研究し造詣する所あり歸朝後醫科大學講師に任じ醫學博士となる三十三年東都帝國大學を創設する

に方り醫科大學教授兼同學長となり木下總長を助けて大に同大學創立に力む三十四年十二月功に依り勳六等に叙し瑞寶章を授けらる三十六年七月心臓病にて危篤に瀕するや特旨を以て正五位に叙し勳五等瑞寶章を下賜せらる同十三日遂に逝く年四十一

ツボキ　セイジャウ　坪井青城　江戸の儒者なり名は敏求字は子俊安永二年五月十九日歿す淺草新寺町正覺寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

ツボキ　チャウヂ　坪井長治　陸軍歩兵少尉なり德島縣士族にして明治三十七八年日露戰役起るに及び躍備役より召集せられ歩兵第四十三聯隊附として從軍中廿七年十月十九日清國盛京省小孤山にて病に罹り同十一月二日龍頭戰地定立病院に於て死去せり

ツボキ　マスアキ　壺井益秋　淨英と號す益德の子世々伏見に家して竄正たり元祿享保の間伏見運漕船の事に係り父と共に力を居民の爲めに竭して大に功績を顯す嗣は嚴せて益德の停に在り益秋剛毅持重にして才略亦た父譜に減ぜずと云ふ延寶戊辰病みて歿す年六十四（墓表）

ツボキ　マスノリ　坪井益德　祐佐と號す世々京南伏見に家して竄正たり益德其の地を見るに公役殊に劇しく民産業に乏し常に之を賑恤せんと欲す元祿中幕政米倉侯衆りて畿内の政を巡察し後ち伏見の襄弊して役に堪へざるを見益德を召して利害を問ひ遂に其の議を用ひて上聞し特とに伏見運漕公船二百艘を賜ふ會々尹闕けて代未至らず時に他縣より造船を請ふの事ありて成す能はず建部侯來て尹となり始めて賜船の未だ成らずして朝恩の中阻するに驚き復た益德を召して商議し因て命じて其の事を董さしむ益德健にして才略あり既に肯受して以て任となす未だ幾ばくならざるに大小二百船整然として源に浮び行旅便を得郷民業に就く尹大に悅びて之を賞す幕府益德を以て三年に一たび東上し朝正の儀に與らしむ凡そ十二年にして運漕に公船千二百あり稍々害を生し遂に實永中に至りて姑く伏見船を罷られ俄かに業を失する者數千人益德甚だ之を憂へ乃ち子益秋と俱に東上して其の船を復せんことを力請す北條侯尹となるに及び諸弊政を革む時に益德已に死す子益秋先後父益德に副ひて事を共にす

是に於て復た其利害を具して上訴す幕府其の言を納れ享保中復たび伏見公船大小二百艘を賜ひ舊船と竝び漕がしむ（淨英碑文）

ツボキヤ　タキチ　壺井屋太吉「キムラ　センサイ」

ツボキ　キシュン　坪井爲春　蘭醫なり初の名は忠益、米澤藩の士大木某の子なり蘭醫坪井信道に養はれて子となり其の第二女に配し號を芳洲と呼び鹿兒島藩の醫員となれり（洋方醫傳）

ツマギ　セイヘキ　妻木棲碧　名は賴矩通稱傳藏後齋宮又中務と改め更に務と稱す棲碧は其號、別號を白閑居士と云ふ幕府旗下の士にして文政八年十一月江戸牛込大久保の自邸に生る性多病にして武技を修むるに堪へず幼年の時主として讀書に從事し年十四幕府學問所素讀試業に應じて甲科たり天保十四年父小源太類門小姓組頭より寄合を命ぜらる棲碧時に年十九父の罪なくして黜斥せられ日夜憂悶するの狀を見て深く之を悲む慨然として歎じ之を救はんとするに由なし知己を得るの道我が材を成すに由らずんばあらずと乃ち昌平黌に入り劉苦勤學すると八年學業大に進み小花和正助向山榮五郎田邊太一河田貫之助諸子と前後相驅逐し聖堂秀才の名を擅にす嘉永二年大試に應じ甲科第一等を得又時務策の試問に應じ痛く當時の弊を論じて大に要路を警醒すこれより棲碧の名漸く當路の間に顯れ同四年部屋住より學問所教授方を命ぜらる是に於て棲碧知己の力に由りて一たび父の仕途を開かんと欲し東奔西馳して頗る其の力を盡せども未だ成らず安政元年棲碧無足部屋住より擢て御目學頭を命ぜらる無足部屋住より直ちに出でて官職に任ずる事實に棲碧を以て嚆矢とす同三年歸府の上小姓組に召出され鷹狩同四年家督同六年儒者を拜し萬延元年奥右筆所詰に轉ず是歲冬の頃より父病を得て文久元年二月長逝す棲碧哀毀甚だしく殆ど衣食を廢するに至る然れども劇職に在るを以て喪を全うするを得ず除服の命ありて出仕し同二年目付に轉ず時に坂下門の變あり不府浪人處分の事に係り廟議紛然向來水府領内の者他國へ出づるを禁じ又其他國に在る者は之を水戸領内に驅逐し若し其命を犯し禁を破る者は逮捕せんとの論稍々勢力あり閣議決せずして遂に大目付目付の意見を下問す棲碧班末より之を論じて曰く今日の事一朝一夕に生ずる者に非ず故に之を處するの法根本より治めずして徒らに枝葉を芟らんとするに於て曾に其の功を見ざるのみならず恐らくは害を得んのみされば水府浪人處分の如き枝葉は措て問はず須らく其根本を養ひて天下の人心を鎮定すべきのみと衆議之に一決し即ち棲碧答議を草して之を上呈す此時長藩吉田稔丸故あつて松本小介と改名して棲碧の家に來り傭役す棲碧其擧動を訝みて問ふ稔丸實を以て告ぐ是より長藩の實況を知り共に其の事に奔走せんことを約す此の年長子傳藏賴辰に家を讓りて隱居す時に長藩馬關の擧及幕吏中根某隕命の事に係り幕府有司執る所の意見益々其方向を誤る棲碧深く之を憂へ即ち密に閣老に建議す閣老板倉某大に悟る所あり即ち俗論を排し密に目付某に命じ棲碧をして長藩士と打合せ調停せしむべき内命あり由て大に喜び吉田稔丸に裁書して出東を促す長藩士遠藤太一郎山縣半藏と密に會合し和親融解の手段を議して議稍々熟し稔丸上京して同士に之を示し更に諸藩の上我和應じて調策を實行せんとす然るに稔丸京都滯在中不虞の禍に罹りて死し尊て長藩士京都の變あり て板倉防州目付某も亦偶々退職せしかば乖戾の事も全く水泡に歸し加之此事より更に深く幕府有司の猜忌を招き妻木の給人某長藩士と交通せりとの旨を以て獄に下され殆ど强勤を受けんとす某氏の救護によりて僅に免るゝ事を得たり是に於て事の如何ともなし難きを察しこれより全く意を世事に絶ち中仙道廢宿芝村長德寺住職願翁に從ひて禪か學び傍ら詩酒に伴ひて懷を遣り自ら樂む慶應三年六月特命ありて隱居より外國御用重立取扱の職を拜し八月上京し奥右筆組頭勢勤を命ぜられ尊て目付となる時に伏見の變起り内府薨慨悲順を表じ退去せらるゝに臨み命を承けて大阪城に留り長藩參謀佐々木二郎四郎坂井勉に之を引渡して去る、歸東の後大目付となり既にして一橋家老として一橋茂榮に從ひて大總督宮を駿府に迎へ德川氏移封の事につき建言する所あり德川氏駿遠參に封ぜらるゝに及び留守居となり又公用人となり公議人となる、明治二年八月靜岡藩少參事に任ぜられ同十

月權大參事に進み集議院議員たり尋で幹事となる同四年七月名古屋縣權大參事となる同五年三月出仕を解かる是に於て居を東京向島なる須崎村に卜し子弟衣食の資に給せんがため割烹店を開き四木と稱し又木所番場町に其支店を設け共に大に當時に行はる四木は棲碧の號に取るの稱なり此年の冬横濱毎日新聞に聘せられ其主筆たりしが其平常横濱に寄寓するを厭ひ社主に乞ひて更に栗本鋤雲老人を薦め横濱詰の任を各々互に分つ同七年十二月文部省附屬書記の囑を受け同十年一月同省内記所詰となる以後轉任度々あり同二十二年八月帝國博物館臨時校正掛の囑託を受け專ら本邪美術沿革の取調に從事す同二十三年夏微恙を得心臓麻痺を生じ同廿四年一月十二日長逝す年七十六麻布廣尾町祥雲寺祖先の墓地に葬る法名見性棲碧自閑居士

ツマギ　バンザン　爪木晩山　京都の俳人なり吟花堂と號す初め二童齋永可と曰ふ松堅の門人なり又祖父白昌隱に從て連歌を善くす享保十五年八月十五日歿す年六十九門人遺言に依り碑を双岡兼好法師の墓側に建つ（俳林小傳、俳諧家譜）

ツマダニ　ソウザエモン　妻谷宗左衛門　彫工なり薩州の人、後ち遷りて江戸に住す彫工を以て世に現はる子あり宗兵衛と云ふ（裝飾奇賞）

ツムラ　ソウアン　津村宗庵　江戸の歌人なり三郎兵衛と稱す教定と號す佐竹侯の用達文化三年五月十六日歿す築地本願寺中善宗寺に葬る（江戸名家墓所一覽）

ツムラ　ソウキ　津村横几　江戸の俳人なり其角の門人（俳林小傳）

ツムリ　ヒカル　頭光　狂歌師なり通稱岸宇右衛門といひ名を誠之といふ江戸麹町の町代なり中年の頃より狂歌を好み桑揚庵と號す酒を好み頭の早く兀げたりし故戯れに頭光と稱す後ち蜀山の門に遊びて遂に巴人亭の號を受け四方側の判者となり名聲海内に聞ゆ高名の門弟多し寛政八年四月十二日年七十にして歿す駒込道分瑞泰寺に葬る法號「恕眞齋穆樂光居士」と云ふまた日暮里妙隆寺に有名の碑あり其の碑面の歌に曰く「ほとゝぎす自由自在にきくさとは酒屋へ三里豆腐屋へ二里」又浮世繪を善くす其の師詳ならず一説に石川幸元の門人なりといふ俳優似顔畫に長じ最も善く二代目八百藏を畫きたり類考別本齊藤月岑が書入に女繪は繪本幸信が畫風を似せたりとあり又古畫備考に其の似顔畫を評し佳氣圖を引きてなほど少し拙き所あり春章の方世間にて多く用ゐし故に似顔繪を止めて尊常の浮世繪をかきし欄子なりとあり嘗て春章と共に繪本舞臺扇二冊を著はす書中は即俳優の似顔畫なり跋に文調の句を載す「畫のことは素顔な後そ不二の春」（古今狂歌人物誌、浮世繪類考別本）

ツムラ　キッシャウ　津守吉祥　大山下に位す齊明帝五年遣唐副使となり海中風に遭ひて大使阪合部石布と相失ふ行くこと一日夜會稽須岸山に至る東北風急なり數日にして餘姚に至り賓裝を此に留め陸路より進みて越州府に至る時に高宗東京に在り遂に驛に乘じて東京に至る吉祥乃ち高宗問ひて曰く日本國天皇は平安なりや否や對て曰く天地と德を合し自ら平安なりや曰く天皇の慈仁に因り幸福なりと又問ふ執事卿等は幸なりや否や曰く治安の術宜を得て萬民無事なり高宗賀して受く外使悉く朝す吉祥も亦見ゆ儀容最も勝る既にして客館に火を失す又一人來年將さに海東に事あらんとす汝尋で命を下して曰く來年將に海東に事あるを得ずと遂に四京に幽せられ困苦を尊倭客東歸するを得ずと遂に四京に幽せられ困苦を經る吉祥の遺孫從四位下國基に至る（大日本史、日本儒林傳）

ツムラ　クニスケ　津守國助　歌人なり住吉の神官なり

ツモリ　クニナツ　津守國夏　攝津の人なり住吉の祭主右大辨吉祥の裔なり國冬の子にして從五位下に叙せられ神主が襲ぎ嘉祥二年に卜して國夏に勅し平定を祈らしむ高時醍醐帝北條高時を討つ國夏に勅して滅びて從三位に進めらる正平七年東駕將に京師に還らんとして住吉に至り國夏の宅に御すること十八日因て進めて正三位に至る幾ばくも無くして卒す年六十五國夏頗ぶる和歌及び笛を善くす（大日本史）

ツモリ　クニフユ　津守國冬　歌人なり攝津住吉社の神主なり攝津守國助の長子、左近衛將監に叙し從三位に叙せらる和歌を好み修學し頗る精妙を得尤も家風を守りて殊に堪能なり集外の歌仙と稱せらる（鑑定便覽）

ツモリ　クニミチ　津守國道　歌人なり國冬の弟なり禪林寺太政大臣藤原兼房の藏人に補す和歌に長じて撰集に入る永仁七年正月二十日權神主に補し元應二年六月二十五日神主と成る嘉暦三年八月二十五日年五十二にして卒す（津守家譜）

ツモリ　クニモト　津守國基　歌人也右大弁吉祥の後胤にして康平三年十月五日住吉神主に補す和歌に達し後拾遺集の作者たり又た箏の名手にして院譽の弟子となり藤井戸と號す應德三年十一月十日御厨の險按に補す社務にあること四十三年康和五年七月年八十にして卒せり津守氏の中興たり、ある時茂家の歌道に赴く偶々孝義秀歌あり坐客皆及ばず國基家に歸り食はざること數日遂に佳作を得たり曰く「うすゞみにかく玉章と見ゆるなり霞める空に返る雁がね」と吟友感稱す世に異名して薄墨の神主といふ國基が歌は後拾遺集に載するもの共に三首ありと云ふ（桑華蒙求）

ツモリ　ツネクニ　津守經國　歌人なり國基七代の孫國長の子正五位下攝津守に叙任す母は中宮大進長基の女なり建保四年六月三日權神主に補す當の巧手にして和歌の道に達す承久二年四月十一日神主に昇り安貞二年十月二十五日卒す年四十四（桑華蒙求）

ツモリ　トホル　津守通　和歌を善くして萬葉作者の一に列す和銅七年六位を歴て從五位下に叙し築作守に任ぜらる養老五年詔して絁十匹絲十約布二十端鍬二十口を賜ふ蓋し此擧や學生を優待するに出づ七年從五位上に進めらる（萬葉集作者傳歴）

ツモリ　ヨグロエ　津守小黑柄　大御日足居の後裔なり和歌を善くす詠歌は載せて萬葉集に在り（萬葉集作者履歴）

ツヤマ　トウメイ　津山東溟　久留米藩の姻戚老職有馬左近の臣なり名は樂字は德卿、東溟は其の號又斗龍と號す性學を好み詩文敏速、長篇大章と雖も筆を下せば立ち所に成る而して其の巧拙に於ては甚

だ意を寓かず唯々自適に在り時に其俳歌を作る寛政乙卯藩憂舍を建つ東溟陪臣を以て經を憂舍に講ず享和元年歿す年五十八（續近世叢語）

ツユキ　セイザウ　津行清藏　陸軍歩兵少尉なり大分縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第六師團歩兵第四十八聯隊附として從軍中廿八年三月七日清國盛京省宮屯四南方に於て戰死す戰功に依り勳六等功六級に叙せらる

ツユノ　ゴラウベエ　露の五郎兵衛　江戸の落語の祖なり元京都の人武藝を好む嘗て人の爲に人を殺し後剃髪して露休と號し辻講釋を業とす元祿十六年五月九日歿す年六十一（遊藝起原）

ツラ　貫一　下野烏山の刀匠にして磯右衛門と稱し一心齋と號す水心子正秀の門人文化年間の人（古今鍛冶銘早見出、古今鍛冶備考）

ツラナギノカミ　頬那藝神　ハヤアキツヒコノカミの子にしてアハナギノカミの弟なり（古事記）

ツラナミノカミ　頬那美神　ハヤアキツヒコノカミの子にしてアハナギノカミの妹なり（古事記）

ツラヌキ　イチヤ　貫一也　陸軍歩兵少尉なり熊本縣出身にして明治三十七八年日露戰役に於て第四師團歩兵第八聯隊附として出征中三十七年九月二日清國盛京省遼陽戰鬪の際負傷し同十九日鞍山站兵站病院に於て死去す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

ツラミツ　貫光　備前長船の刀匠にして長享年間の人（古今鍛冶銘早見出）

ツリガネ　ヤザエモン　鐘彌左衛門　江戸の人なり神田に生る資性豪宕不羈にして頗る義氣に富む初め舟子となりて山谷通ひを業とす一日舟中に横臥し海潮の涵干するを見て慨然として歎じて曰く人の世に在る亦た又斯くの如し人誰か生ありて死なからんや只々死に遲速あるのみ豈に何ぞ碌々として世を終らんや我亦た男子なり寧ろ生命を賭し俠者となりて世を終へんと是に於て遂に其の徒に入る時に年二十、一日事あり淺草に至る路に酔漢數人に遇ひ事を以て相爭鬪す酔漢等大に避易す是より其の名稍々著はる俠客甚太七兵衛之を聞き大に歎賞し與ふるに鐘の名を以てす義は鐘聲と共に名を遠近に響かしむるに在り（一說に其の頃淺草御藏前に永野七郎兵衛と云へる名主與名を釣鐘と曰ひしが彌左衛門に此の名を讓れりと）又嘗て兩國廣小路を過ぐ武士二人あり刀室相觸るゝの故を以て刀を抜き奮戰す彌左衛門視て大に驚き跳りて其の間に入り彼此交々和す事遂に解くを得たり世人其の強膽と和するに宜きを得たるを稱す時に胡に錦木と云ふ者あり亦た義俠を好む彌左衛門之に通じて膠漆實ならず嘗て一日之を訪はんと欲し仲の街の茶亭某家に抵る時に俠客小喜多權兵衛其徒に謂て曰く時方さに幾時ならん宜く早く鐘を叩くべしと彌左衛門聞て曰く何ぞ能く畫の鐘を叩くことを得んと是に於て權兵衛等始て其の彌左衛門たるを知る然れども敢て之を謝せず又た詈りて曰く汝は鐘彌左衛門か何ぞ其の倨傲なる汝知らずや我刀は是れ關兼則なり號して鋏斷と曰ふ今まさに汝が胴を試みんと言未だ畢はらざるに早く已に刀を交じゆ偶々錦木店頭に來りて之を視て大に驚き急に彌襠を取りて鋒尖に掛くを得たり（木朝俠客傳、嬉遊笑覽）

ツリドノノ　シンワウ　釣殿后「ヤスコナイ」　**キサキ**

ツルガサイ　シンナイ　鶴賀齋「ツルガシンナイ」

ツルガシンナイ　鶴賀新内（初代）　淨瑠璃家なり富士松薩摩の門人、江都本所相生町に住す本名岡田五郎次幕府の士なり淨瑠璃節に工みに一派を出し新内節と稱して大に世に行はる新内初め富士松を冒し後ち故ありて今の姓に改め薙髪して鶴賀齋と號す享和元年八月十一日病みて歿す年六十一（聲曲類纂）

ツルガシンナイ　鶴賀新内（二代目）　淨瑠璃家なり初め加賀爪又は若歳と稱し鶴賀齋の門弟なり盲人にして新内節を善くす襲て新内と號す元鳥越或は木所四ツ目に住し文化中病みて歿す（聲曲類纂）

ツルガシンナイ　鶴賀新内（三代目）　淨瑠璃家なり宮古路加賀太夫と改む二代新内に入り彼此交々和す事遂に解くを得たり世人其の強膽と和するに宜きを得たるを稱す時に胡に錦木と云ふ者あり亦た義俠を好む彌左衛門之に通じて膠漆實ならず嘗て一日之を訪はんと欲し仲の街の茶亭某家に抵る時に俠客小喜多權兵衛其徒に謂て曰く時方さに幾時ならん宜く早く鐘を叩くべしと彌左衛門聞て曰く何ぞ能く畫の鐘を叩くことを得んと是に於て權兵衛等始て其の彌左衛門たるを知る然れども敢て之を謝せず又た詈りて曰く汝は是れ鐘彌左衛門か何ぞ其の倨傲なる汝知らずや我刀は是れ關兼則なり號して鋏斷と曰ふ今まさに汝が胴を試みんと言未だ畢はらざるに早く已に刀を交じゆ偶々錦木店頭に來りて之を視て大に驚き急に彌襠を取りて鋒尖に掛くを得たり（木朝俠客傳、嬉遊笑覽）

ツルガシンナイ　鶴賀齋「ツルガシンナイ」

ツルガシンナイ　鶴賀新内（初代）　淨瑠璃家なり富士松薩摩の門人、江都本所相生町に住す本名岡田五郎次幕府の士なり淨瑠璃節に工みに一派を出し新内節と稱して大に世に行はる新内初め富士松を冒し後ち故ありて今の姓に改め薙髪して鶴賀齋と號す享和元年八月十一日病みて歿す年六十一（聲曲類纂）

ツルガシンナイ　鶴賀新内（二代目）　淨瑠璃家なり初め加賀爪又は若歳と稱し鶴賀齋の門弟なり盲人にして新内節を善くす襲て新内と號す元鳥越或は木所四ツ目に住し文化中病みて歿す（聲曲類纂）

ツルガシンナイ　鶴賀新内（三代目）　淨瑠璃家なり宮古路加賀太夫と改む二代新内に入り彼此交々和す事遂に解くを得たり世人其の強膽と和するに宜きを得たるを稱す時に胡に錦木と云ふ者あり亦た義俠を好む彌左衛門之に通じて膠漆實ならず嘗て一日之を訪はんと欲し仲の街の茶亭某家に抵る時に俠客小喜多權兵衛其徒に謂て曰く時方さに幾時ならん宜く早く鐘を叩くべしと彌左衛門聞て曰く何ぞ能く畫の鐘を叩くことを得んと是に於て權兵衛等始て其の彌左衛門たるを知る然れども敢て之を謝せず又た詈りて曰く汝は是れ鐘彌左衛門か何ぞ其の倨傲なる汝知らずや我刀は是れ關兼則なり號して鋏斷と曰ふ今まさに汝が胴を試みんと言未だ畢はらざるに早く已に刀を交じゆ偶々錦木店頭に來りて之を視て大に驚き急に彌襠を取りて鋒尖に掛くを得たり（木朝俠客傳、嬉遊笑覽）

ツルガシンナイ　鶴賀齋「ツルガシンナイ」

ツルガシンナイ　鶴賀新内（初代）　淨瑠璃家なり富士松薩摩の門人、江都本所相生町に住す本名岡田五郎次幕府の士なり淨瑠璃節に工みに一派を出し新内節と稱して大に世に行はる新内初め富士松を冒し後ち故ありて今の姓に改め薙髪して鶴賀齋と號す享和元年八月十一日病みて歿す年六十一（聲曲類纂）

ツルガシンナイ　鶴賀新内（二代目）　淨瑠璃家なり初め加賀爪又は若歳と稱し鶴賀齋の門弟なり盲人にして新内節を善くす襲て新内と號す元鳥越或は木所四ツ目に住し文化中病みて歿す（聲曲類纂）

ツルガシンナイ　鶴賀新内（三代目）　淨瑠璃家なり宮古路加賀太夫と改む二代新内に入り彼此交々和す事遂に解くを得たり世人其の強膽と和するに宜きを得たるを稱す時に胡に錦木と云ふ者あり亦た義俠を好む彌左衛門之に通じて膠漆實ならず嘗て一日之を訪はんと欲し仲の街の茶亭某家に抵る時に俠客小喜多權兵衛其徒に謂て曰く時方さに幾時ならん宜く早く鐘を叩くべしと彌左衛門聞て曰く何ぞ能く畫の鐘を叩くことを得んと是に於て權兵衛等始て其の彌左衛門たるを知る然れども敢て之を謝せず又た詈りて曰く汝は是れ鐘彌左衛門か何ぞ其の倨傲なる汝知らずや我刀は是れ關兼則なり號して鋏斷と曰ふ今まさに汝が胴を試みんと言未だ畢はらざるに早く已に刀を交じゆ偶々錦木店頭に來りて之を視て大に驚き急に彌襠を取りて鋒尖に掛くを得たり（木朝俠客傳、嬉遊笑覽）

ツルガ　シンナイ　鶴賀齋「ツルガシンナイ」

ツルガシンナイ　鶴賀新内（初代）　淨瑠璃家なり富士松薩摩の門人、江都本所相生町に住す本名岡田五郎次幕府の士なり淨瑠璃節に工みに一派を出し新内節と稱して大に世に行はる新内初め富士松を冒し後ち故ありて今の姓に改め薙髪して鶴賀齋と號す享和元年八月十一日病みて歿す年六十一（聲曲類纂）

ツルガ　シンナイ　鶴賀新内（二代目）　淨瑠璃家なり初め加賀爪又は若歳と稱し鶴賀齋の門弟なり盲人にして新内節を善くす襲て新内と號す元鳥越或は木所四ツ目に住し文化中病みて歿す（聲曲類纂）

**ツルガ　シ

謁し後ち縁を賜ひ藩士に列す安政六年八月四日駒込水戸邸に殁す年七十二、小石川傳通院境内縁援院に葬る著す所畿國傳説考及び神代文字考等あり（名人忌辰錄）

ツルムラ　ナンボク　鶴屋南北（初代）　江戸の演戯作者なり金井三笑の門人幼名源蔵後伊之助と曰ひ父を伊三郎と稱すと初の名は勝俵蔵戯名を姥尉助と曰ふ高砂町に住するを以てなり近世の名人なり初め濱町に住し染戸を業とす先世鶴屋南北三世あり普道化方俳優なり俵蔵三世南北の女を娶りて襲の藝名をつぎ而も俳優たなさず目に文字なしと雖も意匠人意の外に出づ殊に怪談の脚色に長ず文政十二年十一月二十七日殁す年七十五

ツルヤ　ナンボク　鶴屋南北（二代）　孫太郎と稱す演戯作者なり初代南北の男、幼名源三郎後ち繼て二世南北と稱す嘉永五年正月殁す年五十七二世河竹新七三世瀬川如皐等皆な其門下なり

ツルヤマ　ケンゲウ　鶴山撿校　寶暦年間始めて鶴山節を語りし人なり町名主四村佐兵衛春武愁の音ありとて町内に之を禁ず

ツルヨカ　シンスイチ　鶴岡信一　陸軍歩兵中尉なり千葉縣出身にして明治廿七八年日清戰役に於て第三師團歩兵第六聯隊第三大隊附として出征中病に罹り廿七年十一月十一日朝鮮國龍州兵站病院に於て死去す

ツルヨカ　ジュエイ　鶴岡受榮　石川流の茶人なり半提庵幸琢の門人にして茶道を能くす品川宿の本陣旅籠屋なり（茶人系傳全集）

ツレノ　連野　江戸八町堀同心大崎文平の女なり毛利匡廣の夫人故光に仕へて中老と爲る人と爲りオ智あり能く婆儀優麗近侍すること多年勤勞倦まず恩遇最も渥く數〻寶物あり連野或は之を父に贈り以て其の情を養ふ局に槙田と云ふ者あり竊に猜忌を懷き意に誣陷せんと欲す一日連野夫人に侍し遽へ子房に歸らんと欲し誤りて槙田の履を踏みて去るや槙田視て其の出づるを峻叱て傲然罵りて曰く婢他の履を踏み謂を謝するを知らずして去る亦た侈らず乎と連野初めて自ら謬まるを覺り頓首して悔謝し且つ曰く意ふに遽へ君の履を逸す非禮は請ふ寛宥を賜へ仕途に在る者は迭同なり他日必ず慎まんと槙田機に乘じ色を作して曰く汝謂ふ迭同と他人胡ぞ然ることなせん汝居常奢侈にして我を慢侮し過ちに居て改めず汝の泥脚を以て我履を漁り我復た此履を用ひずと乃ち足に挾み蹂躪して連野の頰を揚げて人の面を擲つ人倫の道を知らざる者なり今は君戚に思尺す故に我姑く之を忍ばん耳と槙田冷笑して曰く汝の所謂忍如何かすると連野兩眼に血を濺ぎ默して子房に還り書を裁して之を婢に託し兄彌右衛門に寄す氣色常に異なり婢意に怪しみ辭して曰く時已に遇頃到れば黄昏なり願くは明日を期せん耳と連野曰く急事緩め難しと婢伴り諾して書函を掩して出づ意酷だ安からず繫馬場陰に潜み鍼を解て之を讀む則ち遺書なり首に履の白來を記るし尾りに自殺を裁す婢愕然として驚き廻りて子房に歸れば則ち連野已に自盡して伏す乃ち天に仰て慟哭し竊に短刀を把りて槙田の子房に往き怒罵して曰く汝人白すことあり願くば來りて偕に語み以て和解を致さんと酒を嗜む其の和を乞ふを悅び遽に花已まず遽て槙田常に酒を嗜む其の和を乞ふを悅び遽に花面を作り起ちて歩み進む婢後より刀を揮ひ聲を發して驚と呼び槙田の左腋を刺す槙田驚苦顚倒腕を曳て婢の髻を攫み幽亂を呼びて僵す聲四隣に達し衆趨り萃る婢屍に騎り刀を提げて喉下を洞し遺書を衆に視して曰く主の讐を復するなり之れ刀を把り將に自ら死せんとす衆之を阻挽して以聞す匡廣其の志を嘉讃し人を召し命じて婢を以て更に養女と爲さしむ婢初の名は三是に於て連野と襲稱し登庸して中老と爲る後ち薙髮して尼と爲る此の傳劇に所謂尾上岩藤の傳と似たり本書サツの傳を參看すべし（野史）

ツキシ　ヘイジフラウ　堆朱平十郎　幕府の青貝堆朱彫物師なり慶長年間の人本姓詳ならず堆朱の技に巧なるを以て堆朱を氏とし楊成と號すこれ元人張成楊茂が堆朱の技を嘉ひ二人の名の一字を取り名づけたるなり子孫世〻この號を用ゐ業を傳へ（神田小柳町に住せり（蒔繪師傳）

ツキシ　ヤウセイ　堆朱養清　享保年間の堆朱工にして江戸に住し名手と稱せらる幕府の堆朱工楊成其の名の音己と同じきを忌み自らヨンセイと呼びたりと（蒔繪師傳）

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（初代）　漆工なり名は長充、足利家の臣にして將軍義詮公の代延文五年に始て堆朱彫を製造す本邦堆朱の嚆矢なり唐土堆朱の顧元朝嘉興府西塘楊匯の人張成及び楊茂にも劣らず宜しく張成楊茂の中より取りて以て堆朱楊成と名のるべしと宣命を蒙り此より楊成と號し代々之を襲用す義滿の時堆朱推鳥の香合を朝廷に献し芝山中納言宣豐より叡感の旨を義滿に傳達す其書今尚家に藏す

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（二代）　名を長辰といひ足利義持將軍の應永嘉吉時代の人なり

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（三代）　名を長貞といひ文明十一年に足利義政東山に退隱して後愈〻厚く寵用せられ多くの茶器を製造す又御所より義政に勅命ありて種〻の珍器を造らしめ給ふ此より其名天下に聞はれ唐様を目利して堆朱の三作十作を定む年七十餘にて長享年代に殁す

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（四代）　名を長嗣といひ應仁の頃より父楊成と共に作業し明應頃殁す

ツイシ　ヤウゼイ　珪朱楊成（五代）　名を長繁といひ義澄將軍の文龜永正の頃盛なり

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（六代）　名を長秀といひ義晴將軍の天永時代の人にして永祿の頃處々に遊歴し種々の珍器を造る

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（七代）　名を長親といひ豐臣秀吉の需に從ひ珍奇の茶器を製す世に之を雛波彫の堆朱といふ時に世上不穩なるが故に祖先の舊地を墓ひて鎌倉に下り是より永くこゝに住す元和の頃殁す

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（八代）　名を長宗といふ八代楊成の作を世に鎌倉彫の堆朱といふ厚貝青貝等を入れて彫上る物なり後江戸に移住し承應三年八月二十四日殁す

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（九代）　名を長善といふ承應の頃父楊成の跡を彫り繼ぎ諸侯の好に應じて數品を彫上ぐ延寶八年八月十三日殁す

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（十代）　名を長是といふ德川綱吉將軍の世天和三年に堆朱御用を命ぜられこれより代々德川氏の御用を勤め謁を許さる貞享四年堆朱彫の机を命ぜられて彫上げ御小納戸に於て褒賞を頂戴す貞享五年五月麴町十三丁目に於て役地八十八坪拜領す享保四年まで勤役三十七年にして四年四月二十七日殁す

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（十一代）　名を長盛といふ享保四年四月家督相續し同二十年まで勤役十七年にて同年九月晦日殁す

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（十二代）　名を長韻といふ享保二十年十一月相續し勤役二十一ヶ年にして明和二年五月二十二日殁す

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（十三代）　名を長利といふ明和二年相續し安永八年十月廿二十四日殁す

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（十四代）　名を均長といふ安永五年十一月相續し天明六年五月堆朱重箱卷紙寫筆軸屏風の製造を命ぜられて之を造る寛政三年六月二十三日殁す

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（十五代）　名を長雄といふ寛政三年相續八年四丸御開の節堆朱中央の車を命ぜらる文化九年二月二日殁す

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（十六代）　名を長英といふ文化八年九月相續文政三年まで十ヶ年勤役嘉永元年十一月八日殁す文政三年大武鑑に御菁貝堆朱彫物師かんだ小柳町二丁目堆朱楊成とあるは此人なり

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（十七代）　幼名を平十郎といひ名を長邦といふ文政三年十二月二日相續嘉永三年十二月二十九日國名長門の稱を賜ふ故に楊成長門長邦と稱す又同六年正月二十六日城内持杖を許さる老後剃髮して淨友と稱し安政五年八月十一日殁す此代に墓所を築地海岸寺に改む以前は赤坂一つ木常元寺を菩提寺とす

ツキシ　ヤウゼイ　堆朱楊成（十八代）　幼名を平八郎名を國平といひ後ち任官長門を稱し勤役

ツ之部

ツイアン　貞庵「カヅキケイエキ」　貞安　當を好んで雪舟の畫風を慕ふ（繪定便覽、扶桑畫人傳）

ツイアン　鼎庵「イシハラテイアン」　**ツイアン　鼎庵**「ソウバイ」　**ツイイツヨウ　庭一**　翁「ニハタシゲエダ」　**ツイイン　貞因**　大阪の俳人なり氏は榎並通稱鶴屋善右衛門菓子を造るを以て産業とす安原貞室の門

ツイカン　貞閑「サカホ」　**ツイギ　貞儀**「イマイヅミテイギ」　**ツイギ　貞宜**「テイセン」　**ツイギンシヤ　アヤンド　庭訓舍綾人**　狂歌師なり初名を鎌ヶ綾人と呼び四方側の判者なり姓

ツイヤ—ディイヤ

人なり曾て山城大掾に任ず貞室天水錢を以て因に授く因机上に於て朝夕之を珍愛す一號を白石齋と云元祿十三年三月三日殁す年八十（俳家大系圖、俳諧年表）

ディイウ　貞右　俳人なり雄崎氏大阪の人通稱尼屋市兵衛初め混沌軒國丸と稱す後貞右と改む丸山貞左の門人なり烏丸家より玉雲齋の號を賜ふ天明三年殁す年五十或は曰く寛政二年二月廿四日殁す年五十七（浪華名家墓所集、雪濤便覽）

ディイウバイ　手友梅　備中國手村玉吉城主有京亮政親の子なり天正二年十二月毛利の軍と戰ふ時に友梅眼疾ありて遂に盲す其弟政貞其軍の利あらざるを知り兵士五十餘人を率て直ちに敵軍に入り敵將梁屋某と奮戰勝たずして死す友梅之を聞て心に生を欲せず乃ち竹笠を其背に挿み笠頭に單册を掲げ書するに「闇きより闇き道にも迷はじな心の月の曇なければ」の和歌を以て旗標と爲し其臣坂下某の肩に憑り尋で敵軍に入り大呼して曰く我頭を斬れと手に大刀を揮ひ血戰數合終に木原某の爲に斬らる坂下某亦之に從て死すと云（譬人傳）

ディイガ　貞賀　俳人なり貞山の男、一洲堂と號す（俳林小傳）

ディイガ　貞峨「キカイヨン」　**ディイガ　貞雅**「ヤマモトテイガ」　**ディイカイ　鼎介**「ヒロシマテイカイ」　**ディイカウ　貞好**「テイケン」　**ディイカウ　貞江**　江戸の俳人なり氏は岸、新柿園と號す谷口雞口の門人なり初め如藍、沾鱗、雪谷と號す寛政十年九月殁す（俳諧人物便覽）

ディイカウ　定香　江戸の俳人なり氏は平澤定門の男通稱八郎兵衛（或云平兵衛）薙髮して了粘と號す又香蔵子と稱す目利第三世とす貞享元年四月二十日江戸に於て殁す年四十（或云三十七）法名即性庵直空了粘居士（俳家大系圖、俳諧年表）

ディイカン　貞閑「サカホ」　**ディイギ　貞儀**「イマイヅミテイギ」　**ディイギ　貞宜**「テイセン」　**ディイギンシヤ　アヤンド　庭訓舍綾人**

久野氏にして通稱を興兵衛といへり本所三ッ目に住す文化十年三月二十三日歿す辭世の歌に「とり落すうつはの怪我も即菩提われからいづる南無阿彌陀佛」本所番場東江寺（多田樂師）に葬る（古今狂歌人物誌）

デイキョク　貞極　武州善應寺の住僧なり一蓮社立譽と號す姓は大西氏、京都の人、延寶五年生る幾はくもなくして母を喪ひ聚沙の年頽りに先妣を憂ひ遂に出塵の志を發す然れども父の之を許さざるを以て徒らに歲月を經元祿十六年に至り斷然志を決して厭求上人に岡崎に謁し剃度納戒す時に年二十七なり此に宗義を練習する四年尋で關東に遊學し傳通院に錫し業を了因に受くるや且夕念佛敢て懈怠せず無量山但譽上人に從ひて宗戒兩派を受け勤學三年厭老を歸省し左右に給侍す時に疑問を致せば厭老默して答へず極自ら學の未だ至らざるを知り去りて再び東遊し一室に屏居し榜嚴の經を讀むこと三年刻苦精錬一旦豁然者發する所あり爾後厭老に參見す厭老徒譽として曰く子の學既に成ると一日懸心僧都の傳を閱し母氏敎誨の遺事に至て深く感激するあり菩提心彌々堅固なり正德三年遂に江戸隅川に隱棲し奉戒嚴整過午食せず組帛被らず日課八萬返、念死念佛精進孜々或は三河島道津庵に居し又根岸の四休庵に寓す縮素仰慕化を受くる者亡慮七八萬人應々宗要徹、選擇名義集、傳通記等を講じ以て祖恩に報じ四部を利導す凡そ撰述集を講ずる一百餘回嘗て大藏經を閱し榜嚴維摩法華涅槃等の諸大乘經往々諸記し了義を吐露す之に加ふるに廢寺を營興し貧人病者を賑救し大に施門を開き福田鋼培す寶曆六年五月二十日豫め死期を知り大に道俗を集め敎戒懇懇十念を授與し以て永訣を爲す六月二日浣浴淨髮し僧伽梨を著け端身合掌安祥にして逝く年八十、法臘五十三、門下塔を葛四の善應寺に樹つ著はす所法道芝等八十餘部百五十卷あり（續東國高僧傳）

デイクワン　定環「サウカテイクワン」

デイケイ　貞慶　左少弁藤原貞憲の子なり一夕母高僧自から貞慶と稱して其懷に入ると夢み技より孕むことあり久壽二年夏五月生る孩孺に在て眞乘を驚ふ年甫て八歲興福寺の權僧正覺憲を師とし十一に及て剃髮受戒す字を貞慶といふ母これを聞て曰く實に如來の再來なりと貞慶資氣深重にして弊止嚴重なり習誦晝々として時の欽慕する所となる藤氷の始め維摩會の主座に陞る文治二年再び公撰にあたる興福寺にあること二十餘年居貧屢々空し一日諸に應じて最勝會の宮講に赴く衆皆先に到り官僚緇伍皆な低頭して直ちに登る衣彩破弊し乘僕皆人に借る年二十九名聲愈々著はる後鳥羽上皇遊獵を好み多く襲鹿を射る暮年に過ぎ悔い梵宇を落慶して殺生の罪を謝す貞慶の德望を聞て詔して導師となす貞慶一節一笠を携て飄然として來り笠と笠とを持て階側に立つ意氣自若たり遂に座に上り說法し鹿苑の事を畧ぐ辯辭流暢にして因響壯麗なり君臣感歎して其朴素を貴ぶ貞慶春日の洞に詣すれば群鹿屈躍す元承二年海住山寺に移る一住六年學徒跡を遂ふて業を承るもの多し貞慶法相を以て宗を立つと雖も規律を務となし平居肅然として桑蔗に違ふことなし警誡十一條を作て儀觀鈔と號す其辭義深長にして固より後進を進奬するに足る嘗て衆に謂て曰く色相は水上の月の如し有に似て有にあらず富貴は夢中の樂の如し一覺すれば永く空し色即是空なるが故に生死を捨ずして菩提に至る空即是色なるが故に涅槃に住ぜずして衆生を度す學者須らく了知すべしと建暦二年海住山に在り疾に罹り明年二月二日坐化す年五十九四法臘十九朝廷その德を崇めて解脫上人と諡す兄弟四人僧となり延暦園城等に棲藉す貞雅、貞覺、貞玄、貞圓といふ家法を研究しておの〳〵已講と稱すまた神足數輩あり明光院の覺遍東北院の圓玄新院の良算角院の璋圓等皆當時の俊人なり（本朝高僧傳）

デイツソウ　貞月齋藤一叟

デイツツイ　貞月齋靈一提　貞月齋第二世の挿花師なり江戸の人靈一由の弟一叟の門に入り揚月齋と號す後一馬の直門となり貞月齋の號を嗣ぐ文久五年歿す子一樂三世を繼ぐ

デイケン　貞兼　京都の俳人なり氏は藤谷通稱甚吉名は貞好仰雲軒と號す又自ら桂翁と云ふ松永貞德の門人なり或は云ふ初め鶴延弟令德の門人なり貞の字を犯すことを許さるを以て令德誘ふて以て貞德に見え介して直弟となす元祿十四年一月二十七日歿す年八十七、辭世「月は彌陀ほさつや二十御來迎」（俳家大系圖、俳諧年表）

デイゴ　貞悟「アヲキシュンシヨウ」

デイサ　貞佐　江戸の俳人なり氏は皐月風肝坊艾人軒と號す一世平砂の門人なり貞佐座を興す初め千鱗又東窗と號す（俳諧人物便覽）

デイサ　貞佐「クハヲカテイサ」

デイサ　貞佐「テイリウ」三世

デイサ　貞佐　京都の俳人なり氏は中川後水原に改む一十軒短如翁と號す乾貞恕の門人なり初め高田寺佐の門人曾つて垂加流を學て神書に委し家書御象集、四鉢辻等あり延享四年十二月六日歿す年六十八河東法林寺に葬むる辭世「跡はみずとしの淵を行く千鳥哀」（俳諧家譜、俳家大系圖、俳諧人物便覽）

デイサ　貞佐　狂歌師なり桃綠齋と號す由綠齋貞馴の門人にして晩に生々庵と號す備中笠岡の人丸山久右衛門の男通稱河吉と云ふ漢學は伊藤東涯に學ぶ儒式厩御庖丁三絃尺八香茶園碁ト窟等の諸道に通ず性豪落不羈年三十にして芥川家に養はる安永八年正月二十一日歿す年八十一

デイサイ　艇齋「イシカハテイサイ」

デイサイ　貞齋　タナベテイサイ」

デイサイ　貞齋「マウリテイサイ」

デイサイ　訂齋「クメテイサイ」

デイサイ　鼎齋「ウヅカタテイサイ」

デイサイ　蹄齋「アリサカホクバ」

デイザン　貞山　京都の俳人なり氏は相淵名字詳ならず蘆丸舍と號す松永尺山の門人なり（或は云安原貞室の門人）又湖月亭と號す後江戸に移り桶町に住す家書ひらつゝみ、手灯燈、江戸名所集、其傘、親鸞、閻磯抄等あり寛保元年歿す年七十冥餘貞山が師松永尺山と云ふ人古書に見えず或書に曰ふ天和貞享頃松永來春と云ふ人あり此人歟（俳家大諧圖、俳諧人物便覽）

デイザン　貞山「ダテマサムネ」

デイシ　貞至　京都の俳人なり氏は中島朔兒庵と號す山口羅人の門人なり家書机勝手あり曾て三井氏巢清貞至と友とし善し清歿して後世塵を祇ひ薤染して山に入る（俳諧家譜、俳諧人物便覽）

デイシ　定之　京都の俳人也氏は神戸東林軒と號す山本四武の門人なり初は鶴冠井令德の門人家書一挺つゝみ一卷あり元祿十三年ヵ月六日歿す辭世「一朝がほは久しきものよ五十年」（俳諧大系圖、俳諧人物便覽）

デイシ　禎子　三條帝の女にして後朱雀帝の后なり長和二年七月上東門第に生る護身刀を賜ふ皇女に刀を賜ふ是を始と爲す三條帝臨幸し親ら后を抱き遂に宮中に育す十年內親王と爲る四年三宮に準じ年官年爵を給し本封の外千戶を加ふ治安三年上東門第に着裳太皇大后爲に自ら之を施す大后紀貫之の書古今集、兼明親王の書後撰集、小野道風の書萬葉集を以て之に賜ふ皆圓融帝傳ふる所の一條帝の物なり敕して一品に叙し乳母に位を賜ふ攝政道長最も后を重んず病革るに臨み遺言して師第を戒めて曰く我一品の宮を思ひて忘れず汝等我意を體し敬事して忘るなかれと萬壽四年東宮に入り御息所と爲る後三條帝、其子內親王、朝子內親王を生む長暦元年二月立て中宮と爲る三月女御藤原嬉子の中宮と爲るに及び改めて皇后と曰ひ陽明院門に居り賜宮並立す后平なる能ほず後宮に入るを欲せず既にして中宮崩す後朱雀帝女御生子を納る故に后外に居る四年長久元年會々生子宮を出づ是に於て后後三條帝と宮に入る帝崩ずる後薙髮して尼と爲る永承六年尊びて皇太后と云ふ治暦四年大皇太后と曰ふ延久元年號を上りて陽明門院と云ふ年官年爵封戶故の如し嘉保元年正月崩ず年八十二（大日本史）

デイシウ　貞秀　刀工なりヂヤウシウを看よ

デイシウ　庭秋　何人なるを知らず下野の產、雪舟の畫法を祇ひて人物及松竹を畫けり（皇朝名畫拾彙）

デイシウ

デイシキ

デイシツ　泥舟「タカハシデイシウ」

デイシツ　定識「ライゲン」

デイシツ　堤室「チダン」

デイシツ　貞室「ヤスハラテイシツ」

デイシ　シネイ　鵜士寧「ウドノシネイ」

デイジノキン　亭子院「ウダテンワウ」

デイシン　貞信　カツダチクヨウ」

デイシンコウ　貞舜　高僧なり夙に叡山に登り貞信公「フヂハラタダヒラ」清に親附して習學すること數年四塔の寶園院に居り英遠の名落々として時に聞ゆ應永年中近江の柏原に成菩提を開て圓頓の法を說く俗僧會集して頓に寶所となす四敎の褒微を默じ恢復の志あり因て七帖見聞を草す貞德法華經疏等を著はす（俳家大系圖）

デイシヨウ　聽松「マツダテイシヨウ」

デイシヨウ　程乘「ゴトウテイジヨウ」

デイシヨウ　庭鐘「ツガテイシヨウ」

デイシヨウ　貞松齋一馬

デイシヨウサイ　貞松齋一馬　俗姓三善氏、密灌を聖寶法師に稟く道聲高く峙て時に重ぜらる官僧都に至る延長の末年適〻聖上不豫なり詔して如護せしむ其の夜貞崇禁中に坐し人と共に語るを〻如し上疑ひ人をして之を伺はしむるに唯〻獨り處る上召して之を詢ふ崇奏して曰く先に稻荷明神來りて言ふ陛下久しからずして賓客を捐つと何くもなくして上崩ず崇貞天慶七年二月六日寂す年七十九崇靈を善くして佛靈を作る（元亨釋書、東國高僧傳、皇朝名畫拾彙）

デイセイ　貞清　京都の俳人なり氏は藤本通稱詳ならず乾貞恕の門人なり延寶の新玉海集、正德の歷代滑稽傳等に出でたり幼名を久松と云ふ（俳家大系圖、俳林小傳）

デイセイ　定清　京都の俳人なり氏は服部通稱喜三郎雛數堂又鵬鶚子と號す野々口立圃の門人なり初は貞德翁の批例をうけ後ち立圃の門弟となる家書櫻千句、根なし草、尾蛔集あり歿年詳ならず（俳家大系圖）

デイセキ　鼎石「ヤマダテイセキ」

デイセキ　鼎石　儒者なり名は瑛字は子玻鼎石は其の號美濃の人なり江村北海に學び大垣藩に仕ふ

デイセキジャウ　程赤城　明末の人なり我が國長崎に往來すること二十餘年極老に至りて已まず人其の故を問ふ程曰く家人も亦た吾の老いて海を渉るの危を慮りて屢〻之を諫む然れども貴邦の酒甚だ我が口に適す其の鹽豉醃菜の美自から忘るゝ能はず故に聽かずして來ると書簡を能くし能く我が國語に通ず其の作る所和歌多し傳へ云ふ「習はずに書くや此假名文字まじり今は唐でも書くや此假名」此の人の作なり

デイセン　貞宣　江戸の俳人なり氏は神田通稱左兵衛初名貞賴といふ花樂軒或紅葉軒と號す安原貞室の門人なり又自ら蝶々子と號す家書思出草、物忘草、たちぎ、松聿草、いたしき、當世男等あり歿年不詳諸書に中島貞宣を同人とす名の同じきに依り混合せし誤なり（俳家大系圖）

デイセン　貞宣　京都の俳人なり氏は中島通稱內藏之丞初名貞義又貞晨といふ松永貞德の門人なり初め京に住し後ち江戸鍛冶橋に住す家書江戸紫、園之梅等あり歿年詳ならず（俳家大系圖、俳諧人物便覽）

デイセン　貞扇　大阪の俳人なり氏は北川東園舍と號す初め椎木才慶の門人、後居を京都に移して井上雲扇に屬す寛延三年五月十六日歿す年六十四（俳諧年表、俳家大系圖）

デイダウ　貞堂　俳人なり貞山の門人（俳林小傳）

テイタウエン 棣棠園「キシモトユヅル」
テイチュウ 定中「スズキテイチュウ」
テイチュウ 廷冲「ナカヤマテイチュウ」
テイテイ 堤亭「シモムラテイテイ」
テイテウ 貞德「マツナガテイトク」
テイトク 廷調「ウメツジシュンセウ」
テイハウ 棣芳「クサバハイセン」
テイハウ 貞包「ヨイチラウ」
テイハクシ 庭柏子「サカキハウイヅ」
テイビ 廷美「ツカダキヨクレイ」
テイフ 貞富 大阪の俳人なり氏は榎並貞因の從弟なり花實庵と號す安原貞室の門人なり家名を鯛屋と稱し菓子を造る為業とす南御堂前に住す曾て生白庵行風と友とし狂歌を善くす正德二年五月六日歿す年七十有餘(俳家大系圖、俳諧年表)

テイブ 定武 京都の俳人なり氏は服部定清の男なり通稱詳ならず元祿四年當世百人一句の一人なり或は云田中常矩の門人(俳家大系圖、俳諧家譜)

テイブンダウ 鼎文堂「ギヨクヱン」
テイホ 亭甫 其姓氏を逸す兩目夙とに盲す初め宍粟領主池田侯に仕へ後ち土浦の城主土屋侯に仕ふ學識あり博く群籍に通ず尤も詩文を善くす當時の碩儒皆其作を稱す嘗て一儒あり亭甫に問て曰く吾が友將に北越に赴かんとす然れども時氣寒に向ふ且つ其人平素多病なり今寒國に赴く或は途にして病を發せんことを恐るゝ然れども赴かざれば公事あ缺く此の二つの者如何して可ならん吾將に諸れを卜に問はんとすと亭甫曰く僕は一盲人にして高明の問に應ず下遜に似たりと雖も竊かに意ふ先生の冒過てり凡そ事人意の決すべからざるに方つて諸れを神明に質して可なり若し夫れ然らざれば何ぞ神明を瀆さん今先生其人の多病行くに利ならざるを知らば之を止むるに如かず若し公事の止むべからざるを知らば之を遣りて可なり行止の決一言にして定む可し復何をか疑て卜筮に問はんや其人矍然愧色ありと云ふ(醫人傳)

テイボク 貞木 京都の俳人なり氏は山口花香堂と號す山本四武の門人なり家書手松明一卷あり元祿九年十月二月歿す年七十一(俳家大系圖)

テイボク 丁牧 遠州北野の俳人なり氏は近松名は茂矩兵家なり鍔兵堂と號す東花坊支考の門人なり尾州に住居す(俳諧人物便覽)

テイミン 貞眠「キカイオン」
テイモン 定門 江戸の俳人なり氏は平澤如名源六郎又三郎右衛門、丁佐の男なり薙髮して了榮と號す目利第二世とす野々口立圃の門人なり延寶六年十月八日歿す年七十法名即心庵直哉了榮居士(俳家大系圖、俳諧年表)

テイライ 貞賴「テイセン」
テイリウ 貞隆 俳人なり介我の從弟にして貞室の門人品川の人武州川越に住す(俳林小傳)

テイリウ 貞柳 大阪の俳人なり氏は榎並(又日く永田氏)通稱は清八或は忠兵衛と云ふ油烟齋と號し初め貞因と曰ひ剃髮して貞柳と改號す又鳩杖子、助榮亭、長生亭、珍菓亭、清雲洞等の齋號あり大阪御堂前に住し菓子を製する為業とし屬屋山城掾と云ふ父は大和掾と稱し貞因と號す俳諧を善くす貞因の豐藏坊信海を師として狂歌と書法を善くし信乘と號す又二世信海と曰ふ曾て松井和泉なる者禁裏へ南部の墨を奉つるを見て貞柳詠じて曰く「月ならで雲の上までするゆゑんなるらん」と此狂歌雲上の醫に逃し油煙齋(一に此狂歌雲上の醫に逃し油煙齋(一に由緣齋に作る)の號を賜はる狂歌の書に家づと據士產置土產等あり享保二十年八月十五日歿す年八十一大阪下寺町光傳寺に葬る辭世の句「百居ても同じ浮世に同じ花月はまん丸雪は白妙」狂歌の道貞德、未得、卜養、信海法盛に唱ふと雖も廣く世に行はるゝに至らず此人に至て大成す弟紀海音戲曲を以て名あり(俳諧大系圖、古今狂歌人物誌)

テイリウ 貞柳(三世) 二世貞柳の門人初め貞佐と稱す丸山氏後芥川氏を嗣ぐ安藝廣島の人、師跡を嗣ぎて三世貞柳と稱す安永八年歿す年八十一(書畫便覽)

テイリク 貞陸 江戸の俳人なり姓氏詳ならず安原貞室の門人なり佐保介我の從弟品川に住す後川越に移る家書鵜の尾あり歿年詳ならず百餘歲の壽を保ちしと云ふ(綴錦、俳諧人物便覽)

テイリン 廷倫 書家なり渡邊氏通稱を又兵衛と云ふ大阪に住す

テイレウキンノコナイシンワウ ミヤ 貞了院宮「サダ

テイヰ 貞爲 京都の俳人なり氏は梅原和海哥と號す宮川松堅の門人なり柿園の三世とす享保十三年七月十四日歿す年六十(俳家大系圖、俳諧家譜)

テイエン 檉園「フチノシンサイ」
テイエン 檉園「ヒラノキツヨウ」
テイヨク 貞屋 俳人なり貞山の門人(俳林小傳)

テウ イウキ 晁有輝 江戸の畫人なり浅岡氏名は豐興字は詩叔文化八年七月四日歿す麴町心法寺に葬る(名家墓所一覽)

テウカク キン 朝覺院「カチヤノツボネ」
テウカンサイ 釣閑齋「ミヨシマサヤス」
テウクワンサイ 鳥觀齋「キカイオン」
テウケイ 兆溪 畫僧なり初め富豪を以て國里に雄たり一日悟ち所あり髮を剃りて佛に歸し弘福寺戒牛の弟子と爲る平生經を念ずるとを喜ばず獨り畫を喜む嘗て兆殿司の畫を觀て之を愛し長崎に遊ぶ鎭臺某と舊あり某問ふ和尚欲する所ありや否や溪曰く稍兆殿司描く所の五百羅漢を模せんと欲すれども佳縑を得るに由なし鎭臺曰く易々たるのみと乃ち外船に命じ最上縑五十幅を購ひて之に付す溪大に喜び直に京都に抵り謁を東福寺に進ず寺曾曰く上人は五百羅漢を模せんと欲するに非ずや兆殿司識記に書して云へることあり某年當さに僧に似て僧ならず俗に似て俗ならざる一道人來りて吾畫く所の五百羅漢を觀んと請ふものあるべしと今月今日即ち是なりと溪大に驚き乃ち帶び還りて寓に至る每幅十尊盡く萬法を模す筆力生動奮異あるが如し畫成る更に餘力を奮ひて釋迦普賢文殊の三像を作る衆法學び備はる佛を好まざるものと雖も一覽して膜拜し

其の工を發す因て木庵禪師に贈賛を請ひ攜へて江戸に歸る豪富美濃了元小關道永之を得て弘福寺に寄せ其の莊嚴を貧く後ち寺僧之を鬻ぐ某侯其の名品を聽き購ふに數百金を以てして之を護持院に寄す幾ばくもなくして院廢す其の三像は現に養玉院に存す而して五百羅漢は其の在る所を知らず溪羅漢を畫きてより以來畫法大に進み請ふ者門に盈つ又た彌陀、觀音、勢至の三像を作り之を漢土に傳ふ福州に王永明と云ふものあり素と畫を善くす一見嚴服して曰く東方に王摩詰ありと石印一顆を贈る其の文に曰く筆轉聖胎と(讀海)

テウゲツ 釣月「バセヲ」
テウゲツシャ セイキ 釣月舍清機「イハキセイキ」
テウゲン 釣玄「シミヅダウカン」
テウコ 潮湖「ハナブサイツテフ」
テウサイ 超西 能州梅香院の住持なり笠原と號す姓は大島、壯歲に及び俗に居るの意無し遂に能州請獄に登り峨山和尙を禮して師と爲す悟道の後ち嚴壑に入り院を創し名けて梅香と曰ふ後ち寂を遇に示す(洞上聯燈錄)

テウサウ 潮憲「ハナブサイツシウ」
テウザン 朝山「ハウトン」
テウシ 朝之「オホタテウシ」
テウジラウ 朝次郎(一に長次郎に作る)樂燒の本家樂吉左衛門の祖なり父は朝鮮人にして俗に飴屋と稱す足利義植の時日本に來り近江の佐々木氏の臣某の女を娶り京に住す始めて樂燒を作る飴屋の殁するの後其の妻尼となり燒く所の陶器を尼燒と稱す時に未だ樂燒の稱なし之を京燒又は今燒と稱す朝次郎に至り千利休と交はり善し利休其の姓を千と定むるに及んで舊姓田中を朝次郎に讓る朝次郎豐臣秀吉に謁して扶持を賜ふ

テウスキ 鳥醉「シラキテウスキ」
テウスキ 鳥醉「クマザハテウスキ」
テウスキ 潮水 俳人なり五木庵と號す大阪北濱に住す明治十九年八月二日歿す年七十三(三森松江氏寄)

テウセイ 朝晴 台宗の高僧にして大和添下郡の人なり三論を輝微都に受け才慧衆のために稱せらる長和三年興福寺の南圓堂に於て維摩經を講ず義辯人を驚かす相尋て二會を歷て寛仁四年東大寺に住す明年四月に卒す(本朝高僧傳)

テウセイビ 晁世美「アサエダクガ」
テウソウ 釣雪「ヤヤクセツ」
テウタウサイ 釣叟「ハルキナンコ」
テウセン 趙陶齋 書家なり名は養字は仲願、陶齋は其の號、又息心居士、息心齋、栒杞園或は清暉閣等の號あり長崎の人、清人趙氏の胤なり幼にして父母を喪ひ落魄す化す乃ち之に投じて弟子と爲り釋服を服すること二十年後又初服に還る嘗て深見玄岱氏とす平生遊歷を事とし足迹殆と天下に遍れし書法を善くす初め江戸に住し中ろ大阪に徙り最後に界府に寓す居る所樂を受くるもの多し森田士德鑒識あり陶齋の書を稱して曰く趙承旨、祝允明と鑑を並べて軛すべし文徵明、董其昌の如きは其の後に瞠若たりと界府に居る十八年天明六年四月二十日歿す年七十四、陶齋音吐沈靜に容貌溫雅然れども氣宇豪兀、酒を好みて不羈、敢て人に屈下せず武人の氣習多し又文武の兼故に諳練すと云ふ(續近世叢語、事實文編)

テウデンス 兆殿司「ミンテウ」
テウ ナンザン 晁南山 河内俠山侯大夫なり兼て漢學を善くす本と朝比奈氏、名は泰亮、字は君榮、南山は其の號、通稱賴母、致仕の後拙叢と稱す物徂徠に學びて南山集を著はす(續諸家人物誌、鑒定便覽)

テウネン 寓然 高僧なり三論を學び又密乘を元果に受く永觀元年入宋して勝地を巡禮し明師に歷覲す汴都の西華門外に在る聖禪院に至り優塡王の造りし釋尊像の第二の模像を拜し乃ち佛工張榮に命じて之を模刻せしむ太宗皇帝日本の世系國祚を訪問す寓然奏對詳備帝稱嘆して紫方袍を賜ふ辭して受けず五臺に上り像を得て歸る長和五年寂す其優塡の模像今嵯峨の清涼寺に在り國人贈禮日に絕えずと云ふ(元亨釋書、東國高僧傳)

テウノ 晁有輝 江戸の畫人なり浅岡氏名は豐興字は詩叔文化八年七月四日歿す麴町心法寺に葬る(名家墓所一覽)

テウカク キン 朝覺院「カチヤノツボネ」
テウカンサイ 釣閑齋「ミヨシマサヤス」
テウクワンサイ 鳥觀齋「キカイオン」
テウケイ 兆溪 畫僧なり初め富豪を以て國里に雄たり一日悟ち所あり髮を剃りて佛に歸し弘福寺戒牛の弟子と爲る平生經を念ずるとを喜ばず獨り畫を喜む嘗て兆殿司の畫を觀て之を愛し長崎に遊ぶ鎭臺某と舊あり某問ふ和尚欲する所ありや否や溪曰く稍兆殿司描く所の五百羅漢を模せんと欲すれども佳縑を得るに由なし鎭臺曰く易々たるのみと乃ち外船に命じ最上縑五十幅を購ひて之に付す溪大に喜び直に京都に抵り謁を東福寺に進ず寺曾曰く上人は五百羅漢を模せんと欲するに非ずや兆殿司識記に書して云へることあり某年當さに僧に似て僧ならず俗に似て俗ならざる一道人來りて吾畫く所の五百羅漢を觀んと請ふものあるべしと今月今日即ち是なりと溪大に驚き乃ち帶び還りて寓に至る每幅十尊盡く萬法を模す筆力生動奮異あるが如し畫成る更に餘力を奮ひて釋迦普賢文殊の三像を作る衆法學び備はる佛を好まざるものと雖も一覽して膜拜し

テウノ 條野採菊 新聞記者なり通稱は儀平、採菊散人と號す、天保三年九月一日江戸に生れ幼少より商業に從事せしが性來文雅に志篤く壯にして文事に身を委れ戲號を賛々亭、山々亭有人とし為る雜書小說數篇を著はす明治維新後福池源一郎と俱に東京日々新聞を興し後ち九年やまと新聞を創設し自らは社長となり傍ら紙上に小說の筆を執りたり又公職としては嘗て東京府會議員及び神田區會議長となりし事あり晩年專ら劇評に執筆し居りたるが三十四年七月頃より宿痾の心臟次第に重患となり遂に翌年一月廿四日府下北豐島郡日暮里村の自宅に於て歿したり年七十二辭世あり「いざ行く老曾の森の露の道むかしの人の跡を踏みつゝ」谷中共同墓地に葬る法名を清香院晋譽去來採菊居士と云ふ

テウヒン 釣濱「フナブミツナリ」
テウフウ 朝風「ツツミアサカゼ」
テウ ブンエン 晁文淵 尾州藩の右筆なり江戸に祇役し物徂徠の門に學び漢籍を善くす本姓は朝比奈、字は滴德、玄洲又玉靈と號し甚右衛門と稱す文淵は其名、享保十九年正月十二日歿す名古屋乾德寺に葬る(諸家人物誌、尾張名家誌)

テウブンサイ 鳥文齋「ホソダエイシ」
テウミン 兆民「ナカエトクスケ」
テウヤウ 朝陽「ナガトミテウヤウ」
テウヤウ 朝陽「キリフテウヤウ」
テウヤウジン 朝陽山人「ヤブコザン」
テウワ 調和 江戸の俳人なり氏は岸本名は友正通稱猪右衛門靈瓢軒又工齋と號す萩野安靜の門人なり寛永中江戸吳服町に住す奥州の人なり(或は曰く石梅盛の人)始め京都に出て安靜の門人となる側には高野梅盛の教を受く家書是まで草、富士石、題林一句等あり正德五年十月十七日歿す年八十二築地本願寺中に葬る法名調和院道鑑居士(俳諧年表、俳林小傳、俳家奇人談、俳家大系圖、俳諧人物便覽)

テウワ 調和 江戸の俳人なり氏は熊尾敲柳堂と號す初め和推といふ初世調和の門人なり享保十八年春師の表德を纘き調和と改む寛保三年歿す行年詳なら

ず（俳諧年表、俳家大系圖、島山彦）

テウヨウ　釣翁「サカマキリウテウ」

テウヨウ　朝翁「ハナブサイツシウ」

テガラノヲカモチ　手柄岡持　有名の狂歌師なり享保二十年三月二十一日に生る名は常富通稱を平澤平格と云ふ佐竹侯の留守居役なり狂歌に初名を淺黄裏成と云ひ後に手柄岡持と改む俳諧に月成といひ戯作に喜三二といひ狂詩に韓長齡と稱す又明誠堂、鳥山人、道蛇樓、鹿阿記、虎耳噸、天壽亭等の號あり狂文狂歌は一家の體をなして頗る人の意表に出づ安永天明の頃戯作の雙紙を著はせし中に「文武二道萬石簞」といへるは此種の雙紙始りし以來未曾有の喝采を得たり寛政年間藩主の命ありて戯作を廢し喜三二淺黄裏成の號を門人芍藥亭長根に讓り老後仕を辭し剃髮して平荷翁と稱す文化十年五月二十日年七十九にして歿す深川淨心寺塔中一乘院に葬る（戯曲小說通誌、古今狂歌人物誌）

テキサイ　惕齋「ナカムラテキサイ」

テキサイ　惕齋「マキタテキサイ」

テキサイ　廸齋「カハダテキサイ」

テキサイ　翟巢「サイトウユキナリ」

テキスキ　謫水「ユリテキスキ」

テキソウ　笛叟「ホリウチセンクワク」

テキホウ　笛浦「ノダテキホ」

デグチノブツネ　荻翁「ハヤシヨシモト」　國學者なり帶刀と稱す延佳の子能く家學を述ぶ著す歳首書延喜太神宮式、齋宮部類抄、神事隨筆、二所太神宮神名略記、辨卜鈔あり正德四年八月二十一日卒す年八十一或は曰く五十八（續諸家人物誌）

デグチノブヨシ　出口延佳　國學者なり姓は度會氏、諱古と號す伊勢外宮の祠官なり正四位下に叙し信濃守に任ず神道學に精し慶長以來內外の祠官遂作ある人少し延佳出るに至て我邦の故典を講明すること大に開けたりと云ふ元祿三年二月十六日卒す年七十六著す所鑑頭古事記、鑑頭舊事記、鑑頭陽復紀、神異記、神代圖、中臣祓瑞抄、神宮秘傳問答、同纂祕傳問答、中臣祓道考、神名帳考證、書簡鈔、三輪考、太神宮殿考證、太神宮遷幸要畧、太神宮墜詣記首書、太神宮或問、太神宮司神事供奉記、隱顯集、大成經破文、二所太神宮次第記、類聚神祇本源鈔、伊佐登美神考證等あり（續諸家人物誌、名人忌辰錄）

テコナ　手兒奈　舒明天皇時代の人（或はいふ允恭天皇時代の人）下總の國眞間に生る故に眞間の手古奈といへり容貌ことに美なるを以て婚姻求むる者多し手兒奈痛く之を厭ひて遂に自から眞間の入江に沈み死す後に山邊の赤人など此事を歌詠したるが萬葉集に載せたり（手兒奈略緣起）

テシカハラキンヤ　勅使河原欽哉　陸軍步兵中尉なり舊飯田藩士なり商業學校卒業の後一年志願兵となり操備步兵少尉に任ず明治廿七年一大工場を新設し小間物雜貨の商業を營めり明治廿七八年日露戰役始まりて召集の命を受け直に近衛後備步兵第一聯隊に入隊し運送船常陸丸に搭し出征航海中廿七年十一月二十日清國盛京省三龍峪附近に於て戰死す戰功に依り勳六等功五級に叙せらる

テシマ　ケンキチ　豐島謙吉　陸軍步兵少尉なり福島縣出身にして明治廿七八年日露戰役に於て第一師團步兵第一聯隊附として從軍中廿七年十一月二十日旅順要塞二〇三高地に於て戰死す戰功に依り勳七等功五級に叙せらる

テシマ　トアン　手島堵庵　心學者なり京都富小路四條街の商人なり近江屋源右衛門と稱す家を子に傳へて老し更に嘉左衛門と稱し號して堵庵と曰ふ人と爲り敦厚淳謹少にして石田勘平に學ぶ勘平の學は王陽明を本とし勞ら佛老の說を雜へて一家を創立し專ら圓里小人の爲めにす勘平歿して弟子全門業を繼ぐ是時に方りて門徒未だ繁からず而して堵庵は則ち家貧富饒學者行ふ所の東脩は一切之を却けて受けず故に貧窶鄙吝の徒と雖も亦た顧る從遊を樂しむ門徒請ふことあれば輙ち行きて講說し遂に盛んに海內に傳播し車夫馬丁に至るまで翕然として手島先生と稱し甚しきは推尊して以て聖人と爲すあるに至る靈し其の敎なる物を伸べずして己を屈し分を守りて怨を絕ち自ら奉ずること極薄にして施與に吝ならず常に人を助して自ら本心を觀眞性を見せしむ物を敲きて問ひて曰く是れ何ぞや學を拍ちて問ひて曰く聲何れより出づと己れ自らをして研究せしめ其の合ふことある者には則ち欣然として之を許可す故に其の徒或は目に一丁字を知らずして善く講說し其の爲めに信奉せらるゝ者あり嘗て歳因に值りて生國龍峯の提宗寺に投じ十五歳薙髮し十九歳にして出で、弟子丸家を闢ぐ藥丸流の劍を小倉四郎太に學びて出で、作州の龍雲寺に寓し一時母の病に遂ひて歸省せしが其快癒を見るや轉じて近畿に入り大阪にては泛月禮師の講學に侍し京都にては妙心寺に留り幾くもなく江戸に出で、東禪寺に寓し又更に大阪に回りて法雲寺鄙道和尙に就き法要を究めて怠りなかりき偶ま承應三年隱元渡來して長崎に在りしかば鐵牛乃ち翌明暦元年を以て長崎に下り崇福寺に於て隱元に謁せり既にして寬文元年隱元宇治に黃檗山萬福寺を創めしを以て鐵牛其會下にありて了翁と共に諸事を督せり萬治二年鐵牛隱老稔葉正則の請によりて江戸に出で、麟祥院に住し其歸依を得て名聲漸く高く諸侯伯を提撕すること頻りなり偶ま延寶六年隱元遷化して椿湖の開拓すべきを視之を稻葉正則に說りて其工事を起さしめ鐵牛また上下を斡旋し元祿二年を以て竣工せり其間實に二十二年なりきこれより先き鐵牛は木庵卽非の諸老に參して道を究むる所深く寬文六年終に正印を木庵に得後八年にして相州小田原紹泰寺の開山となり既にして江戸本所弘福寺の開山となり延寶三年師木庵の命によりて江戸白金瑞聖寺の二世となり住山十三年にして大に同寺を經營せり此間鐵牛は弟子泰嶺をして弘福寺を監せしめ自ら往復して同寺を經營し元祿三年親慶開堂せりかく鐵牛は元祿十三年七十七歳を以て寂しぬ鐵牛の創建せしもの紹泰弘福の外駿河の瑞林寺奥州の大年寺にして當時關東の四大刹と稱せられ又關西には淨住長松宗泉以下の數寺及び關東には高德滿願以下の數寺を創したりといふ（年譜語錄）

テツゲン　鐵眼　名は道光、族は佐伯、肥後の人なり初め一向敎を受けて妻ゑ娶るも然れども其の宗法たる不學非德の人と雖も寺例に因て上位に居る者あるを嫌ひ去りて黃檗山に入り業を木庵禪師に受く妻氏追到すれども見るを許さず妻乃ち黃檗の門前に寓居し鐵眼の出るを窺ふ一日鐵眼他に往く妻遂に誘引して與に國に歸る鐵眼拒む能はずして偕に行く既に鄕に入るに迨び隙を窺て脫走し復た黃檗に至りて法を繼ぎ瑞龍寺を攝州雛波に建つ人寺を呼て鐵眼と曰ふ風に一切經を刻するの願あり緣を四方に募る會ゝ歳饑ゆ乃ち緣募金を携へ市門に立ちて飢色ある者を視れば悉く之に頒與す

米價騰貴し闔國の中能く自ら義に奮ひて困窮を賑する者は多く其の徒に出づ一商家の婢にして祖母の鄕里に在るあり極めて貧にして族人の家に寄食す人或は勸めて其の俸金を分ち以て祖母の養を資けしむ婢聽かずして曰く身族人の力に藉らずして能く自ら衣食す亦た已に多し況んや分つべきをやと既にして其の主母に從ひ堵庵の講說を聽きて始めて前矣を悔い數〻物を以て祖母に饋遺す其の敎化能く人性を移す皆な此の類なり歿するの日四方傳聞して會葬する者數千人、家〻り黑谷に至る二十餘町道路之が爲めに塡咽す堵庵天明六年二月九日歿す年六十九（堵庵傳）

テシマ　トウザイ　豐島洞齋　儒者なり名は毅字は靜修安三郎と稱す洞齋は其の號加賀の藩臣父平吉郎典力士たり洞齋甫て八歳藩校明倫堂に學ぶ後醫を京都の山階氏に學ぶ居ること一年醫風の頹敗を厭ひ儒を學はんと欲し乃ち去て江戸に赴き鹽溪書院に入り幾も無く幕儒杉原氏の塾頭と爲り安積良齋谷宕陰藤森天山大槻磐溪諸氏を訪へり安政五年舊藩主の命を以て國に歸り徒士に擢てられ俸四十苞を賜はる明倫堂の講師と爲り傍ら塾を開き徒に授く文久三年藩主將に京都に朝せんとす洞齋を以て先づ行て朝野の情狀を視せしむ時に藩相以下多く佐幕說を唱ふ而して洞齋獨り勤王說を執り終始梗概相容れず枘鑿相容れず幽閉せらるゝこと五年明治元年に及び宥さる二年藩を廢し縣を置く洞齋三等士士に進み權少屬と爲り文學敎師を兼ぬ是に於て再び家を興せり洞齋夙に皇室の式微を慨し歷書を藩主に上り勤王の大義政敎の改革を論ず痛憤激切至誠に發す藩主悟る所あり佐幕說を斥け藩相以下數人を誅黜し兵を出して官軍を助け一藩堵を安する者は洞齋の力多きに居れり幽閉中皇朝通覽五十卷を著す後天覽に供し金若干を賞賜せらる既にして時勢變遷藩校の敎專ら開知か務む而して道義を諡說し頹瀾を支柱する者は獨斯文學會あるのみ洞齋謂ふ縣廳の徵職以て國家に益するに足ず學會に入り專ら力を盡すに若かずと因て官を辭し家を挈て東京に移り學會の敎師と爲り暇勉年あり三十九年七月病て歿す年八十三（碑文）

テシマル　リュウスケ　弟子丸龍助　譜は方行鹿兒島藩士なり同藩士高城新助の次男にして後出でゝ弟子丸家を闢ぐ藥丸流の劍を小倉四郎太に學び又心を文學に潛め就中島津家の舊記に精し高崎五六三島彌兵衛等と友とし好し風に西郷吉之助の人と爲りを美望し其大阪に在るや聞き往て之に歸し一死以て國に盡さんとを誓ふ此時に當り幕吏暴威を逞ふす龍助之を見て憤慨に堪へず勤王の大義を唱へ尉幕の爲めに奔走す文久二年正月江戸にあり下門の變を目擊し大に感激し橋口傳藏等と江戸を遁れ月二十三日伏見寺田屋に同志相會して代酒井邸襲撃の事を謀る會〻奈良原幸九條邸及び所司代酒井邸襲撃の事を謀る會〻奈良原幸五郎等の鎭使來り暴擧を止む同志伏せず激論の末格鬪に及ぶ此時龍助は樓上に在りしが樓下の騷擾を聞きて階を下る大山格之助階側に在り刀を斬る龍助屈せず刀を揮ひ奮鬪其だ力之に赴かんとして階を下る意に起り衆寡敵せず終に亂刀の下に死む然れども事不意に起りて龍助の腰を斬る龍助非の諸老に參して道を究むる所深く寬文六年終に正印を木庵に得後八年す時に年二十五代見大黑寺に葬る法名精進院善覺就學居士と曰ふ明治二十四年十二月朝廷忠志を追賞し特に從四位を贈らる

テシンロギ　カツトフ　手代木勝任　舊會津藩士なり初め直右衛門と稱し同藩廣澤安任秋月胤永と會津の三傑と稱せられ公武の間に斡旋して功勞少からず維新後岡山縣學務課長賀陽郡長岡山區長四北條東南條郡長等に歷任し後非職となり老を岡山市に養ふ明治三十七年六月三日歿す年七十九

テツガイ　鐵崖「アマンテツガイ」　手塚十兵衛　延寶天和中の俠客なり鎭道牛兵衛紅葉安兵衛等と名を齊うす時に矢頭藤助松井新五兵衛等驚を樹て、大小神祇組と稱し市中を橫行して頗る人害を爲す十兵衛之と一擊を試み以て之れを除かんとし事成らずして反て傷を被る（本朝俠客傳）

テツガカ　ジフベエ　鐵屋

テツギウ　ミツモリ　手塚光盛　本曾義仲の臂なり太郎と稱す越前成合の戰に齋藤實盛と搏して其首を獲たり

テツギウ　鐵牛　畫家なり玉腕子の弟子なり相國寺の僧にして殊に闇を能す（鑒定便覽）

テツギウ　鐵牛　名を道機といひ自牧子と號す石州の人なり寬永五年二月十六日を以て生る十一歳に